

乙女ゲー世界は悪役令嬢の身内にも厳しい世界です

りーおー参式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元カノとの別れ話がこじれた末に刺されて命を落とした男が転生したのは、剣と魔法とロボットが存在するファンタジー世界だった。

そして、今世の自分は、断罪されるはずの悪役令嬢の兄だということに気付いた男は、その未来を避けつつ、自分と実家の保身を図ろうとしていた。

謎の女マリエの手により、王太子を含む攻略対象全員が籠絡され、妹の婚約もなくなってしまう。

さらに、次善の策として乙女ゲーの主人公オリヴィアを聖女に任命させて、後ろ盾となることで一定の影響力を確保しようとしたにもかかわらず、転生者であることが判明したマリエが聖女の座に着いたことが判明してしまう。

2度に渡って自身の計画をマリエの手によって阻まれた男は、この先どうするのか迷走し始めるが、そんな私情にかまうことなく、王国に再び公国の手が伸びようとしていた。

これは、中身は社畜リーマンなボンボンの、血と汗と涙と酒と苦勞の物語である・・・かもしれない。

目次

第1話	第2の人生はイージーモードだと思ったのに	1
第2話	突然始まったラブストーリーという名の茶番	9
第3話	メイドさんとの悪だくみ	21
番外編	金髪〇〇豚野郎、参上	27
第4話	処刑BGMが最初から聞こえてくる	31
第5話	社会人1日目の最後にある飲み会は当たり前外れが激しい	40
第6話	心の隙間にご用心	50
第7話	手遅れな人って案外幸せそう	63
第8話	ボンボンのおしごとく超パワハラ編	75
第9話	ドキドキ！新たな攻略対象は追加DLC!?	89
第10話	口説くときも別れるときも準備が大事	102
第11話	総集編にも味変は加えたい	109
第12話	屁理屈も立派な理屈	116
第13話	スキヤンダルは忘れた頃に発掘される	126
第14話	最低だけど最悪ではない結末	135
第15話	振り回す方と振り回される方、どっちも大変	143
第16話	チートがあっても浮かれるな	157
第17話	お忍び学園祭（前編）	170
第18話	お忍び学園祭（中編）	181
第19話	お忍び学園祭（後編その1）	190
第20話	お忍び学園祭（後編その2）	199
第21話	初陣	211
第22話	舌戦	220

第23話	実戦	231
第24話	命名	240
第25話	事実と真実は同じとは限らない	250
第26話	昨日の味方は明日の敵	260
第27話	あいつを兄とは呼びたくねえ!	269
第28話	私をオフリー領に連れてって	280
第29話	宿敵との遭遇く殴り合い、異世界	291
第30話	宿敵との遭遇くレスバトルは憎しみ深く	302
第31話	勘違い男と捻くれ女	310
第32話	カチコミの前にあれこれ	322
第33話	気持ちを落とすなら意識ごと落とせ	331
第34話	家臣は主に似なくてもいいのに	341
第35話	突入、オフリー屋敷!	351
第36話	M I S S I O N : オフリー屋敷を脱出せよ	363
第37話	合言葉は打算、チート、勝利!	377
第38話	激闘終わってまた一難	387
第39話	主人公様と敵対? 真つ平御免だ!	399
第40話	人の修羅場は蜜の味と思ったら	411
第41話	味方以外の異次元の発想は脅威そのもの	430
第43話	バルトファルト家の受難	439
第44話	R & Bと書いて、レッドグレイブ and 暴力と読む	454
第45話	潰える野望 (2回目)	467
第46話	暴力に溺れた者は権力に屈する	485
第47話	前世 (ジャパン) ではそれをKATSU AGEという	

第48話 フランプトン侯爵の憂鬱

第49話 強襲 聖女マリエ

第1話 第2の人生はイーजीモードだと思ったのに

僕には別の人生の記憶がある。

どういうことか？ 視覚や聴覚からわかるのは、自分は生後間もない赤子なのだとのことだ。

一方、その中身は成人して就職して、何年か働いた後に、自然の死期よりは相当早く死ぬまでの記憶を持った人間なのだ。

これは、生前にいくつか読む機会のあった転生モノな世界、というやつなのだろうか。

生前、よく耳にしていた憑依だか転生のどちらなのかはわからないけどね。

そこでまずは、よくある台詞を呟いてみることにした。
「ステータス、オープン」

何も開きません。ちなみに念じても開きません。

特殊なスキルは…何もありませんでした。何かすごい魔術も…使えませんでした。

しかし、周りから聞こえてくる情報からわかってきたのは、僕の今の世の生家がものすごく裕福な家庭、

しかもかなりの上級貴族らしいことだ。

ふと、死ぬ直前の時期に流行った言葉を思い出した。
親ガチャ。

なんて嫌な言葉だろうか…だが、その言葉に従うのであればSRレベルの引きをすることはできたのだろう。

もしくは転生ガチャ大勝利といったほうがいいのだろうか。

とはいえ、この世界のルールはまだわからない以上、子供の頃から下手な行動を取って予期せず排除されることは避けたほうがいい。

詳しくは知らないが、貴族社会なんて陰湿なルールが数多くあるという話を聞いたことがある。

禁忌を知らずのうちに犯して、追放や処刑の憂き目を見るリスクも

ある。

幸い、今世の親は、貴族の子息である自分に多大な教育投資をしてくれるようだ。

そうであるならば、親の引いてくれたレールに乗るほうがベターであろう。

欲張ってはいけない、上を見たらキリがない。

中の上、贅沢を言えば上の下くらいで満足しておいて、

当面の間は、まだよくわからないこの世界で下手に目立つことなく生きていくべきだろう。

親や雇われた家庭教師等の教育係の言うことを聞いて、僕は何の不自由もなく育つことができた、

魔術や剣術、語学に各種教養、身に付けろと言われたことを必死に身に付けた。

残念なことがあるとすれば、何か特別に際立って秀でた能力は何一つ見つけることができなかったし、

言われたことをすぐにできるようになることもなく、相応に努力が必要だったことだ。

言い換えれば、よくあるチートはやはり何一つなかった。

チート等というものがあるとすれば、今世の生まれ以外には思いつかない。

だがそれは僕が身に付けたものではない。あくまで実家由来のもので、僕が自由に使うことはできない。

救いがあるとすれば、僕が何かをしなくても、世界が減んだりしないということだ。

・・・滅びないよね？

親は、領地と王都を定期的に行き来しており、一年の半分以上顔を見ることはない。

しかし、僕は、見た目は子供、中身は成人男性なので、親の顔が見られなくても寂しくはない。

ん？今の僕って、行く先々で殺人事件に巻き込まれる自称探偵の死神小僧みたいじゃないか。

話を普段の生活に戻すと、基本的に親の領地で教育を受けていたが、たまに父に連れられて王都の貴族的な

会合やパーティーに連れていかれることもあった。

とはいえ、事前に言われた対応と指示された人へのあいさつを最低限だけすればよかった。

他の貴族の令息令嬢とお知り合いになったり、王族の目に留まるようなパフォーマンスはあまり要らないらしい。

父の階級である公爵というのは、王族の配偶者になる場合もあるらしいのだが、当代では近い年齢の王族はいないようだ。

なので、最低限の挨拶を終えた後は会場の目立たぬ所に隠れて、慌ただしく働く給仕のメイドさんの中に

可愛い子がいないか探して、慌ただしく働く様子を眺めて時間を潰していた。

しかも、僕は大物貴族の嫡子なのに、面倒くさいと評判の貴族付き合いをその程度で済まさせてくれた

正直に言えば、前世の死因から、派手派手しい女性が苦手だったので父には感謝である。

領地では、教育を受けている時間以外は人目のないところでぼんやりするか、使用人の可愛いメイドさん達を

眺めて過ごしていた。

今世は「転生したらチートはなかったけど、親ガチャSRだったのでスロライフを楽しみます」だったようだ。

僕の体がそれなりに育ってきた頃、家の使用人達が何やら慌ただしくしていた。

親が、王都で生まれたという妹を連れて領地に戻ってくるらしい。なんとというか、今世の自分の年齢を考えると、うちの親、仲良いな。

妹は妻さんの子、ということはないよね？

生まれたばかりの妹の名前を聞かされたけど、まあこういった転生ものっぽい世界では聞いたことがあるような、ないような名前だった。

妹が生まれたからといって、僕の生活が大きく変わることはない。

親の金を原資にした教育を受け、親や教育係の言うことを聞き、引かれたレールに沿って生きていくのだ。

変わったことといえば、余暇の過ごし方に、たまに妹にかまって遊ぶ、というメニニューが加わったことくらいか。

そういえば、前世でも、やや年の離れた妹がいたな。

一人暮らしをしている僕の家に乙女ゲームを持ち込んだ上に、難しいからといって

課金アイテム分のお小遣いをねだるような学生な妹だった。

ウザ絡みが面倒だったので、最強のアイテムを買ってやって黙らせた。

就活で運よく潜り込んだ先が大きめな企業だったから、その収入があれば、千円かそこらの課金くらい

痛くはなかったからね。1時間残業すれば強請られた課金分くらいペイできた。

親の領地でのスローライフに転機が訪れたのは、僕が王都にある貴族の学園に通うことになったときだ。

上流階級を集めて王国の権威、権力を示すとともに、横のつながりを作る場、ということなのだろう。

実家の家臣やら執事から色々と説明を受けて、大体のことは押さえ ていたつもりだったが、

入学に先立ち、王都の屋敷にいた父から呼び出された。

普段、というか生まれてからこの方、実は、中身のある会話らしい 会話をしたことは数少ない。

そんな間柄の父からいきなり言われたのは、貴族の女とすぐに寝る な、という驚きの教えであった。

なんて酷い会話だろうか。

この世界で貴族の男は、貴族の女と寝たら責任を取らねばならず、 しかし、逆はそうでもない、らしい。

超が付くほどの女尊男卑社会じゃないか。

親目線だと、家の跡取り息子が発情期もとい思春期真っ盛りの年齢 の中、寮生活を始めるのだから、

事前に釘を刺したのだろう。

知ることができてよかった、こういう不文律が一番怖いんだ。

今世の実家はかなりの上級貴族なので、家庭教師が言うには、そのうち、然るべき政略結婚をしなければならぬらしい。

だから、実家から離れた学園生活で羽目を外しすぎてしまうのが心配なのだろう。

ここでふと気づいた。貴族階級ではない平民とか騎士階級の女の子でならいいのだろうか？

その問いに父は一瞬だけ言葉を詰まらせるが、可笑しさをこらえきれなくなつたように笑いながら答えた。

「お前からそんな問いで返されるとは思っていなかったな。すまん、我が子ながら、これまであまり話をしてこなかったから少し驚いた」

「いえ、父上はお忙しい方だと家庭教師や使用人達から聞いておりましたから」

「質問に対する答えだが、子ができぬよう細心の注意を払え、だ」

「心に刻みます」

「何か学園でしてみたいことはないのか？」

「特にありません。学園で教育を受けた後に、父上の後を継ぐのが僕の役割なのでしょう？」

「まあそう言うな。お前は今まで私達の言うことをよく聞いて育ってくれた。」

さつき言ったことさえ気を付けてくれれば、それなりに息を抜いてかまわん」

特に反抗期もなく、親に従ってきた僕は、ずいぶん無気力な子供だと認識されていたらしい。

そりゃあ右も左もわからぬこの世界で、明らかに上級国民な実家に生まれた以上、

親の言う通りにしていくのが最も自分にとって安全であり、利益になると思っているからね。

「この家に生まれてから、多大なコストをかけて高度な教育を施してくれたことを、僕は感謝していますよ」

「親子の会話をしているのに、部下に氣遣われているような気分になるな」

「平民階級のような親子ごっこをお望みではないでしょう。ですが：それでしたら、僕の分まで妹と向き合っただけでいい。あの子はまだ小さいんですから」

「そうだな、まずは何か欲しいものでもあるか聞いてみるか」

そんな親子らしからぬ会話をし、僕は王都の学園に入学することになった。

しかし、この学園というのが酷い、実に酷いところであった。

学園は上級クラスと普通クラスに分かれており、どうやら学園の中で結婚相手を決める者が多いらしい。

そして、貴族階級は原則的に上級クラスに通うことになるのだが、この上級クラスの中で、特に子爵・男爵階級や一部の伯爵階級の家令嬢達が筆舌しがたい醜さを放っていた。

エルフや獣人といった亜人の奴隷を専属使用人として侍らせ、学園の中でも堂々と連れて回るのだ。

子爵、男爵という下級貴族の男性生徒に対しては暴君のごとく振る舞う一方で、

亜人の奴隷を侍らせながら上級貴族の生徒や容姿に優れた普通クラスの男性生徒に色目を使っていた。

吐き気がするよ。そんなケモナー女なんぞ放っておいて、下級貴族の男子達は近場で騎士階級あたりから

可愛い子を嫁さんにするか、無理して早くに結婚なんぞしなければいいと思ったが、そうは問屋が卸さない。

またも、面倒くさい不文律があった。

この世界で貴族の女と結婚しなかった未婚の男性貴族は、何故か白い目で見られるにとどまらず、

家自体が他の貴族達から不利益な取り扱いを受けるといふ。

そのため、学園に通う男子生徒は、許嫁や婚約者がいる者を除いて、必死に婚活に励み、

その下手に出る態度は、ますますケモナー令嬢たちを増長させてい

く。

僕かい？この国では現時点でただ一つの公爵家というところでもない上級貴族出身なだけでなく、

前世とは比べ物にならないくらい顔面偏差値を持ってしまった僕のところには、

ケモノー令嬢達がまるでゴミのように群がってきたよ。

成長するにつれて上昇していく顔面偏差値はホストでもやれば一財産築けたかもしれない。

とはいえ、それで得られる程度じゃ実家を繁栄させるには程遠いし、

実家の名誉を傷つけたとして、下手すりゃ実家から勘当だ。

話を戻して、一応、社会の一員として暮らしている亜人に対する差別意識はそんなにないが、

それでも僕自身にはケモノー趣味もないので、亜人に喜んで抱かれるような女と寝たり、配偶者に据えるのは勘弁願いたい。

幸い、貴族によくある「取り巻き」と言われるメンツがいたので、ケモノー対応は彼らに任せることができた。

実際には、任せる、というより、僕の取り巻きは、昔から実家に付き従っている寄子の家の子弟達なので、

むしろ過剰に忖度してケモノー令嬢という変な虫が近付かないようにブロックしてくれていた。

そんな中で王立ケモノー学園の生活が始まってから1年近くが過ぎた頃、実家から緊急の知らせが届いた。

封筒の中にある父からの手紙には、簡潔な一文だけが書いてある。「我が娘アンジェリカが、ユリウス王太子殿下の婚約者に内定した」

え、ちよつと待て。王太子と言えば次に王になる王子だ。その婚約者に僕の妹であるアンジェリカが内定した？

王太子ユリウス、その婚約者が公爵家の令嬢アンジェリカ…

僕はこの組み合わせを覚えている。頭の中のいくつかの断片的だった情報が、一つに繋がっていく。

点と点がつながって、線になるといった感覚だ。

妹が嵌まり込んでプレイしていた乙女ゲー「アルトリーベ」。

平民である主人公は、入学した貴族の学園で貴公子達と交流している。

いずれ王太子は婚約者を捨てて、聖女となった主人公を選ぶ。

そして捨てられた公爵令嬢は王都を追放され、その実家も傾いている。

しかも、ほぼ同時期に隣国である公国が攻め込んできて、王国は未曾有の大混乱に飲み込まれていく。

僕はそんな世界に転生してしまったのだと、今になって気付いた。

冗談ではない！このままでは、僕は混沌のど真ん中で、落ちぶれていく公爵家の当主になってしまう。

今世では、ギルバート・ラファ・レッドグレイブという公爵家の嫡男として生まれた僕の第二の人生は、

「転生したらチートはなかったけど、親ガチャSRだったのでスロウライフを楽しめます」などではなかった。

正しくは、「転生したら、断罪予定の悪役令嬢の兄だった件」だったのだ。

モブどころか、ストーリーが進んでどんどん落ちていく側のキャラじゃねえか！

こんななんだったら落差がないぶんだけ、モブの方が遥かにマシだよ！

というか、こういうのって、妹が悪役令嬢になる前に子供の頃から対策を取れたり、婚約にならないように立ち回れたり、

どうにかできるようにチート能力があつたりするもんじゃないのかよ！

なんか、色んな意味で手遅れじゃないか！もっと早く気付いていれば、何か対策ができたかもしれないのにいい!!!

第2話 突然始まったラブストーリーという名の茶番

妹が次期国王の婚約者に内定した、という事実には、本来であれば、驚くべきなのであろう。

だが、僕にとっては頭を悩ます出来事になっている。

この世界があ乙女ゲー世界と同じならば、何年か後に隣国が侵攻してきて、

その後は、実家が落ちぶれていく。

さらに、「ルート」によっては、妹の婚約は破棄されて、どこかの田舎に追放か処刑される、だったのだろうか。

前世の妹から聞かされた話が正しければ、「主人公」が将来的に結ばれる「攻略対象」の候補者が

何人かいたはずで、その候補者の一人が、妹の婚約者であり、この国の次期国王たる王太子である。

僕は今後、どうすればいいかを考えていた。僕はあの乙女ゲームを自分でプレイしていたわけではない。

妹が僕の家上がりこんでゲームをプレイしている画面を見るか、妹からゲームの話、

ざつくりとキャラの名前やら、大まかなオチあたりを聞いたただけだ。

あとは、妹が僕から強請った金で課金したチートアイテムくらいだろうか。

乙女ゲーと言っても、男性用ゲーム開発のメーカーが作ったせいとか、ロボットや戦艦はかつこよかったのは覚えている。

とはいえ、総じてこの世界について知っていることは多くはない。点として知っていることはあっても、それが線として結びついていないとも言えるべきか。

そんな状況下で何ができるか…何日もの間、それを必死に思案していた。

転生につきものと言われるチート能力やスキルはない。あるのはSSランクな権力を持つ実家の嫡男という地位、

あとは無駄に高い顔面偏差値くらいだ。何もないとまでは言えないが、国や社会を動かせるものは無い。

だが、妹の年齢から逆算すれば、あと10年もしないうちに戦争は起きるだろう。

仮に戦争が終わっても、その後何十年も僕の人生は続く。実家が落ち目になってしまっただけは元も子もない。

落ちぶれていく未来を回避するためにできることは何か、そして、優先順位をどのように設定していくか。

実家である公爵家の地位が崩れ落ちていく要因は大きく分けて2つだ。

1つ目が、隣国である公国の侵略による国力の大幅な低下だ。これにより、国全体の力が大きく削がれる。

2つ目が、王太子の婚約者となった妹が、ゲームの主人公や攻略対象から断罪され、実家が落ち目となっていく。

2つ目について手っ取り早い手段がないわけではない。いわゆる攻略対象は5人いたが、

主人公をユリウスルートに乗せないことで回避できるはずだ。

そもそも学園に入学させない、という手もあるだろうが、主人公は平民で、探すことが今の僕にはできない。

主人公がどこにいるのかを探せるほどの力もコネもないのだ。

この世界の戸籍が、前世のように整備されているとは限らないし、それが平民であればなおさらだ。

だが、発想を変えてみれば主人公がユリウス以外とくつつけば、婚約破棄は起こらず、国母の実家となる我が家は安泰だ。

だから、主人公については、後回しでいいはずだ。というか、今からどうこうするのは難しい。

そうだとすれば、まず考えるべきは攻め込んでくる公国をどうするか、だろう。

しかし、これがまた、僕個人でどうにかできるものではない。

僕が公爵家の嫡男と言っても、たかが数年で国をすぐに動かすようなことはできないからだ。

自分が一人の兵士としてチート能力を発揮して公国を潰せればよかったのだが、そもいかない。

この世界の機動兵器である鎧の操縦技術が特に秀でていないこともないし、常人離れた魔法も使えない。

実家の教育係によると、魔力、というのはそれなりにあるらしいのだが、その操作精度は高くないらしい。

ガワ（肉体）の世界の貴族でも、中身は別世界のリーマンだからなのだろうか。

努力と訓練を怠ったつもりはないが、この国のトップエースに分類される操縦者にも及ばない。

僕は○ムロ・レイにも、○ヨウ・ザマにも、○サキ・アンドーにもなれないし、

この世界には、○ジンガーや○ツター、○ンバスターも存在しないようだ。

実家の財政を軍備に全振りしたところで、あの乙女ゲーに出てきた公国の黒騎士を倒せるほどの鎧を開発し、

軍勢を整えることはできないだろう。
総務系部署のリーマンには、鎧という名のロボットの性能を大きく向上させるような理系の知識もない。

むしろ、これから父は王太子となったユリウスを支える派閥を拡大させ、

敵対派閥との政治闘争に明け暮れなければならぬはずだ。金だつていくらあつても足りないだろう。

○年後に公国が攻めてきます、なんて言っても正気を疑われるどころか、僕が転生者であることを

知られてしまうかもしれない。それで僕個人の人生がアウトになつてしまつては意味がない。

これ以上は、考えるばかりで建設的なものが浮かんでこない。だが、考えることを止めるわけにはいかない。

少し環境を変えて、頭をリフレッシュするため、放課後を待ち、取り巻きから離れ、

人通りの少ない裏庭の木陰で寝そべっていると、何やら揉めるような声が聞こえてきた。

「なあ一回だけでもお茶会に来てくれよ！高い茶菓子だってあるからさあ」

「冗談じゃないわよ！なんで国境近くのド田舎領主の息子のために私の時間を使わなきゃいけないのよ!!」

「そ、そんなこと言わないで頼むよ」

「うるさいわね！アンタにもアンタの実家にも、欠片ほども興味ないのよ!!」

この学園で何回も聞いた覚えのある残酷な断り文句と、頬を力の限り叩いた音が入ってきた。

どうやら男子生徒が取り付く島もなく誘いを断られてしまったようだ。

何とも気まずい雰囲気だ。立ち上がって、僕がここにいることを知られてしまつては、振られたばかりの

彼にはさらなる追い打ちとなつてしまう。そのため、息をひそめて男子生徒がこの場を去るのを待とうと

思ったのだが、未来について悩む僕に追い打ちをかけるようなセリフが耳に入ってきた。

「ちくしょう！あいつの実家だつて、うちから大して離れてない辺境の男爵家だろうに！公国の連中が攻めてきたら素通りさせてやる！」

「ええええええ!」

「だ、誰だ!?つて、アンタ…えええええ!」

とんでもない利敵行為に、思わず驚きの声をあげてしまった。

どうやら、彼の実家、ついでにビンタして去つていった令嬢の実家も、いずれ侵略してくる公国との国境にほど近い所に位置する男爵家らしい。

この世界には、浮島と言われる大地が海に浮かんでおり、その島が各国、各領主の領土となり、浮島同士の間には飛行船が使われる。

侵略行為にも飛行船が使われるため、国境沿いの領主も、周囲の警戒には飛行船や鎧を飛ばす必要がある。

国防の実務をしつかり学んだわけではないが、国を守るためには、領主が飛行船等の兵器を維持し、きっちり警戒、警備をすることが必要になる。

逆に言えば、侵略する上で国境沿いの領主が調略されて、警備が緩くなれば、そこが国防上の穴となってしまう。

素通りくらいならまだマシだ。敵国に加担されてしまえば、敵戦力が増えるだけでなく、

周辺の警戒が薄い内側の浮島は、不意打ちを受けてすぐに陥落するだろう。

そんな領主として要求される国境の警備・警戒を、ボイコットしてやるという宣言を、

次期王妃の兄の目の前で、声高に宣言した男爵家の嫡男らしき男子生徒は驚くとともに、目が泳ぎ始めていた。

身長が190センチくらいあって、筋肉質な、男らしさと言われる要素が溢れる男子生徒、

仮にアメフト系男爵家男子(仮)、略してアメフト系男爵の顔が青ざめていく。

そ、そりやそうだよね。立場が逆だったら僕だって嘔吐してしまう自信がある。

生殺与奪の権、他人に握らせちゃってるよね。

だが、今の台詞を実家にチクってこの家を潰したところで、次の領主がしつかりと仕事をする保証はない。

言い方は悪いが、国家に反逆するような発言をこの耳で聞いた以上、実家の権力なら潰すのはいつでもできる。

いや、逆に考えるんだ。これをネタに使い、馬車馬のごとく僕のために働かせるにはどうしたらいいのかを。

「違うんだよ。本気であんなことを言ったつもりじゃ…」

「いや、僕のほうこそ結果的に盗み聞きをしてしまった。君の誇りを傷付けてしまったね」

「そ、そんな…俺達貧乏貴族には日常茶飯事ですよ、あんなの」

「そうか、君さえよければ、場所を変えて、少し話を聞かせてくれないかい？」

「え？なんで公爵家の坊ちゃんが俺に？」

「愚痴くらい聞くよ、同級生だろう？それに将来、妹が妃になる国に仕える領主の一人の跡継ぎがどうしてあんな発言をしたのか気になるじゃないか」

僕に対して警戒心を露わにしながら頷いたアメフト系男爵を連れて、僕は王都の商業地区に向かうことにした。

あのまま学園にいたら、取り巻き連中に見つかって面倒な詮索をされてしまうかもしれないし、

僕自身も、気分転換で少しでもあのケモノー学園から離れたかったんだ。

そして、手頃な店を見つけて飲み物と軽食を注文し、向かいに座った男子生徒に話の続きを促してみる。

面倒くさいから敬語もやめて一同級生に話すよう付け加えると、少し気が緩んだのか、学園のおぞましい実態が

飾られずに語られ始めた。どうやら僕の取り巻き経由で知らされる情報よりも、さらに酷い現実が存在していたようだ。

「学園を卒業するまでに結婚相手がいないと、貴族の社会で鼻つまみにされるんだったよね」

「ああ、だから何とかして俺達下級貴族は男爵家とか子爵家の令嬢に嫁に来てもらわないといけないんだ。

でも女子達だって辺境の、しかも下つ端貴族に嫁ぐのは嫌だから相手にされないか、とんでもない条件を出してくる」

「聞くのも恐ろしくなってるね」

「ああ、結婚してやるから、王都に屋敷を用意して仕送りしろなんて序の口で、愛人や亜人奴隷の面倒まで見ることを条件にされるなんてざらだよ」

嗚呼、吐き気をもよおす邪悪さというのはこういうことを言うのだろうか。

これでは辺境の貴族達の財政事情は悪化するばかりで、ロクに国防に回す金がなくなるじゃないか。

それに、結婚前に愛人を認めさせるって…百歩譲って、男も側室や妾を持つのが普通の今世では、

女性側にも愛人を認めるとしても、その女から生まれた子供の嫡出性はどうか認めるのだろうか。

前世では存在していたDNA検査のようなものをこの世界では聞いたことがない以上、托卵のリスクが高すぎる。

後継ぎ問題が起きて家内が割れば、その家はさらに荒れ、意識は領内にばかり向き、国防は後回しにされる。

そんなお家騒動に、外国の工作資金が入ろうものなら、結果は明らかだ。

この国の貴族社会は、知れば知るほど悩ましくなってくる。

「ど、どうしてアンタが難しい顔をしてるんだよ、公爵家なら相手なんて選び放題だろ」

「どうせ僕はそのうち父が見つけてきた相手と政略結婚するんだ。僕に選択権はないよ」

僕が探しているのは貴族じゃない可愛い愛人だ！

「さすが雲の上の人は話が違うな・・・」

「それよりも、君の話が本当なら、この国はよく今まで滅ぼされなかったのか不思議でしょうがない」

将来、父から家を継げば、僕がこんな問題だらけの国を、妹が嫁いだ王家とともに支えなければならぬ。

ふわふわした乙女ゲーの世界だからか!? 少なくとも主人公が入学するまで王国は滅びないからなのか!?

でも主人公が卒業した後は!? 主人公がユリウスルートじゃなかったら、国の在り方は変わらさか!?

公国以外の国、現時点でしばしばちよっかいを出してくるといふ神聖王国も動かないとは限らない。

「少なくとも公国側はフィールド家がしっかりしていたからな。それに今度、商売で儲けた金を使って

公国とうまく話ができるようになった伯爵家とフィールド家の嫡男が婚約するらしいから」

フィールド家か。たしか紫色の攻略対象の実家だったよな。

ただ、かすかに残っている前世の妹情報だと、その伯爵家って裏で公国と仲良しとか設定があったような…

そうになると、フィールド家を足掛かりに、周辺の小規模領主達も切り崩されかねない。

いよいよもって、国境沿いは怪しくなってくるな。だが、どうすれば国境周辺の貴族家を安定させられるのか…

再び頭を悩ませていると、聞き覚えのある声が僕に話しかけてきた。

「あーやっぱり若様じゃないですか。こんなところで密会なんて、まさか若様、お手付きを…って、男?」

「若様が…そんなまさか…シヨックです」

「はしたない発言は止めなさい。ですが、若様も、放課後とはいえ、取り巻きも連れずに何をされてるんですか」

声のした方向に目をやると、知った顔の女が3人。王都にある公爵家の屋敷でメイドをしている子達だった。

学園に入学してから王都の屋敷に顔を出す機会が増えたので、自分好みのメイド以外の顔も覚えはじめていた。

どうやら今日はオフのようで、見慣れぬ私服を着ている。そして、3人のメイドのうち、

最初に発言した茶髪でノリが良い話し方をするメイドその1と発言を止めようとしたメイドその3は

貴族家の出身で、僕が男に手を出したと勘違いしたメイドその2は確か外国の出身だっただろうか。

メイドその1は、学園の普通クラス卒業後、うちで働くようになったという話だ。

メイドその2は、噂だが、実家が仕えていた外国の大貴族が滅亡して、何やかんやの末に家に来たとか…

まあ父が公爵家で働くことを認めている以上、身元はしっかりして

いるんだろう。

ちなみに、地味系だが正直に言うタイプの子だ。

メイドその3は、公爵家に仕えている貴族家出身で、眼鏡をかけたお堅い委員長タイプの子である。

確か名前はコーディリア・フォウ・イーストンだっただろうか。

ちなみに、この子が僕にとっては全く好みのタイプではないのに、既に名前を憶えているのは、この子が公爵家の中でも、うちの妹アンジエリカガチ勢の筆頭格だからである。

とにかく僕の妹のことが可愛くて仕方ないらしく、兄妹の戯れで少し妹をからかうだけで、

公爵家嫡男の僕に射殺するような視線を向けてくる。仮にも雇い主の息子なのにさ。

きっと妹と近い年齢だったら、自主的に取り巻きを統括して、その守護者となっていただろう。

記憶の確認はこのくらいにして、ひとまず誤解を解くべく、メイドその1に説明を試みる。

「男同士、放課後に友情を深めあうのも青春というものだろうか？」

「若様がまさか男に手を出すなんて…公爵様が知ったら何ておっしゃるか…」

「父上は僕がすっかり女好きなことをよくご存じだから問題ないよ」

「わかってますよ、若様は貴族じゃない女の子を見たらすぐに熱い視線を送ってるってことくらい」

メイドその1は、ニヤリとした笑みを浮かべてメイドその2に視線を向ける。

やめろ！そこでメイドその2を見るんじゃない！狙っているとかバレたら口説きにくいじゃないか。

学園のケモノー令嬢を口説きたくはないし、学園では取り巻きに囲まれてるから普通クラスの女子は口説けない。

巫人を連れてない上級貴族家の女子も、いちいち公爵家にすり寄ろうとする感が露骨で近寄りたくない。

それなら、手近なところで貴族家以外の子を口説くしかないんだ！

実家の屋敷で働いてる人間なら安全、安心で、困る人なんて少ないだろ！

「う、美しい…」

「「え？」」

突然、僕の内心の突っ込みと、ここまでの会話の流れを完全に無視した声が聞こえてきた。

そして、僕とメイド2人の間抜けなセリフが続いた。

つい数時間前には、恐怖と絶望だけを顔に浮かべていたアメフト系男爵は、立ち上がり、頬を赤らめて

メイドその1を見つめて視線を離さない。

手元のコーヒーカップは傾き、その中身全てがこぼれて自身の服に巨大な染みを作り続けていることにすら気付いていない。

「た、大変！大丈夫ですか!？」

いち早く正気に戻ったメイドその1が、テーブルの上にあったおしぼりを手に取り、男子生徒の服の

いたるところに付着したコーヒーをふき取り始めるのだが、今度はメイドの顔も赤くなり始めていた。

どうやら、汚れをふき取るときに男子生徒の鍛えられた筋肉の硬さに気付いたらしい。

そのままアメフト系男爵とメイドは沈黙し、互いに顔を紅潮させながら見つめあっている。

「なあ、コーデリア。これってもしかして…」

「こんな恋愛小説の中に出てくるような恋の落ち方、本当にあるんですね」

放課後に街中の喫茶店でこんな即席の茶番を見ることになろうとは思わなかった。

「誰かが恋に落ちる現場を初めて見たよ。ってか君、お堅いキャラなのに恋愛小説読むの？」

「物語の中くらいロマンチックなことが起きてもいいじゃないですか」

「そういえば、あの子は学園在籍時は普通クラスだったっけ」

「ええ、^{（ん）}実家は最近になって男爵家になったと聞いております」

そういえば思い出した。メイドその1の実家は、彼女が学園を卒業する直前に、領地発展が認められて男爵家、

つまり、貴族階級となったらしい。

今は貴族階級の女性だが、在学中は普通クラスで過ごし、結婚相手が決まる前に卒業した、ということだ。

そもそも、普通クラスの男子は騎士階級が多く、結婚相手の制約も無いため、地元で婚約者がいることも多い。

そのため、普通クラスの女子は、同じクラスで相手を見つけられず、かといって、上級クラスの男子生徒は、

貴族階級なので、同じく貴族階級の女性を相手にせざるをえず、

その結果、在学中に学園内で結婚することが簡単ではないと聞いたことがある。

需要と供給のミスマッチというやつだろうか。

このように相手に恵まれなかった普通クラス出身の、現貴族階級の女子の目の前にいるのは、

上級クラスの男子である。その上級貴族の男子達は、地雷だらけのケモノー女子に貢ぐために

ダンジョンに潜り続けるため、自然と屈強になっていく。

普通クラス出身のメイドその1にとっては、そんな鍛え上げられた男子生徒に男らしさを感じたのかもしれない。

漫画のようなフォーリンラブに半ば呆れている僕とメイド2人を置き去りにして、

メイドその1とアメフト系男爵は夢中になって話を続けているが、ケモノー学園での酷い男女関係に

胃もたれを起こしていた僕にはなんだか微笑ましい。

学園の外に貴族家の女性が多ければ、学園の男子達も少しは楽になるだろうに…

「なあコーディネリア。あの二人、今の身分的に、くつついても大丈夫なんだっけ」

「そうですね、イレギュラーなところはありますが、問題ないでしょ

う」

「うちの屋敷ってけっこうな数のメイドさんがいるけど、未婚の貴族階級の子って多いの？」

「公爵家の屋敷は規模が大きいですからね。若様、何を考えてるんですか？」

「うくん、壮大な幸せ家族計画とでも言っておこうかな」

「一体何人の使用人をお手付きにするんですか」

我が家のメイドが酷い。だから僕は貴族階級の子には進んで手を出さないって言ってるだろう！

気を取り直して、今日は時間も遅くなってきたので、ひとまずその場はお開きになったのだが、

後日、アメフト系男爵から、メイドその1と付き合うことになり、さらに、その1か月後には、

婚約に至ったとの報告がもたらされた。何はともあれ本人達が幸せならそれが一番だ。

第3話　メイドさんとの悪だくみ

「ありがとうございます、レッドグレイブの大将！」

いつの間にか変なあだ名が付いてしまった。

まあいいけど、御大将とか呼ばれたら〇ヤイニングフィンガーを放ってしまいそうだし、

若大将とか呼ばれたら、前世の金満球団の監督を思い出してしま
う。

「いや僕が何かしたわけじゃないよ。君たちが恋に落ちただけさ」

落ち方はまるで滑落事故のようだったけどね。

「でも大将がいなかったら、俺はどうなっていたかわかりません。きっと彼女を幸せにしてみせます！」

「そのセリフは奥さんのパパさんに言うべきじゃないのかい？」

「そ、そうですね。なら、公国との国境はしっかり守って見せます！それが将来的に王家を支えていく

大将への恩返しだと思いますんで！」

ついこの前までは、王国滅べマンだったのに、女一人できるだけ
人は変わるものだな。

愛は世界を救う、だなんて言葉を聞いたときは頭お花畑かと思っ
たが、

愛はこの国を救うのかもしれない。

愛って何なんだろうね。

ともかく、これで将来の領主貴族の1人がしっかりと仕事をして
くれるようになったはずだ。

そうか、追い詰められて、誰にも相談できないから全て自分で何
かしなければならぬと思ひ込んでいたが、

国境沿いの領主達が公国をはじめとした外国からちゃんと仕事を
してくれさえすればいいんだった。

領主がまともに仕事をしないと悪く思ってしまう王立ケモナー学園、
恐るべし。

後日、王都にある実家に顔を出して、仕事の中のあるメイドを人通

りの少ない裏庭に連れ出した。

「人気のないところに使用人を呼び出して手籠めにしようだなんて卑劣な真似をして、公爵家のご嫡男として恥ずかしくないのですか」

僕にその気がないことをわかりながら、公爵家のメイド、コーデリア・フォウ・イーストンが雇い主の息子に暴言を吐く。

「どうせ父がどこから連れてくる貴族と結婚するのに、可愛げのないメイドに手を出すほど酔狂ではない」

「ええ、わかっていますよ。若様が狙っているのは・・・」

「はい、この話はおしまい！」

「早く本題に入ってください。私は学生の若様と違って忙しいのです」

眼鏡をクイツと上げながら、一枚のリストを渡してくるコーデリアは、ジト目を僕に向けてきている。

リストにあるのは、屋敷の中の男爵家、子爵家出身の未婚メイドの名前である。

先日のアメフト系男爵とメイドその1の恋愛滑落事故の後、僕が調査を依頼していたのである。

「アンジェリカ様のためでなければこんなことしませんのに」

この子のハート、強すぎないか。普通、雇い主の息子の依頼なら、一応は忖度して引き受けてくれるもんじやないのか。

父に内緒で、僕が屋敷の中で狙っているメイドの存在を把握しているこの女は、僕にほとんど忖度をしない。

渋い顔を浮かべるメイドが動いてくれたのは、彼女が崇拜している僕の妹アンジェリカのためである。

「君も学園に通っていたからわかるはずだ。辺境の下級貴族の婚活事情がハードすぎる。」

そのせいで領主貴族の財政事情は悪化して、王国への忠誠心どころか憎悪が高まる一方だ。」

「メイド風情が口を挟む問題ではありません」

「今は燻ぶっているだけの火種だが、王妃になったアンジェに火の粉が及ぶのは君の本意ではないだろうか？」

「くっ…アンジェリカ様の名前を出すなんて卑劣な…」

辺境の領主貴族の王国ヘイトがあんなに強いとは思わなかったよ。でも嫁さん1人を宛がってやれば、そのヘイトを緩和できるどころか、僕を通じて将来の王国への忠誠心にも

変えていけるなら、ただのボンボンにもやりようはある。

公爵家の嫡男なんていう大それた属性を持って始まった僕の第二の人生で、最初にやりとげたのは、

他人の婚活サポートになってしまった。

「リストにあるメイド達は、公爵様も政略結婚のコマと考えている可能性もある以上、公爵家としては動けませんよ」

「そうだね。だから今回のように、僕の知り合いが、運命の出会いをして野良恋愛の結果、結ばれたことにする。

もちろん、嫁ぎ先の家の監視をさせる代わりに、僕がこの家の後を継いだら領地運営のサポートはするさ」

一応、事前に、実家の許可さえ取れば、メイド達が自分で結婚相手を見つけても罰はないことは確認してある。

後はコツコツとマッチングを進めていくだけだ。

ちなみに、偶然の出会いを装うのは、男子生徒側の実家が、レッドグレイブ公爵家以外の大貴族の寄子だったり

する場合があるためでもある。

てめえ、うちの子分に勝手するな、と言われても困るからね。

「ちなみに、メイド達ですが、必ずしも一般的な男性好みの容姿や性格をしているとは限りませんよ」

「外見だけでパートナーを選ぶなんて愚かしいこと極まりないね」

学園を卒業するまでに結婚しなかった女子には、ぽっちやり系だったり、内向的な性格で男子とあまり交流しなかったりする子がいるらしい。

だが、虐げられ続けた下級貴族の男子達にとっては、これらの要素は不利にならない。

それ程までに男子達は追い込まれ、未婚による不利益を避けようと

している。

恋愛が物足りなければ愛人を作るだろうけど、将来の公爵である僕が紹介した相手を蔑ろにはしないだろう。

げに恐るべきは、実家の威光。親の七光り万歳。今世の僕は本当にロクでもないボンボン息子だな。

安心してほしい。ボンボンお兄さんが君たちに屈強な野郎を紹介してあげるよ！だから一緒にこの国を守ろうね！

うーん、字面だけ見ると、僕ってとっても愛国心に満ちているね。動機は保身以外の何物でもないのに。

「辺境領主たちの苦境を逆手にとって忠誠を捧げさせるなんて、やはり卑劣ですね」

「弱きを助けて強きを挫く、と言ってほしいな」

学園内で弱い立場の辺境領主貴族の男子を助けて、強い立場にあるケモナー令嬢達を挫くのが、

国内でも王族の次に強い立場の公爵家な僕、というのは滑稽だけだね。

「では、内々にメイド達の意向調査と日程調整を行います。若様のほうもよろしくお願いします」

「ああ了解だ。君も仕事に戻ってくれ」

こうして、休みの日に、取り巻きたちの目を盗んでは、婚活弱者の男子生徒を連れて、街に繰り出す日々が始まった。

ある時は喫茶店や居酒屋で、またある時は評判のクレープ屋台の行列で、偶然を装った男女の出会いの場を設けるのである。

結果だけ言えば、予想の斜め上に行くほど上々であった。

1件1件を挙げればキリがないが、亜人奴隷や愛人の面倒を見るとか、王都での華やかな生活のための

過大な仕送りを求められない、というだけで男子生徒は涙を流す勢いでメイド達を口説いていくのだから。

もちろん、メイドの数にも限りがあり、全ての男子生徒を救済することはできないから、国境近くや辺境の男子を優先的にサポートしたが、それなりの数のケアはできたと思う。

父に僕の動きを察知されにくくするために、正式に婚約等をオープンにする時期は色々調整してもらったが、

この取組が上手く行き過ぎたのが良くなかった。

このときの僕は、まだ知らなかったのだ…この国の「不都合な真実」を。

ある日、父からの呼び出しを受けたのである。

最初は卒業してからどうするのか、とか政略結婚の相手が決まった、とか、そんなことを言われると思っていた。

ところが、呼び出された先である、王宮内の父の執務室に入った僕の目に入ってきたのは、予想だにしないメンツだった。

一人は肩掛けに肘をつき、足を組んで気だるそうにソファに腰掛ける男。だが、その頭頂部にはこの国の頂を意味する冠が乗っかっている。

もう一人は、プラチナブロンドに輝く髪に、飛び出すボイン、2児の母でありながら、王宮内で年齢不詳とも囁かれる美しい女。

そう。この国の頂点に立つ2人、王様と王妃様がセットで父の執務室にいるのである。

何を言えばいいのか、どうすればいいのかわからない、といった表情を浮かべて父が問うてきた。

「ギルバート、お前、一体何を企んでいる」

尋ねる父の目は僕を睨みつけている。

王様こと、ローランド・ラファ・ホルファート陛下は面倒くさそうな顔を浮かべながら、父の執務室内をキョロキョロと見渡している。

これから行われることに興味がないのだということがわかる。

だが、父以上に僕を目で射抜いているのが王妃様ことミレーヌ・ラファ・ホルファート様である。

王妃様の綺麗な顔からは、ネガティブな感情、嫌悪感が放たれている。僕が一体何をしたのだろうか。

さすがに、緊張感から冷汗が流れ始めてきた。部屋の空気も、氷魔法を使ったわけでもないのに冷え切っている。

端から見れば取り巻きを連れずに、街で遊び歩いているように見え

ただろうが、それだけだ。

父から生活態度を叱責されるというならまだ理解できるが、この国のトップ2人がこの場にいる理由は何だ。

知らぬ間にこの国の王族と僕は婚約でもしていたのか？

いや、妹が王太子と婚約した以上、重ねて僕が王族と婚約する理由はないだろう。

だとすれば、僕がこの場に呼び出された理由、しかも王妃様に剥き出しの嫌悪感を向けられる理由は何なのか。

番外編 金髪○○豚野郎、参上

さて僕は現在、実家、つまり父の領地での事務作業に追われている。学園の修学旅行で向かった南方の温かい浮島からの帰り道に、妹やこの乙女ゲー世界の主人公であるオリヴィアさん達が乗った飛行船は、公国の先遣部隊の襲撃を受けてしまった。

この世界が、前世の妹が僕に課金用の小遣いを集りながらプレイしていた乙女ゲー世界であることに気付いたときから危惧していた公国がついに動き始めたのだ。

公国が攻めてくるのは妹が3年生になってから、と思い込んでいた僕としては、驚きを隠しえない。

しかも、飛行船の位置を知らせ、公国を手引きしたのが、妹の元取り巻きなのだという。

そのこともあって、父は事後処理を含め、多忙を極めており、王宮を離れることができなかった。

そのため、僕が領地での仕事を進めるよう指示を受けたのだ。

ついでに、妹も休養もかねて連れてきたのだが、どういうわけか、この乙女ゲー世界の主人公オリヴィアさんも一緒である。

公国の襲撃を受けて、一度は公国の船に囚われてしまった妹であったが、廃嫡されたあのバカ王子を始めとした本来の攻略対象達との決闘騒動に続き、

今度もその妹を救ってくれたのが、ロストアイテムと呼ばれるオーバーテクノロジーで作られた機体を駆るリオン・フォウ・バルトファルトという男だった。

しかも、妹が課金を決意したきっかけともいうべき公国最強の黒騎士までもが戦場に現れ、諸々の政治的な思惑を踏まえ、

表向きには水色の攻略対象ことクリスが撃退したことになったようだが、実際に破ったのはこのリオン君なのだという。

「一体どうして悪役令嬢にフラグが立ったんだ・・・」

前世の記憶にあるあの乙女ゲー世界に、リオン・フォウ・バルトファルトという攻略対象は存在しない。

そんな謎の男が妹とのフラグを順調に構築している。

ちなみに、本人と話をしてみると、別に妹を狙っているような素振りは見当たらない。

むしろ、主人公であるオリヴィアさんとのフラグのほうが立てられているように見える。

この3人、どういう関係なのだろうかという疑問が尽きないので、今に関してだけは別の問題が僕の心をかき乱していた。

平時の領地運営に関係する決裁に加え、リオン君から献上された公国製の飛行船や鎧に関するリスト、公国の技術や機体を反映させた新型鎧の開発計画書、

その他各種報告書に目を通していた僕の耳に、妹とオリヴィアさんが話す声が聞こえてくる。

2年生になってから始まる実技系の授業に向けた事前の特訓を2人でするとは聞いていたが、それにしては随分と楽しそうだ。

立ち上がり、執務室の窓から屋敷の外を眺めた僕が目に入ったのは、お揃いの乗馬服に身を包んで、同じ馬に乗りながら、オリヴィアさん以後ろから抱き着いている妹だった。

え・・・何この光景？

前世と合わせれば40年以上生きているが、僕の中には、初めての感情が生まれようとしている。

馬上の妹はオリヴィアさんの肩に頬を乗せて、その体温を全身で感じ取ろうとしているようだ。

今時の女の子って、友達同士でこんな濃厚な接触をするものなのかな！

妹達の周りでは、メイド達はその光景を眺めている。その中には、ある意味で僕の宿敵、ガチのアンジェ派上級メイドのコーデリア・フオウ・イーストンもいる。

メイド達、早く2人を止めろ！このままだと、僕の開いちやいけないう扉が開いてしまうかもしれない！

おい、コーデリア！お前もアンジェが大事なら、女の子同士でイチヤイチャさせるんじゃないやありません！

アンジエが主人公の攻略対象になったらどうするんだ！

しかし、理性がこの光景を止めさせなければならぬと告げる一方で、心が、いや魂が妹達の姿を受け入れ始めようとしているのを感じる。

そうか、前世では聞いたことしかなかったが、この感情のことを言うのか。

これが・・・尊い。

ん、ちよつと待てよ。

確かに、パツと見たかぎりでは、馬上で戸惑うオリヴィアさんを、アンジエが悪戯っぽくからかいながら、組み付いて愛でており、2人の関係はアンジエリカ×オリヴィアだろう。

だが、この世界の主人公ともいふべき、オリヴィアさんは、本来、相手を攻略する側のはず。

まさか、庇護欲をあえて駆り立てながら自分に愛情を向けさせるように相手を掌の上で転がしているのか!?

そうだとすると、いかに相手を籠絡するかという意味ではオリヴィア×アンジエリカなのかもしれない。

だめだ、気になって仕事が手に付かない。

というわけで、馬術の特訓を終えたアンジエを執務室に呼び出した。

「兄上、御用ですか？」

「ああ、お前に聞きたいことがあつてな。事は急を要する」

気になって、気になって仕事が手に付かないんだ！

真剣な僕の表情を見て、アンジエもことの重大性を気付いたのだろう。

そりやそうだ、これはこの世界の在り方すら左右しかねないのだ。

「まさか、侯爵派閥が何かをしてくしたのでですか!？」

「いや・・・しかし、これはそれより重要かもしれない」

緊迫した空気が支配する執務室でアンジエが息を飲み、ゴクリという音が小さく聞こえた。

「お前達は、アンジエ×オリヴィアなのか。それともオリヴィア×ア

ンジエなのか」

「……は？」

「場合によっては戦になるぞ、私の心が」

「兄上？」

アンジエがドン引きした表情を浮かべている。

言葉こそ発しないが、普段は紅玉のような輝きを放つ瞳からは光が失われ、僕への嫌悪感に満ちた視線が向けられている。

そして、無言のまま執務室の扉の前に立つと、普段よりも一回り以上低い声で言う。

「しばらく私とリビアに近付かないでください。リビアが汚れます」

静かに執務室の扉が外から開かれてアンジエが部屋を後にする。開けたのは、扉の隙間からちらつと姿が見えたコーデアリアのようだ。

鼻で笑うような声が聞こえたのは気のせいだろうか。

よし、戦だ！この腹黒メイド！

後日、無地のTシャツを買ってこさせた僕は、手にした筆に、黒のインクを染み込ませていた。

この年になって新たな世界の扉を開くことになるとは思わなかった。

この気持ちを形に残しておこうと思い、文字をシャツの布地に書いていく。

今世の妹とこの世界の主人公によって目覚めた、新たな境地。

百合豚だ！

第4話 処刑BGMが最初から聞こえてくる

「少し前から、屋敷のメイドの入れ替わりが増えてきたと思っていたが、それが続くようなので調べてみると

相手は学園の男子生徒達ばかりだ。さらに調べると、どうやら背後でお前が動いていることがわかった。

自分の相手を探そうともせず、下級貴族に嫁をあてがっているのはどういうことだ」

下級貴族の男子の相手探しが大変そうで、このままだと、僕が公爵家を継いだ後に苦労しそうだったんです。

確かにパパ上に黙って勝手に実家のメイドを使っただけ、だからと言つて王様と王妃様が出てくるなんて聞いてないよ！

父への言い訳を考えつつ、国のトップ2人が同席している理由は何かと思いを巡らす、何も浮かばない。

そもそも、個人の事情で謁見なんてしたこともないんだ！
僕のやったことで大臣とかからクレーム出たならまだ仕方ないけど、仮にもトップがわざわざ学生の前に出てくるなんて異常だ。

僕が口を開かずにいると、父がチラチラと王妃を見る。僕は何をやっちゃいましたか。

「公爵、あのことをまだギルバート君に教えてなかったのですか」
「申し訳ございません。学園を卒業し、本格的に後を継がせるときに伝える予定だったので」

「言い訳はけっこうです。いい機会ですから私から話しましょう」
父の表情が不快感で歪んでいた。

表立って口にはしないが、王妃様は外国、レパルド連合王国という国から政略結婚のために嫁いできた人だ。

連合王国は、公国とは別の敵国、ラーシエル神聖王国と敵対している。

共通する敵国に備えるために、婚姻を媒体とした安全保障を図ったのだらう。典型的と言えば典型的なのだらう。

この国の重臣達としては、そんなバックグラウンドを持つ王妃様を

無碍に扱うことはできないものの、

他国から来た人間が王宮で権勢を振るうことも面白くない。

「ギルバート君、公国がかつて大公家として王国の一部であったことは知っていますね？」

「はい、その後、大公家の反乱が起こり、王国は後手に回ってしまい、公国が独立してしまつたと教育を受けております」

「そうです。それが全てのはじまりでした。さてここからが本題です」

教養というか、歴史の一部として学んだことの確認だったが、この後、王妃様から告げられたのは、この国の一部の者にとってあまりに残酷な真実であった。

大公家ほどではないにせよ、昔は凶暴だった領主貴族達を弱体化させるための女性優遇政策推進に舵を取り、

ベースとなる価値観を王都の学園に集めた貴族の子弟達に植え付け始めたというのだ。

教育・・・洗脳のほうが近いね。そういえば前世で通っていた学校でも、子どもを洗脳するな、と国や公権力に噛みつく教員がいたような気がする。

だが、結果として、効果は抜群だったらしく、目論見どおり領主貴族達は弱体化していったのだという。

さらに驚きだったのは、学園の運営を通じて教育手法を確立し、百年単位で、平民階級にも教育を施していき、邪魔な貴族すら不要な国に変えていくことも見越しているのだということだ。

「国内に権力を集中ですか。中央・・・集権というところですね」「王家が目指すものを端的に表すものとしては悪くない言葉ですね」

前世の学校で学んだ歴史の授業レベルですけどね。ここまで聞くと、いくつかの情報が自分の中で結びつき始めてくる。

まずは、国の体制移行に向けた取組として、学園に入学させるのが、おそらくあの乙女ゲーの主人公なのだろう。

前世の妹によると、結局、後になって主人公も立派な血筋だという

ことが判明するらしく、

結局は某忍者漫画の主人公のようだったと妹が毒づいていた気がするが。

とはいえ、その体制移行が妹の在学中に本格化するとか、タイミングが悪すぎる。

国の大改革の余波を受けて落ち目になっていく実家を継がされるとか、罰ゲームにもほどがある。

もしも、主人公がユリウスルートに行ってしまったら、結果的には公爵家も生贄になってしまう。

そして、大事なことがもう一つ。

僕がやったことは王家が描いた壮大なシナリオに真っ向から歯向かうものだということだ。

やばいな。王妃様の機嫌が悪いはずだ。

王家目線で見れば、散々苦勞して進めてきた改革を、学園に入学したボンボンがぶち壊そうとしているようにしか見えないはずだ。

ただ、一方的に領主貴族達を痛めつけて、反乱を起こされたらどうするのか疑問が残る。

「王国憎しで貴族達が反乱を起こしかねませんよ。今のままでは領主達が反王国で結束しても不思議じゃありません」

「・・・そのための備えはある。この場では言えないがな」

「父上はご存じなのですか？」

「ギルバート君がその先を知る必要はないでしょう。ですが、ここまでの話を聞いて、自分がしたこと重さ、意味がわかりましたか」

話を現在に戻し、王妃様の声が再び低く、冷気をはらんだようなものと変わった。

何かしらの切り札があることはわかった。

それに、貴族の数の全体で考えれば、僕が学園の中でくつつけたカップルの数なんて微々たるものだろうが、放置したら王家のシナリオに支障が出始めるだろう。

「知らなかった、では済みませんよね」

ダメ元で言ってみたが、王妃様は表情一つ動かさない。

というか、知るわけないじゃないか！こういうことは女に手を出す、出さないより先に言つてよ、パパ上！

あ、これ、詰んだな。

罪の有無ではもう争いようがない。

大義は我にありと確信して、徹底的に追及するつもりか。綺麗な顔して嫌な女だな。

しかし、僕があ乙女ゲー世界について知っていることを言つても証明できないし、

王妃様が強い影響力を持っているこの国にとっては、ラーシエル神聖王国のほうが重要度は高いだろう。

・・・こうなったら損切りラインを変えるしかないか。

「命は助けてください。取れる責任は取ります」

「何を言うかと思つたら命乞いですか。名門貴族の跡取りとして恥ずかしくないのですか」

追及が続くが、僕は椅子から立ち上がり、床に膝をついて頭を下げた。

前世のサラリーマン社会に伝わる最終奥義、土下座というやつだ。

「ちよ、ちよつとギルバート君、急にどうしたの!？」

予想外の僕の行動に、王宮で辣腕を振るう鋼の女も少し揺らいだようだ。

きっとこういうときに、○殺隊の人なら隙の糸が見えた！とかになるのだろう。

僕のやったことは法律や規則に抵触してはないはずだ。前世だったら裁判で白黒付けてやると開き直れたかもしれない。

しかし、この乙女ゲー世界の貴族社会は違う。疑わしきは罰するために毒殺、暗殺、自殺の強要くらいはしても不思議じゃない。

いや、命が助かるだけじゃ不十分か。どこかで一生幽閉、だなんてことになるのも御免こうむりたい。

そして、土下座というのは相手に対して徹底的に屈辱感を与えるものだという側面ばかりが注目されるが、

土下座をされた側は、これにより、ある程度の譲歩を余儀なくされ

るという面もある。

この世界で同じように思ってもらえる保証はないが、国王と公爵の2人の前で行う土下座なら、それなりに意味を持つはずだ。

「すいませんでしたああああ！このままでは妹が王妃になる頃には反乱が起きてしまうと思い、男子生徒達を放っておけなかつたんですううう！

僕に邪な気持ちなんてありません！妹、いやこの国を救いたい一心だったんです！」

もちろん、妹を引き合いに出したのはわざとである。

シスコンな兄が将来を悲観して暴走した、というシナリオで幕引きを図るためだ。

「ギルバート、お前・・・そんなにアンジェのことを」

ナイスアシストです、父上。

「確かに男爵や子爵1人が反乱を起こしたって、たかが知れています。ですが、国境近くを守る彼らが外国と手を結んだら、被害は急速に拡大します！」

あの学園の女子達に領主貴族がこれ以上食い物にされたら、貴族達は財政的に困窮するでしょう！」

そうしたら、ファンオースやラーシエルの工作資金が入り込んでしまう可能性だって高まります！」

むしろ、もう入り込んでるかもしれない。

国力にはかなりの違いがあるはずなのに、前世の妹によると、公国は王都まで攻め込んできて最終決戦になるそうさ。だとすれば、手引きした貴族が相当数いるのだろう。

「だいたい僕が王国に害を加える理由なんてありませんよ！将来的に殿下とアンジェが国を引っ張っていくことになれば、放っておいても公爵家の力は今以上になったはずです」

「そうですか。ですがあなたは、王家の目標を妨げた責任をどう取るのですか」

よし、命まで取られる事態は防げそうさ。

ならば、次は落としどころをどうするかだ。

「廃嫡にしてください」

「レツドグレイブ家はずいぶんと思いい切りがいいですね」

王妃様が静かに煽ってくる。こちらの出方を伺っているのだろう。いくら海千山千の政治舞台を乗り切ってきた王妃様も、いきなりの廃嫡は想像していなかっただろう。

「知らなかったとはいえ、これだけやらかした僕は、王家からしたら、この先、一生危険分子扱いでしょうからね。後は細々と領地内の事務仕事を手伝って、慎ましく静かに余生を過ごしますよ」

「ちよつと待て！命乞いはともかく、公爵家を継ぐ者が軽々しく廃嫡などと口にするな！」

「いいえ、父上。僕は王家のメンツを潰してしまったのでしよう。その落とし前は付けますよ。大事なのは公爵家と王太子殿下の婚約者となったアンジェです」

だが、僕にとって本当に大事なのは、領地で細々と仕事を手伝うことに異議が来なかったこと、

つまり、僕が命の危機にさらされず、衣食住は保証された生涯は送れそうだということだ。

こうなったら僕が将来の国母の兄として、華々しく権勢を振るうなんてことは諦める！

というか、前世が庶民なりローマンの価値観な僕が、政治舞台上で生き残り続けるなんて、自分でも怪しいと思う。

今回のように、思わぬところに掘られた落とし穴に引っ掛かりそう

だ。
前世を考えれば、ほどほどの暮らしを確保して利確したって大負けではない。

欲の皮を突っ張らさせては、妹より先に僕が断罪されてしまう、というか既にもう断罪の一手前だ。

主人公のユリウスルート選択の回避は、裏から手を回せば公爵家の力も温存できるだろう。

「あ、でも対外的に理由もよくわからないまま突然の廃嫡となっては、アンジェにも迷惑でしょうから、数年後に病気で体調不良のため、と

いうことにしてもらえると助かります」

「鮮やかな引き際ですね。あつさりと表舞台から姿を消そうなんて」
「僕はアンジェと公爵家が大事なんですよ。嫡男なんて、家にとつては部品の1つにすぎません。それに、僕を生かしておけば、結婚の面倒を見た領主達は、当面の間は、王国の忠臣となつて尽くしてくれますよ?」

現在の領主、結婚相手を紹介してやった後継ぎ達、さらにその子供達くらいは、僕に感謝してくれるとともに、国境近辺をしつかりと守ってくれるだろう。

公国の侵略から生き延びることができれば、の話だが。

「何やらすつきりした顔を浮かべているところ悪いが、ここから先は公爵家当主の私が話を付ける」

廃嫡するかは基本的に当主の判断だ。

しかし、家とアンジェの将来を考えれば、きっと僕を切り捨てる。

いやはや、貴族社会つてものはなんて恐ろしいんだろうねえ。

せつかく、第二の人生イージーモードだと思つてのんびり生きてたら、悪役令嬢の兄だったことがわかり、運命に抗おうとちよつと動いた一寸先は闇だった。

もしかしたら、これがあの乙女ゲー世界の修正力なのかもしれない。

黙つて感傷に浸っていたのだが、ここでそんな気分を一言でぶち壊す人物がいた。

「じゃあ私はもう帰つていいか?」

今の今まで一言も発しなかつた陛下が心底面倒臭そうに言い放ち、席を立つ。

王妃様は、僕の考えが何かわからないとしきりに言っていたが、この人こそ何を考えているのかわからない。

父の話だと、基本的に政務は王妃様や重臣にぶん投げて、王宮内外で遊びまわっているらしい。僕が言うのもアレだが、この場面でも全く興味ナツシングなのだろうか。

陛下が退出してすぐに僕も屋敷での謹慎を指示され、父の執務室を

追い出されてしまった。

学園の寮ではなく、公爵家の屋敷というあたりが逃亡防止も兼ねているのだろう。

ここで逃亡を図ることもできるかもしれないが、追放される系につきもののチートスキルもないからやめておこう。

ボンボンですらなくなった僕にできることは、サラリーマン時代に培った事務処理くらいなものだ。

その頃、一足早く自室に戻ったホルファート王国国王のローランドは、一人笑みを浮かべてペンを走らせていた。

「無気力なボンボンかと思っていたが、ずいぶんと面白い小僧じゃないか」

王家の計画を進める中で、国を守るための最後の手段となるロストアイテムである王家の船。

しかし、それを自分達は動かすことができなかった。

真実の愛などというものがあれば動くと言われているが、今現在、それを見つけられる見込みはない。

ローランド自身、趣味もかねて、口うるさい領主達の弱みを集めることくらいはしているが、領主達の王国ヘイトを悩ましく思いつつも、自分が汗をかいて解決するつもりもない。

そんなときに起こったのが、公爵家のボンボンによる、大量結婚事件だった。

残酷な真実、王家の計画を知らなかったとはいえ、これまで、このような事件を起こした貴族は誰もいなかった。

もちろん、才覚を買った者を自分の派閥に取り入れるために、結婚相手をあてがう上位貴族はいたが、それは学園の内外を問わず、行われていることだ。

息子の婚約者の兄、という立場なら、ある程度好きに動かせても、ローランド個人にとって損はない。

自分の在位中は反乱鎮圧なんて面倒くさいことに振り回されるのは嫌だった。

潰すのはいつでもできる。利用できるだけ、利用してしまおう。

奇しくも、学園内でギルバートが色々動き始めたのと同じような考え方で、ローランドは企む。

「ミレーヌに潰させるくらいなら、私の役に立つてもらったほうがいいよね」

第5話 社会人1日目の最後にある飲み会は当たり前外れが激しい

ギルバートが王国の残酷な真実を知らされた大説教事件の数週間後、ローランドの執務室に呼び出されていたのはヴィンスであった。座るように促された来客用のソファの前には足の短い長机が配置されており、その上にはクリップでつづられた書類が置かれている。ざっと目を通したところでは、国境付近や辺境と言われるエリアの領主貴族の監査や監視を行う部署の組織改正の概要が記されている。どうやら中間管理職的なポストを幾つか設置して、そこに爵位の高い家の人間を政治的に任用し、反抗的な領主貴族達に圧力をかける目的がうかがえる。

眉間に皺を寄せたヴィンスが口を開いた。

「公爵家の嫡男に辺境のドサ周りをさせるつもりですか」

「お前の息子の話を聞いて、私もこの国を守っていく上で色々と考えさせられてね。色々と監視をしつつ、領主貴族達の弱みなんかも集めていきたいと思ったのさ」

「それならば分家から何人か出させましょう」

「本来ならあり得ないかもしれないことくらいわかっているさ。でも国を憂う熱い若者のために、珍しく私も根回しを頑張ったんだ。きちんと本人の意向を確認してほしいな」

ヴィンスの恨みがましい視線を受けてローランドの口角が吊り上がる。

今まで教育係等から聞かされる報告では特に問題となるところは見受けられなかった息子だと認識していた。

だが、学園に入った頃から、親の鼻屑目で見ても奇行が増えたと思う。

娘が王太子の婚約者となったのだから、本来はその兄にも相応の振る舞いが求められねばならない。

ギルバート本人の目線であれば、学園に入ったから、ではなく、妹

が王太子の婚約者、つまり、破滅の未来を迎える乙女ゲーの悪役令嬢となつてしまったからなのであるが。

「学園を卒業したら息子には領地経営にもっと携わらせる予定なのですがね。追加の教育も必要でしょう」

「お前はこれまで以上に派閥の強化に忙しくなるだろうからな」

「お分かりいただけているようで何よりです」

「だが、色々な家の内情を知ること学べることも多いだろう。私も王国に献身的な若者をサポートしてやるさ」

「息子をこれ以上の傾奇者にする気ですかな」

「私以外には真面目なやつを周りに置くから安心してくれ」

普段は政務を自分達重臣や王妃に丸投げして、王宮内外で遊び惚けている国王だが、残念なこと、無能ではないのが憎々しかった。

おそらく、もう何を言ってもニヤリとした顔から反論が来るのだろう。

元々練られていた腹案だったのか、ギルバートの言っていることからインスピレーションを得たのかはわからないが、これ以上反論しても無駄なのだろうとヴィンスは諦めざるを得なかった。

王妃様大説教事件後、僕は実家の屋敷に軟禁状態となっている。

ちなみに、屋敷に戻ってから、一晩ぶつ通しで父からも改めて説教をくらったときはさすがに泣きそうになったよ。

改めて貴族社会ってよくわからんねと思ったよ。やっぱりベースというか出发点となる価値観が違うというのはかなり大きな課題になりそうだ。

そして、沙汰が出るまでは、せめて学園には通わせてくれと父にお願いしてみたが、即却下され、後日、授業の参加に代わる大量のレポートの提出を命じられてしまった。

実習授業もすべてレポートで代替させるなんてやりすぎだろう。

父上が学園に圧力をかけたのだろうか、これじゃ父上がモンペみたいじゃないか。

とはいえ、甘いですよ、パパ上殿。僕はこういったデスクワークが苦にならないタイプなんです。勉強ができるバカと言われるタイプなんですよ。

ちなみに学園に残して来た連中、というか、僕が結婚相手をあてがった辺境の下級貴族の面々からは、ちよくちよく近況を知らせる手紙が届いていた。

子供ができましたとか、子供ができましたとか、子供ができましたとか、子供が生まれましたとか、子供が生まれましたとか…

お前ら、他にやることないのかよ!!というか、ちゃんと実家は国境沿いで防衛してるんだろぅな!?

あとは、娘が生まれたので15年後に愛人として囲ってください、なんて言ってくる奴もいたな。

冗談だよな?お願いだから冗談だと言って!というか、学園でケモノー令嬢にならないようにちゃんと教育して、どこかの辺境貴族に嫁がせてやって!

そんな生物学的、というか家を重視する貴族という目線で言えば優等生なのかもしれない愉快な連中に突っ込みを心の中で入れながら、机で行う作業はあらかた終わらせた僕は、

お茶を淹れに部屋に来ているメイドの手を取っていた。もちろん貴族出身でないことはリサーチ済みだ。

前世とは比較にならないほど高い顔面偏差値の僕の顔を見ってくるメイドの頬は赤みを帯びている。

「いつも美味しい紅茶をありがとう。月並な言葉かもしれないが、これからも僕に美味しいお茶を入れてほしいな」

「か、からかわないでください若様…それにこんなところを誰かに見られたら…」

「大丈夫、何かあっても生活に困るようなことはさせないさ。だから安心して僕に身を委ねてくれていいんだよ」

メイドに微笑みを向け、優しく頬に掌を添えると、わかりやすく口

をパクパクさせている。

そんな口到人差し指を唇に当てて、プルプルした感触を楽しみながら、もう片方の手を後頭部に回す。

今の心境を前世のアニメ的に言えば、もろたで、○藤!!といったところだろう。

「兄上、今日はすいぶん体調がよろしいようですね」
「!?」

だが、突然聞こえてくる聞き覚えのある声。

音もなく開かれた部屋の扉のところにいるのは現世の僕の妹であり、この乙女ゲー世界の主人公と対立し、

破滅に向かう悪役令嬢の運命を負わされるかもしれない少女が僕を呆れたような目で見ている。

「し、失礼します!」

「あつちよつと待って…せつかくもう少しでいいところだったのに。アンジェ、人の部屋に入る前にはノックをしないとだめだよ? 18禁いや、事故が起きたらどうするんだ」

「事故を未然に防げてなによりでした。それに、兄上は体調不良で返事ができないかもしれないから、ノックをしなくていいとコーデリアが言っていましたし、父上の許可も取っています」

両手を腰に当て、エツヘン!という単語が浮かびそうなくらい胸を張って妹が断言する。

というか、兄の情事未遂を見ても呆れる表情を浮かべるだけとは、王妃教育の賜物だろうか。

対外的に僕は長期間の体調不良ということになっていくらしく、王妃教育などがない日にはちよくちよく僕の様子を見に来るようになっていた。

悪役令嬢なんて言われるようだが、僕から見れば高い向上心を持って一生懸命に教育を受けて、未来の王妃になれるよう頑張る可愛い妹だ。

それに、学園に入学してから顔を合わせる機会が激減していたが、この謹慎生活が始まってからは会話も増えた。

頻繁に体調不良（扱い）の僕の様子を見に来るあたり、人としての優しさも備えているのだろう。

前世の価値観というものが強く残る僕からすれば、まだ遊びまわっていたいだろう年頃の女の子だ。

それなのに、王太子の婚約者として研鑽を絶やさないと今世の妹には、努力が報われて、幸せになってほしい。

僕自身の身の安全が第一なのはまだ変わらないけど…あれ？もしかして僕ってシスコンに目覚め始めてる？いや、謹慎生活に突入する前と比べて、家族のことを考える時間が増えただけだよな、きつと。

だから飴玉をあげよう。こっちにおいで。

「私もいるぞ」

「父上!？」

自分の価値観に変化の兆しが見えてきたのかと考えているところに、扉の死角から父が顔を出す。

その手には何枚かの書類があった。僕へのお沙汰が決まったのかもしれない。

「お前に大事な話がある。アンジエ、少し外してくれるか」

「わかりました、父上。では兄上、おとなしく療養してくださいね」

「わかったよ、アンジエは王妃教育を頑張るんだよ」

「もちろんです！兄上に言われるまでもありません！」

気の強さは相変わらずのようだ。今度は頬を膨らませて答える妹が可愛らしい。

手を振ってアンジエを送り出したところで父が口を開いた。

「このシスコンめ。妹可愛さで奇行に走ったと思われているのをわかってるのか」

「国のためです、父上。王宮の暇人連中の噂話なんて真に受けなくてください」

「その王宮が、学園卒業後のお前の就職先だぞ」

え…領地で軟禁とかじゃないの？

何やら不満顔な父が、時折手元の資料を見ながら僕の卒業後のことを説明してくれた。

陛下の意向により、廃嫡にはならず、王宮で役人になるらしい。しかも、年間の半分以上は王都にいられず、監査や調査を国境付近の貴族相手に行うのだという。

事実上の地方への左遷、島流しのようなものだろう。

だが、学園でさんざん見てきた王国ヘイトを募らせた領主貴族達の様子を、公務という大義名分の下にチェックできるといのは、

あの乙女ゲー世界の戦争パートや、ゲームのシナリオ後のこの国で生きていかなければならない僕には好都合だ。

「やはり嫌がる素振りすら見せないか」

「陛下達の御前で私が申しあげたことを汲んでくださったのでしょう？ならば異論なんてありません」

「嬉しいですと顔に書いてるようだがな」

結局、卒業まで数ヶ月を残し、僕は王宮へと就職することになった。

今世の社会人1日目は、同じく王宮に向かう父の馬車に同乗してのものだった。

前世と合わせればアラフォーなのに、パパ上と同じ車で出勤とか少し、いやだしぶ恥ずかしい。王宮に到着後、出迎えの役人に促され、配属先の部署まで案内された。

役人が開けてくれた扉の先にいたのは、華美過ぎないながらも、質の高そうな服を纏い、気品に満ちた振る舞いをする男性であった。

丸みを帯びた輪郭と体型と合わせて、いかにも上級貴族という雰囲気漂わせている。

「ご無沙汰しております、バーナード大臣」

「ああ、久しぶりだね、ギルバート君。君が配属されると聞いたときは驚いたよ」

僕を待っていた男性は、宮廷貴族アトリー家の伯爵にして、大臣を務める王国の重臣であるバーナード大臣であった。

王宮内では、中立的な立ち位置をしており、文官達に強い影響力を有している。

父とは違う派閥であるが、悪い関係ではなく、若干ではあるが僕も面識がある。

そして、あの乙女ゲーの攻略対象の1人の婚約者の父だったはずだ。

「僕もここでお会いできるとは思いませんでした」

「陛下から人手が足りないからこっちも統括しろと言われたのさ。色々聞いているよ、大変だったようだね」

「雷を落とされてしまいました」

この反応からすると、この人も残酷な真実を知っているのだろう。僕としては苦い記憶なので、この話題は早めに切り替えたいところだ。

「そういえば、お嬢さんの婚約が決まったそうですね、おめでとうございます」

「耳が早いね」

「殿下の乳兄弟殿と縁をつなぐとは、アトリー家の将来は安泰ですね」
「レッドグレイブ家がそれを言うのは嫌味というものだよ」

あの乙女ゲー世界の運命を知らなければ、きっと誰もがそう思うのだろうな。

僕としては、主人公がユリウスルート以外であればいいのだが、では、どのルートを取ってもらうかを考えたときに真っ先に上がる選択肢が、この大臣の御令嬢の婚約者である攻略対象だ。

たしか、ジルクとかいう名前の緑色の髪のキャラだったはず。

キャラごとの難易度はよく知らないが、実家の爵位が攻略対象の中で一番低かったのは覚えている。

いざとなったら、僕の愉快的仲間達の中の家のどこかと、平民の主人公を養子縁組させた上でくつつければ、ゲームクリアになって、妹はハッピーエンドだ。

上司の娘の婚約を破棄させようだなんて、客観的に見れば僕はなかなかの屑だね。

「じゃあ早速だがガイドダンスを始めようか」

「え！大臣自らですか」

「私としても、公爵家には相応の礼を尽くしておきたいからね」

「アリバイ作りのように聞こえますね」

「未来の公爵である君の相手を、いきなり役人達にさせたら、私は彼らから恨まれてしまうよ」

「偉いのは父であって、僕は王家に睨まれた単なるボンボン息子なんですよけどね」

「実家の力を自分の力と錯覚して振る舞うのは愚かだが、謙虚なように見えて、自分の家の影響力の強さを自覚していないのも愚かだよ。正直に言ってしまうえば役人達はそういうのを嫌がる」

痛いところを突かれてしまった。返す言葉もない。

だが、前世の社畜時代を思い返してみれば、言われたことに納得もできる。

重役の息子がコネ入社してきて、父親と一緒に出勤してきて、慎ましやかなことを言ったって、真に受ける会社員なんているだろうか。

上級国民なんて言葉も流行っていた前世だったが、今世はガチの身分社会だ。

自然と前世の価値観で考えて行動したことが、白い目で見られてしまうことが相変わらず多いな。

「君が、国のために思って領主貴族達をどうにかしたいと本当に思っているのか、私にはわからない。だが、王宮でそれを実現するためには、役人達とうまくやっていくことが必須だ」

「多くの文官達を束ねるアトリー家の方の言葉は心に刺さります」

「陛下からは、追って役職を付けるが最初は下の方から仕事を覚えさせるように言われている。サポートは付けるから、まずは周りとうまくやっていってほしい」

実家の格その他諸々を考えて早めに役職に就けて責任を押し付けようという算段だろうか。

少し違うかもしれないが、前世の刑事ドラマに出てくるキャリア組っぽい扱いか。

適宜休憩と説明者の変更を挟み、各種レクチャーが終わったのは、夕方から夜に差し掛かろうとする頃合いだった。

「覚えてもらうことはまだあるが、残りは実践の中で随時教えていくよ」

「長い時間、ありがとうございました」

「他のスタッフとの顔合わせは明日以降にするから今日は帰ってもらってかまわ・・・」

「ようバーナード。ボンボンへの説明は終わったか？」

大臣の言葉を遮って乱入してきた声。

僕だけでなく、大臣の表情が強張った。

声の主は、僕をこの部署に配置するように動き回った張本人であるこの国の王、ローランド陛下である。

謁見や執務中とは異なり、上品ながらもカジユアルな服装をしているが、服の上からでもしっかりと体が相応に鍛えられているのがわかる。

前世の言葉を借りるのであれば、イケてるダンディなオッサンとも言うべきか。

「ええ、先ほど終わったところです」

「ちようどいいな、おいボンボン。これから街に繰り出すから一緒に来い。王宮への歓迎会をしてやろう」

うーん、父上から聞いていた限り、陛下の素行はあまりよろしくない。

普段から仕事を重臣達にぶん投げているせいか、被害者となっている父のヘイトはけっこう高まっている。

しかも相手は一国の王。ある意味、執行猶予中な僕が同行して何か失礼があつてはまずいのだが、

その誘いを無碍に断ってしまつては別の意味で無礼になつてしまふかもしれない。

さて、どうするべきか。

「ヴェインスのことは気にするな。ツラが整つたお前がいたほうが宴が盛り上がる」

「僕の歓迎会なのでは？」

「そんなもん、名目に決まっているだろうが。お前がいないと、相手の女性陣と人数が合わないんだ、早く来い」

それ、単なる合コンの数合わせじゃねーか！

いくら陛下の女癖が悪いからって、まさか、合コンに連れていかれるとは思わなかったよ！

だが、陛下の誘いであつても学園にいたようなケモナー女どもと飲み会つてのは嫌だなあ。

いや、地雷女の処理をするのは下っ端の役割だが・・・

「安心しろ、お相手は私達の素性を知らない市井のお嬢さん達だ」

「かしこまりました。陛下のお供をしつかりと務めさせていただきます！・・・ん？まさか私の好みをご存じということですか」

「魑魅魍魎の住処である王宮で、好き勝手に振る舞い続ける私の情報網を甘く見るなよ？」

物凄いドヤ顔でとんでもないこと言つてのけてるよ、この人！

というか、好き勝手やつてる自覚はちゃんとあるんだね！

それだけの力があるのに、外国出身の王妃に実権握らせてないであなたが仕事してくれば父の苦労だって緩和されるだろうに・・・

いや、でも僕がこれから、やりたいことをできるようになったのは、この人のおかげであることも確かだしな。

ひとまず、父に怒られない範囲で、この方の女遊びに付き合うことにしよう。

そう、これは自分のためじゃない。この国のトップから言われたことだからだ！

ちなみに、後日、王宮内ですれ違った王妃様から、汚物を見るような目で睨みつけられてしまった。

僕に怒るのは筋違いじゃない!?

第6話 心の隙間にご用心

ホルファート王国の大臣バーナード・ファイ・ラトリーは自室で書類を眺めながら考えていた。

そこには、部下から上がってきた、ギルバートの働きぶりに関する報告が書かれている。

配属の話を国王から最初に聞かされたときは厄介なものを押し付けられたと思った。いや、厄介なものだという印象は今も続いている部分がある。

在学中は無気力な学生生活を送っていたかと思いきや、妹が王太子の婚約者となった時期を境に、突然、辺境の下級貴族に結婚の世話を始めたのだという。

その後、王妃の逆鱗に触れたかと思いきや、国王の暗躍により、今度は辺境を監視する部署に配属となったのは、彼自身を王宮の近くで監視する意味があつたのかもしれない。

とはいえ、ちよくちよく国王自身が夜遊びのお供に連れ回しており、新しい玩具扱いでもあるのだろう。

バーナードにとって僥倖だったのは、ギルバートから定期的に国王の女性関係の詳細な報告が上がってくるようになったことだ。情報の質も悪くない。

父であるレッドグレイブ公爵からの指示があつてやっていることについてで恩恵を受けているだけかもしれないが、自分に大きなメリットがあることも確かだ。

これまでは、嫌々夜遊びの付き合いをしたり、各方面への聞き取りをするために、時間も人的リソースも割かざるを得なかっただけでなく、時には炎上に繋がる恐れのある火遊びの後始末をしてきた。

そのころに比べれば、王宮外の女性関係の管理の負担は軽くなっている。

また、レポートには、貴族出身ではない、役人達の中に上手く溶け込みだしている、むしろ溶け込みすぎていることが書いてある。

仕事の成果が際立って優秀というわけではないのだが、役人達に溶

け込む速度は異常に思える。

大物貴族の跡取り息子だ。学園でも周りにいたのは彼を立てる者ばかりだったはず。

きつと役人氣質の文官達に馴染まず、不貞腐れるか、開き直って実家の力を背景に文官達を屈服させようとするか、いずれにしても仕事は上手く進められないだろうと思っていた。

だが、蓋を開けてみれば、この通りだ。まるで、役人達の心の隙間に入り込む不定形の粘性モンスターのようだ。

自分の子飼いの役人達をたぶらかしていくような行動には不快感もある。

「レッドグレイブの奇行種というのもあながち間違っていないから困る・・・」

さて、今日も僕は役人仕事に勤しんでいる。今世では超が付くほどの上級国民になったはずなのに、就職して働き始めたら、前世の社畜感覚がすぐに戻ってきたのはありがたくも悲しい。

だって肉体が異なっても、社畜っぷりが魂に刻まれてるってことだからね！

職場で机を並べる仲間達は、前世で言えば公務員というカテゴリになる。

前世の記憶にある公務員とえば、まず脳内に浮かぶのは、市役所の窓口とか、まれに会社に監査に来る所管省庁とか税務署あたりだ。

共通していた印象は、程度の差こそあれ、外部の人間に対する排外的な態度だが、いざ内部の人間となってみると、体育会系な仲間意識を持っていた。

個人的な推測だが、彼らも、普通クラスだろうが、あのケモナー学園のOBだ。あの学園の男子生徒が受ける厳しい実習を耐え抜いてきたのだから、

ある種の部活動的な連帯感というか、体育会系っぽい気質が備わっているのだろう。

なので、働き始めてまず心がけたのは、体育会系人間達（個人的見解）が大好きな長時間労働、深夜残業を進んでやるようにした。

最初の頃は物凄く遠回しにヒソヒソとさされていた時期もあったが、深夜で周りの同僚の人数が減ってくると話しかけてくれたりする人が増えてきた。

前世では前時代的仕事論になりつつある働き方だが、今世ではいまだに現役バリバリらしい。

人が少なくなった社内で、総務、経理、営業の下っ端仲間達と時折差し入れを持ち込みあいながら、真夜中の残業に精を出していた頃が自然に思い出されるね。

だが、今日は少し事情が異なったようだ。

「ギルバート様、たまには早く帰ってください」

「職場ですし、今は僕も一人の文官です。今は役職もないので、様はやめてください、先輩」

今日も今日とて、体が残業モードに入っていたところに、同僚の文官の一人が声をかけてきた。

おそらく内容から察するに、何人かの意見を集約してきたのだろうね。

コネ入社 of 若者の対応を押し付けられたのはお気の毒様でござる。

「我々も、あなたが我々を見下さずに仕事をしてくれていることはわかってますよ。ですが、他の部署の貴族様方から色々と言われてしまふんです」

「おや、じゃあパパ上の執務室に行つて、人を殺せそうな睨みつけをしでもらうよう頼んで来ますんで、どこの家か教えてください」

「それって絶対に楽しんでますよね!?!」

「いやいや、仲間に害を加える人間は敵です。貴族なら、やられたらやり返さない」と

サムズアップしながら、実家の権威をひけらかしてみたのだが、きつと顔がニヤついていたんだろう。

だが、先輩の思うところは、実際には別にあつたようだ。

「王宮で働きだして慣れてきた頃のほうが、油断して体を壊してしまふ危険があるんです。そうなるとう我々や中間管理職の立場がないので帰ってください」

ツンデレか！役所風なツンデレなのか!?

勘違いしないでよね！私の保身のために、帰って休んでほしいだけなんだからね！って感じか！

確かに前世においても、新入社員には、ゴールデンウィークで気が緩んで、心身に不調を来たす者が多かったな。

中身はアラフォーな社畜さんなので、これでも自分なりに息抜きしてるから、気にしないでくださいと言うわけにもいかないか。仕方ない、今日は退社・・・いや退庁することにしよう。

というわけで荷物をまとめて、お迎えの馬車の待機場所に向かつていると、夕暮れ時の王宮の通路の前方を歩く一人の男が目に入った。頭はうな垂れており、背中は丸まっている。緑色の長髪も、なんだか艶がない。

後ろ姿を見ただけで、落ち込んでいるか、悩んでいるかのどちらかだろうとすぐにわかる。

そして、この男こそが、あの乙女ゲーの攻略対象の1人であるジルクであつた。

宮廷貴族の子爵家出身で、僕の妹の婚約者の乳兄弟殿であり、攻略対象達の中では階級が低いが、将来性は非常に高いであろう設定だ。

さらに、僕の上司であるバーナード大臣の娘の婚約者でもある。一言で言えば、勝ち組になるのが約束されたような男だろう。

というか、最初に乳兄弟なんて言葉を聞いたときは、前世の価値観のウエイトが今よりずっと大きかったから、意味が分からなかったね。卑猥な意味かと思つてしまった。

さて、そんなジルクであるが、広い意味では妹の関係者とも言えるので、現時点でも軽く面識くらいはある。

普段なら、わざわざ話しかけることはしないのだが、将来有望な若者が何か悩みを抱えていそうな雰囲気をしているのを見ると、探りの

1つでも入れたくなくなるのが人情だ。

「マーモリア家のご令息殿じゃないですか。お久しぶりです」

「ご無沙汰しております。シルクで構いませんよ、未来の公爵殿」

「なら僕もギルバートでいいさ。今の僕は、実家がでかいだけの、王宮に生息する木っ端役人の1人だよ」

今になって大変なことに気付いた。

攻略対象な貴公子の1人だから、顔面偏差値がすごく高いことは認識していたが、こいつ、声がゲーム通りだ。

声だけ聴いてると、変化する犬を連れてたり、可変型の髑髏マーク付きガ○ダムに乗ってたり、他人の卍○の霊圧を分析して無効化してきそうだな。

イケボ偏差値まで高すぎかよ。ってイケボ偏差値って何なんだ。

「ところでわざわざお声がけいただいたのはどのようなご用向きですか」

「後ろ姿を見ただけで、ずいぶんと悩んでいるように見えたのでね」

「そんな大層なものではありませんよ、悩みのない人なんていればお目にかかりたいですね」

「まあそう言うなよ。若者の悩みを聞くのは年長者の仕事さ」

「ですが、今日はもう時間も遅いですし・・・」

「そうだね。僕も空腹だ、ちようどいい、食事でもしながら話をしよう」

そうやって、僕はシルクをやや強引に実家の馬車に押し込んで、目的地向かう。

向こうの心境を想像するに、大物貴族の、素行のよろしくないボン息子に連行されて、これからどうなるんだろうという不安が大きいのだろう。

現に、揺れる馬車の中では、緊張する面持ちで外を眺めている。そして、シルクが次に口を開いたのは、目的地の店の個室に通されてからであった。

「あの・・・ここで食事ですか」

「そうだよ、お勧めは、この店のママお手製、ベーコンたっぷりのポテ

トサラダだね」

「いや、この店・・・あの、女性とお酒が出る店ですよね!？」

明らかに挙動がテンパリ始めた攻略対象殿がなかなか可愛いね。そう。確かにここは、前世で言えば高級クラブのような店の個室である。

ちなみに調べてみたところ、繁華街の近隣にはキャバクラのような業態もあった。

乙女ゲー世界に何故そんなものが、とも思ったが、開発元は男性用ゲームを開発していた会社だった気がするから、きつとメーカーの遊び心だったんだ、と勝手に納得するようにしている。

「安心してくれ。ここは密談する貴族の御用達の店だ。店員もみんな、基本的に口の堅い女性ばかりだから」

「そ、そうなんですか・・・でもこんな店・・・」

さすがの貴公子殿も戸惑いを隠せないようだ。

クールぶりながらも、そわそわしながら店内を眺めているようだ。そうだよ、緊張するよな。

僕だって前世の学生の頃に、就職した先輩に高級キャバに連れて行ってもらったときは同じような状態になっていたよ。

浮かれてテンション爆上げヤッホーということができるキャラでなければ、普段の冷静ぶった状態にいかに戻すかを考えてしまうよな。

店員の女性が手早くドリンクを置き、空気を察して部屋から出ていくと、グラスを手に取り話を促していく。

「料理はおいおい届く。楽しんでくれていいぞ」

「楽にと言われましても、どうすればいいものなのか・・・」

「なら、君の表情が冴えなかった理由を聞かせてくれよ。大丈夫、王宮とは違う。誰も聞き耳を立てたりなんてしていない」

「そ、それはそうでしょうね・・・」

シルクの目が個室を再び泳ぎ始めた。

ここで話していいのか、そもそも話していいトピックなのか、目の前の男は話をするに足る人物なのか等を考えているのだろう。

「君には将来、殿下とアンジエを支えてもらわなければならない。僕が手を差し伸べるのは、その御礼の先払いだ。気にせず、というのは難しいかもしれないが、これでも君よりは長く生きてるんだ、それなりに力になれると思うよ」

「これは、私の友人の話なのですが・・・」

おい、急に雑な予防線を張ってきたな。悩み相談で友人の話ってのは自分の話であることとイコールだぞ。

「友人には婚約者がいるのですが、ちよつと、その・・・重いんです」「重いというのは具体的にはどんなことがあつたのかな」

「ある日、店先でとある新製品を1人で眺めていたのですが、翌日にその新製品をクラ・・・友人の婚約者が彼の家に届けに来たんですよ」
「それも、衣服とか刀剣や銃じゃないんです、エアバイクですよ、エアバイク！しかも、同じようなことは2度、3度どころじゃないんです！」

「何それ、怖！しかも重い・・・それは、引くわ。いや、ごめん、ドン引きだ」

っていうか、今、クラリスって言おうとしたよな。お前の婚約者のクラリス嬢のことだよな。

だが、いくらなんでも新型のエアバイクっていくらすると思ってるんだ。そりや大臣の娘なら、お金はあるんだろうけど、おいそれとプレゼントできる額ではないだろう。

前世で言えば、ホストに入れ込んで親の金を推しに注ぎ込むお嬢さんのようなものか。

重すぎる愛情表現にドン引きしている僕だが、そんな様子を見たジルクの表情が明るくなってきた。

「ですよね！重いですよね！きつと貴方ならそう言ってくれると思いますました!!」

「おい、貴方ならってどういうことだよ・・・」

「あ、それはその・・・」

「わかりやすく目を逸らしたな。怒らないから言ってみな」

「本当に怒りませんか。僕が言っていることでないことは間違いない

のですが・・・」

「ああ、どうせ王宮内の噂だろう。どんな風に言われてるんだ、僕は」
「はい、人づてに聞いたのですが、在学中には辺境出身の貴族を連れ回して酒池肉林の宴に耽り、寄ってくる令嬢達を獣臭いと罵倒する一方で、逆に騎士階級から平民に対しては無差別に種を撒き、

その振る舞いが騎士にふさわしくないと王宮の逆鱗に触れたために、辺境のドサ周りをすることになったのだと・・・」

改めて聞くと酷いな、僕の噂。しかも、困ったことに半分くらいは合っているから困る。

だが間違いなく言えることは、僕は貴族童○だ！貴族家の女性と関係を持つてしまったら責任を取らなければならない、という父の教えをしつかり守ってるぞ。

それに、騎士階級や平民の女性を相手に種を撒いても発芽はしてないからな!!たぶん。

たいていは相手は実家のメイドだけど、手を出してすぐ、又はもう少しで手を付けられるところというところか配置換えだったり、辞めさせられたり、どこかに嫁いってしまったりなんだ！

きつとあの腹黒陰険メイドがパパ上に情報をリークしているに違いない！

つい熱くなっちゃった。ひとまず、話をジルクに戻そう。

「根も葉もない噂ばかりだね。僕は辺境の貴族達が、王国、ひいては殿下やアンジエを脅かさないように一生懸命働いているだけだということに」

「それだったら、辺境の貴族から側室を何人が娶り、その辺りを軸に監視するという手もあるのでは？しかも手を出しても問題になりにくい身分を狙い撃ちしているように見えますよ」

この男、攻略対象の1人だけあつて頭が悪い訳ではないようだ。微妙に痛いところを突いてくる。

仕方ないだろう、辺境出身の令嬢はケモナーばかりだったんだから。

「たまたま、いい相手が見つからなくてね。アンジエの婚約が決まっ

たばかりで下手に動きたくなかったという事情もあったんだよ」

「でも騎士階級や平民の女性に手を出す理由にはならないですよ」

「何を言ってるんだい？僕は彼女たちが素晴らしい女性だったから、身分に関係なく親しくなったんだよ。人としての彼女たちを愛していたと言ってくれ。まあ、身分というか、価値観が原因で失敗したことはあったけどね」

「価値観、ですか？」

よし、うまく話を逸らせたぞ！思ったよりも僕の話に食いついてきたときはどうしようかと思っただが、ここから軌道修正を図つていこう。

「貴族間だったら普通にやるように、お高いドレスや宝飾品を送ったら気味悪がられてしまったんだよ、君の友人みたいだね」

「友人は貴族家出身ですが・・・」

「大事なのはそこじゃない。相手が何を好きなのか、何をすれば喜んでくれるのか、そういった価値観というか、相手の人間性を理解しろつて言ってるんだよ。お前が気味悪がっているのは、きつとそこだ」

「そうですね。なにせ、いきなりエアバイクですからね」

「愛なんて人それぞれ形は違うんだろし、君の友人の婚約者自身は深い愛情を持っているんだろう。それでも自分の気持ちをつけるばかりなのは愛と言っているものか、個人的には疑問だ」

このセリフは我ながら、けっこうリスキーかもしれない。

上司の娘の行動が、愛なんかじゃないと言っているようなものだからね。

とはいえ、あくまで“友人”の話なんだから、ここまで来たら、ジルクとクラリス嬢の間に楔の一つでも撃ち込んでおきたい。

「少なくとも、君の友人は、気持ちの押し付けを愛だとは感じていないから、悩んでいるんだろう。それが価値観の違いなんだ」

「受け入れられなくても器が小さいことにはならないのでしょうか」

そうか、王太子の乳兄弟として、大きい人間でなければならぬ、というような思いがあったのか。

たしかに、将来的には、この男には清濁を併せ飲む器に育ってもらわなければならない。

だが、現時点で器が割れてしまつては元も子もない。それゆえ、僕がかかるべき言葉は、現時点の状態を正当化するフレーズだろう。

ついでに、学園で主人公を選んで、クラリス嬢との婚約を破棄するための言い訳を心の中に仕込めれば上々だ。

「プレゼントをもらつて、思い悩むということは、君の友人が考える愛というのは、少なくとも金額的な価値以外のところにある証拠だ。人として恥ずかしいことではないさ」

「人として、というのはずるい言い方ですね」

「あと、家の間で結ばれた合意を簡単にどうにかできるものではないから、今の関係を受け止めきれないなら、受ける側を強化するという考え方もある。器の側を大きくすればいい」

「ずいぶんと簡単に言いますが、実際にどうしろと言うのですか」
「そりゃ簡単さ。色々な女性との経験を積んで自分の側のキャパシティを大きくするんだよ。多くの愛の形を知つて受ける側に余裕があれば、自分の心の中で、その1つ1つを、そういう愛もある、と相対化できる」

「さりげなくご自分を正当化するのがお上手ですね。ですが、理屈としてはありかもしませんね」

「将来有望な男がここで潰れてしまうのは王国の損失だ。君だつて、殿下のお供をしたり、エアバイクのレースに出たりする中で人と出会う機会が多いはずだ。他にも君に経験を積ませてくれる人はいるかもしれないよ」

そう言つて僕はこの個室の入口の扉のほうを見た。僕の勘が正しければ、そろそろだろう。

ジルクはというと、何が起るのかがさっぱりわからず、戸惑つている。

襟元や服の乱れを直していると、バタバタとした足音が部屋に近付いてきて、扉が乱暴に開かれた。

1人の男がニヤニヤとした笑みを浮かべて入ってくる。

「ようボンボン！何やらコソコソやってると聞いたから邪魔しにきたぞ！ん、何だ、ジルクじゃないか。珍しい組み合わせだな」

やはり来たか。素早く立ち上がり、頭を下げる。僕のことを大声でボンボンと呼ぶのはこの国でも1人だけ、この国の統治機構の王であり、貴族から平民までありとあらゆる身分の女性への愛を振りまく夜の帝王でもあるローランド陛下だけだ。

この展開は予想できていたので、僕は驚かない。店の誰かが、僕が個室をオーダーしたことを連絡し、女性との密会に使っていると勘違いして、遊び半分に戻り込んできたのだろう。

一方のジルクは、わかりやすいくらいに慌てている。そりやそうだよな、一国の王と夜の店で出会うなんて予想できる人間なんて、僕みたいな夜遊び要員や

女性関係を管理させられているバーナード大臣やうちの父、その他重臣達くらいだろう。

「陛下、どうしてこんなところに・・・いえ、お見苦しいところを申し訳ございません！」

「そのボンボンが珍しくこの店の個室に入ったと連絡が来てな。それと、ここでの私はイケてるナイスミドルなランドさんだ、覚えておけ」

まるで通りすがりの仮面ライダーみたいな言い方だな。あらゆる世界をまたにかける、いやあらゆる女性の股を狙うという意味ではそんなに違ってもないか。

そんな陛下のドヤ顔を横目に、ジルクが僕に冷たい目線を送ってくる。

言いたい台詞はなんとなくわかる。さっき、スタッフの口が堅いと言ったのに、顧客の話がすぐに伝わっていたのだからね。

「口が堅いのは本当だよ、だが、この国のルールはこの方御自身だ。そこだけは諦めたほうがいい」

「ところで、お前達2人で何をしていたんだ？珍しい組み合わせだが・・・」

「実は彼の“ご友人”が愛について悩んでいると聞いておりました。

愛には様々な形があるという話をしておりました」

「ほほう！友人か！わかった、じゃあ悩める国民の話を私も聞こうじゃないか！」

僕が言いたかった意味を察してくれたらしい。さすが陛下！でも酒を飲ませたら駄目ですからね！

他人の弱みを握ったり、嫌がらせをするときの陛下の能力はこの国でもトップクラスだと思っている。

手早く店のスタッフに飲み物やアテンドする女性の手配を自ら行ってしまう陛下の脇で、引き続き冷たい視線を向けてくるジルクの肩に手を乗せた。

「君が自分を納得させるための言い訳を提供しよう。君は殿下が王位を継いだ時に備えて、現王である陛下の異性関係を把握しようとしているだけだ。これは、乳兄弟殿にとって重要な役割なんだよ、いや君にしかできないんだ。そんな中で君は色々な経験を積みばいいんだよ、色々よね」

サムズアップしながら、満面のスマイルを向けて言ってみた。

間もなくドンチャン騒ぎがスタートして、陛下の指示を受けた女性陣がジルクを可愛がり始める。

最初のほうこそ、余裕のある男です感を出そうとしていたが、そんなものは海千山千のプロの女性陣には通用しない。1時間もすれば、陛下と一緒にになってその場を楽しんでおり、その姿は年相応に可愛い青少年だ。

夜の店を楽しむ青少年が風紀上適切かは議論があるだろうけどな！
まあ思ったよりも早くこの店を楽しみ始めたのは若干チヨロいと感じてしまうね。貴公子としてのガードもプロの女性には通じないんだろう。

だが、この先、そんなプロのスキルをもった令嬢なんて学園にはいないんだろうから、主人公様と出会うまでにできるだけクラリスさんとの心の距離が離れていくことを願うとしよう。

世話になってる上司の娘の婚約が拗れることを願うなんて、我なが

ら相変わらず屑ムーブが酷いけど、妹や僕自身のためだ。大臣の娘なら、ジルクよりもっといい相手を見つけれよね!?

第7話 手遅れな人つて案外幸せそう

ジルクを夜のお店に連れて行ってどんちゃん騒ぎをした日から数ヶ月が経った頃、そろそろランチタイムという時間帯に、大臣の執務室に呼ばれた。

「突然に呼び出してすまなかつたね」

「上司の呼び出しに駆け付けるのは部下の使命のようなものです」

無駄にイケメンスマイルを放ちながら、軽く頭を下げるのだが、果たしてどのような用件なのだろうか。

ひとまず心当たりがあるところを片っ端から上げていこう。

「前回の監査の報告書でしょうか。草案にフランプトン侯爵の派閥が横やりを入れてきました。先に陛下に伝えて、後は上から話を下ろしていく形で進めてよろしいですか」

「わかった。同じようなことを繰り返してくるなら報告してくれ、あそこは行儀のよくない寄子が多いから、文官衆にも注意喚起しておくように」

「かしこまりました。次は“森”の連中ですが、まだ尻尾をつかめずにいます。表面上は上手く取り繕っているのがやっかいですね。いつそのこと法規違反以外の側面からアプローチしたほうが早そうです」

「そうだね。この件も合わせて君から陛下に伝えておいてくれ。他人が嫌がることをルールの枠内でやることにかけては、あの方の右に出る者は少ないよ」

呆れ顔を浮かべながら語られる、我が国の陛下に関する大臣の認識が酷いの一言に尽きる。

ただ、全くもつてそのとおり。そのせいで困っている人が多い。父とか、バーナード大臣とか、王妃様とか。

仕事から夜遊びまで世話になっている僕が言うのは恩知らずかも知れないが。

ちなみに、ここまで話をしても、大臣の表情を見る限り、用事が終わったようには見受けられない。うくん、何を聞きたいのだろうか。

「来年度の予算獲りに向けた折衝ですが、まだ財務セクションから指針や単価の提示がなく、資料作成が止まっています。担当ラインの中に当家の縁者がいるので、そこから探りを入れようと思います」
「いや、それは私の派閥で動こう。君には悪いが、公爵家に必要以上に借りを作るのは避けたい」

「失礼しました。あとは・・・陛下の新しい女性関係ですか？お手付き済みか否かでまだ確証を得られていません。もう少し裏取りの時間をいただきたいのですが」

「君はよく働くね！仕事大好き人間なのか!？」

「どうやら用件はこれでもないらしい。」

となると、本当に用件はジルク絡みなんだろうか。それだとこっちから切り出すのも気が引ける、というか切り出すなんてできない。

そんなことを思っていると、ここで背後から声をかけられた。

「すみません、私がお聞きしたいことがあって呼びました。お忙しいところ申し訳ございません」

声が聞こえたほうを見ると、部屋の入口から執務机までの動線から死角になっている場所に置かれたソファに一人の女性が座っている。

肩の先まで伸びた、艶のあるオレンジ色の髪に、モデルのようなボンキョツボンなフォルムをした、いかにもいいとこの令嬢、といった雰囲気纏っている。

大臣の部屋に我が物顔で居座っている、役人でも女給でもないこの女性は、アトリー家の令嬢、つまり、大臣の娘であり、先日、夜遊びデビューさせた攻略対象のジルクの婚約者だ。

「これはアトリー家の御令嬢殿。お目にかかるのは久しぶりですが、ずいぶんと美しくなれましたね」

「クラリスでかまいませんよ。それにしても、令嬢嫌いとか名高いギルバート様にそう言ってもらえるとお世辞でも嬉しいものですね」

驚いた。まさかジルクの婚約者本人が直接殴り込んでくるとは。

大方、婚約者が夜遊びに目覚めた原因に文句の一つでも言いたかったのだろうが、そのきっかけを何故知っているのか。

それに、その原因となる僕は、大臣の部下なんだから、令嬢自らが出張ってくることもあるまいと思っていた。

ジルクの話の疑っていたわけではないが、どうやら相当ご執心が強いらしい。

「女性の美しさというのは、内面も含めてのものという信仰を持っているものでして。あの学園での生活で学んだことです。クラリス殿には関係ないでしょうが、お気を付けてください」

「なるほど、だから学園の外でご活躍されているんですね」

「このお嬢ちゃん、柔らかな笑顔を浮かべながら、割とチクチク刺してくるな。」

「女性の価値に身分は関係ない、というのが我々の偉大な陛下の教えですので」

「あら、ずるい言い方をされるんですね」

「身に余るものもございしますが、良くしていただいております。ところで、本日はどのようなご用件で？」

お貴族様ごっこが続く。面倒くさいんだよな、こういう微かな嫌味のぶつけ合い。

だが、

「単刀直入に申し上げますね。私の婚約者のジルクなのですが、ギルバート様と食事に出掛けた頃から、色々と行動が派手になってしまったんです。それに、ギルバート様も、陛下とご一緒に彼を何度か連れ出していますよね」

さて、どこから突っ込んでいくべきか。

なぜ僕とジルクが食事に行ったこと、しかも陛下も含めてサタデーナイトでパーティーしたことを知っているのだろうか。一応はこっそり出掛けたはずなのだが。

まあ気持ち悪いほどにジルクの行動をチェックして、欲しいものを先回りしてプレゼントするくらいだから、監視くらいはしてるんだろう。

婚約してるくらいで、四六時中、相手の行動を監視するなんて、重いよね。

「というか、これ、もうストーカーだよね!?この世界にもストーカーっていたのか・・・」

つまり、クラリス嬢はこの世界におけるストーカーの開祖とも言えるそうだな。

「彼は、殿下の乳兄弟として、将来のことを悩んでいたようですよ。内容を私の口からお話することはできませんが」

「そんな話、私だって聞いたことありませんけど・・・!」

綺麗な顔が、悔しそうな表情で歪んでいる。

自分が知らなかったことを僕が知っていたことが面白くないんだろうね。

それにしても、大臣室に娘とはいえ、仕事に関係のない人間を入れるのはどうかと思うよ。

そうだ、仕事に関係ないなら、会話の主導権を奪い返してみよう。

「ところで、この話ですが、勤務時間が終わってからでいいですか。クラリス嬢には申し訳ないのですが」

「え・・・?」

「いや、だって今、勤務時間中ですので・・・業務に関係ない話を長々としていたらまずいですよ。大臣だって部下に示しがつかないでしょう」

大臣とクラリス嬢がわかりやすく固まった。

そりや大臣の娘に、そんなことを言う役人なんて普通はいないだろう。

前世だったなら、そんなことを言うやつがいたら空気嫁って蹴りを入れていくかもしれない。

しかし、今世の僕は、ある意味で、とつても立派なボンボンだ。喧嘩を売られたのなら買ってやんよ!

あ、でもジルクに夜遊びを教えたのは僕だから、喧嘩を売ったのはやっぱり僕だったかも。めんご。

「そ、そう言わないでくれ。少しの時間ならかまわないだろう」

「稟議の回付が僕のところで止まっているのですが・・・少しでよければ」

苦笑いする大臣にイケメンスマイルを再びぶつけてやった。

よし、場の流れをこつちに引き寄せたぞ。

ちなみに、クラリス嬢から明らかに負の感情の込められた視線が向けられているが王妃様や父上に比べれば可愛いものだ。

「どうやら色々とジルクの行動を調べているようですが、まさか不貞がありましたか？」

「いえ、それはなさそうなのですが、あちらこちらで機会を作って女性と食事をしたり、買い物に出掛けたりしているようです」

ジルクのやつ、ずいぶんと女性にアクティブになったものだね。僕の知らないところで何かに目覚めてしまったのかもしれない。

たしかにあの顔、それにエアバイクのレースにも出ているらしいし、モテ要素は多いのだろう。

そんな環境で一氣に場数を踏んでいるのか。

「僕としては、まず何故彼が僕と食事に行ったことを把握しているのか気になりますね。あの店、陛下に教えてもらった、隠れ家のような店なんですけど」

「将来嫁ぐ相手のことでも。よく知っておきたいと思うのは淑女のたしなみです」

顔を赤らめながら、恥ずかしそうに両手を両頬に当てている。

可愛らしい仕草であることは認めよう。だが、やっていることの違いつなき、ジルクの苦悩を聞いている人間からしたら、引きつり笑いが出てくるのを抑えられない。

「別にクラリス嬢を蔑ろにしろ、だなんて言ってますよ、ただ、エアバイクみたいな高価なものをいきなりプレゼントされたら男は驚きますよ」

いずれは婚約破棄に至ってもらおうと思ってきましたが、今の段階では、まだ、二人の間に楔を打ち込んで愛情ゲージを下げようとしただけなんです！

うん、我ながら、安定の屑ムーブです。

心が痛まないわけじゃないんだよ。

でも僕だって妹や実家を破滅されるわけにはいかないんだ。落ち

目になっていく実家の責任者になりたくないんだ。

とはいえ、ジルクが今の時点でアトリー家の逆鱗に触れて社会的に抹殺されては、あの乙女ゲーの主人公とくつつくどころではなくなってしまう。フオローは入れておこう、

「あいつは、距離感に悩んでいると言いますか、貴女の気持ちの受け止め方を悩んでいたもので、色々経験して自分のキャパを広げてはどうかと助言したんですよ。不貞がないなら、そんな中でも伯爵家に配慮しているのでしょうか。僕だったら手を付けているでしょうかからね」

「で、ですが、どうしてそれを私に言ってくれないんですか・・・」

はい、論破！不貞さえなければ、勝ち負け、白黒をつけることは難しいですよ。

ノックアウトとまでいかなくても、判定勝ちくらいには持ち込めたのではないだろうか。

だが、ここでバーナード大臣が思わぬ角度からカットインしてきた。

「いやいや、それはいけないね。娘もはしやぎすぎたのかもしれないが、ジルク君のためを思い、彼にとってプラスになるように動いていたはずだ」

「しつかりとした教育を娘さんに施したからそんな風に言えるんでしょうね、大臣」

「恥ずかしながら実体験だよ」

え？・実体験？

「私も妻と結婚する前には同じようなことがたびたびあったんだよ。当時は僕の行動を逐一把握していたりしたから驚いたこともあったけど、今ではどれだけ妻が僕のことを愛してくれていたかよくわかる」

大臣がなんだか恍惚とした顔を浮かべ始めている。おいおい思わぬ方向から雲行きが怪しくなってきたぞ。

「その他にも、昔はもう少し痩せていたんだが、妻に言われたとおりに幅をよくして、妻から言われたとおりに仕事をこなしてご褒美をもらい、また妻のアドバイスどおりに仕事をする。この繰り返しでこま

でくることができたのさ」

「あら、お父様ったら娘の前でのろけないでくださいよ。ギルバート様も言葉に困ってらっしゃいますよ」

「おいしいおいしい！うちの国の大臣、完全に調教済みじゃねーかああああ!!」

しかも、太らせて他の女を寄ってこなくさせるって独占欲が強すぎるだろ！

乾いた笑いを浮かべながら、どんより曇った目をしちやってるよ、見えない首輪がガツツリと嵌まっちゃってるよ！

男としての牙が完全にへし折られているどころか、一本残らず抜歯されちやってるよおお！

何て恐ろしい女なんだ、大臣の奥さん。学園にいたケモナービ○チどもとは全く異質の恐ろしい女だよ。

クラリス嬢がやばい女なのは母親譲りだったのか。

や、やばい、ジルクルート作戦を続けるのはもうちよつと慎重にしたほうがいいかもしれない。

「ま、まあジルクも乳兄弟とはいえ、実家は子爵家です。プレツシャーも大きいでしょうから、あんまり追い詰めないでやってください。そろそろ戻ってもいいですか？」

「ああ、仕事に戻ってくれ。クラリス、ジルク君についてはまた対策を考えよう」

まったく、自分は被害を受けていないとはいえ、酷い目にあつた気がする。主にメンタル面で・・・

しかし、ジルクのやつ、ある意味ではしっかり成長しているようだ。一見すると優しそうなやつって、一皮むくと恐ろしい顔があるんだね。

そんな感じでこの先主人公のことを落としちやってくれれば、妹も安心なんだけど・・・

大臣令嬢の潜入殴り込み事件からしばらくの時間が経過し、何件かの長期監査案件を終わらせて久しぶりに実家の屋敷に戻った日のことだ。

父や妹と食事をするのも久しぶりな気がする。妹が食事を取る仕事と言うか、所作はとても上品だ。

王妃教育の賜物だろうか。

工作上、早飯で済ませてしまう僕は、つつい、行儀が悪いと言われてしまうから情けないところだ。

そして、妹は兄の鼻目かもしれないが、とても美しく育ったと思う。主人公の敵役にふさわしいスペックという言い方かもしれないけど、暴力的な魅力というかフォルムというか。

気の強さは相変わらずだが、やっぱり悪い子ではない。

今は一役人、しかも長期出張ばかりでサポートできることは少なかったが、その分、数年間、辺境のあちこちを見回って状況を把握することはできた。

今持っている案件が落ち着いたら、妹の手助け、というか、ユリウスルート回避に向けて、動く時間を増やしたい。

主人公が攻略対象とくつつかなくても、攻め込んでくる公国軍を撃退してゲームクリアとなるなら、本当に僕のところまで困り込んでしまいたいところだ。

この辺りは、前世の妹がプレイしている画面をいくらか見たことがあるだけで、自分である乙女ゲーをプレイしていなかったことが悔まれる。

こんな感じに思考を整理していたところで、家族の会話がないことを若干気にしたのか、父が食卓に話題を振ってくる。

「ところで少し前に、ダンジョン攻略者が新たな浮島に加え、財宝や口ストアイテムを発見したことは聞いたか？」

「はい、王宮でも上から下までずいぶん話題になっていましたね」

この国の貴族は、冒険者の未裔らしい。

前世の価値観からしたら、貴族と冒険者って反対概念に近いような気もするが、この国の建国に携わったのが冒険者たちであったことか

ら、成功した冒険者が尊ばれる風潮がある。

王宮のでつぷりとしたメタボ貴族達も先祖は冒険者だったのかと思うと、笑えるね。

前世で培った社畜魂に加えて、今世で身に付けた役人根性が組み込まれている僕にとつては、冒険者つて不安定な収入に依存する一発屋、よく言つたとしても夢追い人にしか思えない。

「しかもロストアイテムの中には、飛行船や鎧もあつたらしい。見てみたいものだな」

パパ上がいつになくご機嫌だ。これも冒険者の子孫ゆえのものだろうか。

ロストアイテムというのは、主にダンジョンや遺跡等で発見される現在のテクノロジーでは再現できない飛行船や鎧、その他の機械的構造物の総称だ。

名前だけ聞くと、180度ひっくり返つたAやXのようなモールスーツが浮かんでしまう。

ただ、▽○ンダムと違つたのは、発掘された鎧等は現在の技術で再現できないというだけで、絶対的なスペックが現在の鎧や飛行船より高いとか限らないというところだろうか。

僕も、ロストアイテムで戦力増強と言う手を考えなかつたわけではないが、コストとリターンの釣り合いが取れない上に、ケモナー学園で虐げられて王国へのヘイトを高める貴族の子弟をフォローするのに精一杯だった。

「でも戦力にならないなら、そこらの美術品と価値は変わりませんよ。国境での防衛に使えるかもわかりません」

「うん、まあお前ならそういう反応をするかもしれないとは思つてた。もはや相変わらずだな、と安心するようになってしまった父のことを哀れだとは思わないか?」

「辺境の貴族達の悲惨な境遇を学園以上に見てばかりですからね。そんな連中から将来の王妃である妹を守るために働く僕を、家族だけでなく愛国心にあふれた騎士だと誇ってくれていいですよ」

「辺境と言えば、ダンジョンを攻略したのは、辺境貴族の三男坊で、ア

ンジエと同じ年らしいぞ」

「辺境の、しかも三男ですか・・・」

「兄上、気になる点はそこなのですか」

妹が理解できない、という顔をしている。

父や妹がさほど気にならない様子だが、僕の見解は異なる。

可能性の1つは、家督を継ぐ長男とその予備となる次男がいるから、気楽な冒険者稼業に身を投じているボンボンというパターンだ。きっと父や妹もこのパターンを想定している。

2つ目の可能性は、その家の中で冒険者とならざるを得なかった事情がある、というパターンだ。

女尊男卑なこの世界の辺境貴族の中には、家督継承要員以外の男をゴミのように扱う女達がいたりする。辺境のドサ周りをしている中でもたまに見かけることがあった。

社会の中で虐げられてきた彼らが抱える王国へのヘイトは強い。そんな彼らが実家の防衛上の穴を突いて、敵国を招き入れる可能性と、こののを僕は気にしている。

「その三男坊だが、浮島発見等の功績を学園卒業後は実家から独立した男爵位を与えるそうだ」

「男爵位なんて可哀そうなことをしますね、準男爵くらいにしてあげればいいものを」

「え？」

父と妹の反応が被る。

「偉大な功績を称え、地位と名誉を与えるのはごく自然なことだろう」
「男爵位だったら、学園では上級クラスに入らされますよね。何もしなければ普通クラスで心穏やかに過ごせたでしょうに。学園で獣臭いアバズレどもに搾取されてすり潰されなにか僕には心配です」

「お前が学園の管理をしている部署に配置されなくてよかったです、私は心から思っているぞ」

それ面白いな、今の仕事が落ち着いたら大臣に相談してみよう。

先王弟であらせられる公爵だって教員として所属しているんだから、ボンボン息子の1人や2人いたっておかしくない。

ただ、ここからは、妹の断罪ルートを回避することも重要になってくる。

「アンジェ、次の調査は長引きそうで、王都に戻るのも夏季休暇の頃になるだろうから、先に言っておくよ」

「は、はい兄上」

急にシリアスな顔になった僕に妹が少し驚いている。普段強気な妹がテンパる姿は可愛いな。

「学園には僕達のような人間だけじゃなく、下級貴族、騎士階級まで様々な人間がいることはわかっているね」

「ええ、もちろんです」

そして、この中にはあの乙女ゲーの主人公が、平民でありながら特待生という扱いで入学してくる。

おそらく依然に王妃様が言っていた国の体制移行に向けた第一歩なのだろう。

「相手の身分が自分より下だからって、相手を侮辱するような振る舞いが正当化されるものではないことを

忘れてはいけないよ」

「もちろんです、私ができるようなことをすると思ってるんですか」

「普通ならしらないと思うけどね。僕達兄妹は怒るとプツツンしちゃうからね」

「・・・兄上と一緒にされるのって、複雑な心境です」

「アンジェ、父上に似てきたね。ただ、学園で貴族に嫌がらせをされた騎士が王宮で役人になってから、その貴族に関する案件をどうしたか知っているかい？」

「王宮の役人といっても、貴族の申請を不当に潰すなんてできないと思います」

「当然だ。でも、処罰されないギリギリの範囲で、案件の処理を片っ端から遅延させたんだよ。何回も、事細かに書類不備を指摘して、資料を出し直させるんだ」

「ずいぶんといい性格をしている役人ですね、国のためにならないなら罷免すべきでしょう」

「今のは極端な話だけど、恨みを買うなら覚悟はしないとイケないよ。それに、今年は平民の特待生が入学するなんて話もあるが、そんな異例の案件に、王宮の誰かがバックにいないほうがおかしい。不用意に近付かないほうがいい」

そう、あの乙女ゲー的には、ここからがスタートなのだ。

「近づくな、といって遠ざけるといいうことは、まさか兄上、自分で囲うつもりじゃありませんよね」

「魅力的な相手なら考えるかもしれないな」

パパ上がめっちゃ睨んでくる。

いや、主人公ですから！なんかすっごい力持ってるらしいですよ!?!
きつと囲えばレッドグレイブ家にプラスになりますよ！

第8話 ボンボンのおしごとく超パワハラ編

前世では、因果応報という言葉があった。

悪い行いをすれば、自らに悪いことが起こり、善い行いをすれば、自らに善いことが起こる、という意味だ。

前世から、基本的に無宗教な僕だが、これは様々な場面であてはまると感じている。

今の仕事、辺境貴族の監査というのは、実態的には、王都から辺境の領主貴族達を虐げて、王国へのヘイトを徒に増大させる性悪女達を、性格の悪いやり方で排除するというのが半分を占める。

今回もそのために、公国との国境にほど近いところに位置する浮島に到着した僕は、同僚の文官とこの島の領主である子爵の館に向かつて歩いている。

「ずいぶんとやる気に満ちた顔をしてますね」

「今回は思いつきりやれという陛下の許可をもらえたからね。モチベーションも上がるさ。ゲストの到着予定は？」

「定刻どおりです」

「今回は裏取りやらネタ集めに苦労したが、おかげで派手にやれそうですね」

「それ、普通の役人は絶対にできませんからね」
「僕だって、たいていは陛下謹製のマニュアルどおりにやってるだけなんですけどねえ」

妹の破滅断罪ルートを避け、実家を落ち目な没落貴族にさせないためには、金でもコネでも権力でも何だった使ってやるさ。

公国が攻めてきても王国の被害が甚大にならない、妹が王妃になる、領主貴族が反乱を起こさない、この辺りが、あの乙女ゲー世界のおおまかな知識しかない僕が把握している勝利条件だ。

さて、今回も浮島にはびこるゲスを監査の名の下に駆除して、王国へのヘイトを減殺するでしょう。

既に事前潜入班がこの浮島の商業、農業その他領内の実地調査を済ませている。

これから行うのは、領内で正式に帳簿や各種契約書、その他金回りの書類を見ながら、国に提出した会計報告書等との突合だ。

はつきり言って地味な作業である。嫌いじゃないけどね。社畜魂が働いている実感を得ることができる。

続けて、領内各所の視察を行い、事前に集めた情報や各種報告書と、領内の実態との齟齬の大きさを確認する。

確認後、さらなる調査をすることもあり、一連の調査が終わるまでに何か月もかかる場合もある。

それからしばらくして、今回の調査もようやく終わり、いよいよここから領主達へのヒアリングが始まる。

ヒアリング会場は、広めの部屋で、その真ん中に大量の書類が置かれたテーブルがある。

僕達から見てテーブルの向こう側には、この浮島の領主である子爵、会計担当と思しき事務員数名に加えて、今日のヒアリングのために王都から呼び出した、いかにも性悪という顔をした子爵夫人、

さらに夫人お抱えの専属使用人と呼ばれる亜人の奴隷兼愛人2人が侍っている。

領主や事務員達は連日の監査対応で疲れを隠せなくなっている。一方の性悪系夫人は、香水の不快な臭いをまき散らしながら、いかにも不愉快だという表情を隠さずに我々役人チームをにらみつけている。

亜人どもは、部屋のあちらこちらに視線を泳がせており、これから行われることに全く興味が無いことは明らかだ。

この仕事を始めてから、この最後のヒアリング場面に領主の正妻が来るときはだいたいこんな感じに、亜人の専属使用人が付いてくる。

監査を何だと思っているのか、というかケモノー学園で何を学んできたのか・・・あ、いや性欲を亜人で発散することと、男に金を集る

ことしか学ばないのがあの学園の女子だったね。

じゃあ準備も整ったところで、ショータイムを始めようか！

「子爵、連日ご対応いただき、ありがとうございます。ところで、ピアリングを始める前に、私、一つ、思うんですよ」

「え・・・いかがでしたか？」

右手で頭を抱えながら、左手で鼻を覆うポーズを取り、意味ありげなことを言い出した僕を見た領主が、不安そうな表情を浮かべている。

「この部屋、獣臭いんですけど」

場の空気が一気に張り詰めた。性悪系夫人は露骨に僕に嫌悪の視線を送りつけてくる。いいね、僕が誰なのか知らない女がよく向けてくるやつだ。

正妻に頭が上がらないのであろう領主は、怯えながらも、何てことを言ってくれたんだという無言のメッセージを、表情で僕に訴えかけてきた。うん、ちよつとだけゴメンね。

僕は必死に笑いをこらえつつ、亜人2人を指さして、鼻で笑ってやることにする。

「そうそう、君達だよ。獣臭くて気分が悪い。外してくれるかな」

亜人達の目元がピクピクと動いている。こいつら専属使用人は、女尊男卑なこの国においては、雇い主である貴族の女に守られているため、攻撃的な言葉を受けることは少ないのだろう。

むしろ、あのケモナー学園では、下級とはいえ貴族家の男子生徒に手を上げることだってよくあることだった。

この場でも、殴りかかってきてくれれば話は早かったのに。

だが、専属使用人達が動く前に、性悪系夫人が口を開いた。

「私の専属使用人に何か？」

「こんな近くで言ったのに聞こえませんでしたか？獣臭くて不快です、このピアリングにおいて何かを答える立場にもないでしょうから、退出しろと言いました」

目を大きく開き、口角を上げて満面の笑顔で答えてあげた。こういうときの、嫌味なお貴族様ムーブはとても楽しい。

ちなみに、同僚の役人達はこんなやり取りを何回も見てきているので、動じずに手元の資料を再確認している。

これから何が起きるのかもわかっていいるからね。

他方で、性悪系夫人は怒り心頭といった様子で厚化粧でも顔が紅潮している。扇を持つ手元も震えていて、ここからも怒りが伝わってくる。

「無礼な！粗探しが生業の役人風情が！」

僕からの煽りに耐えきれなくなった夫人が吠えた。そして、次に動いたのは、僕の正体を知っている領主だった。

慌てた様子で夫人のほうを見て口を閉じさせようと手を伸ばそうとする。

「おいおい、面白いのはここからなんだから、止めたらだめじゃないか。」

「なにぶん、育ちがいいものでしてね。巫人を連れ歩くなど恥ずべき事であると教育を受けているのですよ。あ、夫人には挨拶がまだでしたね。私、今回の監査を担当する辺境監察第二部調査官をしております、ギルバート・ラファ・レッドグレイブと申します」

実はまだ責任者でもないし、今回のチームも大臣の腹心の宮廷貴族が統括しているのだが、こういう場面では、僕が矢面に立つことが多い。

「え、れ、レッドグレイブって……」

「はい、公爵家のボンボン息子ですよ。あと知ってます？僕の妹、王太子殿下の婚約者なんです。今日は色々と賢くなれましたね。ところで、この部屋、臭いって言うてるんですけど、何回言わせるかのゲームでもしているんですか？」

最後の言葉のトーンを一気に下げて追撃をかけてみる。

言葉を失った夫人は、しばし顔をうつむかせた後に、専属使用人のほうを見て頷くと、巫人2人はようやく席を立ち、部屋から出ていった。

「では、異臭の元がなくなったところで、ヒアリングを始めましょうか」

そう言って同僚に発言を促すと、手元の資料の読み上げが始まり、各種の聞き取りが始まった。

領主にとって幸いだっただのは、出納周りの処理そのものに大きな規則違反はなく、軽微なミスを修正するようにとの指摘、指導がいくつあつたことくらいだろう。

ここまでは、適法性だけの話、要はルール違反があるか否かなのだが、会計担当は真面目に仕事をしていて何よりだ。

続けて話題が、支出の妥当性に移ると、話をしていた同僚が僕に目を向けた。僕は軽くうなずくと、手でクリップ止めた資料の束を手にしなから領主に顔を向ける。

「時間をかけて領内を見させていただきましたが、同じ規模の浮島と比べて、それなりに収入のある領地だと思えます。ですが、港、商業エリアとも開発があまり進んでいませんね。防衛用の鎧も年代物ばかりです」

「・・・申し訳ございません」

「領民から集めた税です、懐に入れるとしてもほどほどにして、見えるように還元されなければ民の不満は高まりますし、領内で事業を始めようとする機運が削がれてしまいます。支出項目の点検はしていただけますか」

「・・・申し訳ございません」

こちらが何を言いたいのかは領主も察しているのだろう。

このような場で同じことしか言わないというのは、これ以上、別のことを言えないことを意味している。予想通りの展開でもあるんだけどね。

そこで僕は王都にも提出されている書類を提示しながら、そこに記載された支出項目の中の上位にある、とある事項を指さした。

「王都への支出額がずいぶん大きいですね。新規事業のご準備ですか?」

「いえ、王都に滞在している妻への仕送りです。使い道の詳細は、諸々、お手元の各支出書類のとおりです」

領主は、げんなりとした表情を浮かべながら、僕の近くに置かれた

支出書類を綴ったファイルに視線を送った。口にするのも憚れるのだろう。気持ちにはよくわかる。

中身は専属使用人や別にいる愛人等への支払い、ドレスやら宝石類やら美容美食その他、王都で放蕩三昧に豪遊するための支出であふれているのだから。

もちろん貴族なんて多かれ少なかれそんなものだと言ってしまうばかりがないだろうが、そのせいで国境の防衛が疎かになったり、王都へのヘイトが高まって王妃になった後の妹に苦勞をさせるわけにはいかない。

王都での乱痴気騒ぎを続ける金があれば、飛行船艦隊を編成することはできなくても、鎧のパイロットの育成だって、少しずつでも新型の鎧を調達することくらいはできる。

相手が攻撃しようとする意志を少しでも挫くことができれば抑止力として十分だしね。

「なるほど。では単刀直入に言います。この金額、減らせませんか」「申し訳ございません、それは非常に難しいです。婚約時の契約ですので・・・違反すれば罰金となっております」

「その通りですわ！こんな男と私が結婚してやったのだから当然です。書面だって交わしてあります、私には王国が認めた権利があるのです」

契約という後ろ盾を思い出して、性悪系夫人が復活したようだ。

下級貴族が、結婚に際して、妻となる女が王都等で好き放題するための金銭等の給付、しかも莫大な額の支払いを約束させられることは多い。

こうした吐き気のするような契約は、然るべき手続きを経て王宮に訴え出れば、罰金の支払いまでも男に貸してしまう。

男を食い物にして私腹を肥やすことを目的とした女達の互助団体的な集団、淑女の森などという組織が色々と知恵を出しているという話も聞く。

さらに質の悪いことに、この手の裁定をする司法的な機関がどういうわけか、余程のことがない限り女性側に有利な判断をするので、や

はりこの世界はあの乙女ゲーの世界なのだと言われ再認識させられてしま
う。

女達が、自分達を守り切れるように理論武装、制度的な守りを固め
ている。

しかも、僕の夜遊びの師匠であるローランド陛下の悪辣な手腕を
もってしても、裁定する部署の人事にはなかなか手を出せずにいるこ
とが、女尊男卑なこの国の闇の根深さを物語っている。

だから、正攻法ではなく、僕の使えるカード全てを使って正面突破
を図るんだ。そう、正面突破という邪道を使うのさ。

「なるほど、契約自体は有効に成立していますね。書面上、形式的な不
備は見当たりません」

「そうでしょうね」

「では、お互いの意思で新たに契約を結び直してください」

契約は、別の契約で内容を更新してちょうだいね、ということだ。

「は・・・はいい!? どうして私がそのようなことをしなければなら
ないのですか」

「夫人は人の話を記憶することが本当にできないんですね。それとも
僕が言ったことが理解できませんでしたか」

「な、なんですって!?」

「この領地の開発、防衛力の維持が不十分だと申し上げたのはつい数
分前ですよ」

「私にはそのようなことは関係ありません。結婚してやる代わりに金
を支払うと約束したのはその男なのですから」

「おやおや、領主の妻である貴女には、その子爵とともに、この浮島
を守り、発展させる責任があるのでは? もしかして、それも契約です
かあ? あれれえ? あなたの責任を免れさせるような記載、契約書には
ありませんよお?」

大笑いしながら夫人を指さしてやる。

先程、ほんの一瞬だけ勝ち誇ったような顔をしていた夫人が、今度
は気味が悪いようなものを見る顔で僕を見ている。ひとまずここま
では、陛下謹製のマニュアルどおりの反応だ。

「一体何がそんなにおかしいのですか!」

僕の煽りに耐えきれなくなつて、正面切つてケンカを買つてきた夫人が吠えた。

いいね、それなら僕もそのケンカ、応じてあげよう。

手に持っていた資料をテーブルに置いて、淹れてあつた紅茶を一気に飲み干した。仕上げと行こうか!

「あなたにもわかりやすく言つてあげましょう、そちらの夫婦の約束なんて僕には関係ないんですよ。重要なのは公国が攻めてきたときに、防波堤となれるかどうかだ。僕の大事な妹が王妃になつた後に、この浮島が公国に占拠されたら、お前、どう責任取るんだ?」

「そんな無茶苦茶な・・・」

「何なら森のお友達と一緒に訴え出てみますか? いいですよ、特別サービスとして、僕も、父と、この監査を直々に許可した陛下、上司であるアトリー大臣と相談して対応しますね」

理不尽なことを言っている自覚はある。領主の妻の役割うんぬんを除けば、実家、そして未来の王妃である妹の存在をちらつかせて、横暴なことを言っているのは僕だ。

法とか道理ではない、ただただ実家のパワーをゴリ押ししていく権力型脳筋スタイルとでもいうべきか。僕自身の力なんて欠片もないのは少し悲しいけどね。

端から見たら、重篤なシスコンによる貴族ムーブだと言えなくもないかもしれないけど、前世の価値観が残る僕には、自分のやってることとは、超が3つくらい付くパワハラに思える。

後ろ盾を最大限に使い倒した権力のド突き合いなら、僕に分があることは間違いない。

味が濃すぎて胃もたれしそうなくらいの権力を集めているからね。

さすがの性悪系夫人も、ここまでの地力の違いを知れば虫の息のようだ。言葉を失っている。

だが、息があるなら、その息の根は確実にここで潰す。

「ところで夫人、今日は貴女のために特別なゲストを呼んでるのですよ」

「まだ何かあるのですか!」

僕が手を叩くと、隣室とこの部屋を繋いでいる扉が開き、同僚の文官にアテンドされた一人の男性が入ってきた。

男性の表情は、夫人と同様に、怒りで頬が紅潮している。

「お、お、お父様! どうしてここに・・・!」

そう、この女を確実に潰すために連れてきたのは、その父親である男爵だ。わざわざ領地からこのためだけにお越しいただいた。

自分の娘が王都で好き放題やっつてること、そのせいで子爵領の防衛や開発がおろそかになっていること、王宮がそれにとつてもお怒りであることを知らせたら、二つ返事で来てくれたよ。

「男爵、お待たせしてしまい申し訳ない。早速なんです、領主の夫人は、契約を交わささない限り、領地に責任を持たないという見解があることを、不勉強な私は初めて聞いたのですが、男爵はいかがお考えですか」

「いえ、私どもの教育が行き届いておらず・・・それに子爵にも大きな迷惑をおかけして申し訳ない限りです」

「厳しいことを言うようですが、口では何とでも言うことができます。

貴方だけが悪いとは思いませんけどね」

「そ、それではお許しいただけるので?」

先程までお先真つ暗、まるで人生終了というような表情をしていた男爵の顔に、一筋の望みが生まれているが、楽観的なのは親子の遺伝なのだろうか。

そこまで世の中、というか、王宮内で重度のシスコンの皮を被った保身のために全力全開な僕は甘くない。

「ご息女がこのまま夫人を続けるなら、ここまでどれほどの財を私物化してきたのかを、監査結果の公表という形で、王宮だけでなく、子爵領内の騎士から平民達に向けて広く知らせるつもりです」

これは陛下のマニユアルにもない、僕なりのアレンジだ。

前世の役所がやっていた、命令に従わない会社を公にすることで、事実上の私刑にかける手法を参考にさせてもらった。

あれは、一度やられてしまうと、マスコミは騒ぐ、SNSアカウン

トは炎上、関係のない一般人が会社に電凸する、業務用のメールアドレスには、ウイルス付きだったりゴミみたいなメールが大量に送り付けられるなどなど、業務にとんでもない支障が出るんだよ。

役所の奴ら、おとなしそうな顔してエグい真似をしゃがると思ったものだった。

そして、技術力はともかく、政治体制、法制度、人権意識は近現代よりも前に近いこの乙女ゲー世界では、戦略的な情報公開という発想はまだない。

それゆえ、男爵は僕のやろうとしていることの効果がいまいちピンと来ていないようなので補足してあげるとしよう。

「なあに、領民達が怒ったとしても、貴族に危害を加えるほど度胸のある者は少数ですよ。この子爵領の商人達の怒りの矛先が、夫人の実家である男爵領に向かうくらいでしょう。札束による陰湿な嫌がらせが押し寄せるだけで、誰かがケガをするわけじゃない。あとは、僕の実家や王家との付き合いがある商会在勝手に忖度するかもしれないけどね」

「!!」

ここまで話してようやく甚大な経済的ダメージが領地に発生する可能性に気付いてもらえたようだ。

この浮島の子爵と性悪系夫人の結婚後、当人どうしはともかくとして、民間レベルでは子爵領と性悪系夫人の実家である男爵領の取り引きが拡大していることは調査済みだ。

家と家、という話で言えば、子爵領も取引相手が増えたという部分があるし、男爵領もこれまでなかった取引が生まれて、領内の発展が促進されていた。

結婚に際しての莫大な子爵側の負担さえ除けば、きちんとした政略結婚だったと言えるかもしれない。

ビジネスの規模で言えば子爵領側のパワーのほうが強い状況下で、領民達が性悪系夫人の行動を知ったらどうなるか。

「そんなことをされたら私の浮島の領民達の生活はズタズタになってしまいますー」

「・・・かもしれませぬね。でも、懸命に働き、暮らしてきたこの浮島の領民達は、今まで、いったい誰に食い物にされてきたんでしょうね」
部屋にいる人間達の視線が一斉に性悪系夫人に集まる。

「な、何を見てるのよ！私は約束どおりにお金をもらっただけじゃない！」

「お前と言うやつは・・・！」

男爵が性悪系夫人の方に向かって大股で近付き、右手を思いっきり振り抜いて自分の娘の頬を張り倒した。

パチンを通り越してバチンという音が鳴るレベルの強さで地面に倒れこんだ夫人は、ピクピクと動きながらも起き上がってくる気配がない。気絶しているのだろう。

「娘は離縁させて、以後、屋敷の外には出しません。ギルバート様、このたびは申し訳ございませんでした」

「謝る相手は私ではなくて、子爵ではないんですか？」

「は、はい。子爵、この愚かな娘は屋敷の地下に死ぬまで押し込めておきます。ですから、なにとぞ我が領のことはお許し願えませんでしょうか。領民達に罪はございません」

「この領の民にも罪なんて何もないはずですけどね。子爵、どうなさいますか」

しばらくの間、沈黙というか蚊帳の外に置かれていた子爵に話を向けた。

彼としても、連日僕らの監査対応に従事していたことに加え、今日一日で色々とありすぎて、キヤパを超えているのだろう。目が若干虚ろになっている。

「そうですね、その女を回収していつてくれて、今後関わらないで済むなら、かまいません」

「自身で首をはねたりしないでください子爵は優しいですね。では男爵、もうお帰りいただいてかまいませんよ」

男爵が夫人の首根っこを掴んで、子爵の屋敷から退散していき、部屋には僕達役人チームと子爵だけが残っている。

もう疲労困憊になっている子爵に追い撃ちをかけるのは本意ではないのだが、この超超超パワハラ監査の締めをしなければならぬ。「さて子爵、後妻は落ち着いた頃にも決めてもらうとして、今まで支出していた仕送りなんだが・・・」

「わかっています、防衛戦力の更新ですよ。私は何回も同じことを言わせませんよ」

「こいつは一本取られましたね。後ほど、知り合いの商会から連絡をさせます、サービスするように言っておきますから」

子爵には、数年後に侵攻してくる公国と戦ってもらわなければならない。

実家絡みの商会、陛下と繋がっている商会あたりに言えば、割引価格で鎧や飛行船を卸してくれるだろう。

ちなみに、今回のような悪妻排除後の防衛力強化をさせるときに、声をかける商会はだいたい決まっているのだが、ちよくちよく袖の下を渡そうとしてくるのを断ると、いつも不思議そうな顔をされる。

いや、別に僕は小金には困ってないからね!?!実家暮らしだし、実家は金持ちだし、役人としての収入もあるし!

今回の超パワハラ監査を終わらせてから数日後、王都へ戻る飛行船の中の執務室に籠って報告書を作成していたときだった。

ちゃんと仕事終わりの報告まで終わらせるのが社畜の流儀だし、陛下の許可を得たとはいえ相当に好き勝手暴れたことは間違いないから、詳細に知らせておかないと、庇護主への不義理となってしまう。

そんな風に思っただけで作業をしていたのだが、廊下から、大きな足音が、僕の部屋に近付いてきたのが扉越しにでもわかった。

ノックの後、部屋に入ってきたのは、役人ではなく、息も絶え絶えな一人の騎士であった。しかも、見覚えがある。うちの実家の騎士だ。

まさかこの監査部隊の飛行船まで早馬ならぬ、早鎧を飛ばして来たのか!?

ピッチリとしたパイロットスーツを着た騎士の片手には、1通の書状があり、大きく息をしながらそれを僕に差し出して来る。

「こんなところまで一体どうしたんだ?」

「公爵様から・・・至急の連絡です・・・中身を・・・」

「ああ、わかった。君は休んでくれ」

机の上にあった水差しとコップを騎士に渡し、自分の机に戻った僕は、引き出しにあるペーパーナイフで書状の封を開けて中身を取り出す。

父からの急ぎの連絡って何なんだろう。王都では、そろそろ学園の夏季長期休暇が始まりそうな季節だ。

早めのひと夏の思い出を作ろうとした陛下が、愛人に刺されたりでもしたのだろうか。

そんなことを思いながら、父の直筆の手紙に目を通して・・・僕は膝をついた。

要約すると、激おこアンジエ、王子と決闘するつてよ、だつてさ。

・・・・・・・・・・・・・・・・おiiiiiiiiiiii!!!!

それ、僕がこの世界があ乙女ゲー世界だと気づいてからずっと避けたかった断罪イベントじゃねえかああああ!!!

僕の数年越しの苦勞が吹き飛んだ瞬間だった!

え、何? 実家その他偉い人達の権力を背景にして俺TUEEEEE E!をやったのがそんなに悪かったの!?

あの乙女ゲー世界の運命を捻じ曲げようとしたから、運命を戻そうとする力が働いたというのか。

それって、まさか、僕にとっても因果応報なのか!?

これが噂に聞く、運命の修正力なのだろうか。

と、とにかく早く王都に戻らなくては。

なんでこの乙女ゲー世界は悪役令嬢の身内にも、こんなに厳しいんだ。ちくしょう！

第9話 ドキドキ！新たな攻略対象は追加DLC!?

監査先から王都に戻った僕は、ケモナー学園の決闘会場に向かってダッシュしていた。

王都に着くまでに順次届いた情報を整理すると、妹の婚約者である王太子のユリウスや夜遊びの弟分ジルクを含めたあの乙女ゲーの攻略対象5人全員を籠絡した子爵家の令嬢と妹が決闘することになったのだという。

はあ？主人公って平民だったはずだろ！しかも、ラーファン家という、ガサ入れをすればどれだけボロが出るかわからないと悪い意味で大評判の家の娘らしい。

というか、あのジルクがあっさり籠絡されたというのが驚きだ。

いくらクラリス嬢との間に僕がヒビを入れていたのだとしても、ジルクに手を出そうとした相手にクラリス嬢が何もしないで、指を咥えて見てたと考えるのは不自然だろう。

だとすれば、この世界のストーリーカーの開祖クラリス嬢とお抱えの諜報部隊が対策を打つ間もなく誑し込んだとしたか考えられない。

いや、そんな女なんて、凄腕のお水世界の方でもあるまいし、学園にいるのか!?

っていうか、ゲームの3年目に起きるイベントが、1年目の夏、ゲームが始まって数ヶ月間で、僕が王都を離れていたたったの数ヶ月間で起こされているのはどういうことだ！

もう一つおまけにわからないのが、妹の決闘代理人となったのが、先日、我が家の食卓で話題に上ったロストアイテムの冒険者、リオン・フォウ・バルトファルトという男子生徒だということだ。

仮にも、この国の中で大物貴族でありスペックも高い攻略対象5人とその鎧を相手に、1人で戦うなんて正気の沙汰とは思えない。

発掘したというロストアイテムの鎧があるらしいが、ロストアイテム⇨高性能とは限らない、というのがこの世界の常識らしいから、どうやって戦うつもりなのだろう。

まさか、僕が昔、辺境出身の男子達に結婚相手を宛がい回ってた話

を聞きつけて、ワンチャン、うちの実家に恩を売って、婚活地獄からの脱出を図るつもりなのか。

色々と考えていたが、ようやく決闘会場にたどり着いて、観客席に通じる廊下を一気に駆け抜ける。

どういうわけか、戦闘音は聞こえてくるが、観客達の歓声があまり聞こえてこない。

おかしいな、ケモナー学園名物の決闘は、どんな試合でも盛り上がるものだと思っていたのだが。

そして、廊下を抜けて観客席にたどり着いた僕の目に映ったのは、黒色に近いダークグレーの大型の鎧が、白色と青色の鎧を、スコップでフルスイングして殴り倒す場面だった。

白と青の鎧は現時点の国内の技術の粋を集めて開発された王太子であるユリウス専用機だろう。妹がプレイしていたゲーム画面でも見たことがあるような気がする。

しかし、僕にとって大事なのはそこではなかった。

スコップ片手に最新鋭機をぶっ飛ばした黒い機体。僕の目はそれに釘付けだった。

ブ○ツクサレナのような黒くて無骨な装甲、重量のある機体を強引に動かすための大型バックパック、ほんのりと愛嬌のある丸型フェイス。

まさか課金アイテムか!!!!!!

前世の妹が、あの乙女ゲーをクリアするために、僕の残業代を使って黒っぽい鎧をゲーム内で買っていた。記憶はだいたいおぼろげなものになっているが、デザインが似ているような気がする。

だが、よくよく考えて見ればゲーム内に存在していたアイテムであれば、この世界に存在しているのも不思議ではない。

そして、妹がプレイしているのは見ていたから、黒い鎧の強さは知っている。

会場内を改めて見まわしてみると、4体の壊れた鎧がバトルフィールドの端っこに仮置きされているが、今現在王太子専用機と戦っている黒い鎧に目立った損傷はない。やはりこの世界の中でも最高峰の

性能なのだろう。

「良かったね。君は王子様だから戦いに勝利するんだよ。王子として生まれたくなかったと言いなから、立場を最大限に利用する強かさは称賛に値しますよ！」

黒い鎧のパイロット、おそらく妹の決闘代理人の声が、鎧を通じて会場内に響き渡った。

決闘の当事者席で顔を覆って泣く妹の姿があることも合わせると、僕が会場にたどり着くまでにどんな言い合いがあったのかは何となく想像はつく。

「負けるなんて思っていなかったんです。許してくださいってお願いしてごらん」

「できるわけないだろ、これは神聖な決闘だ」

「じゃあわざと負けたふりしろってこと？そんなバレバレの忖度しろってキツイっすわあ」

煽る妹の代理人、そして怒る王太子。

いや、怒っているのはこっちだからな。妹の気持ちは愛じゃないとか言ってくれたが、お前のためにうちの妹は小さい頃から、自分の人生を犠牲にするように厳しい教育に耐えてきたんだぞ。

ここが決闘会場じゃなかったら、僕、いやもう俺でいいや。俺が相手してやつてもいいくらいだからな、この馬鹿王子。

・・・なんだか頭から卑猥な突起物が生えてそうだな。

とはいえ、俺の怒りをよそに、妹の代理人は、馬鹿王子を物凄い勢いで煽り倒していく。

あいつ、煽りスキルがすごいな！的確に相手の弱いところを突いて、ほじくり返して、心をへし折る罵声を浴びせていく。

何だろうか、怒りがどんどん鎮まっていくな。自分でやれと言われても、あそこまで盛大に煽り倒すなんてたぶんできない。きつと彼なら監査先で、領民の血税を私欲のために浪費するゴミ女どもを僕以上に追い詰めてくれそうだな。

「くたばれ、くそ野郎」

「殿下、そんな奴に負けるな！」

「死んじまえー！」

バルトフアルト君による煽り倒し劇場状態になり、静まり返っていた会場内から、馬鹿王子の激励と妹の代理人に向けた大ブーイングが起こり始めた。

それとは対照的に、僕の心はずいぶん冷静さを取り戻しつつある。ボコボコにされながら立ち向かう馬鹿王子が哀れ過ぎて愉快に思えてくると、思わず大声で笑いだしてしまった。

そんな場違いなムーブを始めた僕に、何人かの学生が気付き始める。

「おい、あいつは誰だよ！バルトフアルトの関係者か？」

「いや・・・馬鹿！あの人は公爵令嬢の兄貴だ！王都に戻ってきてたんだ！」

「ってことは、今や伝説と言われる辺境の愛の救世主（メシア）か!!」
「え、公爵家の赤い通り魔でしょ!?!妹のためなら貴族の1つや2つ、笑って取り潰すって聞いたわよ」

「監査で僻地のドサ回りさせられてるんだろ」

「いや、監査先の辺境の領主を離婚させて、王都で好き勝手やる女を片っ端から消してるらしいぞ」

「何それ、うちの家も監査して正妻を消してくれないかな」

「私の従姉妹がレッドグレイブにガサ入れされてから、連絡取れないのよ」

色々と言われる仕事だとはわかっているが、称賛と批判の温度差があり過ぎて風邪ひきそうだね。

「ってか、誰が赤い通り魔だ！言ったやつ、ちよつと出てこい！」

人間サイズの怪獣を、不意打ち、串刺し、タコ殴りで撃破する、光の国の巨人の親戚のような見た目の、サイコパス系○谷特撮ヒーローみたいな言うな！

僕だって前世のまとめサイトで見たときはドン引きしたんだぞ！

せめて赤い彗星とか、赤い○芒星とか、そういうちよつと厨二心をくすぐられる異名が欲しかったよ！

僕を赤いアイツ呼ばわりした女生徒を特定しようと、ヒソヒソ話を

していた生徒たちのいる観客席に近付いていこうとするが、舞台の上で最後の特攻を仕掛けようとする馬鹿王子の声が会場に響き、僕の視線もそこに移る。

「バルトフアルトオオオオ！」

白と青の鎧が、魔力か余剰出力かはわからないが、光輝く翼を背部から形成させて、黒い鎧に突っ込む。

だが、馬鹿王子の渾身の突撃も、あっさりと黒い鎧の片腕に止められて、捕まえられた頭部が徐々に握りつぶされていく。

光の翼出して、がむしゃらに突っ込むのは敗北の“運命”に一直線ですよ、馬鹿王子様。

そして、黒い鎧が、王太子機を掴んだまま止まった。いわゆるお肌の触れ合い回線で何かを話しているようだ。また言葉攻めをしているのか！

会場の生徒達からは変わらず罵声が浴びせられ続けており、彼らから見たら、黒い鎧は悪の権化のようなものだろう。

しばらく動きが止まっていたが、黒い鎧の左腕が輝き、掌底を王太子機の胸部装甲に叩き込むと、衝撃で機体はバラバラに砕け散ってしまった。

何だ、あの攻撃は!?まるで秘孔か急所に当たったかのような一撃で、この国の最強の鎧が破壊されてしまった。

ロストアイテムの冒険者は一子相伝の暗殺拳の使い手か！

しかも、鎧、悪そうで・・・一撃、いや、さすがに関係ないか。ふと古い記憶から、思いついたことがあったが、さすがにカテゴリーが違うだろうから、思考の外に追いやる。

今は、彼の健闘を讃えて大きな拍手を送るべきだろう。

「嘘だと言ってくれええええええ！」

「こんな決闘認められるかああああ！」

どうやら馬鹿王子に大金をかけていた生徒がたくさんいたらしい、会場内から阿鼻叫喚の叫びが聞こえてくる。

馬鹿王子に大金をかけてたようで大損ぶっこいたらしい。

それにしても、なんて見事にボコボコにしてくれたんだろう。

「見てみるよ、あんなに満面の笑顔で拍手してるぞ」

「おい、もしかしてバルトファルトって公爵家お抱えの始末屋じゃないのか」

「確かに煽ってプライドをズタズタに引き裂いてから倒すなんて…普通、あそこまでは追い込まないよな」

「でも、取り巻き連中もあいつのこと知らなかったぞ」

「ってことは、個人で抱えてるんじゃないのか。噂だと妹のためなら何するかわからないっていうし」

「そういえば、あの人、王妃様とは仲が悪いらしいぜ、だから殿下を…」

「ってことは、決闘の場を借りてレッドグレイブの派閥が王妃様の派閥に報復したってことか!？」

おい、ちよつと待て。

そもそもバルトファルト君とは初対面だし、通り魔扱いの次は黒幕扱いか！

むかついたので、声がした方向に笑顔で手を振ると、ヒソヒソ話をしていた生徒達は顔色を変えて、蜘蛛の子を散らすように去っていった。

一方で、舞台のほうでは、戦いを終えてバルトファルト君が鎧から降りてくるところだった。

彼のパイロットスーツも機体色と同様に黒とグレーを基調とするカラーリングだ。

そんなバルトファルト君のところに、一人の女子生徒が近付いてくる。

金髪と茶髪の間くらいのも、亜麻色のショートカットで立派な胸部装甲を備えた女の子だ。

あれは…主人公じゃねえかああああ!!!
!!!
!!!
!!!
!!!
ぶん親しげに話をしている。

リアルで見ると主人公、けっこう可愛いな。この国立ケモナー学園の女子達と違って、少し芋っぽいところが逆に新鮮だ。

ってか、バルトファルト君との距離、近いな。まるで主人公とそれ

を守る・・・

そういえば、王太子機は青と白、ジルク機は緑、その他の攻略対象の鎧もそれぞれのキャラの近い色となっている。そして、いずれもバルトファルト君の黒やグレーとは違う色だ。

鎧、黒くて悪そう、急所へ一撃・・・本当にまるでウー○オス、ポ○モンだな。

ん、ポケ○ン・・・はっ！そうか！

そういえば前世でプレイしていた某携帯型怪物シリーズには、本体に加えて、発売後に数千円の有料追加コンテンツが実装されていた。そう、追加コンテンツだ。

あのバルトファルトという男。

顔こそ若干地味だが、彼が手にしている力は、通常の人間のものとは明らかに次元が異なる。

さらに、鎧、パイロットスーツ、髪等の色が攻略対象の5人のいずれとも重複しない。

そうだ、あいつのようなモブがいるか！

それこそ、一子相伝の暗殺拳の継承者が活躍する世紀末世界で言われそうな台詞だが、僕は一つの結論にたどり着いた。

有料追加コンテンツの攻略対象。

確かにこれなら辻褄が合う。あのゲームは課金要素が充実していたにもかかわらず、ゲームバランスは狂っていたらしい。

僕の死後に、有料のDLCが追加実装されて、新規の攻略対象や、ゲームクリアを簡単にするためにチート機体をセットにして売り出した、というのは有り得なくもない。

きつとあの鎧も、本体で売っていた最強の鎧のデザイン違いか、亜種のようなものなのだろう。

そういえば、バルトファルト君はロストアイテムの飛行船も見つけたらしいから、追加コンテンツは攻略対象、イベント、シナリオ、鎧、飛行船あたりのセットにして売り出されたのかもしれない。

ひとまず彼と接触するでしょう。今は少しでも情報が欲しいし、仮にも妹の代理人として決闘をしてくれたのだから、兄として感謝の意

を伝えるくらいは自然なことだろう。

あとは、面識のあるジルクのところに顔を出してもいいが・・・いや、顔を見た途端、よくも妹に牙を向いたなどぶん殴ってしまいそうだからやめておこう。

観客席から決闘会場内の通路を抜けて、舞台のフロアに降りると、役割を終えた黒い鎧が巨大なボックスに格納され、ボックスは空に消えていくところだった。

あれは自動操縦か？しかも消えたってことは光学迷彩機能まで付いているということか。

この世界の鎧には、まだそんな技術が搭載できたとは聞かないところからすると、さすがロストアイテムというところだろうか。

というか、あの力、正直言つて僕のものにしたい。

今回のような決闘があったのでは、もはやアンジェを王妃にする、というのは現実的ではない。

いや、僕だつてあの馬鹿王子を許さん。父だつて、さすがに婚約の解消に動くだろう。

この時点で、僕の当初の勝利条件は消滅したことでもあり、積み重ねてきた苦労が水の泡となったことによる虚無感は尋常ではない大きさだ。

しかし、あの乙女ゲーでは、隣国であるファンオース公国が数年以内に攻め込んでくることになっているし、

実家の派閥は、将来の利益を見越して擦り寄ってきていた傘下の貴族達が離れていくことで大きく弱体化するだろうから、諸々の立て直しはマストだろう。

だとすれば、絶大な力を持つロストアイテムを擁する攻略対象と、将来的に聖女という宗教的権威を持つことになる主人公を、今のうちから囲い込んで、

10年先、20年先に僕が実家を継いだときに盤石な戦力と政治力を持つておけるようにしよう。

あ、でも性急に実家の傘下に組み入れて、古株の寄子が反発するのも面倒だから、ひとまず僕が結婚の世話をした辺境のメンツを集めた

僕の私兵的なグループというか愉快的仲間達の辺りで保護したほうがいいかな。

そんなことを考えながら、黒い鎧を格納したボックスが浮かび上がって消えたのを見ていたバルトファルト君の近くまで辿り着き、話し掛けようとしたところで、突然、彼が僕の方を振り向いた。

まるで後ろに目でも付いているようだね。それとも気配を察知されたのか？いずれにしても生身の實力もそれなりのレベルなのだろう。

さあ、ファーストコンタクトだ。

「リオン・フォウ・バルトファルト君だね。僕はギルバート・ラファ・レッドグレイブ、妹が世話になったね。まずは兄として礼を言おう」
「い、いやその・・・いえ、騎士として名乗りを上げずに見過ごすことができませんでしたので・・・」

なんか微妙に返事が来るまでに間が空いたな。表情も固い。

5連戦で気が昂っているのか？いや、あんなに心をズタズタにするほど煽り倒せるのだから、精神状態としては落ち着いているはずだ。

となれば、いきなり公爵家の人間に話しかけられて警戒していると考えるのが妥当か。

確かに、学園の生徒達は入ってすぐに爵位や所属、浮島の位置等で分類されるグループに分かれる。

辺境出身の男子達と僕だって最初は全く接点がなかった。

今ではほぼ1年おきに、子供が生まれました、いやお前仕事しろよ、的な手紙のやり取りをするくらいに仲良くなっているけどね。

だが安心してくれ、決闘会場にいた連中が言っていたとおり、君の身柄は僕のところでは保護してあげよう。まずは好感度稼ぎといくか。

「君の鎧、噂のロストアイテムだね。安っぽい流行に乗らない無骨なデザイン。僕は好きだよ」

「は、はい。ありがとうございます」

「この国の最高の技術で作られた鎧と戦ってもほとんど損傷しない装甲、正面からねじ伏せられるパワーも素晴らしい。それに背部の大型のコンテナ、あれは中に大量の武器があるのだろう。単機で多様な場

面に対応できるなんて男のロマンが形になったような鎧じゃないか」「でも、あれは冒険で発掘しただけで、自分で作ったわけじゃないですから・・・」

統制された軍の中では、一つの機体がなんでもできる必要はない。だが、俗にいうスーパーロボットの類を見て育った人間には、何でもできることはロマンの1つだ。

そんな思いを伝えてみたのだが、まだ反応は芳しくない。どうやって仲良くなろうか。

前世で読んだシ〇イーハンターに出てきたマフィアは、同じ女を抱いて仲良く兄弟になろうと主人公に言っていたのをふと思いついた。しかし、相手は攻略対象の可能性が高い。つまり、主人公の獲物だ。この世界があ乙女ゲー世界である以上、彼は主人公から逃げられない。

ここで適当な女を紹介してくっつけようとして、運命の修正力(仮)とやらが働いて、僕が不意打ちを食らうのは避けたいところだ。

いや、そんな力、あるとは限らないんだが、学園の男子達を大量に結婚させようとしたときの王妃様激おこ事件、

ジルクとクラリス嬢の関係にひびを入れようとしたときのストーリー開祖様ご本人突撃事件、

公国が攻め込みにくくするために辺境の監査に力を入れた後に起きた今回の決闘騒動、と僕があ乙女ゲームのシナリオの進行に大きな変更を加えようとしたときには、大なり小なり、何かは起きている。

修正力なんてオカルトレベルのものかもしれないが、何かあるのかもしれないと警戒しないのも不用心だろう。

それなら今度は攻略対象と主人公がくっつくのを手助けしよう。くっついた後はもうエンディング後のことだから修正力なんてないかもしれないし。

だから、まずは攻略対象と打ち解けなければならない。褒め殺しがだめなら、何かを一緒に行って、達成感を共有するとかを試してみるか。

そうだ、王太子ですらボコボコにするほどの破天荒な価値観を持つ

有料コンテンツの王子様には、こんな提案はどうだろうか。

ムカつくイケメンどもを殴りたかった、婚活地獄から抜け出したかった、あとは何となく放っておくことができなかった、

そんな理由で参加した決闘を終えて、リオンは自身の鎧アロガンツが回収されていくところを眺めていた。

『マスター、オリヴィアに学園を退学すると言いましたが、これからどうするのですか』

自身の前世の記憶を元に、この世界で生き残るために見つけたチートアイテム、宇宙戦艦ルクシオンの子機が自分にだけ聞こえるように話しかけてきた。

「まずは命乞いかな。ついでに爵位も返してあの浮島でまったりモブライフを楽しむさ」

『命乞いをする伝手があるのですか』

「そこはアンジェリカさんにお問い合わせするさ。決闘の掛け金を積めば、公爵家が何とかしてくれるって」

『ずいぶんと詰めが甘いように聞こえますね。おや、ちようどそのアンジェリカの兄がこちらに近付いてきています。上手く対処してください』

「え、嘘！ちよつと待って、いきなりはキツイって」

どこでアンジェリカの兄の情報なんて集めてきたのかが気になるところではあったが、突然の無茶ぶりを食らったりオンはとっさに後ろを振り向く。

「リオン・フォウ・バルトファルト君だね」

アンジェリカと同じ金色の髪が、夕日を反射して輝いている。

騎士服の上に、王都では季節外れに思える薄手のコートを纏い、その手は少し大型のジュラルミンケースを持っている。

これでキャリーケースも持っていれば、まるで海外出張帰りの陽キャ系サラリーマンのようだ。

決闘会場内を吹き抜ける風が、金髪をコート、裾をはためかせており、きつとゲームだったら背景にキラキラとした映像効果が表示されているかもしれない。

ギルバートの風貌を見たりオンは思う。

さすが悪役令嬢の兄だな、顔面のスペックが高い。悪役令嬢の兄というくらいだから、あの乙女ゲーに追加DLCとかあったら、攻略対象になっても不思議じゃないな。

くそ！実家は金持ち、顔はイケメン、生まれた時点で人生は超イージーモードじゃないか。いや、悪役令嬢の兄ってやっぱり苦労するのかな。

だが、ここで接触できたのはラッキーだ、何と言っても相手は公爵家の跡取り様だ。アンジェリカさん経由でお願いする手間が省けたとも言える。金を積んで命乞いをするにはもってこいだろう。

「妹が世話になったね。まずは兄として礼を言おう」

兄として？え、あのゲームでは決闘に負けたアンジェリカさんをさつさと辺境に嫁がせていたし、そんなに家族思いだとは思わなかったな。

裏で消さないだけ優しいのかもしれないが、少しイメージと違うな。

そこからこちらを探るようなやり取りが続いたが、あれだけの大立ち回りをやってのけたのだから、色々と気になる点があるのだろうか、波風が立たないように受け答えを続ける。

そして、いくらか言葉を交わすとギルバートさんはしばし何かを考えてとんでもないことを言い出した。

「君の処遇については、後日、人を遣わすか、うちの屋敷で父も交えて話をしよう」

「よろしくお願ひします」

「それと、君の素晴らしい戦いを見ていて思ったんだけど、今晚、僕も鎧を持ってくるから、決闘の相手のラーファンの屋敷を闇夜に紛れて一緒に、焼かないか？」

「き、今日はちよつと・・・5人と連戦したので鎧もしつかり整備した

いなあと思いました、すいません」

「そうか、確かに腐ってもカスタマイズされた鎧5機相手の後だし、整備は必要か。じゃあまた後日会おう」

そう言っただけでギルバートさんはこの場を去っていくと、周囲の目がなにかを確認したのか、再びルクシオンが話しかけてきた。

『うまく気に入ってもらったことができたようですね。それにアロガンツの機能美を理解できるとは。新人類ながら評価に値します』

「いや、お前。それより大事なことがあるだろ。攻略対象並みの顔面から、あんな物騒な言葉が出るとは思わなかったよ。公爵家怖えよ、もうドン引きだよ」

『私がいる限り、マスターに危害は加えさせませんよ。それに、この国の王太子の心を公衆の面前でへし折り、物理的にボコボコにしたマスターに対して学園の生徒達もドン引きでした。類は友を呼ぶ、という言葉もありますし、良かったですね、マスター。権力のあるご友人ができてそうですよ』

「俺、あんなに怖いこと言う人と上手くやってける自信ないんだけど。あ、でも公爵家に行く前に、ギルバートさんの情報を集めておいてくれ」

『スリーサイズ』

「男のなんて要らねえよ！」

いつもながら、相棒の皮肉と嫌味の酷さに頭が痛くなるリオンであった。

第10話 口説くときも別れるときも準備が大事

バルトフアルト君にラーファン家閨討ちデートを断られて、攻略対象5人を籠絡したマリエという女の襲撃はひとまずお預けとなってしまうので

ひとまず実家の屋敷に戻ってパパ上と今後の動きを相談しようと考えながら歩いていたのだが、ふと気付くと医務室のあるエリアに迷い込んでいた。

医務室の入口には、手書きでジルクの名前が書いてある。積極的に会いたい顔ではないが・・・まあ言い訳くらいは聞いてやるか。

部屋を軽くノックして室内に入ると、手足に加え、ミイラ男のように左目以外の顔面を包帯で覆った男がベッドの上で仰向けになっていた。

ジルク、だよな。髪の色がわからなければ躊躇していたかもしれない。

「やあ、久しぶりだね。元気そうで何よりだ」

「どうしてここに!?まだ出張先のはずでは?」

全身大怪我状態のところにも元気そうだねと問いかける嫌味をスルーしやがった。しかも、僕の出張期間を何故把握しているのか。

だが、なんともおあつらえ向きなセリフを言ってくれるじゃないか。

「そうだな・・・君を笑いに来た」

言ってやった!赤い苗字というかファミリーネームになってから、1度は言ってみたかった彗星さんの台詞。

こんな場面で言うのもアレだが、小さな夢はかなった。あと、意地でもレッドファイト!なんて言わないからな。

「僕の出張期間をどうやって知ったのかは置いておくが、急な知らせがあったものでね。大急ぎで戻ってきたのさ。とりあえず、お前が怪我人かどうかは関係ない。歯あ、食いしばれええええ!」

ベッド上に横になっているジルクの、包帯グルグル巻きになっている右足を思いっきり殴りつけ、そのまま圧力を加えると、声にならない

い声を上げて悶絶している。

「ほらほら、どうした？イケメンな顔は避けてやった僕の優しさに感激して声もでないかあ？」

魔力を込めて殴らなかつたのはせめてもの情けだ。魔力込みの全力の拳を顔面に叩き込んでよかつたのだが、こういうやつには地味な嫌がらせのほうが精神的なダメージがでかそうだしな。

しばらく足をグリグリ痛めつけて、だいぶ気も晴れたあたりで、悶絶から立ち直ったジルクが包帯の下から口を開く。

「貴方が王都を離れている間に全てのケリを付けようとしたんですけどね。間に合いませんでしたか」

「こんな決闘騒ぎを大々的に起こした上に、お前がボコボコにされるのを見られなかつた、という意味ではそちらの勝ちかもしれないね」「私を消すおつもりですか」

「妹に牙を向いたことによる個人的な報復はもうやったからな。ここから先は放っておいてもアトリー家がどうにかするだろうさ。うちが始末を付けるのはあの馬鹿王子だ」

「その発言はいささか不敬が過ぎますよ」

「面白いことを言うじゃないか。不敬を問うならパパ上を引っ張り出して公爵家と王家で全面戦争でもしようか。きつと『彼』もまた大活躍してくれるだろう。なにせ、王国の最新技術を結集して作った王太子機ですら、相手にならないとわかつたんだからね」

「やはりバルトファルトは貴方の・・・」

分かつた上でわざと勘違いさせるのは意地悪かもしれないが、決闘の時の僕の行動は、すぐに広がるだろうから、ここは便乗してミスリードさせてもらうとしよう。

「それを今のお前に教えてやるほどの親密さはもうないと思うよ？」

「迂闊でしたね。確かに考えてみれば、貴方が王都を何か月も離れるのに、アンジェリカさんをそのままにするなんてあり得ないでしょうね」

いや、ごめん。実家が護衛くらいは付けてたけど、本当に僕、アンジェ本人には何もしてあげてないんです。

妹が王妃になってから、自分がいかに楽をするかばかり考えてるんです。

「それに、貴方譲りの悪知恵が授けられているなら、僕が色々と策を講じたのに、完敗だったのも領けます」

「え？お前、一体何をしたの？」

「大層なことでもないですよ。バルトファルトの姉を使って彼の鎧に爆弾を仕掛けさせました。結局、ロストアイテムにはほとんどダメーシはありませんでしたけどね。あとは、家族にも責任を取らせると脅した程度ですかね」

「おいおい、たかが決闘でやることとは思えないな」

そんな風に思いつつ、10分ほど前に、バルトファルト君をラーファン家焼き討ちデートに誘ったのを思い出した。

家族に落とし前を付けさせるのは、そんなにおかしいことではないはずだが、なんだかこいつと同レベルってすごく嫌だな。

どうせ誰かがラーファン家に落とし前は付けさせて潰すだろうから、僕は手を引こうかな。

「目的のためなら清濁併せ呑めと、貴方から学んだつもりなんですけどね」

こいつ、シレつと僕にも責任を擦り付けようとしていやがる。

口元は包帯で見えないが、目元は笑っている。まいったな、こいつはブーメランになってしまった。

こんなことばかり成長しやがって。

「そもそも、迂闊というならあのラーファンの女の対応だろう」

「はて、どういうことでしょう」

「とぼけるなよ。はつきり言うぞ、どうしてお前のところで止めなかった？変な女が湧いても馬鹿王子に近付けさせないために俺はお前に経験値を積ませたつもりなんだぞ」

当初に想定していたのは主人公だった。

実際には、追加コンテンツの黒色王子様ルートに入ったようだが、あの乙女ゲーではユリウスルートがトゥルルルートのはずだ。

その主人公をジルクのところまで食い止め、妹が主人公と相対する未

来を防ぐために、色々サポートをしてきたんだ。

そんな思惑を知らないジルクであるが、僕の問いには沈黙を続けている。

というか、攻略対象5人の今の状況は、外部からは明らかに異常だ。

1人の女を取り合うわけでもなく、いがみ合うこともなく、全員がそれなりに仲の良いまま、そろって籠絡されている。

「わかりません」

「は？」

「彼女は少ない言葉を交わしただけで、私のこと、いえ、私達のことを深く理解してくれました。悩み、苦しむ私達はいつの間にか優しく包まれていたのです。気付いたときにはマリエさんを愛していたのだと思います」

「ずいぶんと持ち上げるんだな」

「ええ。そんな素晴らしい女性ですから、ユリウス殿下が惹かれても仕方ありません。マリエさんが殿下を拒まないのであれば、私もそれを尊重したい」

「なんというか、重症だな。クラリス嬢もお気の毒・・・いや、これはアンジェにも特大のブーメランになりかねないか。」

「まだ高校生くらいなのに、理解して包み込むってオカンかニュータイプか、それとも稀代の悪女か。」

「冗談はさておいて、現実的にはまるでマインドコントロール下にあるように思えてならない。洗脳魔法とか、呪い魔術とか、そんなものをかけられたと疑う方がいいのではないだろうか。」

「いや、もう僕がそれを考えることに意味はないな。」

「攻略対象5人はこんな有様だし、主人公は追加の攻略対象をロツクオンして、追加ルートに入ったように見える。」

「妹の断罪を免れた、主人公がユリウスルートに入らなかったという2点においては僕の勝ちかもしれないが、」

「妹が王妃になって、父の跡を継いだ僕は早めに隠居して、この高い顔面偏差値をフル活用してたくさんの女の子と楽しく恋愛しながら平穩に暮らす野望が潰えた、という意味では大負けだ。」

ここからは、ある意味、筋書きのないシナリオの中で生きていかなければならない。まるで人生そのものようだね。

さて、そうなれば、オリジナルの攻略対象は、僕にとってほとんど用なしだ。あの馬鹿王子以外に憎しみはないが、それでも邪魔をされるのは困る。

「それと、貴方や陛下とは違った、真実の愛というものを見つけたのだと思っただのも否定できませんね」

「遠回しに僕への反発心が理由で、こんな大騒ぎを起こしたみたいに聞こえるんだが？」

「さて、どうでしょうかね」

「お前ら、もう後には引けないぞ。アンジエを巻き込んだ以上、俺も手を差し出すことはできないからな」

「わかってます、アトリー家にも婚約を解消する旨は伝えてました」

「それで済ましてくれるかねえ……執着してくる相手と別れるのって、くつつくよりも何倍も大変なんだぞ。別れ話を拗らせて刺されないように気を付けろよ」

「おや、もしかして実体験ですか」

「……大昔の話だよ」

「え……？」

そう。大昔、僕の前世が終わる原因だ。

結婚を考えてた女が、急に仕事を辞めたいとか、自分の親と同居したいだとか、僕の給料を小遣い制にさせるだとか言ってきたから、ためえふぎけんなどばかりに大喧嘩から別れ話に発展し、

二度と顔を見せるなど言ったら隠し持っていた包丁でズブリですよ、なんだろう、流れ出る血ってちよつと温かいんだとか、少し手がバトつくなあととか、服のクリーニングどうしようとか思ってたなら、人生終わってたよ！

「手っ取り早いのは徹底的に嫌われるように振る舞うことだ、せいぜい頑張ってたな」

「さすが、実践に裏付けされたテクニクは参考になりますね」

「あと、お前も、あのラーファンの小娘も、僕やアンジエにもう手を出

してくるなよ。今回はバルトファルト君が予想以上に暴れ回ってくれたから個人レベルでは手を引くが、僕も決して大人しくはないぞ」
「ふふっ、肝に命じましょう」

「何かおかしいことを言ったか？」

「普段はのらりくらりとした口振りなのに、本気するときには一人称が俺に変わってドスを利かせてくるのだと気づきました」

「・・・よし、もう片方の足も一発、逝つとくか」

絶叫上げて気絶したジルクを放置して病室から出ると、扉の外には、クラリス嬢の取り巻きをしているガチムチ系男子が待ち構えていた。

たしかアトリー家の文官チームの一人の息子さんだったな、確か名前はダンとかいったっけ。隻眼のアップercut使いにパパさんを始末されないように気をつけてな。

おそらく動けないジルクのところクラリス嬢を押しかけさせるつもりなのだろうね。

「ジルクのやつと話をすることはできますか」

「実は、ぶん殴つたら気絶しちゃった☆妹に牙を向けたから、つい、カッとなつてね。その・・・折れた足を思いつきり・・・うん、ごめんね」

「そ、そうですか。あと先程、公爵家の方がこちらにいらして伝言をお預かりしました。早く屋敷に戻るようにとのことでした」

どうして僕がここにいるのがわかったのか、それにどうしてアトリー家のダン君に託したのか。

まるで僕に情報が伝わるのを遅らせようとしているようだ。

「それならまだうちの馬車が近くにいるかもしれないな。そこに乗って帰るとしよう」

「いや、それが、公爵家の方によると、妹さんを迎えに来た馬車は定員オーバーになったので乗れません、とのことでした」

なんだそのピンポイントな嫌がらせは！というか、うちの人間で僕

にこんな仕打ちをするやつ的心当たりなんて1人しかいない。

「もしかして、君に伝言を預けたのってメガネをかけた性格の悪そうなメイドかい」

「性格はわかりませんが、眼鏡をかけたメイドの方です」

「久しぶりにやってくれたな、コーデリアアアアアアア!!!」

叫ぶ僕、そして顔を引きつらせてドン引きしているダン君。

おのれ、あの陰険女め！アンジエの側近じゃなければ、さっさとどこぞの辺境に嫁がせてやるといふのに！

第11話 総集編にも味変は加えたい

乗り物が定員だから乗れない、等というまるで骨川ス○夫のような嫌がらせにより、自力で実家の屋敷にたどり着いたのだが、執事から、荷物を置いてすぐに父の部屋に向かうよう促された。

風呂と食事の後にくれたっていいじゃないか。

「戻りました。私がない間にずいぶん大騒ぎになっていましたね」

「ご苦労。そうだな、何から話そうか・・・」

父が大きく息を吐きながら天井を眺めている。さすがに疲れが隠しきれしていない。

決闘騒動が始まって今日まで色々あったのだろうことは想像に難くないね。たまには父の言うことを先回りしてみようか。

「王妃派を粛清して、あの馬鹿王子の首を取りに行きましようか」

「過激だな。気持ちとしては同意するが・・・はあ、ラーシエルへの抑えを考えれば、あの連中は生かしておかざるを得まい。それに首を取ろうにも、簡単にはいくまい」

「せめて法に触れるようなことをしてくれていれば始末する大義が得られたのに惜しいところです」

「だが、廃嫡は譲らん。落とし前はなんとしても付けねばな」

廃嫡か。次期国王からヒラの王族に格下げとなれば、命こそ取られないものの、割り当てられる予算は激減、名誉なんて地に落ちるようなものだ。

地に落ちるか・・・社会的地位を2番目に高いところから崖下にまで叩き落すというわけか。ふふっ、さながらレッドグレイブパパによる地位のレッドフォールだな。

おや、父が厳しそうな眼を僕に向けている。

「どうして僕を睨みますか？」

「気のせいかな、馬鹿にされたような気がした」

「気のせいです。それで、うちの派閥はこの後、どうするおつもりで

？」

「どうするも、こうするも、こうなってしまうてはな・・・王宮を焼いたとて、貴族も民もついては来まい」

「アンジエが王妃になることを見越して集まってきた連中もいなくなるでしょうしね」

「細々と動くことはあっても、しばらくは派閥の体制を整え直すくらいしかないだろうな」

味方は激減するし、王宮での影響力は低下する。

救いは、領地の運営に影響はないし、決闘騒動の勝者は妹であり公爵家だ。

個人的には、父が反乱を起こすようなことをしなくてよかった。

クーデターが成功したとしても、その場合、父の次に王になるのは僕だ。そんな面倒ごとはまっぴら御免こうむりたい。

報告、連絡、相談して責任を擦り付ける相手がない仕事なんてしたくないでござる。

「そうだ、思い出した。アンジエの代理人だが、お前が囲い込んでいると言う噂が決闘会場で飛び交っていたそうだな」

「ずいぶんと耳が早いですね。根も葉もない噂ですよ。決闘後に礼を言いに接触しましたが、それが初対面です。」

ただ、いい機会です。本当に取り込んでしまおうかと。僕個人としても、頼れる戦力は欲しい」

「お前のところにいる、辺境貴族の集まりで困うつもりか？たまには寄子に旨味を与えて繋ぎ止めることも覚えておけ」

これは僕の弱いところを突かれたな。王宮での役人生活のおかげで、案件の通し方や予算のぶん獲り方は学んだが、派閥を率いてコントロールすることは未経験に等しい。

そしてこの弱みは派閥を率いる地位を継ぐ僕には致命的となりかねない。父が僕の役人生活をよく思わないのはこの辺りが原因の1つだろう。

「特定の寄子に、あんな強大な力を渡しては、寄子の間に波風が立ってしまいますよ。見方を変えれば、馬鹿王子との婚約を決定的に潰した

張本人でもありますから、腫物を押し付ける形にもなりかねません。あとは、本人が命乞いをするために父上に会いたいそうなので、そのときに話を聞いてみましょう」

「それもそうだな」

僕が結婚の面倒を見た辺境の貴族達は、事実上、僕個人の下に付いている状態になっている。

この辺境の愉快的仲間達の関係者に、年頃の、ケモナーになってない女子がいれば、バルトフアルト君と政略結婚させて、早々に取り込んでしまいたい。

しかし、なんといつても相手はあの乙女ゲーの主人公様の攻略対象だ。

恋愛ごとに関しては、できるだけ主人公以外が近付けないようにしたほうが安全に思える。

ついでに言えば、寄子の関係者がバルトフアルト君を婿にとって変な野心を持つても面倒だ。

「あと、陛下との夜遊びはこれまでにしておけ、あらぬ憶測を呼びかねん」

「そうすると、僕がやっている陛下の女性関係の把握を大臣が自分で行うことになって、アトリー家、というか大臣の夫婦関係が荒れますよ」

「お前は何を言ってるんだ？それは公爵家が気にすることではなからう」

「弱体化する公爵家が、王宮内に強い影響力を持つアトリー家に恩を売るチャンスですよ。それにアトリー家だつて同じラーファンの女の被害者です、裏でしつかり手を組んでおけば、うちにとってプラスになります」

「そこまでしてローランドと夜遊びを続けたいのか!?それよりもお前は領地の運営も、後継ぎ作りすらしてないではないか」

「監査先で領地運営の裏側まで見てますから、机上論は完璧です！それに口説いたメイドや侍女、女官をすぐ異動させてるのは父上じゃないですか」

「全員そろって騎士家か平民出身ではないか！愛人ばかり囲って、ローランドのように隠し子ばかり作らせるわけにはいかん！」

「いやいや、陛下は貴族家出身の女にも手を出しますよ！さすが陛下！」

「もうわかった！王宮勤めは認めてやる！だが非常勤の顧問以上は許さん！あと夜遊びも控えろ！」

やった！無職のボンボンにならずに済んだ。

「わかりました。あと非常勤なら、今やっている案件の引継ぎがあるので、しばらくは頻繁に王宮に顔を出しますよ」

仕事の引継放棄はダメ絶対！引継のお残しは許しまへんでえええええ！

「はあ・・・こうなるなら、お前にもつと領主貴族達を救済させておけばよかったな。正妻を駆除するだけで、お前を支持する勢力があんなに増えるなら、辺境周辺を一気にまとめあげて、お前を新しい王に担ぎ上げることもできたかもしれん・・・」

父上がとんでもないことを言い出した。

やめてください、そんな面倒くさいこと、絶対に嫌ですからね。

攻略対象5人との決闘から数日後、指定された時間にリオンは公爵家の屋敷を訪れていた。

使用人から待機するよう言われた部屋の高級そうなソファに体を預けて大きく息を吐いていると、ルクシオンが音もなく姿を現した。

「気前よく賭けの儲けを使うのですね」

「これで全部じゃないしな。確実に助かるように手は打っておきたい」

「マスターが命じてくれれば、すぐに私がこんな国、滅ぼして見せますよ」

「その後が絶対に面倒臭くなるからパス。この答えをしたの、何回目だよ」

「そうですね。あとマスターから指示のあったアンジェリカの兄の件

ですが、なかなか面白い調査結果が出ましたよ。詳細はこちらをご覧ください」

ルクシオンの一つ目が光り、ホログラムの文書がリオンの前に浮かび上がった。

そこには、ルクシオンが調べ上げた、ギルバートについての詳細が記されていた。

「詳細はそちらのとおりですが、特筆すべき点は2つです」

「ここにある、辺境の底辺グループの結婚を手助けしたってのと、国境沿いの監査か」

「はい。いずれもアンジェリカが王妃になったときに、災いの芽となるものを摘むためのようです」

「・・・どういうことだ?」

リオンの問いに対して、ルクシオンが一つ目を左右に振り、馬鹿にしたような口調で説明を続ける。

「マスター達のような辺境出身の貴族が学園で虐げられれば、いずれ王国への反抗心を抱きます。特にあの学園での3年間は、辺境の下級貴族達に王国への憎悪を育むには十分すぎます。そこを助けた結果、付いた異名が辺境の愛のメシアです」

「そりゃ、あんな扱いだからな。俺は今回で一抜けするから関係なくなるからラツキーだな」

「さすがマスター、クズっぷりが安定していますね」

「反乱を起こす連中よりかははるかにマシだろ」

「そういった勢力に対して、より直接的に動き始めたのが、国境沿いの監査です。国王の肝いりで編成された部署で貴族達の行財政監査を行うようになります。そこでは、監査の名の下に、王都で散財する領主の正妻達の悪行を晒し上げて、次々と離縁させていくようになりました。ちなみに正妻達のその後の消息は不明です。実家に連れ戻されて一生軟禁、というところでしょうね」

「え?そんなことできるか?」

「散財の結果、国境の守りを危うくした、という大義名分の下、国王や公爵家の威光を振りかざしたようです。正妻達の中には、マスターの

殺害を目論んだ淑女の森構成員も多く含まれます。力のある貴族しかできない強引な手法ですが、悪妻と縁を切れた領主達は、国境沿いの防衛力を強化するとともに、王国への忠誠を高めています」

「親父のところにもガサ入れに来てほしいもんだな。それにしても、どれもこれもアンジェリカさんのためっていうのが凄いな」

ルクシオンから聞かされるギルバートの行動原理をリオンは理解できずにいた。それと同時に、妹のために、こんなにも大立ち回りをするのは異常に思えた。

（あの乙女ゲーで、アンジェリカさんの兄が出てくることはなかった。それなのに、この行動は“キャラ”が立ちすぎているな、まさか…）
「マスター。ギルバートは、マリエと同じく、転生者だと思っていますか」

「その可能性は否定できないな。だが、アンジェリカさんの“兄”としての行動としては、筋が通らなくもない」

「ええ、マスターが侵攻を予告する公国以外との国境沿いも固めていきますし、重度のシスコンであるという話がありますので、溺愛する妹のための行動としては説明がつかますね」

5人の攻略対象をわずか数ヶ月で籠絡して逆ハーレムルートを完成させたマリエのことをリオンは思い出す。

（悪役令嬢の兄・・・攻略対象としてはよくあるパターンだな。あの乙女ゲーは課金要素が充実していた、俺の死後に有料でコンテンツの追加があったらどうだ？それなら急なキャラ立ちも理由が付く・・・かもしれないな）

奇しくも、リオンとギルバート、2人がそれぞれを追加の攻略対象だという推測に辿り着こうとしていた。

「ちなみに、マスターは一部の貴族から、ギルバートが囲っている秘密兵器だと認識されていますよ」

「え?!何でだよ!」

「マスターが決闘の際に、アンジェリカと敵対した王太子ユリウス以下5名を精神的にも、物理的にも完膚なきまでに叩き潰したことを、ギルバートが現場で大喜びしていたようです。それを多くの生徒達

が目撃しています。また、ギルバートが躊躇なく王都の悪妻を消していく様と、マスターの容赦ない戦い方に共通点が見出されているのでしようね」

「ルクシオン、俺、金だけ置いて帰りたい」

この後のレッドグレイブ公爵との面会が不安で仕方ないリオンであった。

第12話 屁理屈も立派な理屈

父との話を終えて、僕は妹の部屋に向かっていた。どこぞの腹黒メイドのせいで、まだ顔すら見られていないからだ。

部屋の前に到着し、扉の前で一呼吸する。いざ話すとすると、物心ついた頃から将来の王妃となるべく人生を賭けていた妹に何を話したものでしょうか。

そんなことを考えていると、部屋の扉が中から開いた。

出てきたのは、肩の辺りまで伸びた亜麻色の髪を持ち、優しそうな顔立ちをした、あの学園の女生徒だった。

直接、顔を合わせたのは初めてであるが、僕は彼女が誰であるかを知っている。あの乙女ゲーの主人公、つまりこの世界の主人公様だ。

というか、何で主人公様が、悪役令嬢であるうちの妹と一緒にいるのだろうか。

決闘会場では遠くから見ただけだが、男目線から見たときに、広く満遍なくストライクゾーンに入ってくると思える容姿をしているなと感じた。

うちの妹ほどではないが立派な胸部装甲、かといって妹ほどウエストが締まっているわけではなく、男が好むボリユームのぽっちゃり感もある。大事なものは男が言うぽっちゃりだ。女の言うぽっちゃりとは、別次元の概念であることを忘れてはならない。

あの乙女ゲーは男性向けゲームを多く開発するメーカーが発売したものだ。社内の新規路線として乙女ゲーを作るにしても、主人公のデザイン決定に至る過程には、社内の主要ポストにいる男性の意見が多いに反映したのだろうと考えれば、目の前の主人公の容姿にも納得がいく。

言語化が難しいのだが、あえて言うなら、男が嫌う要素がとても少ない、とでもいうべきか。

僕？僕は元々地味目な子のほうが好きだ。前世で僕を刺した女が派手系だったことの反動もあるかもしれないけどね。

そんな外観を持つ主人公様だが、ドアを開けたら見知らぬ男がいて

驚いている様子だ。戸惑い、何を言うべきか迷っているようにも見える。

よし、ここはバルトファルト君に続いて、主人公様とも仲良しになろう。

将来は聖女という俗世間とは離れたポジションに就くらしいが、それでも世俗の権力の後ろ盾として幅を利かせれば実家も威光をキープできる。

「もしかしてアンジェのお友達かな？ 私はギルバート・ラファ・レッドグレイブ、アンジェリカの兄です」

とびっきりのスマイルで自己紹介をしながら、主人公様の手を取る。

少女漫画であれば、僕の背景に花が咲くか、キラキラ光るエフェクトが入るだろう。

「は、はい、オリヴィアといいます。その・・・お邪魔しています」

何だろう、友達の家遊びに行つて、その家族にする挨拶である“お邪魔しています”を今世で初めて聞いて、懐かしさがこみあげてくる。今世では、色々と面倒くさい口上とかが続くから、鬱陶しいんだよな。

「今日、出張先から王都に戻ってきたんだが、色々あったと聞いている。妹に付き添つてくれてどうもありがとう」

「いえ・・・私は傍にいただけですから・・・今は疲れて眠ってしまいました」

「そうか、きつと妹も辛かっただろうから、君と一緒にいてくれて心が安らいだと思う」

よくよく考えなくても、主人公様が悪役令嬢に付き添つてゐるってすごい絵面だよな。本来は対立する2人のはずなのに。

アン○ン男とバイ○ン男、ワクワク系野菜戦闘民族と宇宙の帝王、魂世界の11番隊隊長と12番隊隊長が仲良くしているようなものだろうか。

少年漫画であれば、新たな強敵の登場の際に、しばらく休戦だとか、お前を倒すのは俺だとか言いながらライバル達が手を組むのが読者

受けする展開かもしれないが、ここは乙女ゲーの世界だ。顧客が違
う。

あと、オリヴィアさんって特待生って設定だよな。ってことは、あ
の王妃が言ってた体制変革の第一弾か。

「もしかして、君が噂の特待生かな？あの学園はかなり特殊なところ
だから、苦労してないかい？」

「最初は辛いこともありましたが、今は何とか頑張ってます」
なるほど、そこにバルトファルト君が出てくるわけか。

オリジナルの攻略対象5人がラーファンの女に釘付けになってる
間に主人公様がロックオンしたのが、追加コンテンツの黒王子様だっ
たということなのだろう。

主人公様を取り巻く現在の状況を色々と考えながら、アイスブレイ
クな会話を続けていたのだが、集中して会話をしていなかった僕はこ
こでポカをやらかしてしまう。

「男子は貴族相手の婚活に必死だし、調子に乗った女子は亜人連れの
性悪ばかりで大変だろう。そうだ、妹が世話になった御礼を兼ねて今
度、美味しいご飯でもどうだい？」

しまったあああああ！つい、考えなしに口が滑った。相手が貴
族じゃないことで油断したのもある。息を吐くように食事に誘って
しまったというのが正直なところだろう。

〇〇で大変だね、からワンフリーズ入れて、お礼とかお詫びとか共
通の話題を経由させて食事に誘うという自分の中のテンプレムーブ
を無意識にキメてしまった。

相手は主人公様だ。これまでのように、ゲームシナリオに影響を与
える行動を取ったときに発生する運命の修正力さん（仮）が出てきて
しまうかもしれない。

オリヴィアさんは引いているのか、フリーズしているのかわからな
いが、口を開けたまま、パチパチと音がしそうなくらい瞬きをしてい
る。

まずいぞ、運命の修正力（仮）的にもそうだし、攻略対象のバルト
ファルト君から見たら、僕は間男認定されてしまいかねない。

そんな危機的状況の中、部屋の中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「騎士だけでなく平民の女性にまで無差別に口説いて回るのは相変わらずですね」

最悪だあああああ！ある意味、最も聞かれたくない相手に、最悪の場面を聞かれてしまった。

部屋から出てきたのは、この公爵家の屋敷の中でただ一人、僕に毒づく腹黒メガネメイド、コーデリア・フォウ・イーストンだった。

そうか、今回の修正力さんはお前か。

「アンジェリカ様はお休みになったばかりです。お静かに願います」

メガネをくいと上げて僕に軽蔑のジト目を向けてくる。おい、お前がやってくれたス〇オムーブを忘れてないからな。

「久しぶりだな、コーデリア。相変わらず元気そうで残念だよ」

「若様も、少しは体を壊してくれば無節操に下々の女性を口説くこともなくなるでしょうに残念です」

「君と話していると、こんなに口の悪いメイドを放逐しない自分がいかに懐の広い人間であるかを再確認できるね」

「あら、それを決めるのは公爵様です。若様に何か決める権限があるとは初めて聞きました」

「アンジェが結婚したら、そのまま一緒にいなくなると思ったのに……」

「いつまでも女を弄ぶことばかりしている方に言われましても……貴方も気を付けてくださいね」

「え……はい！」

コーデリアが突然、オリヴィアさんに話を振った。戸惑いながら急いで返事をするオリヴィアさんも可愛い。

いや、弄んでないからね！イチヤイチャする子達には満遍なく愛情を注いでるし、甲斐性もあるから！

というか、今回の修正力さんはコーデリアで済んで良かったのかも
しれないな、うん。今日だけはありがとうと言ってやる！

決闘から数日後、今日はバルトファルト君がうちの屋敷を訪れていた。

「私に君の尻拭いをしろと言うのかね」

「自分には王宮に何の伝手もありません。ですがレッドグレイブ家の当主である貴方ならばと」

父の問いに答えながら、バルトファルト君が差し出したのは、かなりの量の白金貨だった。

ざっくり前世の価値で換算しても数十億円になるだろう。僕が言うのもおかしいかもしれないが、お貴族様は金銭感覚がおかしい。

「娘の代理人を引き受けてくれたこともある。面倒は見よう。だが、あれもこれも守ってくれというのは困る」

「はい。自分の助命、それと家族に責任が及ばないようにしていただきたいのです」

ここまでは想定していた命乞いのやり取りだ。

彼の話聞きつつ、今日までに集めさせたバルトファルト君についての情報を記した資料に目を通す。

黒い鎧の名称はアロガンツというらしい。7つの大罪の傲慢って、なかなか厨二テイスト漂う名前だな。ロストアイテムというなら他の6罪に相当する鎧もあるのだろうか。

それと、発見した飛行船はパルトナーという名前の700メートルクラスの大型船らしい。

彼の飛行船もゲーム内の課金メニューにはなかったから、新たなデザインの新飛行船と鎧、攻略対象がセットな追加コンテンツなのだろう。

ワンチャン、前世の妹が僕の金で課金した最強の飛行船、いや宇宙戦艦ルクシオンとかが出てきたらテンションが上がると思ったが、現実には厳しい。

前世の妹いわく、高い戦闘力、内部のファクトリーその他の支援性能諸々を合わせて、ゲームバランスをぶっ壊す戦艦らしいからね。

「名誉は地に落ちた、次は地位を捨てると?」

「爵位と騎士の称号は返上します。自分には受け取る資格がありませんので」

ん!?それだとあの力を爵位という制度でこの国に縛り付けておくことができなくなってしまうじゃないか!

バルトフアルト君がさっさと王国から外国にトンスラして主人公との恋愛が実らないのは非常にまずい。僕の戦力増強どころか、今度はどうな修正力が発現するかわかったものじゃない!

ん?修正力・・・ならばそもそも、修正させなければいいんだ!

アンジェの結婚による将来の安泰の野望は、もはや潰えた。

となれば、次の手段だ。せっかく将来の聖女とその相手の後ろ盾と公爵家がお近づきになったんだ。

僕自身はプレイしてないから正確にはわからないが、ゲームの結末に沿うような形に持って行って、聖女と攻略対象の後ろ盾となることにより、実家の威光を確かなものにしよう!

ここで選択を間違えてバッドエンド、なんて結末は洒落にならない! たまらず、父とバルトフアルト君の会話に割って入ることにする。

「1つ聞きたい、君の本当の目的は何だ?それだけの力があるんだ、上手く立ち回れば、この先、ずつと上を目指すことも可能だろう。それを捨ててまでしたかったことは何なのかな?」

「国のためです!あのまま女に騙される殿下を放っておくことができませんか!誰かがやらねばならないと思っただけです!」

なんだろうか、速攻で帰ってきた答えがすっごく白々しい。

王妃様激おこ事件のときに、どこかのイケメンが似たようなことを言ってた気がする。

ん?父上、どうして笑いを堪えているのですか?

「僕はてっきり結婚相手を紹介してほしいと言われると思ってたんだが、どうやら違うようだね」

「先日までの自分には魅力的な話ですが、今となってはもう関係のない話ですね」

攻略対象殿の頭の中では、もう退学後のことが考えられているのだろうか。

いや、ほんとにまずいって。主人公と攻略対象を何としても王国の中でくつつけないとゲームのシナリオが破綻する。やや強引かもしれないが、彼の内心に踏み込むしかないか。

「僕もあの学園の卒業生だ、男爵家出身の君の学園での境遇には想像がつく。地位も名誉も捨てる、というのは潔く、美しく聞こえるが、同時に、貴族の負担から免れられることでもある。国への貢献しかし、貴族のしがらみしかり、そして結婚相手しかり。騎士か、平民階級の中に一緒になりたい相手でもいるのかな？」

「え!? あ、いや、そんな相手はいないですけど・・・」

今日の会話の中で初めてバルトファルト君から流暢な返事が来なかった。

否定はするものの口籠るというのは、やはり主人公のことを意識しているからなのだろうか。

まだ1年生の1学期が終わっただけだから、実際には気になる程度かもしれないね。あの5人の馬鹿と違って、攻略難易度が高いのかもしれない。

最終的に主人公もろとも取り込むために、まずは他の家に先駆けて手付けだけでもしておくか。

「ちなみに、爵位を返上して領地でどうやって稼いでいくつもりだい？」

「しばらくは実家に世話になろうかと思えます」

冒険者として生きていくわけではないのか。ひとまず国外にトンズラされることは避けられそうだな。

「調べたが、実家には君を殺そうとした父親の正妻が寄生しているだろう?」

「普段は王都にいますから、関わらなければ問題ないですよ」

「そうか・・・僕もああいった奴らを駆除するために頑張っていたんだが、国境周辺だけで手いっぱいだね。“森”の連中から君を守れなかったのを心苦しく思ってるんだよ」

「結果的に生きてるわけですし、気にしないでください」

その寛大さ、ロストアイテムの力があってこそその余裕だろうか。そ

れとも攻略対象ならでは人の良さだろうか。

いずれにしても大したものだ、僕だったら間違いなく報復する。

「そうか・・・だが、この先に君がどうなったとしても、正妻が何か仕掛けてくるなら僕を頼ってくれ。公爵家としてではないが、僕が面倒を見よう。外野が何と言おうが、君は僕の妹の恩人だからね」

「あ、ありがとうございます、考えておきます」

遠慮するなよ、あんなチート級の強さの鎧を持つてる君に僕は夢中なんだからさ。

「話は終わったかな？1つ、いや2つ頼みがあるんだが・・・」

何やら父からまだ話があるらしい。

命乞いの会話が終わり、屋敷の廊下を小急ぎで歩くりオンであるが、足取りはとても軽やかだった。

(自由だあああああ！)

自分で思っていたよりも公爵家の反応は良かった、むしろ、父の忌々しい正妻のせいで、逆に気に入ってもらっているのがわかった。学園からも、婚活からも、貴族としての義務からも逃げられて、この先の未来はとても明るく思えた。

そんなりオンにしか聞こえない声で、ルクシオンが姿を消したまま話しかけてきた。

「マスターの目論見はお見通しだったようですが？」

「それでも今より悪くなることはないさ。まあ、寂しさが無いと言ったら？になるだろうけどさ」

同じ底辺グループのダニエルやレイモンド、師匠から学ぶお茶、食堂の人気メニュー等、心残りはあるが、それでも、きつと気ままなスローライフが自分を待ってるはずだと期待に胸が膨らむ。

「途中まではよく答えられていましたが、オリヴィアのことを言われてからややペースを乱されましたね。ギルバートが下級貴族の事情に詳しくなりました」

「いや、相手は主人公様、将来の聖女様だぞ、いつも言ってるけど、俺

みたいなモブには恐れ多いよ」

「いずれにしても公爵家はマスターに興味深々でしたね。他の貴族に取り込まれる前に囲い込もうとしているのがよくわかります」

「爵位もなくなる学生を囲ったってしょうがないのにな。あとは静かにお沙汰を待つとするよ。それよりも、ヴィンスさんをお願いをどうする?」

「オリヴィアとアンジェリカをマスターの実家で休養させる、というものですか?」

「もう1つの方だよ」

「そこは私に一つ考えがあります。とりあえずマスターは、オリヴィアとアンジェリカの迎えにでも行って、公爵家の好感度をせいぜい稼いでください」

「人は、その社会の中で生きていかなきゃいけないんだ。俺は大人だからな。助命のためなら、喜んでゴマすりだってしてやるよ」

「父上、実際に会ってみてどう思われました?」

バルトフアルト君が下がった後、父にその感想を聞いてみることにした。

「地位も名誉も捨てて殿下を諫めるなんて立派な覚悟じゃないか……などと思っただかもしれないな、どこかのバカ息子を見た後でなければ」

「父上、僕の知らない隠し子でもいたんですか? いつの間にそんな“お戯れ”を……見直しました!」

「馬鹿なことを言ってる余裕があるなら、明日にでも公爵の爵位を継がせてやろうか?」

「そんなカリカリしないでくださいよ。この苦境を乗り切るためには父上の剛腕がまだまだ必要です」

「まったく……一体いつからこの国では白々しい命乞いをするときに国のため、というのが流行り出したのか」

「それだけ自分の身が可愛いんですよ。彼とは仲良くなれそうです」

「実際に話を聞いて、お前はこれからどうするつもりだ？」

「王妃派への嫌がらせも兼ねて、上にあげてやりたいかなと思います」

「本人の意思に反してもか？」

「助けてくれとは言ってましたが、爵位を没収してくれとは言ってませんよ」

「屁理屈だな」

「ならば野に放てと？あれだけの力が爵位の鎖から解き放たれて外国に流出するのは問題でしょう」

攻略対象であるバルトファルト君は、現時点では卒業後に男爵になる予定だったはずだ。

一方、聖女というのはこの国の宗教上、常在ではないもの、重要な位置づけをされている。そのこと釣り合いが取れるようになるためには、男爵のままでは少し弱い気もする。

伯爵なら充分だろうが、そこまで引き上げるにはハードルが物凄く高くなる。

あ、そういえば元祖攻略対象の1人であるジルクの実家は子爵だった。とすれば、当面はそこまで引つ張り上げれば十分か。うん、自分のやるべきことがうまく整理できたな。

「爵位を鎖と言うのも相当なものだぞ。だが、まずは頼まれた尻拭いをしつかりしてやるとするか」

「ところで父上、先ほどのバルトファルト君へのお願いですが、どうしてあのようなことを？」

「王宮の役所仕事ばかりで初陣すらまだ経験してない部門の家の跡取り息子がいるのでな。功績を上げる機会を作ってやるから、お前にも、これからは当家のためにしつかり働いてもらおうぞ」

「僕、女の子と遊ぶ以外はインドア派なので荒事は苦手なんですけどね」

第13話 スキャンダルは忘れた頃に発掘される

父の頼みにより、アンジェ達がバルトファルト君の実家へ療養に向いている頃、僕は残った監査の仕事の引継をするために王宮に顔を出していた。

引継と一言で言えば簡単だが、僕が持っていた案件は、正攻法で潰すのが難しい案件、要は面倒な案件ばかりであり、その進捗を伝え、これから何をすべきか、課題は何か、突破口となり得るものが何か等の話は相当のボリュームとなる。

一方の引き継がれる側も、当然これまでの仕事に加えて、という形になるので、だいたい、連日、夜になってから差し入れ持参で行っている。

何日にも渡って続けてきた話が一段落した頃、気持ち少し緩んだのか、もう数年間、一緒に仕事をしてきた文官がポツリと呟いた。

「我々が言うのもなんですが、ホント、色々大変でしたね・・・」
「僕なんて、一体何のためにこの仕事を頑張ってきたのか・・・もう虚無ですよ、虚無」

ゲームのシナリオ上は数年後に起こりうる公国の進行の被害を抑制するため、そして、妹が王妃になってから苦労しないで済み、僕が早々に隠居できる平和な国を作るために、社畜魂を燃やして連日遅くまで仕事をしてきたのが、オリジナルの攻略対象5人全員を数ヶ月で籠絡した女1人のせいだ台無しになってしまった。

「こんな展開、誰も予想できませんよ」
「それだったら僕達は歴史の転換点に立ち会ったのかもしれないね」

「自分が現役の間に、そんなところに出くわしたくはなかったです」
「実際に役人っぽい台詞だ。この先のゲームの展開を知らなかったら僕も同じことを思っただろう。」

「そういえば、”立ち会う”で思い出しましたが、決闘会場の話、聞きましたよ」

「はて、何のことやらわかりませんね。心当たりが多すぎます」

「おかしいと思ったんですよ、妹さんが大事だって言いながら、私達と一緒にしよつちゆう王都を離れたまま、何か月も国境沿いの貴族領を調査してるんですから。あんな隠し玉、どうやって捕まえたんですか？」

世間話の本題はそこだったか。

僕と一緒に仕事をしている部署の文官達の多くは、アトリー家の傘下にいる。

彼らはアトリーの目であり、耳であり、そして、この乙女ゲームの世界にストーカーという概念を自らの身をもって作り出したクラリス嬢の手足でもある。

「その質問、同僚としてですか？それともアトリーの間諜としてですか？」

「そんなの両方に決まってるじゃないですか！」

少し意地悪く言ったのだが、満面の笑みでサムズアップしながら、全面的に開き直った回答が返ってきた。

こういった情報収集は、向こうの方が一枚上手だな。

「だったら秘密です。調査事項がまた一つ増えちゃいましたね」

「あんなに厄介な案件を押し付けていくのに、さらに仕事を増やすなんて・・・その鬼っぷり、ギルバート様はやっぱりレッドグレイブ公爵のご子息ですね」

「父が仕事を増やしているって？」

「とぼけないでください。ユリウス殿下を廃嫡にするために現在進行形で剛腕を振るってるじゃないですか」

「ああ・・・だからバーナード大臣も連日深夜までお偉いさんの会議に出ずっぱりなんです。でも大臣だってマーマリア家にはきっちり落とし前を付けさせるんでしょう？」

「当然ですよ、でもそれより我々が心配しているのはお嬢様なんです。実は・・・」

文官の口から聞かされたのは、あのクラリス嬢がジルクに会えないことが続き過ぎた結果、しばらく塞ぎ込んだ後、専属使用人、つまり亜人の奴隷を囲い始め、日に日に帰宅時間も遅くなり始めている、と

いうシヨツキングな話だった。

おいおい、いくらこの国の貴族の女の半分以上がケモノ女だとしても、さすがに閣僚級の伯爵家がそれをやったら体面というものが問題にならないのか。

体面：・貴族の価値観から見た僕はきつと奇人、変人だろうな、うん、パパ上様、ごめんちゃい。

「ギルバート様、今、自分にもブーメランになるようなことを思いませんでしたか？」

君はいつからエスパーになったのかね。

僕は中身が平凡なりーマンだから仕方ないんだ、貴公子っぽく振る舞おうとしてもどこかでボロが出てしまいかねない。ならばいっそのこと、最初から変わり者だと思われていたほうが好都合なんだ！

「それはまた心当たりが多すぎて困ります。ただ、クラリス嬢が…あまり僕は好かれていませんでしたが、知っている相手がそうやっていくのは気分が悪くなる話ですね」

「ギルバート様にそう言ってもらえるとは思いませんでした。ところで、送別会も兼ねて、皆で気晴らしに一席どうですか？」

「それはいい。僕もしばらく王都の屋敷と王宮の往復ばかりだったからありがたい」

お貴族様どうしで行われる、格式ばった集まりとは異なり、久しぶりに肩肘張らないで済む職場の飲み会が決まり、善は急げと仕事を切り上げた僕達は、王宮からは離れたところにある、飲み屋等が密集しているエリアに向かっていた。

差し入れ用にこっそり持ち込んだ酒類を、飲み屋に向かう道中で、ゼロ次会と称してみんなで飲み、僕達はほろ酔い気分になっていく。向かう先には、前世で言えば歌舞伎町みたいなエリアだ。いわゆる居酒屋に加えて、特殊接待店舗、陛下が夜遊びで使うような会員制飲食店、ひとときの休憩所等がひしめいている。

既にアトリー家の文官達が予約してくれたという店に向かつて、僕

や文官達数名が歓楽街を進んでいたのだが、いつも職場の飲み会で使っていた店のある通りを、今日に限ってはスルーして、先導の役人が歩いていく。

「あれ？今日はいつもの店じゃないんですか？」

「そうなんですよ、たまには違う店を開拓するのも面白いかなと思いまして・・・」

文官の答えを聞いて、もしかしたら開拓と称して、いつもとは違う店を僕のために予約してくれたのかな、などと思いはじめた矢先だった。

見たくもなかった、とんでもないものが視界に入ってきた。

かつては時間をかけて編み込まれたであろう髪型は、肩先で軽く流してウエーブがかかるものとなり、身にまとう学園指定のシャツは胸元近くまで大胆に開け放たれ、化粧は濃くなり、目つきが鋭くなったクラリス嬢だった。

おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！亜人を囲い始めたとは聞いていたが、ストーカーな中身はともかく、外見は正統派な清楚系お嬢様だったのが、いつの間にかギャル堕ちしてるじゃねえかああああ!!!
しかも、絶妙にギャル令嬢フォームを使いこなしてるうづ!!

ずいぶんと極端なフォームを両方とも使いこなすなんて、クラリス嬢、やはり外側のスペックは驚きの高さだな、好みじゃないけど。

ただ本当に驚いた！まさか、クラリス嬢がフォームチェンジしてしまうとは思わなかった。

しかも獣人系の亜人らを侍らして向かっている先にあるのは、まさに愛を育む休憩所が密集しているエリアだぞ！

おい、安いところは施設が全体的に古かったり、衛生面が露骨に劣悪だぞ！金のない学生ならともかく、小金があるなら休憩料金はケチるなよ！

数千円の差で、女の子の反応はもちろんのこと、設備の豪華さとか、シャワーの勢いとか、備え付けのシャンプーとかのランクとか、浴槽の機能とか、アメニティの種類とか全然違うからな！

いや、それはお貴族様なら料金のこととは問題ないな・・・って違う

！今世ではそういう問題じゃねえ！

ダメだ、ゼロ次会の名目で空きっ腹にアルコールをぶち込み過ぎたせいで、酔いが回って思考がまとまらない！

今世でこんな自問自答をする場面に出くわすなんて思わなかった。というか、アトリー家の文官達に引継をして、打ち上げで飲みに行く日、飲みに行く時間に、ずいぶん都合よく出くわしたな・・・いや、いくらなんでも都合が良すぎる。

僕は文官の顔をまっすぐ見ると、文官はとっさに視線を下にそらす。どうやら後ろめたいところがあるらしい。

「僕を嵌めやがりましたね？」

「お嬢様をハメさせないためです」

「誰がうまいこと言えと・・・まんまと僕はおびき出された、というわけですね」

「これまでは何とかお嬢様を引き留められていたのですが、もう限界だと現場から連絡がありました」

そう言いながら、文官はクラリス嬢を止めようとしつつも、亜人達に阻まれた上に暴行を受けるクラリス嬢の取り巻きの男子達を指さした。

その中には、先日、決闘会場で遭遇したガチムチ系取り巻き男子のダン君もいる。

亜人達はニヤつきながら、反撃してこない男子達を殴る蹴るしており、ケモナー学園でもよく目にする光景が繰り広げられていた。

最初に見たときはびつくりしたよ、奴隷扱いの亜人が、下級とはいえ貴族階級に所属する男子を当たり前のように殴っているんだもの。階級社会の建前はどこに行ったんだという話だ。

「我々も、お嬢様に侍る亜人に手を出すわけにもいかず・・・もうギルバート様のノリと勢いと権力で無茶苦茶にして有耶無耶にしてもらうしかないんです！」

「人のことを何だと思ってるんですか!?!それに、僕はクラリス嬢がどうなるうと関係ないんですけどー！」

「ギルバート様なら傷心で自棄になるお嬢様の気持ちもわかってくれ

ると我々は信じてます！」

いつの間にか、文官衆が僕の周りを囲んで、全員そろって首を縦に振る。

お前ら全員共犯かああああ！

「そもそも、うちの可愛い妹はあんなことする子じゃないですから！」
亜人を囲うくらいなら、物理的に首を狙いに行くような子だけどもね！

「ごちとら、大臣に指示を仰ぐ時間も取れないですよ！誰かさんが激怒状態で王宮を振り回してるおかげで連日深夜まで会議が終わらないんですから！」

「清々しいくらい逆切れですね！その怒りの矛先は王妃様と馬鹿王子に向けてくださいよ！」

「じゃあ放置すればいいじゃないですか！我々、大臣には、お嬢様が亜人と歓楽街に消えていくのを公爵家の跡取り様と見送りましたって報告しますから！」

「嘘ではないけど、その情報の切り取り方というか角度の付け方はさすがに悪意に満ちすぎでしょ」

お互い、酒の勢いでしゃべり続けて、売り言葉に買い言葉状態の応酬が続く。

ただ、決め手となるものが双方にない、と僕は思っていたのだが：文官が仄暗い笑みを浮かべて、僕の耳元で囁いた。

「ギルバート様が王宮勤めを始めたばかりの頃、騎士家出身だと騙されて亜人を連れてない子爵家の令嬢に手を出しそうになったところを、我々の情報網でギリギリ助けた上に、揉み消したことがありますよね」

それ、もうだいたい昔のことだよな!? 本人も忘れたスキャンダルを持ち出すってアンタら暴露系 YouTuber か！

「子爵家の令嬢に騙される、ってそちらのお家にも絶許モノなNGワードでしょ！」

「未遂とはいえ、今の公爵様が知ったら、それはそれはもう、たいへんお怒りになるでしょうねえ！」

「嵌めた次は脅すなんて、卑怯ですよ」

「もう墮ちるならギルバート様も一緒に墮ちましょうよ、今なら僕たち文官衆もお嬢様も付いてきますよ」

この役人達、僕を道連れにする気か!? ええい、冗談ではない!

僕はこれから主人公と攻略対象を邪魔する連中を排除して、2人をうまいことくつつつけて10年先に甘い汁をすうための準備をしなきゃいけないんだぞ! こんなところでポカするわけにはいかん!

「ああもう! わかった、わかりましたよ!! でも今回だけですからね!」
もう僕のほうもヤケになつてきた気がする。

文官衆が音もなく拍手をしているのを見ながら、僕は飲みかけのストロングなアルコール飲料の残りを一気に喉奥に流し込んで、気合を入れた。

そして、手元のカバンからサングラスを取り出して目元を隠し、シャツの胸元を空けて、髪をオールバックにまとめ上げた。

今いる場所からして、どっからどう見てもまっとうな仕事をしてない輩に見えるだろう。

「なんで変装グッズなんて持ち歩いてるんですか?」

呆れた表情をした文官の一人が聞いてくる。

「陛下の教えに決まってるじゃないですか」

市井でのお忍びデートの機会はいつやってくるかわからないので、常に準備しておくべし、というのが陛下の持論だ! むしろ、陛下は、たまに仮面まで持ち歩いているからね。どれだけ準備万端なんだか。

さらに酔いが回ってきて顔がポカポカする。空きっ腹にねじ込んだアルコールに胃を焼かれるような熱さが実に不快だ。そんなバツドコンデイションの中、僕は腹をくくって、ダン君達に暴行を加える亜人達の下に向かう。

「おいおい! 人間モドキがずいぶん調子に乗ってるなあ!」

若干千鳥足で暴行現場に乱入してきた、一見すると反社の構成員かチンピラみたいな風貌の輩を見た亜人達の顔が一瞬だけ強張った。

すぐに目線で合図をして、最も近くにいた一人の亜人がこちらに向かってくると、無言で僕の顔面を殴りつけてきた。毛深くて生暖かい

拳が頬に当たり、痛みより先に気持ち悪さ由来の不快感が全身を走り抜ける。

しかし、拳は当たっただけだ。

僕は魔力で体を強化しており、ダメージはほとんどない。殴られた衝撃で変装用サングラスは吹き飛んだけどね。

そして、この瞬間、亜人の専属使用人が僕を殴りつけた、という事実が生まれた。

同時に、亜人に殴られた相手が誰であるのか、すぐ近くにいるクリス嬢の取り巻き達が認識したらしい。大きく口を開けながら、顔を青くしている。

「見た？」

取り巻きの男子達が大げさに首を縦に振る。

震えている男子もいる。所属だけ見れば、アトリー伯爵家の使用人が、公衆の面前で、レッドグレイブ公爵家の跡取りに暴行を加えた、ということの意味をわかっているのだろう。

「ねえ、これから始まるのはお宅とうちの抗争かい？それとも繁華街の酔っ払いの喧嘩かな？喧嘩じゃないかな？喧嘩だよね？」

男子達はなおも首を縦に振っている。そうか、喧嘩か。あと先に手を出してきたのはその亜人だからね、覚えておくように。ふふふ、どうしてだろう、笑いが止まらない。

ケモナー学園在学中も、さすがに僕を殴りつけてくるような専属使用人はいなかった。

普段から、僕達男子を見下し、あざけ笑うように見てきた亜人というファンタジー種族を、一回はめてみたかったのだがようやくチャンスが回ってきたようだ。

「おい、何を笑ってる！」

殴られたのに、いきなり笑い出した僕を見て気分を害したらしい亜人が何か吠えている。

五月蠅いなあ。その獣臭い口を閉じようか？

僕は無言のまま手を伸ばし、そのまま亜人の顔面を鷲掴みにする。

「ファイヤーボール」

静かに僕が呟くと、亜人を掴んだ掌に大きな火球が一瞬だけ現れて、すぐに亜人の顔面を焼き尽くしながら爆発した。
さあ、レッドファイトを始めようかああああああ！

第14話 最低だけど最悪ではない結末

ゼロ距離から掴んだ顔面を爆発させるといふヒートエンドから始まる僕は最初からクライマックスだぜえええ！

ファイヤーボールで吹き飛ばされた亜人から何やら獣の悶える叫び声が聞こえてきたが、何と言っているかは聞き取れない。

足をバタバタさせながら、焼け焦げた顔を手で押さえる亜人に近付いて、ガラ空きとなった股間を垂直に踏み抜いた。靴越しに何か柔らかいものが潰れる感触があった気がするが、急所を敵前で隙だらけにするほうが悪い。

さらに悶える亜人の声が聞こえてくる。

「ほら、これでおしまいかい？あの学園では、女子に隠れて、男子達にもっと威勢よくしているじゃないか」

人差し指を、手元に向けてくいつと曲げ、残りの亜人達を煽る。それにカチンときたのか、顔を歪めたチーター系亜人とライオン型亜人が今度は二人同時にこちらに向かってきた。

種族の特性なのかわからないが、亜人は素の身体能力が高い一方で、魔法を使えない。つまり、物理的な攻撃を仕掛けるほかない。それであれば、相手の弱みを徹底的に突くのが僕の主義だ。

再び掌の上に火球を生み出し、亜人達の顔面の高さに投げつけた。亜人達はとっさに上半身を逸らしながら、顔の前で腕を組んで防御態勢を取る。

さっきの顔面攻撃を警戒してか、商売道具の顔を守ろうとしたのだろう。

投げつけた火球がライオン型の亜人に着弾したところで、2人の動きが止まり、すかさず次のファイヤーボールをまだ無傷で、上半身に意識が残っているチーター型亜人の足元をめがけて投げ付けた。

チーター型亜人は両足を焼かれるとともに、火球が爆発した衝撃で建物の壁に叩きつけられて倒れ込んだ。残ったもう1人のライオン型亜人は倒れている同僚を見て、隙だらけになっている。

まあ、戦闘訓練を受けたプロでもないんだから、そうなるのも無理

はないけど・・・

「余所見をしてはいけないよ？ファイヤランス！」

僕の周囲に膨れ上がった炎の柱が6本浮かび、やがて槍を形作るように収束していく。

そして、僕がライオン型亜人の方へ右手を向けると、炎の槍は亜人に向けて突き進み、右腕、腹、股間、両足を貫いて、その体を焼き尽くしていく。

やかましいうめき声上がるが、熱によるショックで気を失ったのか、すぐに静かになったので、とどめの一撃とばかりに小さめのファイヤーボールを顔面にぶつけて、焼いておく。

せいぜいこの国のケモナー女からもらって貯め込んだ金を使ってお高い治療でも受けるんだな。

「強いけど・・・なんか、こう・・・エグくないか？」

「さつきから、股間とが顔面とか、急所ばかり狙ってるような・・・」
「たぶん、専属使用人の商売道具に攻撃を集中してるんだ。相手の嫌がることを狙って畳み掛けるって、まるでどこかの高貴なお方のようなやり口だな」

「そういえば、この前は両足を骨折したジルクの両足を思いっきり殴りつけたって言ってましたよ」

「いや、それはむしろグツジョブじゃないのか？」

クラリス嬢の取り巻きの男子達と、アトリー家の文官衆が合流して、ヒソヒソと話し込んでいる。

いや、僕を焼き付けたのは君達だよ！

気を取り直して、残ったチーター型亜人に目を向ける。壁に叩きつけられただけだから、ダメージらしいダメージはないはずだ。こちらも確実にトドメを刺しておこう。

再び手を亜人に向けると、先程発生させた炎の槍の残った1本が手元から放たれて、チーター型亜人の股間に焼いていく。

あれ、最後のファイヤランスの手元側の先端がクロスというか、十字架っぽい形になっていないか？

何やら、まるで突き刺さった真つ赤な矢が亜人の墓石によようにも見

える。酔っ払ってちやんと見えてないだけかもしれないけどね。

さて、残ったのは残っているのは猫型亜人と、ファンタジー種族の定番エルフ型の亜人だ。

しかし、ここまでの“ケンカ”を目の当たりにしてだいぶ戦意を失っているらしい。

よくよく考えたら、今日の勝利条件は、クラリス嬢の貞操の防衛だから撤収してくれるなら、それはそれでいいんだよな。

「そこで転がってる連中、持って帰ってくれるかな？」

優しく聞いてあげたら、2人は、声もなく何回も首を縦に振って、手早く戦闘不能になった亜人を回収すると、繁華街の奥へと姿をくらましていった。

ふう、とりあえずこれでハメる側がいなくなったから、ミツシヨンコンプリートだね、というか暴れ回ったせいで酒がさらに回ってしまった。というか、冗談抜きに気持ち悪い。少しの衝撃で逆流するかもしれない。

やっぱり空きつ腹にストロングなアルコールはまづかった・・・

「これで約束は果たしたから今日は帰りますよ。さすがに今から飲む気にはなれませんしね」

アトリー家の文官衆とクラリス嬢の取り巻き男子達にところに戻り、もう帰る旨を伝えると、彼らは静かに頭を下げていた。

やめてくれ、僕がアトリー家の反社系用心棒みたいに見えるじゃないか。

とはいえ、ここまでのやり取りはまだ平和だったのだが、ここで、あの意味、今回の騒動の震源であるクラリス嬢がカットインしてきた。

「ちよつとーこれはどういうことですか!」

「はて・・・酔っ払いどうしのケンカですよ?」

僕が視線を文官衆に向けると、彼らは小さく首を縦に振る。

「ケンカですよ、じゃないですよ!私の専属使用人に何か恨みでもあるんですか!」

「先に殴ってきたのはあの亜人ですよ。それに、おたくの家の皆さん方から、お嬢様を止めてくれと言われたから、貴女がやんちゃできない

いようにした、それだけです。というか、酒が回って気持ち悪いからもう帰っていいですか？」

「ふざけないでください！」

「え！お嬢様に慰めとか、励ましの言葉とかかけてくれないですか！」「ギルバート様、本当にうちのお嬢様に興味ないですよね・・・」

クラリス嬢は怒りのボルテージを高めているが、文官衆はどうやらその相手まで僕にしると言っているようだ。

嫌ですよ、亜人困った女なんて口を聞くのも苦痛です。飲んだアルコールが逆流しそうだ。

「あなた達も！公爵家まで巻き込んでどういうつもりなのよ！」

「それは、その・・・お嬢様が自棄になって、その・・・」

うん、言いにくいよね。仮にも国の重鎮の娘が、亜人と夜遊びからのアバンチュールをキメるのを止めたかった、だなんて。

まあ、下級貴族の令嬢の多くが貞操観念なんて概念を持っていないこの世界に慣れてきてしまったので、クラリス嬢の行動も、外見のギャル堕ちフオームチェンジ以外は、さほど違和感がない。なんて酷い世界なんだろう。

ただ、よく考えてみれば、僕を脅してまでクラリス嬢を止めたかったのは、家のためだけでなく、きっとクラリス嬢本人のことを本当に心配してのことなのだろう。

一時の感情に身を任せて本人の軽率な行動で取り返しのつかない状態になるのを阻止したかったんだろうね。

取り巻きといい、文官衆といい、アトリーは主への忠誠心が強いね、レッドグレイブ家とは大違いだ。

うちのアンジェなんて、決闘騒動で誰も取り巻きが助けに入ろうとしなかったんだぞ！

少し自分の家の悲しい状況に思考を持っていかれていたが、そこに再びクラリス嬢の怒号が響く。

「もう邪魔しないでよ！婚約者だって顔すら合わそうとしない私にかまってどうするのよ！」

文官達は下を向いたまま答えられずにいる。

平時のメンタル状況であれば、クラリス嬢とて、そんなことを言ったりはしないのだろう。

だが、ジルクへの愛がとにかく重かったクラリス嬢には、自分に全く気をつけていないように見えるジルクの仕打ちによる精神的なショックがさぞ大きかったようだ。

要するに、ジルクの気を少しでも引きたかったのだろうね。考えてみれば、高度な教育を受けたとはいえ、まだ16か17歳の女の子だ。前世で言えば高校2年生くらいか。

一方の僕は前世も合わせればアラフォーだ、少しくらいお節介を焼いてもバチは当たらないかな。

それに、クラリス嬢とジルクの関係については、僕も、この世界の主人公であるオリヴィアさんとジルクをくつつけるために、クラリス嬢との円満破局を狙ってちよっかいを出した過去がある。

仕方ない、アンジエに歯向かったジルクには、僕の道連れで、もう一度犠牲になってもらうとするか。

「悲劇のヒロインごっこ、いつまで続きます？ 亜人と乳繰り合ってる暇があるなら、さっさとジルクに落とし前付けさせればいいでしょう」

「そ、それは・・・」

「今の気持ち憎悪と愛情のどちらに傾いているのかわかりませんが、まずはその大元を徹底的に追い込むのが先でしょう。人間なんて、自分が良くてナンボのものなんですから、自らを傷付けてる暇があるなら、さっさと復讐しに行きましょう」

我ながらけっこう酷いことを言ってるな。

自分のためなら他人なんて傷付けてしまえ、だなんて言ったら、前世では、SNSは炎上するだろうし、学校の先生とかなら処罰されてしまうかもしれないね。

「相変わらずレッドグレイブ家は過激ですね、でも・・・復讐していいんですか」

「成功しようが、失敗に終わろうが、とにかく全力で怒りと憎しみをぶつけてやれば、たいいていの場合は何かが見えてきますよ。幸い、そち

らには貴女のためならば喜んで馬車馬のように働く面目がいるじゃないですか」

クラリス嬢の態度が少し和らいだ。ほら、文官衆と取り巻き達！ さっさとこの流れに乗っかってこい！

うつむいているクラリス嬢をよそに、僕は文官衆のほうを見ながら、クラリス嬢のほうを指さすと、先に気付いた取り巻きのダン君を皮切りに、取り巻きの男子達が会話に入ってくる。

「お嬢様！ ジルクのやつをボッコボコにしてやりましょうよ！」

「休み明けの学園祭だ！」

「エアバイクレースにきつと出てくるはずですから、まずはそこです！」

若いつていいね。勢いはこちらのほうが強いようだ。そして、ここに出遅れた文官衆達も加わってくる。

「我々はマーマリア家の醜聞を徹底的に洗い出しますよ。あいつらの一族郎党に至るまでアトリーにケンカを売ったことを後悔させてやりましょう」

「きつと今ならレッドグレイブ家がド派手に動いているので、たいいていのことは霞んで見えるからやりたい放題ですよ！」

おい、最後にとんでもないことを言った奴、出てこい！

だが、クラリス嬢もどうやら自分がどれだけ大切に思われているのかを再認識したようだ。

その気持ちが男女の愛情ではなかったのだとしても、受け入れられているという事実が彼女の心を癒したのだろう。表情も柔和なものへと戻っている。もう軽はずみなことはしないだろう。

「色々とゞ迷惑をかけてしまいました、お礼を言わなければなりませんね」

クラリス嬢がこちらにやってくるのと、お礼を言いながら僕の手を取る。

手に柔らかな感触が伝わってくるのだが、それ以上に彼女が付けていた香料と、侍らせていた亜人の獣っぽい匂いが、逆流寸前の胃と食道にプレッシャーをかけてくる。

「貴女のためなら、僕だって脅して巻き込むくらい手段を選ばない家臣達と仲良くやってくださいよ、もう巻き込まれるのは御免ですからね。あと、獣臭いんでちよつと離れてもらえますか？」

・・・あ、しまったああああ！つい、本音が出た！監査先であくどい領主夫人を煽るときのお決まりのフレーズを口走ってしまった。

クラリス嬢が怒りでプルプルと震えている。そして、いつの間にか般若のような表情を浮かべ、目が大きく見開くと、僕の顔めがけてピンタが飛んできた。

「おっと、危ない。いくら酔っていても、これくらい防げますよ」

とっさに直前にクラリス嬢の手を止めて顔面殴打を回避した。クラリス嬢の髪が揺れて、再び香料の匂いが僕の鼻を突いて胃と食道を圧迫する。

ここで僕は完全に警戒を解いてしまっていた。油断したといつてもいい。

次の瞬間、僕の脇腹に魔力で強化したと思われるクラリス嬢のボデイブローが突き刺さっていた。

痛みと言えるようなものはない。だが、僕の腹部は空腹の入れた強めのアルコールで焼かれ、逆流寸前だった。

そこに加わった予想外の衝撃に、とうとう胃の内容物が一気に駆け上がってくる。

さっきまでの大立ち回りで吐き気が急上昇状態だったが、今の一撃で臨界点を突破したのかもしれない。

手を口に当てて、無理やり押さえ込もうとしたが、どうやら間に合わなかったようだ。

この日、この瞬間、ホルファート王国の繁華街に1つのマールライオンが出現した。

「いやあああああああ!!!」

逆流がアンコントローネブルとなり、第一の逆流後、すぐに、第二の逆流が来る前にとっさに路地裏に駆け込んだ僕の耳にクラリス嬢の悲鳴が聞こえてくる。

もしかして、ボデイブローを入れてきたクラリス嬢にも少し命中し

た？

そんなことを考えながら、逆流に苦しんでいると、「別のマーライオン」による逆流音が聞こえた。

ああ、これは「もらい○ロ」が生まれたみたいだね。

マーライオンは連鎖する。慣れていなければなおさらだ。

そして、アルコールでぼんやりする意識の中で、クラリス嬢の音が聞こえた。

「私、汚れちゃった」

いや、それ誰のせいだよ！僕のせいじゃないからね!?

第15話 振り回す方と振り回される方、どっちも大変

繁華街でのマーライオンクライシスの翌日、もはや恒例となりかけた父からの呼び出しを食らってしまった。

机に肘を寄せ、顔の前で両掌を組む碇ゲ○ドウスタイルで僕をじつと睨んでいる。

用件はきつと・・・うん、マーライオンの件だよな。

「なぜ呼び出されたかはわかってるだろうな」

「まさかこの僕が亜人連れの女に手を出すとお考えですかな」

「ならばあのようなところで何をしていたのか、説明してくれるのだろうか？」

ひとまず僕の話聞いてくれるようで安心した。

とりあえず昔のスキヤンダル未遂で脅されたという部分だけ伏せて、事情を説明する。

要するに、アトリー家の文官に騙され、誘い出された飲み会に向かう途中で、ギャル堕ちして、やさぐれかけたクラリス嬢に引き合わされ、貞操が失われる直前に救出する作戦に巻き込まれたんです！

一応、対外的には飲み過ぎてマーライオンになった、という感じで情報操作する旨、アトリー家の文官達と話を付けてあることも伝えておこう。

「はあ・・・全く・・・最後のアレがなければバーナードにも大きく恩を売れたものを」

「僕だつてこんな形で巻き込まれるとは想定外すぎます。主のためとはいえ、僕を巻き込むなんて並大抵の度胸じゃできませんよ」

アトリー家のクラリス教の皆さんの忠誠と団結が強すぎて困ります。

それにしても、元カノに刺されて、物凄く大物な貴族に転生したのに、やっていることは繁華街でゲスな亜人種と殴り合いの喧嘩とやさ

ぐれ令嬢の貞操保護って・・・酷くないだろうか。

いや、お貴族様が集う夜会に参加して香水と亜人臭い令嬢の相手をさせられるよりははるかにマシだけどさ・・・

「それは、まあそうだな・・・そういえば、アンジエの代理人の処遇が決まったぞ」

父はそう言うのと、数枚の紙をこちらに手渡してきた。

そこには、六位上への昇格と、卒業後の予定であった男爵としての即時独立が決定したことが書かれている。バルトファルト君は喜ばないだろうけどね。

どんなリアクションをするのか、見るのは楽しみだけど。

だが、彼には、主人公の最終的な立ち位置である神殿宗教の「聖女」という立場に、釣り合うレベルまで上つてもらう必要がある。

攻略対象の中で実家の爵位が最も低いのが子爵家出身のジルクだから、最低限、そのくらいまでは昇進させてしまおう。

その他には、妹の元婚約者であるあの馬鹿王子が廃嫡になることが決まったようだ。

当然の報いだな。僕の今までの苦労を台無しにしてくれた恨みも少しは晴れる。それにあの王妃が悔しがる顔を浮かべているのを想像するだけで気分がいい。

「概ね、我々の希望通りですね」

「このくらい飲ませて当然だ。それよりも今後のことだが、目敏い連中は、バルトファルト男爵の力を取り込もうと動くだろう。どうせ言われずともお前は動くのだろうが、他の勢力に渡すような下手を打つなよ」

「ええ、プランは既にいくつか考えております」

「それと、しばらくはお前とアトリーとの関係が疑われる可能性がある。ちようどいい機会だから、王都を離れて、アンジエを迎えに行くついでに、この知らせを持って行け」

そういえば、主人公も一緒にバルトファルト君の領地に行つて長期休暇を過ごしていたんだつたな。

この期間中に、攻略対象の好感度を上げてくれていればいいんだけ

ど。

ギルバートがリオンの処遇を聞かされていた頃、リオンの父であるバルカスの屋敷は、にわか騒がしくなっていた。というのも、バルカスの正妻であるゾラが、珍しくバルトファルト領までやってきたからである。

何用かと慌てるバルカスに悪態をつきながら、ゾラは、屋敷内の用人に色々と指示を出している。

その光景を物陰から静かに見ていたのは、レッドグレイブ公爵家の上級メイドであるコーデリア・フォウ・イーストンであった。

主であるアンジェリカの世話をするために、公爵家から派遣された彼女であったが、目の前で繰り広げられる光景は、かつて自分も通っていた王都の学園の男子と女子の関係を思い出させる、品のないものであった。

(改めて考えれば、こういった類の女ばかり見ていれば、若様も王国の将来を不安に思うでしょうね)

公爵家は言うまでもなく、自身の実家の両親もまともであったから、下級貴族の女の実態を学園卒業後は忘れかけていた。

だが、在学中に加え、辺境の監査に明け暮れていたギルバートは常にこうした光景を見てきたのだろうから、学園の男子生徒達の結婚の世話をしたり、自身は身分の低い女性ばかりに手を出すのも少しは理解できそうに思えてくる。

コーデリアがそんな思考に耽っていたところで、彼女を見つけたゾラが、訝しげな表情を浮かべながら近づいてきた。

(五月蠅いのに見つかってしまいましたね、まともに相手をするのも愚かしいですが、どうしましょうか・・・)

「見ない顔ね。ここで何をしているのかしら？」

「お答えする必要はありません」

「何ですって！ 使用人の癖に私の命令が聞けないってどういうの！」

「主でもない相手に従う義務はありませんね」

前のめりに食って掛かってくるゾラと、静かに眼鏡を光らせながら、睨みつけるコーデリアが対峙する。

話し方が違えば、取る対応も違ってくるかもしれないが、サービスしてやる必要もない。

よくよく考えれば、自身の実家よりも小さい規模の男爵夫人がずいぶんな態度だなとすら思えてくる。

(いっそのこと、若様にあることないこと吹き込んで、駆除してやりましょうか)

鬱陶しさに過激なことを考え始めるが、そこに不穏な空気に気付いたバルカスが2人の間に割り込んできた。

「ちよつと待ってくれ、ゾラ。今、お客さんが来てるんだ。この人はその方のお付きの人だよ」

「客う？こんな辺境に誰が来てるって言うのかしら？」

「そう言うなよ。あ、コーデリアさん、そろそろお嬢様が戻ってくるみたいですよ」

「ありがとうございます。それでは私は失礼いたします」

バルカスに一礼すると、コーデリアは屋敷の入口の方に向かって歩いていく。

途中、後ろから、平手打ちが直撃したような音と、バルカスのうめき声が聞こえてきたが、振り向かないでおくことにした。

主であるアンジェリカを療養させてもらっている恩がある以上、緊迫した場を何とか流そうとしたバルカスの意は汲むべきであると判断したからだ。

屋敷の入口付近では、既に部下である他のメイド達が集まっており、コーデリアもそこに合流し、左右に列を作り待機する。

間もなく、アンジェリカが、王子との決闘で代理人を務めたりオン・フォウ・バルトファルト、学園の特待生であるオリヴィアを伴って屋敷に戻ってきた。

ただ、慣れた足取りでメイド達の間を歩いていくアンジェリカの後ろに隠れて、本来はアンジェリカをアテンドすべきリオンがこそこそと歩いてくる。

バルトフアルト家の事情に詳しくはないが、あの正妻と側室の関係が良好とは思えないことから、おおまかな推測はできる。父の正室と顔を合わせるのが嫌なのだろう。

「お嬢様、おかえりなさいませ」

「ああ、今、戻った。それよりも……ずいぶんと騒々しいな。何事か？」

「実は……」

アンジェリカを出迎えたコーデリアは、屋敷に入っていく主に事情を説明しようとするのだが、そんな意図を完全に無視して、騒動の元であるゾラがこちらに気付いたようで、アンジェリカの前に立ちはだかる。

（この愚物が！お嬢様の前で頭が高い！）

主を前にしているため、心の中だけで毒づくコーデリアの苛立ちが徐々に蓄積していく。

「一体どこの小娘かしら。どうせそこの大馬鹿者が連れてきたのだから大した家の者ではないのでしょうか」

アンジェリカの目元がピクリと動いたのをコーデリアは見逃さなかった。

怒りの導火線が長くはない主の目つきが鋭くなっていく。決闘騒動の恩人であるリオンだけでなく、自身の家も馬鹿にする口振りに相当気分を害したようだ。

そして、おそらく目の前の醜い愚物が誰であるかについても、主は理解したように見受けられる。

「お前こそ誰だ？既に屋敷の主と奥方には挨拶をしたはずだがな」

正妻ではない人間を奥方と呼んだのはわざとであろう。バルトフアルト領に来てから数日が経つが、正妻の評判はお世辞にもいいとは思えない。

「あんな下賤な女が奥方ですって？見る目がないのかしら」

「そうか。私も不勉強なところがあつたらしいな。ならばお前が誰なのか、教えてくれないか？レッドグレイブ家にもわかるようになあ！」

アンジェリカが下から凄むように睨みつけた。

「レ、レッド……」

アンジェリカの家名を聞いたゾラの顔は、怒りで紅潮していた状態から、みるみるうちに青ざめていく。

また、始めは口周りだけが震えていたが、すぐにその震えは両手、両足にまで広がっているようだ。

「まさか……あ、あ、あ……」

「あ？まさか、どうしたというんだ？何か言いたいことがあるんだろう？」

追い打ちをかけるように、さらにアンジェリカがゾラを睨みつけるが、何やら様子がおかしい。

レッドグレイブ公爵家の名前を聞いたら、慌てるか、ひたすら詫びるのが普通の反応であろう。しかし、ゾラは全身を震わせており、恐怖が先行しているように見受けられた。

もちろん公爵家の名前を聞いて恐怖することがおかしいとは思わないが、それを差し引いても、恐怖だけが全身を支配するとは思えない。

そして、沈黙が場を支配したとコーデリアが思った矢先であった。「ああああああああああ!!!」

ゾラが、腹から出すような大声^{!!!}を上げると同時に、バルトファルト家の屋敷から全力で逃走を始めた。

ゾラの連れてきた息子と娘、それに亜人の専属使用人は突然の行動に驚きながらも、その後を追っていく。

(レッドグレイブ家の名前にずいぶんと強く反応しましたね。どういうことでしょうか……)

何を思ったのかはわからないが、ひとまずコーデリアには、主であるアンジェリカに無礼を働いたゾラが慌てふためいて逃げかえったことで溜飲を下げておこうと考えるのだった。

そして、一息ついたところで、ゾラが立っていたところに一枚の紙が落ちていくことに気付く。

それを拾い上げて目を通すのだが、ここに書かれていたことを見

て、謎が解ける。

(これは・・・あとでお嬢様に報告するのでしょうか)

ゾラは、自分が気付いたときには走り出していた。

走って逃げだす、という選択肢を思考によるプロセスを経て選んだわけではない。

(早くここから逃げなければ・・・あの小娘、いや赤い通り魔一族めえええええ!!!)

心の中で最大限の呪怨の念を送りながら、自身に乗ってきた飛行船に逃げ込むべく走り続ける。

魔力で身体を強化し、あらん限りの力で生き延びようとするのだった。

そもそも、わざわざ辺境のバルトファルト領にまで足を運んだのは、自身が属する淑女の森の幹部から、王都を騒がす決闘事件に、殺し損ねた忌々しい妾の息子が関与しており、その詳細を調べるよう命じられたからである。

本来であれば、知人の未亡人の何人目かになる後夫にした上で、戦場で戦死させ、遺族に給付される金銭を山分けするはずが、リオンはロストアイテムと山のような財宝を発見して、給付金と殺害目的の結婚をぶち壊したのだ。生きていてだけで不愉快な存在、というのがゾラから見たリオンであった。

しかも、そのリオンが王太子やレッドグレイブ公爵家も絡む決闘事件に関係しているのだと聞き、淑女の森の面々から厳しい追及を受けたのである。

自分が生んだ息子ではない、という本人にとっては重要だと言う自分は、淑女の森の中では通用しなかったのも忌々しい。

何せ、リオンが代理人を務めたアンジェリカの実家はレッドグレイブ公爵家だ。

淑女の森から見たレッドグレイブ家の嫡男ギルバート・ラファ・

レッドグレイブは、辺境の監査を名目として、国王の威光を笠に着て、次々と淑女の森の構成員を、事実上葬ってきた人物であり、恩讐の対象に他ならない。

そして、バルトフアルト領で遭遇した相手が公爵家の令嬢アンジェリカだと知った時には、自身の詰めめを悔んだ。王都の騒ぎの当事者に手を貸したのがリオン本人であり、可能性としては高くなくとも、リオンが公爵家の関係者と行動している可能性はあったはずだ。

さらに、公爵家の名前を聞いた瞬間には、淑女の森のメンバーの間で共有されている言葉が脳内に響き渡った。

赤い通り魔はいきなり目の前に現れる。現れたときにはもう詰んでいる。

というのも、王国の監査部署によるガサ入れの後に姿を消した淑女の森のメンバーは、その情報を他の構成員に伝えることもできずに消息を絶っているからだ。

そうなれば、ギルバートとの遭遇は、淑女の森にとっては、ほとんど死を意味していた。

だからこそ、アンジェリカの家名を聞いたときには、口の中がみるみるうちに乾いていくのを実感した。

そして、追い詰められた脳内で、一つの案が静かに浮かんだのだ。とにかく逃げろ、と。

ゾラが命を燃やすかのごとき勢いで逃げた後、残されたゾラの息子や専属使用人達が、あたふたしながらその後を追って行ったり、

リオンがゾラの醜態を見て大喜びのあまり全力で拍手したり、公爵家から来たメイド達からも拍手が起きるといふ出来事があったが、

アンジェリカとしても、リオンが今までの実家での苦労が相当なものだったことを知り、王国の辺境領主貴族の内部事情に複雑な思いを抱く。

バルトフアルト家が用意した部屋で、公爵家のメイド達がセツティングをしたベッドで横になりながら、アンジェリカは今日の出来事を

思い返していた。

そこに、傍で待機していたコーディネリアが懐から一枚の紙を取り出して渡してきた。

「お嬢様、こちらを。あの正室が落としていったものです」

「あの女が？これは・・・」

手渡された紙には、季刊森の便り、というタイトルのついている。見た限り、定期的に刊行されている会報のようだ。

だが、アンジェリカの目を引いたのは、最も大きく書かれた記事の見出しである。

“ 伐採速報 ” というフレーズに続いて、赤い通り魔現る ” というサブタイトルが書かれている。

文章に目を通すと、つい最近、国境沿いの浮島に監査が入り、それ以降、その領主の妻であった淑女の森のメンバーの消息が不明になったほか、独自の調査により、“ 赤い通り魔 ” と呼ばれる人物が所属するチームが監査の担当をしたということが書かれている。

しかも丁寧な、“ 赤い通り魔 ” なる者の似顔絵まで付いている。目つきは鋭く、不敵に笑う口元が見る者に嫌悪感を抱かせるようにデフォルメされているものの、髪型や異名の内容を合わせて考えれば、兄であるギルバートのことを指していることは明らかだ。

「なるほど、たしかりオンからあの女が淑女の森の関係者だという話は聞いていたが、これなら、公爵家の名前を聞いて逃げ出すのも納得だな」

「あの場に若様もいてくれたら面白かったです」

「ふふっ。まさか自分の兄が通り魔だなんて言われているとは思わなかったよ」

アンジェリカとコーディネリアは、デフォルメされたギルバートの似顔絵を見て笑う。

アンジェリカも、兄が、貴族として、しかも王家とも血縁関係のある公爵家の跡取りとしては相当な型破りであることはわかっていました、

仕事を理由に社交の場に姿を一切現さない兄についての嫌味の3

つや4つは言われたこともあったが、犯罪者のように嫌われているとまでは想像していなかった。

「王妃様から、辺境領主の正室にいたるまで、兄上は逆の意味で大人気だな。リオンの学園での嫌われ方が可愛く見えるぞ」

「お嬢様、あの若様の一体どこに好感を持ってとおっしゃるのですか?」
「コーデリアは相変わらず兄上に厳しいな。ほら、顔とか甲斐性はあるじゃないか」

「それは若様でなくても、それなりに備わっている男性は多いですよ」
「久しぶりにお前の兄上評を聞いたな。いつからそんなに仲が悪くなったんだ?」

「若様が当時5歳だったお嬢様をからかって、泣かせたときからでしょうか。一生許さんと思いましたがね」

「だいぶ年季が入っているんだな!」

「ですが、おそらく若様も、お嬢様のために、という条件は付きますが、私のことを信頼していると思いますよ。何といっても、私は若様の共犯者です」

「どういうことだ?」

アンジェリカはベッドから起き上がって、コーデリアに強い視線をぶつけた。

共犯者という不穏なフレーズが出てきたとあれば、兄が何かしたのではないかとも不安になるし、自分に長年仕えてくれているメイドが何をしたのかも気になる。

「公爵家の使用人の中で貴族出身の者達が、次々と学園の男子生徒達と婚約していったときのことを覚えていらつしやいますか?」

コーデリアの問いにアンジェリカが静かに頷く。

当時、まだ学園に通っていた兄が、王国の残酷な真実を知らずに、暗黙の禁を破って王妃から断罪されかけた事件のことだとすぐに理解したからだ。

アンジェリカ自身は、真相を後になってから王妃であるミレーヌに教えてもらったのだが、それをコーデリアの口から聞く日が来るとは思っていなかった。

「あのとき、女性側のリストを作ったり、顔合わせの日程調整を担っていたのが私です」

「どうしてお前がそんなことを？しかも、兄上にコーデリアが協力するなんて・・・」

「若様から取引を持ち掛けられました。お嬢様が王妃になってから、領主貴族達の憎悪を向けられるのと、結婚相手を世話してやって忠誠心を得るのと、どちらがいいのかと。私も学園の卒業生ですので、若様の言いたいことはすぐにわかりました」

「そうか・・・私はあの話を後で知ったんだが、兄上の手際が良すぎると思っていたが、コーデリアが手を貸していたのだな」

アンジェリカにとっては驚きの舞台裏であった。

そして、コーデリアが知りようのないことではあるが、王国の禁を破ってまで自分のために動いていたのだということを知って衝撃を受けている。

兄ともども、アンジェリカのため、という一点で王国の禁まで破ったという事実は軽くない。

学園での決闘騒動で、幼いことから想っていた婚約者を失い、取り巻き達は離れていき、自分に何が残っているのかと考えたこともあった。

（失ったものばかり考えていたが、私も捨てたものではないな。リビアやリオンという友人もできた。それに、私のために、そこまでしてくれる兄上やコーデリアもいる。いつまでも引きずっているのも馬鹿らしいな）

王都の繁華街の騒動で、クラリスが自分の家の役人や取り巻き達の存在が立ち直るきっかけになったのと同様に、

アンジェリカも、新しい友人や兄、コーデリア達の存在を思い返し、自分の心を整理し始めようとしていた。

だが、コーデリアからの話はまだ終わっていないようであった。

「お嬢様。問題なのはそこです。公爵様が協力者の存在を知らないままとは思えませんが、若様が謹慎になったのに、私はこれまで何のお咎めもありません」

「まさか、兄上がコーデリアを庇ったというのか!？」

「そこまででなくても、排除するなり、どこかに嫁がせるなりすることは簡単にできたでしょう。お嬢様のためという一点ですが、私を公爵家の屋敷に残したままにしているのは、私に利用価値を見出していただいているのでしょうか」

「確かに、普段からあれだけ嫌味や皮肉をぶつけ合っているのに、兄上はそれ以上のことをする気配はなかったな」

領主貴族の監査で、通り魔扱いされるまでに苛烈な攻撃性を発揮する兄が、日常的に口論するメイドを排除しないのは、いくら身内の寄子出身でも違和感がある。

そうしない裏には、確かに、歪ながらも、はっきりとした信頼関係があるのだろう。

そして、アンジェリカは一つの可能性に思い至る。

（あれ？兄上と家族以外でここまで関係を築けている貴族出身の女って他にいないか？）

そうなると、自分が上手く立ち回れば、側室扱いになるだろうが、2人をくつつけることができるのではないか。

アンジェリカの中で培われた為政者としての意識が告げている。

将来の公爵家全体のことを考えたときに、あの兄に異論をぶつけることのできる存在がいたほうが、バランスを取れるのではないかと。

（というか、私は失恋したばかりだというのに、兄とメイドが、恋愛感情は皆無とは言え、確かな絆があることを聞かされるのは、複雑な気持ちになるぞ）

「なあコーデリア、いつそのこと兄上に嫁い．．．いや、何でもない。そんなこの世の終わりのような顔をしないでくれ」

コーデリアの眉間に大きく皺が寄り、目つきが鋭くなると同時に、顔面から血の気が引いていくのを見てアンジェリカは口を閉ざした。「私の実家も公爵家の寄子ですので、公爵様から嫁げと言われれば逆らえませんが、あの若様が私に手を出すと思いますか？一切手を出さない白い結婚扱いで、派閥内が微妙な空気になると思うのですが」

「た、確かに．．．」

「それよりも、若様が以前に、あの特待生を口説こうとしていたことがあったのですが、よろしいのですか」

「何だ?! もう手を出そうとしていたのか」

「特待生は驚きのあまりフリーズしていたようですので、何か具体的にあったというものではありませんが・・・」

既に兄がリビアに粉をかけ始めていたと聞いてアンジェリカは思考を再び巡らせる。

破天荒な身内だが、公爵家の跡取りであり、将来性は言うまでもない。性格はともかく、外見も悪くないだろう。

学園で培われたのであろう、過剰なまでの令嬢嫌いな点を除けば、女子にとっては間違いなく優良物件だ。

家族に対して愛情深いことは今日も再確認できたし、貴族としては過剰なくらいだろう。

その兄が、自らの意思で選ぶ愛人であれば、きっと大事にするだろうし、自分の知る限り、兄に手を出された平民出身のメイド達が兄を怨んでいるという話は聞いたことがない。

そうであれば、兄がリビアを愛人にするというのは、本人にとって悪い話ではないだろう。

だが、兄と同級生がどうにかなる、というのは妹としては複雑な気分になる。理屈ではなく、感情の問題だ。

そして、先日、温泉内でリビアと話した時の反応からして、リビアがリオンに惹かれているのは間違いない。

平民と貴族、という身分の違いがあるが、それこそ側室としてであれば結ばれることは可能だろう。

自分が苦しい時に支えてくれた二人だ。できればお互いに幸せになつてほしい。

(ん? また私は他の人間の恋愛の心配をしているのか・・・よく考えてみれば、それもこれも、貴族以外にばかり手を出そうとする兄上が発端じゃないか!)

「コーデリア、一つ聞きたいんだが」

「はい、なんででしょう」

「貴族として越えてはいけないラインだけしか守らない女遊びの激しい兄上と、一途なあまり、家どうしの婚約も何もかもぶち壊したユリウス殿下、どちらが酷いと思う？」

「貴族としてどうかは置いておくとして、個人として、女としてはどちらも等しくクズそのものです」

2人の中で、少しだけ上がっていたギルバートの株は、結局、元通りとなっていた。

第16話 チートがあっても浮かれるな

バルトファルト領に乗り込んできたゾラー一行が、赤い通り魔の影におびえて退散した数日後、リオンはバルトナーの格納庫に足を運んでいた。

浮遊しながら移動する球体ボディのルクシオンの子機の後について艦内を歩いていたリオンであるが、目的地に到着したところで、先導してきたルクシオンのモノアイが光る。

『以前、レッドグレイブ家から依頼のあった件ですが、ようやく準備が整いました』

「アロガンツほど強くなっていいから、性能のいいロストアイテムの鎧を売ってくれって話だったな」

「はい、それがこちらになります」

ルクシオンのモノアイから発射されたサーチライトに照らされた先に鎮座していたのは、丸みのある頭部に、流行のトレンドからは程遠い重量感を漂わせた、リオンにも見覚えのある鎧であった。

「アロガンツじゃないか！いや、でも少し形状が違う・・・？」

『これはマスターのアロガンツを製作する際に、裏でデータ取りに使っていた試作機を改修したものです。マスター以外にも使えるように少々性能を抑えつつ、アロガンツへの組込みを検討中の新たな機能をいくつか試験導入しています』

リオンも機体をよく見てみると、背部は、エンジンノズルが付いたコンテナ型のバックパックではなく、2枚のウイングの付いたものとなっている。

その他に、リオンのアロガンツにはないキャノン砲が両肩に設置されていた、腕部の形状もやや異なっている。

「おい、公爵家をモルモットにしてデータ取りするつもりか!?!何かあったら首をすっ飛ばされるぞ!」

『マスターの機体よりもマイルドな調整にしてあるので、兵器としての安定性は十分です』

「お前のサポート無しにまともに動くのか?」

攻略対象5人との戦闘時には、スコップと砲塔付きドローンしか使わなかったが、アロガンツには、多種多様な武装がある。

王太子であるユリウスの機体を粉々にした、掌から放つ衝撃波に加え、ブレードやサイズ等の近接武装に、ミサイル、チャフ等の防衛兵装はルクシオンのサポートあってこそのものであることはリオンも自覚している。

『おやおや、自覚はあったようですね』

「俺は謙虚だから自分で何でもできると思っちゃいない。任せられることは、相手に任せる主義なんだよ」

『相変わらず口先だけはよく回りますね』

「お前も相当なものだと思うけどな」

ルクシオンのモノアイが2、3回点滅した後、180°回転してリオンから目を背けると、機体の解説を再開する。

『この機体には、私が作ったサポート用の人工知能を搭載しています。念のため、マスターには敵対できないように禁忌設定を組み込んでるのでご安心ください』

「そもそも公爵家に敵対するなんてまっぴらごめんだな。命がいくつあっても足りない」

『王太子と敵対したマスターの言葉とは思えませんね。おや、どうやらこの浮島に来客のようですよ』

「何だ？ゾラ達がまた乗り込んで来たのか？」

『いえ、所属は・・・王宮とレッドグレイブ家の飛行船のようです』

「俺のお沙汰がとうとう決まったか。これでようやく婚活からおさらばできるな」

『本当にそんなにうまくいくのでしょうかね』

爵位の管理等を担当する部局の文官を連れて、僕はバルトファルト領に到着した。

ぱっと見渡したかぎりだが、開発の真つただ中といった発展具合であり、どこかのんびりとした田舎だといえるだろう。

関係者を連れて、アンジエ達が滞在しているバルトファルト男爵の屋敷に到着すると、アンジエの面倒を見るために同行していた使用人達が入口で待機している。

そして、屋敷の扉が開くと、アンジエ、この乙女ゲー世界の主人公であるオリヴィアさん、そして追加DLC系攻略対象のバルトファルト君が中から出てきた。

妹としても、僕が迎えに来るとはまさか思っていなかったのだらう。

「兄上!？」

「久しぶりだね、アンジエ。少しは元気になったみたいで安心したよ」「わざわざ兄上が自ら来るなんて・・・どうしたのです?」

「・・・可愛い妹の様子が心配になってね」「今度は一体、何をやらかしたんですか」

一瞬の間から、僕がドジを踏んだことを見抜くなんて、悪役令嬢なうちの妹は、鋭いのか、攻撃性が高いのか、それとも僕への信用がないのか、どれなんだろう。

「違うんだ、不幸な事故に巻き込まれただけなんだよ」
「言えない。」

この国の大臣のお家の家臣達に騙されて歓楽街に連れ出された上に、巫人とアヴァンチュール寸前な伯爵令嬢と、愛の休憩施設の前で口論になり、空きっ腹に流し込んだアルコールをマールライオンした、だなんて言えるわけがない。

というか、さすがの僕も、実の妹にこんな恥まみれなエピソードを知られたくはない。知られたら、残っているかもわからないお兄ちゃん威厳が、確定的にゼロになってしまう。

それに、この世界にストーリーカーという概念を創り出した重い女との関係を疑われるのは甚だ不本意だ。

仕方がない、強引に話題を逸らすとしよう。

僕はアンジエの横にいたオリヴィアさんに視線を向けて微笑みかけながら、その手を取ってみる。

「やあオリヴィアさん。この前に引き続いて、アンジエの傍にいてく

れてありがたい。お礼に今度お茶でも行こうよ。いつそのこと、君さえよければ僕の愛人に・・・って痛い！」

アンジエに耳を引っ張られて、オリヴィアさんから引き離されてしまった。オリヴィアさん自身は、苦笑いを浮かべながら、バルトファルト君のほうをチラチラと見ている。

とはいえ、主人公にちよつかいを出しても、運命の修正力さん(仮)は大きく動いてこないようだ。今回もアンジエに怒られるだけで済んだ。

シナリオに影響を与えようとすると、王妃様が激おこになったり、妹の婚約破棄が数年も前倒しになったりするのに、この違いは何なのだろう。

「兄上！いつまでもふらついてないで、いい加減しつかりしてください！これから苦しくなる公爵家を兄上が支えないでどうするのですか！家臣達も心配しているんですよ」

アンジエのお言葉に、付き添いの使用人達も小さく頷いている。アンジエの婚約がなくなり、公爵家の派閥の力は弱体化する一方だ。盛り返すことは容易ではない。そんな状況であれば、後継ぎの僕がしつかりしろ、というのは理屈としては正論すぎるくらい正論だ。ちなみに、他の使用人達と異なり、ひとときわ大きく頷いているのが、我が家における僕の宿敵、腹黒メガネメイドのコーデリアだったりする。

ただ、いつもなら嫌味の二つや二つも言ってやりたいが、今回はアンジエが元気を取り戻すまで、よく付き添ってくれたし、いきなり僕から毒を吐くのはやめておくとするか。

「君もアンジエの付き添いご苦労だった。変わりはない・・・ようだな」「ええ、それと、先日、面白いものを見つけました・・・ふふ、若様もずいぶんと人気の方ですね」

そう言ってコーデリアは、一枚の紙を差し出した。何かの会報のようだ。

目を向けると、僕の似顔絵と思しきイラスト、そして、見出しには書かれているのは・・・赤い通り魔？僕にとんでもない異名を付けや

がったのはこいつらかあああ!!!

「プププ・・・ほ、報告は後ほど改めて・・・」

「ずいぶんと楽しそうだな、この腹黒め」

少しでも優しくしてやろうとしたのは間違いだったらしい。

バルトフアルト家屋敷の入口での妹との再会イベントが終わり、屋敷内の一室では、同行してきた人事所管部局の役人がバルトフアルト君の処置について、説明を行っている。

僕もそこに同席しているのだが、バルトフアルト君の昇進については、彼だけでなく、その父も驚きを隠せずにした。

処刑されることは免れても、何らかの責任を取らされるものと思っていたのだろう。普通に考えればそのとおりなのだろうが、うちの実家も含めて様々な思惑が絡み合った上での結果でもある。

まだ納得できていない様子のバルトフアルト君が、顔を引きつらせながら口を開いた。

「その・・・男爵の地位とか、騎士の称号って返上じゃないんですか？」

「おや、もしかしてこんなものじゃ満足しなかったかい？」

少しおちよくつてみると、バルトフアルト君は首を大きく左右に振って否定してくる。

「自分で言うのも変ですが、あんな騒ぎを起こしたのにどうして・・・」
「それを言うなら決闘を申し込んだのはうちの妹さ。王宮でのセレモニーはすぐに行われるから、おめかしする準備をしておいてくれ」

当初の予想通り、バルトフアルト君には、嬉しさの欠片も見当たらない。むしろ、放心状態になっている。

やはり上昇志向的なものは強くないようだ。あんなに強い力を持つているから、野心がガラガラしすぎると面倒になりかねないが、ここまで出世欲がないのも困る。

最低限、聖女となった後の主人公と釣り合いが取れる程度には高い地位を持つてもらわなければ、僕が困る可能性があるかもしれない、というか困るだろう。

公爵家と神殿は特別に親しいわけではないので、将来的にはバルトファルト君を経由して聖女となるオリヴィアさんと手を組もうと思っていたが、その流れを崩すわけにはいかない。

噂では、学園内の女性人気は低いという話だから、逆に女性をあてがってやれば攻略自体は難しくないと思っていたが、意外と攻略難易度が高いのか!?

君はもう主人公の獲物なんだよ。捕食・・・いや、攻略されるのはご褒美、運命だと思って諦めてくれ!

うちがバツクにつくから、聖女様の相手として、一緒にこの国でブイブイいわせようぜ!

「そういうえば、公爵様から頼まれてた件なんですけど、用意できたので一緒に来てもらっていいですか?」

そんなお願いをパパ上がしてたねえ、その記憶はアルコールと一緒に体外に排出してしまっていたよ。

バルトファルト君に連れていかれたのは、バルトナーという彼のラストアイテムの1つであり、700メートル級の飛行船だ。

おそらく、彼の鎧であるアロガンツと一緒に、DLC用のセット販売されたチートアイテムなのだろう。

そして、船内の格納庫に入り歩いていると、まず目に入ってきたのは、王都での決闘騒動で、この国の既存技術では最強であろう王太子用の鎧を完膚なきまでに叩きのめし、文字通り粉々にした黒と灰色の鎧であるアロガンツだ。

この鎧を見て、決闘時のバルトファルト君による壮絶な煽りの記憶が蘇る。あのときは本当にスカツとした。それと同時に湧き上がる彼への感謝の気持ち伝えることにしよう。

「これまでは周囲の目もあったからフランクに話せなかったが、あのときは本当にありがとう、バルトファルト君、いやリオン君と呼ばせてくれ」

「・・・王太子殿下をぶん殴って昇進するとは思わなかったんですけど」

「ようやく本音っぽいことを言ってくれたね。国のために身を挺した騎士を冷遇したら、それこそ笑い種だよ。それとも国のために、というの？ だったのかな」

「う、嘘じゃないです・・・」

とつさにリオン君はバツが悪そうに目を逸らした。

「君に対して公爵家が感謝しているというのを対外的に示すというのと、うちが王家に対して怒っているというのを示すためには、昇進してもらうのが最もわかりやすい形だったのさ。君にとって本意だろうことはわかっていたから、そこは申し訳なく思っているよ」

「色々と思うところはあるんですけど、学園でヘイトを集めすぎちゃったので、今さら戻りにくいってのはありますね」

「結婚相手のことかい？」

リオン君が頭をうつむいて恥ずかしそうにしながらうなずいた。

「婚活の心配はしなくていいよ。公爵家が、いや、いざとなったら僕個人で面倒を見よう。気になる相手がいれば、それはそれで構わないし、何かあれば相談してくれ。僕の異名、知ってるだろう？」

「えつと・・・赤い通り魔ですか」

「そつちじゃないよ！ 辺境の愛の救世主のほうだよ！」

「す、すいません！ でも自分のような成り上がりにはずいぶん都合が良くて少し怖いですね」

リオン君が一ボケ入れてくるとは予想外だった。

だが、都合が良すぎるというのはその通りだろう。彼の側からしたら、過剰に優遇されていると感じるのは不思議ではない。

転生者として、この先に起こるであろう出来事が幾分かわかっているという僕の事情を知る由もないだろう。

彼には、主人公のための人柱としての役割があるとは口が裂けても言えない。だからこそ、それっぽく聞こえる理由を用意してある。

「君が倒したユリウス殿下の機体は今の王国で最高クラスの機体だ。それが相手にもならないということは、君一人で、通常の鎧なら束になっても勝てないだろう。僕は臆病な人間なので、君と敵対するよりはお友達になりたいのさ。腐っても公爵家だからね、武力以外なら力

になれると思うよ」

「それって、俺にレッドグレイブ家の派閥に入れってことですか」

「いきなりそんなことは言わないよ。拙速に動けば、うちの派閥の中でも地位が害されるかも、だなんて被害妄想を抱いて君を陥れようとする連中が出かねない。そうだねえ、学園を卒業するまでは青春を謳歌していてくれ」

「ギルバートさんが俺に何をさせたいのかわかりませんね」

さすが攻略対象。ただの武力馬鹿ではないようだ。

うーん、聖女になる主人公に腰を振っていいばい、だなんて本音は言えないな。

「極端な話をすれば、こちらが指示を出すとき以外は、特に何もしていいかな。あとは、あのマリエとかいう女や、うちの敵対派閥の女に誑かされなければそれでいい。むしろ、一緒にいた特待生の子とイチヤイチャ学生ライフを楽しめばいい」

「いや、イチヤイチャしてなんてないですよ。あの学園での数少ない友達です。それに、さつきギルバートさんが思いつきり口説いてたじゃないですか」

「あれは僕の持病のようなものでね。貴族じゃなくて、性格が悪くなさそうな子には挨拶代わりに口説いてしまうんだ。あの学園に通った後遺症のようなものだろうね」

「・・・最後のところは同意です。卒業するまでに婚約者がいなくても後ろ指を刺されないのはズルいと思いますけど」

「いや、後ろ指はきつと物凄く刺されてるよ？公爵家のパワーとか、アンジエのために色々と動いてたつてのがあるから、有耶無耶にできていただけだと思う。正直言うと、そのうち、他国あたりから嫁さんを引っ張ってこられそうで怖い。まあ特待生のオリヴィアさんについては、僕に脈はなさそうだから安心していいよ」

「いやいや、俺も狙ってないですって！・・・あ、着きました。こちらです」

話の途中で目的地に着いたらしい。リオン君のアロガンツの横を通り抜けて、格納庫の最も奥にあったのは・・・

「アロガンツがもう1機!？」

とつきに後ろを振り向いて、リオン君の灰色と黒色のアロガンツを確認する。そして、僕の目の前には、それとは別のアロガンツの姿があった。

よく見ると、違う部分がいくつかある。同型機の別機体ということだろうか。

バックパックはコンテナ型から、2枚のウイングを備えたタイプになっていて、機体のあちらこちらに赤や黄色の配色がされている。

まるで水泳ゴーグルをかけた竜巻お兄さんの機体のようにだ! 男の子の中にある厨二ソウルをくすぐるカラーリング、実にトロンベ:「これは...欲しくないと言えば?になるが、もらってしまうのも気が引けるな」

冒険者の見つけた宝は冒険者のもの、というこの国の不文律に触れてしまわないだろうか。

「見つけた鎧の中で、使えそうな鎧はこれしかなくて...それに戦闘に使うには時間がかかるかもしれないです」

「どういうことだい?」

リオン君の説明によると、彼の機体よりも各部が簡素で出力も低そうなので、試作機の可能性が高いらしい。

試作機のほうが性能が低い、というのは、ロボットものの中では珍しいパターンだな。ド○グナーとドラ○ーンのようなものか。

また、機体の動きは全般的に人工知能がサポートを行うが、この機体の人工知能は稼働経験に乏しく、細かな動きを最適化するためには、それなりに時間をかけて経験を積ませる必要があるそうだ。

百聞は一見に如かずとばかりに、リオン君が、もう1機のアロガンツに対して、格納庫内の木箱を積むように指示を出した。それに従い、木箱は縦に2箱積み、3箱目を積もうとしたところで、木箱は雪崩のように崩れてしまった。

さらに、機体はそれを見て、頭と肩を落として明らかに凹んでいますというポーズをしている。

言葉ではなく、動きで感情を表現するなんて、表現力が豊かな人工

知能だな。だけど、何故かわからないが、このポンコツ可愛さが癖になりそうだ。

始めはこんな感じだった機体を、決闘のときまでにリオン君は育て上げたのだろうか。

「君のアロガンツも最初はこんな感じだったのかい？」

「まあ、色々とやりましたよ。浮島の中で温泉を掘ったりとかもしましたし」

「けっこう楽しそうだね」

「恐縮です」

「わかった。父上にも説明して、しかるべき代価を払おう。このお礼はまた場を改めさせてくれ」

父からは、アンジエを連れて戻ったら、アトリー家とのゴタゴタのほとぼりが冷めるまで、しばらく領地に戻っているように言われている。

よくよく考えてみれば、今まで僕には全くなかったチートの要素が、思わぬところから転がり込んできた。

悪役令嬢な妹の婚約が解消された後、というのは皮肉なものかもしれないけどね。

主人公があのかケモナー学園で過ごす三年間のうち、まだ1学期、全体の9分の1くらいしか経過していないはずなのに、イベントとしてはずいぶん多くの出来事が起こったようだ。

本来であればクライマックスの時期に起きるはずの、悪役令嬢の婚約破棄イベントが1年生の1学期に起こるだなんて誰が予想できただろう。

まさか、これが最初からクライマックスというやつか!?

だが、この先は、これまで以上に気を引き締めなければならないだろう。公国が攻めてくるというイベントはまだ起きていない以上、まだ僕の苦労は続くはずだ。

本当に乙女ゲー世界というのは、悪役令嬢の身内にも厳しい世界だね。

ギルバートやアンジェリカ、オリヴィアを乗せた公爵家の飛行船に同行する形で王都に向かうパルトナーのブリッジでは、リオンがルクシオンを問い詰めようとしていた。

「新人類なんて滅ぶべしと言ってるお前が、気前よくアロガンツの同型機を渡すとは思わなかったよ」

『先日も言いましたが、既にあの機体の本来の役割は終わっています。その上で、マスターのアロガンツを強化していくためには、データと経験が必要です』

「今のままだつて十分だろ」

『将来的に、新人類の兵器や私のような存在が現れないとも限りません。そのときに遅れを取らないことが重要です』

うまくここから貴族社会とは無縁のスローライフを送れると思つていたりオンには、今回の結末は意外そのものであったし、これ以上の面倒事は避けたいというのが本音である。

「現れないまま終わってほしいものだ」

『それに、マスターから言われた、ギルバートの情報を集める目的もあります。あのプロトタイプアロガンツには、小型のスパイロボを仕込んでおきましたので、情報収集の精度を高めていきます』

「そうだな、頼んだ。婚活から逃げられそうなのはありがたいけど、俺に都合が良すぎて、公爵家が何を考えているのかわからなくて怖い」
『もっともありそうなのは、アロガンツやパルトナーの力を自陣営に取り込むことで、アンジェリカの婚約解消により弱まる公爵家の影響力を補おうとしているのでしょうか』

「厄介な人に目を付けられたもんだな。けど、距離を離せば、それでいいのかを考えると悩ましい」

『そうおっしやいますと？』

リオンが頭を抱えてため息をついた。

「ギルバートさん、リビアのことを気に入ってるっぽいんだよな。本人は脈無しと言ってたけど」

『食事に誘ったり、愛人になるよう口説いていましたね』

「悪役令嬢の兄弟って攻略対象のテンプレの1つだからな。前世の俺の死後に、追加コンテンツがあったら、あの人が攻略対象の可能性が高まる」

（本来の攻略対象5人があのざまな以上、ギルバートさんとリビアをくつつける事態も考えておくか。でも乙女ゲー世界で、主人公を攻略対象の愛人にするなんて、ありえるかなあ・・・）

『マスターは、オリヴィアがギルバートに惚れるとお考えですか』

「顔が良くて、貴族の女が嫌いで、金持ちだぞ。リビアじゃなくたって、惹かれても不思議じゃない。それが愛人っていうのはどうかと思うけど」

『貴族の女子以外には手広く口説いているようですが。それに、将来的には聖女になるのであれば、王国の価値観でも釣り合いが取れるのでは？』

「公爵と聖女、身分的な釣合的はユリウスルートに近い組み合わせか」

（それに、最終的にラスボスを倒すのはリビアの力だ。マリエの奴のせいで、この先の流れが全く読めないからな・・・）

「ルクシオン、情報集めは頼んだぞ」

「ご命令とあれば」

機械的に回答したルクシオンだったが、マスターであるリオンの言うことには納得しがたい部分が多い。

しかも、この世界の運命は、オリヴィアの恋愛成就次第なのだという。

「疑わしいことは否定できないが、かといって、命令には背くことができない。」

しかも、現時点でそのオリヴィアの普段の目線は、他ならぬリオンに向いていることが多い。

それを、他の男にくつつけるというのは滑稽だと言わざるを得ないだろう。

田舎でのスローライフを望みながら、結局は大暴れして、大物貴族から目をかけられ、昇進するというのは、控えめに言っても滑稽だし、

やることなすことが悉く裏目に出るリオンの存在は、ルクシオンにとってには浅はかでもあり、愛おしくもある。

旧人類によつて作られた後、長きにわたつて基地で待機状態となつていたルクシオンは、外の世界で活動を始めてまだ1年足らずだが、大胆にして愚かなマスターと過ごす今を、少し楽しいとも思い始めていた。

第17話 お忍び学園祭（前編）

長期休暇明け直前に、リオン君が正式に騎士に任じられた頃、僕は公爵家の領地でデスクワークとプロトタイプアロガンツの慣らし運転に明け暮れていた。

実際に乗ってみると、試作機とはいえ、さすが、課金用チートアイテムだった。既存の鎧とは、スピードもパワーも“ダンチ”だ。

公爵家の鎧部隊との模擬戦をやってみたが、魔力シールド込みの防御力の前にはほとんどダメージが通らない。

特に遠距離戦ではシールドを抜ける兵装がなく、弾薬がシールドに着弾したときの衝撃以外は伝わらない。

あの乙女ゲー最強の敵、そして公国最強と言われる黒騎士が持つと言われるロストアイテムの大剣があるらしいのだが、そのレベルでないと戦いにはならないだろうと、うちの鎧部隊の隊長に言われてしまった。

そうになると、リオン君はどれだけの力を持っているのかを改めて認識させられてしまうね。絶対に彼とは敵対すべきではない。

ちなみに、生身で使える攻撃系の魔法は、鎧サイズに変換して使えるようだ。僕の場合は、ファイヤーボールやファイヤランス等を使う上に、機体の魔力の変換効率も既存の鎧とは比べ物にならないように、その気になれば、鎧の全長ほどの巨大なサイズのファイヤーボールも使えるようだ。

・・・これを手でぶつければ金髪忍者なラセ○ガン、足で蹴り飛ばしたら○ヨダイマックスなキョダイカ○ユウ、鎧全体に纏って突撃すればシャイ○スパークみたいだね。

その日も一日、模擬戦を繰り返してヘトヘトだった。疲労でぼんやりした頭がふと前世の記憶を蘇らせる。

模擬戦を2000回こなすと、スペシャルな生存フラグが立って不死身になるんだっけ・・・いや、そんな訳ないか。

アホな雑念を振り払って、シャワーで汗を流し、残った事務仕事を片付けようと執務室に戻ると、デスクの上に不自然に置かれた封筒を

発見した。

裏面に施された嚴重な封印には、とても見覚えのあるエンブレムが刻まれている。

はつきり言おう。とても嫌な予感がする。

そもそも、なんでこんなものが僕の執務室に置かれているんだ。

だが、置かれている以上は、公爵家の領地の僕の執務室に入れる人間にまで、つながりを持つている人物の指示があったということだ。

そんな人物、心当たりは1人しかいない。僕の予想が正しければ、この封筒を怪文書の類だとスルーするのはまずいだろう。仕方なく開けて中身に目を通すと・・・やっぱりか。

どうやら、パパ上にも内緒で王都に、しかも、あのケモナー学園に行かなければならないようだ。

ケモナー学園の近くにある、人通りの少ない路地には、1件の喫茶店がある。封筒の中身により指定された店だ。

中に入ると、僕を呼び出した張本人が、店の最も奥のテーブルから、ニヤニヤとした表情を浮かべながら、手招きをしている。

オーダーの飲み物を持ってきたと思われる給仕の若い女の子を横に座らせていることから、僕が来るまでの間にナンパをしていたのだろうね。

とりあえず僕もその子にアイスコーヒーを注文して、席を外してもらった。

ちなみに僕は、王都に来ているのがパパ上にバレないようにするために、黒髪のカツラをかぶり、度の入ってない眼鏡をかけて変装している。

それでも呼び出しの主が、僕を認識できるのは、この格好がお決まりの変装だからである。

「ご無沙汰しております、陛下」

「よう！久しぶりだな、ボンボン」

「このご時世に、気軽に呼び出されては困ります。王家と公爵家の現

在の関係は、陛下が一番ご存じでしょう」

そう、僕をわざわざ領地から呼び出したのは、この国の国王。ローランド・ラファ・ホルファート陛下だ。

僕が国境沿いの監査の仕事をしていたときには陰に陽に、そして、昼も夜も、とにかくお世話になった恩人だ。

上下関係のある夜の飲み友達という言い方もできなくもない。

お互いに下半身スキャンダルを共有していることに基づく強固な共犯関係とも言える。

しかし、ケモナー学園での決闘騒動で、あの乙女ゲーの攻略対象の1人であると同時にこの国の元王太子こと馬鹿王子と僕の妹の婚約は解消となっており、王家と公爵家の関係は誰しもが最悪だと認識している。

「ふん、そんなものはミレーヌとユリウスの問題だ。私がとやかく言うものではないね」

相変わらず凄いな、この人。妻と息子の問題は自分に関係ないと言いつつたよ！

王家と公爵家の問題なら陛下も当事者ど真ん中ですよ!?!..いや、そんな正論、この人には通じないか。

正論でぶつかっても、気付いたときには話題をすり替えたり、逆に開き直った上で権力を振りかざして、逆切れ正面突破をしてきたりするからな。

「陛下との夜遊びは控えるよう父から言われているんですが・・・」

「よかった。まだ昼だから大丈夫だ、問題ない」

「いやいや大ありですから!?!っていうか、詭弁だっけわかって言ってますよね!?!」

「大事な用事があるんだよ。お前も付いてこい」

王宮での執務より、学生たちの学園祭が大事だっけ王妃様に聞かせてやろうか...いや、聞かせなくてもいいか。王妃派連中は、せいぜい陛下の尻拭いで苦しめばいい。

「はあ...わかりましたよ、お付き合います」

学園の敷地に入ると、陛下が意気揚々と歩き、すぐ後ろに僕が続く。

さらにその周囲を、変装した陛下の護衛達が広めに囲いながら動くという気を使い過ぎて胃が痛くなる隊列が学園を進む。

僕にとっては、王妃様激おこ事件以来、数年ぶりの学園だが、相変わらず目と耳を覆いたくなるような気分の悪い光景が繰り広げられている。

すぐ近くの食べ物を販売する出店では、女子生徒が代金の支払いを踏み倒そうと男子生徒を恫喝していた。

それを見た陛下がポツリと呟く。

「相変わらず見られたものではない光景だな」

「それをわざと放置している人間が絶対に言っではいけない台詞ですね。刺されるだけならまだまし、放っておけばいずれ反乱が起きますよ」

「経験者が語ると重みが違うな、ボンボン」

「一生モノのトラウマですけどね」

僕が在学中に辺境貴族出身者達に結婚相手を片っ端から斡旋したことに端を発する、王妃様激おこ事件により、僕が学園に通えなくなったことを陛下が弄ってきた。

その際の釈明が、陛下にとって利用価値があると見出されたのか、バーナード大臣の下で監査の仕事をするようになったことをふと思いついた。

1人の人間としては、真面目なことからは色欲まみれなことまで、陛下のおかげで色々な経験を積むきっかけを得られたのは感謝してもしきれない。

アンジェの婚約が解消となったために、陛下とも接触するのも難しくなったのは僕も悩ましい。そんな心中を察したのか、陛下が会話を続ける。

「なあボンボン、お前達はこれからどうするつもりだ？」

お前“達”というのが難しい。父上と僕だけか、それとも派閥全体か。いずれにしても、ここで僕が何かを言うのは控えたほうがいいだろうな。

「さあ？父から、しばらくは領地にいるように指示されている僕には

何とも言えませんね。国境監査の仕事も事実上は引退状態です」

表向きには、領地で女の子を口説くか、プロトアロガンツでの模擬戦くらいしかやることがない。

本当は、主人公様ことオリヴィアさんと課金系攻略対象のリオン君の恋模様を観察、サポートしたいのだが、なかなか学園内の出来事に関与できないのはもどかしい。

「愚息が一体どうしてあんな状態になってしまったのか・・・アンジェリカには色々と申しわけないが、女に熱を入れるようなタイプではなかったんだがな。私が自ら、女遊びを教えればよかったのか」

「殿下のことはわかりませんが、ジルクは陛下や僕みたいな遊び回る大人への反発もあったと言っていましたよ」

「あいつだつて一緒になって楽しんでたじゃないか・・・だが、そうだとすると、女慣れしてるか否かは関係ないのか」

「あのマリエとかいうラーファン家の小娘について分かったことはないのでですか？」

「実家からはほぼ放置されていたようだな。貴族的な教育を受けたような情報もない。はつきり言って、学園入学前の人となりについてはロクな情報がない。生身でクマを仕留めて金に換えていた、という面白い話ならあるが・・・」

「そんな女が、ジルクのような女慣れしたやつまで虜にしたというから、僕達には今回の出来事が不気味でなりませんね」

「10人にも満たない子供達のせいで、この国はこれから荒れるぞ・・・」

うちの派閥は大幅に弱体化、アトリー家も婚約破棄で大騒ぎだ。フィールド家、セバーク家、アークライト家の大物貴族3家は嫡子が廃嫡で醜聞まみれになっている。

「国内のパワーバランスはぐつちやぐちや、この状況から権力を握るのはどこになるのか・・・」

「お前、あれだけアンジェリカの結婚を気にかけていたのに、ずいぶんと他人事のように言うな」

しまった。普通の貴族から見たら奇行ばかりに見えたであろう行

動の原因が、妹への偏愛によるものだという設定になっていたのだから、もう少し取り乱すべきだったか。

やはり陛下の人を見る目というのは油断ならないな。さすが、ラーシエル神聖王国からクセ者と言われるだけのことはある。

「そんなことはありません。もうできることもなくて、お手上げなだけですよ」

「とぼけるな。やはりロストアイテム持ちのバルトファルトを取り込む算段を付けたようだな。王宮でも、ヴィンスのやつ、こつちに殺気を飛ばしながらも、どこか楽しげにしていたからな」

「それがわかりなら、彼には手出し無用で願いますよ。誰かさんの息子のせいで台無しになった、将来の僕の平穏な公爵ライフを取り戻すためにも重要なんですから」

「ふん、今は私もそれどころじゃないからな。さて、着いたぞ」

辿り着いたのは、学園の校舎の仲でも王宮から来た要人を待たせるための貴賓室だ。

アトリー家の文官、リオン君、それに陛下と、話をしている間にどこかに連れて行かれるのが最近よく続くなと思ったが、この部屋で陛下が誰かと密会するということが。

何が目的かは知らないが、誰に会うのかだけこっそり覗いて。あとは主人公とリオン君の様子でも見に行くとするか。

「わかりました。では僕はここで失礼しますね」

「お前は何を言ってるんだ？お前も来るんだよ」

「え?!」

陛下にいきなり腕を掴まれた。っていうか、この人、腕力の強さが半端じゃないな！振り払おうと抵抗したのだが、あっさり貴賓室に連れ込まれてしまった。

室内で真っ先に入っただけの、厳格そうな顔つきをした高身長男性だった。その身体は鍛え上げられていて、衣服の上からでもその筋肉が見て取れる。

次に目に入ったのは、長く伸ばしたストレートの金髪に碧眼の女性である。その髪はサラサラで、前世の合コンで出会っていたら、どん

なトリートメント使っているのかと聞いていたかもしれない。

服装はシンプルなデザインのものでまとめられている。だが、それ故に内側の胸部装甲が、なかなか暴力的な存在感を放っているように見える。

男性の方は、僕の顔を見て一瞬だけ驚いた表情を浮かべたが、すぐに表情を切り替えて、陛下に対して恭しく頭を下げた。

「陛下、この度は貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。それに、ギルバート殿もわざわざお越しいただき恐縮です」

「お待たせしたようですまないな、伯爵。さて、さつそくだが、驚いてもらえたかな？」

「それはもう・・・しかし、まさか・・・これは参りましたね」

そう言つて片手で頭を押さえながら、再び僕の方を見た男性の正体。それは、この王国の中でも古くから冒険者として実績を上げ、今や国内でも有数の武門の家というか武闘派ローズブレイド伯爵本人だ。

僕も面識がある程度だが、語彙力ゼロな表現をするなら、ものすごい大物貴族ご本人様とでも言うべき存在だろう。

いや、僕のパパ上はもつと大物貴族だし、僕のすぐそばには国家元首がいるから感覚が麻痺しかけているが、そう易々と拝めるツラではないことは間違いない。

そして、隣にいる女性は、そのローズブレイド伯爵の娘で、たしかもう学園は卒業したはずのドロテア嬢だ。学園在学中に、校内ですれ違ったときに会釈したくらいしか記憶はないけど。

あとは在学中に色々不穏な噂を耳にしたくらいか・・・僕は在学期間の後半はほとんど辺境貴族の跡取り達の結婚の世話ばかりしてたから、本来僕が関わらないといけなかった上位階層の中の話に疎いんだよね。

あ、そういえば、ローズブレイド伯爵にはもう一人、金髪縦ロールな髪型をした娘さんがもう一人いたな。ぱつと見の外見から“オウホツホ”みたいな笑い声を上げそうな、ザ・高飛車お嬢様といった感じだった記憶がある。たしかディアドリ嬢だったか。

僕からしたら、アンジェより、よっぽど悪役令嬢っぽいルックスだ
と思ったのは内緒だ。

そんな、メンツの個性が濃ゆいローズブレイド家は、これまではあ
まり王宮の政治ショーの最前線に出てくるような家ではなかったが、
それでも王宮内に強い影響力と確かな情報網を持っている。

しかも、僕の妹や馬鹿5人を震源地とする決闘騒動により、王宮内
でも力を持っていた家々が、程度の差こそあれ、弱体化した今、その
余波を全く受けなかったローズブレイド家の影響力は、相対的には強
まっている。

そんなローズブレイド家の当主がこんなところで陛下と密会だな
なんてどういうことだろうか。

しかも、僕を見て驚く、というのはどういう意味だ？

僕が得意ではない、貴族間の暗中闘争のど真ん中に引きずり込まれ
るだけは勘弁願いたいんだけど・・・

だが、このまま無言では失礼になってしまおうし、何かしゃべらなけ
ればならないな。

「こちらこそ、こんな変装した格好のまままで申し訳ありません。まさ
かローズブレイド伯爵が学園にいらしているとは思いませんでした」
そして、ここで陛下が会話に割り込んでくる。

「さて挨拶も済んだところで、この意味をわかってもらえたかな？」

「こちらの意図はお見通しでしたか。陛下もお人が悪いですね」

陛下とローズブレイド伯爵の間で会話が進んでいく。だが、僕には
何を意味した会話なのがわからない。完全に置いてきぼり状態だ。

仕方ない、ここはドロテア嬢に話を振って話題を変えるか。

「ドロテア嬢もお久しぶりですね。最後にお会いしたのは・・・この学
園のどこかでしたっけ？」

「先輩・・・いえ、ギルバート様は、卒業してから各所でご活躍のよう
ですね。在学中のお姿とはだいぶかけ離れているようです」

在学中の姿・・・辺境出身者達を引き連れて結婚相手を探してやっ
てた行動が、おそらく遊び回っていたというように理解されているの
だろう。

初撃から嫌味をぶち込まれてしまった。いや、でも僕は、妹のため、将来の自分の平穩のために、王国ヘイトをなんとか緩和しようと、必死だったんだからね!？」

「ははは・・・ドロテア嬢もなかなか手厳しいですね。ところで、どうして今日は伯爵とこんなところにいらしたのですか?」

「え?ギルバート様、まさか何も聞いていないのですか?」

ドロテア嬢の表情が一気に曇り、ローズブレイド伯爵の方を見る。伯爵は乾いた笑いを浮かべながら、顔を引きつらせており、とてもばつが悪そうな表情を浮かべている。

僕は、この状況を作った張本人である陛下の方を見ると、何が目的なのかは不明だが、とてもいやらしい笑みを浮かべている。そして、確実に言えることは、こういう顔をしている時は口くさなことを考えていない。

「何だ、まだ気づかないのか?お見合いだよ、お・み・あ・い!」

「はiiiiiiiiiiiiiiii!」

「伯爵からお願ひされてね。面白そうだから、最近、王都から姿をくらましていたお前を引っ張り出して来たんだ」

お見合いだと?いや、父が知っているはずもないから、いわゆる正式なものではない、顔合わせレベルのものだろうが、どうして僕がドロテア嬢と?

ん?ちよつと待てよ。そもそも、僕がここに来てローズブレイド伯爵が驚いた、ということは、僕が来るはずもないであろう人間だったからだ。

お見合いなら、普通はどんな相手連れってくるかくらいは告知するだろう。

陛下が連れてくる人間なら、突拍子もない輩等ではないだろうが、それでも常識的に考えれば、誰を連れてくるかを知らせるはずだ。

にもかかわらず、それをしない理由・・・陛下は、僕を連れてくることで、ローズブレイド伯爵を驚かせる、もしくは牽制したかった、ということか?

「どうやら、僕はまた利用されたみたいですね」

「ふん、ようやく気付いたか。どうやらローズブレイド伯爵は、王家とレッドグレイブ家の関係がどこまで悪化しているのか気にしていたようだから、こうして私とお前が仲良く連れ立っているのを見せてやろうと思っただけ」

「僕が出てくれば、表向きはともかく、裏では、そこまで深刻なことにはなっていないと示せる、ということですか」

「ヴィンスのやつがどこまで考えているかはともかく、レッドグレイブを継ぐお前が、こうしてわざわざ私の呼び出しに応じることに意味があるんだよ」

それを聞いて、父に言われたことを思い出した。僕と陛下が行動することが、あらぬ憶測を呼びかねないのだということ。

これまでは、王家、王妃派に加えて、公爵家の派閥、アトリー家の中立派と呼ばれる派閥を合わせた体制で、次世代に向けた権力移行を目指していたが、

馬鹿王子のご乱心のおかげで、それぞれの勢力がほとんどバラバラになってしまった、そのように他の勢力は見ているのだろう。

だが、僕が、のこのこと王都まで出てきたことで、ローズブレイド伯爵は、王家と公爵家にはそこまで仲が悪くないと考えたはずだ。

それで得をするのは誰かと言えば、王家はそんなに揺らいでないと思わせた陛下だろう。

これで王家としては、ローズブレイド家が下手な動きをする芽を早々に摘めたし、ローズブレイド家もレッドグレイブ家とお見合いができたという程度には利益があるのだろう。

ああ、悔しい。どうにも、気付いたときには、前世の下っ端社畜サラリーマンだった頃で行動してしまっているからなあ。

「お前が、自分の立場を知っているのか、いや、知っていても、理解できていないみたいだから。アトリーの文官どもも、そこに付け込んだわけだ。これで少しは懲りただろう」

「アトリー家の話はやめてください。思い出したくもない！あと、それでも僕は何もやってません！」

「悔しかつたら、私を出し抜いてみるんだな。出し抜けたら、お咎め無しにしてやってもいいぞ」

「言いましたね、ローズブレイド伯爵も聞いてるんですから、言質は取りましたよ？」

「そうだ、伯爵がご所望のお見合いの続きをしないとな」

しまった、ドロテア嬢とのお見合いの話が続いていたのを忘れかけていた。

「見合いの相手が公爵家の跡取りなら、伯爵も不満はないだろう。まあ私を試した無礼があるから、最後は断つてもいいが、それでも向かい合って話をするのが礼儀というものだろう？」

ええい！ニヤニヤとした表情が頭に来る。

それにローズブレイド伯爵も、うんうんと言わんばかりに首を縦に振ってくる。

「学園在学中には、なかなか話をする機会がなかったようですからね。ほら、せっかくだから一度、ゆっくり娘と話してみてください。お気に召すかもしれませんよ」

伯爵は強引に話を持って行こうとしつつも、どこかお試し感が強いな。例えるならワンチャン、ありか試してみるか的な感じの言い方に聞こえる。

え？自分の娘ですよ？なんでダメになる感じ込みなのを受け入れているんだ？

第18話 お忍び学園祭（中編）

さてさて、気が向いたときか、誰かに嫌がらせをするときだけ本気出すと評判の陛下の治世が、学園の決闘騒動後も、大きく揺らいではないことを示すために、

のこのこと王都におびき寄せられた結果、僕はローズブレイド伯爵家の御令嬢とお見合いするはめになってしまった。

改めて振り返ると酷いね。

こんな前回のあらすじから始まるアニメがあったら、まったく内容を理解できない自信があるぞ。

貴賓室のテーブルを挟んで、見合い相手、といっても、顔見知りではあるドロテア嬢と僕が向かい合い、互いの脇にはそれぞれ、陛下とローズブレイド伯爵が座するという、半ば保護者同席状態な場ができている。

陛下は何が起きても面白くなることは間違いないと思い、既にニヤニヤしている。他方、ローズブレイド伯爵は頻繁に手を組みかえたり、大きく息を吸ったりと、若干ソワソワした様子だ。

平凡な社畜だった前世とは異なり、今世の僕は顔と血筋だけは、ガチャのレアリティで言えばSRクラスぐらいあるので、これまでもお見合いの前段階の顔合わせ的な場面を何回か経験している。

貴族の中でも爵位が上だと、どうやらお見合いというのは、婚約がほぼ決まった状態でダメ押し的にやるもので、前世で言うようなお見合いは、顔見せなどと呼ばれているらしい。

僕なりの顔見せでの断り方は、いかに僕が妹ラブで、そのために辺境の悪妻を駆逐しているのかを熱く語るといふものだ。そうすると大概は向こうからやんわりとしたお断りがくる。

この辺りが、僕が貴族社会の中で、スーパーシスコン野郎だとか、妹のためなら浮島すら笑って沈めるとか、赤い通り魔とか噂される遠因なのかもしれない。

ただ、妹の婚約は解消となり、その話題をぶち込むわけにもいかない。ひとまず、お決まりなフレーズから入ってみるとしよう。

「えつと・・・ドロテア嬢、ご趣味は？」

「ありきたりな質問ですわね」

そんなことわかつとるわ！僕は心の中で毒づき、苛立ちを覚えるが、それよりも早くローズブレイド伯爵の顔が青くなった。

伯爵の顔色が変わるまでのあまりの早さに、つい面白さを感じてしまつて毒気が抜かれてしまう。

というか、僕、中身はともかく、スペックは王族の親戚みたいな血筋だよ？いや、媚びへつらう女も嫌だけど、そもそもそれ以前に、その態度は人としてどうなのよ。

まあ、ここからは、断るための口実をしつかり集めるためにも、もう少しだけ付き合つてあげるとしよう。

「それもそうですね。では、学園卒業後は何をしているのですか？」
「はあ、父の領地運営を微力ながらお支えしております。ですが、こんなことをお聞きになりたいのですか？」

本当に刺々しいな。ごめん、そもそも興味が無いんだよね。ただ、ここまで態度が酷いと、もしかして、ドロテアさんは僕のことを嫌いなのだろうか。

いや、好感を持たれるエピソードも好かれるエピソードもないんだけどさ。それとも、もしかしたら、国境沿いの監査のときに社会的に消した悪妻の中に友人でもいたのだろうか。

僕のことを嫌う属性といえば・・・この前の決闘騒動のときの観客席にいた女子生徒達の反応から察するに、女尊男卑の思考が強めというか、

男を下にみるべきと考えているタイプには、蛇蝎のごとく嫌われている。淑女の森と呼ばれる団体に属している連中が典型的な例だろう。

ただ、少なくともローズブレイド家があんな団体と繋がっていると
は思えないし・・・

ちなみに、ドロテアさんの脇にいるローズブレイド伯爵は、顔を上げてのことすらできなくなったようだ。

能面のような顔をしながら俯いている。

なんというか、お気の毒です・・・陛下の治世がどれだけ乱れるかを判断するために、せっかく陛下の不興を買ってまでお見合いをセツティングしたのに、娘であるドロテア嬢はそんなことを気にする様子がない。

もしかして、ローズブレイド伯爵一人がお見合いをさせたかっただけで、ドロテア嬢も断りたいのか!?

ここまでのツン100%な動きも、この顔合わせをさっさと終わらせたいからなのだと思えば辻褄があう。

普段から素でこんな人だったのなら・・・それはもう大したものだと呆れるほかないな。

だが、これが前世の合コンだったら、間違はなく地雷、しかも、かなりの大型地雷認定をされた上で、あとは男性陣から戦略的に放置にされるぞ!

君がやってるのは、合コンの初っ端に“今日はどこから来たの?”的なアイスブレイクの質問に対して、家から来た、等と答えて場を荒らしていくような喧嘩の押し売りだからな。

数合わせで来たのかもしれないが、他の参加者が気まづくなるような言動をするのはさすがに許せないね。

とはいえ、ここまで付き合ったのだから、もう切り上げていいだろう。

「せっかく骨を折られたローズブレイド伯爵の顔を立てようとも思いましたが、どうやらお嬢様のお眼鏡にはかなわなかったようです。そろそろ失礼するとしましょう」

「辺境の貴族達を次々と離婚させたり、亜人の集団相手に単身で大暴れる公爵家の暴れん坊と聞いていましたが・・・実物は顔ばかりで、物足りませんわね」

大丈夫、君の希望を満たさなくて少しほつとしてるよ。というか、アトリー家お抱えの文官達に嵌められた時のことをよく知ってるね!?

「顔をほめていただいてどうもありがとうございます。ですが、辺境の悪妻達を駆除できたのは、周りの同僚達が入念に準備をしてくれたからであっ

て、僕は実家の権威を振りかざしただけなのでね。買い被ってもらっては困ります」

少し嫌味を返すと、わかりやすくドロテア嬢の目元がピクピクと動いて、僕を睨みつけてくる。

だが、僕の関心はドロテア嬢ではなく、その脇のローズブレイド伯爵に釘付けだ。自分の娘の態度の酷さのせいで、うつむいたまま、小刻みに震えていて、憐れみと好奇心で伯爵から目が離せない。

被害者はきつと僕の側なのに、もつと打ちのめされている人がいて面白いから反応に少し困るね。もうやめて、ローズブレイド伯爵のメンタルのライフはもうゼロよおおお！

「では、久しぶりに学園に来たついでに、可愛い妹の顔を見に行きたいので、失礼するとうしまししょう」

そう言つて立ち上がろうとすると、ローズブレイド伯爵がとっさに僕を止めようと腕をつかんできた。

何だ!?最後の力を振り絞ったのか!?

「ちよ、ちよつと待つてください。その・・・娘は少し緊張しているようでして・・・色々失礼な発言、申し訳ない。ほら、ドロテア、何かギルバート殿に聞きたいことはないのかな?」

すると、ドロテア嬢が視線を少し泳がせながら、何かを考え出した。おや?少し空気が変わったな。

そして、腕を組んで、少し僕を睨みながら口を開いた。

「ギルバート様、私のペットになる覚悟はありますか?」

場が凍り付く、という言葉がある。たぶん今の状況はこういう空気になった場のことを指すんだろうね。

さすがの陛下もニヤつきが止まり、驚きのあまり、口をパクパクさせているし、ローズブレイド伯爵は、顔を天井に向けながらも両手で覆つて、現場を直視することから逃避しようとしている。

今、この子はペットって言った?ペットって犬とか猫とか鳥とかのペットのことかな?

それとも、ペットって何か別のものを指すための隠語だろうか。

ないわああああ!さすがに、そんなプレイを楽しむような癖(ヘキ)

はないわああああ!!

言い方からして、ドロテア嬢が、夜にだけ〇〇だニヤンとか言ってくれるわけではないだろうし・・・常識的にこんなことをいうなんてあり得ないよね。

ありえない・・・あ、そうか。このような場で何故こんなことを言うのかを考えてみたが、やはり、断りたい、というかこちらから断ってほしいから、心の内にある本心を剥き出しにしてきたのだろうか。

考えてみれば、ローズブレイド家側から顔見せをセツティングしておいて、自分達から断るのは憚られるから、僕を怒らせた上で、断ってほしいのだろう。

ただ、このままだと、ただただドロテア嬢の態度が悪くて、ローズブレイド伯爵は精神的に多大なダメージを受けただけで終わってしまう。

それでは少し気の毒だな。

ここは僕も協力して、こちらから断るための演技をする前に、僕も少し本音というか欲望を前面に出して、全体的に空気を悪くしておいてあげよう。

性癖と性癖をぶつけ合って、お互いに嫌になったから自然とこの話はなかったことになった的な流れになれば、少しはローズブレイド伯爵に恩を売れるかもしれないしね。

「なら僕もお聞きしましょう。ドロテア嬢、僕のために裸エプロンをする覚悟はありますか？」

場が凍り付く、という言葉がある(2回目)。

驚きやシヨックのあまり、言動が先に続かなくなってしまうときを指す言葉だ。

陛下は僕を不思議なものを見るような目で見てくるし、ローズブレイド伯爵は顔を少し赤くしている。もしかしたら、一瞬だけでも、自分の愛娘がそんな恰好をしている姿を想像してしまったのかもしれない。

そして、ドロテア嬢は、ソファに座りながらも身をゆっくりと引き始め、少し青ざめた顔をしながら、必死に言葉を絞り出すように口を

開いた。

「ギルバート様・・・何をおっしゃっているのですか?」

「あ、聞こえませんでしたか、すみません。裸エプロンをしてくださいって言いました」

僕の要望を聞いて、青ざめていたドロテアさんの表情は、みるみるうちに赤く染まっていた。

こちらにも、いざ自分がそういう恰好をしたときの姿をイメージしたからなのかもしれない。

「わ、私にそんな破廉恥なことをせよとおっしゃるのですか?」

人に対してペットになれと言った人が、破廉恥とか言っても説得力は皆無じやないだろうか。

だが、どうやら本人に自覚はないらしい。いいじゃないか、人前でやれと言っているわけじゃないんだから。

「今までの元カノ達にはいつもお願いしているんですよ。でも、さすがにその格好で料理をしるとは言わないから安心してくださいね」

裸エプロンはね・・・男のロマンなんだ。ただ、前世とは違って、もしかしたら、今世ではまだ裸エプロンという概念とかプレイは生み出されてはいないのかもしれない。

これまで関係を持った公爵家のメイド達や、陛下との夜遊びの中で知り合って付き合うようになった子達にはお願いしたことがあるんだけど、いつも驚いていたね。

もちろん、無理やりとか権力を振りかざして強制したわけじゃないぞ!?

こういうのは、女の子の側にもノリノリでやってもらおうからこそ楽しいんだ。

ついでに言えば、最初はちよつと恥ずかがっていても、少しずつ楽しんでやってくれるようになる経過を見れば、なおいい。

もしかしたら、ストーカーという概念をこの世界にもたらしたクラリス嬢と同じように、僕も今までこの世界になかった概念を生み出したのかもしれない。

欠点があるとすれば、その恰好で料理を作ってもらおうと、特に炒め

物を作ってもらおうときには、飛んだ油や食材の水分等が肌に直撃して、場合によっては火傷をしてしまうということだろう。

だから、実際に裸エプロンをしてもらうときには、料理は頼まないほうがいい。衣服ってしつかり皮膚を守るんだな、馬鹿にできないんだな、と理解するきっかけになったものだ。

さてドロテア嬢を見ると、僕のことをまるで汚物を見るような目で見てきている。

頬は心拍数が上がって興奮しているのか、真っ赤になり、目は少し涙目になっているようだ。

ドロテア嬢は、無言で伯爵の肩を叩くと、力なく首を左右に振り、耳打ちを始める。

そして、伯爵は立ち上がると、静かに頭を下げた。

「ギルバート殿、大変申し訳ないのですが、娘にはまだ刺激の強い世界があるようで……今回は……」

あれ？普通に断ってきた!?

え？自分は僕にペットになれとか言ってきたのに、僕が普通に振られたのか……?!

別に狙ったわけでは全くないのに……うらむ、解せぬ！

向こうがとんでもない性癖を披露してきたから、返礼代わりに僕も少し癖を披露したら振られて終わった顔見せの後、僕は陛下と学園の廊下を歩いている。

向かう先は、アンジエやりオン君、オリヴィアさんがやっているという喫茶店の教室だ。

そして、歩きながら陛下がサムズアップしながらポツリと呟いた。

「ボンボン、お前……なかなか尖ったものを持つていたんだな、さすが私の弟子だ」

「あんな失礼なこと言ってきたローズブレイド家の側から断られるなんて心外ですね」

「ローズブレイド家の娘は2人とも、変わった好みをしていると噂に

は聞いていたが、実物は予想以上に強烈だったな。私をドン引きさせるなんて大したものだ。あとは、お前の新しい一面が知れただけでも儲けものだった」

「噂が広がったら犯人は3人のうちの誰かですからね」

「残念だったな、お前の元カノ達がいるだろう。それにしても・・・よし、私も今度、愛する女達に頼んでみるとしよう」

「え！あの王妃様に裸エプロンさせる気ですか!？」

「馬鹿者！愛する女と言っただろうが」

相変わらず、陛下から見た王妃様の扱いが酷いな。王妃様と仲の悪い僕個人としては笑い話として聞けるからいいんだけどね。

「政略結婚も大変ですねえ・・・って僕が言っちゃいけない台詞でしたね」

「全くその通りだな。学園を卒業してから、お前があんなに国境沿いで必死に働くとは私も予想外だった。気付けば、夜遊び相手以外に女の影すらなかったからな」

「それは十分に女の影が見えると言うような気がしますけど」

「言わなくてもわかってるだろうが、結婚は貴族の義務だぞ。せっかくなこの私が、お前が婚約するときのために祝いのメッセージを考えてあるというのに」

前世がある人間には、この価値観がなかなかしつくりこない。いや、理屈はわかるんだけどさ。というか、相手も決まらない今からどんなメッセージを考えているのだろうか。

「それは光栄なことです。どんなメッセージから始まるんですか？」

「ようこそ、人生の墓場へ」

「冒頭から不穏極まりない煽りじゃないですか!」

「祝う気ゼロだよね!？」

満面の笑みでNDKかましてくるよね!？」

そんな馬鹿話をしている間に、アンジェ達の喫茶店のある教室が目に入ってきた。

すると、その教室の中から一人の亜人が飛び出してくる。そのまま僕達の横を通り抜けて行ったが、顔面に殴られたような傷があるのが

目に入った。

そして、続けて教室の中から、笑い声と、誰かを殴り倒したような衝撃音が聞こえてくる。

アンジエ達の教室で一体何が起きているのだろうか。

急いで教室に向かって、中をこっそり覗いてみると、教室の中で繰り広げられていたのは、口が三日月のように広がり、弧を描くように目を曲げながら、巫人の専属使用人達をボコボコに殴り続けるリオン君による処刑タイムだった。

おいおい、面白そうじゃないか。僕も混ぜてくれよ。

意気揚々と僕も教室に入ろうとすると、後ろから陛下に肩を掴まれて止められてしまった。

「おい、面白い先客がいるぞ」

いつものように顔をニヤつかせて、何かを企むように笑う陛下が教室の中を指さしている。

その先にいたのは・・・なんで王妃様が護衛もつけずに学園の教室に来てるんだああ!?

第19話 お忍び学園祭（後編その1）

「ぶっとべ、バーカ!!」

高笑いをしながら亜人達を殴りつけ、投げ飛ばし、両手をハンマーのようにして叩きつけるリオン君の様子を、僕と陛下は、喫茶店となっている教室の扉の隙間から覗いている。

このケモナー学園で亜人の奴隷兼使用人が、貴族家出身の男子達より大きい顔をしているのは、女子に対して立場が著しく弱い男子生徒達が女子生徒に嫌われたくないから、というだけにすぎない。

「控えろ下郎ども！このお方をどなたと心得る！ホルファート王国王妃ミレーヌ様にあらせられるぞ！頭が高いんだよ！」

「えっえ・・・なんで・・・？」

どういうわけか、お忍びで学園祭に来ている王妃様が戸惑う傍らでリオン君が、時代劇の放映開始から40分後くらいに印籠とセツトで出てきそうなセリフを吐いた。

「リオン君、待って！お忍びなの！こんな所で騒ぎなんて起こせないの！落ち着こう？いい子だからね？」

王妃様が、リオン君の肩をがしつと掴み、半泣きになりながら訴えかけている。

あの王妃様があんなに慌てている姿を見るのは初めてだな。王妃様が僕を見るときはだいたい汚物を見るような目をしているときか、嫌悪感を全開にしているときくらいなのに。ちよつと隣にいる陛下に聞いてみるとするか。

「僕の知っている陛下の奥方様とは同一人物に見えないんですが、あれは影武者か何かですか？」

「いや、たぶん本物だな。たいていの場合にはツンツンしているが、極まればにキャパを超えているのを隠せなくなるとあんな感じになる場合もある」

たいていの家臣なら、キャパを超える前に奥さんの仕事を手伝ったらどうですかと言うだろうが、そもそもこの陛下がぶん投げた仕事の後始末をしているのが王妃様なのだから笑えるよね。

「さすが20年近く夫婦をやっているとお互いのことがよくわかるんですねえ」

「騙し討ちで見合いをさせたことを根に持っているな?」

「あんなことされたら誰だって怨みますよ。ましてやペットになれば、ですよ?」

「お前だって、裸エプロンなんてものを要求してたんだからお互い様だろうが」

「いやいや、僕はあくまでお互いが合意の上でエキサイトできるプレイを要求しただけですから。まるで僕が変態紳士であるかのように言うのはやめてほしいものだ。」

「というか、いま気付いたのだが、亜人を連れてるポンディングみたいな髪型の女子生徒、あれは実家の敵対派閥の伯爵家出身で、しかもオリジナルの攻略対象の中の一人の婚約者の女じゃないか。」

「リオン君、よくやってくれた。さすが、追加コンテンツ系攻略対象だ。」

「あの女、たしかオフリー家ですよ、色々ときな臭い噂の絶えない伯爵家の・・・」

「そうだな。汚い金をばらまいて伯爵家に乗っ取ったと評判だな。だが、やつらの親玉はあのフランプトン侯爵だ。前にバーナードのやつも、あの家に監査を入れようとしたみたいだが、阻止されてしまったよ」

「フランプトン侯爵家は、もともと僕の実家のレッドグレイブ公爵家と敵対関係にあったが、アンジェの婚約解消騒動で、王家、王妃派、レッドグレイブ公爵家の協力関係が崩壊した結果、」

「相対的に王宮内で最も強い影響力を持つまでに至っており、その原動力の1つが、あのポンディング女の実家がばらまいている金なのだろう。」

「何があったかはしりませんが、アンジェやリオン君達にずいぶん好き勝手してくれたみたいですね。ちょっとあの女、メてきます」

「いや、待て。どうやらこの教室にお客さんみたいだぞ。相手をしてやったらどうだ?」

そう言つて陛下が廊下の向こうを指さすと、先ほど教室から飛び出していった亜人が、10人くらいのお仲間を引き連れて戻つてこようとしていた。

どうやら先程は別の場所にいる仲間を呼びに行こうとしていたらしい。一団を率いてきた亜人が、教室の扉のところで立っている僕に向かつて近づいてくる。

一団の中には角材やら鉄パイプ等を手に持つて武装している者もいる。素手ではリオン君に勝てないと思つて、学園祭の準備で調達された資材をかつぱらつてきたようだ。

「そこをどいてもらおうか」

「この教室に何か用かな？」

「お前には関係ない」

「残念ながら中にいるのは僕の身内だね。取り込み中みたいだから、遠慮してくれ」

「いいからそこをどけ！」

「それでも僕はこの国の貴族家の人間なんだが、それを聞いても引く気にはならないのかな？」

「どうせあの成り上がりのクズの知り合いだろう！」

亜人は強めの口調で話しながら、僕の肩をめぐけて腕を伸ばして突き飛ばしてきた。

この国の亜人は、本当に身分というものを考えずに振る舞うよね。懐かしきケモナー学園在学中にも思ったが、これは、行き過ぎた女尊男卑の副作用か、

それとも身分制という概念を彼らの頭では理解することができないのだろうか。亜人の業界団体とか利益団体とかに聞いてみたいね。ただ、この時点で先に手を出したのは相手の方ということになる。こうなればやることはこの前の忌まわしきアトリー家の文官達に嵌められたときと同じだ。

陛下の方をチラ見すると、もはや安定のニヤケ顔を浮かべながら頷いている。さすが僕の師匠ともいふべき陛下だ、この後の展開が想像できたらしい。

亜人の伸びた腕を掴んで手元に引つ張り込み、バランスを崩したその顔面に思いつきり頭突きを見舞ってやった。

僕の額に、鼻の部分の骨とぶつかった感触が伝わってきて、すぐに亜人の鼻から血が滴り落ちてくる。

亜人が痛みのあまりに怯みながら、両手で鼻を押さえると、僕はすかさず、亜人の左右のこめかみを掴み、顔面に膝蹴りを連続で叩き入れた。

さらに動かなくなったところで顔面を掴み、ゼロ距離からファイヤーボールをぶつけて自慢の顔を焼いてやる。商売道具というのは念入りに潰してナンボだよな。

「忠告はしたからな？」

亜人の集団に視線を向けて、鼻で笑って煽ってやると、見事に逆上した数人がこちらに向かって殴りかかってきた。すぐに魔力を体内に巡らせて、僕は周囲に炎の槍を出現させながら、後ろを振り向く。

「陛下、ここは危険なので退避・・・あれ？」

さすがに陛下に万が一のことがあつては僕の首が飛びかねないので、ここからの避難を促そうとしたのだが、振り向いた先には既に誰もおらずじまいだった。

おいしいおいしい!!!逃げるの早すぎるだろ!いや、いいんだけどね!きつと護衛の人が早急![!]この場から連れ出してくれたんだろ。むしろありがたい!

気持ちを切り替えて、出現させた炎の槍をこちらに向かってくる亜人達に叩き込むと、炎が深々とその身体に突き刺さって爆発を起す。

しかし、炎が刺さった亜人の背後から、さらに別の亜人2人が低い姿勢で飛び出してきて、そのまま僕の両足を取りにかかってきた。

咄嗟のことで反応が遅れ、そのうちの1人の顔面に蹴りを入れたのだが、そのままもう1人が右くるぶしの辺りに腕を回して僕の動きを封じてくる。

「くそっ!離れろ!」

しがみついている亜人の脇や背中に蹴りを何発叩き込んでも離れ

ないので、ファイヤボールを背中にぶつけてようやく拘束を振りほどいたのだが、

魔法を放ったタイミングで、今度は、凶器を携えた亜人達が距離を詰めてきていて、僕の頭をめがけて角材を振り下ろした。脳が揺れるような感覚とともに、頭部に熱さと痛みが走り、意識が遠のきそうになる。

「痛えじゃねえか、この腰振りヒトモドキがあああ!!!」

相手を怒鳴りつけ、自身を興奮状態にすることで必死に意識を保とうとする。

突然大きな声が上がって一瞬だけ怯んだ凶器持ちの亜人2人の顔を、左右それぞれの手で掴み、そのままダッシュして、廊下の壁に相手2人の後頭部を叩きつける。

さらに、連続で後頭部を壁に叩きつけるとやがて動きが止まったので、次の標的を探そうと振り向こうとしたところで額の辺りに、これまで以上に激しい痛みが走った。

目線を上げると、肩で息をしてこちらを睨みつけながら、振り下ろした鉄パイプを手にしている亜人がいる。

正直、魔力で身体を強化していなかったら、意識をまるごと持って行かれていたと思う。

前世も含めて、金属で頭を殴られたことはなかったが、なるほど、これは確かに当たり所が悪ければ致命傷になってあの学園が殺人事件の現場になってしまうところだっただろう。

さすがにこの攻撃を何発も食らうと命に関わるな、と思ったところで、次の行動を考えるよりも先に自分の体が動いていた。

もう一撃を見舞おうと、鉄パイプを振り上げようとしていた亜人に向かつて思いつきり飛び掛かり、顔面に拳を叩き込んでから、もう一度体当たりを食らわせる。

しかし、亜人の側もやられっぱなしではなく、体当たりをくらいながらも僕の胸倉を掴んできている。僕も亜人の上着の首元を掴むが、僕も亜人もお互いを掴み合いながら、バランスを崩して転倒してしまった。

転がりながら何回か上下が入れ替わるのだが、その先には、リオン君達が喫茶店をやっている部屋の隣の教室の扉があった。

成人男性2人の重さと転がり合う運動エネルギーに教室の扉が耐えられるわけもなく、大きな音を立てながら扉が弾き飛ばされ、僕達はその教室の中に転がり込んでしまう。

「きゃあああああー！」

教室の中にいた女性の悲鳴が聞こえてくるが、それを気にする余裕はなく、僕達は部屋の中にあつたテーブルにぶつかってようやく止まることができた。

だが、まだ余裕は全くなく、少しでも早く相手に対して、次の攻撃を繰り出すことばかり考えざるを得ない。

ぶつかつたテーブルの上にちようど置かれていた空のワインボトルが運良く視界に入り、それを手に取ると、残つた力で思いつきり亜人の顔面を力の限り殴りつけた。

当然ながらボトルは粉々に砕け散るが、亜人は膝をついてこちらの方に倒れ込んでくる。

「こいつでトドメだあああ!!!」

その隙を逃さず、亜人の顔面を右手で掴み、トドメのゼロ距離ファイヤーボールを顔面で爆発させると、ようやく相手の動きも止まつたようだ。

しかし、僕のほうもボロボロだ。肩で息をしながら、頭から流れ落ちてくる血をちよくちよく拭わないと視界が真っ赤になってしまう。

ひとまず隣りの部屋のリオン君達に合流しよう。確か主人公のオリヴィアさんは回復魔法が使えたはずだ。そう思い移動しようと思つたところで、後ろから声をかけられた。

「ギルバートさん、貴方、一体何をしてるんですか!？」

聞き覚えのある声があった方向に振り替えると、そこにいたのは緑色の攻略対象にして、クラリス嬢の元婚約者のジルクだった。

ん?どうして変装しているのに僕だとわかつたんだ?そう思ったところで、足元に変装用のカツラが落ちていっているのに気付く。どうやらいつの間にか、被っていたカツラが外れていたようだ。

それにしてもまだピンピンしているようだな。てつきりもう既に、アトリー家の手の者に襲撃されているものだと思ったが・・・

「なんだ、ジルクか。どうやらまだ無事だったみたいだね」

「無事って・・・少なくとも今の貴方が言えるようなセリフではないと思いますか・・・」

「・・・それはそうかもしれないな。だが、お前・・・その恰好はどうしたんだ？」

頭から流血して、全身ケガだらけな僕が、ジルクの安否を心配するのは滑稽な話かもしれないな。

そんなジルクは、高級そうなスーツを身に纏い、上着の中からは濃い色のシャツに、強い光沢を放つ緑色のネクタイが見える。まるで、前世の歓楽街にあるホストクラブのホストのような出で立ちだ。

しかもよく見ると、教室の中の内装もまるでホストクラブだ。壁沿いに高級そうなボトルが並び、教室内に並べられたテーブルでは、客と思われる女子生徒と、もてなしをしているイケメン軍団・・・というか、残りの攻略対象4人じゃねえか！

もちろんその中には、ラーファン家出身の謎の女に誑かされ、僕の妹との婚約を解消して、僕の当初の目的を台無しにしてくれた元王子の馬鹿王子の姿もある。

言ってやりたい文句と嫌味は3つや4つじゃ収まらないためか、自然とそちらを睨みつけてしまう。

そこに気付いたのか、ジルクは僕と馬鹿王子の間に体を挟み込んで視界を遮りながら、自分達の催し物の説明を始めた。

「マリエさんのプロデュースで喫茶店をやっているのですよ。・・・他のお客さんもいるので、そんな怖い顔で睨まないでください」

「そうか、ちなみにそのマリエという女はいないのか？」

あたりを見回すが、室内にいる女性生徒は客と思しき者ばかりで、報告書にあったマリエ・フォウ・ラーファンの特徴と一致するような人物は見当たらない。

「今は外しています。それよりも、学園祭に来て専属使用人と殴り合ってるなんて何があったんですか？」

「あつちにいる紫色の元婚約者、オフリーの女の奴隷どもが大人数でリオン君を襲撃しようとしてたんでね。止めようとしたら、今度は僕を襲ってきたから返り討ちにしたのさ」

「その割にあなたもだいぶ傷だらけになっていますけど？」

そう言いながらジルクは、さりげなくおしぼりを手渡してくる。さすが気が利く奴だな。血みどろになった顔を拭くと、蒸気の上がるおしぼりの熱が、顔面の傷に染み渡る。

少し息も整ってきたし、今度こそ、リオン君と合流するでしょう。「さすがの僕も多勢に無勢だったからな。おしぼり、どうもありがとう。まあ、その・・・お前も夜道には気を付けろよ」

「頭の片隅に置いておきましょう。それよりも、貴方が叩きのめしたその専属使用人を連れ帰ってもらえますか？」

「ああ、わかった。邪魔したね、それとマリエとか言う女に、そのうち落とし前を付けさせるから、首洗って待ってるって伝えておいてくれ」「そんなこと私達が黙って見ているとでも？」

「だったらお前らが頑張って大人しくさせておくことだな」

僕の目的を根本から台無しにしてくれた恨みは絶対に晴らしたいが、優先順位の問題として、今は他にやるべきことが多すぎる。

僕は、気絶している亜人の髪を掴んで、そのまま引きずりながら、ジルク達の喫茶店を後にすることにした。

「マリエさん、もう出てきても大丈夫ですよ」

ギルバートが、マリエプロデュースのホストクラブ風喫茶店を出て、隣の教室に入っていくところを確認したジルクは、店内のカウンターの方に向かって呼びかけた。

亜人の専属奴隷と殴り合いながら教室に乱入してきたギルバートを見た瞬間、ジルクはとっさにマリエを店の奥に隠したのである。

マリエを囲う5人の中で、ジルクは、ギルバートの危険性を最もよく知っている。

顔を合わせれば、マリエに対して、何を仕掛けてくるかわからない。

国境周辺地帯の監査の最前線からは退いたと聞いたが、相手は公爵家の跡取りで、権力にも、武力にも事欠かない。一方で、今のジルク達は廃嫡されて後ろ盾といえるようなものはほとんどない。

有事の際に惚れた女を守り切れるか考えるだけで恐ろしかった。

そんなジルクの想いを知ってか知らずか、カウンターの裏から、隠れていたマリエが周囲を見回しながら、少しずつ顔を出すと、ジルクを問い詰める。

「ありがとうジルク。それにしても、あの顔面血だらけの殺意ダダ洩れなイケメンは誰!？」

「アンジェリカさんのお兄さんですよ」

「あの女に兄貴がいたの?」

「ええ。私が知る限り、バルトファルトよりも恐ろしい方です。公爵家の赤い通り魔なんて二つ名があるくらいですから」

「何そのおっかない仇名!?!しかも、あのロストアイテム持ちの地味男よりもヤバいの?」

「ええ。目的のためなら、手段を選ばない時がある方ですから。私達は全力でマリエさんを守るつもりですが、あの方が本気で襲って来るのは考えるだけで恐ろしい」

ジルクの顔色が少し青くなっているのを見て、マリエは、その発言が真実性を帯びていることを感じ取る。

(あのジルクがここまで言うなんて・・・手段を選ばない・・・キレたときの兄貴もそうだったわね。気を付けないと・・・)

普段は大して危なくもないが、一度怒りのスイッチが入った途端、何をするかわからなかった、前世の兄のことを思い出したマリエであった。

第20話 お忍び学園祭（後編その2）

ジルクを始めとしたあの乙女ゲーの、元々の攻略対象5人とそいつらをわずか数ヶ月で誑かして逆ハーレムを作り上げた謎の女マリエが営業するホストクラブ風喫茶店を後にした僕であったが、リオン君やアンジェのいる隣の教室に繋がる廊下では3人の亜人が僕を待ち構えていた。

鉄パイプを持っていた亜人のこんがり焼かれた顔面を見て僕への憎悪をたぎらせている。

ただ、その中の1人、エルフ型の亜人が僕の顔を見て表情を変える。ん？こいつ、どつかで見たような気がするな。そして、僕に向かって飛び掛かろうとする残りの2人の肩を押さえると、慌てた様子で口を開く。

「おい待てー！さっきは髪色が違うから気付かなかったが、こいつはヤバイ！」

「何言ってやがる！仲間がここまでやられたんだぞ」

「だったらお前らだけでやれよ、”爆炎の顔玉潰し”の相手なんて俺は御免だからな」

“おい待て”は僕の台詞だよ。なんか不名誉な二つ名がまた増えてないか？

前半部分はほんのり厨二病感があって悪くないが、後半の上品すぎて酷くないか。

だが、僕の感想などお構いなしに亜人達の会話は続く。

「お、おい。それってまさかアトリーに買われた連中を半殺しどころか、この商売を引退に追い込んだクソ野郎のことか!？」

「間違いない、俺はあの時に手を出さなかったから助かったが、アトリー家の家臣連中が連れてきたアイツにケンカを売った奴らは全員廃業になるまで焼かれたんだぞ」

あくし思い出した、クラリス嬢の貞操危機事件というか、ツインマラーイオン事件のときにいたねえ、ボコボコにした亜人どもを回収していった奴が。

嫌なことを思い出してしまった。見覚えがあると思ったら、あのときのエルフだったか。

「じゃあ、それこそあいつらの仇を討てばいいだろ」

「馬鹿・アトリーと繋がりがあって、しかも、俺達使用人を躊躇なく攻撃してくる貴族なんてヤバイ奴に決まってるだろ！金払いだけが取り柄のオフリーの報復なんかにつき合っつてられるか！さっさと逃げろぞ」

そう言っつてエルフ型亜人に連れられ、3人ともこの場から撤収してしまつた。

あ、手元で気を失つてゐる奴を回収してもらえばよかつた。まあ仕方ないから、雇い主のところ返品してやろうかな。

亜人の髪を持つてズルズルと引きずりながら、リオン君達がゐる喫茶店のある教室の扉を開くと、教室内では最初にいた亜人達が縛り上げられてゐる。

さらに、残つたオフリーのドーナツ頭令嬢とその取り巻きに向かつて、リオン君が王妃様の権威を背景に煽り倒してゐた。

「族滅、根切りは覚悟しろよ！そうじゃなきゃアロガンツでお前らの実家を蹂躪してやるよ！はははは!!」

「それは面白い！ぜひ僕も混ぜてもらおうかな？」

僕もここまで派手にやられたのだから、参加させてもらつてもいいだろう。ぜひ、初めての共同作業といこうじゃないか。リオン君との親密度が上がつて、オフリー家を潰せれば一石二鳥だ。

「兄上!?!どうして(ニク)に?。」

「学園祭で何やつてるんですか、ギルバートさん？しかも、そのケガ・・・」

ある程度は拭つたが、頭部その他の細かな傷は残つてゐるので、それを見たリオン君が若干引いてゐる。

まあ、リアクションとしては当然だよな。やはり説明は必要か。

「そのドーナツ頭が困つてるヒトモドキが団体さんでこの教室に雪崩れ込もうとしていたのですね。やめろと言つたら喧嘩売つてきたから血祭りにしちゃつた☆サービスで顔か下半身を焼きつぶしておい

たよ〜」

そう言いながら、首をかしげながら舌を可愛く出しておどけてやると、オフリーのドーナツ頭が怒鳴り込んでくる。

おいおい、僕の子分（予定）や可愛い妹、それにこの世界の主人公様がおわすこの場所を荒らしてくれただったのは、僕の縄張りを荒らしたのも同然だぞ。

「ふざけんなー！私の使用人達によくも・・・！」

「喧嘩売るなら相手を選んだほうが身のためだよ？僕がこの国の貴族だって伝えたのに手を出してきて、タダで済むとは思ってないだろう？使用人に腰を振ること以外を教えてないなら、監督不行き届きもいところだね」

ここまで引きずってきた、鉄パイプで僕を殴った亜人を、力任せにオフリーの令嬢ことドーナツ頭の足元に投げ付けると、亜人の体が膝にぶつかったドーナツ頭令嬢はバランスを崩して転倒してしまう。

「クソが・・・！」

「好き勝手やったようだが、腹は括っているだろうね？」

「待ちなさい、ギルバート君！」

指をポキポキ鳴らす安っぽい威嚇ムーブをしながらオフリー家の令嬢に近付こうとする僕を止める声が上がった。

その主は言うまでもなく、この場にどういうわけかわからないがお忍びで来ている王妃様に他ならない。

ふう、とわかりやすいため息をつきながら、僕はその方向に体を向けて恭しく口を開く。

「これはこれは・・・王妃様にご無事のように、何よりです。この部屋に踏み入ろうとした賊どもは、僕が丁寧に焼き払っておきましたので、どうぞご安心ください」

「やりすぎな気もしますがいいでしょう、ご苦労でした。ですが、それならば決着はついたのでしょうか、この辺りでやめておきなさい」

さつきまでの、大暴れなりオン君に可愛らしくテンパっていた姿はもう影も形もない。

いつものように僕を睨みつけてきている。為政者モードが再起動

したようだね。

ちなみに、リオン君は不思議そうな顔をしながら僕と王妃様を交互に見ている。自分がどう対応するのがいいか考えているのだろう。

一方で、アンジェや主人公ことオリヴィアさんは、それぞれ別方向を見ながら、浮かない顔でうつむいている。

もしかしたら、オフィーのドーナツ頭に何かを言われたのかもしれない。

高校生くらいの年代なら、クリティカルな一言で、大きく傷つくことも珍しくはないだろうからね。

本来なら、2人を慰めるような言葉をかけたいところだが、ひとまずは数年来の宿敵の相手をせざるを得ない。

何せ、相手は、この国を事実上統治運営している、この国のナンバー2だ。

「ずいぶんと奇妙なことをおっしゃいますね」

「どういうことかしら？」

「雇い主も飼い犬も、正面切つてずいぶんと公爵家に挑んできたのを返り討ちにしているのに、このまま五体満足に帰したとあっては、舐められたままになってしまいます」

やられたからやり返したところを、ここでやめろとは、それなりに考えての発言でなければ、こちらもパパ上を引つ張り出してやろうか？

・・・我ながらここで、パパ上だよりというのがボンボンクオリティだな。

「相変わらず過激ね。それに使用人のほうはずいぶんと焼けているようだけど・・・ならば後日、こちらから沙汰を伝えます」

「それは結構です、既に別のお方に現場をご確認いただいておりますので、王妃様のお手を煩わせる必要はありませんよ？」

王妃様の眉間に皺が寄り、目元がピクリと動いた。

「ギルバート君、まさかあなた・・・」

僕の一言で、陛下がこの学園に来ていたことを察したのだろう。更に表情が険しくなる。

「まったく・・・あの人も、ここで何をしていたのかしらね」

「ご安心ください、既に護衛の者達がここから離脱させております。それに王妃様、その言葉、そっくりお返ししますよ。そもそもアンジェの婚約解消の件、そちらの派閥から誠意のある提案があったと聞いておりませんが？ いや、精算が済んだとしても、貴女がよく僕の妹の前にのこのこと顔を出せましたね？」

僕と王妃様が、正面切ってお互いに視線をぶつけ合う。

漫画的表現をするのであれば、きつと目から出た火花どうしがぶつかりあっているだろう。

どういう経緯でこの学園に来ているのかは知らないし、一国の王妃様相手にはギリギリな発言かもしれないが、兄として、家の跡取りとして譲りがたい部分がある。

「そこは公爵と話をしていますから、後を継いだわけでもない貴方が心配しなくても大丈夫よ？」

「それもそうですねえ！まさか、ご自分の腹から産まれた男の不義理の始末も付けてないのに、アンジェのところに恥ずかしげもなく顔を出すなんて真似はしませんよねえ」

「本当に嫌なところが誰かさんに似てきたわね、ふふふふ」

「生き様の師と仰ぐ方に似てきたというのであれば誉め言葉ですね、はははは」

互いに乾いた笑いを教室に響かせ合いながら、ギリギリ睨まなくらいの強さで相手を凝視する。

もう目線を逸らした方が負けみたいな状態になりつつあり、まばたきもしづらい空気になってしまった。

(ねえアンジェ、ギルバートさん、不敬とかにならないの？)

(そもそも不敬に当たるかというのは微妙な場合が多い上に、当事者の私が言うのも嫌なんだが、落ち度のある王家の側から不敬だとは言にくい。兄上も、それをわかってるんだらう)

(やっぱり公爵家はまだ怒ってるんだね)

(家、というよりも、王妃様と兄上は色々とあつて元から仲が悪いのさ。その分だけ陛下と親しい。王家の側も、公爵家も、お互いに距離

感が難しいんだよ)

リオン君とアンジエがヒソヒソ話をしているのが聞こえる。というか、僕と王妃様に色々あった、って言い方やめて！色恋がこじれたみたいには誤解する人が出てきそうじゃないか！

ヒソヒソ話が続く中、沈黙を破ったのは僕・・・というか、僕の頭部だった。

頭部から一筋の流血が僕の顔をつたって教室の床に落ちる。しまった、傷口が開いてしまったか。イライラで血圧が上がっていたのかもしれないな。

王妃様は驚いて体をのけぞらせ、アンジエとリオン君が僕のところに駆け寄ってくる。まずい、少し頭がくらくらしてきたぞ。

そうだ、オリヴィアさんに回復魔法をお願いしようと思ってたんだ。王妃様のせいですっかり忘れてしまっていた。

「ごめん、オリヴィアさん、回復魔法をお願いしてもいいかな？」

王妃様と僕を近くに置いておくと教室内が緊迫した空気に支配されるのを嫌がったアンジエの発案で、僕は教室の奥のほうに移動させられて、オリヴィアさんの回復魔法を受けることになった。

僕達だけ遠ざけられているうちに、オフリーのドーナツ頭は王妃様の指示で解放されてしまい、リオン君と一緒にいた男子二人も壊された備品等を捨てるためにこの場を外している。

それにしてもすごい力だな、回復魔法というのは。痛みがみるみるうちに消えていく。白衣とか着てたら、主人公様が天使に見えてしまったかもしれない。うん、テンションが上がってきた。

しかし、僕とは対照的に、主人公様はずいぶんと物憂げな表情をしている。少し話をしてみるとしよう。

「かなり荒らされたみたいだけど、オリヴィアさんは怪我とかしてないみたいでよかったよ」

「リオンさんもそうですけど、ギルバートさんも暴れすぎです」

「男の子っていうのは暴れてなんぼのものさ」

「そういうところ、リオンさんみたいです。学園にいる貴族様とはちよつと違う感じですよ」

別の世界の人間の人生の記憶があります、この世界はゲームの中の世界です、だなんて言えないが、やっぱり随所で前の人生の価値観に引きずられた行動をしてしまうことは否定できない。

リオン君もロストアイテムを見つけたらまでは側室生まれの三男で貴族らしい教育を受けてきたわけでもなさそうだから、感覚が平民に近いのかもしれない。

そこらへんがオリヴィアさんには似ているように見えたのだろう。

もつとも、僕の方といたら、現時点では大貴族様だけど、このままでは落ちぶれていくか否かの瀬戸際の家跡取りだから、うかうかしてられない。この辺りをうまく伝えて誤魔化すか。

「将来の王妃様候補だった子の兄っていうのは苦労が多くてね。ふんぞり返っていい連中が羨ましいくらいさ。それに、偉そうにしていたら、平民や騎士家の女の子にモテないからね」

「え？だって貴族の人って同じ貴族の人と・・・」

オリヴィアさんの表情が固まってしまふ。学園の上級クラスの男子生徒達からすれば、現時点では平民のオリヴィアさんは彼らにとつて、愛人や側室には成り得ても、結婚対象とならない。

オリジナルの攻略対象5人は別の女に誑かさせているし、リオン君以外の男子との接点がほとんどないのだから、貴族社会の結婚の話はよくわからないのだろう。

平民の価値観であれば、恋愛と結婚は基本的には同一直線上にある話だろうから、僕の言っていることに疑問を持つのは仕方ない。

「貴族同士の恋愛って、お互いの家とか関係者のしがらみが色々面倒臭いのさ。だから僕は騎士とか平民の子を口説くことにしている」「じ、じゃあ結婚はどうするんですか？リオンさんもそれが大変だった・・・」

「アンジェエのことがあって今はそれどころじゃないけど、その辺りはいずれ父が相手を見つけてくると思うよ？うちの実家とお近づきになりたい連中なんてごまんといるだろうから。僕個人が大事にした

「いのは恋人や愛人さんさ」

「でもそれなら奥さんになる人が可哀そうなんじゃ・・・」

「クラスの女子達を思い出してごらん。きつと意見が変わるよ?」

結婚するためには仕送りやら、王都での暮らしの面倒をみるとか、愛人も含めて養えとか、何かと酷い条件を付けてくる女子生徒ばかりなのが、我が学び舎国立ケモノー学園だ、全員が全員そうだとはいわないけどさ。

オリヴィアさんが沈黙したまま何かを考えているが、少しして心情を語り出した。

「私：：学園に通うことになっても全然話す相手も見つからなくて：：でもようやくリオンさんやアンジエとお話できるようになったんですけど・・・私はアンジエの友達になれたんでしうか」

男子の側には、口説く余裕がなく、女子生徒の側も自分を高く売り込みたいから、平民のオリヴィアさんと接するつもりなどないのだから。

そんな中で、おそらくゲームのシナリオどおりに運命的にお近づきになったリオン君と接するようになり、さらに、あの決闘騒動を経て、リオン君経由でアンジエと接するようになったものの、

貴族社会の縮図であるこの学園にいれば、彼女は相応に嫌な思いをすることは多いはずだ。今回もあのドーナツ頭が3人の関係に楔を打ち込むようなことを言ったと推測するのが妥当だろうな。

全く違う世界にいた二人と紡いできた絆が、ゲームそのものであればステータス等によって可視化できただろうが、実際には、どれだけ強い結びつきとなったのかを数字で示すことなんてできない。

オリヴィアさんが欲しがっているのは、何か形か言葉になった結びつきなのだろう。

悩ましいな。

しよせん僕はネームドなモブにすぎない。答えを示すのはメインキャラクターの役割であり、僕が手を出すべきではない。

ただ、主人公様を放置して何もしないわけにはいかないし、むしろ何かはしてあげたい。性格よきそうだし。

あとは、これを機に、攻略対象との親密度を上げてもらえれば、なおのこと良しだろう。

そして、ついでに言えばもう一つ。こんなに、地味なおっぱい大きくて可愛くて性格のいい子が目の前で弱っている。相手が主人公でなければ、本当に口説いて、あわよくば愛人にしていただろう。

いや、いかん。主人公を攻略対象から寝取る間男なんて役割、アンジエ並みに破滅フラグが立ちかねないな。

気を取り直して、大人の余裕を示しつつも、リオン君との親密度アップを促さなければ・・・

「オリヴィアさんが欲しい答えは何となくわかるよ。でも、僕はアンジエのお兄ちゃんだから、どうしても身内びいきな意見になりがちだ。だから、君の中の悩みや苦しみがあるのなら、ちゃんと身近な人に伝えてごらん」

悪戯っぽい笑顔でウインクしながら、僕はリオン君の方を指さした。

こんな仕草は今世のSSRレベルな顔面偏差値でなければ許されなかっただろうが、生き残るためなら、あるものは全力で有効活用する。

「今は貴族とか、平民とかでなく、彼も君も同じクラスの人間じゃないか。あ、それとオリヴィアさんのちよつと物憂げな表情は男の庇護心をくすぐるから、上手く使うといいよ」

「ふふふ、ありがとうございます。そうやってちよつとずるいところもリオンさんに似てますね」

「いや、お礼を言うのは治療してもらった僕の方だよ」

そう言っただけでオリヴィアさんはリオン君のほうへ歩いて行った。よし、これで二人の距離がまた縮まったな。

将来的には、君の方が聖女という俗世の階級とは別次元の存在になっちゃうから、それを乗り越えられるくらいに、今の内からできるだけ二人の関係を親密なものにしておいてもらわないと困る。

温かい気持ちになりながら二人の様子を見守っていると、後ろから凄いい力で頭を掴まれた。

「ところで兄上、愛は愛人や恋人と育むそうですが、形ばかりの妻にもなれなかった私はこの場合どうすればよかったですでしょうか。何か言い残したことはありませんか？」

ちよつと待つて、怒らなくなつていいじゃないか。というか、言い残したことつて僕を抹殺することは既定路線みたいな言い方になつてるよ!？」

どうやら、無意識のうちに、そのセリフは私に効く、をやつてしまつたようだ。

「どうかアンジェ、頭を攻撃するのは止めて!せつかく塞がった傷が開いちやうから!」

「や、やだなあ。地雷ばつかりなのは子爵、男爵階級の話じゃないか・・・いや、伯爵もたいがいか」

最近だけでも、アトリー、ローズブレイド、それにオフリーと伯爵家の女も酷いのばかりに思えてきた。

そして、必死にアンジェの手を振り払つて話題を逸らす。

「じゃあ僕はそろそろ帰るとしよう。オフリーが何か仕掛けてくるかもしれないから用心しておくんだよ?」

そう言つてダツシユで教室を離れて、校舎の外に出ると、一人の男性が僕の横から静かに近付いてきた。

僕も面識のあるこの男は、普段とは異なりスーツに身を包んでいるが、普段は陛下の護衛をやっている騎士で、今日もお忍びの陛下のガードをしていた中の1人だ。

しよつちゆう陛下の夜遊び相手をしていたときから、いつも苦勞して護衛をしていた人だからすつかり顔見知りになつていたりする。

「陛下は無事ですか?」

「既に王宮にお戻りです。ギルバート様、しんがりを務めていただきありがとうございます!」

「差別主義者ではないつもりだけど、いい加減、亜人どもはどうにかしたほうがいいだろうね。オフリーも無茶をするものだ」

「その辺りは陛下からのご伝言があります。説明はしておいたので、

王都の公爵家屋敷に一度戻るようにとのことでした。既に王宮内で陛下が公爵様と接触済みです」

相変わらず、自分が主体的に動くときのフットワークが軽すぎるな。

だが、王命とあつては仕方ない。父上から何を言われるか、考えるのは悩ましいが、屋敷に戻るとするか。

僕が屋敷に着いてからしばらくして、父が王宮から戻ったので、諸々の報告を僕の口からもしようと思っただが、屋敷内の執務室に座った父は、どこか困ったような顔を浮かべていた。

そして、僕が説明のために口を開こうとするのを、手を正面に突き出して止めると、悲しげな目をしながら言った。

「なあギルバート。話は聞かせてもらった」

「色々とし訳ありません」

「私も、好みというのは人それぞれだと思う」

「え・・・？」

「だがな・・・いくらなんでも裸エプロンはほくないだろう」

あんのクソ陛下ああああああああああああ

あの人、よりにもよって、実の父親に性癖をぶちまけやがった

ああああああああ

説明済みってそういうことかよおおおお

母親は隠してたエロ画像とか見つけられた時の気まずさの比じや

ねえぞ!!!!

つづ!!

【最後まで嘘な次回予告】

陛下の裏切りによつて、色々つぶちまけられた結果、多大な精神的ダメージを食らいながらも、王都の屋敷でしばしの休養をしていた僕のところに、アンジエが駆け込んできた。

あのドーナツ女、よくもオリヴィアさんを！

え？父上、いつそのこと空賊を消して来いって、僕がですか？

次回 乙女ゲー世界は悪役令嬢の身内にも厳しい世界です
「初陣」
ボンボンの修羅場が見れるぞ！

第21話 初陣

ケモナー学園の学園祭で、オフリー家の亜人集団を相手に繰り広げた血で血を洗う殴り合いで負った傷は、だいたいオリヴィアさんに回復魔法で治してもらったのだが、やはり大事を取るべきだということ、僕は王都にある実家の屋敷で療養生活を送っている。

ただ、陛下によって、僕が見合いの相手であるディアドリー嬢に裸エプロンを要求したのを暴露されたため、父と顔を合わせても空気がとてもギクシヤクする日々が続いている。

父上としても、息子の性癖を告げられて、どう息子に向き合うべきか答えが出せないのだろう。

いや別に癖というわけではないんだけどね。単に男女が盛り上がるためにはどうすればいいか、という議論における一手段に過ぎないんだけどね！

そのうち、裸エプロン公爵とか言われたらどうしよう・・・赤い通り魔とか、爆炎の顔玉潰しとは比べ物にならないくらい恥ずかしい二つ名だな。

めっちゃくちやマイナス気味で巨大なネジを得物にする大？憑きの人みたいじゃないか。

まあ、とにかく結果的にギクシヤクしているということに変わりはない。気を紛らわす意味も含め、自室で書類仕事をしたり、領内の運営への指示出しをしているのだが、解せないことが1つある。

「コーデリア、お前がどうして毎日僕の身の回りの世話をしに来るんだ」

着替えとかは、もちろん自分でもできるのだが、頭部に巻いた包帯の交換から始まり、室内の清掃、食事の配膳までを、よりにもよって性悪腹黒眼鏡メイドのコーデリアが毎日やっているのである。

いや、他のメイドだっているだろうし、わざわざ彼女が全てをやらなくたっていいはずだ。

「若様は、私の立場をお忘れですか」

「アンジエガチ勢兼僕アンチ筆頭だろ」

「それもありませんが、私はレッドグレイブ家の上級メイドです。そして、負傷した公爵家ご嫡男である若様の看護を末端の用人にさせるわけにはいきません。しかも、人員が全体的に足りない中で、上級メイドは、アンジェリカ様がご不在のために比較的業務量に余裕のある私しかいないのです。ご理解できますか？」

「理解はするが大いに不満があるね」

「それに、実家の身分が高くない者に任せては、若様の魔の手が伸びてしまう恐れがあります。その辺りを総合的に検討した結果です」

使用人の配置を、僕が手を出すかどうかで決めるのはいかなものかと思うんだけど・・・

「つまり、僕が屋敷に滞在するうちは、君が付いて回るということかな？」

「残念でしたね。ですが、私は若様がほんのりと嫌がつている表情が見られて満足です」

コーデリアがさほど大きくもない胸を張りながらドヤ顔を浮かべている。

「どうしてそんなことで勝ち誇ったように言えるんだ・・・」

僕とお前がセットになっても、外見だけは超が付くほどのイケメンと性悪眼鏡メイドのラブコメなんかには需要はないぞ。

そうだな、無理やり企画をひねり出したとしても、せいぜい、前世の2時間ドラマのネタ枠的な企画で、金持ちボンボン探偵と性悪メイドの怪奇犯罪事件簿とかをやるくらいだろう。

前世で言えば夜九時くらいからオンエアかなとくだらない妄想をしていると、コーデリアが話題を変えて話を続ける。

「ところで、お嬢様を今後、どうされるおつもりですか？」

「別にお前が邪魔だから、アンジェエをさっさと誰かに嫁がせるなんてことはしないから安心してくれ」

コーデリアも、自分の将来に心配があるのだろう。妹がああ馬鹿王子と結婚していたら、なんやかんやで父や僕も実家の権力を使って、彼女をアンジェエの近くに置いていただろう。

しかし、現実では、妹の婚約は解消となり、国内がバタバタしてい

るのもあって、次の縁談の話は全く出ていない。

「私は真剣にお聞きしているのですが」

「そもそも、アンジエの取り扱いは難しいんだ。その辺りは僕ではなく、父上が決めることくらいわかるだろう？ 仮に僕に決定権があっても、この国の中で、ということになると、どうしてもあの馬鹿王子の元婚約者という望まぬ肩書が付きまとうからね・・・そんな境遇に妹を置きたくないな」

「ならば他国をお考えで？」

「それこそ父上のみぞ知るところだ。まあ、あの王妃の出身国であるレパルドに嫁がせるとか言い出したら何があっても止めてやるから安心しろ」

「若様もそういう、何かを壊すときだけは頼りになりますね」

このメイドは僕のことをホルファート王国の破壊神か何かと勘違いしているのではないだろうか・・・

「ただ、若様もお嬢様も、近ごろ、ずいぶんとバルトファルト男爵とお近付きに見ますが、まさか・・・」

「彼はダメだ！絶対ダメ！」

「も、申し訳ございません・・・！」

しまった、食い気味に怒鳴ってしまった。

珍しくコーデリアが怯えた顔を浮かべている。

・・・可哀そうなことをしてしまったな。

せっかくアンジエが主人公様から断罪されずに済んだというのに、横恋慕と嫉妬を向ける相手が主人公様のターゲットと同じになってしまう、なんてことは絶対に避けたい。

理由は、身分差とか、外聞とか、そういったものではない。

この世界が乙女ゲーの世界で、運命の修正力のようなものの存在を否定できる根拠もない以上、主人公様の恋愛を邪魔するようなことがあつては、妹に何か重大な不利益が突如として降りかかる恐れがある。

リオン君は主人公様の獲物なんだ、そこに立ち返って、アンジエがリオンとこれ以上フラグを立てないようにしたほうがいいのだろう

か・・・

ただ、いつもは腹立たしいコーデリアであるが、彼女の視点は非常に参考になるものだった。

僕は、オリヴィアさんとリオン君を主人公様と（追加コンテンツの）攻略対象、というセットのようなものと見ていた。これはあの乙女ゲーをいくぶんか知っているからだ。悪く言えばゲーム脳ともいえる。

しかし、別の角度から見ると、決闘騒動で窮地に立たされたアンジェをリオン君が救った、お姫様と騎士の物語という視点があるのか。

どうしても、オリヴィアさん達がゲームの中の登場人物だというバィアスが僕にかかっていたことは否定できない。

コーデリアにとっては知ったことではないのに、彼女を理不尽に怒鳴りつけるという最低なムーブをしてしまった。反省しつつ、少し誤魔化してフォローを入れないとな。

「驚かせてすまなかったね、びつくりして大声を出してしまった。その・・・リオン君には、もう別の女性を宛てるつもりなんだ」

「バルトフアルト男爵のことを取り込むのだろうとは思ってましたが、相変わらずお手が早いですね」

「仕事が早いと言ってほしいね。それにほら、辺境の貴族に公爵令嬢が嫁いだら、名誉以上に負担が大きすぎるよ。僕が廃嫡されて君の実家に婿入りするとかになったら扱いに困るだろう？」

「想像するだけで気持ち悪いですね。実家の居心地が悪くなりそうです」

少し元気になって良かった。

・・・よかったけど、気持ち悪いって言われたよ？何この、試合に勝ったけど勝負にボロ負けしたような気分は・・・あんまり酷いこと言われるとさすがに僕も泣くぞー！

とにかく、僕がアンジェの縁談に動く時が来るとすれば、何かしら僕の利益か不利益が関係するときだろう。

これまでの方針と変わった行動になる可能性が高いな。

ダブスタクソ兄貴とか言われたらどうしよう・・・

「それと、元同僚達から連絡です。公国の国境付近の動きに近頃変化があるとのことでした」

そうか、やっぱりゲームのシナリオは基本的には踏襲されるのか・・・

「わかった。妻子については、今までの功績もある。いざとなったらうちの領地に逃げるよう伝えておいてくれ」

「かしこまりました」

戦争というものを僕は当然ながら知らない。だが、近い将来、ほぼ確実に公国との戦争は起こる。

その被害をできるだけ小さいものにしようとは頑張ってはきたが、戦略レベル以上の規模で僕にできることはなくなってしまった。

戦争は起こるものだという前提で動くことはマストだが、僕は、戦争をも利用して主人公様と攻略対象をくつつけなければならない。言うなれば死の商人ならぬ、死の仲人とも言うべきなのかもしれないね。

その日の晩、最近にしては珍しく真剣な顔をして今朝までの気まずさなど微塵も感じさせない父が、屋敷内の執務室に僕を呼ぶと、懐から一枚の書状を差し出した。

「ギルバート、いきなりだが、お前の初陣が決まった」

「またずいぶんと急な話ですね」

内容を要約すれば、少し前に王都を出発したバルトファルト男爵、つまりリオン君に合流したのちに、ウエイン準男爵領周辺を根城にする空賊を討伐しろというものだ。

しかも、丁寧陛下の直筆の署名まである。これは、裏に何かがあると知っているに等しい。

ウエイン準男爵・・・たしか、あのオフリーの寄子だったよな。そこはどうしてリオン君が・・・

「王宮でこっそり渡されてな。オフリーが艦隊を動かす準備をしてい

るらしい。ローランドがここまで動いたのであれば、何かを掴んでいるのだろうか」

「学園祭で手ひどくやられたばかりなのに、ずいぶんと強気ですね」
「その報復もあるのだろうか。男爵のロストアイテムは強力だが、いかんせん、数と権力で勝る伯爵家が相手となると厳しかろう」

「となると、彼を取り込もうとしてる僕への、陛下なりのフォローですかね」

父が若干うつむき、嫌そうな顔を浮かべる。

「敵対派閥への牽制にもなるし、ちょうどいい機会だ。たまにはこっちが陛下を利用してやる。それに、この国の貴族どもは、結局のところ、強さを示さなければ従わない。お前が辺境で悪妻を刈るのを悪いとは言わないが、宮仕えばかりでないことを証明することもお前に必要だろう」

おそらく貴族連中というのはうちの寄子となる家も含まれているのだろう。

アンジェの決闘騒動で付き合いが細くなった家も少なくない。自派閥の力が弱体化する中で、トップの跡継ぎがもやしっ子じや話にならないと言いたいんだらうね。

この空賊討伐をきっかけに、巻き返しをはかるきっかけを父が欲したとしても不思議ではないな。

ただ、強いやつにしか従わないって言葉だけ聞くと、もうこの国は、修羅の国であるかのように聞こえてしまうから困るね。

そんなちよつとだけアホなことを考えていると、いきなり乱暴に扉が開き、アンジェが室内に入ってきた。

僕たちを見ながら肩で息をしている。相当急いでここまで来たのだろう。

「アンジェ、礼儀のことはあえて言わないよ。何があつたんだい？」
「はい、実は・・・」

僕はアンジェの口から、学園で起こったこと、つまり、ウェイン準男爵領内の空賊騒動をオフリー家が裏から関わっていること、そこにリオン君やオリヴィアさんを巻き込もうとしていること、

オリヴィアさんの部屋がオフリーのドーナツ頭とその取り巻きによつて荒らされていたことを聞かされた。

決まった。オフリー。お前ら、ぶっ〇す☆

オフリーの企みを聞き、王都に滞在している公爵家の飛行船のうち3隻が討伐に赴くこととなり、今、僕は旗艦的な位置づけの飛行船のブリッジにいる。

王都を出発してからそれなりに時間がたっている中で気付いたのだが、船長は公爵家に長く仕えている歴戦の飛行船乗りだし、クルーの練度も高い。さらに、鎧のパイロット達にもベテランが多い。

これ、公爵家の跡取り様というボンボンに、空賊退治の功績を上げさせるために、特別に編成された部隊なんじゃないだろうか。

後でさらに何隻か増援を出す準備をしているという話だし、それらも合わせれば、前世で言うところの勝ち確な戦いになりそうだ。

ただ、主人公様やりオン君が心配だからとアンジエまで乗り込んできてしまった以上、父としては、これでも足りないと考えているのかもしれないね。

「若様、そんな怖い顔をしなくても、我々がしっかりと初陣をお飾りいたします」

きつと外部から見ると、僕は険しい表情をしていたのだろう。船長が僕の緊張をほぐそうと、声をかけてきた。

「ありがとう、船長。我が家に長年仕えてきた君達を当てにしていますよ。現場の君達を信頼して、指揮等に余計な口出しをして邪魔するようなことはしないから安心してくれ」

頭をよぎるのは、前世のアニメや漫画で、調子に乗ったボンボンが、机上論と権力を振りかざして現場に迷惑をかけた結果、負け戦となるという展開だ。

だから僕は、今回は、ブリッジの船長席の横から、要所要所で、決裁のハンコを押すような役割を果たすのが主要な役割だと考えていた。

ついでに言うなら、アンジエの話や陛下の討伐命令発出から察するに、オフリーが色々と企んでいるようなので、リオン君が武力のみで解決できないところを、実家の権力で連中を黙らせればミツシヨンコンプリートだと思っっている節がある。しかし、我が家お抱えの飛行船の艦長はかなりの脳筋タイプなようだ。

「若様がいくら辣腕でも鎧乗りながら飛行船の指示を出すのは無理がありますぜ?。」

「鎧に乗りながら? 僕はお飾りっぽくブリッジにいて、船長の指示の追認と責任取りをするんじゃないのか?。」

「そこらの木っ端貴族ならそれでいいんでしょうが、若様は将来のレッドグレイブ家当主です。相応に武勲というものが必要になるでしょう。」

「おいしいいい!!! 僕も鎧の先頭に出ろってこと?。」

たしかに、プロトタイプアロガンツを連れて来てはいるけど、また模擬戦を2千回こなせてないぞ!。」

「はあ・・・できるだけ、歴戦の鎧乗りの邪魔をしないように心がけるとするよ。」

「ドーンと大船に乗った気でいてください。」

「そもそもこの飛行船が、文字通り相当大きいじゃないか。」

「さすが若様、ちゃんと突っ込んでくれてありがとうございます!。」

船長が大声で笑い、その声がブリッジ内に響く。

ダレてはいないが、誰もが緊張しすぎてもいない。

命を懸けた戦いが日常のものであることを前提に、他のクルー達も、適宜、ほどよくリラックスできている。

「緊張のほぐし方が上手だね。女性にモテるだろう?。」

「若様と違って顔の作りがイマイチなもんでして、嫁さん一筋です。さて、そろそろ目的の準男爵の浮島があるエリアなんですけど・・・」
照れ隠しのような笑みを浮かべ、鼻の下を指の側面でこする仕草をする船長は、雰囲気がとても男前に思えるね。

だが、双眼鏡あたりを見回す彼の表情が瞬時に厳しいものとなる。

「若様！あちらを！」

席に備え付けてある双眼鏡を僕も手に取り、船長が指さす方向を見ると、数隻の飛行船と、見覚えのある大型飛行船。パルトナーが交戦しているのが目に入ってきた。

しかも、パルトナーの甲板では、左手にバトルアックスを所持したりオン君のアロガンツが、空賊のものと思われるカスタマイズされた鎧に切りかかっている。

空賊の鎧も抵抗しようとしていたが、アロガンツはすばやく斧を振り下ろすと、あっけなく空賊の鎧は腕を切り落とされ、アロガンツは右手で空賊の鎧の首元を掴む。

やはり、既存の鎧とアロガンツでは素のパワーが違いすぎるね。まるで相手になっていないのが双眼鏡越しでもわかる。

アロガンツはそのまま首元を握りつぶしつつ、首を持ったまま鎧を甲板に叩きつけた。さらにバトルアックスや右の拳で乱暴に鎧を殴りつけ続けると、パイロットであろうスキンヘッドに隻眼の男が鎧から抜け出してきた。

どうやら勝負あったようだね。しかし、リオン君の戦い方・・・力任せに相手を痛めつけるやり方は、まるで八つ当たりをしているかのようにも見受けられる。

ここまでの戦いで何があったのかはわからないが、彼への接触は慎重に行ったほうがいいかもしれないね。

「船長、勝敗は決したようだ。僕らの出番はなかったね。小隊を幾つか出して、周囲の残党を警戒しつつ、パルトナーにコンタクトを頼む」

僕の初陣は、何やら波乱の幕開けとなりそうだ。

第22話 舌戦

空賊の頭目が撃破されたことで、残党は投降したようで、戦闘はひとまず終了した。

こちらの飛行船からの通信もパルトナーに届き、僕たちの飛行船はリオン君達と合流し、現在は部下たちに指示した残党の捕縛や武装解除の指揮を執っている。

こういった現場作業は、経験豊富なベテラン達に任せて、僕は追認マシンになったほうがいいだろう。

そして彼らの動きを見ていて思ったのだが、アンジェの取り巻きをしていた連中は、あつさりど公爵家を見限ったが、うちが直々に抱えている面々の忠誠心もアウトプットも思った以上に高い。

本来、僕は父の名代として、もつと領地運営に携わるべきだったが、妹の断罪と実家の凋落を防ぐために前世さながらの社畜働きを王都でしていた。

だから、そのぶん、実家お抱えの騎士達からは、お気楽なボンボンめ！みたいな目で見られていると思っていた。

我ながらずいぶんどご都合主義的に慕われているように思えてしまうね。

きつと父が皆から慕われる領地運営をしてきたからなのだろう。なんだか父に迷惑をかけ続けていることに申しわけなさが湧き上がってくるよ。

王宮の監査をしていたときは、職場に馴染めるように色々と努力した結果、お互いに腹にイチモツ抱えつつではあるが、良好な関係を築けた。

他方、僕は実家に対してはそのような貢献はできていない。にもかかわらず、騎士達はとも僕に対して良く接してくれる。

あの性悪メイドのような抵抗勢力も見当たらない。

ん？あの性悪メイドありきで人間関係を考えているだと・・・!?嫌な気分だ・・・

あいつめ、目の前にいなくても僕に嫌がらせができるように進化し

やがった。

そんな嫌な気分を味わっているところに、新たな報告が僕のところ
に届いた。騎士たちの中でも、部隊をとりまとめるベテランだ。

「若様、朗報です。オフリー家と空賊のつながりを示す証拠書類が見
つかりました。その他に財宝や貴金属の類も発見しましたがいかが
いたしましょうか」

「よくやった。書類は確実に確保してくれ。財宝は空賊討伐者のバル
トファルト男爵のものだ、まとめておいて後で渡してやろう。アン
ジエのために元王太子とも戦った勇者に恩を返さないかね」

詳しくは内容を見る必要があるが、王宮に渡せば敵対派閥のフラン
プトン侯爵もオフリー家をかばいきれないだろうな。

形だけ伯爵領にガサ入れしてから、当主達の身柄を拘束した上で、
取り潰しまで持っていけば、敵対派閥の金蔓を潰すことにもつなが
る。

「兄上、よろしいでしょうか」

報告に来た騎士が去り、手空きになったところで、後ろからアン
ジエの声が聞こえた。

振り向くと、オリヴィアさんの手を引きながらアンジエが立ってい
る。表情がずいぶん固いな。たしかパルトナーに行っていたはず
だが、何が起こったのだろう。

「少々トラブルがありました。リビアをこちらで引き取ってもかま
いませんよね？」

鋭い目つきでアンジエが確認を求めてくる。ヤバい、間違いなく激
おこ状態だ。

おそらくポイントなのは、引き取っていいか、というお伺いではな
く、かまわないことが前提で確認を求めている辺りだろう。

本人が意識しているか否かはわからないが、ひとまずオリヴィアさ
んをリオン君から引き離すべきという危機意識の現れかもしれない。

オリヴィアさんの様子を見る限り、さすがにここで、リオン君とオ
リヴィアさんの接近を避けるための嫉妬に基づいた行動だとは思え
ないからな・・・

「わかった、今はまだ警戒中だから後で構わないが、何があったのかは報告すること。あとはオリヴィアさんも疲れているみたいだから、ゆっくりと休ませるようにね」

「はい、ありがとうございます」

事務的というか機械的な返答だ。アンジェにも心の余裕がないのだろう。

一方のオリヴィアさんは、俯いてはいるが目元が赤く晴れている。よく見ると衣服も煤や土で汚れているようだ。まさか鎧同士の戦闘現場にでもいたのだろうか。

というか、リオン君と何かあったのか!?

ある意味、僕の将来に対しても、すごく影響しうることだから気になって仕方ないが、さすがに今は細かに聞ける空気じゃないか。

オリヴィアさんがアンジェに腕を引かれてブリッジから出ていくときに少しだけ目が合ったので、笑顔で小さく手を振ってみたが、帰ってきたのは会釈だけだ。

主人公様の弱り方はちよつと度が過ぎていないか?あのドーナツ頭にされた嫌がらせだけが原因ではなさそうだが・・・仕方ない、後で僕もフォローを入れるか。

それからしばらく残敵の襲来に備えていたが、結局、増援などはなく、押収した財宝や、オフリー家の闇を証明するための証拠書類がまとまったので、僕もパルトナーに足を運ぶことになった。

ちなみに部下の騎士からの報告によると、何名かがアンジェがリオ君にフルスイングのビンタをした場面を目撃したらしい。

ますます何があったか気になるが、うまく聞き出すやり方が浮かばないまま、僕はパルトナーのブリッジに到着した。

ちなみに、艦内を移動する途中で、誰にも会わず、ただ作業用ロボットのたちが慌ただしく動き回っている光景があちこちで見かけられたくらいだったのは衝撃だった。

パルトナーの規模であれば、通常は3桁の人数は必要とするだろ

う。それを全てロボットで賄うというのは、さすがロストアイテムというべき、いやロストアイテムだから、としか説明はつかないな。ほぼ無人な艦と聞くと、思い浮かぶのはナ○シコCくらいだな。

ブリッジの座席に、足を組んで肘をつきながら一人で何かを考えているリオン君の背中では少し寂しげだ。

「やあ、今回も大活躍だったみたいだね。あと、その・・・アンジェがすまなかったね」

甲板や格納庫にはウェイン男爵領到着前に接收したと思われる空賊の鎧が多くあり、彼が単騎で空賊を撃破したことは想像に難くない。

まだ高校生くらいの年齢で、命のかかった殺し合いを短期間で2回も行ったのだから、精神的にも辛かっただろうし、肉体的な負担も軽くなかったはずだ。

そんなところに、我が家のお姫様がビンタを食らわせたというのだから、申しわけないにもほどがある。

「いえ、自分のほうこそ妹さんを怒らせてしまいました」

「あの子は昔っから気が短いからね、困ったものだ。重ねて詫びるよ。それと、まだ詳しくは聞いてないんだけど、オリヴィアさんとケンカでもしたのかい？」

問われたリオン君は少し困ったような顔をして数秒考えこむ。そして、いつもより少し高い声で話し始める。僕と目を合わせず、背筋も少し曲がっている。

無理に明るい雰囲気を出そうとしているが、今までであったような掴みどころのない飄々とし態度ではない。

「そんな大したものじゃないですよ、田舎者には女心ってのは難しいもんですね」

「女心の理解には、田舎も都会も関係ないさ。それ自体が終わりのない研究テーマみたいなものだよ」

「守っても助けても怒るような無理難題は、田舎者には手に余ります」
「2回も空賊を撃破したんだ、君も疲れているんだよ。残りの細かな処理は、諸々こちらでやっておくから、一段落したら君は先に王都に

戻ってかまわないよ」

「すいません、助かります」

力のない返事だね。リオン君も相当摩耗しているようだ。

連続で戦闘をこなして極度に疲労した状態だったら、何かの拍子にケンカに発展したとしても不思議ではない。

部下からの報告だと、リオン君は空賊の中で殺した者はゼロらしい。

精神的な消耗を抑えるためのものかもしれないが、これは一方で、アロガンツという強大なロストアイテムがあるからこそできるという贅沢な話でもあるな。

「財宝の類はまとめてコンテナに入れて格納庫に置いてあるから後で確認してほしい。あと、空賊連中とあのオフリー家、あの喫茶店で絡んできた女の家が繋がっていることがわかる書類が出てきたんだけど……」

「公爵家にお任せしますよ。お世話になってますし、ギルバートさんのほうが有効に使えそうですからね」

「それはありがたいけど、いいのかい？」

「俺の手には余りますから。あ、通信が入っているみたいなんですけど、ここで受けてもいいですか？」

「かまわないよ、ちなみにどこからだい？」

僕の問いにリオン君が意地悪く笑った。

学園祭で亜人どもを叩きのめしたときに浮かべていた笑顔に近いな。

「オフリー家です、捕まえた空賊どもを引き渡せって、今さら艦隊で押し掛けてきたみたいですよ」

陛下の読みが当たったか。絶妙なタイミングで間に合うように指示を出すあたりが凄いとしか言えない。きつと感覚的な部分が多いんだろうけど、それでも結果が出ているから恐ろしい。

だが、せっかくのチャンスだ。僕も期待された役割を果たそうじゃないか。

「ふふふ、それはちょうどいいね。せっかくだから、僕のほうで対応し

「てもいいかな？」

「了解です、じゃあつなぎますね」

お互いニヤニヤした顔を浮かべて、静かにグータッチを交わす。

そしてリオン君が手元の通信機器らしき機械を操作すると、音声がブリッジ内のスピーカーから聞こえてきた。

「こちらはオフリー伯爵家の軍艦だ。バルトフアルト男爵、ご苦勞であった。あとはこちらで処理をするので、空賊の身柄を速やかに引き渡せ」

「どうもお疲れさんです、今、隣にいるすごく偉い人に代わるのでちよつと待つてくださいいね」

わざとらしく語尾を伸ばすあたりが、リオン君もいい性格をしているのを表している。

これまではわざとらしい謙虚さを出した態度をしていたが、決闘騒動であの馬鹿王子を煽っていたときの口振りからして、こちらが素なのかもしれない。

ならば、僕の方も彼に負けないような煽り方をして、初めての共同作業といこうじゃないか。将来に向けて、攻略対象の好感度を稼ぐチャンスだね。

「今まで寄子の領地の空賊を放っておいて、討伐が終わったら出てきて、上前を寄越せなんて恥ずかしい真似、よくできますなあ」

「貴様、我らを愚弄するか！」

「事実を適示されてそんなに怒るって、凶星だったようですね」

「バルトフアルト男爵ではないようだが、誰だ貴様は！」

お前達に名乗る名前は無い！と腕組みして、後ろからライトに照らされながら言っつてやりたい気もするが、

一方で、なんだかんだと聞かれたときは答えてあげるのが世の情けという名言もある。

それに、監査の仕事を離れてから使う機会がなかなか少なくなっていたけど、こういうときにこそ、僕の数少ない転生特典が使えるというものだ。

「ギルバート・ラファ・レッドグレイブ、聞いたことくらいはあるだろ

う？それとも最近聞いたばかりかな？」

「ま、まさか公爵家……」

「そうですね、そちらの家のご令嬢から落ち目といわれた公爵家で、す」

リオン君を真似して語尾を伸ばしてみた。自分でやると本当に気持ちいいな。

「……失礼しました。我々はウェイン準男爵領で活動する空賊を討伐するために参りました。間に合いませんでしたが、寄子の世話をするのが親の役目。引き渡してはもらえないでしょうか」

こちらの正体を聞いてずいぶんとへりくだった態度に急変したな。とはいえ、少しは礼儀がある指揮官のようだ。令嬢や使用人達とは違いうみたいだね。

とはいえ、僕も当事者である以上、オフリーに手心を加えるつもりは毛頭ない。

「親と子、それはけっこうな話だが、賊を討伐したのは男爵だ。ならば、彼が王宮から功績を認められるべきだろう。それが、冒険者であつた我々の先祖が起こしたこの国の在り方じゃないのかな？」

ここは、豪商が貴族家を金の力で乗っ取つたオフリー家に対しては相当な嫌味になるだろう。リオン君も事情を知っているようで、笑いを堪えて震えている。

「……制度になっていない、古い習わしを根拠にして手を引くことは責任者としてはできかねますな」

彼はいい役人になれそうだね。頭がよく回る。

しかし、苦しい状況にあることは間違いない。目的の空賊の身柄はこちらにあり、爵位も上の公爵家がリオン君の隣にいる。

決定打がない中で、こちらから決定打を喰らわないよう上手く守っている印象だ。

「なら、ウェイン準男爵として王国の直臣でしょう。別に寄親だから、包括的な権利を持っている、しかもそれを他の家に対して主張できる、という根拠がおりならご教示願いたいですね」

「そもそも公爵家がバルトファルト男爵に肩入れする理由はあります

まい。それこそ寄子ではないでしょう」

うまく話題をそらして、こちらの正当性にケチをつけてきたか。

「理由？そちらも知っているだろうが、男爵は私の大事な妹の決闘代理人を務めた騎士なのでね。爵位を振りかざした不当な介入から守るくらい、喜んで行うさ」

「王太子殿下に牙を向いた不忠義者を庇いだてしては、ますます王宮に疎まれますぞ」

「ご心配いただいたことには感謝申し上げます。ですが、由緒ある我々と王家の関係があれごときで揺らぐと本当にお思いですか？まあ社交にも招かれぬ爵位と金だけの家であれば、まあわからなくても仕方ないから気にすることはありませんよ」

実際には、陛下個人と僕はともかく、公爵家と王家、公爵家と王妃派という単位では隙間風が吹き荒れているが、一方で全体的な関係が決定的に破局するまでには至っていないから、まあ嘘ではない。

それに、仕事を理由にして、僕はお貴族様達が美味しそうな料理をつまみながら嫌味とダンスに明け暮れるような社交の場を徹底的に避けているから、ブーメランになっていることは否定できない。

とはいえ、そんな事情をオフリー家、しかも、その軍人が知る由もないだろうから、とにかく侮辱されたということだけが伝わるはずだ。

「それは我らへの侮辱と捉えますが、よろしいですか」

「そちらの令嬢は面と向かって、しかも公然と我らを落ち目と言っていたので、あの程度ならオフリー家は侮辱と捉えないと思っております。なんなら本当に落ち目なのか今からお相手しましょうか？」

「王太子殿下の“元”婚約者殿と同様に、跡取り殿もずいぶん過激なようですな」

「これでも武門の家柄ですからね、顔だけではないんですよ」

オフリー側の指揮官が黙り、お互いが沈黙状態となる。

この指揮官、好戦的だし、階級が下の相手には傲慢だが、きちんと裏取りというか、理屈を押さえた上で動いてくるタイプらしい。

ならば、手を引く理由を見せてやってもいいかもしれないな。

「せっかくなので、貴官にいいことを教えて差し上げよう。我々は、陛下直々の空賊討伐命令を受けてここにいる。つまり、王命ということだ」

「口ではなんとでも言えよう。そのような命令の存在自体がブラフだという可能性もある」

「いい指摘だ。だが安心するといい、陛下直筆のサイン付きの書面もある。そこには、公爵家はバルトファルト男爵とともに空賊を討つべしとあるのだが、よかつたら見に来るといい。お茶くらい出すよ?」「どうして今になってその書面を持ち出したのですかな?」

「態度こそ、そちらの令嬢と同じく不快だが、貴官の能力は高いようなので、手を引く判断をするための理屈を提供するのも一興かと思いついてね。それとも、陛下の命令書を無いものとして僕らを殲滅して、それが後々に問題となったときに、伯爵は、貴官ら現場の人間に責任を擦り付けることなく守ってくださいませんか?」

「……確認のため使者を送る。騙し討ちするような真似はお控え願いたい」

「それはお互い様だと言っておきましょう。ですが、使者を受け入れましょう。合流ポイントはこちらから指示しましょう」

「了解した、指示を願う」

勝った！リオン君に顔面偏差値SRクラスの笑顔からウインクを放ち、ハイタッチをして喜びを共有する。

これなら将来の子分にいいところを見せられたと言えるだろう。

「陛下の討伐命令を途中まで黙ってるなんて、さすがですね」

「ひどいなあ。奥の手を最後に切ったっていうだけじゃないか。それにあの家の使用人の不始末を考えればこれぐらいの意地悪は許容範囲内だろう」

二人で笑っているところに、1体のロボットが入ってきて飲み物を提供してくれた。

これもまたすごいな、ロボットがまるで空気を読んで入ってきたみたいになっているぞ。

ただ、これで一段落だ。

少しでもリオン君の負担を減らして、早く主人公様と仲直りできるようにメンタルを回復させてもらわないとな。

「さて、向こうの使者殿が来る前に君は戻るといい。ロストアイテムの力があるからといって、君はまだ学生なんだ、あとは僕ら大人に任せるといい」

「なんかいつも尻拭いさせてしまってますいません」

「気にしなくていい。僕は君と仲良くなりたいたんだと言ったじゃないか」

微笑みかけながらリオン君の頭をポンポンと叩くと、彼の表情が一瞬固まった。

しまった、仕事で失敗して落ち込んだメイドさんを口説くために親密度をあげるときのムーブを無意識にやってしまった！

いや、ちよつと待て！僕にそっちの趣味だけはないからな！しまった、誤解を解かないと・・・

そうだ、戦いが終わった後というのは、生存本能が昂っていると聞いたことがある。

一回だけなら将来のための練習だと思って、運命の修正力さんも、主人公の聖女様も大目に見てくれるかもしれない。これならリオン君の誤解も解けるぞ！

「そうだ、リオン君。王都に戻ったら最高級な娼館に連れて行ってあげよう、王宮務めのとときに上役から教えてもらった店があるんだ」

ピクリとリオン君の耳が動き、僕の方を見たのと同じタイミングで、パルトナーのブリッジの扉が開いた。

二人で恐る恐る、ゆつくりと首を曲げて扉の方を見ると、そこにいたのは、我が家の麗しのお姫様だ。

だが、目は吊り上がり、怒りのオーラなのか魔力なのかは不明だが、得体のしれない力を纏っているようにも見えて、お姫様なんて可愛らしい響きとは対極の悪鬼羅刹のような存在に見えてしまう。

なんてこった！一番聞かれたくない台詞を、一番聞かれたくない相手に聞かれちゃったあああああああああああ！！！！

アンジェがゆつくりと一步一步、こちらに向かってくる。これはま

「ずいぞー！鳥肌が立って、既に僕の生存本能が危険だと警報を鳴らしている。」

「ま、待ってくれアンジエ！違うんだ、これは戦士に必要な心の治療なんだよ、ちよつと待・・・ブフオオ！」

「え、俺も!?いや、俺はギルバートさんに誘われただけなんだけドウオツ・・・」

我ながらなんとという悲劇なんだろう。

哀れなことに、リオン君が先程に喰らったというビンタよりも、おそらく何倍も強い鉄拳制裁を僕ら2人はもらってしまい、数メートルは吹っ飛ばされてしまった。

こ、今回の運命の修正力さんはアンジエを介して顕現したのか・・・

「兄上・・・当分の間、私には話しかけないでくださいね」

そう言っつてアンジエはブリッヅを出て行ってしまった。

話を聞いてくれ、アンジエ。これは誤解だ！そう、誤解の誤解なん

だっつてばよおおおお
!!!!

第23話 実戦

命令書の実物をオフリー家側からの使者に確認させた後、しばらくしてから伯爵家の飛行船は引き返していった。

公爵家側の動きが非常に公的な裏付けに基づくものであることがわかったため、現場ではこれ以上は判断できないし、動いてもトカゲのしっぽ切りを喰らってしまいかねないと思ったのだろう。

リオン君とパルトナーもすでにこの空域を離脱しており、残ったのは公爵家の飛行船だけだ。

命令書の内容は、ウェイン準男爵領の空賊の討伐を命ずるものであり、空域内の残党を探してみたのだが、結局見つけることはできず、今は王都に戻る最中だ。

とはいえ、王都に戻る前にいくつか片付けないといけないこともある。

まずはオリヴィアさんのフォローだ。リオン君とケンカした、というあたりをヒアリングした上で仲直りの方法を考えなければならぬ。

あの二人がくっついてくれないと、その後ろ盾になって、僕が公爵家の当主をやっている間の実家を盤石なものにするという僕の計画が水の泡となりかねない。

あとは、オリヴィアさんのオマケでこの船で預かることになったオリジナルの攻略対象の2人、フィールド家のブラッドとセバーク家のグレッグの廃嫡コンビだ。

ひとまず予備の部屋にぶち込んであるが、そもそもあの2人、空賊退治に鎧も持たずについてきたらしい。

何？お前らは鎧もなく空賊の鎧や飛行船と戦えるの？馬鹿なのか？

もしかしたら、デコの辺りに三番目の目が開いて異世界からブラツクなドラゴンでも呼べるのか!?

それとも、体の中に未知のウルトラテクノロジーを仕込んでいて叫んだらロストアイテムな鎧を装備してファイナルフュージョンでも

できんのかああああ!?

「というか、決闘騒動でアンジエと敵対しておいて、よくもその代理人をしたリオン君の船に乗り込もうと思ったな。」

「若干思考の迷路に迷い込んでいるところで、船長が僕の方をチラチラと見ている。頭を抱えている僕が気になるのだろう。」

「あの・・・若様」

「何か用事かい?」

「その顔、どうしたんですか?」

「ああ、艦長が気にしていたのはこっちか。アンジエに思いつきりグーパンされたところが痣になってるんだよね。ちょうどいいから、オリヴィアさんに話しかけるための口実にするためにそのままにしてるんだけど。」

「僕は運命の女神様に嫌われているようでね。最悪のタイミングだったんだ」

「建国の聖女様ではなくてですか?というか私にもわかるように教えてください」

「バルトフアルト男爵は、僕達が合流する前に、2回も空賊を撃退していたと聞いただろう?ただ、彼はまだ若い。心身ともに消耗しているだろうから労おうと娼館に誘ったんだ」

「これまたすごい提案をしましたね」

「そしたら、ちょうどそこをアンジエに聞かれてしまったんだよ」

「艦長が絶句している。そして苦笑いを浮かべながら天井を仰ぐ。」

「彼の将来のためにも、練習したっていいかなと思っただよ」

「若様の顔と口から、娼館という単語を聞くだけで違和感がありますね」

「ブリッジには男しかいないから言うけど、やはり酒と猥談は人間関係の潤滑油だと思っただよ」

「ですから、その顔から真顔で猥談なんて単語を出さないでくださいよ。まあ・・・その辺りは否定しませんけど、お嬢様はまだ多感なお年頃ですし、そもそも女性に聞かせる話じゃありませんね」

「そうだね、だからタイミングが悪かったと言っただよ」

ブリッジのクルー達も苦笑いをしている。そんな中で一人、通信士だけが真剣な顔をして、何やら報告を受けている。そして話を終えたところで視線を僕らに送ってきた。

船長もすぐに表情を切り替え、真剣な面持ちで指示を飛ばす。

「状況を報告しろ」

「偵察中の部隊からです！空賊と思われる2隻の飛行船が接近中とのことー！」

「若様ー！」

「ああ、わかっている。全体の指揮は任せるよ。あと、皆には迷惑をかけるが、エスコート、頼んだよ？」

おそらく特注であろうパイロットスーツに着替え、格納庫のプロトタイプアロガンツの足元で深呼吸する。

空気を大きく吸い込むと、スーツが体にピツチリとまとわりつくのを感じるね、ちよつと恥ずかしい。

宇宙世紀のようなふんわりタイプのものはないのだろうか。

開いたハッチからプロトタイプアロガンツに乗り込み、各種スイッチをオンに切り替えていると、コックピット上部にあるスピーカーから機械音声とは思えない軽やかなしゃべり声が聞こえてきた。

「マスター、機体のコンディション、オールグリーン！いつでもいけるよー！」

若干片言で、まるで来日間もない外国人タレントのようだねと思うたこともあったが、完璧すぎないところに親しみを感じる。

外タレの片言はもしかしたら好感度稼ぎの計算だったのだろうか。よくよく考えてみれば、片言で用件の趣旨を伝えられるってだけでもすごいよね。

いや、戦闘前に僕は何を考えているんだ。やっぱり緊張しているんだろう。

模擬戦だけは二千回には達しないものの、相当な数をこなしたつもりだが、実戦というのは空気が違うものだね。

「なあ、プロトタイプアロガンツ。君の弟はもう2回も空賊連中を撃退したんだ。お互い、お兄ちゃんとしては格好悪いところは見せられないぞ」

「わかった！アロガンツ、がんばる！」

「その意気だ、よし行こうか！」

背部のウイングのバーニアが火を噴いて機体が浮き上がると、すぐに加速してプロトタイプアロガンツは大空へ飛び出していく。

前世のアニメや漫画で描かれたGのような負荷は特に感じない。むしろ普通の鎧に乗っているときよりも身軽に感じる。おそらく、負荷を軽減する装置が組み込まれているのだろう。

ひとまず余計な思考をやめて、先に出撃した部隊に追いついたところで、鎧部隊の隊長が事前の打ち合わせどおりに各機をプロトタイプアロガンツの後ろに下がらせた。

「若様、例の準備はよろしいでしょうか」

「ああ。プロトタイプアロガンツ、両肩のキャノン砲をぶち込むぞ」

「エネルギーチャージ、できてる！」

本家のアロガンツにはない武装の中で、模擬戦のときには準備の都合でテストできなかったものがある。

両肩に乗った砲塔は、近・中距離用の散弾状のビームと長距離用のビーム砲を撃ち分けることができるらしい。要は、前者はスプレッドビームキャノン、後者はロングレンジビームキャノンといったところだろうか。

「隊長、各機に伝達。2, 3発、デカいのを撃ち込む。当たるとは思わないから、敵がバラけたところを確実に仕留めるぞ」

「かしこまりました！」

「ロングレンジビーム、セット！目標、敵飛行船！」

「了解！目標・・・ロック完了！」

「え？ロック？この距離で!?飛行船の大砲だってこの距離は届かないぞー！」

今も飛行船はお互いに威嚇射撃を行っている。

お互いに命中するとは思ってないし、1発くらいがまぐれで当たっ

ても、魔力シールドで防がれるのは常識だ。

だから僕も、ロングレンジビームは威嚇射撃程度にしか使えないと思っていたのに。

「アロガンツ、がんばった!」

手先は器用とは言えないが、こういうところは高性能な各種機械で構成されたロストアイテムとその人工知能ならではなのだろう。

何発か当たれば、魔力シールドを剥がすくらいはできるかもしれない。よし、それならやってやるさ!

「ロングレンジビームキャノン、いつけえええ!!」

手元のトリガーを引くと、両肩の砲塔から極太のビームが勢いよく発射される。放たれた二筋の光は、空賊の飛行船の側面に当たる直前に魔力シールドとぶつかり合うのだが、次の瞬間には飛行船の横っ腹を食い破り、そのまま貫いてしまった。

そして、まもなく船内から小さな爆発が連鎖して発生し、そのまま飛行船は、力なく地上めがけて落下を始めた。

「は、はあああああ!」

「敵艦撃墜!アロガンツ、やった!」

おいおい、魔力シールドごと貫通して敵艦ごと沈めるなんて武器、聞いたことないぞ!

かの有名な黒騎士だって飛行船を撃墜するときは魔力シールドをロストアイテムの大剣で破ってから、船体を切り裂いたっていう話だ。

こんな武装、普通の鎧相手に使ったらオーバーキルにも程があるぞ!
自分の鎧ながら、その威力に寒気がするね。これでプロトタイプなんだから恐ろしい。

また、この威力に混乱しているのは、当然ながら敵も同じのようで、状況をプロトタイプアロガンツが伝えてくる。

「次弾チャージ完了まで120秒、敵鎧部隊の連携鈍化を確認」

「わかった、いい子だプロトタイプアロガンツ。このままサポート頼むぞ」

「合点承知！褒められた、やったね！」

無邪気か！それに合点承知って語彙のバリエーション豊富だな！だが、今は目の前の敵に集中するでしょう。

「隊長、敵さんは混乱している。各機には、当初の予定どおり連携して確実に仕留めるよう伝えてくれ！」

「かしこまりました！お前達、若様の強烈な先制パンチに遅れを取るなよ！」

隊長の指示に鼓舞された公爵家の鎧部隊は、威勢のいい返事とともに、空賊の鎧部隊に向っていく。

こちらの火力、そして、味方の飛行船が一撃で沈められるという予想外の事態に敵の指揮系統が混乱しているようで、プロトタイプアロガンツの言うとおり、敵の動きは鈍い。

そこを公爵家の精鋭部隊が襲い掛かり、空賊側の鎧は1機、また1機と落とされていく。

今さら気付いたのだが、敵の飛行船を沈めた、つまり命を奪ったことへの忌避感は思っていたよりもなかった。

まあ、前世の死因が痴情の纏れの末の刺殺だからな。気を抜けば殺られる、というのが意識の底に刷り込まれているんだろう。

それに、監査で色々と摘発した結果として、命を落とした者もいただろうから、それも遠因かもしれない。

ただ、そんな思考を遮るかのように隊長機が僕に呼び掛けてきた。「若様、あちらを」

隊長機が指さす先には、騎士達と交戦している空賊の鎧の姿がある。

隊長が言おうとしているのは、あれを初陣の獲物にしろ、ということだろう。おそらく彼が父や船長から言い含められている本来の目的がこれなんだろうね。

つまり、僕に人殺しを経験させる、というものだ。飛行船1隻まるごと沈めた時点で既に大量殺人者なんだろうが、より直接的な形で手を下させたいらしい。

「僕はそんなに情けない男かい？」

「私達には私達の役割があります。なにとぞ、ご容赦を」

「・・・心配り、感謝しよう」

隊長から漂うサラリーマン的な哀愁を感じざるを得ないね。この世界では適法なことではあるが、ボンボンに場数を殺人の経験を踏ませるためのが仕事というのは・・・

「プロトタイプアロガンツ、グレイブセット!」

「了解! 刀身の加熱・・・完了!」

プロトタイプアロガンツが手にしている薙刀のような武器、グレイブの刀身が熱で赤く染まっていく。

リオン君の説明だと、これもロストアイテムらしいのだが、これってアレだよな! ザ○の斧とか、グ○の剣の槍バージョンだよな!?

しかも刀身から持ち手まで濃いめの赤色だからレッドグレイブってことだろ! ダジャレか!!

気を取り直して、僕はプロトタイプアロガンツにグレイブを構えさせて、空賊の鎧に切り込んでいく。

機体の重厚なボディからは想像の付かないスピードでプロトタイプアロガンツは、敵機との距離を縮め、刀身をそのまま鎧に深々と突き刺した。

空賊の鎧はやがて動きが止まり、槍を引き抜くと、力なく落下していく。

「お見事でした。ご気分は?」

人の命を奪ったことの精神的負荷を案じているようだ。

「感傷的なセリフがお望みかな? 大して変わりないね」

「それならば結構です」

「先にデカいのをやってしまったしね」

大きく息を吐きながら、戦場をあらためて見渡してみる。もともと、空賊の飛行船2隻と交戦するにはやや過剰ともいえる鎧が出撃していたせいか、戦況は間違いなく優勢だ。

僕に方が一のことがないように、飛行船に残す戦力をギリギリまで減らして、前線に戦力を集め、この戦闘に臨んでいるのがわかる。

さんざん周りにお膳立てしてもらったおかげで、このままいけば、

武闘派大物貴族の跡取りの初陣としては及第点だと言えるだろう。

しかも、初撃で空賊側は飛行船をやられたせいで、残った連中も後退を始めており、そこを公爵家の精鋭部隊が追撃していた。

唯一気になるところがあるとするれば、僕達のいる後衛と、すでに敵の残りの飛行船に張り付いて攻撃を始めている前衛ではかなり距離が開いてしまっていることくらいか。

ただ、いくらロストアイテムであるプロトタイプアロガンツが強力な鎧だからといっても、なんともあつけないものだと感じている自分もいることは否定できない。

「大勢は決したようだね」

「油断は禁物です・・・といつても、各部隊の優勢は続いておりますので時間の問題でしょう」

「そうだな、各員にも気を緩めないよう改めて指示を出しておいてくれ」

できるだけ冷静な態度を取るよう努めているのだが、やはり若干ではあるが心拍数が上がっているのがわかる。心身とも、少しクールダウンしたいところだね。

だが、そんなそれを無理やり中断させるかのような、喧しいアラートがコックピットの中で鳴った。

『警告。味方飛行船付近の雲中に鎧部隊の反応を確認。数、およそ10。繰り返しします・・・』

ずいぶんと急激にAIのキャラが変わったな、というか、別動隊か！しかも、そんなセンサーがプロトタイプアロガンツに付いているのか！

しかも、こちらの飛行船に雲の中からこっさり近付くなんてやってくれる！どうりで敵さんが脆いはずだ！困だったということかよ！今から前衛の鎧部隊を戻しても間に合わないか。仕方ない、それなら・・・

「プロトタイプアロガンツ！この機体なら『間に合う』か？」

『単機であれば可能です』

まんまと敵の術中に嵌まってしまったようだ。

しかも、それを由来不明なロストアイテムがなかったら気付くこともできなかつた。クソっ！何が及第点だよ。あれこれやったところで、結局、僕自身はボンボンのままじゃないか!!!

「隊長、どうやら別部隊がこちらの飛行船に接近中らしい。ロストアイテムが敵機の反応をキャッチした」

「若様の鎧にはそんな機能があるのですか!?!」

「理屈は僕もよくわからん!だが、このアロガンツならどうやら間に合うらしい。ガセならそれで結果オーライだ、この場は任せるよ?」

「それでは若様が危険です!」

「責任は僕が取るさ。プロトタイプアロガンツ、ぶっ飛ばしていくよ!」

「わかった!アロガンツ、トップスピードでいく!」

背部ウイングのバーニアの炎を最大限に噴かせて、僕はプロトタイプアロガンツの速度を一気に上げる。

僕らの飛行船には、将来の僕の部下になる者だけじゃない、主人公様もアンジエもいるんだ。

こんなところでゲームオーバーなんて冗談じゃないぞ!

第24話 命名

襲ってきた空賊部隊との戦闘中に、プロトタイプアロガンツのAIが敵の別動隊の存在を補足したことから、僕は単機で雲の中を進んでいた。

『敵部隊との接近までおよそ60秒です』

これまでの愛嬌のある声とは打って変わって人工知能らしい機械的な案内に疑問が残らなくもないが、そういう仕様なのかもしれない。とりあえず今はこちらの飛行船に接近中の部隊を何とかしないとな。

雲を突き抜けると、既に飛行船の防衛に残った公爵家の鎧と空賊の鎧が交戦中であつた。真正面からぶつかれば、こちらの騎士たちの練度の方が高いだろう。

しかし、奇襲を受けて浮足立った結果として、相手の勢いに押されつつあることは否定できそうにない。

飛行船には、妹や主人公様もいる以上、全力で潰す以外に選択肢はないな。

「プロトタイプアロガンツ、魔力シールド全開。このまま突っ込むー」
「了解！アロガンツ、突撃！」

プロトタイプアロガンツは、防御用のシールドを纏ったまま、空賊の鎧に突っ込んでいく。

重厚な鎧の質量が、既存の鎧を超える速度で衝突した結果、空賊の鎧はその衝撃に耐えられるわけもなく、機体がバラバラに砕け散ってしまう。

人工知能の口調が戻ったな、と思いながらも、戦場に乱入したプロトタイプアロガンツの登場と、味方機の突然の撃墜に動きを鈍らせた空賊の鎧に、僕は狙いを定める。

プロトタイプアロガンツが近くにいた空賊の鎧めがけて、右腕で殴りかかり頭部を吹き飛ばす。さらに、左の拳をガラ空きのボディに叩き込むと、胴体のコックピット部分が大きく凹み、中のパイロットは意識を失ったのか、鎧は重力に引かれて静かに落下していった。

「おい！黒い鎧はもういないんじゃないのかよ！」

「700メートル級の飛行船がここから離れたのはお前も見ただろうが！」

「つてことは飛行船だけ帰らせて、鎧は残してたのかよ！」

空賊達が仲間内で罵り合っている。

どうやら、プロトタイプアロガンツをリオン君の機体と勘違いしているらしい。こちらにパルトナーがいないことから好機と見て、こちらの飛行船で捕獲されているお仲間を奪還するという算段か。

空賊達は、散開しながらプロトタイプアロガンツと距離を取り、ライフルをこちらに向けて、一斉に発砲するのだが、弾丸はアロガンツの魔力シールドにことごとく弾かれて有効なダメージにはならない。

散開するまでは悪くなかったな。

だが、攻撃が通らないところに焦ったようで、ライフルの引き金を引くのに意識を持って行かれて足を止めてしまっている。そんな動きじゃ的にしてくれと言っているようなものだぞ！

「プロトタイプアロガンツ！ツインキャノンの散弾を使うぞ」

「了解！モード切替・・・完了！」

「よし・・・これを抜けられると思うなよ！」

僕がプロトタイプアロガンツの引鉄を引くと、先ほどは極太のビームを発射した砲塔から、何百もの光弾が前方全体に向けて連続して放たれる。

前世の知識で思い返すと、サザ○ーの腹部から出る拡散メガ粒子砲みたいだな。そして、この世界では見たことないタイプの武器であることは間違いない。

空賊の側にとっても同じだったようで、初見の兵器への対策が全く取れずに、放たれた光弾は一つ、二つ、そして三つと空賊の鎧を貫き、動力部に直撃したのか、機体は爆散していく。

魔法による攻撃なら、魔法陣が展開されることが多いので、まだ回避行動を取るきっかけになったのかもしれないが、プロトタイプアロガンツの武装は基本的には純粋な火器が多い。

こちらの前面に展開したほとんどの鎧は、結果的に、なすすべもなく被弾したようだ。

マルチロツクオンのような高等技術などではない、ただただ密度の濃い弾幕、手数のみだけで多くの敵機を撃墜できてしまったのは驚きでしかない。

正直に言うと、命がけの実戦経験のない中で、携行火器のエイムを合わせられるかは非常に不安だったが、プロトタイプアロガンツの場合は、そんなものは全くなかった。

ほとんどもをAIがやってくれるか、そもそもエイムの必要がない範囲攻撃だったからね。

そして、戦場内で多くの爆炎が上がる中、2機の鎧がプロトタイプアロガンツに向かって突っ込んできた。

被弾はしているようだが、機体の動きに影響は少なかったようで、戦闘の鎧は剣を構えて向かってきている。

くそ、やけっぱちの特攻かよ！

「プロトタイプアロガンツ、グレイブセット！」

「了解！・・・加熱、完了したよ！」

「槍相手に剣は無謀だな」

リーチの長い槍をぶん回しているだけで、達人以外の剣使いは接近すら難しいって誰かが言っていたような気がするが、まさにその通りだな。

プロトタイプアロガンツが突き出したグレイブの切っ先は、空賊機のボディを易々と貫いた。だが、同時にコックピット内にアラート音が響く。

「マスター、影からもう一機来てる」

「わかってるー！」

1機目の鎧のすぐ後ろから、こちらの上を取るように、もう1機の鎧が飛び出して来る。

グレイブが突き刺さったままのうちにできた隙を狙っているようだ。肩のビームキャノンは・・・間に合わないな。それなら、力でゴリ押しするしかないか。

「プロトタイプアロガンツ、パワーを上げろ！押し切るぞ！」

「わかった！出力、急速上昇！」

プロトタイプアロガンツは、各部のモーターの回転数を上げながら、1機目の空賊の鎧が刺さったままのグレイブをさらに深く突き刺しつつ、その鎧ごと、切っ先を持ち上げる。

さらに、背部ウイングのバーニアから出る炎が青く燃え始めると、プロトタイプアロガンツは力任せにもう1機の鎧をめがけて、突撃していく。

「貫いて見せろ、アロガンツ！」

もう1機の鎧のパイロットは、まさかグレイブに刺さった鎧ごと真正面から突っ込んでくるとは思わなかったらしく、1機目を貫通した刃が2機目の鎧も貫き、結果として、2機の鎧はまとめて串刺しになってしまった。

いずれの鎧も、数秒ほどは手足をバタバタとさせていたが、すぐに動きが止まり、沈黙する。

僕は大きく息を吐きながら、グレイブを敵の鎧から引き抜くと、胴体を高熱の刃で貫かれた鎧は、地表へと落下していった。

「プロトタイプアロガンツ、周囲に敵機の反応は？」

「索敵中、索敵中・・・味方以外の反応なし」

「わかった、周囲を警戒しつつ、甲板で味方の戻りを待つぞ」

「了解、警戒モードに移行します！」

ようやく戦闘終了か。結局のところ、最初から最後まで機体の性能頼みだったな。

実際に戦ってみて、改めて確信したが、既存の兵器との性能に差があり過ぎる。

同じ力、いやこれ以上の力を持つリオン君が増長しないのが不思議なくらいだ。

高校生くらいなら中二病の延長でもっと横暴に振る舞ってもおかしくないと思うのだが、さすが乙女ゲーの攻略対象というべきか。

やはり、彼との対立は絶対に避けて、こちらに取り込んでいくべきだろう。

そういえば、戦闘中に空賊達は、僕のプロトタイプアロガンツを、リオン君のアロガンツと誤認していたな。

それなら、この戦いの功績の一部も彼のものにしてしまうのもありだろう。

先の2回の戦闘と合わせれば、リオン君をまた昇進させることができるかもしれない。

あと、プロトタイプアロガンツ・・・名前にしては少し長いかもしれないな。

「プロトタイプアロガンツ、君の名称って変更できるのかい？」

「可能だよ！じゃあ僕の新しい名前を教えて！」

「そうだな・・・アロガンツのお兄さん、僕と同じ・・・よし、君は今からアロガンツ・ブロスだ」

「了解！アロガンツ・ブロス、登録しました！」

「あらためて、これからも頼りにするよ、アロガンツ・ブロス」

ブロスだと、リオン君のアロガンツとセットで、という意味になっ
てしまうかもしれないが、奇しくも僕と同じ兄どうし、要するに彼と
僕とでお兄ちゃんズという意味をブロスに込めることにする。けっ
して、バ○モスとかいうカバ型魔王を連想してはいけない。

ネーミングにセンスがあるかはわからないが、僕にとっては、この
名前にすることで、今までより機体に愛着がわいてくるから、これで
いいさ。

味方の鎧部隊が戻ってから、飛行船の船長と簡単な打合せを行い、
自室のシャワーで汗を流した後、僕は船内にあるゲスト用の部屋に足
を運んでいた。

部屋にいるのももちろん主人公様だ。どうやら、リオン君とケンカ
をしたらしいとは聞いたが、その辺りをフォローしなければ、二人が
くつつかず、その結果、僕の保身が危うくなるかもしれない。

ノックして部屋に入ると、オリヴィアさんが俯いたまま、ベッドの
上で体育座りをしていた。

よく見ると、目元が赤くなっている。少し前まで泣いていたのだらうね。

主人公様でなければ、これぞ好機と口説いていたかもしれないが、今回ばかりはそうもいかない。

僕は室内の少し離れたところに置いてあつた椅子に腰かける。まずは事情を聞かなければ始まらないしね。

「戦闘は終わったよ、怖い思いをさせてしまったかい？」

「それは・・・もう大丈夫です。ギルバートさんは・・・その顔・・・」
「軽い兄妹喧嘩みたいなものさ。いやあ、参つたよ、悪ふざけしたらア
ンジエに怒られてしまったよ」

オリヴィアさんとしては、僕の顔の痣が気になったようだが、そこはやれやれ、という感じに両手を上げて首を振つて場を和ませることにする。

「それ、ギルバートさんが悪ノリしちゃつたんじゃないんですか？ア
ンジエが言つてましたよ、お兄さんは、たまに予想もつかないことを
するつて」

力ない言い方ではあるが、少し笑みが戻つたように見える。

「それは僕にも言い分があるんだけど、間違つてもいいかな。とい
うわけで、また回復魔法をお願いしてもいいかな？」

オリヴィアさんが僕の前に手を出すと、手先に集まつた光が僕の顔
に当たり、アンジエに殴られた痛みが引いていく。

「さすがだね、ありがとう。そういえば、リオン君とケンカしちやつ
たつて聞いたよ。何があつたんだい？」

「いえ、ギルバートさんにお話するほどのことじゃ・・・」

僕にとつては、将来の保身と安定がかかっている以上、今は身分
云々を言っている場合じゃない。主人公様の恋愛が実らなければ、僕
の将来の安定的な権力基盤にも影響が出かねない。

リオン君とくつつかせるために、なんとしても事情を聞きださなけ
れば・・・

「それなら、さっきの回復魔法のお礼に、人生の先輩がアドバイスした
いから、話を聞かせてもらいたいな」

「もしかして、そのために傷を残しておいたんですか？」

「いやいや、実はさっきの戦闘の負傷者対応で、ドクターが忙しいみたいだね。偶然にも、オリヴィアさんがうちの船に乗っていたから、お願いしただけだよ」

「ふふ、そうやって誤魔化すところ、やっぱりリオンさんに似てますね。私がいけなかったんです、酷いことを言ってしまったって・・・」

そう言うと、オリヴィアさんは少しずつ、事情を話し始める。

事前にアンジェから聞いていたことに加えて、オフリー家のドーナツ頭から、リオン君がオリヴィアさんの体目当てで傍にいるんじゃないかと言われたこと、それをリオン君に言ってしまったこと、

自分はペットじゃないと言ってしまったこと、そして、謝ろうとしても一歩引いた態度を取られてしまっているのだという。

まずいな、2人の関係が壊れかけていると判断するには十分じゃないか。

そんなとき、乙女ゲームの主人公の取るべき模範的な行動というのは何だろうか。

あのケモナー学園のゴミ女みたいな行動は論外だとして、ベタなところなら、相手と手を取り合えるというか、

同じ目線に立って、時に助け、時に助けられて、ともに問題を解決する関係あたりに進むよう誘導すれば見当違いにはならず済むか。

「ペット・・・というのは穏やかではないね。でも、これからずっと守られてばかりのつもりなのかい？」

「そ、それは・・・」

「別にリオン君と同じことができなくてもいいんだ。君の強みである魔法を磨いたり、より深い知識を身に付けて彼と並び立てばいい。貴族ばかりがあつまるあの学園史上初の特待生だろう、オリヴィアさんは」

まずはオリヴィアさん自身が、自分に自信を失っていることから、必死にオリヴィアさんの長所をプレゼンしていく。

「ギルバートさん、いつも私を褒めてくれるんですね。どうしてそこまで気にかけてくれるんですか？もしかして、本当に愛人になれって

言うんですか？」

「いやいや、あれは半分冗談だよ。一言で言えば、アンジエを支えてくれたことの恩返しさ。君達は妹が半生を台無しにされて深く傷ついて、取り巻き達も我が身可愛さに姿を消して孤独を強いられたときに、傍にいてくれただろう？ 兄としては、感謝してもしきれないんだよ」

「私とリオンさん、ですか？」

「あとは、その延長で、リオン君を保護したいんだよ。彼の武力は申し分ないが、貴族社会はそれだけじゃ心許ない。だから、亜人を囲つてる学園のゴミみたいな女と結婚されたら守り切れないかもしれないし、彼の実家には、リオン君を遺族年金目当てに殺そうとした正妻がいるから信用ならない。でも・・・」

「でも？」

「オリヴィアさんがリオン君とくつついてくれたら、僕も心置きなくサポートできるといわけさ」

ここで僕の目的の一部を明示するのは一種の賭けだ。

オリヴィアさんはあの乙女ゲームの主人公、しかも前世の妹の話によると、かなりのいい子ちゃんだという話だった。

邪な思惑を持って嘘をつくよりも、前向きな目的を、嘘のない範囲で示して信用を得られれば、今後の僕にとって大きな利益、つまり彼女が聖女となったときに大手を振って後ろ盾となることができる。

一方のオリヴィアさんは、少し言いにくそうにしながら口を開いた。

「でも、リオンさんと私じゃ身分が・・・」

「本当はもつと話が固まってから伝えようと思ったんだけど、実は君を、公爵家の寄子のどこかに家で養子にするという話が出ている。優秀な特待生を取り込みたい、という政略的な意味もあるけどね。そうすればオリヴィアさんがリオン君とくつつけば、身分のことはどうとでもなる・・・いや、僕がどうにかする。だから、ここから先はオリヴィアさん、君次第だ」

「普段、私達の前ではおどけているのに、裏では色々と考えてくれてい

たんですね」

「これでも大貴族の端くれだからね」

僕は椅子から立ち上がり、ゆっくりとオリヴィアさんの下に近付いて片膝をつく。

そして、彼女の前に掌を差し出した。

「悪いようにはしないから、お兄さんの悪だくみに一枚、噛んでみないかい？僕は可愛い女の子のためなら道化にもなれる男だよ？」

「私なんて・・・アンジエに比べれば可愛いなんて・・・」

オリヴィアさんが少し脇に目線をそらした。やっぱりまだ高校生くらいの年齢だと、男心というか、男の心情はわかっていないらしいね。

「うくん、アンジエはすごく綺麗ではあるけど、可愛いかどうかは疑問が残るなあ。男子にとつては、可愛いと綺麗って割と別物だよ？」

「ふふ、自分の妹をすごく綺麗だなんて言うお兄さんなんて初めて見ました」

「これでも妹のためなら浮島も笑って沈めるなんて陰口を叩かれているらしいからね。侮られたものだよ、むしろ反乱起こしたって足りないかもしれない」

「もう、そんなこと言ったらアンジエに怒られちゃいますよ？」

あれ、ここは「め！」ですよって言うてくれないの？あれはリオン君に向けて限定なのか!?

くそ、ちよつと自分でも言われてみたかったのに残念だ。

「それもそうだね。でもオリヴィアさんは、ちゃんとリオン君に謝らないとね。さすがに体目的だつて言われたら僕だつて凹むよ。リオン君がもしそんなに本能を持って余すなら、僕が責任をもって娼館に連れて行って発散させるから安心して！」

「それは・・・ごめんなさい、リオンさんがそういうところって・・・すごく・・・嫌です」

よし、これは嫉妬だな！間違いない。どす黒いプレッシャーの片鱗を感じて寒気がしたのは気のせいだろうか。

まあ、好意はあるとは思っていたけど、ちゃんと恋愛的な気持ちに

なっているようだ。

そりや高校生くらい年齢なら、好きな相手がセクシーなお店に行くって聞かされたら嫌だよね。

「ってことは、やっぱりリオン君のこと、好きなんだね」

一瞬、驚いたように目が大きく開き、オリヴィアさんの視線が宙を泳ぐ。そして、ほんのりと顔が赤くなってきた。

とはいえ、少し寂しげな表情もまだ残っている。思うところがあるのかもしれない。

「でも、リオンさん、はぐらかして逃げるのが上手そうですから……」
「それなら首根っこ締め上げて逃げられないようにしてから告白しちゃえばいいよ。それに、告白されてから急に相手を意識するってパターンもあるものさ」

「……わかりました、私、頑張ってみます」

そう言うオリヴィアさんは立ち上がって僕の手を取って、固い握手を交わした。

ようやく主人公様に立ち直りの兆しが見えて一安心だね。たしかもうすぐあのケモナー学園では修学旅行の時期だったはずだ。

さて、鬼が出るか、蛇が出るか。

ただ、ここから先は主人公様の活躍を祈るとして、僕は僕にしかできなことをやるとしよう。

まずは、今回の空賊討伐を理由に、リオン君の昇進させる根回しからだな。

第25話 事実と真実は同じとは限らない

主人公様ことオリヴィアさんの激励というか、リオン君へのアタックを後押しして、自室に戻ろうと思ったところで、1つ忘れていたことを思い出した。

そう、リオン君から預かったオリジナルの攻略対象である2人、紫色の攻略対象ことフィールド家のブラッドと、赤色の攻略対象ことセバーグ家のグレッグだ。

妹に鉄拳制裁を喰らったり、空賊と戦闘したり、主人公様を励ましたりと忙しい状況が続いていたせいか、すっかり放置をかましてしまっていた。

別に会話をしなければならぬ、というわけではないが、せつかく公爵家の飛行船に恥ずかしげもなく乗船しているのだから、嫌味くらい言ってもいいだろう。

元々、あの決闘騒動の発端となった夏休み前のパーティーで、妹をさんざん侮辱した礼はきっちりしてやろうと思っていた。

一応、この船に乗るに当たって、たまたま僕が別件での対応中に、2人は、船長に挨拶をしにくるくらいの最低限のマナーくらいはあったようだが、妹に喧嘩を売ったことは飛行船のクルー達は知っているの、船内でもおとなしくしているらしい。

彼らに宛がったゲスト用の部屋に向かっていると、ちょうどいいタイミングでブラッドとグレッグの2人が出てくるところに遭遇する。

「おや、招かれざるお客人殿達はおでかけかな？ 戦闘はもう終わったから逃げる心配は要らないよ」

2人とも非常に気まずそうな顔をしている。言いたいことを我慢している、というのが手に取るようにわかる。

「ぼ、僕達は別に逃げようだなんて・・・」

「やめろ、今の俺達じゃ何を言っても虚しいだけだ」

反論しようとしたブラッドをグレッグが制止した。

ずいぶんと謙虚というか、心を折られているように見える。パーティー会場ではアンジェに向かって、お前はもうおしまいだ、みたい

な暴言を吐いてくれたらしいのに、こんなにしおらしと、嫌がらせをしたって面白みがない。

「妹が世話になった礼をしてやろうと思ったが、ずいぶんとお行儀よくなつたようだね」

「自分が粹がつてたガキだつてことをバルトファルトに思い知らされましたからね」

「それはけっこうなことだ」

「バルトファルトといえば、さっきの戦闘、あいつの鎧が出てましたけど、あいつは先に王都に戻つたのではないのですか」

鼻っ柱を折られて落ち込みモードのように見える勇者王・・・じやなかった、グレッグをよそに、ブラッドが、彼らからしてみれば当然抱くであろう疑問をぶつけてきた。

こいつらにとつてみれば、アロガンツは因縁の機体だから気になつても仕方あるまい。

「あれはリオン君の鎧の同型機みたいなものだ。しかるべき対価を支払つて公爵家が譲り受けた。やはり自分達がプライドもろとも粉々にされた鎧は気になるかい？」

2人は不機嫌な顔を露骨に浮かべるが、歯を食いしばつて自分を押しさえているようだった。

安い挑発にはやつぱり乗つてこないか、少し寂しいじゃないか。

先に気持ちを切り替えたブラッドが、僕らとリオン君との関係への疑問をぶつけてくる。

「ジルクも言っていました、妹さんの婚約解消からバルトファルトと近付くまでがずいぶんと早いですね。ギルバートさんもずいぶんとバルトファルトと仲が良いように見えます」

「確かに、レッドグレイブ家のような大物なら、成り上がりの新顔を助けるにも、寄子への根回しとかに時間がかかるだろうに、ロストアイテムの献上から、空賊退治の増援まで、フォローに入るまでが早いな」
ブラッドに続いてグレッグも気になつたところを突いてくる。

ラーファン家の女に誑かされて頭がおかしくなつたと思つていたが、さすがに国内有数の大物貴族の元跡取りだけあつて、頭が切れる

ところは変わらぬようだ。

今のところ、公爵家がリオン君の昇進の推薦をしたりはしているが、それは派閥単位ではない。

家単体、もつと言えば半分は僕個人がリオン君に急接近しているだけ、という可能性にも考えが及んでいるかもしれないな。

「将来的に後を継ぐのは僕だからね。それに派閥の中には、将来の王妃の実家、という肩書き目当てにすりよって来た連中も多い。僕個人として、将来を見据えて信用できる相手を独自に作るのは自然なことさ。その結果、すさまじい力を持つ鎧も、騎士も手にすることができた。その力は君たちが身をもって味わっただろう？」

「・・・貴方が陛下と親しいことは知っていますが、この先、公爵家はどうか動くつもりなのですか？」

これは公国との国境を守るフィールド家の人間らしい疑問だな。

うちの実家に反乱の兆候があれば、その隙について公国が攻め込んできて不思議ではないから、中央、というか王都、王宮の動きが気になるのは当然か。

「少なくとも、あのオフリーの元婚約者に教えてやるようなことではないね。むしろ、あんな女が婚約者であったことは、個人的には同情するが・・・君も見ていたであろう、学園祭でのオフリー家の亜人どもと僕の乱闘騒ぎの感想を聞きたいところだね」

「そ、それは・・・その・・・さすがアンジェリカさんのお兄さんといえますか・・・」

「さすが王国随一の武闘派だよな。学園で専属使用人を殴り倒すどころか血祭にあげる人間なんて、ギルバートさんとバルトファルト以外、見たことないし。あの実戦さながらの殺意というか、ぶっ潰してやるっていう気迫は正直に言ってみ習いたいぜ」

おい、紫！人のことを、▽のお兄さんこと、ターン○ックスみたいに言うのは止めれ。

しかも、なぜかグレッグのほうは、勝手に好感度が上がってないか!?なんでバイオレントな場面を見せると心を開き始めるんだよ！

「でも領主貴族からしたら、公爵家とバルトファルトが手を組んで、し

かもあの鎧が2機もあるなんて恐ろしいですよ。野心を持って攻め込まれたら、戦っても勝てる気がしません」

「ああ、バルトフアルトの鎧の強さはもう異次元だ。規格外の物量戦に持ち込む以外の勝ち筋が浮かばないよな。しかも、それがもう1機なんてだけでも悪夢みたいなもんなのに、公爵家が同じく物量でフォロウしてきたら、あいつを止める手段がない」

いくらなんでも正面から喧嘩売られない限り、他所の領地に攻め込むなんてしないぞ!? 辺境伯の領地なんて攻めたって喜ぶのは外国ばかりだし!

グレッグ、お前も冷静にうちが野心を持ち出したときの想定をするな! パパ上あたりが聞いたらマジで反乱を起こすかもしれないじゃないか。

というか、あらためて外部の客観的な話を聞くと、公爵家の武力にリオン君&アロガンツって、まるで鬼に金棒のように見えるんだということがよくわかるな。

女に誑かされたとはいえ、やはり腐っても元祖攻略対象か。ラーファン家の女が絡まなければ、頭がしっかりと回ることがよく理解できた。

「そこまで考えているなら、自分達の身の振り方でも考えたほうがいいんじゃないのかい? あのマリエという女を囲っている限り、お前達は公爵家、いや僕の敵だからな。空賊ですらむやみには殺さないリオン君と僕が違うのはさっきの戦闘で見た通りだ。妹を傷付けた代償、安く済むとは思わないことだ」

グレッグとブラッドはマリエという女の名前が出た途端に表情を厳しいものへと変え、僕を睨みつけてきた。

これ、まるで僕が悪役みたいじゃないか? あ、でも妹は悪役令嬢なんだから、そういうえば僕は悪役令息なのか。

オリジナルの攻略対象がみんな揃って敵に回るってすごい状況だな。

そのうち決着を付けるんだろうが、廃嫡された連中とは言え元は身元のしつかりした連中だから、事後処理が面倒くさくなりそうだ。嗚

呼、頭が痛くなってくるな。

王都に戻った僕は、王宮に空賊の身柄や、オフリー家と空賊が結託していることを示す証拠各種を引き渡したり、各所への報告を済ませながら公爵家の屋敷に戻ることになった。

あいにくと今回の討伐命令発出に手を回してくれた陛下に会うことはできなかったが、まああの方のことだから、何かがあれば、いかなる手段を使っても呼び出してくるだろう。

結局、王都にある屋敷に戻れたのは夕方から夜になる頃合いで、屋敷内では、今回の討伐に参加した騎士たちを労うための簡単な食事会が開かれていた。

武闘派の脳筋騎士達に気苦勞をかけさせないためか、割と碎けた場になっており、今回の討伐作戦で僕をサポートしてくれた飛行船の船長や鎧部隊の隊長達も盛り上がっている様子だ。

僕も各方面にお礼やら挨拶をしながら、駆け付け三杯とばかりにアルコールを摂取していたら、だいぶ酔いがまわったらしく、頭の中がぼんやりとしてきたので、先に自室に戻らせてもらうことにした。

自室の椅子に座り、首まわりのボタンを外して楽にしていると、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

水を一杯飲んで椅子から立ち上がり、ノブを回して扉を半分ほど開くと、1人のメイドが立っている。

この子は、たしか以前にアンジエの取り巻きをしていた女子生徒の姉だったか。要は決闘騒動の前後で妹と距離を取った家の出身者だ。

ぶりっ子ちゃん系の雰囲気をしており、男性受けを意識しているように見えることは否定できない。はつきり言えば可愛いと言える。学生時代も、あのケモノー学園の女子生徒としてはわりとチャホヤされていたらしい。

情報源はあの腹黒性悪眼鏡だが、情報がアンジエにも伝わる可能性があるだろうから、正確性の高い情報だろう。僕からの評価はともかく、アンジエからの評価が下がることは避けたいだろうからね。

卒業してから、なぜ公爵家でメイドをやるようになったかまでは知らないが、親の方でどこかに嫁がせるよりかは、派閥の中での使い道を残すために嫁がせなかったという可能性もある。

女子生徒は卒業までに婚約しなくても後ろ指を刺されないから本当にこの国は女尊男卑が激しいよね。

さて、目の前のぶりっ子ちゃん系メイドであるが、体を若干くねらせつつ、胸元で両手を組んで僕を見上げている。

「若様、実はお話が・・・」

「すまないが、アルコールが入ってしまったってね。明日でもいいかい?」

「わ、私、以前から若様のことを・・・」

僕の話聞いてないのか、この女。というか、急に愛の告白じみたことを言ってくるなんて胡散臭えええ!!

ハニートラップの予感がぷんぷんするぞ。

たまにワンちゃん既成事実を狙う貴族出身のメイドがいるんだけど、その子達だつてここまで露骨じゃなかったぞ。

そりゃ僕だつてこの年で異例の婚約者無し状態だから、夢見てトライしようと考える気持ちは理解できるけど、それにしたつてもっと作戦を考えようよ。

今は僕が酒に酔つてるということ以外に付け入る要素はないぞ。というか、ドン引きしすぎて酔いも醒めつつあるくらいだ。

いや、こんなやぶれかぶれの特攻戦術を取らざるを得ないという線もあるか。もしかしたら実家から何か指示を受けたのかもしれないね。

ああ、面倒くさい。これだから貴族出身の女は嫌なんだ。前世基準の価値観からすると、いい歳していつまでも実家に縛られやがって、と思ってしまう。

いや、実家の権威を思いつきり使い倒している僕がそれをいうと盛大過ぎるブーメランになってしまうか、危ない危ない。

最低限、この子の立場も考えてやらないといけないか。

「君が、誰に何と言われてここに来たのかは敢えて聞かないでおくよ。」

今日はひとまず下がりなさい」

「そんなこと言わないでください、それじゃあ私も困りますよ！」

「僕は討伐任務で疲れていたのか、寝ていて返事がなかった、部屋も施錠されていた、と言えは君のせいにはならないさ」

「そもそも若様だって悪いんですよ！」

ハニートラップの自白も早かったが、責任転嫁までしてくるのか!? まあ大方、身分の低い子とばかり遊んでいることへの文句だろうな。責任とか家どうしの話が出ないように、純粹に恋愛を楽しんでいて、貴族出身の女を避けているのが露骨に映ったのかな。

「僕が君に何かをしたということとは全くないはずだが?というか、最近だと屋敷内での対応はコーデリアがほとんど単独で対応しているから、君達メイドさんと接する機会もなかったはずだけど」

「それですよ!どうしてコーデリアさんばかりなんですか!」

この子は何を言っているんだろう・・・全く意味が理解できない。僕が反応に困り、言葉を紡げないでいると、目の前のぶりっ子ちゃん系メイドはさらに言葉を続けてくる。

「コーデリアさんに手を出すくらいなら私の方が可愛いじゃないですか!!若様の寵愛を一人で受けるなんてズルいです!!」

おいしいおいしい!!!!!!
トントでもない核兵器クラスのアルティメットな誤解が起きてるぞおおお!!!!

僕がああ!の性悪腹黒陰険眼鏡に手を出すだ!!しかも寵愛って一体全体どういうことだ!!

寵愛って、僕の知らない間に、スーパーヘイトっていう意味に変わったのか!?

シヨックで頭がクラクラ、膝がガクガクしてきたんだが!?

「あまりに突飛なことを言われて驚きを禁じ得ないのだが、君は僕がコーデリアに手を出している、と思っっているのかい?」

「だって若様がお屋敷にいらっしやる時はいつもコーデリアさんが対応するじゃないですか。他のメイドだっただくさんいるのに!」

「1つ言っておくけど、僕はメイドを指名したことなんて1回たりと

もないよ！あ、いや昔は平民や騎士家出身の子とこっさり付き合ってたときはちよつと指名したことはあったが、貴族出身のメイドを特別扱いたことなんて1回もないから！」

そう言ったところで、ちよつどぶりっ子ちゃん系メイドの後ろを、腹黒メイドことコーデリアが、いつもの澄まし顔で通り過ぎようとしているのが目に入った。

「あーコーデリア、ちよつどいいところに来てくれた。どうやら彼女は、僕が君を寵愛していると大きな勘違いをしているようですね。手間をかけて悪いが、誤解だと説明してもらえるかい？」

声をかけられたコーデリアは、僕とぶりっ子ちゃん系メイドを何回か交互に見て、顎を手で触りながら表情を変えずに数秒ほど考えてから口を開く。

「寵愛だなんて恐れ多いです。せいぜい、若様が学生のころから、学園が休みのたびに王都の店で食事をご一緒したり、先日のように若様がお怪我をされた際には私が付きわきりでお傍にいた程度です」

おいしいおいしい！！！！

どうしてお前は誤解を更に拡大させるような言い方をするんだ!?

学生時代は食事って、辺境出身の下級貴族の結婚相手を、当時の公爵家のメイド達とマッチングさせるためにやっていた食事会のことだろおお!!

というか、お前は女性側の幹事として毎回参加していたのに、結局、誰ともくつつかなかつたじえねえか!!

しかも、怪我したときの話つてつい最近のやつだろ！僕が手を出さない相手だからパパ上が決めた、みたいなことを言ってただろうが！どれもこれも、字面だけなぞれば虚偽の事実は含まれていないが、意味の込め方が不正確なこと極まりない！

さらに、こごぞとばかりに、口元が三日月のように曲がり、ニチャアという擬音が浮き出そうな笑みとともに見下すような顔つきをぶりっ子ちゃん系メイドに向け始めやがった。

「おい、その表現はちよつと、いやだいぶ不正確じゃ・・・」

僕が言いかけたところで、怒りのスイッチが完全にオンとなつてぶ

りっ子ちゃん系メイドが口をはさむ。

「何よ！そんな地味顔してるのに、どんな手を使って若様に取り入ったのよ、顔に似合わず下品な女ね！」

やめて！まるで僕がコーデリアに誑かされたように聞こえてしまふ！しかも、なんか肉体関係までありそうなニュアンスにもなってるし！

「何のことだかさっぱりわかりませんが、そう思うのなら、貴方はまず足りない中身をどうにかする努力をしたらいかがですか」

「調子に乗るんじゃないわよ、この性悪！」

君らは2人とも、お互いにすっかり性悪だと思うよ、と言おうとしたんだが、それより先に、ぶりっ子ちゃん系メイドはぶんぷんと怒りながら、この場から去って行ってしまった。

なんか空賊討伐よりも、女に誑かされた攻略対象2人の相手をするよりも疲れた。

もうボンボンのメンタルはボドボドだあ・・・でも、コーデリアに注意はしておかないとな。

「おい、いくらなんでも、あれは言い過ぎじゃないか」

「虚偽の事実を申したものと認識してはおりません」

「性格の悪い役人みたいな言い方はよせ」

「あら、自己紹介ですか」

「・・・面倒臭い女を追っ払ってくれたことには感謝してるんだ。次からは、僕のダメージがもっと少なくて済むように頼む」

「気が向いたら検討します。私は関係を疑われてメンタルにダメージを受ける若様が見られて少しうれいす」

こいつ、僕へのアンチっぷりが先鋭化しすぎじゃないか。

この女の、僕を波風が立たない範囲で害しようとすることへの執念はどこから湧いてくるのだろうか。

「君にもダメージはあるだろうが。僕の愛人と思われてるようなものだぞ」

「あら、屋敷内の使用人達がそのように勘違いしているなら、勝手に周りが忖度してくれますので好都合ですね。仕事がしやすくなります」

「父上や君の実家から、責任取れと言われたらどうしてくれるんだ」
「・・・そのときくらいは事実を説明しますよ」

それ以外の時には説明しないっていうことじゃないか。本当に性格の悪い女だな。

「それと、申し遅れましたが・・・」

「ん、何だい？」

「おかえりなさいませ。ご無事で何よりです」

「・・・ああ。残念ながらすぐに領地には戻れなさそうだから、またしばらく面倒をかけるよ」

ん？なんで僕はこいつのツラを見てホツとした感覚を覚えているんだ？

いや、もう今日は疲れたから考えるのはやめよう。無事で残念とか言われなかっただけマシだな。

しかし、今日のやり取りが、後日、妹の身にも大きな危険をもたらしてしまうことを、そして、あの乙女ゲーにもあった公国との戦争の足音が確実に近付いてきていることを、そのときの僕は、まだ予想だにしていなかった。

第26話 昨日の味方は明日の敵

さて、僕が性悪腹黒眼鏡メイドを寵愛しているだなんていうとんでもない誤解が、さらにとんでもない誤解を招くというハプニングに見舞われた翌日、僕は王宮に出向いて、リオン君の功績の報告と彼の昇進推薦手続き、

その他、色々な準備と仕込みのために各部署に顔を出していた。

そして、諸々の用事が済んで、屋敷に戻ろうと思ったところで、知った顔の面々と王宮の廊下で出くわしてしまう。できれば見たくなかった顔ぶれだね。

「お久しぶりです、ギルバート様。そんな嫌な顔しないでくださいよ」

「よくもぬけぬけと僕を罠に嵌めておいて、堂々とできるね」

「それは、もう何年も同じ釜の飯を食ったようなお仲間ですから、私達の宮仕えの辛さを察してもらえるかなと思ひまして」

僕に親しげに話し掛けてきているのは、アトリー家に従っている文官衆の面々だ。王宮内の色々な部署に配属されており、その情報網と事務処理能力の高さは中立派のアトリー家を支えている。

かつて国境沿いの監査を行う部署にいたときは、彼らと机を並べて膨大な書類を処理し、ときには偽名を使つてもに浮島を調査したりして、彼らの言うとおりに、同じ釜の飯を食った間柄であることは否定できないだろう、あのことが起きるまでは。

「そのお仲間を売つて主の娘を守つた感想はいかがなものかな」

「売つただなんて聞こえが悪いじゃないですか。結局は痛み分けみたいなものなんですから許してくださいよ」

「お前らと違って僕は痛みばかりだったような気がするけど気のせいかな」

「ところで、空賊討伐の話、聞きましたよ。辺境の悪妻狩りの次は空賊狩りですか」

「頑張つたのはバルトファルト男爵だよ。僕の功績なんて微々たるものさ」

「そう、バルトファルト男爵ですよ！ずいぶんと仲が良いみたいですが、どんな方なんですか？」

なるほど、会話の本命はリオン君だったか。

以前、秘密だから自分達で調べてみたら？と言ってやったことがあったが、改めて聞いてくるあたりからすると、満足のいく情報は集められなかったのだろう。

決闘騒動に続いて、空賊討伐でその武力を示したりリオン君の情報を集めているだけ、というならばいいんだが。

「彼は僕の秘密兵器だから、あまり探らないでほしいんだけど」

「別に男爵に危害を加えようなんてことじゃないですよ！私達も、大臣から、お礼がしたいので少し調べるよう指示されてるだけなんですから」

文官の話によると、僕がオフリー家の亜人集団と大乱闘をした翌日、クラリス嬢とその取り巻きがジルクともめ事を起こしたらしく、そこを上手く収めて、ジルクに一連の出来事の謝罪をさせたのがリオン君らしい。

なんか話だけ聞いてると、リオン君が主人公みたいな活躍をしているね。

「というわけで、ギルバート様にも大変お世話になりましたが、お嬢様もようやく立ち直りつつあるようなんです。私達も安心して夜に眠れます」

「そいつはよかったね。ここで嫌味を言うのはやめておいてあげよう」

「お気遣いいただきありがとうございます。でも、アンジェリカ様のほうは最近、男爵と少し距離があるようですが何かあったんですか？」
こいつら、しっかりと調べていやがるな。

最近調べ始めたみたいな口調しときながら、実際のところは、もう情報の裏取り段階に入ってるじゃないか。

「さあ？学生の頃なんて、定期的につるむ相手が変わるもんだらう」「ということとは、さすがにアンジェリカ様を男爵に当てる予定はなさそうですね」

「さすがに、一度決闘の代理人になったからといって、そうやすやすと心が動くような安っぽい女じゃないさ」

当然の話だ。実際のところは、この世界の主人公であるオリヴィアさんの獲物であるリオン君に、恋愛の意味で接近させないように注意しているというのが本音なんだけどね。

身分云々ではなく、主人公様の邪魔をして、結果的にあのゲームのように、妹が断罪されるような結末は避けたい。

「さすがにそうですね。ちなみに、婚約者はもうお決まりなんですか」

「僕」の方で用意を進めている。何か問題があるかな？」

僕がかつて結婚相手を紹介してやった辺境の貴族の家に、主人公様を養子に入らせるよう既に各種手続きの準備を進めているんだ。最終的には聖女様になるんだろうが、その前にリオン君とくつつけておけば、将来的にはリオン君の武力に加えて、神殿勢力にも睨みを効かせられるようになり、僕の将来は安泰だ。邪魔をされては困る。

「そんなに睨まないでくださいよ。我々は言われた通りのことをしているだけなんですから」

「それを言ったという主語は、大臣とクラリス嬢のどちらなのかな」
「・・・黙秘します」

まさか、あのアトリーのストーカー女、次の狙いはリオン君だとも言うのか!?

ええい、冗談ではない！釘を刺しておかないと。

「クラリス嬢とでは爵位の釣り合いが取れないじゃないか。主の娘が安く見られてしまうのは望むところじゃないだろう？」

「そこを考えるのは、我々のような下っ端の仕事じゃありませんから」
ある意味、なんて模範的な役人回答だろうか。腹の中では別のこと考えてます、つて僕が見破つてることもわかってるのに、すつとぼけてくるあたりが非常にいやらしい。

「よくもぬけぬけと言えるね」

「これ以上お聞きになりたいなら、大臣に直接お尋ねください」

「ここらが潮時か。以前、リオン君の力について、父上に言われたこ

とがふと思い出されるよ。

リオン君は、目端の利く連中や耳聡い連中にとっては、喉から手が出るほど欲しい存在だと父上は言っていた。

遅かれ早かれ、彼の争奪戦が始まるのは時間の問題だったのだろう。

リオン君は凄いな、主人公様の攻略対象であることに加えて、王国の大物貴族達もがこぞって彼に目を付けて攻略しようとしているということか。

というか、リオン君は、目を付けるだけならともかく、僕が知る範囲の中でもトップクラスにやべえ女とその信者に気に入られちゃったんじゃないだろうか。

頼むからしつかり彼と仲直りしてくれよ、主人公様！こればかりは、もう祈るしかない。

アトリー家にリオン君を取られでもしたら、派閥間の武力バランスが劇的に変わるぞ。

「僕は別に上司を出せなんて言っていないよ？」

「男爵のことが心配なら、ギルバート様がお嬢様に求婚してくれれば解決すると思いますよ」

「価値観が合わない。お互いが不幸になるだけさ」

「なに平民みたいなことを言ってるんですか。それに、2人とも、お互いに体内の粘液を晒しあった臭い仲じゃないですか。お嬢様と結婚して、また私達とも仲良くわいわいやりましょうよ」

僕のことを買ってくれているのはわかったが、僕が一番突っつかれたくないところに正拳付きをぶっこんできやがったな。

「ほう、誰のせいであんなったのかももう忘れたようですね。バルトファルト男爵から譲り受けた鎧で頭をぶん殴れば記憶が戻るかもしれないから試してみましよう。それとも、亜人どものように顔面と股間を焼かれるほうが好みかな？」

「じよ、冗談ですよ。ただ、我々も指示があれば動かざるを得ないので、恨みつこなしでお願いしますよ。それと、男爵がフィールド家、セバーグ家に、空賊退治の功績を使つて廃嫡を取り消すよう働きかけて

るらしいです。狙いはわかりませんが、それなりの金も流れているようです」

そう言つて文官達は逃げるように去つていった。

あの2人の廃嫡を取り消す? どういうつもりだろうか。

攻略対象どうして親密度が上がるイベントでもあるのか? ラーファン家の女に誑かされたままというのは変わらないままのようだけど……

あと、リオン君本人が意識しているのか否かはわからないが、アトリーも含めて、有力貴族の好感度を稼ぎすぎじゃないか!?

いや、それよりも今はアトリー家の動きか。もしクラリス嬢がアトリー家の実働部隊も総動員してリオン君攻略に動いたら相当やっかいだな。

というか、主人公様の恋愛が成就しなかった場合、世界つてどうなるんだ?

普通に考えれば、バッドエンド? ということは、まさかゲームオーバーで世界滅亡だなんてことになつたりしないだろうか!?

もしかして、今、僕は世界の滅亡の危機にあるかもしれないと気づいている世界で唯一の人間じゃないだろうか!? くそ、またしても懸案事項が増えたじゃないか。

ええい、当初はジルクにオリヴィアさんを押し付けようと考えたときにも邪魔をしてくれたが、ここでも僕の企てに立ちはだかるのか、アトリー家め。

しかも話がやっかいなのは、アトリー家の派閥は、公爵家の派閥とは別とはいえ、敵対的な関係ではない。

むしろ、オフリー家の親玉であるフランプトン侯爵派閥を抑えたいという意味では緩やかな協力関係にある。

おおっぴらに対立すればいい訳ではないのが実にもどかしい。

右手で握手しながら左手で殴り合う、いや、そんなに激しくしちやまずいな。

せいぜい、おなじコタツに入つてみかんを食べながら、その中にあ
る足で蹴りあうくらいか。

世界の危機だというのに、我ながらなんて緊張感のない例えをしてしまった。

というか、どうして僕は悪役令嬢の兄なだけなのに、世界の命運を気にしなければならぬんだらうか。理不尽だ!!!

「報告に参りました。よろしいですか」

「ご苦労だったね、話を聞こうか」

ギルバートから逃げるように去った文官達が足を運んだのは、ホルファート王国の大臣であるバーナードの執務室だった。

文官達が書類を差し出すと、バーナードは素早く内容に目を通し始める。

「バルトファルト男爵に婚約者はまだいない、ということだね。これは幸いだ」

「おそれながら、爵位の釣り合いはよろしいので？」

「爵位だけの問題なら強引にどうにかする手がないわけじゃないさ。それに、別にクラリスの相手とだけ考えているものではないからね。あの子が望むかどうかは、時機を見て聞くつもりだが。」

好感は持っているのだろうか、それが恋愛感情も含んでいるのかはバーナードにもわからない。

娘であるクラリス自身は手痛い失恋をしてからまだ日も浅く、次の相手を考えられるような心理状態ではないかもしれない。

父親としては、ジルクのとときのような二の舞は避けたいところであるが、一方で娘がジルクとの間に起こしたイザゴザをうまく収めたバルトファルト男爵に興味を持っているという話もあり、何らかの形でアトリー家として接触を図りたいところでもあった。

「でもせっかくなら、バルトファルト男爵をまた昇進させようとしているレッドグレイブ家の動きは利用していこう。くつつくまでに子爵に上げれば釣り合いの問題はクリアできる」

「フィールド、セバグも動いていますますが、そう簡単にいきますでしょうか。過去の事例を探しても、卒業までの3年で、妾腹生まれの、嫡

男でもない男子が子爵にまで上り詰めるといった事例は見当たりません」

文官達も過去の特筆すべき昇進事例等を色々と調べているが、現時点のリオンのようなサクセスストーリーですら見つけることはできていない。

「では、ひとまずレッドグレイブとは別ルートで更なる昇進の根回しを進めつつ、最新のエアバイクを送っておいてくれ。うちで持っているレース場を使ってもらえれば、うちやクラリスとの接点も自然と増やせる。並行して、バルトフアルト男爵の武力を使って功績にできそうな賊や紛争の案件のリサーチも頼む。英雄に仕立て上げれば色々と便宜を図りやすくなるからね」

「かしこまりました。ですが、悠長にしているとギルバート様がどこかからお相手を見つけてきてしまいませんか？」

「それなんだが、ギルバート君は“公爵家で”とか、“うちで”と言っていたかい？」

「いえ、たしかご自分で用意を進めているとのことでした」

文官の言葉を聞いて、バーナードは口元に手を当てて、今まで見てきたギルバートの行動やそこから推測される行動原理を考えはじめる。

「ということは、彼が学生の頃に結婚の面倒を見た辺境の貴族を使う可能性が高いね。関係しそうな家を調べておくように」

「レッドグレイブ家の派閥は調べなくてよろしいのですか？」

文官達としては、過去にギルバートの行動の詳細までは知らないが、大物貴族が手早く新たな勢力を取り込むときに、自派閥の関係者との婚姻を用いることは非常にオーソドックスな手口であることから、そちらのほうに気になっていた。

だが、バーナードの口から期待した回答は返ってこなかった。

「無視していいとは言わないが、優先度は下げてかまわない。彼の弱みは実家の派閥とのつながりの弱さだ」

「弱さ、ですか？」

「ギルバート君は、在学中は下級貴族の面倒を見ていることが多く、学

園卒業後はすぐに私達と国境沿いの監査に明け暮れていたからね。お気に入りの男爵を託せるような派閥の仲間が多いとは考えにくい。派閥の管理は一朝一夕でできるものじゃない。金と情と力を巧みに使い分けて少しずつ関係を構築しなければ些細なことで崩れてしまう」

「つまり、ギルバート様は公爵家としてバルトファルト男爵を取り込もうとしているわけではないと？」

「大まかな承諾は取っているだろうが、公爵家として動いているならとつくに自派閥から強引にでも女性が宛てがわれてるよ。それが現当主のヴェンスという男さ。並みいる競合相手を押しのけて娘を王太子の婚約者の座に就かせた手腕は伊達じゃない。ここで公爵自身が動かないのは、決闘騒動で弱体化する一方の派閥の再編で忙しいからだろう」

バーナードは、部下に自分の推測を聞かせながら、部下達にも聞かせられないもう一つの理由も心の中でつぶやく。

(それに彼は王妃様から大目玉を喰らった前科がある。実家の手元にある貴族を使うのには躊躇いがどうしても出るだろうしね)

「大臣、なんだか楽しそうな顔をしていませんか？」

「親馬鹿かもしれないが、娘には幸せになっほしいじゃないか」

「それだけには見えませんが・・・」

「バルトファルト男爵はほぼ単機、単船で空賊を圧倒したそうじゃないか。彼が手に入れば、我々宮廷貴族と領主貴族の関係も変わるかもしれないよ。ふふ、ギルバート君が夢中になるわけだ。あ、男爵の戦闘記録も調べておいてね」

「あの・・・宿題がどんどん増えてるんですけど・・・」

文官達が気まずそうな顔を浮かべながら、恐る恐る呟いた。

それを聞いてバーナードはしばし考えて、にこやかな微笑みを浮かべる。

「時間外勤務手当の予算、ぶん取ってくるからよろしくね」

「「あんた鬼ですか！」」

こうして、アトリー家の文官達の残業が、さらに増えることが決

まっただであった。

第27話 あいつを兄とは呼びたくねえ！

先日引き続き、今日も僕はリオン君の昇進に向けた推薦やオリヴィアさんの養子縁組の件で王宮内の各部署をハシゴしている。

本来なら家臣に仕事を任せてもいいのかもしれないが、2人ともこの国では相当特殊な存在であり、各部署の担当者個人の裁量では処理に困るだろうことが想定されるので、案件に困った事務担当者が手元で意図的に放置するのを避けるために、僕が直接的に向いている。

僕が出てくれば、事務担当者はすぐに上役を呼んで対応を上司に押し付けようとするので、話はスムーズに進むし、国境沿いの監査をやっていた頃は僕も王宮の一役人だったので、それなりに見知った顔もいて、根回しも一見すると順調に進んでいるように思える。

そして、次の用事がある部署に向かって王宮内の通路を歩いていたのだが、T字路のようになっていいる箇所、壁の向こう側、死角になっているところから、突然、誰かが飛び出してきた。

「きゃあっ！」

高音の悲鳴を上げながら、僕と出会い頭に衝突してしまった相手は小柄な女性、というか少女というような年齢だろうか。あのケモナー学園にもおそらく入学前くらいの年齢、前世でいえば小学生から中学生くらいの容貌だ。

ぶつかってしまった女の子は、衝突の際の運動エネルギーによって跳ね飛ばされそうになるが、とっさに伸びた腕の首を掴み、引き寄せることで、後頭部から転倒するのを防ぐことができた。

これが通学途中の交差点で起きたトラブルだったら、ここから学園ラブコメが始まってしまいかもな。

いや、その時不思議なことが起こった、とばかりに女性の下半身に向けて顔面からダイブ、みたいなT.O.L.O.V.E.が始まらなくてよかったか。

転倒を防いだ、緑色の髪をツーサイドアップにまとめた女の子は、視線を落ち着きなく動かしながらも、いつの間にか僕の腕を華奢な手でがっしりと掴んでいる。

身なりはしつかりと綺麗に整えられており、どこかの貴族家の令嬢なのだろう。

贅沢を言うなら、ぶつかりそうになったのが、騎士家出身の魔道士とか、平民出身のメイドさんとかだったらよかったのに。

あれ？なんかどこかで見たような、見なかったような……だが、誰だったか思い出せない。

女の子は緊張したような素振りをしながら口を開く。

「ギ、ギルバート様……申し訳ございません！私ったら大変な失礼を……」

「僕は気にしていないよ。君こそ大丈夫かい？怪我は無いようだからよかつたけど、急に飛び出したら危ないよ？」

「そんな……私の心配まで……噂と違ってお優しいんですね」

お互いの前方不注意でぶつかりそうになったから、機械的に安否を気遣ったのだが、どういう脳内補正がかかったのだろうか。

とつさに前世基準で考えて、こちらの過失がゼロではないから気を使ってしまっただけなのに。

しかも、噂ってなんだよ、噂って！少しでも非があれば問答無用の無礼討ちするような人間だと思われているのか？

辺境の悪妻狩りの実績に、色々な尾ひれが付いたのだろうか、僕は別に大量殺人鬼とかじゃないよ!?

あ、でも通り魔呼ばわりされてるんだっけか。まったく心外だな。というか、僕、自分で名乗ってもいないのに素性を知られてるって

嫌だな。良くも悪くも有名だとわかつちやいるけど、なんだか気持ち悪い。

「危ないから、角では気を付けるようにね」

「はいーありがとうございます。ではまた今度！」

よく訓練されたように見える屈膝礼をして、女の子は、素早くこの場から立ち去っていった。

きちんとした教育を受けているのだということとは仕草からよくわかる。

あれ？また今度ってどういうことだ？

その数日後の夜、僕が食事を終えた頃に、父が王宮から戻ると、自室に来るよう言われた。

・・・父の執務室に呼ばれるときつて、たいていは何かが起こるときなんだよな。

そして、疲れた表情を隠せない父の口から告げられたのは、やはりオフリー家の対処についてであった。

「オフリー家を殲滅し隊？」

「オフリー家討伐部隊だ」

父からの説明を、前世の世界にいたアイドルグループ風に要約してみたのだが、その小ボケを全く拾ってもらえず、ストレートに訂正されてしまった。

「わざわざ討伐部隊を編成する必要があるのですか？空賊とつながっていた証拠が明らかである以上、さっさと出頭命令を出して拘束すれば足りるでしょう」

「明らかすぎたのだ。奴の親玉であるフランプトンがあっけなくオフリーを切り捨てた。出頭途中に飛行船ごと消す気なのかもしれないと陛下が気にしているようだ」

「それで陛下は、公爵家の艦隊でオフリー領に殴り込みをかける、と仰せなのですか」

「いや、今回はフランプトンの派閥への配慮で外形上は、監査の形を取り、その場で身柄を押さえる。侯爵家以外の派閥から広く部隊を送り、確実に王都に引っ張ってくる。その中心となるのは・・・アトリーだ」

なるほど、うちでも、侯爵家でもなく、中立派を真ん中に据えて、その周りを力のある家の部隊で固めて、非フランプトンの連合艦隊を編成するということか。

「ただ、オフリーにはきっちり落とし前は付けたいだろう、ギルバート」

「そりゃそうですけど・・・」

「陛下からの伝言を預かっている。ロストアイテムで大暴れしてこい、だそうだ」

「あの鎧を使ったら弱い者イジメになってしまいますよ?」

「あの陛下が、ただ単にお前の報復に手を貸すような人間だと思っっているのか?」

言われてみれば確かにそうだ。

表向きの狙いの裏に、真の目的を隠して悪たくみを行い、一石二鳥どころか、三鳥、四鳥を達成しようとするのが陛下だ。

敵国であるラーシエル神聖王国からは曲者ローランドなどと呼ばれているくらいだから、他国から見ても相当手ごわい人物だと思われるのだろうね。

「空賊どもと繋がっていたオフリーが侯爵家から切り捨てられた今、どんな行動に出るかは予想もできん。その結果、集結した非フランプトン勢力が大打撃を受けたら、結局のところフランプトンだけが高笑いするだけで終わってしまう」

「要は、何が起きても非常識じみたロストアイテムの力でねじ伏せて、被害を最小限にしろ、ということですか。陛下も無茶を言いますね」
父の表情が苦々しい。

リオン君から、強大な鎧を譲り受けるまではよかったし、体面上はオフリーの非礼に対して公爵家が落とし前を付けさせる機会まで用意されたが、

蓋を開けてみれば、ここで僕達がいっかりと結果を出さなければ、苦しむのは自分達ばかり、ということにもなりかねない。

オフリーの討伐作戦が終わった後のことを考えれば、被害を最小限に抑えて圧勝しないと、作戦後の派閥間のパワーバランスがフランプトン侯爵家の側に一気に傾いてしまうかもしれないのか。

特筆すべき戦力による力任せの作戦遂行つてもはやス○ロボの世界だね。しかも性能の高いほうのアロガンツは分岐した別ルートにいるようなものだ。

「リオン君がいなのが厳しいですね」

「難しい意見だな。レッドグレイブは成り上がりの男爵の力を借りな

ければ、落とし前すら付けさせられないくらい弱体化したという見方が出かねん」

「それもそうですね、弱体化・・・耳の痛い話です」

「そうか。お前もそう思うなら、一つ見合いの話があるのだが聞いてくれるよな?」

「父上、そういう誘導の仕方はいささか狡いですよ、もう見合いはコリゴリです」

「何だ、相手がどこかくらいは聞かないのか?」

聞いたところで何かプラスになるような情報が来るとは思えないのだが、父がどうしてもつたいぶったような言い方をするのかは気になるね。

「このタイミングで僕に見合いを求めるなんてどこの物好きなんですか?」

「マーモリア家だ」

「はいいい!?ジルクのやつの実家ですか!」

「いや、話を持ってきたのは本家のほうだ。アトリーの報復が、陰に陽に色々あるせいかな、ずいぶんと参っているらしい」

あ、そういえばジルクの実家は分家だったんだっけ。

なんか、元王太子の乳兄弟という肩書があるせいでもずいぶんとデカイ態度を取っていた気もするけど、きつと本家からしたら利益ももらすけど、目障りだったんだろうな。

おっと、実家の力を背景にオラついていたのは僕も同じか。危うくブーメランになるところだった。

「それは本家にとつては災難でしょうが、どうしてそこで見合いとなるのですか?」

「今の公爵家の影響力は、今までとは比べ物にならないくらい低下していることは理解しているな?情けない話だが、派閥はガタガタだ。他の有力貴族もあの決闘騒動で力を落としている」

「そのおかげで、フランプトンはやりたい放題、調子に乗り過ぎたオフリーがああざまなのは溜飲が下がるところですが・・・まさか、うちの力を回復させるために、ということですか!」

「政略結婚というのはそういうものだろう。それを契機にして、異なる勢力が手を組む、至極真つ当なことだぞ」

父上が物凄くド正論をぶつけてくる。

「まずいな、こういうときは、こちらも何か正論をぶつけないと押し切られてしまいかねない。」

「そうすると、アトリーとの関係が悪くなりませんか？僕が言うのもアレですが、今は微妙な関係ですよ」

「そこは私が話を付ける。今のままフランプトン派閥の勝手がまかり通るのは、バーナードにも都合が悪かろう。宮廷貴族として古い歴史のあるマーモリアと手を結べれば、牽制としては十分だ」

牽制で結婚させられる本人はたまったものじゃない・・・いや、それを言い出したらあの王妃様に正面から喧嘩を売ることになってしまうな。

「あれ、そういうえばマーモリア本家に年頃の娘なんていましたっけ？」
「いい質問だな、ギルバート」

父上が突然、前世で解説おじさんをしていた元国営放送のアナウンサーみたいなことを言い出したぞ。

「これが面白い話なんだが、マーモリアの連中は手頃なのがないからと、分家の娘を側室でいいから、と差し出してきおった。よほど困っているようだな」

「分家の娘、ですか？まさか・・・」

「そう、乳兄弟の妹だよ」

あれ？ジルクの妹っていうといくつだ？今年、あいつがケモナー学園に入学したばかりだから、その妹はもつと年下だよな。

「まだ子供じゃないですか！僕といくつ離れてるかわからないですけど、さすがに引きますよ」

「そんなもの、貴族の世界では珍しくもなからう！」

たしかに、親子ほど年の離れた相手との結婚だって政略のためならありうる世界だ。

でも、そんなのおかしいですよ、パパ上さん！いくら悪役令嬢の兄だからって、マジで悪徳貴族みたいなことをさせられるのは嫌です！

「正妻や婚約者もいないのに、側室から決めるなんておかしいと思いますが」

「正妻がほしいなら、見つけてきてやるぞ。先日の空賊退治でお前の人気はずいぶんと上がっているらしいからな」

「リオン君からもらったロストアイテムで挙げた功績に寄って来る尻の軽い女は愛せませんね。というか、相手の子だって学園に入る前にいきなり側室扱いされて、しかも相手は僕みたいな貴族の皮を被った荒くれ者に嫁ぐのは嫌でしょう」

「ギルバート、お前・・・被っているのか」

「そつちじゃないですよ!」

父が意地悪そうな笑みを浮かべて僕の下半身を見ながら聞いてきた。

いや被ってねえし!ズル剥けだし!僕が必死に嫌がるから、パパ上もイライラしてきたのかもしれないな。

「幸いなことに相手はたいそう乗り気らしいぞ。なんでも王宮でお前に助けてもらったときに一目ぼれしたらしい」

「そんな愉快的イベントに心当たりは無い・・・ん?」

そういえば、王宮の通路でぶつかりそうになった女の子・・・あれがジルクの妹だったのか!?

いや待てよ?あの子、最後に「また今度」って言ってたよな。ということは、あの時点でお見合いの話は進んでいたはずだから、あのときの衝突も実はわざとぶつかってきて、こちらを探ろうとして来たというのか。

なんて腹黒いんだろう・・・うちの陰険眼鏡メイドといい勝負じゃないか。さすがジルクの妹だな。

冗談じゃないぞ、このままだとあの緑色を兄と呼ばなければならなくなってしまう・・・

くそ、あいつはどれだけ僕に迷惑をかければ気が済むんだ・・・

ギルバートがマーモリア兄妹に頭を悩ませているところ、オフリー伯爵領にある領主の屋敷では、伯爵本人が自らの命のかかった身の振り方に頭を悩ませていた。

「息子はいまだに貴族出身の女性と結婚できず、娘はフィールド家の跡取りと婚約が解消となり、家としては未だに貴族の血筋を入れられていない。しかも、娘は王妃に無礼を働いたにとどまらず、囲っていた巫人があの公爵家の赤い通り魔の逆鱗に触れてしまい、さらに空賊どもどの繋がりを示す証拠まで押さえられてしまった・・・フランプトン侯爵にも切り捨てられた・・・もうどうしろというんだ！」

怒りに任せて伯爵は手元のワイングラスを床に向けて投げ付けた。

グラスに入っていた液体は、床に敷かれた高級そうな絨毯に吸われて、大きな赤い染みが広がっていく。

「陛下直筆の命令書があった以上、あの場で公爵家の艦隊から空賊の身柄を奪うことはできません」

「それでもどうにかするのがお前ら脳筋どもの仕事だろうが！」

伯爵の前で釈明を行うのは、リオンが空賊ウイングシャークのメンバーの身柄を押さえたときに、その引き渡しを要求したものの、国王の命令書を盾にしたギルバートによって証拠隠滅を阻まれた部隊の指揮官である。

「空賊の残党に公爵家の艦隊の居場所をリークしたり、自作戦等の知恵も貸したのですが成果は出ませんでした。作戦自体はうまくいきかけていたのですが、いないと思われたロストアイテムの鎧の同型機に全てをひっくり返されたようです」

「金にもならない、役にも立たない言い訳を私に聞かせるな！」

「申し訳ございません」

しばらく、不毛ともいえる八つ当たりが続いていたのだが、ある意味で空気を読まないノックオンが室内に響く。

そして、入室が許可される前に一人の男が軽い足取りで入ってきた。

「お困りでいらっしやるようですね、オフリー伯爵」

「神聖王国の商人が今さら私に何の用だ？自分達の痕跡を消しにでも

来たか！」

入ってきた、伯爵と顔見知りと思われる髭を生やした壮年の男に対して、伯爵が感情に任せて罵声を浴びせる。

一方で、飛行船の指揮官は、この入ってきたスーツ姿の男を見て違和感を覚えていた。

(部屋の外には護衛の騎士達がいたはずだ。あつさりが入ってきたということは、手練れの護衛を音もなく無力化させたということか。こいつ、ただの商人ではないな)

「そうおっしゃらないでくださいませ。今までの取り引きを通じて、我ら神聖王国は伯爵領の製薬技術を高く評価しております。単刀直入に申しませう。神聖王国にいらっしゃいませんか？ 諸々条件はございますが、歓迎いたしますよ」

「ほ、本当か、ガビノ殿！ わかった！ 金でも技術でも出さず、いやあ助かった・・・」

ここに現れたガビノという男は、飛行船の指揮官の推測したとおり、商人などではない。

正体は、ホルファート王国の敵国であるラーシエル神聖王国で爵位を持つ貴族であるが、実体は色々な国で表沙汰にできない活動を行っている工作員でもある。

神聖王国内で利用される薬物類の調達先の1つがオフリー伯爵領であったため、両者につながりがあるのだが、当然ながら、今日の目的はオフリー伯爵を助けるためではない。

ここ数年で、国境沿いの王国貴族のガードが急に固くなり、神聖王国の情報収集や工作の進捗が悪くなっていた。

今までは、悪妻の散財等に苦しむ国境近辺の下級貴族は格好のターゲットだったのに、その悪妻達がどんどん姿を消していたのが原因であった。

神聖王国側は、当初は宿敵レパルド連合王国からホルファート王国に嫁いだ腹黒姫ことミレーヌの仕業かと思われたのだが、調査を進めると、予想外の存在がいた。

国内の引き締めを強めて悪妻達を駆逐するべく動いていたのが、形

の上では中立派閥のアトリー家なのだが、そこで活発に動いていたのは、当時の王太子の婚約者の実家であるレッドグレイブ家の跡継ぎであるギルバートであり、さらには背後でホルファート王国国王である曲者ローランドと繋がっているようであった。

さらに調べてみると、ギルバートは、学生の頃から辺境出身の貴族の跡継ぎ達に対して、公爵家の屋敷で働いていた女性達を宛てがって結婚させていたことが判明する。

これを知った神聖王国の工作部は、一気にギルバートへの警戒心を強めた。

悪妻の散財や悪辣な結婚条件の履行のために財政的に苦しむ辺境の貴族達は、神聖王国の工作員にとっては格好のターゲットだった。

工作員達には縄張りのようにも思っていた。それを片っ端から潰された恨みは強い。

たしかに、王国の学園で起きた決闘騒動による王太子の婚約解消を契機に大きく政治的な影響力を落としてはいるが、逆に新たに発見されたロストアイテムやその使い手を取り込みつつあり、軍事力だけは強化されているといってもいい。

「ちよつと待つてほしい。ガビノ殿、と言ったか？」

「はい、いかがしましたか」

伯爵と話を進めるガビノのことが怪しく思えて仕方なかった飛行船の指揮官が口をはさむ。

「ありがたい話ではあるが、それだけでラーシエル神聖王国が我らを助けてくれるのはいささか過保護に映る。他にどんな目的があるのかお聞かせ願いたい」

「ごもつともな疑問です。オフリー家、いや貴男様に最も納得のいく理由としては、好き勝手させたくない相手が我らと同じだということだけ申しあげておきましょう」

「・・・赤い通り魔か？」

「その二つ名、何度聞いても面白いものですね。我ら、外国の人間ではなく、自国の人間がそう呼ぶのですから」

今回、ガビノがオフリー伯爵領に派遣されたのは、王国側がフラン

プトン侯爵派閥以外の有力貴族達を集めた連合部隊を結成してオフリー伯爵の捕縛に動くのに際して、レツドグレイブ家の部隊とロストアイテムも出てくるだろうとの情報を得たからである。

（腹黒姫と仲が悪いのは結構なことですが、今後、フレイザー家と手を組んで我らとの国境沿いに出てこられても困りますからねえ。それに我らの活動を邪魔してくれたお礼もして差し上げませんと。曲者ローランドの隠し腕と言ったところでしようが、強大なロストアイテムが自分達だけのものでないことを教えて差し上げましょう）

第28話 私をオフリー領に連れてって

男は悩んでいた。

かつて、この男は王太子の乳兄弟として、大臣の娘の婚約者として、権力の中枢へと至りうるポジションにいた。

その地位は、彼にとって誇りであり、自信の源でもあったが、同時に、重荷でもあり、彼の精神をむしばんでもいた。

後に、その苦しみをほぼすべて的確に理解し、包み込んでくれた女性に出会うことができた結果、彼はこれまで自分が持っていた名誉や将来の地位等の全てを投げうってでも、その女との愛を選ぶことを決めた。

結果として、国内でも古い歴史のある家の跡取りという立場を失っただけでなく、ぼつと出の成り上がり者と侮っていたロストアイテムの発見者に完膚なきまでに叩き潰された上に、

自分が苦しんでいるときに時々気晴らしをするために華やかな場所に連れ出してくれていた兄貴分的な者には折れた足をグーで殴られ、

学園祭では元婚約者の取り巻き集団から強烈な物理的報復を受けたが、彼は、今の自分の状況が嫌いではなかった・・・つい最近までは。

彼と同じ女性を愛した結果、同じように愛以外のものを失った4人の男達のうち、2人は、空賊討伐という功績を上げて、廃嫡を取り消される見込みだという。

残り2人のうちの1人は王太子という地位こそ失ったものの、王族、しかも王の長子であるという事実に変わりはなく、影響力が失われたわけではない。

もう1人は、この国の中で剣の使い手として最高峰の地位である剣聖に次ぐ、剣豪という地位を持つ者であり、貴族社会の地位とは別に、純然たる武力は変わらず有している。

そして、残されたのが社会的な地位を失い、愛する女性以外のものを持たぬ自分であった。

男の名はジルク・ファイア・マーモリア。繰り返しになるが、彼は悩んでいた。

「まずいですね。仮面とマントを調達して城を抜け出し、どうにかブラッド君達に合流して功績を上げようと思ったのに、予算申請はあっさり却下。このままだと私一人が廃嫡されたまま取り残されてしまいます・・・何とかして私も功績を上げないと・・・」

修学旅行の準備のために、人がまばらにしか歩いていない学園内の廊下を歩きながら考え込むジルクであったが、ふと視線を上げた教室の、壊れたドアを見て閃いた。

「そうです！オフリー家の討伐部隊に参加すれば、きっと功績を上げられるはずです！」

そのドアは、学園祭で、亜人の使用人集団と、とある男が大乱闘を繰り広げた末に破壊されたドアである。

そして、タイミング良く近くの窓から見えたのは、一人で亜人の集団を魔法と暴力で血の池に沈めた、この国でも有名な男であった。

「おや？どうしてあの方がこんなところに・・・しかし、なんといい機・・・オフリーと言えば、あの方に頼むしかありませんね！」

「・・・というわけなんです」
「どういう訳だよ。」

学園から、先日の学園祭で破壊された学校施設の修理費について話をしたい、というので、“若様が直々に出ていく必要はない”と止めてくる家臣達を振り切って僕はケモナー学園にやってきていた。

こつちに非はないと思っっているが、大方、学園側もオフリーに請求しても、支払われる前に討伐されてしまいかねないから、先に僕の方に話を持ってきたのだろう。

ちなみに、僕の方に請求すること自体が失礼だと怒る家臣もいたし、自業自得だとあざ笑う性悪眼鏡もいた。

本来なら、忠実な家臣たちの言うとおり、僕本人が出向く必要はないだろうが、個人的に我が母校ケモナー学園に問いただしておきたい

ことがあつたから、ちょうどいい機会だった。

その話題とは、学園の教師が、オリヴィアさんがオフリーに嫌がらせを受けている現場を目撃したにもかかわらず、それを見過ごしたというものだ。

王国の将来的な変革のために、政治的な意図をもって入学させたこの世界の主人公であるオリヴィアさんを、リオン君が接触するまで放置しただけでなく、彼女への嫌がらせまで見てみぬふりをした。

学園の幹部は、オリヴィアさん入学の背景を知っているはずだから、そこを問いただしておきたかつたというわけだ。

将来的にはあの乙女ゲーのシナリオのように、聖女となったオリヴィアさんの武力的なケツ持ちのポジションを僕は狙っているので、先にそういう実績を作る意味もある。

とはいえ、話し合いの結果としては、トカゲのしつぽ切りで、嫌がらせを止めなかった教員の解雇と、幹部陣の減給という、前世でも見たことのあるようなあっさりとした処罰で終わってしまった。

オリヴィアさんの取り扱いの件についても、学園側は何とも言えないので、王宮に聞いてくれと開き直られてしまった。

リアクションから推測するに、自分達は言われたとおりにやっただけだ、というスタンスなのだろうな。

そんなシリアスな気持ちでいたのだが、学園内を歩いていたところに、いきなり横から現れたジルクに足を掴まれ、頼みごとをされている。

「要するに、赤と紫の廃嫡が解かれて、水色と違って肉体的な強さもない自分だけが今のまま取り残されるのを危惧していて、その状況から脱却するために功績を上げたい、そのためにオフリー討伐部隊に参加したい、ということか」

「さすがギルバート様、話が早い。そのとおりです」

「そもそも、お前らの自業自得だろ」

「ぐっー！」

「そもそも、決闘相手の兄である僕に頼むなんてだいたいぶおかしい。筋が通らないだろう」

「ぐぐ・・・！」

「学生は学生らしく、修学旅行で思い出作りでもしてこいよ。何も考えずに遠くの浮島に行ける機会なんて、まともな人間は、学園卒業したらそんな暇ないぞ」

「そもそも、どうせマリエさんとは違う目的地なので、旅行の意味なんてありません」

「馬鹿王子の護衛でもしてろ！」

「そこは王宮から護衛が来るから大丈夫です！」

ジルクは、僕の足に全力でしがみつき、振り払おうとしてもガツチリとホールドしてきているせいで、ちっとも僕から離れていない。

「お前なんか来ても、僕にも、うちにもメリットがないんだよ！」

「それはそうなんですけど、だから恥を忍んでこうしてお願いしているんです！」

「そもそもこれ以上、生き恥をさらすなよ。というか、嫌だよ。どうしてもって言うなら、アンジェの婚約をぶち壊したあの黄色い汚物の首を持ってこい！そしたら、討伐部隊の参加どころか、廃嫡取消も働きかけてやるぞ」

「それはできません！」

「そこは即答かよ。」

「よし交渉決裂だな。お話は終わりだ！帰れ！！」

「帰れません！このままでは殿下の腹心としての立ち位置も危うくなってしまうんです！」

「こども開き直って保身を語られると逆に清々しく思えてくるな！」

「こいつ、腹黒と馬鹿の属性を併せ持っているのか!？」

「お前の立ち位置なんて僕が知るかああ！うちはお前らのせいで、危うくなるどころか、アンジェの婚約が解消になって、長年の苦勞が台無しになったんだぞ！」

「私だって婚約解消になりましたよ！」

「お前のはお望み通りというか、自業自得じゃねえか！あ、そうか、お前ら婚約クラッシュャーズは、何かを壊すのが得意だからオフリーもクラッシュュしに行きたいのか？」

「ちよつと！きつきから私達に解消、解消って言ってますけど、むしろ、きちんと結婚が成立した家庭をあちらこちらで壊して回ってたのはどこのどなたですか！」

婚約解消を連呼されて少しイラついた様子のジルクが反撃をしてきた。こら、人のことを家庭の破壊者みたいに言うんじゃない。

確かに率先して、悪妻の家庭をぶっ壊す！とばかりに、辺境の領地経営を蝕んでいた性質の悪い女達を排除してたけど！

でも僕はバーコード風なデザインのマゼンダ色仮面じゃないんだぞ！

淑女の森のやつらは、きつと、おのれギルバート！とか思っていたかもしれないね。

「あれは国のため、ひいては妹のためだ。お前らの暴走と一緒にするんじゃない」

「もう頼みますよ、もうギルバートさんしか頼める人がいないんです！」

「そもそも、僕を頼っていい側の人間にカウントするのおかしいぞ！まったく兄妹そろって僕に迷惑をかけやがって」

「え、兄妹？」

「僕に見合いの話が来たんだよ、しかも、よりにもよってお前んちの本家からだ。その上、側室でいいからもらってくれって、なりふり構わずときたもんだから僕も大変なんだよ！」

「え・・・ギルバートさん、大丈夫ですか？あの子、腹黒ですよ？」

「それは、お前が、他の人に対して最も言っではいけない台詞だな」

「ホント、そのとおりですよ。妹の足を引っ張って楽しいですか、屑兄？」

横から聞こえてきた聞き覚えのある女の子の声があった方向に、僕とジルクは振り向いた。

予想通り、先日、僕が王宮内の曲がり角で衝突事故を起こしそうになったところを助けた、緑色の髪をツーサイドアップにまとめた女の子がジルクをジト目で睨みつけている。

自分への嫌悪を込めた視線に、目を逸らして上下に動かしたジルク

だったが、しずかに息を吐いて気持ちを整理すると、妹の名前を呼ぶ。「ジュリアですか。ここは学園ですよ、どうしてあなたがここにいらんですか?」

「ギルバート様を尾行してたんです。せっかく運命的な出会いを演出できたのに、人の恋路を邪魔するようなら馬に蹴られて泥沼に沈んだまま浮き上がってこないでください」

尾行してたのかよ!悔しいことに全く気付けなかったぞ。この子、アトリー家のストーカー女と仲良くなれる素質があるんじゃないかなろうか。

というか、先日のおしとやかぶったブリっ子ちゃんのしゃべり方は姿を消して、やさぐれたような雰囲気すら出している。やはりこういった他者の心をえぐっていくような話し方が本性だったか。

「おや、先日のお淑やかな素振りやはり演技だったのかな、ジル子ちゃん」

「ジュリアです〜その屑のせいで、猫を被っても意味がなくなっちゃいましたからね〜改めまして、僕がジュリア・フィア・マーモリア。残念ながらその緑虫の妹です」

「初めは驚いたが、ネタとしてはまあ面白かったよ、とりあえず、いい子だからその婚約解消軍団その2を連れて帰ってもらえるかな?」

「やめてくださいよ、そんな悪意のあるグループ名!」

文句の多いやつだな。馬鹿王子の腹心がお望みだっけ言うから、番号は2番にしてやったというのに。

「えー!もうちよつと僕とお話しましょうよ、ギルバート様の未来の2号さんですよ」

「そろって2番手をぐっ所望とはさすが兄妹だね。だが、あいにくだけど、この話は無しだ。君みたいな子供を嫁にするほど悪い貴族になつたつもりはないんでね」

「数年もすれば、僕だっけ出るところは突き出して、きつと色気と可愛らしさが背德的に同棲しているいい女になりますよ!それを好き勝手できるんだから、青田買いまするなら今ですよ?」

ジル子ちゃんが、ウインクしながら、まだ幼さの残るフォルムの体をくねくねさせるが、まったくそそらない。

というか、そんな青田買いは、人としてやってはならない行いだと思うのは、僕の価値観が前世由来だからだろうか。

「価値観が違うね。僕は、地味でも性格のいい子と一緒にになりたいんだ」

「いいえ、きつとギルバート様には、人を欺いて高笑いできるくらいの腹の座った女が似あうはずです！」

僕にお似合いなのは性格破綻者だとこの子は思っているのだろうか。

「だって、ギルバート様が国境沿いで屑女達を消してたのって、結局はアンジェリカ様を支える予定だった公爵家やご自分の首が締まらないようにするためですよね!?僕、自分のためなら平然と他人を蹴落とせる腹黒さを感じて、この人なら尽くしてもいいかなって考えたんです」

一面的には真実を見抜いている辺りは、さすがジルクの妹といったところだろうか。

だが、僕のことをずいぶんと酷い人間だと思っっているようで、そこがどうにも悔しい。

「勘違いは困るよ、王国のために尽くすのが家臣としての務めさ」

「それにギルバート様の2号さんなら、周りの女達は、むしろ政略的な背景じゃなくて、僕に愛があるから側室にしたって思う人が出てくるんですよ。そうすると、爵位だけ立派な家の女達にもマウン트가取れるから、学園でも、貴族社会でも一気に楽できるじゃないですか」

「ゴミみみたいな女どもの腐った嫉妬をぶつけられるという負のオマケもあるような気がするが、それよりもこの子は今まで貴族社会でどんな目にあつたら、ここまで考え方が歪むのだろうか。」

なんか愚痴くらいは聞いてあげたほうがいいのだろうかと思えてくる。

「もつと恋愛に恋とか愛があるって夢見てもいい年頃だと思うけどね。それに、社交というものに背を向けてる僕にそれだけの価値があ

るとは初耳だ」

「そりゃ以前は、公爵様とアンジェリカ様に社交を押し付けて、自分は好き放題やってると陰口を言う人は多かったみたいですけどね」

「仕事熱心な男と違ってほしいね。その辺りはジルクもよく知っていると思うんだが」

「パーティーやお茶会が好き女性達には理解されませんよ。ですけど、辺境の屑女達を次々と粛清して、決闘騒動の後は、強大なロストアイテムを持つバルトファルト男爵と親しくしたり、学園祭ではオフィリーの専属使用人達をまとめて血の池に沈めたり、空賊を討伐したりと、ギルバート様の武勇伝はとにかく目立つんです」

「後半は、ほとんどリオン君がすごいって言うだけのようにも聞こえるけど」

「この屑兄達の心も体も、下手したら立ち上がれないくらいにまで叩き潰したバルトファルト男爵もすごいですけど、その男爵すら抱え込もうとしているギルバート様の女というだけで、嫉妬されたとしても報復怖さに、周りの女達は下手に手出しできないって判断するはずなんです」

まるで僕をフロント団体の背後にいるケツ持ちの反社団体のように言うのはやめてほしい。

ん？でも、聖女になった主人公様のケツ持ちになるのを目指しているという意味では、公爵家を武力的な後ろ盾にさせようとはしてるともいえるか。

ただ、このジル子ちゃん、やたらに他の女達への対抗心が強いな。「そこまで考え方が曲がるって、きつと君もその屑のせいで苦労をしたんだろうことはわかった。愚痴くらい聞いてあげるから、もうお家に帰りなさい」

「それなら私ごともらってくださいよ。さつきも言いましたけど、他の女への優越感をくれるギルバート様のためなら、僕も尽くしますんで。お望みなら、恥ずかしいですけど噂に聞いたアレだってやりますよ」

「えっ？」

嫌な予感がする。待て、それ以上は口にするのはやめるんだ。

「本家の人から聞いたんです、ギルバート様は自分の女に、その…裸エプロンを強制して辱めるのが好きだって…」

ちよつと待てええええええええええ!!!なんでその話が出回ってるんだよ!しかも、微妙に尾ひれが増えてるぞ!

あくまで合意の上で、相手がちよつと恥ずかしがっているから楽しいんじゃないか!

辱めて楽しむなんて歪んだSっ気持ちみたいと言っちゃいかんですよ。

というか、話を広めた犯人は陛下とローズブレイドのどっちだ!?クソ!どっちも怪しいから困る。

「そんなガセに踊らされてはいけないよ」

「いいんです!僕も実家に言われて覚悟は決まっています!」

「それ言ったのはお見合いを断るための方便だから本気にしちやダメだよ!」

顔を真っ赤にしながら、ドンと小さな胸を張るジル子ちゃんことジュリア嬢に、必死にその情報が真実ではないことを伝えるのだが、なかなか伝わらない。

しかも、ここで横にいて黙っていた元祖腹黒が口を挟んでくる。

「そうですよ、ジュリア!この方の悪辣さがそんなもので済むはずがありません。お前の手に負えるような方ではないのですから、諦めなさい」

おい!間接的に僕をデイスるんじゃない!

「決闘相手の身内を脅して爆弾しかけさせるクズに悪辣とか言われたくねえよ」

「そうですよ、顔だけだったり、貧乏な辺境貴族の正妻やるくらいなら、ギルバート様みたいな破壊の象徴みたいな武力を持った方の愛人になるほうが、はるかに僕には利益が大きいですから邪魔しないでください」

・・・お前ら兄妹は本当に僕のことを何だと思っているんだ。

「おい、ジルク。もうこの子、連れて帰って。頭が痛くなってくる」

「それは話が別ですよ。お願いですから、私をオフリー領に連れてってくださいー!」

なんか前世のスキー場の広告にある宣伝文句みたいなフレーズだな。

ん? そういえば、こいつは決闘のときにカスタマイズされた高性能機を使っていたよな。

連れて行けば、性格はともかくとして、間違いなく戦力にはなるか・・・よし、いいことを閃いたぞ。

「お前が決闘で使ってた専用の鎧、修理はもう終わってるのか?」

「ありがとうございます! 連れてってくださるのですね!」

「条件がある。それをお前が達成できたら、というのでどうだ?」

「私にできることならなんでもやります!」

ようし、乗ってきた。

無駄に有能なこいつを上手く使ってやる。あれ・・・思考がだいぶ陛下と似通ってきたな。まあいいか。

「あのマリエという女の話は別として、決闘騒動でマーモリアがアンジェに楯突いたことは、お前がオフリー討伐作戦に、専用の鎧で参加することで手打ちにするよう父上に話を付けてやる」

この僕の発言に、ジュリア嬢が自分の状況を瞬時に把握したらしく口を挟んでくる。

「え! それダメです、僕の婚約はどうするんですか」

「マーモリア家の禊は、この屑男が体で払うから、罪もない女の子が犠牲になる必要はなくなる。よかった、これで世界はまた一つ平和へと近付いただろう」

「いやいやいや、せっかくこの屑のせいで肩身が狭くなったのを解消できると思ったのに、僕の計画が台無しになっちゃうじゃないですか!?!」

「そうですよ、ジュリア。あとはこの兄がなんとかします。ギルバートさんの手をこれ以上煩わせてはいけませんよ」

「ふざけんな、この屑兄!」

性悪な本性をさらけ出し始めたジュリアちゃんを脇に抱えて、ジル

クは高笑いしながらこの場を去っていく。

よし、作戦通り、うまくいったぞ。

あとはジルクが実家を説得してくれれば、高性能な専用機が戦力になる上に、婚約話も無しにできる。

「おい、ジルク。討伐部隊と言っても、主要人物は捕獲しないとイケないんだから、決闘のときみたいな重火器ばかり持ってくるなよ」

「っ！……わかってますよー！」

こいつ、言わなかったら、ありったけの火器を持ってくるつもりだったな。

まあいい、精神的に色々と疲れたが、こいつが頑張れば、僕のメリットも大きい。

一息ついて、時間を確認すると、屋敷に戻ってもまだ夕食の時間には早そうだ。

……気晴らしに、王都のダンジョンの浅いフロアで小銭稼ぎしながら、時間でも潰すとするか。

第29話 宿敵との遭遇く殴り合い、異世界

決闘騒動で敵対したことの詫びと、アトリー家との婚約破棄で勢力が弱まった状態の打開策を兼ねた、マーモリア家による側室押し付け危機に見舞われ、危うくジルクの妹と婚約させられそうになった僕だったが、

公爵家への詫びとして、“騒動の原因であるジルクが高性能な専用機を持参してオフリー家討伐部隊に参加することでケジメとする”、ということでもマーモリア家本家をジルクが説得する、という落としどころを見つけることができた。

説得が上手くいく保証はないが、無駄に有能なジルクのことだから、きつと色々と卑怯な手を使い、自分が欲しい成果を持つてくるだろう。

ただ、非常に神経を使う奴らを相手にしたせいで、精神的に疲れたので、屋敷に戻る前に僕は王都内のダンジョンで少し気晴らしをしていくことにした。

あのケモナー学園に通う学生達は在学中から何度も潜ってきたダンジョンであり、僕も何回も潜ったことがあり、浅い階層で弱いモンスターを倒してストレス解消と、魔石や希少金属を見つけて小遣い稼ぎをしようと言うのが目的だ。

一応、お金に困っているということはないのだが、どうしても前世の感覚が残っているせいで、領民達が納め税を原資にしている金を手元で使うのが少し“面倒くさいな”という気持ちになってしまう。

前世の所属部署が総務や経理だったせいで、役所から補助金、要は税金をもらったときの後始末を、どうしても無意識に考えてしまうというわけだ。

報告書やら領収書を矛盾がないようにして、一円単位で揃えるのって本当に面倒くさいんだ！

そんな感覚が残っているせいで、税金感のある金を直接使うのって、微妙に嫌な気分になってしまうから、手元で使う遊び金は役人を使っていた頃の給料とか、こっそりダンジョンに潜って稼いだ金を使う

という貧乏臭い習慣が身に付いてしまっている。

というわけで、気晴らしと小遣い稼ぎのためにやってきたダンジョンに僕はいるのだが・・・

何やら奥から、大きな物音が聞こえてきて、だんだんとこちらに近づいてくる。耳を澄ませてみると、人の声も混ざっているような気がする。

間もなく僕の視界に2人の人影と、それを追うモンスターの大量が入ってきた。

2人とも非常に小柄だが、全身を覆う甲冑を着ている。子供がどうしてダンジョンにいるんだろう。

可能性があるとすれば、冒険者を目指す子供がなけなしのお金で甲冑を買って、一攫千金を目論んだ、というあたりだろうか。

善人を気取るつもりはないが、目の前で子供がモンスターの餌になるのを見るのは気分のいいものではないか。

「いやあああああ!!!」

「次から次へと、もう何なんですか、ここはああああ!」

モンスターに追われながら絶叫している2人を助けるために、右手を上にかざして魔力を集中させると、大きめのスイカくらいの火球がいくつも浮き上がる。

かざした手を振り下ろすと、火球がいつせいにモンスターの群れに向かっていき、ぶつかると同時に大爆発を起こし、モンスターは黒い煙へと姿を変える。

ここ最近は何もを気にしながら、亜人相手にちまちまと魔法をぶつけてばかりだったから、気の向くままに魔法をぶつ放すのは気分がいいね。

それが人助けとストレス解消、小遣い稼ぎも兼ねているとすれば、なおさら気分がいい。

挨拶くらいはしておこうと、軽い足取りで、モンスターから逃げてきて地べたに座り込んでいる2人に近づいていく。

「大丈夫かい? 冒険者に憧れるのは仕方ないが、子供だけでダンジョンに潜るのは危ないよ?」

「誰が子供よ！私はもう成人済みなんですけど！」

「ち、ちよつとご主人様、助けてくれた人にそんなこと言っちゃ失礼ですって！」

反論してきたほうの子供が、怒鳴りながら甲冑の兜を外す。兜の中からは押し込められていた金髪が飛び出してきて、青い瞳をした整った女の顔立ちが現れた。

そして、青い瞳が僕のことを睨みつけた瞬間……

「あ……」

女が口を開くのだが、僕の顔を見て言葉を失ってしまったようだ。

一方の僕も、まったく予想もしないタイミングで突然現れた顔を見て、次の言葉を続けられなくなっていた。

その代わりに、全身をめぐる血流の圧力が急激に上昇していくのがわかった。

キザなセリフや、嫌味や皮肉よりも先に、怒り、憎しみといった感情ばかりが噴き出してくる。

僕と妹は激情家だと言われることが多いのだが、それは確かに正解かもしれない。思考が巡るよりも早く手が動いていた。

僕は、目を大きく見開きながら腰に携えていた剣を引き抜いて、目の前の女を目にかけて、上段から思いつき振り下ろす。

だが、女はとっさに後ろに飛んで回避し、空振りとなった剣先は地面に突き刺さる。

「クソ、仕留めそこなったか」

「いきなり何すんのよ！」

女は、いきなり斬りつけられたことの怒りをぶつけてくるのだが、僕にとってはどこ吹く風だ。

僕は、あの乙女ゲー世界に転生したことを知った日から、妹の婚約解消からの断罪イベントを避けようと動いていた。

しかし、妹が学園3年目に起きるはずであったそのイベントは、僕が王都を留守にしている最中に、しかも一年生の夏休み直前という2年以上の前倒しで起きてしまった。

その直接的な原因となったのが、僕の前で悪態を付く女、いわば僕

の数年越しの願いを粉々にした宿敵ともいべき相手、マリエ・フオウ・ラーファンだったからである。

「・・・初めましてだな、王国を掻き乱す邪悪な魔女殿？魔を滅するのは騎士の役目、僕はそれを果たそうとしただけさ」

「レデイにいきなり斬りかかる騎士なんて聞いたことないわよー」

「おや、自分が誰からも怨まれない無垢な存在だとも思っているのかい？」

「だからって無言で剣を振り下ろす!？」

「そうか、魔法で焼かれるほうがお好みだったか。そいつは失礼した」
一度、剣を振り下ろして思考が回復したところでようやく嫌味をぶつけることができたが、相手の女もどうやら怒りのスイッチが入ったらしい。

「ご、ご、ご主人様、このヤバい人は誰なんですか!？」

マリエというラーファン家の女の腕にしがみつきながら、僕のことを尋ねるもう一人の子供は、あの馬鹿王子とジルクが買い与えたというシヨタエルフの専属使用人か。

あの決闘騒動の後にながたってきた、このマリエという女に関する報告書の中に記載があったのを思い出した。

なんかスパイラルなボールをぶつけてきそうな声をしているな。

「文化祭のときに見たでしょ、カイル！あのアンジェリカの兄貴よ！」

「それって爆炎の顔玉潰しじゃないですか」

「そうよ・・・だから気を付けなさい、ダンジョンのどんなモンスターよりもヤバい相手だと思おうわ」

マリエという女が腰を落とし、シヨタエルフを後ろに下がらせてかばうような姿勢で身構える。

ほう・・・僕と対面して戦意を維持しているのはさすが、普通の屑女とは大違いだな。国内の超が付くほどの大物の家の跡継ぎ5人を股で囲うだけあって、腹が据わっているようだ。

「女の子相手にぶつける殺意とは思えないんだけど？」

「君にはそれだけの価値があるってことさ」

「派手に遊んでた女性を消して回ってたっていう噂は本当みたいね」

「ずいぶんと角度がついた見方だね、王国への不満の火種を消しただけさ」

「だからって、その子達、消されるほどのことをしたってどういうの？」

「愛人、巫人を囲わせて、領地運営の財政が傾いてまで金を貢がせて王都で遊興に耽る贅沢三昧をしてきた連中だな」

「それがこの世界の男の甲斐性つてもんじゃないの！」

「反吐が出るような思想だな。それが蔓延るおかげで領主の恨みは王国へ向かう。民が重税を課せられれば領主や王国が怨まれる。税を重くせず領主が貧しくなれば、外国のスパイ工作が入りやすくなる。どう転んでも王国が危うくなるのさ。そんな状態で、王妃になるはずだった妹に火中の栗を拾わせることなんてできないさ」

妹のために悪妻を駆除していた、と言ったところでマリエという女の目元がピクリと動いた。

妹という単語が何か本人の琴線にでも触れたのだろうか。

「つまり、みんなアンジェリカのためにやったっていうことかしら」

「・・・どこぞの他人の屑女の命と家族の命は等価値じゃないのでね。まあ、結局は誰かさんのせいで盛大な無駄となってしまうわけだ。そういった意味では連中は無駄死にかな？」

宿敵との言葉のやり取りで怒りのあまりテンションが上がっていたのか、つい、どこぞの悪役が言いそうな台詞を言ってしまった。

「僕の失敗は問題だらけの君の実家、ラーファン家にさっさとガサ入れをして取り潰して、害虫が学園に入学することを阻止できなかったことだろうかね」

「・・・たしかにあの学園でも酷い女はわんさか見てきたけど、私からしたらアンタもたいがい屑ね」

5股女の台詞とは思えないね。上と下の口は別人格なのかな？さすがに下品すぎるので口にするのは理性で止めておくとするか。

静かに剣をマリエという女に向けた。

「少なくともアンジェは小さい頃から人生をかけてあの馬鹿王子の婚約者であろうと努力していた。その妹を傷付けたお前に、落とし前を付けさせようとするのは自然な感情だろうか？」

こいつ！魔力による肉体強化のレベルが思っていたよりも高いな。思わず感心してしまうが、マリエはそのまま猛スピードで僕の方に向かって突っ込んできた。

握った拳は眩く光っており、魔力を重点的に集中させていることがわかる。

体が小さいことと、魔力による肉体強化のレベルが高いことが合わさり、予想していたよりも速いスピードだったことから、回避よりはガードしたほうがベターだろう。

だが、このときに相手が学生だと油断したのだろうと言われればその通りだっただろう。

「はあああああつ!!」

魔力と気合が込められた拳を、魔力を込めた左腕で受け止める。

魔力強化のレベルが高いとはいえ、あくまでもそれは学生レベルであり、小柄な令嬢の振るう拳なんてたかが知れているものだと思は考えていた。

しかし、腕に伝わる衝撃は思っていたよりもはるかに強く、僕は身体ごと吹き飛ばされてしまった。

「このっ、なんだこの威力・・・!」

殴られた衝撃で地面を転がり、土ぼこりを上げながらも体制を立て直した僕だったが、対するマリエは素早く背中に背負っているライフルを手にかかけようとしていた。

そして銃口をこちらに向けると思いきや、逆に銃口部分を手に取って振りかぶり、銃床部分を僕に向かって振り下ろす。

純粹な近接戦闘ならともかく、魔法という飛び道具込みの戦いの場合に、ライフルのような長い得物の命中率はそんなに高くないことを知ってやがるな。

とつさに剣で受け止めようとするが、振り下ろされた銃床は僕の剣を容易く叩き折ってしまった。

続けてマリエが2撃目を加えるためにライフルを振りかぶろうとしたところで、僕は右腕に持っていた剣を投げ捨てて、銃身を無理やり握ると、これまで亜人の顔面などにしてきたように、ゼロ距離の

ファイヤーボールを爆発させた。

その衝撃で砕けた銃の破片がいくつも掌に刺さって、激しい痛みが僕を襲う。

一方のマリエはファイヤーボールの衝撃を、後方に飛んで緩和しながら、再び魔力を拳に纏わせている。体勢を整えたら、またこつちに殴りかかってくるつもりだろう。

くそ、この女の身のこなしはまるで野生の猿だな！本当に貴族の令嬢か!?野生児だって言われた方が信じられるぞ!?

武器を破壊したまではないが、僕の方は、右腕は銃の破片が刺さって血みどろ、左腕はマリエの拳をガードした衝撃でまだ痺れが残っている。

学生、しかも女を相手にして、イキリ倒しながら口撃を始めたのに、ステゴロの戦いになったら大苦戦だなんて、我ながら、なんとも情けないじゃないか。

だが、認めざるを得ないな、こいつは・・・強い！今まで戦った誰よりも強いモンスターだと思ったほうがいいのかももしれない。

残った武器は魔法と・・・あと何かあったか!?

「調子に乗るなよーファイヤランス!!」

魔法名を口にして、血みどろの右腕をマリエの方に向けると、炎の槍が僕の周囲に浮かび上がって、マリエへ向かって放たれる。

しかし、敵もそう易々と直撃を受けてはくれない。

甲冑を身に付けているとは思えない速度で炎の槍を回避しつつ、避けられないものは拳で叩き落としながらこちらに突撃してくる。

そこにカウンターを当てようと、しびれの残る左腕で折れた剣を無理やり握り、短い刀身を振り下ろすのだが、僕の懐にまで入り込んだマリエは身体を脇に逸らすことで回避してくる。

「ぶっ飛びなさいよー!」

怒声が飛び、マリエの魔力の込められた全力の拳が、ガラ空きになった僕のボディに突き刺さる。

僕の内臓に、喰らったこともないくらいの強い衝撃が伝わり、唾液と空気が逆流するのがわかる。体の中のダメージが大きく、息を吸お

うとしても、上手く吸えない。

だが、一方で、渾身の一撃を叩き込んだマリエの表情に驚きの色が現れた。

何故かって？

相手の機動性が僕よりも高い上に、お互いに武器もない状況なら、拳による攻撃でトドメを差してくる、その箇所は、プライドを潰すための顔面か、急所が集まるボディを狙って来ることに賭けて、わざと懐に入らせたからに他ならない。

そして、僕は前世の死因が腹部を刺されての失血死だったから、外に出るときは常にボディには鉄板を仕込んでいる。

マリエは、僕が魔力で強化した腹部と厚みのある鉄板を殴ったことから、さすがに拳にもダメージがあつたようで、ようやく隙ができた格好だ。

「ようやく捕まえたよ、王国を揺るがす魔女殿？」

僕のボディに突き刺さった腕を、ようやく握力の回復した左腕で掴む。

だが、僕の左腕はマリエを捕まえるのに使用中で、右腕は血みどろの大怪我で、武器になるものもない。

いや、育ちのいい坊ちゃんだったらそう思うだろうし、僕の外側は、この乙女ゲー世界でもおそらくトップクラスの外見を持つ大貴族の家のお坊ちゃんだ。

ただ、その中身は社畜根性の染みついた平凡な一般人だ。そして、前世で読んだことのあるマンガやアニメでは、こういうときに繰り出す最後の切り札というのは決まっているものだ。

「えっ？」

ニヤリと笑った僕を見て、マリエの顔が強張っていた。おそらく僕の口角は大きく上がっていたことだろう。

乙女ゲーの世界で、少年マンガの奥の手を繰り出すのは禁じ手なのかもしれない。だが、それでも僕はまだやらなければならないことがある。手段を選んでいるような余裕のある立場じゃない。

残った魔力を体の一点に集中させて歯を食いしばり、僕は最後の一

撃を繰り出すべく、自分の頭を、マリエの頭目がけて振り下ろす。

ゴチン！という音が頭蓋骨越しに響いてきて、お互いの頭部がぶつかった。

その衝撃で、僕は後ずさりしながら、仰向けに倒れ込んでしまった。衝撃のせいか、視界の目の前がチカチカと光っていて、思考もボンヤリとしている。指先くらいは動くが、その他は眼球や口くらいしか動かないだろう。

一方のマリエは、うつ伏せに倒れ込んだまま、指先や足先がピクピクと動いているようだ。

どうやら、相手にも大きなダメージを与えることはできたようだが、これで倒せているかどうか・・・

いや、立ち上がられたら再び大ピンチだ。頼む、立ち上がらないでくれ・・・

情けない話の繰り返しになるが、いい歳こいた男が、女性、しかも学生相手にここまで痛めつけられて戦闘不能になりかけたダメージを受けたなんて、墓場まで持って行って隠蔽したい。

「・・・たいの！」

うつ伏せになっているマリエが何かを呟いている。

「私は・・・今度こそ幸せを手に入れてやるのよ・・・！」

今度こそ？まだ15、6歳くらいのはずなのに、何を言っているのだろう。

だが、こいつも、また、ずいぶんと身勝手な言い分じゃないか。

「人の幸せを踏みにじってまで幸せを掴もうとするなら・・・恨まれる覚悟くらいはしておくんだね」

「アンタも・・・そうじゃないのよ」

「否定はしないさ」

だからこそ、僕だって、一部のクソ女や亜人、敵対派閥の連中からは、顔玉潰しとか通り魔とか、不名誉極まりない二つ名までもらっているんだ。

「せっかく王子様達を落とすたつていうのに・・・」

おいおい、まるでゲームみたいな言い方だな。

「・・・ん？ゲーム？そういうえば、さつき、この女は“今度こそ”って言ってたな。」

「こんなところで・・・悪役令嬢のクソ兄貴なんか邪魔されてたまるかってのよおおおお！」

マリエは叫びとともに、地面を拳で殴りつけると、膝立ち状態で、肩で息をしながらも、僕を睨みつけている。

しかも、魔力で再び身体を強化しているのか、光が体の各所を覆っている状態だ。

絶体絶命の危機に、意思と根性で立ち上がるって、まるでこいつが主人公みたいじゃないか。

いや、ちよつと待て。こいつ、さつき僕のことを悪役令嬢の兄って言ったな。

アンジェのことを悪役令嬢だと言って、15, 6歳で今度こそ幸せになるって・・・まさかコイツ！

「おい！お前、アンジェが悪役令嬢って言ったな!?お前、もしかして・・・転生者か!?!」

「え・・・ってことはアンタも!?!」

マリエの表情が怒りから驚きへと変わり、力が抜けたのか、ペタンと座り込んでしまう。

「お互い、気に入らない相手だろうが・・・一度、情報を共有しても損はないと思うんだが、どうだろう」

「・・・そうね。話くらいは聞いてあげるわ」

まさか僕以外に転生者がいるとは思わなかった。

ゲームのシナリオを大きくぶち壊した同郷の女・・・先の展開が全く読めなくなってきたな。

第30話 宿敵との遭遇〜レスバトルは憎しみ深く

気晴らしのためにダンジョンに潜った僕だったが、運がいいのか悪いのか、何と妹の婚約解消の原因であり、僕がこの乙女ゲー世界に転生したことに気付いてから重ねてきた苦労をぶち壊した張本人である、マリエ・フォウ・ラーファンと出くわしてしまった。

そして、この国の将来を期待された貴公子5人をまるごと誑し込んだ魔女を消そうとしたのだが、とても令嬢とは思えぬ戦闘力を持っていて、本気の僕と同等か、下手したらそれ以上かもしれない。

しかも、マリエがふいに口にした「悪役令嬢」という台詞から、こいつも僕と同じような転生者だということがわかったことから、お互いの憎悪と嫌悪は置いておいて、いったん情報共有をすることになった。

といっても何から話そうか・・・差し支えなくて、それでいて、相手に、僕が真実を話していると理解させられる内容となると・・・

仰向けに倒れていた体の上半身を起こして、僕は静かに口を開く。

「じゃあ、まずは僕が元カノに刺されて死んだ話からしようか」

「いきなりとんでもなく重い話をぶっこんできたわね」

「ふっ、寝起きにカツカレーくらい重かったか？」

「・・・○郎系ラーメンくらい重いわよ」

野菜爆盛りの、健康的なのか不健康なのかわからない麺類が懐かしいね。

「信頼関係がお互いマイナスなんだから、それなりの情報を開示しないと、つまらない探り合いだけで終わってしまいそうじゃないか」

「ま、まあそれはそうだけど・・・」

若干引き気味になりながら、僕は前世の死因を話し始める。

そろそろ結婚かなという元カノが、共働きをするという約束を破って専業主婦になりたいとか、自分の親と同居したいとか言い出したせいで大喧嘩になり、

僕もブチ切れて、別れ話になったところで、向こうが隠し持っていた刃物で腹を刺されてそのまま・・・という面白みのない話だけだね。

「アンタも」なかなかヘビーな死に方してたのね」

「も」ってことは、そつちはどうなんだ？」

尋ねられたマリエも、静かに語り始めた。

聞かされたのは、なかなか壮絶なマリエの前世だった。

兄にあの乙女ゲーの攻略を押し付けて、自分は親から資格取得を理由に騙し取った金で海外旅行に行ったら、あの間に兄は死亡していて実家を追い出されてしまった。

その後は夜の接客業を始めて相当の実績を上げて、やがて妊娠したが、相手の男は責任を取らずに逃亡し、娘を出産したものの、お前では子供を育てられないと実家に娘を取られて、その後につき合った彼氏のDVで死亡したのだという。

「気の毒な部分がないとは言わないが、因果応報というか、前世も今世も屑だな」

「うっさいわね！アンタはなんで男のくせに乙女ゲーなんてやってたのよ」

「妹が一人暮らしの僕の家ของเกม機でやってたのを見てただけだ。課金の金を集めるくらいには屑の素質はあったかもしれないね」

「たかだか数千円で、固定給のある男がケチ臭いわね」

さすが夜の蝶、男の金に集って吸い上げるプロフェッショナルの発言だね。

「でも、そのおかげで大まかなゲームの流れは知っていたのはプラスだったさ。最初は見知らぬ異世界と思ったが、あの学園に入学してすぐに妹の婚約が決まって、この世界があ乙女ゲー世界だと気付いたわけだ」

「公爵家って王族の親戚みたいな人でしょ。それなのに、ユリウスとか、アンジェリカって聞いて気付かないのって意識が低いんじゃない？」

「そもそも自分がゲームの世界に、だなんて思わないし、カタカナの名前だからあんまりピンとこなかったんだよ。それでもって学園に入ったら超が付くほどの女尊男卑社会で、国境、辺境出身の下級貴族の男子があまりにも虐げられていたんだ」

「別に王宮からしたら下つ端貴族がどうなろうと関係ないじゃないの」

「彼らのヘイトがたまれば、外国が攻めてきたときに素通りさせたり、他国のスパイとして動くようになる可能性がある。そうしたら、王妃になる予定だった妹も、その実家であるうちも危ないなと思って、まずは結婚相手を色々世話してたのさ。お前の転生先はずいぶんと評判悪いが、転生先の生活はどうだったんだ？」

「・・・最悪よ。アンタみたいなボンボン暮らしとは違ってね」

げんなりとした表情を浮かべたマリエの口から、彼女の今世が語られる。

転生先はラーファン家の末娘で、使用人のようにこき使われただけでなく、必要な金を調達するために山で熊狩りをしたり、血のにじむような努力をして回復魔法を身に付け、あの学園に入学し、ゲームで身に付けた知識で攻略対象を誑かしたのだという。

僕にとっては迷惑極まりない結果であったが、知識や魔法があったとしても、実際の会話や学園生活に反映させてやり取りするのはコミュニケーション能力の問題が大きい。

夜の世界での実績があると聞いて、5人の男を同時に誑かしたというのも納得はできるが、なんとも業が深い女だよね。

「・・・事情はだいたいわかった。だが、その辺にしておけよ、バルトファルト男爵はレッドグレイブがもらうから手を出すなよ」

「はあ？ いらないわよ、あんな地味モブ男」

「あんな化け物じみた強さの鎧を持つてるから、DLCとかの追加コンテンツかと思っていたが」

「三作目までにあんなやつは出てこなかったけど・・・私が死んだ後にリメイクが出た可能性もあるわね。でもアイツのツラを見てるとなんかむかつくのよね」

「あのゲーム、3作目まで出ていたのか!? それも気になるが・・・いや、まずは今をどうにかするのが先決だな。あ、じゃあ主人公様もこっちでもらうけど問題ないよな?」

「あんな頭お花畑な女がどうなろうと知ったこっちゃないわよ」

「魔法も使えるし、性格も悪くないし、可愛い子じゃないか」

主人公様であるオリヴィアさんを褒めたらマリエの表情が険しくなる。

何か、こいつの中の地雷を踏んでしまったのかもしれない。

「いかにも男が好きそうなスペックして、薄っぺらい綺麗ごとばかり言うからムカつくのよ」

「スペックには同意だが、あのゲームは男性向けゲームメーカーが乙女ゲー市場に新規参入するために作ったやつだろ」

「そんな宣伝文句、あつたかもしれないわね」

「違う分野への参入は会社にとってリスクも大きい冒険だ。男性向けゲームを製作する会社の中で諸々の決定権を持つるのは男ばかりだろうから、社内で方針を決める際に通ったデザインが、男好みな外見のオリヴィアさんだったと考えれば不思議じゃないさ」

「なんかずいぶんとメタイこと言うじゃないの」

「前世も今世も、下っ端働きの組織人だからね」

「アンタの言ってることを要約すると、オリヴィアは、キモいおっさん好みの容姿っていいわけ？」

「キモいって言うな、男性差別だぞ。プレイヤー目線で市場調査を詰めていって決めると言うやり方も否定はしないが、上手くいかなかったときに責任を取らされるのは決定権を持つてる会社のお偉いさんだ。ならば、そのお偉いさん達がハンコを押せるデザインがオリヴィアさんだったということだ・・・むしろ、デザインで言うなら、その外見で攻略対象5人を丸ごと誑かしたお前の中身はすごいと思うぞ」

「急に褒めたように言いながら、結局ディスるんじゃないの！」

攻略対象5人全員を知っているわけではないが、あの疑り深く性格のねじ曲がった層なジルクをあつさり誑かした時点で、こいつの男を落とすスキルというか能力は相当なものだ。

「てつきり、呪いや洗脳魔法、もしくは禁じられた違法薬物かと思っていいたら、単なるコミュニケーションで骨抜きにしたんだから誇っていいぞ。しかも、逆ハーレムルートって、本来は3年かけて行うのに、ほんの数ヶ月で達成したんだしな」

「そんなに褒めてくれるなら少し協力してよ。生活力のない5人を養うのって大変なんだから」

「自業自得すぎて草が生えるな。帰ってから食う飯が美味そうだ」

「マリエからしたら、”助けて！釣った魚にやる餌代が高すぎるンゴ”っていう心境なんだろうか。」

「ふざけないでよー」

「ふざけてない、ざまあみろ、NDKって煽ってるんだ。お前、うちに何をしたか忘れてないだろ」

「転生した者どうしじゃない」

「同じ転生者だって言っても、前世も今世も赤の他人じゃねえか。アソビエはたしかにゲームの中では悪役令嬢なのかもしれないが、その前に、今世の僕の家族だ。僕の苦労を台無しにした赤の他人な屑女と、可愛い身内じゃ比較にもならないね。助けてほしけりや妹に土下座して詫びてからだ。そしたら小銭くらい恵んでやるよ」

「ケチー！銭ゲバー！」

キーキーと叫びながら、マリエは手足をバタつかせている。怒りながら殴った地面には、その衝撃で大きめな穴ができていた。クソ、この脳筋系ビッチめ。

「土下座一つで、僕の何年もの苦労をぶち壊した屑の命を取らずに済ませてやると言ってるんだ、優しいだろ？」

「苦労って言っても、ボンボンがぬくぬくとした温室で、貴族ごっこしてただけじゃないのよ」

「さすがに山で熊狩りしてた脳筋と比べるのはフェアじゃないだろ。それに僕の行動は、性悪貴族達の中では奇行扱いされてるぞ。まあ、シスコンを拗らせたのが原因だと誤認されていたほうが都合がいい。他の人間に、ゲームのシナリオを踏まえての行動だったというわけにはいかないからね」

「シナリオっていうことは、公国との戦争はどうすんのよ」

「戦力は準備している。うちは無駄に地位が高いから、油断してると、負け戦の大将を任じられて、責任を押し付けられかねないからね」

「まるで責任を取りたくないから逃げてるみたいね」

「責任を取るべきなのに取らないのと、責任が生じないように立ち回
ることは別だ。デキちゃってから逃げるのと、そうならないようにア
レを付けることは違うだろ」

「・・・また嫌味！しかもレディに何てことを言うのよ！」

前世の出来事を擦られたのに気付いたマリエが顔を赤くしながら
僕を睨んでくる。

「出産経験者が避妊云々くらいでカマトトぶってるんじゃない。ゲー
ムのシナリオをぶち壊したハイパービッチめ」

「ビッチって言うな！女性差別よ！ゲームのシナリオを壊したのはそ
うかもしれないけど、アンタだつてこの世界に十分すぎるくらい干渉
してるじゃないの」

「僕は実家が落ち目にならないように動いているだけだ」

「障害の乗り越え方が、私は回復魔法とゲームの知識、アンタは腕っぶ
しと実家の権力だつたつて違いがあるだけよ」

地面を殴って軽々と大穴を開ける女に、腕っぶしとか言われるのは
嫌味だろうか。

僕は心の中でツツコミを入れるが、マリエはそれに気付くわけもな
く、僕への文句を続ける。

「空賊退治はともかく、何回も専属使用人の集団と殴り合いして片っ
端から血祭りにするわ、性質の悪い女は社会的に抹殺するわで、顔は
攻略対象みたいな貴公子のくせに、乙女ゲーの世界でやってること
は、まるでヤンキー漫画かマフィア漫画よ」

「心外だな、僕は集英社派なんだが」

「考えてもみなさいよ、悪役令嬢の兄が卒業した学校に殴り込んでき
て、学園内で大暴れして何十人も血の池に沈めるって、ヤンキー漫画
でしか聞いたことない展開よ！」

「たいていの場合、売られた喧嘩をかうか、王国の将来の平和のため
にやったことなのに」

「売られた喧嘩？それなら私もアンジェリカに怒鳴られたり、取り巻
きの女子達に嫌がらせされたわよ。そんなもって、王子様を奪って
やったけどね」

マリエがサムズアップして鼻で笑いながら、僕を睨んでくる。

・・・あれ？言われてみると僕とコイツって、前世の知識を使って、シナリオに干渉しまくった同じ穴のムジナだったりするのかな。

「ほら、反論できないじゃない！はい論破!!」

「君と僕が似ているのなら・・・今日、僕らの衝突は運命的な出会い・・・いや、決戦だったのかもしれないね」

「その最後がグープンと頭突きつて、これまた、まるつきり男の子向けの漫画の展開ね。アンタ、いい加減、世界観を破壊し過ぎよ」

「お前だってそのチンチクリンな未発達フォルムで5股かけるなんて、危なっかしい18禁の世界観を作り出してるじゃねえか!」

人のことを、10年ごとに出てくる通りすがりの特撮ヒーローみたいに言うんじゃない。

だが、これ以上、お互いのこの世界への干渉をあげつらつても不毛だなど思えてきたのも事実だ。

妹へのケジメを付けさせれば、これ以上、コイツとぶつかって潰しても、得られるものも多くはないか。

「・・・色々と言いたいことはまだあるが、僕は色々忙しい。ただ、お前の事情も理解はしたから、妹にケジメを付ければ始末はしないで置いてやる。せいぜい逆ハーレムを満喫している」

「いきなり剣で斬りかかってきた通り魔の発言とは思えないわね」

「優先順位の問題だ。今は敵対派閥とか公国とか、どうにかしないといけない連中が多すぎる。その代わり、今度、僕の周りに何かをしたなら覚悟しておけよ」

「へえく女の子1人に苦戦したくせに、大きく出たわね」

「ああ、次があったら確実に消せるように準備しておいてやろう」

僕とマリエはお互い笑いながら、睨み合い、マリエは拳に魔力を集め、僕は左腕にファイヤランスを出現させて対峙する。

コイツの攻撃が拳主体なら、リーチの長い僕は不利ではないはずだ。少し休んで体力はわりと回復しているから、勝ち目がないことはないだろう。

状況が動いたのは、無言での睨み合いが始まって数十秒ほど経って

からであった。

「ご主人様、下がって！」

どこかのデュエルなコーポレーション社長の弟のような声がダンジョン内に響き、僕の足元に手榴弾が転がってきた。

チツ、さつき気絶させたシヨタエルフが目を覚ましたようだ。

回復した体力を使って急いで立ち上がり、この場から離れて爆風から逃げ回る。

「カイル！よくやったわ！」

マリエはその隙にシヨタエルフの手を引いてダンジョンの入り口のある方向へ向かって走っていく。

僕もそれを追おうとしたのだが、シヨタエルフは、まるで巻きびしのように手榴弾をばらまきながら逃げるので、僕の視界はその爆発の炎と煙で塞がれてしまった。

そして、煙が晴れた頃には、マリエらの姿は消えており、僕は一人取り残された格好だ。

とりあえず、攻略対象5人が籠絡された理由と王国の魔女の正体はわかったものの、よりにもよって転生者、しかもあの乙女ゲー世界の今後の動きを知りうる者だということは、見過ごせない不安要素にはかならない。

・・・だが、今は考えてもどうしようもないか。今は数日後のオフリー家討伐作戦を優先しなければならぬ。

仕方ない、今日はもう屋敷に戻って休むとするか。

第31話 勘違い男と捻くれ女

ダンジョンでのマリエとの激闘を終えて、屋敷に戻ることができたのは、日が沈んで夜も更けてからであった。

右腕の怪我は布切れを巻いてなんとか誤魔化しながら、裏門から敷地に入り、使用人達が使う勝手口を使って屋敷の中に入っていく。

周囲の人氣がないことを確認して、こっそりと自室のカギを開け、照明のスイッチを押して大きく息を吐いた。

無人だった部屋がゆっくりと明かりで照らされ始める中で、首元のボタンを外し、マリエとの戦いでダンジョンを転がり回ったために泥と砂と埃で汚れた上着を脱ぐ。

そして、音もなく静かに差し出された手に、上着を預けて礼を告げた。

「ああ、すまないね。ありがと……うええええ!？」

ワンテンポ遅れておかしいことに気付いた。無人だった部屋にどうして人がいるのかということだ。驚きのあまり変な声が出てしまったじゃないか。

「おかえりなさいませ、若様」

いつもの能面フェイスを浮かべて上着を受け取った我が家の性悪腹黒メガネメイドのコーデリアが抑揚のない口調で帰りを迎えてきた。

扉は確かに施錠されていたはずなのに、どうしてこいつが僕の部屋の中にいる。

「コーデリア、どうやってこの部屋に入ったのかな？」

驚きによるドキドキで目元がピクピクと動く僕の問いに対して、コーデリアは眼鏡の位置を正した後、襟の中に隠れていた紐を引っ張り寄せて、その先にあるカギを僕に見せてくる。

「若様が部屋の中に誑かした使用人を連れ込んで、悪さをしないように公爵様から合鍵をお預かりしています」

「誑し込んだとは人聞きの悪い。大人がお互いに合意の上で、してい

ることに口を挟むのは野暮だろう」

「そうですか。それならば、このカギを奪ってみてはいかがでしょう？」

そう言ってコーデリアは、無表情のまま、カギを再び胸元にしまい、そのまま堂々と、大して大きくない胸を張ってこちらを見てくる。

取れるものなら取って見ろ、ということか。

何だ、このシチュエーションは。

僕に顔を赤くさせて、“そ、そんなことできるかよ！”みたいな感じのドキドキプレイでもさせようというのか、この性悪女め。

顔面SSRと腹黒性悪メイドのラブコメに必要なんでないということ（心の中で）言っているだろうが！

しかも、カギを奪おうとすれば、ほぼ確実にセクハラだ。そんな弱みをこいつに握られるわけにはいかないな。

「僕が女性に飢えてない、理性的な人間であることに感謝するんだね。侵入経路はわかったが、どうして君が僕の部屋にいるのかを聞かせてもらおうか」

「お帰りが遅かったので、裏口を見ておりましたら、まるでコソ泥のようにコソコソと屋敷に入っていらっしゃいましたので、驚か・・・少し刺激をお届けしようと、部屋の中で待機しておりました」

ということは、明かりも付けない部屋の中で、音もなく待機していたのか。しかも、驚かそうとか言いやがったぞ。まったく、毎回、咎めるほどではない些細な嫌がらせを繰り返してきやがって。

「部屋の外で待機しておくという選択肢はなかったのかい？」

「他の使用人に出迎えを見られて、この前のような誤解がさらに広がってもよろしいのであれば」

「だったら、部屋の明かりを付けて、堂々と正面で待っていればいいだろう」

「無人の部屋の明かりが点いていたというのは不自然です」

くそ、この女、いつもどおり、完璧に理論武装済みか。

「デスクのカギは別なのですから、私に見られて困るものは無いと思えますが」

「困りはしないが驚くだろう」

「気配察知能力の低さを認識できてよかったですね」

息を吸うように嫌味を言ってきた。

本当に雇い主の息子に対して失礼な女だ。そのくせ、仕事の遂行能力は高いし、色々な分野についての知識もあるし、アンジェに絶対的な忠誠を誓っていて、大っぴらに咎められる点がないから余計にタチが悪い。

「はあ、もういい。それで、お前のことだから、僕を不快にさせるためにここにここにいたのではないだろうか？」

「報告しておくべきと判断した事項があるのですが……まずはその腕の治療が先ですね。治療魔法が使える者と呼んでくるので少しお待ちください」

コーデリアが僕の右腕を見るや否や、素早く水を入れた桶と数枚のタオルを持ってきた。

「いや、今日は遅いし、医者も寝てるかもしれないから、明日でもいいよ」

「ダメです……ご自分の立場を理解してください。もしものことがあったら、レッドグレイブ家はどうするのですか」

コーデリアの表情は安定の能面フェイスだが、珍しく強い口調で咎めてくる。

そんなにムキにならなくてもいいのに。普段は嫌味や皮肉が多いのに、珍しいなと思っていたのだが、どういうわけか、それは看破されていたようだ。

「何ですか？感情的になるのが珍しいとかお思いですか？」

「い、いや。別にお前は感情に乏しくはないぞ。ドヤ顔するときと、アンジェの素晴らしさについて語るとき以外は、表情筋が職務放棄しているだけで、むしろ割と感情豊かだろ」

「……衣服の汚れに、この怪我……何があったのですか？」

どういわけか僕のツツコミに顔を少し赤らめ、しばし沈黙した後、露骨に話題をそらしてきやがった。

だったら、僕のほうにも考えがある。正直に説明してもらえるとと思うよ。

「転んだ」

「嫌がらせを受けた学園の生徒みたいな嘘をつかないでください」

嘘じゃない。そう、マリエとの激戦でダンジョンの床を転がり回ったんだから、広い意味では転んだと言える。

しかし、嘘をつかない誠実な僕を、この性悪腹黒眼鏡メイドは信じられないようで、じつとりとした眼差しを僕に向けてくる。

「では若様のお好きな取引とまいます。何があつたのか、詳細をお話になるか、既におやすみになった公爵様を起こしてくるので、そこでその怪我や深夜帰宅の理由をお話になるか。どちらを選びますか？」

こいつ、パパ上からの信用を盾にして、なんて卑怯な脅しをしてきやがる。本当に性格の悪い女だな。

しかし、真実を父上に知られるのは面倒だ。ダンジョンでの激闘だけでなく、ジルクを使ってお見合いの話をぶつ潰そうとしていることにまで話が及んでしまいかねない。

父は、意外と今回のお見合い話に前向きだったからな。

「・・・仕方ない。他言は無用だぞ」

僕は頭を抱えつつ、今日、何があつたのかをコーデリアに洗いざらい話すことになってしまった。

「つまり、若様はあの黄色汚物を仕留め損なつたということですか？ たかだか女1人を？ 大の男が？」

ダンジョンでの出来事を3文で要約したコーデリアの視線が僕の顔を貫く。じつとりとした圧が・・・圧が強いんじゃない！

そして、自分の情けなさが改めて自覚させられて、言葉が心をグサグサと刺していく。

彼女の口調から察するに、込められた感情は悔蔑と悔しさと・・・怒りだろうか。悔しさはアンジェを傷付けたマリエを葬れなかつた

こと、怒りはそのマリエを葬りそこなつた僕の情けなさに対してだろうね。

「・・・我ながら情けないとは思ってるよ。赤い通り魔、爆炎の顔玉潰しの二つ名は返上したほうがいいかもね」

頭を左右に振って、やれやれ、といったジエスチャーをしておどけて見せると、コーデリアは俯いて少し沈黙した後、わずかに目を充血させて僕へのクレームを口にしてきた。

「・・・あまり無茶はしないでください。アンジェリカ様の婚約に続いて、若様の身にも何かあつたら・・・」

文句を言いながらも、汚れのふき取りや傷の応急措置は手際よく進むのだが、黙つたまま仕事を進められないのだろうか。仕事は僕へのクレームや文句、皮肉とセットなのか。

だが、そんな腹黒メイドは、今日はどういうわけか、顔は相変わらず少し俯いたままだ。いつもだったら性格の悪さが滲み出たドヤ顔を向けてくるのに。

僕の身に何かあつたら・・・レッドグレイブは後継ぎがいなくなつて、ただでさえ弱くなつた派閥は、さらに荒れるだろうな。そうすると、仕えている騎士やメイド達も先行きが不安になってしまうか。

食いぶち、仕事がなくなるおそれというのは・・・心配になるよね。

「・・・家臣のみんなの雇用を不安にさせたのなら詫びるよ」

「若様！」

「じよ、冗談だつて！・・・って痛い、痛い！」

怒りながら、応急措置中の腕を、力を入れて握らないで！血が出ちゃう！また血が出てきちゃうから！

雇用というのは間違いだつた。そうだ、コーデリアの実家は公爵家の寄子なんだから、僕や公爵家に何かあつたら、自分だけでなく、自分の実家、彼女の親や兄弟にも影響があるだろう。

貴族としては破天荒というか、中身がパンピーな僕の行動に対しては、常々、思うところがあるのだろう。

とりあえずは、父上に今日のことをチクられないように、コーデリアのご機嫌取りをしたほうがよさそうだ。

珍しく荒げた声を出した腹黒性悪眼鏡メイドを見て思い出されるのが、マリエに言われた、僕もこの世界に干渉し過ぎだという言葉だ。なんといつても、僕がこの世界への干渉を始めた発端というか、その影響をモロに受けたのがこのメイドだからね。

アンジェのため、そして僕の将来の安寧のために、あの乙女ゲーの展開という名の運命に抗う第一歩として、当時の学園にいた辺境出身の男子生徒達に結婚相手を斡旋したのだが、その手助けをしたのがこのコーデリアだ。

男子生徒達に紹介するメイド達の情報収集、日程調整に始まり、嫁いで辺境の領主の妻となった元メイド達が報告してくる辺境や国境付近の情報の取りまとめまでやってくれている。

・・・もしかして、僕ってコーデリアに対してかなりブラック労働を強いているのかもしれない。

僕が乙女ゲーの世界の運命に逆らおうとしなければ、僕が転生者でなければ、彼女はただ肅々とアンジェに仕えているだけで、少なくとも今よりも平穏な人生を歩んでいただろう。

一応、男子生徒達の婚約が成立するたびに、ポケットマネーから休日勤務手当相当の額に色を付けた報酬を払ってはいたが、それでも、彼女の人生の数年間に小さからぬ影響を及ぼしたことは否定できない。

ただ、やましきを出すと、変に勘繰られたり、ボロが出る危険もあるからな。逆に感謝を前面に出しつつ、ブラック企業働きを労う方向で話してみよう。

「コーデリア、君がこれまで色々と助けてくれたことを僕は忘れていないつもりだ。僕はそれをとんでもないがたいと思っている」

しっかりと顔を見て、感謝の言葉を述べながら、コーデリアの手を両手でしっかりと握る。

イメージとしては、前世で街頭演説しながら、支持者に両手で握手している政治家だ。

「わ、若様、急に何を・・・」

コーデリアの口調が穏やかなものに戻ったな。よし、掴みはばつち

りだ。

少し照れているような仕草をしている理由はわからないが、このまま一気に畳みかけよう。

「色々好き勝手にしているせいで、みんなに心配をかけてしまっているが、僕はこの家を次の世代のためにもしつかりと立て直そうと動いているつもりだ。この気持ちは建国の聖女様に誓ってもいい」

「そ、そうですね。私も少し感情を出し過ぎてしまいました、申し訳ございません」

「構わないさ、コーデリアもアンジェのため、公爵家のためを思っって言ってくれていると理解している」

「ギルバート様・・・」

あれ？何で名前呼びになってるの？こいつは普段から若様呼びなのに、珍しいこともあるもんだ。しかも、顔がなんだか赤くなっているし。

まあ、今はそんなこと、どうでもいいか。ブラック企業働きをさせてしまったかもしれないことを労うために、僕も全力を出そう。

「そこで、だ。よく働いてくれているお前のために、僕のポケットマネーから臨時ボーナスを出そうと思うんだけど、白金貨1枚でどうだろう？」

「は？」

コーデリアの赤らんでいた顔が瞬時にいつもの能面フェイスへと戻った。

そして、傷口の汚れを拭き取るために濡らしたタオルをギチギチと絞り上げて、みるみるうちに水分を失ったタオルが僕の腕に押し当てられる。おいおい、これじゃあ汚れがちゃんと拭き取れないぞ。

「ま、待つんだコーデリア」

「何を待てとこののですか？」

「そ、そんなに絞ったら、ほら、水分がすぐにタオルから出ちゃうじゃないか」

だが、コーデリアは僕の制止も聞かず、水分のほとんど抜けたタオルで僕の腕の傷口を力任せに拭いていく。

「アッアッアッアッ！わ、悪かった、僕が悪かったから！そんなに、待って、動かさないで」

「あら、若様が悪かったのですか？ではわたくしめに、何が悪かったのか教えてくださいませんか？」

痛みで変な声が出てしまった。一方のコーデリアは、タオルを動かしながら、まるで射殺するような視線を僕に向けている。というか、ホントに痛いから！

「そ、その・・・一枚じゃ足りない？痛い、痛い！」

どうやら正解ではなかったらしい。タオルを擦る力が強くなり、逃れるためにもがいているせいで、腰かけているソファがギシギシと音を立てている。

「：そうか、アンジエのためだよな！金のためじゃなくて、アンジエのためにやってくれてるんだったよな!？」

僕の答えを聞いて、タオルを動かす手が止まった。よし、どうやら正解だったようだ。

「・・・わわかりきったことでしたね」

コーデリアは大きくため息をつきながら、再び水を吸わせたタオルを持ち、今度はほどほどの水分を含ませて、腕の汚れを拭き取り始めるのだが、その時、いきなり部屋の扉が開くと、

前につんのめるような動きでアンジエが部屋に飛び込んできた。

あれ？部屋の入り口あたりで何かに躓いてしまったのだろうか。

「兄・・・うえ・・・何を・・・るの？」

髪を下ろして、寝間着とカーデイガンを着ているので、もう眠るところだったのだろうか。

ただ、どういうわけか、アンジエの顔が真っ赤だ。もしかして、熱でもあるのだろうか。それだったら修学旅行なんて行かずに休んでいた方がよくないか？

ただ、怪我をした僕と、その手当をしているコーデリアを見て、次第に顔色は白くなっていき、表情も無へと変わっていく。

「ダンジョンで転んで怪我をしたから手当をしてもらってるんだが、今日は屋敷に戻ってきていたようだね」

「ええ、明日からの修学旅行の準備をしようと思ひまして」

「そうか、コーデリア。後はもういいからアンジェの手伝いを頼むよ」
「かしこまりました。後ほど、治療魔法を使える者を向かわせますので、きちんと手当を受けてください」

「へーへー、わかつてるよ。アンジェ、ちゃんとオリヴィアさんと仲直りするようね」

「はい。オフリーの件、兄上もご武運を」

「そのせいで、アンジェの護衛にと考えてた飛行船も引つ張っていくことになってしまった。すまない」

「大丈夫ですよ、王国内で遠出するだけですし、リオンも同じグループですから」

「そうだったな。油断は禁物だけど、楽しんでくるようね」

戦力としてはリオン君がいるから、パルトナーとアロガンツさえいれば、そんじよそこの相手なら全く問題はないだろう。

問題は修学旅行という非日常的なシチュエーションで、リオン君とアンジェにフラグが立つたらどうしようという心配だ。

常識的に考えれば、そんなことはありえないと思うんだが、コーデリアが以前に誤認していたことが僕の心の中で引つ掛かる。

リオン君がアンジェを決闘騒動で助けた動きが、まるでお姫様を助ける騎士のようだった、的なやつだ。いや、もともとアンジェはお姫様みたいなものだけど！

そんな二人に、修学旅行とかいう浮かれたイベントで何か起こってしまわないだろうか。

この修学旅行で、主人公様ことオリヴィアさんがリオン君と仲直りしてもらわないと僕が困る。頼むよ！頑張つてオリヴィアさん！

前世のようなネットがあればきっと僕は打算系オリヴィア派だろう。

二人のカップリングを心の中で願っていると、アンジェと部屋を出ようとしたコーデリアが小走りに戻ってきて耳打ちしてくる。

「それと若様、報告しようとしていた件ですが、手短にお伝えします」

「そういえばそんな話があったな。どうした？」

「先日、色々な勘違いをしていたメイドが急に暇を願い出て実家に戻りました」

「なんとも迷惑極まりない子だったな、理由は？」

「不明です。しかし、その実家に怪しい動きがあると“元同僚”から連絡がありました」

たしかあの子の妹はアンジェの取り巻きをしていたな。少し警戒しておくべきか、いや、まだ確証がない以上は変に警戒を見せるのも都合が悪い。

「急いで調べてくれ。オフリーを潰したら僕も動く」

「かしこまりました。若様もお気を付けてください。荒事に向われるのは・・・やはり心配です」

「君の手を煩わせないように気を付けるよ」

はあ、マーモリアのお見合い問題が片付いたと思ったら、また新たな問題が出てきたよ。

好きでこの世界に干渉しているわけではないのに、この世界は僕を過労死させたいのだろうか。

まあ、とりあえず、今回は、出先で怪我をしたときは、外で治してもらってから屋敷に戻るべし、ということだね。

☆おまけ☆

アンジェリカは翌日に控えた修学旅行の準備のために、公爵家の屋敷に戻ってきていた。

そして、夕食を済ませて、旅行の準備を終えたので、今日は早めに休もうと思ったあたりで、ふと窓から外を眺めていた。

タイミングがいいのか、悪いのか。ちようど窓の外では、兄がコソコソと闇夜に紛れて屋敷に入ろうとしているではないか。

普段の言動から、きっと兄はまた市中での女遊びから帰ってきたものだと判断し、公爵家が置かれた状況に照らして女遊びを控えるように伝えるべきだと考えたアンジェリカは、兄の部屋に向かうことにした。

しかし、兄の部屋の前にたどり着き、ドアノブに手をかけようとしたところで、中から話し声が聞こえてきた。

（まさか帰ってきて早々に、メイドを連れ込んだのか？今度の相手は誰なんだ・・・）

そのまま踏み込んで良かったのだが、ふとした好奇心でアンジェリカは聞き耳を立てることにする。

「コーデリア、君がこれまで色々と助けてくれた…ありがたいと思っている」

「わ、若様・・・」

「・・・次の世代のために・・・建国の聖女様に誓ってもいい」

「そ、そうですね。私も・・・」

「構わないさ・・・」

「ギルバート様・・・」

（コーデリアが口説かれているだ?!しかも次の世代って!?)

ドア越しであるため、単語だけが飛び飛びに聞こえてくるだけなのだが、つなぎ合わせると、まるで兄が公爵家内の宿敵であり、アンジェの側近ともいべきコーデリアを口説いているように聞こえる。

（悪くはない、いや使用人に手を出すのは良くはないな。確かにくつついてくれればいいとは思ったが、ずいぶんと急ではないか?!もしかして、何かのきっかけで、兄上はコーデリアへの想いがあることに気付いたのか!?)

兄と自分が最も信頼するメイドがいい雰囲気になっていそうな会話を耳にして、アンジェリカは自分の顔が熱くなっていることに気付く。きながらも、二人がくつついた場合のことを考える。

爵位的なことを考えれば正室は難しくても、側室としてなら嫁ぐことは可能だろうし、コーデリアであれば領地においても、王都にいても、公爵家のプラスになる仕事をしてくれることは間違いない。

無理やりくつつけても、白い結婚で終わってしまつては元も子もないとは思っていたが、聞こえてくるような雰囲気であれば、きちんと粘膜的な接触をするだろうから、その心配もないだろう。

アンジェリカは、理性とモラルを大規模に動員して、色々なシミュ

レーションを行う。

だが、そんなものを忖度しない物音が続けて中から聞こえてきて、追い打ちをかけてきた。

「ま、待つんだコーデリア」

「何を待てるというのですか？」

「そ、そんなに絞（しぼ）ったら・・・すぐに・・・出ちゃうじゃないか・・・アッアッアッアッ！わ、悪かった、僕が悪かったから！そんなに、待って、動かさないで」

「あら、若様が悪かったのですか？ではわたくしめに、何が悪かったのか教えてくださいませんか？」

「そ、その・・・足りない？痛い、痛いー！」

（お前がどうして暴走してるんだ、コーデリアアア!?しかも、そんなに激しい粘膜的な接触をするようなキャラだったのか!?!）

アンジェリカは思わず心の中でツツコミを入れてしまう。

創作物の世界では、そのようなこともあるという知識はあったものの、実際に耳に入ってくるのは初めてとなる刺激の強すぎるやり取りを聞いて思わず口を手で覆ってしまう。

しかも、何かがギシギシと鳴る音まで聞こえてくると、つい好奇心に抗いきれずに、アンジェリカは耳を扉に押し当てた。

（まさか、コーデリアが攻めで、あの兄上が受けなのか!?!リオン並みに人を煽って罵倒して、邪魔する者は力づくで排除する兄上が受けなのか!?!）

ただ、その強さが、興奮のあまりつい強めになってしまったせいで、実はしっかりと閉められていなかった扉があっさり開いてしまい、耳を押し当てた勢いでつい前のめりになってしまったアンジェリカはそのまま兄の部屋へと入ってしまう。

そして、顔を上げたアンジェリカの視界に入ってきたのは・・・単に傷の手当てをメイドにしてもらってるだけの兄の姿だった。

第32話 カチコミの前にあれこれ

妹の婚約を台無しにしただけでなく、あの乙女ゲーの攻略対象5人全員を誑かした女であるマリエ・フォウ・ラーファンは、僕と同じ転生者であることがわかり、乙女ゲーの世界であることをぶち壊すような殴り合いを繰り返してから数日後、僕はオフリー領の浮島に向かう公爵家の飛行船に乗っていた。

さらにその中にある、ゲストルームに入ると、ティーカップを片手に、お茶請けの菓子類を食べながら優雅に過ごす男が深々と椅子に腰かけている。

男は、目を閉じて紅茶の香りを楽しみながら、僕が来たことに気付くと、何も言わずにティーポットを手に取り、未使用のカップに新たに紅茶を注ぐ。

外側だけ見ると、整った顔立ちに優雅な仕草、まさしく貴公子というにふさわしいだろう、外見だけは。

男の名はジルク・ファイア・マーモリア。マリエに誑かされたあの乙女ゲーの攻略対象の1人であり、この国の大臣の娘との婚約を解消しただけでなく、妹に喧嘩を売った結果として廃嫡された屑男である。

こいつの妹とのお見合い話をぶち壊すために、やむを得ず手を組むことになり、オフリー討伐に同行させて鎧働きをさせる羽目になったしまった。だが、こいつを義兄と呼ぶことを避けられて本当に良かったとも思うところだ。

「ずいぶんと余裕だな。機体の整備は終わったのかい？」

「抜かりなく済んでおります」

「僕の機体に爆弾とか仕掛けても、すぐにわかるからな」

「そんなことをしたら、この船や周囲の公爵家の艦隊から消し炭にされてしまいますよ」

「お前ならやっても不思議じゃないと思っっているからな。僕に何かあったら、マーモリアの本家も分家もどうなるかわからんぞ」

なんといつても、決闘相手の家族を脅して爆弾を仕掛けさせる男だから、信用なんてゼロどころかマイナスだ。

しかも、能力そのものは優秀だから余計に夕チが悪い。

さらに、マリエとの殴り合いをした直後だから、ジルクから差し出されたティーカップを見て、毒でも入っているのではないかと疑ってしまう。

「毒なんて入れませんよー!」

「自分の信用のなさを呪うがいい」

「相変わらず嫌なことを言う方ですね」

「お互い、今はそういう立場だろう」

「・・・感謝はしてるんですよ。アトリー家ともあまり接しなくて済むように、ゲストルームに押し込めているというのも理解してます」

ジルクが、バツが悪そうな表情を浮かべながら弁明してきた。

「そう思うなら態度で示してくれ。夜遊び仲間だった相手を殴るのは、楽しくも、虚しいものさ」

「でしたら、お詫びにもう一杯、お茶を振る舞いますよ。ご希望の茶葉はありますか」

「雑巾の煮汁とかが入ってなければ何でもいい」

「少しは雅やかな趣味を持たれてはいかがですか?」

僕の外側は、公爵家の嫡男だなんていう、超上級国民だが、中身は前世が文系の社畜木っ端サラリーマンであるので、どうにも紅茶やお茶会というものに興味がわかない。

むしろ、過剰に濃いインスタントコーヒーの味が恋しくなるくらいだ。

「女の子を口説くためには、他のことに金と時間を使う主義なんだ」

「お茶を口説く道具として扱わないでください。味の違いが分からないと思われまますよ?」

「細かい味付けが気になって、偉そうにケチを付けなきや気が済まなくなることに比べれば、色々なものを気にせずにいられるほうが精神衛生にはいいと思うのでな」

「教養の問題では?」

「レッドグレイブの荒くれ者系若様の味覚は庶民派だった、というギャップがある路線のほうが領民や家臣からの好感度が上がりそう

じゃないか」

「学園在学中はロクにお茶会も開かず、辺境出身の男子達と王都で飲み歩いてただけのことはありますね。当時の女子生徒達からは相当不評だったらしいですよ。アンジェリカさんも、夜会等で色々嫌味を言われていたそうですし」

「その女の家、今回の討伐が終わったら教えてくれ。アロガンツ・ブロスで襲撃する。ところで、教養がありそうなのに実家から廃嫡されたジルク君に質問だ」

僕が嫌味を交えつつも話題を変えて質問を告げると、それを受けたジルクは、目元をピクピクさせながら不快そうな顔をする。

「何でしょうか」

「監査から逃れられず、追い詰められて有罪確定状態のターゲットが、モラルや法を無視して王国に最も大きな損害を与える戦術というのはどんなものがあると思う？」

ジルクは数秒ほど考えて、手元のカップの紅茶を飲み干すと、大きく息を吐きながらゆっくりと話し始める。

「艦隊が集結したところで浮島を丸ごと爆破し、諸々の証拠と一緒に全てを灰に帰して、混乱のドサクサに乗じて逃亡、といったところですかね。そうすれば、監査は空振り、王宮のメンツは丸つぶれ、集結した戦力が失われて各派閥は大損害となります」

怖っ！淀みなくスラスラとんでもないことを言いやがった。浮島まるごと爆破って軍人も民間人も全てひっくるめて巻き添えじゃねえか！

「フランプトン派閥大勝利！薄汚い未来ヘレディゴーといったところだな」

「何ですか、その頭の悪そうな表現は」

「気にするな。それよりも、さすが、綺麗な爆弾魔だけあって見事な発想だな。その選択肢はなかったよ」

「爆弾魔って言うのやめてくれませんか!？」

「僕なんて、屑女どもからは、通り魔って言われてるらしいぞ」

「・・・一緒にしないでください。話を戻しますが、オフリーがそこま

で盛大にやってまで、自分を切り捨てたフランプトン派閥に義理立てをする理由があるとは思えませんが、我々に甚大な被害をもたらす方法はいくつもある、ということですよ」

赤い通り魔と緑の爆弾魔のコンビか・・・前世の狸と狐な麺類が思いついて、ちよつと面白そうだと思つたのに、ジルクとしては不服らしい。

とはいえ、さすが若い頃から王太子を支えてきた知力系攻略対象だけあつて、作戦参謀としての能力は非常に高い。層な中身のくせに。「今回に限つては、お前が敵にいなくてよかつたよ」

「私はギルバートさんほど直接的な暴力へのハードルが低いとは思つていませんが？ 貴男と敵対したら命がいくつあつても足りる気がしません」

「見解の相違だな。僕は必要だと思つたときに仕方なくやってるだけなのに」

「ギルバートさんが陛下とも仲が悪かつたら、レッドグレイブ家は公国の次くらいに王宮から危険視されてますよ」

不穏なことを言うんじゃない。

パパ上が野心を燃え滾らせないように、ほんのりとしたうつけ者っぽさを出しているのが無駄になつたらどうするんだ。

ため息をつきながら、僕はジルクを入れてくれたお茶を飲もうとティーカップに手を伸ばして口に運ぶ。

・・・なんだ、この苦くて、満員電車でケバいOLが漂わせる香水のフレーバーみたいな匂いは。

「お前、よくこんなものを飲めるな」

「おやおや、やはり物事の良さが理解できるか否かと、生まれには関係がないのですね」

少なくとも、お前とは、味覚も価値観も女の趣味も分かり合えねえよ！

そのころ、オフリー領の領主の屋敷では、王都を出発した飛行船の

艦隊が続々と合流し、自領に近付きつつあるとの報告が上がっていた。

艦隊には、アトリー家やレッドグレイブ家だけでなく、フランプトン派閥以外のグループが広く加わっているのだという。

それを聞いたオフリー伯爵は、脂汗を流しながら、部屋の入り口近くのソファに目を向け、そこでくつろぐガビノに向かって声を荒げた。

「ガビノ殿！もう奴らはすぐ近くまで来ている！本当に大丈夫なのか？」

「落ち着いてください。指示したところへの戦力の配置は済んでのですか？」

「言われた通り指示は出した、準備は間もなく終わる。半分以上は金で雇った傭兵や空賊どもだが、時間稼ぎくらいにはなるだろう」

「よろしい、さすが伯爵、仕事がお早い」

そう言いながら、ガビノは立ち上がり、部屋の中央にある大きなテーブルに領内の地図を広げると、戦力を配置した箇所に、戦力に見立てた空のコップを置いていき、領主屋敷の所在するポイントを指さした。

「王宮側は、現在最も勢いのあるフランプトン派閥に配慮して、あくまで監査の形を取っています。そうとなれば、こちらから仕掛けない限り、まずは向こうがこちらの懐に入ってくる形となります」

「懐に入れるだと！迎撃するのではないのか!？」

「伯爵領の規模の各種調査やヒアリングとなれば、相当のマンパワーが必要となりますので、向こうの本隊が懐に入ったところを、一気に仕留めて、指揮を混乱させた隙に、隠していた戦力を動かしてください。後は、その混乱に乗じて・・・」

ガビノは話を続けながら、その指を領内の港の逆方向へと走らせて、オフリー領でも知る者が少ない隠し港のあるポイントで指を止めた。

「ここから、隠してあった小型の船で領内を脱出。その後、こちらの部隊と合流してラーシエルまでお連れしましょう」

「上手くいくのだろうか?」

「成功率を上げたいのであれば、捨て石にするオフリー家の戦力を増やすことをおすすめます」

(こいつ、よくも堂々と・・・)

伯爵に同席していた、飛行船艦隊の指揮官が心の中で毒づいた。

伯爵、つまり自分達の主人が、部下達を囷にして海外逃亡を図ろうとしていることは明白であった。言うまでもなく、自分達を守ろうとするタイプではない。

(赤い通り魔の言うとおりだったな・・・いや、わかりきっていたことだが)

そうなると、自分はどうかやって生き延びるか。

命を懸けて主人を逃がそうと思うことはできないので、自分が生き延びたとして、どこを損切りラインに設定するかを必死に考える。

「おいおい、その捨て石とやらに俺達も含まれているんじゃないやねえだろうな?」

指揮官の考えをよそに、別の男が口を挟んだ。

目つきは鋭く、ところどころが破けている服を身に纏い、腰のベルトには拳銃やナイフが吊るされている。顔や腕にはいくつもの傷があり、領主の執務室にいるような外見はしていない。

実戦経験も豊富なこの男は、先日、リオン達により討伐された空賊ウイングシャークの中で直接的な交戦を免れた残党部隊を率いており、オフリー家と自分達の繋がりがあったことを強請りのネタにして領内に潜り込んでいた。

「私の取引相手は伯爵個人です。仕掛けるタイミングくらいはお教えしますので、あとはご自分でどうにかしてくださいね」

「チツ! 外国のスパイが偉そうにしゃがって」

「事実の問題として、伯爵の生殺与奪を握っておりますので。残念でしたね」

当然のことながら、ラーシエル側に空賊達を受け入れる理由はなく、取り付く島は無かった。

リオンのパルトナーや公爵家の艦隊と接触せずに済み、残党狩りか

らも逃れてオフリー領に逃げ込むまでは運良くことを運べたものの、逃げ込んだ先が王国に討伐されそうになっており、端的に言えば詰みかけている状態だ。

一方のガビノは空賊の男の頭から爪先までを一瞥して、王国に損害を与える術に関する考えを巡らせていた。

神聖王国より預かっている、手元のロストアイテムは特殊な訓練を受けた者が使つてこそ最大限の効果を発揮するが、その“素材”は使い捨てとなる。

兵士の訓練には時間も資金もかかることを合わせて考えれば、現地調達した素材を使えた方がコストを抑えることができる。

(聖騎士の数は限られていますからねえ。頑丈そうな贄があるのであれば、有効に使うとしましょうか)

各派閥から出された飛行船の艦隊のほとんどが集結を終えて、オフリー領の浮島の近くまで到達したところで、

主要な勢力の代表達が、今回の動きの中心となっているアトリー家の飛行船に集まっていた。

僕も公爵家の艦隊の幹部数人を連れて、アトリー家の飛行船のブリーフィングルームに足を踏み入れると、既に集まった他派閥の面々が用意された椅子に座つて、色々と情報交換を行っていた。

そんな脇では、アトリー家の騎士達が作戦会議で使う資料をほとんど運び込んできていて、騎士も文官も総動員で届いた資料を各派閥へ配付している。

監査の主力部隊も動員していることから、アトリー家はほぼ総動員のような状態なのかもしれない。

ジルクを留守番させてよかった。

そんな中で、僕が部屋に入ってきたのを発見した文官達数名がこちらに手を振りながら近付いてきた。

「ギルバート様〜こつちですよ〜」

言うまでもなく、王宮で国境周辺の監査の仕事をしていたときの同

僚だったアトリー家の文官達である。

彼らのフレンドリーと言っても差し支えない態度を見て、僕の後ろにいた公爵家の騎士の表情が険しくなる。少し宥めておいた方がよさそうだな。

「少々気安いではありませんか？」

「昔の同僚さ。僕は、彼らと同じ釜の飯を食って仕事をしていたんだし、王宮での物事の動きを学ぶことができたのも彼らのおかげだ」

「他の派閥の目もあります」

「釘は刺しておくからそんなに睨まないでやってくれ」

うちの騎士達の心境は、うちの若様に気安く手を振りやがって！というところなのだろう。

一言くらい注意しておこうと、僕もアトリー家の文官達の方向へ向かって歩いていく。だが、僕が口を開く前に、文官の1人が先に小声で囁きかけてきた。

「突然すみません、会議の前に大臣がお話したいそうです。隣の控え室にお越しいただけますか」

「・・・何があつたんですか？」

「詳しくは大臣からお伝えします。お供の方々はご案内しておきますので、こちらに」

普段は比較的フランクに接してくるタイプなのに、ずいぶんと深刻そうな顔をしている。何か想定外なことが起きていることは想像に難くない。

やはり今回の討伐戦は一筋縄ではいかないようだ。

おまけ

気付けばいつの間やら話数が30話、合計文字数が20万字を超えてしまった（読者の皆様ありがとうございます！）とところで、兄上様があの乙女ゲー（アルトリーベ）等について知っていること、知らないことを整理しようと思います。

○知っていること（主に本編中に出てきたもの）

・ぎつくりとしたあらすじ（主人公が平民出身のリビアでゲームの

後半には聖女認定される、攻略対象は5人、そのうち公国が攻めてくる、オフリー家は公国と繋がっている、アンジェが断罪されると公爵家は落ち目になっていく等)

・前世の妹におねだりされて買わされた、アルトリーベに出てくるいくつかの課金アイテム(黒っぽい鎧(≡魔装)、ルクシオン(本体))

・マリエは転生者

○知らないこと

・マリエ以外の転生者

・ルクシオン(◎)

・聖女認定されるための条件となる(呪いの)アイテム3点セットの存在と所在

・王家の船の存在(アルトリーベ内で、具体的にどうやって公国を撃退するのかという手法)

・アロガンツがルクシオン製の機体であること

おまけその2

まだ1回しか出てませんが、主人公機を出すか決められた後は、アロガンツのパチモンを使おうと思ひ、アロガンツ(初期バックパック)とアロガンツ(シュヴェールト)の間をつなぐようなものにするにしました。

その結果、アロガンツ・ブロスの武装等の設定は、ざっくり言うと、以下の感じです。興味ない人、すいません。

・(赤い)グレイブ↓シュヴェールトに収納されている大剣(刺せば“インパクト”を使える武器の)試作品という位置付け。

・背部大型ウイング↓魔改造後のシュヴェールトの試作品

・肩部ツインビームキャノン砲↓中距離から遠距離を1機で幅広く対応できる武装としたが、シュヴェールトでは採用されなかった。ちなみに、不採用の理由としては、シュヴェールト合体後のオリジナルのアロガンツは、ルクシオンが基本的にはほぼ全てをサポートするため、命中精度の高いホーミングレーザーと、威力を向上させた携行火器を状況の応じて使い分けたほうが効率的だと(ルクシオンが)判断されたため(という設定)。

第33話 気持ちを落とすなら意識ごと落とせ

アトリー家の文官達に案内されて、ブリーフィングルームに隣接した控室に入った僕を待っていたのは、彼らの主であり、ホルファート王国の大臣を務めるバーナード・フィア・アトリー伯爵だった。

大臣は僕が陛下の暗躍により国境沿いの監査の仕事をしているときの上司でもあり、“あの一件”があるまではよく顔を合わせる仲でもあった。

ソファに腰変えて、笑顔を浮かべながら僕に手を振る大臣は少し疲れているようにも見えるが、今回の監査兼討伐の相手がフランプトン派閥の中でも財務的な意味で重要であったはずで、しかも、評判が相当悪いオフリー家であることから、色々な負担があるのだろう。

「お久しぶりです、バーナード大臣」

「ギルバート君は王宮を飛び出しても大活躍のようだね」

「いい年して、父には怒られてばかりですけどね」

「公爵の許可もあって非常勤顧問はやってくれているのに、ちっとも顔を出してくれないから寂しかったじゃないか」

おっと、先手を取られてしまったな。

“あの一件”、つまり、繁華街で大臣の娘であるクラリス嬢が、ジルクに婚約破棄されてヤケになり、巫人複数名と夜のラブホ街に消えていきそうになったのを、アトリー家の文官達に頼まれてその淫行を阻止した際に、

強めのアルコールで嘔吐寸前だった僕の腹にクラリス嬢のボディブローが突き刺さり、僕がリバース的なマーラインとなり、その飛沫がかかっただけでなく、クラリス嬢自身が2体目のマーラインというか、もらいゲ○をしてしまった事件以降、バーナード大臣とは疎遠になっていた。

そこをいきなり大臣が突っついてくるとは・・・

僕にだって言い分はたっぷりあるけど、相手が大物貴族だとか云々関係なく、もらい○口させてしまった女の子の父親とどんな顔して会

えばいいんだよ!?

迷惑をかけられたのは専ら僕の方だと言いたいが、公爵家の嫡男と伯爵家の令嬢が公道で揃ってマールライオンとなったなんて酷すぎて性悪貴族だつて噂にしがたい醜聞だよね。

「その節はご迷惑をお掛けしました」

「まあ、それはこちらが世話をかけてしまったところもあるからね」
「家どうしのトラブルにするつもりはこちらもないんですけど、僕をあの場合に巻き込んでくれた、その元同僚達を一発ずつグーで殴つてもいいですか?」

そう言いながら僕はニヤニヤしながらこちらを見ているアトリー家の文官衆を指さす。

「今回の件が終わつたらにしてくれとありがたいな」

「了解です。それで、僕をお呼びになったということは状況があまり良くないということでしょうか」

想定されたのは、先行偵察の結果、領内がガチガチにガードされていて、どのように武力で突破しようか悩んでいるところだな。

汚い金が豊富にあるし、空賊ともつながっていたというのであれば、戦力をかき集めるのも難しくはないだろう。

「良くないというか、全く読めないというところだ。ここまで浮島に接近しても迎撃はなく、調べてみても領内に平時の警備以上の態勢が敷かれている様子もない。既に空賊とのつながりや違法行為の証拠は少なからずそろつていて、捕まれば処刑は避けられないはずなのにね」

「潔さだけは貴族らしかった・・・というような連中ではありませんよね」

「だったら僕も楽なんだが・・・何と言っても、商人が大金をはたいて乗っ取つた家だ。生き残るために何をしたつて不思議はない。王国のためにも、今、始末をつけられるなら逃してはおけない」

大臣の言葉からは、ビジネスや派閥の利害関係を越えた、責任感のような意識があることが伝わってくる。

奥さんに完全に調教されていても、貴族としての高い意識とか誇り

とかプライドのようなものは健在なのだろう。

僕自身はたぶんオフリー家の連中が、僕やアンジェに何もしなかったら、嫌悪こそしても、どうにかすべきかと考えはしなかったと思う。前世が社畜の下っ端リーマンな僕に、ノブレスオブリージュなんていう価値観は搭載されていない。

あるとしても、出資者というか納税者に対する幾ばくかの道義的責任くらいだろうか。税金というはどうしても取られるもの、という意識が強くて、特に手元から使うときに若干の気持ち悪さが残ってしま

う。

「ちなみに浮島ごと爆破して、僕らもろともすべて消すつもりじゃないかって言う奴もいましたよ」

「誰かはわからないが、そんな発想をする人でなしが、向こうにいないことを願おうか・・・まさかギルバート君じゃないよね」

「僕ならそんな発想しそうに思えるんですね」

「そ、そうじゃないよ!?ただ、ほら、レッドグレイブ家は過激な人が多いからさ!ギルバート君も、たまに敵対した相手に容赦がないじゃない?」

「僕は陛下から任じられた職務を忠実に果たしただけだというのに酷いですねえ」

それを考えた人でなしは、大臣の義理の息子になる予定だった男ですよ、と言わなかった自分の習熟した精神を褒めてあげたい。

ストーリーメンタルなクラリス嬢もたいがいだけど、ジルクの人格の屑っぷりも相当だからなあ。貴族の結婚が個人の意思に重きを置かない家どうしの契約の側面が強かったとしても、あの二人って、くつついてもうまくいったのだろうか疑問だ・・・

ん、そういえば、大臣は今、レッドグレイブ家は、と言ったよな。僕や、当時の王太子である馬鹿王子に決闘を挑んだアンジェは言うまでもないかもしれないが、もしかして。パパ上も昔はずいぶんヤンチャしてたのだろうか。

「話を戻そうか。この作戦が終わった後のことを考えると、今回不参

加のフランプトン派閥以外の勢力の損耗はできるだけ抑えたいというのが陛下のお考えだということとはわかるね？」

「オフィーのヘイトが集まる上に武闘派で戦力が充実しているであろう公爵家の部隊に、戦力が多く集まっている軍関係の主要施設を抑えてほしいので、事前に根回しをするべく呼ばれた、ということですね」「それだけではないんだが、頼めるだろうか」

「……言いたいことがないわけではありませんが……大臣のことで、バルトファルト男爵から譲り受けたロストアイテムの性能を踏まえているんですよ。あの鎧を持つうちの部隊が動くのが被害を最小限にするために最適だというのは理解できます」

「助かるよ、先陣を切ってもらえれば寄せ集めた戦力の士気も上がる」
大臣の言いたいこともわからなくもない。

そもそも、この発端が、学園祭での僕やアンジェがオフィー家と揉めたり、オフィー家と繋がっている空賊退治をやったことだ。

中立的な立ち位置の派閥であるアトリー家は、中立であるがゆえに矢面に立たされた、いわば被害者だという意識があつたとしても責められるものではないだろう。

王宮内の勢力の話としては、レッドグレイブ派閥とフランプトン派閥の争いに過ぎなかつたはずなのに、今回の作戦では他の派閥が丸ごと巻き込まれた形となっている。

フランプトン派閥以外、つまり王国全体の意思としてオフィーを討つという形と大義名分がなければ、組織としての意思決定に持ち込むことができないくらい、フランプトン派閥の影響力が今は強くなっている証拠でもある。

「僕は兄妹揃って連中とは因縁がありますからね。この件については、元上司の顔を立てさせていただきますよ」

「この件以外に何かあるような言い方だね」

「そこにいる元同僚から聞いてますよ、”うちで面倒をみている”バルトファルト男爵を色々調べているそうじゃないですか」

「クラリスがようやく立ち直り始めたものでね。お礼をしたいと思いますよ」

「リオン君」の女性関係も洗っているみたいですが？」

「娘が気になっていろいろらしい相手だ。父親としては気になるじゃないか」

ファーストネームを出して、リオン君との親密度でマウントを取ろうとしたら、娘LOVEの親馬鹿目線で対抗してきたか。さすがに手強いな。

「爵位の釣合いが取れなくて御息女が安く見られてしまいますよ」

「それくらい、アトリー家ならどうにでもできるから問題ない。それにぽつと出の政略結婚相手よりも、くつつくまでにストーリーのある相手のほうが話題にもなるだろう？」

ぽつと出の相手、ということとは僕が公爵家の関係者から相手を宛がうつもりだと誤認しているのだろうか。

ストーリーというなら、ある意味、オリヴィアさんはあの乙女ゲーのシナリオという名のストーリーに裏付けられたリオン君の相手だから、負ける要素はないだろうが、大臣が誤認しているのであればそのままにしておいてもいいか。

「公爵家の体面を守ってくれた男爵の面倒は、次期当主である僕が責任をもって見ますので、ご心配には及びませんよ」

「そんなふうには王都の外で有望な若手を困い込んで、仲良しごっこを楽しむなんて、相変わらず領主貴族はずるいなあ」

「彼は辺境出身の三男坊ですから、宮廷貴族の、しかも中立派の大物アトリー家の御令嬢が相手になったら家の付き合いの負担が重くなってしまう。領主貴族をあんまりいじめないでやってください」

「いじめるだなんて人間きの悪い。それに王家の血筋に連なる公爵家に関与するほうがプレッシャーになるんじゃないのかな？」

「そこは、男爵自らアンジェの決闘代理人になって元王太子殿下達を打ち負かしたのですから、うちに関して言えば多少の付き合いは覚悟の上でしょう」

僕と大臣による、互いに笑顔を浮かべながらも、お前には絶対にはリオン君は渡さないぞという意地の張り合いが続いていたのだが、そこにカットインしてきたのはアトリー家の文官達だった。

「大臣、ギルバート様、熱くなっているところ恐れ入りますが、そろそろ会議が始まる時間ですので、ご準備願います」

「そうか、すまないね。娘のためにとしようと、つい力が入ってしまった」

「こちら申し訳ない。有望な若者の将来が気になってしまいました」

お互い、先々のことを考えて熱くなってしまったようだ。

前世の年齢を加えて計算すれば、僕もアラフォーかアラファイフだから、いい年したオッサンが2人して、高校1年生くらいの男子の結婚について、その男子を自分の手元に置くべく熱くデイスカッションしていたことになる。

なんて気持ち悪いシチュエーションだろう。

とはいえ、やっぱりアトリー家はリオン君を狙っていたか。いや、むしろノリノリで取りに来てるな。

くそ、この流れは、元の攻略対象5人全てが魔女に誑かされていることも踏まえると、ゲームの展開的によろしくない上に、僕の将来的にもよろしくない。

リオン君をアトリー家に取られてしまったては、アロガンツや巨大飛行船パルトナーという特記戦力をアトリーが手にすることになる。

僕のアロガンツ・ブロスだって、ロストアイテムである以上、重要な部品等は発見したりリオン君の手元にしかないはずで、大掛かりなメンテナンスは彼にしか頼めない。

そうなると、僕が将来的に当主になっても、リオン君を奪われたら、常にアトリー家の顔色を窺わなければならなくなる。

あれ？これって、主人公ことオリヴィアさんの頑張りに公爵家の未来がかかっている状況になってないか？

ギルバートが自分の将来の不安を危惧している頃、リオンは、修学旅行中の豪華客船を襲撃してきた公国の先遣艦隊との戦いと予想だにできなかった修羅場のど真ん中にいた。

公国の旗艦から、アンジェリカを救出した後、別の飛行船が豪華客船に突撃してきた衝撃で船外へと落下したリビアをなんとか海面すれすれで拾い上げたまではよかったが、

肝心のリビアとの距離感を置き始めていたリオンは、“オリヴィアさん”という名前の呼び方をきっかけにして、胸元で大泣きされてしまい、二度目の人生にして初めて、自分が当事者となる男女の修羅場に放り込まれていたのである。

自分がこの乙女ゲーの世界のモブに過ぎないから、ゲームシナリオの展開上、主人公であるリビアとは一定の距離を保ち、攻略対象の男子の誰かとくつついて幸せになってほしい、少なくとも自分よりはマシなはずだと考えるリオンであったが、そんな心情を相手を知るはずもない。

リビアがくつつくべき相手として、攻略対象5人を一人ずつ挙げてみると、嫌い・腹黒・ナルシスト・脳筋・構ってちゃん、とそれぞれ特徴を掴んだ一言でバツサリ斬り捨てられてしまい、笑いを堪えるために腹筋が痛くなってくる始末だ。

その上で、これまでのように、自分やアンジェと一緒にいたいのだとリオンは畳みかけられてしまう。

（あれ・・・これだと王家の船が動かさなくなつて、詰んでないか？）

リオンの脳裏にバッドエンドの文字が浮かんだ。

あの乙女ゲーのラスボスは、自分の持つ最高戦力である、チート戦艦こと宇宙船ルクシオンの力を持ってしても、滅ぼすことは難しい。

リオンの認識としては、攻略対象の誰か又はリビアによつて王家の船を動かさないと、ラスボスを倒すことができない、というものだ。

（誰か、他に誰かオリヴィアさんの好感度が高そうな奴はいないか・・・そうだ！）

リオンの脳裏に、今度は、高笑いするギルバートの顔が落下してきて、先に浮かんでいたバッドエンドの文字を粉々にする場面が浮かんだ。

スペックだけ見ても、悪役令嬢の兄という、攻略対象にもなり得る属性を持ち、顔面も財産も申し分ない上に、レッドグレイブ家には王

家の血が入っている。

つまり、攻略対象であるユリウスの親戚のようなものだから、王家の船を動かせる資質があるはずだという理屈だ。

あの乙女ゲーには全然出てこなかったのに、この世界では国境沿いの監査を派手にやっていたり、亜人十数人との血みどろの乱闘騒ぎを起こしたり、リオンを元気づけようと娼館に誘おうとしてアンジェリカにしばかれたりと、

マリエと同じような転生者である可能性も否定できない程度には“キャラが立っている”相手ではあるが、ラスボスを倒すため、そしてリビアをくつついてくれるのであれば大した問題ではないだろうと思えてくる。

しかも、ルクシオンの情報によれば、リビアに愛人にならないかと誘ったこともあったはずだ。

「じゃあギルバートさん！」

「責任逃れの恋愛中毒者！」

「でも、金持ちで顔も良くて、アンジェエのお兄さんで優しいじゃん！」「いい人ですけど、気軽にイチヤイチャできる相手がほしだけじゃないですか！」

「そ、それは・・・」

学園卒業後も、色々な理由を付けて貴族との政略結婚を避けつつも、あちらこちらで平民や騎士階級出身の女性に手を出すギルバートのことも的確に斬り捨てたりリビアの切り返しにリオンからの反論は出てこなかった。

そして、リビアは、ギルバートの名前を聞いて、彼から言われた言葉を思い出す。

のらりくらり逃げるなら・・・言葉に出すタイミングはもうここしかない判断した。

おもむろにリオンのパイロットスーツの首元を両手で掴むと、触ったことのないような不思議な手触りがしていて、力が伝わっているかわからない感じであった。

そのため、逃げられないように、魔力を込めて思いつき力を込め

て首元を締め上げてから、秘めていた言葉を紡ぎ出す。

「私は・・・」リビアはリオンさんが大好きです！それが全てです！私は貴方が好きです！」

一方のリオンは、涙目になったリビアの告白を受けて、自分が今、前世と今世を合わせても初めての恋愛的な修羅場にいるのだということにようやく気付いた。

色々な考えが頭に浮かんでは消えるのを繰り返し、自分がどうしたいいのかをゆつくりと考え始める。

自分はこの世界のどこにでもいるような人間、主人公やと攻略対象が仲睦まじくしているところを映したスチル背景に溶け込んだ無個性な観客でしかないという考えは、リビアの言葉によって激しく揺らいでいる。

転生者という、この世界にとっては異物のような存在がこれ以上世界に影響を与えてもよいものなのかとも思っていた。

だが、徐々に別の思考もリオンの中に入り込んできていた。

目に涙を浮かべながら、ヘルメットのバイザー越しに自分のことをまっすぐに見つめてくるリビアが締めている自分の首元の圧迫が強くなっているのである。

気のせいなのか、リビアの体の周りに纏われている魔力がどす黒くなりつつあるように見える気がする。

(や、ヤバイ、このままだと締め落とされる!?)

だが、意識的な恋愛経験の乏しいリオンは、目の前のリビアを巧くいなしてこの状況を流す術が全く浮かばないどころか、物理的に捕獲されて逃げ場を失っていることに気付く。

好意を持たれていることの嬉しさがあることは否定しないが、迷いや葛藤、そして、チート主人公と呼ばれるだけの強い魔力を持つリビアに首を締め上げられていることの恐怖が徐々に大きくなってきて、生命の危機を感じるとともに、もうこの場を口先で逃げることはできないのだと判断せざるを得なかった。

「わ、わかったよ、リ・・・リビア・・・上に戻るから・・・しつかり背中に掴まって」

リオンにとって、身内以外から初めて好意を正面からぶつけられたシチュエーションは、命の危機と隣り合わせの恐ろしいものとなってしまっていた。

背中にしがみついたリビアの胸の感触へのドキドキ以上に、自分の命があのままだったら危なかったのではないかというドキドキが頭を支配していた、と後世でリオンは語ったとか語らなかったとか……（マスターのスーツは特注品で外圧には強い仕様なのですが……まあヘタレなマスターにはいい経験になったのかもしれないので、良しとしましょう）

第34話 家臣は主に似なくてもいいのに

バーナード大臣達との事前打ち合わせどおりの合同作戦会議を終えて、公爵家の戦艦に戻った僕は着替えを済ませて鎧の格納庫に来ていた。

プロトタイプアロガンツあらため、アロガンツ・ブロスのコックピットで最終チェックを済ませると、内部のスピーカーから明るい口調の人工音声が届いてくる。

「マスター！だいぶ疲れがたまってるみたいだよ、ちゃんと休んでる？食事の栄養バランスに気を付けてね！」

何らかのセンサーで僕の身体の状態を測定して健康の度合いを把握しているのだろう。

気遣ってくれるのはうれしいが、プライバシーという概念を導入してほしい。

そして、話す内容が妙にオカンじみてきているような気がする。

「体は元気さ、気疲れしているだけだよ」

「その原因、減ぼす？」

「過激だね。でも減ぼしたら今度は別のことでもっと疲れるからやめておくよ」

「わかった！マスターは割と面倒くさがり。アロガンツ・ブロス、学習した」

「ははは、酷いこと言うなよ、相棒。僕はこんなにも働き者だっていうのに。ところで、出撃準備はできているかい？」

本来は実家の権力と財力にあぐらをかいて、酒池肉林、贅沢三昧な暮らしをすることだってできるのに、自分が将来困らないという目的のためとはいえ、

実家や自分の戦力を増強したり、国に不満を持つ辺境の貴族達のカス抜きをしたり、妹の通う学校に顔を出して敵対派閥の使用人と血みどろの大乱闘をしたり、空賊を討伐したり、将来の聖女様の恋路を実らせるためにあつちこつちで裏工作をしているというのに。

よくよく思い返してみると本当になんで僕は前世並みにこんなに

働いているんだらうかと少し悲しくなってくるね。いや、たぶんある程度働いてないと落ち着かない貧乏根性が魂に刻まれているのだからね。

「うんーコンデイションはオールグリーン！いつでも出られるよ！」
「よし、じゃあ因縁のオフリー家をぶん殴りに行こうか！アロガンツ・ブロス、出るぞ！」

今回も、公爵家の艦隊の指揮はベテランのキャプテンに任せて、僕は鎧働きに徹することになっている。

本来は、公爵家の跡取りという立場の僕が全体的な艦隊の指揮を執らなければならぬのだろうが、アロガンツ・ブロスという強大な力を持つロストアイテムを手にした僕が前線で戦った方が、全体的な犠牲ははるかに少なくて済む。

というか、アロガンツ・ブロスの防御性能を考えると、鎧の中にいたほうが安全のような気がする。

散発的な戦闘もなく、僕達は制圧を担当することになっている港近くの軍事基地に到達する。

目視でも基地敷地内には、20隻以上の飛行船や100機以上の鎧の姿が見えるほか、解体中か鹵獲品と思われるボロボロの飛行船が数隻配置されている。

飛行船の中には、先日の空賊討伐の際に、リオン君が鹵獲した空賊を横取りしようとして、うちの艦隊と対峙していた船もある。

素早く部隊を展開していた公爵家の鎧部隊は、基地施設に対する突入を開始し、主だった抵抗もなかったというのもあって、敵基地の制圧はあっという間に終わってしまう。

一応、建前は監査であるし、オフリー家の側にも堂々と抵抗する大義名分はなかったのだろう。

騎士というか軍人達が事務仕事をするための建物からは、両手を上げて降伏の意を示した者達がぞろぞろと出てきている。その中には、先日の空賊退治のときに、僕と嫌味皮肉をぶつけあった指揮官の姿もあった。

知らない顔じゃないし、挨拶くらいしてやろう。

・・・決して、オフリー家に対して蓄積していたヘイトを、一方的にぶつけてやろうと思ったとか、そういうわけじゃないからね！

「奇遇ですねえ、こんなところでお会いできるとは思いませんでしたよ」

アロガンツ・ブロスのコックピットから体を乗り出して声をかけてきた僕の姿を見て、オフリー家の艦隊の指揮官は露骨に嫌そうな表情を浮かべる。

本来であれば、失礼を通り越して無礼すぎる態度だと言えるのだが、まあオフリー家がもう逃げようがないくらいに追い詰められていることを考えれば、このくらいの開き直りくらいしても不思議じゃないか。

「大部隊で押しかけてきて、戦争でも仕掛けにいらっしやいましたか？さすが公爵家。平民あがりに対するイジメに金をかけすぎじゃないですか？」

「金にモノを言わせているのは一体どっちだか。それに、空賊達と濃厚にお付き合っているところにお邪魔するんです、警戒するのは当然でしょう」

「一軍人である私には分かりかねますな」

「仕えた相手がとても悪かったのだらうと心の底から同情くらいはして差し上げますよ」

「その同情を何かの代価にできないのであれば要らぬご配慮です」

同情するくらいなら換金できるものでも恵んでくれ、ってか？

なんか前世でそんな感じのオーバーオールを着たロリツ子主演で、全然中身が甘〜い！とは言えなかったドラマがあったと聞いたことがある。

さすが金の力で下級貴族の家を乗っ取り、汚れ仕事とさらなる金で伯爵にまで上りつめたオフリー家の人間だ、主の金への執着心は、部下達にも染み渡っているらしい。

家臣は主に似てくるものなのかな。

「ところで、戦力はここにあるもので全てですかね？」

「この基地にあるものは、今、貴方がご覧になっているもので全てです

よ。領地外に出ている戦力はいくらかあると思います」

「僕は監査部隊の非常勤顧問の肩書を持っています。嘘を言った場合、貴殿個人にも不利益となりますから、後々のこともしつかり考えて答えることをお勧めしますよ」

オフリー家の指揮官の目元がピクリと動いた。感情の動きを隠し切れなかったのだろうか。

思い返してみれば、この男は、自らの身を賭してでもオフリー家に忠誠を尽くそうというタイプではなかった。

リオン君が捕縛した空賊の身柄引き渡しを巡って僕と対峙した際にも、主であるオフリー伯爵の性格や想定される動きを踏まえて、自らが責任を押し付けられてトカゲの尻尾にされるのを巧みに回避しようとしていたのを思い出す。

「ここからは、僕の独り言です。今の立場を保障できなくても、衣食住に困らない程度に取り計らうことは、僕なら容易ですよ。色々な相手に手広く恩を売ってきたのでね」

これは前世の世界にもあった司法取引のようなものだ。

場合によっては顔や名前も変えてもらうが、この男なら、オフリー伯爵に捨て駒にされないようにするために、何らかの情報を隠し持っていて不思議じゃない。

僕個人としてはあまり好感の持てるタイプじゃないが、今回の作成の肝は、ただ勝利することではない。

味方の損耗を最小限にとどめて勝つ、というものだ。

スパ○ボでいえば、勝利条件は敵の全滅だが、味方NPCが何機以上撃墜される、みたいなことが敗北条件に入っているようなシナリオだろうか。

誘いに乗ってこい。僕はお前の性悪さを信じているぞ。

小悪党1人見逃して大損害を免れるなら、そのくらいの濁った水、飲んでやるさ。

「・・・表現を訂正します。当家の艦隊の指揮官として、この基地内で所管している戦力は今、そちらの部隊が制圧しているもので全てです」

面白い言い方だ。オフリー家の正規軍以外の戦力が領内に、いや、この基地にいるということか。

順当に考えれば、裏で繋がっていた空賊ウイングシャークの残党あたりだろう。

「なるほど。それならば貴方が管理できない戦力はどちらにいますしょうね」

「所管していないような戦力の所在と言われましても、お答えするのは難しいですね」

そう言いながら、視線を逸らした。その先にあるのは、解体中ということで基地施設の端っこに並んでいるボロボロの飛行船だ。

「あの飛行船は？」

「空賊から接収したのですが、使えないくらいボロボロだったので解体中です。崩れると危ないので、近付いて何かあっても責任は取れません」

解体中とはいえ、飛行船サイズの質量が崩れたら、さすがの鎧もタダでは済まないから搜索を後回しにしていたが、そこに戦力を隠していたということか。

しかも、通常であれば、飛行船の中には、その質量を浮かすための浮遊石も搭載されており、相応に価値があるものだから、普通であれば、解体中の飛行船を乱雑に攻撃するということは滅多にない。

「ブロス、念のため索敵を頼む」

アロガンツ・ブロスのコックピットに戻った僕は周囲の敵を探らせる。

以前の空賊討伐の際にも、アロガンツ・ブロスはいち早く敵の別動隊を察知していた。

それって、既存の鎧や飛行船の持つ索敵能力があることだよね、さすがロストアイテム。

「・・・索敵完了！結果をモニターに映すね！」

表示された画面に目を向けてげんなりとした気分になった。

それぞれの飛行船の中には、けっこうな数の鎧が潜んでいるようだ。

モニター上に映る飛行船の中に、鎧の存在を示すアイコンが大量に点在している。

前世のゲームやアニメの知識があればこそ、そんな表示もあつさりと受け入れられるが、このような機能は、この世界の普通の鎧には多分ない。

・・・やっぱりロストアイテムつてチートすぎないか、というセルフツツコミを心の中で思わずしてしまうが、それを使って僕の将来的な安全を买えるなら、そのチートに乗る以外に選択肢はないな。

アロガンツ・ブロスを解体中の飛行船に向かわせて、閉じている鎧の発進用出入り口に近付く。

ちなみに、部下達や形ばかりの護衛は、正規のオフリー軍の制圧に当たらせている。

本来なら、彼らに隠し戦力を探らせるべきなのだろうが、アロガンツ・ブロスなら、敵の不意打ちをくらってもダメージはほとんどないので、反対を押し切って僕一人がここにいる。

部下達は将来にわたって貴重な戦力だ、一人でも多くの騎士達が、僕が実家を継いだときにも残っていてもらう必要があるしね。

そして、出入り口を外から開くためのスイッチにアロガンツ・ブロスの手をかけようとしたところで、飛行船の壁を突き破って数機の鎧が飛び出してきた。

炙り出された、ともいう。索敵どおり潜んでいたようだ。

あまりに僕が予想した通りの展開になってしまったって、前世であった某通信教育教材のご都合主義展開マンガを思い出してしまったね。

たしか、進○ゼミをやれば、勉強、部活、恋愛、みんなうまくいくよ！的な話だった。

さて気を取り直して、ここはひとつ、圧倒的な戦力差を見せつけて、相手の心を折ってしまうか。これがもつとも早くこの場の戦闘を終わらせる方法だろうからね。

飛び出してきた鎧は、機体各所に継ぎ接ぎがあつたりして、正規軍のものとは思えない。空賊か、もしくは傭兵のものだろうか。

しつかり戦闘モードになっているようで、既に安全装置を外したと

思われる火器の銃口を、アロガンツ・ブロスに向けている。

よし、ここは一通り敵の攻撃をくらっておいて、“やったか!?”と思わせたところに、爆炎の中から無傷で現れるという、“今、何かしたか?” “ムーブをきめてから、一撃で相手を殴り倒すくらいしてやろう。”

“やったか!?” は、やれてないフラグだ、とはよくいったものだ。これをすれば決定的な戦力差をすぐに理解できるだろう。

そんなふうにしていたところで、敵の鎧の頭部から首元にかけての部分が、丸ごと吹き飛んだ。いや、正確に言えば、後ろから放たれた弾丸によって抉り取られていた。

さらに、僕とアロガンツ・ブロスが踏み入ろうとした飛行船の中から出てくる鎧に加えて、他の船から出てきた機体も、順次、撃ち落されていく。

なんかこう・・・左右から飛び出てくる的を撃つクレイ射撃を見ている気分だ。

高威力の銃火器による、精度の高い狙撃だ。高い技術、能力がなければできない芸当だ。それ故に、犯人の特定はすぐにできる。

コックピット内の通信機のスイッチに目を向けると、自動的に接続された。

相変わらずアロガンツ・ブロスのAIは優秀だ。思考、いや視線の動きを読んだのだろうか。いずれにしても仕事が早い。

「火力が強すぎないか」

「ご無事で何よりです」

「あんな連中の攻撃なんて避けるまでもないからな」

「でしょうね。ギルバートさんのことですから、相手に圧倒的な力の差を見せつけて心を折ろうとしたのでしょう?」

「かつて心を折られた張本人が言うと言得力が違うね」

「まったくいい性格をしていますね。さすがバルトファルトの黒幕」

そういえば、決闘騒動でのリオン君の背後には僕がいた、という誤解が貴族社会の中ではある程度広がっていたな。僕に都合がいいから放置していたのを忘れていた。

まあ、実際問題として、現時点でリオン君の武力以外のケツ持ちをしているのは公爵家だから、あながち大きな間違いではないんだけど。

飛び出してきた鎧を次々と撃ち落したのは、言うまでもなく、この討伐作戦にくつついてきたジルクだ。

なるほど、さすが攻略対象の1人。やはり素の能力は高いな。

そして、かつてリオン君と決闘した際には、リオン君の姉を脅してアロガンツに爆弾を仕掛けさせたものの、

爆発によるダメージは無しに等しく、逆に力の差を見せつけられた、というレベルの高い屑っぷりを見せつけた男でもある。

こうして話している間にも、解体中の別の船からも潜伏していた鎧が飛び出してくるが、次々と狙撃されている。

まさか、こいつのおかげで、我々には鷹の目が付いているムーブができるとはな。

いや、むしろこいつなら、いつ僕のことを背中から撃つても不思議じゃない。アロガンツの性能を、その身をもって知っているなら、下手な真似はしないだろうけどね。

とはいえ、ジルクにこのままいい格好をさせ続けるのは気分が良くない。僕も戦闘に参加しないとね。

「アロガンツ・ブロス、残りの敵を表示してくれ」

・・・あれ？いつもの陽気な人工音声が聞こえてこない。

その代わりなのだろうか、モニターに短い文字列が表示された。敵機の反応、もうすぐゼロ。

え？もうそんなにジルクが撃ち落したのか!?

っていうか、もうすぐゼロって何だ？残ってるなら駆除しないと。

そう思って周囲を見回すと、うちの鎧部隊が大挙して解体中の飛行船に向かって攻撃を開始している。

制圧した正規軍の監視に必要な最低限の戦力以外が、こっちに参加しているようだ。

さらに、搜索がまだだった格納庫や鎧などを隠せそうな建造物をすごいスピードでガサ入れし始めた。

「どうやら、ジルクに負けてられないと、奮起したようだ。相変わらず公爵家の騎士達は血の気が多いな。一体、誰に似たのだろうか。」

「家臣は主に似るものだと思いますよ」

「おいジルク、どうやって僕の思考を読んだ。それに、公爵家の主は僕じゃなくて父上だ」

「ギルバートさんといい、アンジェリカさんといい、随分と血の気が多いと思いますよ」

「アンジェは少し怒りっぽい子かもしれないが、僕はマイペースな人間だろう」

「マイペースな人間は専属使用人十数名と血みどろの乱闘騒ぎを起こしたりしませんよ」

「そういうペースが僕のペースなんだよ、きつと」

「それを世間一般では血の気が多いと言うんじゃないんですか。まあ、どちらでもかまいませんが、今回の討伐作戦でギルバートさんを最も手助けしたのは私だということを忘れないでくださいね」

そうだった。

こいつは、今回、決闘騒動でアンジェと敵対したことを発端とする、マーモリア家としての落とし前をレッドグレイブ家に対して付けるために参加しているのだったな。

その通信を聞いた公爵家の鎧達がいっせいにジルクの鎧のほうを向いた。

「ちよつと待って！こいつが腹立たしい屑なのは間違いないけど、少なくともこの場では敵じゃないから！」

「うちの騎士を煽るんじゃない！」

アロガンツ・ブロスの拳が、ジルクの鎧の頭部を軽く小突く。

「い、痛いじゃないですか。こんなにも働いて結果も出しているのに」「戦果は十分だが、火力が強すぎるだろ！捕獲、制圧用の武器も持ってこいって言ったよな！」

「威力の高い武器を持ってくるなどは言わなかったじゃないですか」

「だからと言って、頭部と胸部を丸ごと抉り取るようなライフルを持つてくるか!？」

「他の武器も持ってきてますよ！それより、ほら、オフリー家の指揮官からもっと情報を聞き出さなくていいんですか!？」

・・・くそ、それはその通りだな。

それにしても、この戦闘では、ジルクがほとんど一人でいいところを持って行ってしまった。

遊びで戦争をしているつもりはないが、対外的には何か戦果を上げないと、他の派閥から舐められかねないんだよな・・・まあ、本来、僕は鎧働きで戦果を考えるなよと言われかねないんだけど。

愚痴っても仕方ない、またあの性格の悪い指揮官から情報を聞き出すとするか。

隠してる戦力があるのは、ここだけではないだろうからね。やはり、破れかぶれの神風スピリットでオフリーというか、フランプトン派閥以外の勢力に打撃を与えようとしているのだろうか。

今後のフランプトン派閥との対峙を考えると、他の派閥で構成された別動隊が大きく被害を受けるのも避けたい。

オフリー領の浮島での戦いはどうやらまだ続くらしい。

第35話 突入、オフリー屋敷!

「おい、どうするんだよ!王国の奴ら、大挙して押し寄せてきているのに、さつきと逃げないのかよ!」

「私に言われても困りますね。前にも言いましたが、私の顧客は貴男ではありませんので」

体格のいい大男、オフリー領の浮島に逃げ込んできている空賊ウイングシャーク残党の幹部が、隠し部屋の中をうろつきながらぼやく。ウイングシャークの本隊がりオンやギルバートにより討伐されてしまい、さらに、王国による残党狩りから逃れてオフリー領の浮島にまで逃れてきたのであるが、

逃げ込んだ先にも、王国のオフリー家討伐部隊が監査名目で乗り込んできており、男にとっては災難が続く状態となっている。

現在は、状況を打破しようと、会話の相手である商人風の男とオフリー伯爵の企てに便乗しようとしているのだが、当然ながら、その男も易々とタダ乗りを許してはくれないでいた。

「そんなこと言ってる場合じゃねえだろ!伯爵だって、さつき乗り込んできた団体さん相手に付きっ切りで、助けるか、ここから逃げるかしねえとそのうち見つかったらもうぞ」

ウイングシャーク残党幹部の大男は部屋の小窓からこっそり外の様子を覗き見る。

伯爵の屋敷は、城と呼んでもいいくらいの大きさで、隠し部屋のある最上階からは領内の様子が広く見渡すことができた。

既に屋敷は王国の鎧部隊に取り囲まれているようで、連絡係と思しき部隊も行き来し始めている。

そして、他の鎧よりも一回り大きいサイズで、灰色と黒色のカラーリングの鎧が伯爵の屋敷に向かって来るのが、大男の目に入ってきた。

「あ、あれは!」

「ほう、アレが噂のロストアイテムですか。若干の威圧感がありますが・・・」

商人風の男、その正体はラーシエル神聖王国のエージエントであるガビノが、大男の後ろに立ち、自らの下あごを撫でつつ、外の様子を見て呟いた。

「部下達の話だと、こっちの攻撃は当たっても全然効かないらしい。しかも、もともとでもねえパワーだって話だ」

「報告によると、ロストアイテムの鎧は2機いるそうですが？」

「箱持ち」と「羽型」だな。俺達の本体を壊滅させたのは箱持ち、別の部隊を潰したのが羽型だ」

「となると、今、こっちに向かつて来るのは羽型・・・我が国にまで悪名が轟く公爵家の赤い通り魔ですか、情報通りのようですね」

「オフリーのお嬢さんが公爵家なんかにはケンカ売らなきゃこんなことにはならなかったのに・・・クソが」

外を見ながら大男は悪態をつく。そして、それを見ながらガビノは考えを巡らせる。

（調整は経てなくとも、肉体的な強度や実戦を潜り抜けての精神力はそれなり・・・聖騎士は貴重ですし、こいつにも役に立つてもらおうとしましょうか）

懐から小瓶を取り出すと、ガビノは、後ろから大男の足を払って、強制的にうつ伏せにさせ、背中から馬乗りになって抑え込む。

「てめー！何しやが・・・」

大男の抗議は、口にかまされた厚手の皮手袋で中断させられてしまう。

他方のガビノは、素早く小瓶から金属の破片のような物質を取り出すと、ニヤリとした笑みを浮かべながら、その破片を大男の首元に突き刺した。

間もなく大男は首元を押しさえながら苦しみ出し、破片を取り出そうとしても、むしろその破片は身体の中へ向かって少しずつめり込み始めていた。

「貴方に埋め込んだのは魔装の破片という我が国の奥の手です。喜んでください、これであなかもロストアイテムの力を使えるんですよ？せいぜいこちらの役に立ってくださいいね」

大男の体が少しずつ黒色に変色していき、元から大きかった身体はさらに巨大化を始める。手足は長く伸びつつも、その先端は鋭利な形状へと変わっていく。

他方、大男が苦しみもがく姿に目を向けずに、慣れた足取りで素早くガビノはその場を去る。行先は、これから起こるであろう混乱に乗じて領内から脱出するために、オフリー伯爵から聞き出しておいた、外に通じる隠し通路である。

ガビノが所属するラーシエル神聖王国には、かつて、友好国である帝国から送られた特別な鎧がある。

その破片を人間の体に埋め込むことで、通常の鎧では全く齒が立たないほどの戦闘力を持つ機動兵器に変貌させることができるのだが、特殊な訓練と調整を施した聖騎士以外ではフルスペックは発揮できない。しかも聖騎士の数は限られており、気軽に使い捨てできるほどの数はいない。

他方、そこら辺にいる一般人に埋め込んでも、せいぜい少し強いモンスター程度にしかない。

とはいえ、今回、破片を埋め込んだ大男は聖騎士ほどではないものの、スペックは高く、それなりには強い機動兵器になってくれるだろうと考えたのだった。

(赤い通り魔には、国境沿いの仕事を難しくしてくれた借りを返してやるとしましょうか)

将来的に自分や妹が苦勞しないように、という下心に基づいて、学生時代には国境沿いの下級貴族の結婚相手の世話をしたり、役人働きを始めてからは領主の財政事情を悪化させる悪妻を駆除してきたギルバートに対して、ガビノは苦々しさを超えた憎しみに近い感情を持っていた。

王国内の貴族社会では白い目で見られてきたギルバートの行動は、周辺国家の工作員にとっては、金、女という側面から付け入る隙を小さくする行為に他ならない。

後ろ盾の大きくない人間による行動であれば、搦め手を駆使して潰すことも難しくはない。

だが、都合の悪いことに、相手は当時の王太子の婚約者の実家の跡取り、しかも王家の分家とも言われる公爵家では手を出そうにも、時間や手間がかかりすぎてしまい、事実上、手を出せないでいた。

その憎き相手がこの場に来てくれるのであるから、魔装の破片を使つてでも始末しておくべきだというガビノの判断であった。

殴り込みをかけたオフリー伯爵領の軍事施設で、解体中の飛行船に潜伏していた部隊を殲滅し終えた僕はアロガンツ・ブロスを駆つて、領主の館に急いでいた。

厳密に言えば、潜伏していた部隊を葬ったのは、公爵家の鎧部隊や、今現在、後ろから付いてきているジルクではあるのだが。

「バルトファルトと戦つた時にも思いましたが、そんなに大型で重そうなのに、どうしてそんなに素早く動けるのですか？他の鎧が付いて来れていませんよ」

「未知の技術が使われてるロストアイテムだからだろ。それに、お前の鎧だつてなんとか付いて来れてるじゃないか」

ジルクが乗る鎧は、リオン君との決闘の際にも使われていた機体である。さすが、跡継ぎ息子のために開発・製造された鎧の性能は、他の量産機とはスペックが違うようだ。

「ロストアイテムは高性能ではありませんよ。だからこそ、私達は油断して敗れたのですが」

「あの馬鹿王子戦以外も見てみたかったよ、僕が決闘会場に付いた頃には、4人とも負けた後だったからな」

「いつも言ってますが不敬ですよ」

「そんなくだらないことを議論してる場合じゃないだろ」

僕が急いでいるのには理由がある。

オフリー家の艦隊の指揮官は、戦力差が絶望的なことを理解すると、観念したようで知っている情報を一気に暴露し始めた。

どうやら、フランプトン侯爵に切り捨てられ、公国から見捨てられたところに、ラーシエル神聖王国のスパイが入り込んで、オフリー

伯爵と悪だくみをしているらしい。

指揮官も詳しくは知らないようだが、そのスパイが持ち込んだ秘策があるようで、部隊を領内の各所に隠していたのも、その悪だくみの一環とのことだ。

はつきり言って絶望的な状況であるこのタイミングで一策講じるほどであれば、よほどの策なのだろう。

不測の損害は、先々のパワーバランスの変化、しかも悪い方向への変化を加速させかねない以上、急いでオフリーの身柄を押さえ、バーナード大臣の安全を確保すべきだ。

「ラーシエルは、ギルバートさんも狙っているかもしれない、と言っていたようですが、積極的に渦中に飛び込んでいくタイプでしたか？」
「必要以上に手を貸すつもりはないが、フランプトン侯爵を少しでも抑えるためには、アトリー派閥の力が削がれることは避けたいのさ」

悔しいが、パパ上率いる、レッドグレイブ家の派閥は決闘騒動以降、凋落が著しい。今は勢力を立て直している真つ最中で、フランプトン侯爵の派閥が力を付けていくのを防いでいない。

「罨と分かっても飛び込んでいくのは、よほど自信がある強者か、危険がわからぬ愚者か・・・どちらなのでしょうかね」

「冷静に先のことを憂う謙虚な好青年と言ってくれ。でも、そんなところに腹黒いお前がわざわざ付いてくるのはどういった理由なんだ？向こうには大臣その他、アトリーの連中が勢ぞろいだぞ」

「彼らを助けるところに立ち会っていけば、レッドグレイブにも、アトリーにも恩が売れます。ラーシエルの企みでアトリーが亡き者となっていれば、私を怨む人間が減ったことを直接確認できますので、精神的に安心できます」

「・・・屑っぷりが安定しすぎていて、逆に安心するから不思議だな。とりあえず、お前のツラは見つかると面倒だから仮面をしておけ」
「そんなもの用意していませんよ」

「僕が準備しておいたから大丈夫だ」

露店で買った仮面なのだが、あるフィクションに登場する敵役らしい。

生きた人間をパーツにして作った悪趣味な壺を芸術品だと言い張るおどろおどろしい鬼とのことだ。

何故かはわからないが、よく分からないアンティークな茶器を買ったりしているジルクにはピツタリではないだろうか。

調べてみると、どれもこれもガラクタばかりだった、という噂もあるが、常人には理解できないものに高い価値があると思う思考は似たようなものがあるかもしれない。

さて、ジルクとの他愛ないやり取りをしていたところだったが、ようやくオフリー伯爵家の領主の屋敷に到着する。

悪いことをしてがっぽり儲けていたせいなのか、屋敷というよりは、城に近い大ききの建物だった。僕の実家の屋敷の倍以上大きいかもしれない。

王城ほどではないが、小さめなら鎧だつて中で動かせるかもしれないね。

屋敷の脇でアロガンツ・ブロスから降りて、中へと進んでいく。

途中、随所に配置されている騎士達がギョツとした目で僕の後ろから付いてくるジルクの仮面を見ている。

そんな反応を楽しみながらも、豪華な装飾が随所施され、一定距離ごとに美術品が飾られた廊下を速足で奥まで進んでいくが、それにしても中が広い。

前世の街中にあつた動く歩道とか付けておいてくれよと言いたくなってしまう。

噂には聞いていたが、本当に金、金、金な家ようだ」

「オフリー家は、金で爵位を買った成り上がりと言われて、社交の世界から爪弾きにされていますからね」

「あんなもんに付き合わなくていいなら羨ましいが?」

「真つ当な貴族は参加するのが当然です。ギルバートさんみたいに色々理由を付けてほぼ全て不参加を貫くのが放置されているのは、公爵家に文句を言える人が少ないからです」

「ジルク、うちの爺やみたいなのを言うんじゃない。それに何回かは顔を出したことはあるんだぞ」

「それは初耳ですね。思いもよらないまさかの答えが返ってきて驚きです」

足を止めて振り向くと、ジルクが前のめりになって僕の方を向いている。

仮面を被ってはいるが、この話に興味津々なのが見て取れる。

数秒考えてから、再び前を向いて歩き出しながら、答えてやることにした。

「そんな面白い話じゃないぞ」

「寄ってくる御令嬢方にどう対応したのですか？」

「亜人連れの命知らずな女には臭いから寄らないで、と追い払ってた」

「そ、それは想像通りの展開ですね」

「ちなみに、そうでない令嬢はほとんど寄ってこなかった。辺境の悪妻を駆除して回ってた頃だったから、関係者が巻き込まれたか、後ろめたいところがあつたのかもしれないな」

「まあ、たまたま、そのような質の悪い令嬢ばかりが集まったただけかもしれないよ」

「その結果、誰も話しかけてこなくて、退屈だったから、令嬢から相手にされない野郎連中で集まって、隠語を用いた下ネタ大会を開催して大盛り上がりしたら、後日、主催者から涙目の苦情をもらったよ」

「他の派閥の大物の関係者と接点を持つとか、上品に交流すればいいだけですよね!？」

「婚約クラッシュヤーの爆弾魔のくせに、つまらない正論を言うんじゃない。それに、そのおかげで辺境の領主達や女性に苦勞している貴族からの好感度が爆上がりしたんだぞ・・・って言ってる間に、どうやら、ようやく領主の部屋に付いたらしい」

僕が指さした先に、ひと際豪華な造りの扉があり、その脇には警備の騎士達が何人も配置されている。

彼らの間を抜けて、堂々と正面から中に入っていくと、巨大な部屋の入り口から向かって左側の奥に、バーナード大臣を始めとした王国

の監査部隊の幹部達が座り、手前の机には帳簿などの大量の書類が並んでいる。

一方、入り口から入って右側の奥には、オフリー伯爵と思しき中高年の男性、僕より少し年上くらいに見える男性、そして、見覚えのある性格の悪さが顔に現れている女がソファに座っている。

こいつら3人がオフリー親子なのだろう。3人の周りには、監視兼護衛の騎士達が10人近く配置されていて、オフリー親子はしきりに辺りを見回しながら、居心地の悪そうな表情を浮かべている。

お忍びで学園祭を訪れた僕と、血みどろの大乱闘を繰り広げた亜人連中を困っていたオフリー家の令嬢、たしか名前はステファニーとかいう名前だったが、彼女は僕の姿を確認すると、恨みがましい目線を躊躇なく僕に向けてきた。

せつかくなので、大臣の下に歩きながらも、全開のボンボンスマイルを浮かべて手を振って煽ってやるとしよう。

そして、僕が大臣の下に到着すると、こちらに集まってきた大臣とその部下達に小声で情報を伝える。

「大臣、急いで旗艦に戻ってください」

「どうということだい？」

「領内に各所に不意打をするための部隊が配置されています。また、オフリーはラーシエルと何やら画策しているようです。連中の指揮官がゲロりました」

「しかし、領内はほとんど制圧済だと聞いているが？いや、ここは彼らの縄張りか・・・それにラーシエル・・・どうしてこのタイミングで・・・」

大臣はブツブツと呟きながら考え込んでいる。

今回の作戦の総大将が、明確な理由もなく前線から退くことの影響を考えているのだろうか。

「この先、王宮内の派閥抗争の展開を考えると、バーナード大臣に万が一のことがあつては、政治が回らなくなってしまいます。幹部は残してでも、今は御身の安全を最優先にしてください」

「レッドグレイブ家にいのように利用されるのは気に食わないが・・・たしかに君の言うことにも一理あるか・・・」

ただ、そんなヒソヒソ話をしていると、後ろの壁、いや、壁の奥から何かが暴れ回っているような音が聞こえてきた。

しかも、音はどんどん大きくなり、音の発生源がこちらに近付いてきているようだ。そして、室内の壁に小さくヒビが入り、小さい破片が床に転がり落ちる。

何か嫌な予感がする。

客観的なデータに基づくわけではない。

ただ、前世のゲームや漫画等ではこういったときには、“何か”イベントが起きるものだ。2次元世界での経験則とでもいうべきだろうか。

そして、この世界も、乙女ゲームの世界とはいえ、男性向けゲームのメーカーが新規事業として開発・発売したゲームだ。

「ギルバート君、顔色が優れないように見えるが、どうしたんだい？」
余裕がなくなってきたことが顔に出ていたのだろう。バーナード大臣が僕に問いかけるが、答えている余裕も、何かを考える余裕も僕にはなかった。

何となく動いた、としか言いようがなかったと思う。

とつさに大臣や幹部らの手を取って、こちら側に引つ張り込んだ次の瞬間、壁は大きく崩れると同時に、その奥から鎧くらいのサイズの黒い物体が室内に踏み入ってきた。

そして、突入してきた勢いで、黒い生物は、大臣らが腰かけていたソファを踏み潰し、室内の中央に山積みになされた帳簿類を薙ぎ払い、オフリー伯爵らの前で足を止める。

危なかったああああ！

もう少し判断が遅かったら、今ごろバーナード大臣は、水星の潰れたトマト状態になるところだった！

動きを止めた黒い物体は、よく見てみると、触手のように長く、先端は鋭い手足が10本ほど付いていて、腹部には肉眼が大量に浮き出ている。

暴れ回っていたせいなのかはわからないが、肩で息をしながら、口からは悪臭の漂う唾液を垂れ流しており、思わず口元を覆ってしま

う。

背中にはコウモリにあるような羽が生えていて、頭部にある角と合わせて見ると、物語の中に出てくる悪魔を連想してしまう。

「アレは何だい!?!」

「僕が聞きたいくらいです!」

大臣の問いに、礼を尽くして答える余裕もなかった。

乱入してきた黒い生物は、体全体の動きを止めながら、頭部と腹部の目は、眼前にいるオフリー伯爵とその息子と思われる男性を凝視している。

恐怖のせいで動けないでいるオフリー伯爵達をよそに、黒い生物が裂けそうな口を開く。

「おま・・・えら・・・のせいだ・・・」

人間の言葉だと!?

ダンジョン等にいるモンスターが人間の言葉を話す、というのは聞いたことがないが、目の前の怪物はたしかに人間の言葉を発した。

僕だけじゃない。大臣や監査部隊の幹部も驚きの表情を浮かべているし、仮面を被ったジルクも顔の向きが黒い怪物に向いたままになっていることから、思考がフリーズしているのだろう。

そんな僕らをよそに、黒い怪物はさらに口を大きく開くと、次の瞬間、オフリー伯爵と隣にいた息子を、頭から膝上あたりにかけて、一噛みで食い千切ってしまった。

残された2人の男性の、計4本の足からは真っ赤な血が噴き出し、その脇にいたステファニーとかいう女の足元が血の池となる。

異常すぎる光景だった。

ふと思ったのは、某新世紀なアニメの新劇場版の2作目で、汎用人類決戦兵器のゼロ号機が最強と言われる敵に食われたときのような絵面みたいだな、という感想だ。

ショッキングな出来事で、脳内の認知機能が現実逃避をしたようだ。目の前で起きた現実の出来事だと瞬時には理解できていなかった。

「う、うわあああああああああ

!!!!!!!」

近くにいた騎士の誰かが恐怖のあまり、叫び声を上げる。

室内に大音量で響き渡る絶叫のおかげで、僕を含め、他の人間はようやく我に返る。

他人がテンパっているのを見ると、自分がかえって冷静になる、というやつだろうか。

あまりの出来事に、目の前の怪物が危険極まりない存在であるという意識を持つのが遅れてしまった。

オフリー伯爵らの周辺にいた騎士達が一斉に魔法攻撃を開始していた。

「ジルクー！」

「わかつてますー！」

僕もファイヤーボールを怪物に向けて投げ付ける。仮面を被ったジルクも素早く背負ったライフルを構えて、引き金を引いていた。

銃弾に加えて、炎や氷の魔法が大量に、黒い怪物に命中するが、主に炎の魔法が原因の爆炎が、黒い怪物を覆ってしまう。

その間に、大臣達は部屋の入りにまで到達していて、入り口付近で警備をしていた騎士達に囲まれてこの現場から離脱していた。どうやら最悪の事態は避けられたらしい。

「やったか!？」

しかし、魔法攻撃をした騎士の誰かが禁断の台詞を口にしてしまった。

おい、そのセリフは言っちゃダメなやつだから！

“ やったか!?” というフレーズが出たときと、野菜の星の王子様が連続エネルギー弾を撃ったときは、相手をやれてないのだと決まっているんだぞ！

僕以外は、楽観的な展開を期待して油断していたのだろう。

先端が鋭利な刃物のようになっていた触手が、煙の中から飛び出してきて、何人もの騎士達が串刺しにされてしまった。

さらに、怪物の腹部の辺りで魔力が集まり始めて、間もなく、僕のファイヤーボールよりも何倍も大きいオレンジ色の火球が形成されると、僕の近くで固まっていた騎士達に向けて放たれる。

ド○クエだったら、1ターンの間に何回も行動するなんてずるいぞ！みたいな文句を言っているところだが、リアルの命の取り合いをしている場面で、さすがにそんなことは言っていられない。

黒い怪物の火球は、直撃こそしなかったものの、轟音が響き渡り、僕も煙と熱風に飲み込まれる。

火球が直撃した床面には巨大な穴が開いていて、その周囲には、何人も騎士達が倒れている。おいおい、この攻撃力は生身でどうにかできる相手じゃないぞ!?

手元の剣に手をかけつつ、もう片方の手の周囲に、炎の槍を展開させて僕は再び攻撃態勢を取る。

そして、次の攻撃を仕掛けるために、足を踏み込んだときに・・・不意に足元が、否、床が崩れ始めた。

先程の怪物の攻撃で生み出された穴に視線を向けると、穴を中心に床の亀裂が四方八方に広がり始めていた。

僕の足元にも床の亀裂が伸びてきていて、破片がポロポロと下に落下していくのと同時に、体全体に浮遊感が広がっていく。

あれ?これって・・・もしかしなくても・・・落下していつている!?

第36話 MISSION：オフリーー屋敷を脱出せよ

「ギルバートさん！ほら、起きてください！」

何やら聞き覚えのある爆弾魔の声が耳に入ってくる。

あれ、僕はどうして仰向けに倒れ込んでいるのだろうか。目を開くと、割れた仮面を頭の上で被っているジルクの顔が視界に入ってくる。

たしかいきなりオフリーー伯爵の部屋で行われていた監査という名前の取調べ会場に、全身が黒い怪物が乱入してきて暴れ回り始めたから、それを迎え撃とうとしたら・・・

そうだ、床が崩れて下に落下したのか。落下の衝撃で意識を失っていた、というところか。周囲に怪物の気配はないし、ジルクが安全を確保してくれていたのだろう。

「・・・僕はどれくらい意識を失っていた？」

「5、6分というところです。あの黒い怪物の攻撃で床が抜けて、我々は下のフロアに落下してしまいました」

「黒い怪物はどうした？」

「先程から上のフロアから時折爆発音や叫び声が聞こえてきます。残念ながら討伐された、と考えることは難しいところですね。今から別の部隊と合流しますか？」

難しい判断だな。大人数で一斉に魔法攻撃を仕掛けたのに、ダメージを与えられた気配がなかった。

ということは、生身である怪物を倒す、というのは現実的ではないだろう。

化け物の正体や出所も気になるところではあるが、それで対策案が出てくる可能性が高いとも思えない。

ラーシエルのスパイとやらが持ち込んだモンスター、というのがありそうな答えだろうが、そこら辺に詳しい人間もいない。

そうだとすると、他の部隊と合流しても、あの化け物と出くわしたら、簡単に蹂躪されて終わり、ということになりかねない。

「いや、下のフロアに落下したことだし、ここから脱出して鎧を取りに

行くでしょう」

「確かにそれが一番現実的ですね」

合意ができたところで、足元の埃を払いながら立ち上がり、辺りを見回すと、上から落下してきた瓦礫がいたるところで積み上がっている。

奥から赤い液体が染み出ている瓦礫の山もあり、少なくない人間が犠牲になったことがうかがえる。

黒い怪物に対して周囲が攻撃を開始した時点で大臣と護衛は部屋から出始めていたので、奴に追いつかれていなければこの領主の館とどうか城からは脱出できているだろう。

そんなことを考えていたところで、どこからか呻き声らしき音が僕の耳に入ってくる。

「おい、ジルク。どこかから声が聞こえないか？」

「・・・はい、でもだいたい小さい声ですね。一体どこからでしょうか」
改めて周囲を注意深く見渡してみると、近くの瓦礫の隙間から手の先がわずかに飛び出している。

僕とジルクは急いで駆け寄って、上に積み上がった瓦礫をどかしていく。

手の大きさからするとおそらく女性だろう。別室に待機していた使用人か何かが、降ってきた瓦礫に埋もれてしまった、というところか。

「しっかりしろ！今、瓦礫をどかしてやるから大人しくしてろよ」

「早く助けて！さつきから瓦礫に体を圧迫されてるのよ！」

助けを求めているのにずいぶんと強気なやつだなと思うところはあるが、かといって、命の危機に瀕しているのだから礼節を求めるのも酷というものだろう。

全身に覆いかぶさっていた瓦礫をジルクと手分けしてどかしていき、衣服や足がかなり見えるくらいまで撤去が進む。どうやら体力が尽きる前に救助することができそうだ。

なんだか衣服のデザインに、若干の見覚えを感じるところではあるが、無事救出できることに安堵しながら、肩の上に乗った瓦礫を

持ち上げた。

「……………」

次の瞬間、僕の視界に入り込んできた金髪の女と目が合い、1秒間だけ考えた僕は、無言で瓦礫を元あった場所に戻した。

「待ちなさいよ！早く瓦礫をどかしてよ！」

「お断りだ！今さらお前なんぞ助ける意味ねえんだよ！」

瓦礫の中から聞こえてきた罵声に対して、僕はそれ以上の音量で罵声を浴びせる。瓦礫の中に埋まっていた人物、それは、学園祭から続く一連の空賊騒動の原因であるオフリー伯爵家の令嬢であった。

埋まっていたのがコイツだったら絶対に助けなかったのに。しかも、このままだと埋め戻されると危機を感じたのか、この性悪令嬢は、残った瓦礫の下から無理やり這い出てきてしまう。

瓦礫を早々に撤去したのがアダになったか。

「人の顔見てもう一回埋めるってどういうつもりよ！殺す気!？」

肩で息をしながら、オフリー伯爵家の令嬢が僕に噛みついてきた。

「お前だつてリオン君やオリヴィアさんを空賊に殺害させようとしただろうが」

「だからって、瓦礫を戻すことないじゃないのよ!？」

「そ、そうですよ。さすがにここまで救助を進めた以上、埋め戻すのはさすがに……………」

ジルクがオフリー伯爵家の令嬢をフォローしながら会話に入ってくる。

あのジルクが善人のようなことを言っているだと…………？

いや、単にこいつの知人であるブラッドの元婚約者だから、完全に放置するというのも気まずかったのだろうか。

「このクソ女を生かしておく価値なんてないだろ。それならば、ここに放置して、こいつの父や兄と一緒に、あの黒い化け物の腹の中に入れてやるのが情けというものだろう」

「さすが公爵家の赤い通り魔という異名を持つギルバートさん。台詞がまるで悪役か、物語に出てくる魔王のようですね」

「お前が僕を敬う気持ちや欠片も持たないことは理解したよ」

それに、僕は悪役令嬢のお兄ちゃんだからね。台詞が悪役っぽくなるのは仕様というものだ、たぶん。

「それにしても、その令嬢の価値ですか……最低限の人道的な観点から仕方なく、というところですかね」

「アンタもしれつと失礼なこと言ってくれるじゃないのよ」

「どうせ処刑だろ、斬首なら使った刃物を後で処理するのが面倒だし、魔法で処すなら魔力が、毒殺するならワインがもったいない」

「はい、そこは私も同意いたします」

「同意すんなよ!」

「強いて言うなら、今となっては空賊との接点を証言させられるオフリー家唯一の生き残りではあります……まあ、既に物証だけでも取り潰しには十分でしょうけどね」

……面白いことを思いついた。そこまで言うなら発言には責任を持ってもらうとしよう。考え始めたらどんどん楽しくなってきた、思わず口角が吊り上がっていくのが自分でもよくわかった。

「何よ、その底意地の悪さの原液が滲み出たみたいな顔は!？」

どうやら僕はずいぶんと悪い顔を浮かべているらしい。

っていうか、底意地の悪さの原液って何だよ!性悪さでお前にとやかく言われる筋合いはないぞ!

「この女に価値があるなんて、目から鱗だ!さすが元王太子の乳兄弟のジルク君だ」

「え……?今度は一体何を企んだんですか?」

「功績を欲しがってたお前にチャンスをやろう。そのクソ女、お前が連行しろ」

「えええ!?ちよつとそれはいくらなんでもあんまりですよ!そんな業を背負わされるなんて」

「おい、それはどういう意味だよ廃嫡緑!」

オフリー家の令嬢も、僕ら二人に同時にデイスられ続けて、どんどん取り繕わなくなってきた。

廃嫡緑……廃嫡グリーンとかのほう呼びやすいな。

さしずめ、青、緑、赤、水色、紫の5人合わせて廃嫡戦隊5馬鹿レ

ンジャーといったところか。

「お前みたいなの、ばつちいやつ、触るのも嫌だつてことだろ。それとも大量の亜人を侍らせるビッチい女と言うほうがお望みかな?」

「清々しいくらいの誹謗中傷ですね」

「お前も、その通り魔野郎と似たようなことを言ってるわよ」

「そうだぞ、それに今のお前は僕の部下みたいなのもんなんだから、指示は聞けよ。っていうか、通り魔って言うな」

ここで、ジルクに、お前らが困ってる女だつて、貴公子5人を侍らせてるスーパービッチだと言わなかった自分の優しさを褒めてあげたいね。

「・・・わかりましたよ、貴方という人は本当に卑怯な方ですね」

人のことを、タマネギ頭のクラスメイトにデイスられる紫色の小学生みたいと言うんじゃない。

まあ、それはともかくとして、結果的には3人で屋敷を脱出するべく外に向かうことになった。

逃亡防止のために、オフリー家の令嬢の両腕をロープで拘束して、ジルクが連れて歩いている。

今も時折、遠くから断続的に戦闘音が聞こえてくるので、今回乗り込んできているアトリー家の騎士か、屋敷の警備のために普段から配置されているオフリー家の騎士あたりと交戦しているのだろう。

そして、あの黒い化け物が現れたときのことを思い出して、僕は速足で歩きながら、疑問を口にする。

「あの化け物・・・何だつたんだろいな。何十人もの魔法攻撃を同時にくらつてもほとんど効いてなさそうだった。そんな怪物がダンジョンでもなく、領主の屋敷に出てくるって・・・」

「先の戦闘で拘束したオフリー家の指揮官が話していた、ラーシエル神聖王国の工員がオフリー伯爵と接触していたという情報と合わせると、ラーシエルが使う魔装というロストアイテムかもしれない」

「ロストアイテム?」

「人に寄生することで、強力な鎧のような姿になるといふ噂を聞いた

「ことがあります」

魔装・・・たしか前世の妹がおねだりしてきた課金アイテムの黒い鎧の名称がそんな感じだった気がする。

ということは、ジルクのいうとおり、あれがロストアイテムである可能性は高いな。

・・・性格はともかくとして、この若さで幅広い知識を持って、断片的な情報を素早くつなぎ合わせて推論を立てられるあたりは、さすがの優秀さだな。性格はクズだけど。

せっかく推理したラーシエルの話だ、ダメ元で当事者の身内にも聞いてみるか。

「おい、何か知っているかクソ女」

「何か聞きたいならせめて悪口以外で呼びなさいよ、この通り魔！」

「・・・たしか、ス・・・ブステファニーだったか」

「ステファニーだよ！アンタ、今、わざと間違えただろ！」

汚いから唾を飛ばしながらツッコミをするんじゃない！

しかも、僕のことを通り魔呼ばわりで定着させようとするつもりか!?

「知りませくん、わざと間違えたって証拠でもあるのかなあ？」

「動機はあるだろ！」

「そもそも、お前が売ってきたケンカだろ！」

「・・・なんて醜い争いでしようか」

クソ女ことステファニーと僕の泥仕合に、ジルクがさも自分は無関係かの如く嘆きの言葉を挟んできた。

おいおい、人のことをとやかく言える立場じゃないだろうが！

「お前から5人の婚約破棄騒動のほうがよくっほど醜いだろ」

「失礼な！私にとっては、一連の騒ぎなんて、マリエさんとの運命の出会いから真実の愛を見つけるまでの雑多なイベントにすぎません」

うわ、出た！悪役令嬢断罪モノの定番台詞の一つ、真実の愛、いただきました〜！

「偉そうに言ってるけど、結局、ぽつと出の黄色い毛虫に誑かされただけじゃねえか」

「し、失礼な！」

「そうよ！しかも、真実の愛なんだったら、他の男にも粉をかけさせるんじゃないわよ！あの女のおかげで、うちがようやくフィールド家と結んだ婚約だって破棄になったじゃないのよ!!」

そうか、あまりの悪行と性悪さですっかり忘れていたが、このステファニーも、ブラッドの元婚約者だったわけだから、マリエの被害者でもあるのか。

この女のやること、なすことの悉くが、逆恨みだったり、イリーガルだったりするから、何一つ擁護できないと思っていたが、対マリエに関してだけは、言っていることが正論だな。

この流れについてだけ言えば、初めてステファニーの言うことに同意できてしまう。

こいつの悪業のせいで、正論を言っているはずなのに、すごく大きな違和感があるというのは皮肉なものだ。ブラッドに関してだけは、婚約破棄になって良かったじゃないかとも思えてしまう。

いや、ストーリーカーとも言えるクラリス嬢の重さを考えると、ジルクについても婚約破棄になって良かったのかもしれない。

赤と水色は知らないが、緑と紫について言えば、そもそも婚約解消に至る素地はあったのかもしれないな。

とはいえ、せつかくのいい機会だ。ステファニーに便乗してジルクを攻め立ててみよう。

「そうだぞ、ジルク。お前があのでマリエとかいうクソ女を抑え込んでいれば、アンジェの婚約だって破棄にならなかつたんだ」

「ちよつと！ギルバートさん、貴男はどつちの味方なんですか!?!」

「決闘騒動でアンジェに敵対したのはお前じゃないか」

「いい年して未だに真実の愛を見つけられない可哀そうなギルバートさんには、私の気持ちはわかりませんよ！」

「少なくとも、オリヴィアさんのような、可愛くておっぱいが大きくて優しい子とかなら理解できなくもないが、あのクソ女は理解できん」

「私はマリエさんの人間性に惹かれたのです！ギルバートさんみたいな体目当ての人と一緒にしないでください！」

「バルトファルトといい、赤い通り魔といい、これだから男ってやつは・・・顔と体ばっかり見てデレデレしやがって！相手は平民じゃないのよ！」

ステファニーに便乗してジルクを攻め立てていたら、今度は、ジルクに便乗してステファニーがこつちを攻撃してきやがった。

「何だと？お前がオリヴィアさんにしたことはきっちり落とし前を付けさせるから覚悟しとけよ！」

「アンジェリカといい、アンタといい、なんでレッドグレイブが平民女の肩持つてるのよ！所詮あんな連中、数字でしかないってアンタの妹だっけって言ったわよ！」

「僕に女性との交流の素晴らしさを教えてくれた御方は、女性の価値に身分は関係ないという主義でね。平民だろうが、騎士家だろうが、いい女はいい女だ」

なんとといっても、この国のトップが言ってるんだからな！

ある意味、あの人が言っていることこそがこの国のルールなんだぞ！

「責任取らなくていい相手の体目当てにしか聞こえないんだけど！」

「失礼な。内面もいい子とだから恋愛を楽しめるんだ！外見も内面もゴミな女が偉そうに言うな！」

「アンタは、顔はともかく、内面がぶっ飛びすぎな危険物件だっけって貴族社会で言われてるのを知らないの！？社交に呼ばれない私の耳にも入ってきてるわよ！」

「ちよつとステファニーさん。この方は、やってることこそ、辺境の悪妻狩りとか、責任の大きくない役人仕事ばかりですが、これでも公爵家の跡取りですよ！」

「おいジルク！これでも、とはどういうことだ、この爆弾魔！」

そりゃ、本来ならパパ上に代わって領地運営の実績を積むとか、王宮の中枢近くで父とともに政治屋さんごっこをするのが将来の公爵様のあるべき姿なんだろうが、

この世界が“あの乙女ゲームの世界で、妹が断罪されたのをきつかけに、このままだと実家が没落不可避だったんだから仕方ないじゃな

いか！

僕だって、自分がやってることが、前世で読んだことがある悪役令嬢断罪モノによく出てくるような公爵家の跡取りと違い過ぎるなどという自覚くらいあるんだぞ！

「公爵家？今さら知ったことじゃないわよ、どうせここで死ぬか、王都で死ぬか、の違いしかないなら、少しでもアンタ達の心をえぐってやるわ！」

ステファアニーの発想が前世にもいた“無敵の人”になっちゃってるじゃねえか！

こいつ・・・リオン君のせいで目論見が外れ続けたり、追い詰められた結果、開き直ってしまってるぞ!?

だが、上等だ！そっちがその気なら、こつちも遠慮なく心をえぐってやる！

「面白いことを言うね。顔、体、肌、貞操観念、性格、実家の品行その他諸々、お前のどこに良さを見つけなければいいのかな？」

「そんなものは金でどうにでもするのが貴族ってやつじゃないのよ！」

なんだろう、発言内容が、うちの妹より悪役令嬢っぽい気がしてきたな、コイツ。

「それを貴族の標準にしないでくれますか？迷惑です」

「ハアア？アンタら5人組に迷惑云々言われたくないんですけどおお!？」

ジルクも脇から静かにステファアニーをデイスるが、即座にジルク達の醜聞というか揚げ足取りでステファアニーも切り返す。

ここまで言われてもまだ心が折れないのか！ある意味、凄いな。開き直った無敵の人状態とはいえ、メンタル強すぎるだろ！

デイスり続けている間に、1つだけ、こいつの長所、見つけちゃった気がするよ。

どこまでデイスればメンタルをぶっ壊せるのだろうか。

教えてくれオーフェイ、この女の心を折るために、僕はあと何個、この女の悪いところを挙げればいい？

アロガンツ・ブロスもジルクもアンジエも、何も教えてくれないよ！
三者三様、三つ巴状態で自分以外を大声で罵り合うという、レスバトルロワイヤル状態が続き、僕を含めて3人とも呼吸が荒くなってきた。

敵地だというのに、つい激情に駆られて熱くなってしまった。

「……ここですれ以上議論を続けても、埒があきませんね」

「そうだな、早くここから脱出して、この女を官憲に突き出そう」
ため息をつき、移動を再開しようとしたその時だった。

大きな衝撃音とともに、後方の天井が崩れ落ちてきて、上の階から、先ほどの黒い怪物が瓦礫とともに落下してきた。化け物はゆっくり起き上がると、すぐに僕らを見て、動きを止める。

何だ？ どうしたんだ？

静かになったのが逆に怖いんだけど？ 動かないなら今のうちに逃げたほうがいいのか？！

数秒ほど沈黙が続くが、黒い化け物は両腕部に加えて4本の触手の先を僕らの方に向けた。

触手の先端は鋭利な刃物のようになっており、ときおり、犠牲者になった者のものと思しき血液が先端から垂れている。

「オフリー！ レッドグレイブ！ お前達さえいなければああああ！！！！」

黒い化け物が怒号をあげて、大音量の叫び声が全身に叩きつけられると、音というものが空気の振動なのだと再認識させられる。！！！！

化け物がこちらに向けて触手数本を振り下ろし、僕達はとっさに後ろに飛び退いて攻撃を回避した。

というか、こいつ、やっぱり人の言葉を理解している。

なるほど、ジルクの言っていたとおり、人間が魔装というロストアアイテムを使ってこのような姿になったのだろう。

相手がロストアアイテムなら、なおのこと、生身で相手するもんじやないね。

「逃げろおおお！！！」

僕とジルク、ステファニーの3人が一斉に走り出した。

当然、黒い化け物はそれを追って来るがあるので、苦し紛れにファイヤールやファイヤランスを叩き込んでみたのだが、有効打になっている気配はない。

ジルクの銃も化け物に大したダメージにはなっていないさそうだ。しかも、化け物の全身を覆う黒い肉塊は、最初に見たときよりも巨大に、しかも硬くなっているようだ。

「おいおい、もしかして人を食うたびにパワーアップしてるのか!?」
「魔装は人を喰らうという噂を聞いたことがあります!」

「オフリーのやつ、生きてても死んでも僕に迷惑をかけやがってええええ!!!」

「はははーざまあないわねーいい気味よ!」

このクソ女め! 本来なら、僕達がこいつにざまあするターンのはずなのに、ざまあ返しをしてきやがった。

とはいえ。ステファニーも含めて、3人とも全力で走り続けている状況は変わっていない。

これでは、やってることが、傘会社が開発した暴君に追われるバ○オハザードか、ジユラ○ツクパークじゃねえか! ここは乙女ゲームの世界じゃなかったのかよ!

心の中で世界への恨みを叫びつつ屋敷内を逃げ回っていると、通路の先がY字型で二手に分岐しているのが見えてきた。

そうだ、お台場なテレビ局でやってたグラサンスーツ姿のハンターに追われるバラエティ番組では、こういうときに二手に分かれて、とっさの判断に迷ったハンターを撒いていたな。

「ジルク! こうなったら仕方ないから二手に分かれるぞ! 僕は左、お前は右だ! どちらに行くべきかを迷わせて時間を稼ぐぞ」

「了解です!」

「ちよつと私は!」

「僕が知るか!」

ステファニーの抗議めいた質問を却下しつつ、僕がまず左に曲がり、後ろを振り向くと、少し距離を置いて走っていたジルクとステファニーが右に曲がろうとしていたのだが、

分岐地点に差し掛かろうとしたところで、ジルクはステファニーをこちら側の通路の方向に突き飛ばす。

「この野郎、やってくれたな！」

「後ろにいた我らが同じ方向を選んだのでは、相手の判断にとっさの迷いを作れませんかからね！」

「図つたな、ジルクウウウウウウ!!」

「フフ、ギルバートさんなら、このくらい乗り越えられると信じてますよ！」

あの野郎おおお!!もつともらしい理由を付けて、土壇場でクソ女を押し付け返してきやがった!

改めて後ろを振り向くと、ステファニーと黒い化け物の姿が見える。

黒い化け物は、発言内容からオフリー家とレッドグレイブ家の双方を怨んでいるようだから、ジルクの方ではなく、こちらに来るのは当然か。

しかも、運の悪いことに、走る先に壁が見えてくる。要するに、行き止まりということだ。

どうするべきかを考えていると、ステファニーが先に追いついてきて、僕に怒鳴り散らしてくる。

「ちよつと行き止まりじゃないのよ！」

「うるさい!どうするかを考えてるんだから黙ってろ！」

逃がっている最中に窓から見えた景色からすると、現在地の高さは屋敷の3、4階くらいだろう。

・・・壁を壊して外に飛び降りるしかないか。

そうこうしている間に、黒い化け物も追い付いてきてしまったようだ。

僕がファイヤーボールで壁を破壊しようとする、後ろからすごい力でステファニーがしがみついていた。

「離れろ!僕は壁をぶっ壊して飛び降りるんだ！」

「そんなの無理よ!こうなったらアンタだけでも道連れにしてやるわ!ははははは！」

「邪魔すんな、クソ女！」

巻き付いているステファニーの腕を引きはがそうにも、魔力で肉体強化しているのか、火事場のクソ力なのか、絡みついて離れない。

「お前らささえいなければ・・・好き放題に暴れていられたんだあああああああ!!!」

現時点でも十分に暴れ回ってるだろ！

僕の心の中のツツコミをよそに、怪物は大きく口を開く。

こんなところで、しかもこんなクソみたいな女と心中で、化け物の栄養になるなんて冗談じゃないぞ！

前世も、今世も酷い死に方じゃないか！ジルクじゃないが、そんなに深い業を背負わされる筋合いはないんだけど!?

怪物の口が目の前に迫り、牙から滴り落ちた唾液から放たれる悪臭が僕の鼻を突いた。

こうなったら、最後の手段だ。ありったけの魔力を腕に集めて巨大な火球を作る。

一か八か、馬鹿みたいに開けた大口の中に、いつものようにゼロ距離から火球をぶち込んでやる。外側は頑丈でも、内側からなら、つてやつだ。

だが、覚悟を決めた次の瞬間、事態は思わぬ方向に転がり始めた。

僕の後ろから、壁をぶち破って伸びてきた巨大な黒い腕が、怪物の顔面にめり込み、そのまま後方へと殴り飛ばした。

救世主ともいべき黒い腕は、化け物とは違ってメカニカルで、一目見て鎧のものだと判別できる。

後ろを振り向くと、崩れた壁の向こうから姿を現したのは、通常のものよりも大型で、両肩にキャノン砲、背部に2枚のウイングを持つ、ある意味、僕が棚ボタ的に手に入れた鎧だ。

「マスター！助けに来たよ」

どうやらこっちのロストアイテムは自動操縦機能が付いていたらしい。

スピーカーから無邪気な呼びかけが聞こえてくる。

やばい、相棒への好感度が上がり過ぎて、何故か泣けてくる。鼻水

まで出てきた。

だが、せっかく相棒が助けに来てくれたんだ。ここから反撃開始の
レッドファイトと行こうか！

第37話 合言葉は打算、チート、勝利！

オフリー屋敷にいきなり現れた黒い怪物に追われて、絶体絶命の窮地に陥った僕だったが、間一髪のところであログantz・ブロスが助けに来てくれて、その怪物を殴り飛ばしたおかげで九死に一生を得ていた。

『マスター、助けに来たよ♪』

まわりついていたステファニーを引きはがして、差し伸ばされたアログantz・ブロスの腕を伝い、僕はコックピットに飛び乗った。

殴られた黒い怪物が体勢を整えて起き上がろうとしているのを見て、追撃をかけるべく、アログantz・ブロスの拳を怪物に向けて放つ。

例えるなら、ものすごく硬いゴムを殴ったような手応えだったが、殴打の衝撃は黒い怪物、ジルクの話によるとラーシエルの持つロストアイテムである魔装に寄生された元人間らしいのだが、その魔装をぶつとばすには十分だった。

「ブロス、よく来てくれたね」

『エツヘン！アログantz・ブロス、できる子！』

調子に乗っちゃう人工智能とか感情が豊かすぎるな。

ジルクの裏切りのせいで、オフリー家のステファニーというクソ女兼足手まといを押し付けられて、魔装から逃げそこなったが、パイロットも乗ってないアログantz・ブロスが助けに来てくれた。

この機体自体も、現在の技術で再現できないロストアイテムであるが、パイロット無しで動けるということは、アログantz・ブロスに搭載されている人工智能は相当高度なものなのだろう。

そんなことを考えていると、殴り飛ばされた魔装が、先端が刃と なっている触手を何本か伸ばしながらこちらを見ている。なるほど、接近戦か。

それにしても、触手がウネウネと動いていて気持ち悪い。

「ここからしっかり反撃していくぞ！グレイブ、セット！」

アログantz・ブロスが、背部にマウントさせていたグレイブを手

取ると、その刀身が高熱を帯びて赤く輝き始めた。

繰り出された魔装の触手の群れを次々とグレイブの刃で叩き切ると、傷口から黒い液体が噴き出す。

やけにあっさりとは斬れたと思うのだが、数秒すると、黒い液体の流出が止まり、その傷口から新しい先端を持った触手が生えてきた。

この野郎、再生能力持ちか！

心の中で毒づいていると、生え揃ったそれぞれの触手の先端に光が集まり始めて小さな光弾を作りだしていく。

接近戦だけだと思ったら、離れたレンジも対応できるなんて、さすがのロストアイテムかよ！

「スプレッドビームで叩き落せ！」

アロガンツ・ブロスの後退させて距離を取りながら、両肩の砲塔にエネルギーを集めさせ、僕は手元のトリガーを引く。

魔装の触手それぞれから連続して光弾が放たれるのとはほぼ同時に、チャージを終えたこちらのビーム砲からも何百という数の光弾が前方に向けて連続して放たれた。

アロガンツ・ブロスと魔装、双方から放たれた光弾はぶつかり合っただ範囲で小さな爆発を大量に発生させている。

そのまま、意地の張り合いのようになつたビームの撃ち合いが終わると、今度は魔装が化け物らしく深く裂けた口を大きく開けて、エネルギーを収束させ、球体を形作っていく。

「マスター、敵のエネルギー反応が増大中！危険だよ!!」

これ、アレだ！ゴ○ラとかの怪獣が口からデカい光線を吐く的なやつか！

敵さんは小粒な攻撃を続けても意味がないと判断したらしい。

「フルチャージしなくていいから、こっちもロングレンジモードで撃ち返すぞ！」

「ツインビームキャノン発射するよ！」

アロガンツ・ブロスのキャノン砲に、エネルギーが再び急速に集まり、一方の魔装も自らの身体と同じくらいの大サイズの巨大な光弾を形成させていく。

ジャブの応酬が終わったら、今度はストレートでの真っ向勝負というわけか。

相手の知能の高さは知らないが、思考は完全に脳筋ストロングだな。

この世界が、乙女ゲームの世界のはずなのに、僕の周りはどういうわけか少年漫画みたいな展開ばかりだ。

「ブロスー！打ち負けるんじゃないぞ!？」

「了解!!」

再び僕が引鉄を引くと、アロガンツ・ブロスの両肩から、二条の極太ビームが魔装に向かって放たれて、魔装から吐き出された巨大な光弾と正面からぶつかり合う。

ビームを発射した反動で吹き飛ばされないようにアロガンツ・ブロスも足を踏ん張らせているが、踏ん張りの強さ故か、足元の地面はどンドン沈んでいく。

エネルギーどうしがぶつかり合った結果、こちらにも衝撃が押し寄せてきており、後方にあるオフリー家では窓が割れ、屋根が吹き飛び、壁もどンドン崩れ落ちている。

そして、こちらの放ったビームは球形の光弾に突き刺さり、押し込んでいくのだが、衝突した膨大なエネルギーどうしは、やがてお互いに形を維持することができなくなったようで、

大きく光ったと思ったら、次の瞬間には大爆発を起こして、アロガンツ・ブロスも吹き飛ばされて、後方のオフリー屋敷に激突してしまった。

さすがの爆発のせいで、機体もコックピットに伝わる衝撃を吸収しきれなかったようで、僕の背中や肩にも叩きつけられたことによる強い痛みが走っている。

「ははは・・・まさか今世ではビームの撃ち合いをする当事者になるとは思わなかったね」

乾いた笑い声をあげた自分の顔が引きつっているのが、鏡を見なくてもわかる。

周囲を見渡すと木々は倒れ、屋敷は既に半壊状態だ。よく見ると、

まだ辺りには逃げ惑う人たちもわずかにいる。

さすがにまだ避難が完了していないようだ。

「ギルバートさん！ちよつと待つてください！大臣の避難がまだ終わってないんです!!」

コックピットに聞き覚えのある男の声が聞こえてきた。

全身が埃や泥まみれとなったアトリー家の文官達がアロガンツ・ブルスの足元に集まって文句を言ってきている。

「だったら早くさせてくださいーこっちも余裕はない!」

戦闘が普通の鎧によるものであれば、被害の出る範囲は限られてくるが、今はロストアイテムどうしのぶつかり合いだ。

多少距離が離れたところにおいても、ビーム一つ飛んで来たら即おしまいとなってしまう。

さすがに、大臣にここで死なれるのは歓迎できないな。王宮内での影響力がどんどん低下していて、敵対するフランプトン侯爵の派閥が逆に勢いを強めている中で、

中立、つまり、フランプトンにも与しないバーナード大臣がいなくなつては、侯爵派閥がますます好き勝手し放題になってしまう。これはレッドグレイブ家にとっては都合が悪い。

そうこう考えていると、ビームのぶつかり合いで発生した爆炎も徐々に晴れてきて、再び触手を展開してこちらに向かって来る魔装の姿がコックピットのモニターに映る。

デカイエネルギーを使う攻撃は避けるしかないか・・・アロガンツ・ブルスのビームキャノンなら火力でゴリ押せるかもしれないが、最悪の場合の影響を考えると控えざるを得ない。

リオン君のアロガンツのように、背部のコンテナに携行火器がたくさん入っていれば戦い方も変わってくるのかもしれないが、こればかりは試作機ゆえの弱みかもしれないね。

舐めプをするつもりはないが、これでは縛りプレイを強制されているような状態か。

「ブルス、ビームキャノン以外で相手を倒せる武装を表示してくれ」

僕の指示により、コックピット内のモニターに1つのウインドウが

ポップアップしてくる。

グレイブ以外には・・・自爆は武装じゃないよ、ブロス。

自爆を武器と考えているのはオペレーション隕石系の○ンダムと、ツラ系ガ○ダムくらいなものだよ。

そんなことを心の中で突っ込みながら、アロガンツ・ブロスが握ったグレイブで魔装を迎え撃とうと、触手を2本、3本と斬り落としていくが、捌ききれなかった残った触手が、グレイブやアロガンツ・ブロスの腕に巻き付いてきた。

気持ち悪いな！僕は触手プレイも物理的な意味の縛りプレイも真っ平御免こうむるぞ。

「ええい！離せ、この化け物！」

「ようやく捕まえたぜ、レットドグレイブウ・・・！」

「どこの誰か知らないが、僕に潰されたクソ貴族の関係者かい？」

「お前らに本隊を潰されたウイングシャークだあああ!!」

え？ウイングシャークって、あのステファニーの指示に従ってリオン君にケンカを売って返り討ちにされて、このアロガンツ・ブロスの初陣の相手になったあの空賊団か!?

なるほど、それでリオン君の親分的な扱いを受けている僕と、そんな僕らと戦わせようとしたオフリー家、というかステファニーをしつこく狙ってきたということか。

「やれやれ、それだったら逆恨みもいいところですね」

聞き覚えのある嫌味な男の声が聞こえてくると同時に、上空から放たれた弾丸がアロガンツ・ブロスに巻き付いている触手を打ち抜いた。

一瞬の出来事に何が起こったのかを理解できずフリーズした魔装に向けて、アロガンツ・ブロスの自由になった拳を何度も叩きつけ、最後にもう一発、魔装の顔面を殴りつけると、

踏ん張りがきかなくなった魔装がよろめいて、ふらふらとしながら後ろに下がる。

それとほぼ同時に、ジルクの乗る緑色の鎧が大型のライフルを構えながらアロガンツ・ブロスの近くに降りてきた。

「どのツラ下げてここに来たのか聞いておこうか、ジルク？」

「言ったじやありませんか、ギルバートさんなら乗り切れると信じてる、と」

「・・・失ったポイントの穴埋めをしに来たと素直に言ったらどうだい？」

「上司を助けに来たのですから、査定はしつかりお願いしますよ。ところで奴を仕留める方法はあるのですか？」

「大臣がまだ安全圏に逃れきれてないから両肩のキャノンが使えない。グレイブなら仕留められるが、触手が邪魔だ」

「・・・でしたら、奴の隙を作ってください、触手は何とかします」
「その隙が作れないんだよ！来るぞ！ブロス！シールド展開！」

態勢を整えた魔装が触手の先端から光弾を放つ。

アロガンツ・ブロスの前方に発生させた魔力シールドでそれを防ぎ、ジルクは機体を上昇させて光弾を回避する。

やはり、光弾をばらまかれるとヤバいな。接近戦をしかけるしかないか。

再度、グレイブで魔装に向かって斬りかかるが、やはり大量の触手が邪魔をして、有効打を入れることがどうしてもできない。

「そんな槍じゃ何回やっても無駄だぞ、レッドグレイブウウー！」

「たまたま手に入れた力でそこまでイキり散らすのは、逆に見ていて笑えるなあああ」

「お前らを消せればいいんだよおおお！」

グレイブをぶんぶん振り回して、触手に巻き取られないように攻撃を続けるが、そうするとやはりまともにダメージを与えることが難しい。

他方で、相手の触手の先端に生えている刃物がアロガンツ・ブロスの装甲を削る回数は増えてきており、一言でいうならば劣勢と言わざるを得ない。

相手側に、こちらの装甲を一撃で抜けるような突出した攻撃力のあつる武装がなかったのが唯一の救いだろが、このままだとジリ貧だろ。

「あはははは！ぎまあないわね、通り魔男！アンタ達の誰かが消えるだけで気分がいいわ！いや、せつかくなら化け物もろとも、廃嫡緑野郎もみんな一緒にくたばりなさいよ!!」

今日一日で僕を最も不快にさせたクソ女の声があたりに響いた。

半壊したオフリー家の屋敷の近くで、ステファニーが嬉しそうに手を叩きながら笑っている。

あのクソ女あああああ!!!

余裕がなくなってきた、煽り耐性が下がっている自覚はあるが、さすがの僕も触手の大群との斬り合いから目を離すことはしない。だが・・・

「そこにいたか、オフリーイイイイ!!!」

魔装、というか、魔装の中身となったウイングシャークの男が、ここにいる全員の不幸を喜ぶステファニーに意識を向けたようで、触手の動きが鈍る。

魔装というロストアイテムに喰われて、戦いに集中するよりも、目の怒りに意識を奪われたようだ。

本人にそのつもりは欠片もないだろうが、よくやったぞ、クソ女。

この隙を逃すまいと、アロガンツ・ブロスが魔装の片足を両腕で抱え込み、僕はコックピットのフットペダルを一気に奥まで踏み込む。

「ブロス、最大パワーでひっくり返せ!」

「了解、アロガンツ・ブロス、最大パワー!」

魔装の足を持ち上げつつ、背部のウイングバーニアから激しい炎が噴き出すと、出力を最大まで上昇させたアロガンツ・ブロスはツインアイを輝かせ、魔装を抱えたまま浮き上がる。

魔装はアロガンツ・ブロスに足を取られたままとなっており、後頭部と背中から地面に倒れ込む形となってしまう。

「今だ、ジルク!」

「ええ！わかってます!」

アロガンツ・ブロスが傍にあったグレイブを回収しつつ、その場から離れると、ジルクの緑色の鎧は手にしていた大型ライフルを投げ捨てて、腰にマウントしてあった小型のマシガンらしき武装を構えた。

そこから連続して放たれた白い物質は、仰向けに倒れた魔装や周囲の地面に命中すると、その粘着力で魔装を地面に抑え込んで動きを封じる。

トリモチみたいなものか!? ○ンダムでコロニーに穴が開いたときに使ってたようなやつだ!

とはいえ、魔装もそこから逃れようと大暴れするので、ジルクも執拗にトリモチ弾を連続して発射している。

一方の魔装も状況は理解したらしく、先端だけトリモチに覆われていなかった触手から光弾をいくつも放つと、ジルクの鎧の頭部や脚部を吹き飛ばし、ジルクは地面に向かって落下していく。

だが、よくやったぞ、この隙はしっかりとモノにしてやる。

「あんなものがあるとはね。いいものを持ってきたじゃないか」

「上司から敵を捕獲するための装備を持って来いと言われていましたからね、あとはお任せしましたよ」

「まったく可愛げのないやつだ。ブロス、グレイブセット! ジルクの死を無駄にしないために、突っ込めええええええ!!」

両手でグレイブを構えたアロガンツ・ブロスが、上空から、地面に倒れ込んで身動きができない魔装に向けて突撃する。

触手から大量の光弾が放たれるが、コックピット周辺はしっかりと守っているし、枢要部の装甲は2、3発が直撃したくらいでは致命傷にはならない。

光弾のいくつかが両肩のキャノン砲に命中して、砲塔が吹き飛ばすが、今さらもう遅い。

アロガンツ・ブロスの真つ赤な刀身をしたグレイブが、魔装の胸部に突き刺さり、そこから苦痛に満ちた声上がる。

魔装は苦痛から逃れようと、もがこうとしているが、トリモチに抑え込まれてロクに動けないでいる。

「ぐあああああ!!熱い!熱い!!!」

「ブロス、やれえええええ!!!」

『了解!インパクト!!』

グレイブの刀身が赤く光り、電光が走ると、魔装の全身が膨れ上がり、一瞬動きが止まった後に、黒い液体を大量に噴き出しながら魔装は吹き飛んだ。

周囲には黒い液体がぶち撒かれているものの、魔装そのものについては、見渡す限り、跡形もない状態だ。

地面に落下したジルクの鎧のところまで移動すると、どうやら行動不能になっている。

仕方ないので飛行船まで運んでやろうと、ジルクの鎧を担ぎ上げる。

「やれやれ、ようやく終わったな」

「やれやれ、じゃありませんよ。勝手に殺さないでもらえますか?」

「屋敷内での化け物をこっちに押し付けたことに比べれば可愛いもんだろ」

「相変わらず、酷い上司ですね。ですが、まさかロストアイテムとまた戦うことになるとは思いませんでしたよ」

「・・・マーマリアの本家にはよろしく伝えておいてやる。ありがたく思えよ」

「ちっ、ゴキブリみたいにしぶといわね、アンタ達」

上司と部下のハートウォーミングな会話に入ってきたのは、最後の最後で初めて役に立ったステファニーだ。

魔装のぶちまけた黒い液体で、頭から足先まで随所が真っ黒になっているのに、毒を吐くために、アロガンツ・ブロスの近くにわざわざやってきたなんて、見上げた根性じゃないか。

それに、あれだけ化け物に追われたのに、こんなに減らず口が叩けるお前のほうが十分ゴキブリ並みの生命力だよ。というか、こいつ、自分のやったことの罪の重さを理解してないよな。

この世界の主人公であるオリヴィアさんに嫌がらせをした報いくらいは受けさせておく必要があるな。

アロガンツ・ブロスでステファニーの頭部を掴んで、持ち上げて移動を開始する。

そのまま、すぐ近くに湖まで移動して、頭部から手を離すと、ステファニーは水面に落下して大量の水しぶきが飛ぶ。

「な、何すんのよー！」

「その汚い全身を綺麗な水で洗い流してやろう、ついでに心も洗い流せばいいな、という僕の親切心が分からないなんて、心が貧しいやつは気の毒だね」

「湖に落とすのが親切だなんて初めて聞いたわよ」

「さすがの私でもこんな真似は思いつきませんでしたよ」

「じゃあジルク、鎧から降りて、ずぶ濡れのステ・・ブステファニー嬢を飛行船まで連行してこい」

「ステファニーだよ！」

「貴男という人はなんて卑劣な・・・」

周囲でクズ2人がワーワー言っているが、よくよく考えてみると、今回の戦闘はこの屑2人とのコラボレーションになってしまったから複雑な心境だ。

初めは単なる討伐戦になると思ってたのに、想像もしなかったくらいの大騒ぎとなったが、ようやくここでの戦いも終わりか。

さすがに疲れたので、王都に戻ったら、少しは心身ともにゆっくりしたいな。

あ、でもリオン君とオリヴィアさんはどうなっただろうか、心配だ。

それにアロガンツ・ブロスも修理しないとイケないだろう。

あれ？結局、王都に戻ってもゆっくりできない？

第38話 激闘終わってまた一難

「どんだけえええええ?!」

オフリー領から王都に戻る公爵家の飛行船の中にある僕の執務室で、前世のどこかで聞いたことがあるようなツツコミを叫びながら、机に突っ伏してしまった。

慣れない鎧働き、しかもロストアイテム相手の激戦が終わったと思つたら、当主と後継ぎ不在で無政府状態になったオフリー領の暫定的な管理体制構築の手伝いまで色々ときさせられてしまった。

ようやく、それも一段落となり、王都への帰路に就いていたのだが、そんなところに王都のパパ上から手紙が届いており、そこに僕が不在の間の出来事が記されていた。

「な、何があつたんです!?!」

叫び声に驚いて執務室に入ってきたのは、オフリー領での戦闘でも大活躍だったジルクだ。美味しいのか否か判断に困る紅茶を入れたポットを乗せたカートを手押ししている。

性格はクズだが、射撃能力は高いし、頭も回る。さすが、あの乙女ゲーの攻略対象だけのことはある。

決闘騒動の尻拭いを画策したジルクの実家であるマーモリア家、しかもその本家がレッドグレイブ家への詫びとして、最初はいいつの妹を僕の側室に、という話が出てしまい、

それを嫌がった僕に付け込んで、ジルク自らが鎧働きのすること、家としての精算とすることにした結果、オフリー領での大騒動に巻き込まれて、今に至っている。

「・・・パパ上から手紙が届いてね。とんでもないことが起きたようだ」

「ギルバートさんをして、とんでもない、というのは余程のことなんでしょうね」

「お前が妹の代わりに体で支払うことにした今回の騒動が可愛く思えるような出来事があつたようだ」

「その言い方、やめてもらえます!?!」

「悪い悪い、冗談だ」

きわめて主観的な話だが、性格の悪さと能力の高さは嫌いじゃない。

はあ、こいつがああ黄色い毛虫に誑かされて、妹と敵対しなければ、数年後には美味しい酒と一緒に飲むことも出来たかもしれない。

「聞いて驚けよ?」

僕は右手で頭を抱えながら、父の手紙に書いてあったことをかいつまんで教えてやることにした。

妹の乗る豪華客船が修学旅行の途中に公国の艦隊に襲撃され、人質になったアンジェはリオン君が救出したこと。

公国の艦隊は、リオン君のアロガンツと飛行船が、鎧部隊もろとも撃退したこと。

その戦闘で、公国の第一王女を捕獲したとともに、戦場に出てきた黒騎士を撃退したのもリオン君だということ。表向きは、黒騎士撃破は別人の功績にしたらしいけど。

なんとも濃すぎる上に重大な事件を無理やり3行にまとめてみたが、1つ1つがツツコミどころ満載だよ。

「そんな・・・バルトファルトの強さも恐ろしいですが、それよりも、フィールド家の監視を出し抜いて艦隊が入り込んだのですか!？」

「公国の工作がだいぶ進んでいたようだ。公国艦隊に、修学旅行の豪華客船の所在を知らせたのは、アンジェの元取り巻きどもらしい。おかげでフランプトン派閥からは、公爵家の管理責任を問う声すら上がっているとのことだ」

っていうか、裏切り者の元取り巻きの女子生徒って、少し前に、見え見えのハニトラを仕掛けようとしメイドの子の妹だったな。

「オフリーはフランプトン派閥の財布だったくせに、厄介者を切り捨てるのは迅速だね。僕としては腹立たしいことばかりなんだが、怒りを向ける対象が多すぎて困るといふ珍しい気持ちも味わっているよ。発端は、どこかの誰かさん達な気もするがね」

「・・・は、派閥の整理が捗りますね」

「大元の始まりは、どっかの馬鹿王子殿と黄色い毛虫達だったな」
「ちよつとそれは不敬ですよ」

ほう、それなら、元王太子と黄色い毛虫と不愉快な穴兄弟達とでも
言えばよかつたのかな。

「すごいな、たつた7人の学生だけでこの国を大きく動かしたんだ、歴史に名を残せるんじゃないか？」

「そ、それよりも、アンジェリカさんの元取り巻きの女子といえば、彼女達の実家の浮島はちようど王都に向かう経路の途中ですね」

ずいぶんと強引に話題を変えてきたな。

まあ気分としては非常に良くないが、決闘騒動の禊は、少なくとも
マーモリア家という単位では、今回のオフリー討伐の件で済んだこと
になっているから、これ以上は突っ込んで道理が立たないか。

それにしても、裏切り者の実家が割と近くにあるとは、なんという
偶然だろう。

ふふふ・・・面白いことを思いついたぞ。

「ねえねえジルクきゅん、鎧は貸してやるから少しアルバイトをしないか？」

「え・・・どうしたんですか、ギルバートさん。そんな貼り付けたような
笑顔を浮かべて・・・」

「なあに、パパ上に帰還が遅れた詫び代わりにのお土産を用意しようと思
ってね。さあ、格納庫に行こうか・・・」

「まずは、よく無事に戻った。今回は・・・また、その・・・随分と活躍
したようだな」

王都に戻り、諸々の報告を終えた僕は、城内にある父の執務室で、細
かな報告をしようとしていたのだが、パパ上の表情が若干引きつって
いる。

公国の襲撃なんていう大事件の後処理が大変なのは理解できるし、
表情に疲れが見えることも自然だろうが、半笑いを浮かべているのは
どういうことだろう。

「リオン君から譲ってもらったロストアイテム・・・アロガンツのおかげです。アレがなかったら、今ごろオフリーと一緒に化け物の腹の中でしたよ。兄妹そろって彼には足を向けて眠れませんか」

「・・・まさか、うちの旗艦艦隊が裏切り者の家の当主やら跡取りやらをまとめて連行してくるとは思わなかったぞ」

「公国の艦隊に加えて黒騎士まで撃退するなんて、驚きとしか言えませんね。公爵家で予算を取って、ロストアイテムの発掘支援事業でも立ち上げましょうか」

「奇襲とはいえ、ごく少数、ロストアイテムの鎧1機と、形ばかりの追隨機だけで防衛網を突破して領主の館まで到達し、相手の頭を抑え込むんだなんて、並の貴族達にとっては悪夢だろうな」

・・・あれ？会話が噛み合っていないぞ。

単に、アロガンツ・ブロスと数機で裏切り者の家の浮島を襲撃して、魔力シールドを展開して領主の館を制圧しただけなのに。

立ちはだかる鎧は武器を使うまでもなく鉄拳で殴り飛ばすくらいしかしていかないのに。

「たまたま近くを通りかかったものですから、せつかくなら父上のご負担を軽くしようかと」

まるで前世の会社にいた、外回りの営業マンみたいな台詞を言いつつ、今後の父上のTODオリストの項目を減らしたのだと説明をしてみる。

「裏切り者への制裁は必要だ、見せしめも時には有効だろう。だが、やり過ぎれば味方以外の連中による結束を招きかねんぞ。余所の派閥から見たら、公国の艦隊を単機で退けられる鎧が2機もいるのと同じだ」

「僕の機体はプロトタイプらしいですから、リオン君の機体ほどの力はないんですけどね」

「部外者から見たら、大した違いはない。恐怖のあまり公爵家を排除しようとする動きが加速しても不思議ではない」

「耳の痛い話ですね」

「まあ、信用すべきではない家を派閥に入れた結果、裏切り者による侵

略を招いた私が言っても、説得力に欠けると思うだろうがな」

父上が妙に弱気なことを言っている。侯爵家の派閥に突き上げを喰らったのだろう。

いや、むしろ僕は悪手をやらかしたのかもしれない。

「フランプトン侯爵が勢力を伸ばしているということですか」

「腹立たしいことに裏切り者の切り捨てから、自派閥の拡大までの動きの速さは見事としか言えんな。例の空賊討伐の話が出た時点で早々に動いていたのだろう。おかげで、王宮内で我々の政治的影響力は大きく低下していると言わざるを得ん」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「いっそのこと、お前がもう後を継ぐか？」

「まだまだ僕に大派閥の長は務まりませんよ」

僕の場合、学生時代から、妹が王妃になった後に備えた動きにばかり勤しんでいた。

妹の婚約解消後は生身か鎧かの違いはあるものの、武力によるトラブル解決ばかりしてきたことから、直轄の公爵家内部での支持はあるかもしれない。

だが、派閥という利害を共有する集団の中で、利益を調整して振舞うために必要なスキルも経験もない。

総務や経理畑の下っ端リーマンだった前世でやってたことなんて、レベルの低い部署間の調整がせいぜいだ。

パパ上がやっているような、国の大幹部を務めながら、派閥内外の利害を、時にソフトに、時にハードにすり合わせつつ、権力を集めていく真似はすぐにはできない。

「そのための経験を積む機会から目を背けていたのはお前自身だな」

今日のパパ上は追及が厳しいな。

「身内どころか、国内の貴族達の中の至る所に火種があつて、どうにかしないとアンジェのことが心配で仕方なかったんです」

国内の領主貴族は王国に心から従っているわけではない上に、外国勢力の工作等の危険を考えると、自分や妹の将来を考えたときに、派

閥の親玉として、王宮内部の駆け引きを学んでいる余裕はなかったからね。

僕個人としては、こんな火種だらけの国だとわかってやる気をなくした陛下の気持ちはわからなくもない。

結局、アンジエが王妃になることはなくなったが、こんな火薬庫のような王国を統治しなくて済んだと考えることもできなくはない。

「そのアンジエの婚約がなくなった以上、我々としては、巻き返しを図らねばならん」

「派閥の強化が必要だということにはわかっています。だからこそ、僕だってリオン君にちよっかいを出してるわけですし」

「今までは、お前の処遇については、しつこく言わなかったのだが、そうも言っていられない状況だ」

「おや？少し空気が変わったぞ。」

「アンジエの婚約の代わりに……ってまさか……」

「まさか、またマーマモリア家と、だなんて言いませんよね？」

「別に具体的な話が出ているわけではない。ただ、タイミングや状況次第で、お前の婚姻というカードを積極的に切るつもりになった、というだけだ。嫌とは言わないよな？」

「亜人連れたクソ女とかではない、まともな相手なら我慢しますよ。もしかして、ここまでの流れってこれを言うための壮大なフリですか!？」

「お前の行動が過激化の一途をたどってるから釘を刺したかったのにな。おかげで言質も取れた」

要するに、裏切り者の家の浮島襲撃を咎める空気を出していたのも、この話をするためだったのか。

確かに、崩壊寸前の派閥を引き継がれたのではたまったものではない。

チートスキルとかがある転生者なら、離反しかけた相手を調べて、急所を突いて引き留め、バラバラになった派閥を立て直して権力を掌握！みたいなことができるかもしれないが、あいにくとそんなものは

僕にない。

「最近、あちこちで戦っていたせいかな、自分の結婚が家の取引材料になり得ることを忘れてましたよ」

「お前もそうだが、バルトファルト男爵……いや、子爵も下手な相手と結婚されると、公爵家としても厄介なんだが、そこは大丈夫か？」

「父上が昇進を推薦してくれたんでしたよね」

「セバーク、フィールド、アトリー、それにローズブレイドまで推薦に動いている。特にアトリーとローズブレイドでは、娘が子爵にご執心のような」

うわああああ。リオン君、大物貴族の家から大人気だね。というかローズブレイドだと!?

「ローズブレイドがどうしてリオン君に？」

「お前と見合いをしたほうではない。下の妹が修学旅行で子爵と同じグループだったそう。まあ、窮地を救われた強い騎士に……という経過であれば不自然ではない」

「妹ってたしか縦ロールの派手な女でした。しかし、家として、お見合いで失礼なことを言ってきたながら、公爵家と付き合いのあるリオン君にちよっかいを出すなんて恥知らずな……」

「お前もだいたい失礼なことを言ったのだから、そこはお互い様だ」
酷いな、ペットになれと言われたから、裸エプロンしてくれと言っただけなのに。

っていうか、リオン君の周りの女性の思い返してみると、オリヴィアさんにクラリス嬢、それにローズブレイド家の妹のほうも確かスタイルがいいと聞いたことがある……

リオン君の周りのおっぱい偏差値、高えな。

羨ましい、僕の周りには、胸部に豊かな実りを湛えた女の子の影すらないぞ、ちくしょう！

というか、よくよく考えてみれば、肩書だって、将来の聖女様、王宮の大臣の娘、武闘派大物貴族の娘という豪華なラインナップだな。

……ここまで来たら、そのうち、王族関係者とか外国の要人とか

も出てきそうだな。

王族・・・外国の要人・・・あの腹黒姫の異名を持つ王妃様が、陛下と離縁してリオン君と連合王国に駆け落ちとかされたら洒落にならないねw

この世界が、乙女ゲーではなく、ギャルゲーの世界だったら、リオン君のことを攻略対象ではなく、たまに目に星マークが浮かぶ、色んな女を誑し込む人生二週目のスケコマシだと疑ってたかもしれない。

人生二週目・・・僕や黄色い毛虫ことマリエみたいだな。

・・・あれ？リオン君も転生者？まさかね？

「リオン君を子爵にしたことで、厄介な家々が寄ってきたということですね」

「歴史に名を残るほどのスピードで、男爵家の側室の三男から子爵に上り詰め、公国の艦隊を黒騎士もろとも撃退する騎士を、放っておく連中のほうがどうかしている」

「あの学園の女どもはクソばかりですから、安心していたのですが、伯爵家の当主クラスが彼に目を付けたのは厄介です」

「目ざとい奴らは、力を持つ騎士を放つてはおかかないと以前、お前に言ったことを覚えているか？子爵の婚姻の件は、お前が何やら動いていることは聞いているが大丈夫なんだろうな？」

「僕が結婚の面倒を見た辺境の領主に、リオン君と付き合いの長い特待生の子を養子縁組させて、くつつけるべく動いています」

オリヴィアさん、結局、修学旅行でリオン君と仲直りできたのだろうか。

もしまだだったら、強めのテコ入れが必要だろうな・・・公国襲撃という機会を通じて、吊り橋効果で二人に愛が芽生えてくれていたりしないかな。

「特待生か・・・アンジェとも仲が良いようだと言っているが？」

「それなら、2人には末永くアンジェを支えてもらいましょう」

「・・・まあ、あまり先々のことを言っても仕方ないか」

「リオン君のことは僕が引き続き動きます。父上は、派閥の整理と立

て直しをお願いします」

そう、リオン君には、オリヴィアさんという主人公様に捧げる供物、肉バイ・・・いや、番となってもらわなければ困るんだ。近々に探りを入れてみるとするか。

城を出て、屋敷に向かう馬車の中で僕は考え込んでいた。

内容はもちろん、リオン君の転生者疑惑だ。大きく息を吸って、気持ちを落ち着かせながら、肯定要素と否定要素を整理してみよう。

肯定要素の1つ目は、アロガンツや飛行船パルトナーというロストアイテムを見つけ出して武力を整えつつ、短時間に子爵にまで昇進したという点だ。

アロガンツもパルトナーも、妹がプレイしていたときの課金アイテムにはなかったが、リオン・フォウ・バルトファルトという存在と同時期に実装されたDLC、追加コンテンツという可能性はある。

肯定要素の2つ目は、学園入学後、間もない頃から主人公であるオリヴィアさんを事実上庇護していた点だな。

あの時点では、リオン君自身、いずれは貴族のどこかから結婚相手を探さねばならないから、この世界の価値観からすると、愛人か体目的でない限り、オリヴィアさんを近くに置く理由は乏しい。

ただ、最近ではリオン君自身がオリヴィアさんから距離を取ろうとしていたので、その意図というのは推測が難しい。

まあ、おっぱいが大きくて、性格もよく、可愛い主人公様を積極的に自分のモノにしようとしていない点ではマリエと大きく異なるか。

否定要素はいくつもあるが、最も大きいのは決闘騒動で、当時の王太子と不愉快な穴兄弟達という元祖攻略対象を敵に回してアンジエを助けた点だろう。

ゲームのシナリオでは、公爵家は落ちていく一方のはずだから、アンジエを助けて、公爵家に接近するメリットは大きくないだろう。

彼が敵対的な行動を一切取っていない以上、急ぐ必要はないだろう

が、いずれ、タイミングを見計らって探りを入れておいた方がいいかもしれないね。

色々と考え込んでいると、馬車は公爵家の屋敷に到着していた。

時間もだいぶ遅いので、出迎えの使用人達を労って僕は早々に自室に向かう。

自分のベッドで休めるのも久しぶりだな、数日はゆっくり過ごしたものだと思い、部屋の扉を少し開けたところで、僕はあることに気付いた。

そう、屋敷に戻ってきてから、あの腹黒陰険眼鏡メイドことコーデアリアの姿を見ていないんだ。

出迎えの使用人達の中にもいなかったし、夜も遅いのもう休んでいるだけかもしれない。

ただ、あの腹黒メイドとは、良くも悪くも付き合いは長い。あいつが何も仕掛けないとは思えない。

きつと、僕のメンタルを地味に大幅に削る小さな嫌がらせをしてくるはずだ。

以前も、僕が屋敷にこつそり戻ってきたのを察知して、僕の部屋で待ち伏せていたことがあった。

今回も同じことをしてくる可能性は十分ある。

開けた扉をもう少し開いて、自室の中を見回したかぎり、人の気配はない。

もちろん、光源は廊下の明かりが僕の部屋に差し込んだ分しかないので、部屋の隅々まで見たわけではないが、前回、コーデアリアが潜んでいた場所にはいなさそうだ。

ゆっくり部屋の扉近くにある照明のスイッチに手をかけて、部屋を明るくするが、人影は見当たらない。

やっぱり僕の考えすぎだろうか。

いや、きつとあいつなら、僕が疲れ果てて肉体も精神もボロボロのタイミングを見逃さないはずだ。

とすれば、どこかに隠れているのだろう。

改めて部屋の中を見渡して、目についたのは衣装棚とベッドだっ

た。

だが、さすがにコーデアリアがいくら陰険で腹黒で嫌味だからと言つて、それでもアンジェに長く仕えるまともな淑女であることは間違いない。

だとすれば、未婚の女性として、男性のベッドに入り込んでいるということはさすがにないだろう。

衣装棚も、察知した僕が、外側からテープを張られたりしたら、外に出られなくなってしまうので、そんな悪手を打つことはしないだろう。

となると・・・そうか、部屋の扉の裏か!?

それなら、外からは見えずに、しかも、ほぼ自動的に僕の後ろを取ることができる。

謎は全て解けた!ふふふ、今回は僕の勝ちだな。

ニヤリと勝利の笑みを浮かべながら、ドアノブに手をかけて、部屋の扉をさらに開いていく。

そして、もう少しでほぼ全開という寸前で、扉がソフトに押し返された。ビンゴ!やはり扉裏に潜んでいたか。

「おやおや、金具が壊れでもしたかな?」

わざとらしい独り言を呟きながら、何度か扉を押し込み、そのたびに部屋の扉が押し返される。

きっと扉の裏では、扉と壁に挟まれて苦々しい顔をした腹黒陰険眼鏡メイドがいるに違いない。そんな愉快的絵面を想像しながら僕は、扉の裏を覗き込んだ。

ふう、結論から言おう。

誰得?

扉の裏では予想通り壁と扉に挟まれた腹黒メイドがいた。ここまでは良かったんだ、ここまでは。

しかし、予想と大きく異なっていたことがあるとすれば、扉を押し返していたのは、彼女の顔や肩などではなかったことだ。

扉を押し返していたのは、妹や主人公様のように豊かに実つてはいないものの、人並みには実つた彼女の胸部装甲だったんだ。

両手で、金属製のトレイを持っていて手元が塞がっており、トレイが扉にぶつかって音を出さないようにするために腕で扉を押し返すことができなかったのだろう。

腹黒メイドの顔は少し紅潮し、ほんのり涙目になりながら、僕を睨んでいる。その感情は羞恥か、それとも怒りなのかどつちなのだろうか。

つつい、改めて扉を押し込むと、胸部装甲が少しだけ変形し、再び扉を押し返した。

うん、これはやつべえことになった。

魔装に追いかけていたときと同じくらい冷汗が滝のように僕の背中を流れ落ちる。

「こ、これは事故だ、不幸な事故じゃないか！むしろ、こんなところに隠れてるお前だつて悪いだろ!?!」

僕の全力の釈明に全く耳を傾ける様子のない腹黒メイドは、手元の金属製のトレイを握りしめながら、一步一步、僕に近付いてくる。

「いや、ちよつと待て。その手のトレイを離すんだ。悪かった、僕も悪かったつて！知らなかったんだよ!!だから、トレイの淵はやめよう！淵はすごく痛いから!!」

しかし、僕の必死の釈明は聞こえているはずなのに、コーデリアの歩いてくる速度は変わらない。

「暴力に訴えかける前に金銭的な解決に向けた協議をしようじゃないか。だから、ほら・・・っていうか、そんなに実ってるなん」

僕の弁解の言の途中で、無慈悲な腹黒メイドが振り下ろした金属製のトレイの底は、僕の頭部を上から叩きつけ、その衝撃で僕は顔面を床に強打する羽目になってしまった。

「この件は、公爵様・・・いえ、お嬢様に報告いたします!」
待つて!それが一番困る!

やつぱりこいつ、僕が嫌がることを最もわかっているやがる!

せつかく命がけの激戦から帰ってきたつていうのに、待つていたのは、こんなシヨボイラツキースケベなんて、酷い!

第39話 主人公様と敵対？真つ平御免だ！

たいして、否、ほぼ嬉しくもないラツキースケベというか事故のせいで、凶器のトレイの底が抜けるような勢いでド突かれた後は、腹黒陰険眼鏡メイドことコーデリアによる説教タイムが続いていた。

公爵家の跡取りなんだからもうちよつと落ち着け、とか、戦場に出るとしても最前線に突っ込んで行くな、とかまるでパパ上が言うのを諦めたことを未だに言ってきた。

君はオカンか!?

怒り過ぎると皺が増えて老けて見えやすくなるよ、というツツコミは、なんとか喉元に抑え込んでいる。

怒った女はエネルギー切れになるまで距離を取り、ガス欠になつてから対応するのがベストだ。

・・・ただし、個人的経験に基づく主観的なもので客観的な効能を保証するものではないけどね。

「ですから・・・！毎回、毎回！若様が先陣を切る必要はないでしょう！」

よし、だいぶエネルギーを消耗したようだ。まあ、一応はこいつも僕を心配してくれているのはわかる。

公爵家の中でアンジェガチ勢筆頭兼僕アンチではあるが、まあ付き合っても長いから腐れ縁みたいなものだ。

色々理由はあるんだけど、しようがないじゃないかあー！」

まるで前世の国民的ドラマに出ていたイガグリ頭の子役出身の俳優のようなセリフを心の中で吐きながら、言い訳を続ける。

「アロガンツ・ブ羅斯は他の騎士には使えないからね。性能がずば抜けた機体で敵の戦力を削ることで味方の損耗を減らせる。派閥内での支持基盤が弱い僕にとつては、公爵家直属の貴重な戦力を大事にしたいのさ」

「お嬢様の取り巻き連中のことをお考えなのかもしれませんが・・・うちの実家は裏切る真似はしません」

たしかに、アンジェの婚約破棄騒動以後、公爵家の派閥は大きく弱

体化して離れていった家は多い。リオン君とのつながりを得られていなければ、うちの実家はより厳しい状況に置かれていただろう。

そんな中でもコーデリアの実家は、いまだに娘に公爵家でメイドをさせている。本来なら政略結婚をさせて、自分の家の強化に使ってもいいはずなのに、だ。

そのくらいには、コーデリアの実家が、うちの派閥に重心を置いていることは理解できる。

「君の実家はともかく、君自身から地味で小さな嫌がらせを定期的にされてる気がするんだが？今回だって、扉の裏に隠れていたのも、おおかた、僕を驚かせてやろうという悪だくみだろ」

「あの程度で嫌がらせだなんて、相変わらず若様は器が小さいですね」

全く、ああ言えばこう言う、小うるさい腹黒陰険眼鏡メイドだな。

「前にも言ったが、お前をクビにしない時点でそれなりの器の広さはあると思うんだけどね」

「そういえば驚かせるで思い出しました。こちらをご覧ください」

僕の反撃をまるっとスルーした腹黒陰険眼鏡メイドは、先ほどから手に持っていた分厚い紙の束を渡してくる。

手に取ってパラパラとペー지를めくると、すぐに、アンジェが巻き込まれた公国との戦闘に関する詳細なレポートであることがわかった。

おそらく、僕が留守の間に、父が調べさせた公国との戦闘やその前後の状況等の調査記録の写しを用意していたのだろう。

さすが、性格は陰険だし、オツパイが大きいわけではないし、地味だが、僕が欲するものが何かを的確に理解しているサポート能力は高い。さすが公爵家の上級メイドだと言わざるを得ないのが少し悔しい。

「寄子を信用できないから、ご自分で味方を作るといいうのは、学生時代の頃からですが、若様が特待生に目を付けていた理由は、これを見越していたからだったんですね」

そう言うと、コーデリアは、僕の手元にある紙の束の中から、付箋が貼られたページを開いた。

そこはオリヴィアさんの行動について書かれた部分である。

修学旅行の豪華客船を包囲した公国軍の人質になろうとしたアンジエを止めようとしたり、その際に袋叩きになったリオン君を守ろうと他の生徒と乱闘したり、戦闘の負傷者を回復魔法で治療したこと等が記載されていた。

さすが主人公様……というか、アンジエと本当に仲が良いよね。

本来、君達はあの馬鹿王子を奪い合う宿敵同士、という関係だったはずだろうに……ただアンジエのために乱闘してくれるなんて、これはいずれしつかりと恩を返さなければ。

そして、しばらく読み進めていくと、「特記事項」と書かれた項目があり、コーデリアもここを指さした。

「正直に言って、私もこれを読んだときは驚きました」

色々と詳しく書かれているのだが、簡単に言えば、公国の艦隊からの一斉砲撃を、一人で展開した魔法障壁で完全に防ぎ切ったということが書かれていた。

おいおいおいおい！これは一体何の冗談だ!?この異常さはリオン君にも劣らないぞ。

リオン君の戦果は、彼が発見したロストアイテムの性能によるところが大きい。オリヴィアさんの場合は、生身の人間が単独で出した結果だ。

というか、これって人間に出せる力と云っていいのか?……いや、僕はまだこの事象を理解できるほうだろう。

僕は、あの子がこの世界の主人公だと知っているのだから。

主人公様に秘められた、ゲームという物語を進めるために必要な、都合のいいスーパーパワー。

しかし、現実を目の当たりにした中で、ここまでのものとは思わなかった。

さつきは、パパ上にリオン君の処遇について、抜かりなく進めるよう釘を刺されたが、オリヴィアさんだつてウカウカしてたら魔の手を

伸ばす貴族連中が出てくるのは時間の問題だ。

今までオリヴィアさんが無事だったのは、彼女自身が何か戦果をあげたわけではなかったし、リオン君が近くにいたというのもあるだろう。

「僕がオリヴィアさんに注目する理由がわかっただろうか？」

「あれこれと、それっぽいや理屈を付けながらも、結局は優れた容貌と後腐れのない身分目当ての愛人候補だと思っていましたが・・・まさか本当に隠された鷹の爪を見抜いていたのですね」

「僕が色ボケしているように聞こえるだけ？」

「安心してください。ご自分の保身を念頭から外さないあたり、あの愚物5匹よりはマシだと思っています。むしろ、バルトフアルト男爵と特待生を一挙に取り込もうとする先見の明には感服していますよ、残念ながら」

「あの5人と比べると確かに確かな悪意を感じるが、まあいいか。それよりも一つ、頼めるか？」

「特待生に愛人になるよう説得するのですしたらお断りします」

「あの子はリオン君とくつつけるって言ってるだろ!?オリヴィアさんの関係者、家族や友人周りを急いで保護する。手が空いてる騎士を何人が急いで送ってくれ」

「それでしたら、似たような指示が来るだろうと鎧部隊にはこっそり伝えてありますので、すぐにでも動けると思いますよ」

「さすが、ずいぶんと手際がいいじゃないか」

「若様の特待生へのご執心と、今回の公国との戦闘結果からすれば想像の範囲内です。それにお嬢様とも非常に仲がよろしいようですので」

「結局最後のが本音じゃねえか」

「さすがアンジェガチ勢の筆頭だ。」

まあ、最後のは置いておくとしても、さすが主人公様だ、というほかない能力の高さに、敵対したときの恐怖を考えると冷や汗が出てくる。

リオン君以外の貴族が今までオリヴィアさんにちよつかいを出し

ていなくて本当に良かった。

主人公様の能力の高さがこんなに高いものだとは知らなかったとはいえ、もつと早期に公爵家で取り込んでおかなかったことが僕の落ち度だったかもしれない。

「特待生とはいえ平民一人相手に、警戒しすぎでは？」

「学生の時点で、人一人で、艦隊の砲撃を短時間でも無力化できるほどの魔法が使える人間だぞ？自分以外の勢力にいたらそれだけで脅威だろ」

コーデリアから渡された紙の束を持つ自分の手が少し震えているのがわかる。

「あら、手が震えていますよ？」

「リオン君ともども、それだけの価値があるということさ」

「公爵家の跡取りともあろうお方が、情けないのではないのですか？」

「煽るなよ・・・たまたま生まれた家が公爵家で、そこで生まれた順番が最初だったというだけさ」

主人公様ことオリヴィアさんの秘められた力の一端を知っただけでなく、先のオフリー領で魔装に追いかけて回されたことを思い出して、

改めて自分個人は特別な人間なのではなく、たまたま生まれた家があんまりでもなくチートレベルのスペックだっただけ、その実家パワーを使ってロストアイテムを手に入れて暴れ回っていただけなのだということ再認識していた。

僕のことを見ている腹黒陰険眼鏡メイドは、何かを思いついたのか、口角が上がり、意地悪そうな笑顔を浮かべて口を開く。

「若様が弱気になるなんて、珍しいこともあるものですね。手でも握って差し上げましょうか？」

どうやら腹黒なりに、僕を励まそうとしてくれているらしい。珍しいこともあるものだ。明日の王都には雪か槍でも降るんじゃないだろうか。

とはいえ、手を握るって・・・思春期の子供じゃあるまいし、もつ

と他にあるだろうと内心でツツコミを入れながら、だが、それ以上になると責任が伴うのでマズいか、という理性も働く。

というか、この腹黒陰険眼鏡メイド相手に、僕の下半身に鎮座する公爵家の跡取りのジュニアがオーバードライブするとは思えないし、イグニションするだけでも嫌だ。

とはいえ、僕とほぼ同じくらいの年齢で、婚約者どころか、恋愛経験すらなさそうなコーデリアにからかわれたままではいるのも癪だな。どうせ本当に握ってくれなんて言われるとは思っていないのだろう。

なので、紙の束を脇に置いて意地悪く笑うコーデリアの手を即座に握ってやった。

「え・・・ちよ、若様？」

思ったとおりだ。突然の出来事に驚き、言葉を紡げなくなって、顔が真っ赤になっている。

人は、他人が慌てふためいている姿を見ると、自分自身は落ち着くものだというのが、

いつもは表情筋が職務放棄をしているが如きポーカーフフェイスが赤くなっている腹黒陰険眼鏡メイドの姿を見ると、面白くなってきて、少し気分が上向いてきた。

「僕を色恋っぽいことでおちよくるなんて10年早い」

「ね、年数は関係ないじゃないですか！」

「そりやそうだ。だが、それでも場数が足りてないぞ」

「そんなに場数を踏んでるなんて、さすが若様は女の敵ですね」

「・・・コーデリアなりに気を使ってくれたことには礼を言うよ」

「アンジェリカ様のついでにお支えするくらいはしますよ」
相変わらず口の減らない腹黒メイドだ。

あ、そうだ。すっかり忘れていたが、アンジェにも話を聞かないと不味いな。修学旅行前にはリオン君と少し距離があったようだが、今後を考えると、それなりに友人関係には戻ってもらっていないと困る。

ひとまず、アンジェとも、一度話をする必要があるな。

「そうだ、アンジエを明日こっちに来させてくれ。やっとオフリー領から戻ってこれたんだ、顔を見ておきたい」

「・・・かしこまりました。ですが・・・シスコンはほどほどにしてくださいね」

「失礼だな、僕は妹が大切なだけのお兄ちゃんだ」

「失礼します」

王都に戻ってきた翌日の午後、僕の部屋をアンジエが訪れていた。

「呼び出してすまなかったね。僕がオフリー領に行っている間のことは聞いたよ、何はともあれ、アンジエが無事でよかった」

「兄上こそ、色々と表沙汰にできないことがあったと聞きました
が・・・」

今回、僕がオフリー領でラーシエル神聖王国からもたらされた可能性の高い魔装というロストアイテムと交戦した件は、どうやら一部事実を伏せて、部分的な情報のみが開示されることになったらしい。

まあ、オフリーがラーシエルともつながっていた、という物的証拠はないし、直接ラーシエルのスパイとやり取りをしていた人間も魔装の腹の中だ。

結局、オフリーとつながった空賊を、オフリーともども滅ぼした、という結果だけが生じたことになったらしい。王国としても、公国とのイザコザ以外を深く掘り下げる余裕はなかったのだろう。

「王宮にデカい貸しができたと思えばいいさ。ま、オフリーの性悪女とジルクと一緒に敵のロストアイテムに追いかけて回されたときはさすがに命の危険を感じたけどね」

笑いながら、オフリー屋敷で起こった三つ巴レスバ追いかけっこの一部始終を話したのだが、妹の眉間には皺が寄り、怪訝そうな表情を浮かべている。

「た、大変でしたね・・・すみません、あまりに突飛な内容と、私の常識では想像できなかった組み合わせに思考が・・・」

大丈夫だ、妹よ。僕だってあんな笑いの神が降臨したかのような組み合わせが誕生するとは思ってなかった。

「あの場であの性悪女を処刑できなかったのは遺憾だが、藻が繁殖している湖にぶん投げてやったし、これからオフリー家の唯一の生き残りとして、厳しい追及を受けるだろうから、あとは司法に任せろ。あの女にケンカを売られたアンジェとしては、まだ足りないかな？」

「いえ・・・あの女が投げ所に使っていたものは全て失ったようなものですから十分ですよ」

おやおや、うちの妹は悪役令嬢なのに優しいね。

「とはいえ、今回はさすがに危なかった。リオン君からもらったロスアイテムがなかったら、僕も命はなかっただろう。お互い、彼には感謝しないとね。ところで、リオン君とはどうだい？」

「・・・どう、とは？」

妹は質問の意味を読みかねているようだ。

「修学旅行の前・・・というか、空賊討伐の後は彼と少し距離を置いていたようだったけど、今回の件でちゃんと仲直りしたのかな？」

「そ、そうですね」

「それならいい。ところで、彼の結婚相手が決まったという話・・・というか、浮いた話を、一部を除いて、聞かないんだが、何か知らないか？」

「女子には嫌われていますから」

「そうか・・・そもそも黒騎士に勝っただけで十分なのだが、彼の功績に着目する貴族連中が増えてきたようでね・・・正直に言うと、我が家としては、下手な相手と結婚されると困ると思っていた」

「最近、黒騎士に苦戦したのを気にしてか、鍛錬にも精を出し、ダンジョンにもよく通っています」

「巫人を侍らせてご満悦な馬鹿女どもが動かないのは好都合なんだが、リオン君が子爵になるに当たって、一部・・・僕も見過ごせない大物が動き出したのが気になってね」

「子爵!?まさか今回の公国との戦闘で？」

「ああ。うちだけでなく、王妃様に加えて、ファイールド、セバーク、アークライト……おまけにアトリーとローズブレイドまで昇進の推薦を出してきた」

「つまり、兄上は、爵位上、クラリスとディアドリーがりオンに問題なく手を出せる状況になったことを気にしているということでしょうか」

「アトリーは既に家ぐるみで動いている。僕にも探りを入れてきたよ」

オフリー領に向かう途中でも、大臣が自らりオン君のことを色々聞いてきたことを思い出して頭が痛くなってくる。

パパ上が言っていた、目端の効く連中はりオン君を見逃さないという台詞が、まさか閣僚級までを含むとは思っていなかった。

いや、見逃さないからこそ閣僚級のポジションなのかもしれないが、そんな大物が成り上がりのりオン君に目を付けるなんて思わないじゃないか！

「兄上は、やはりりオンを取り込むつもりで？」

「僕はこの家の跡取りだが、王宮や辺境の監査で暴れ回っていることが多かったから、家の派閥内での確たる支持を築けていない。将来的に派閥をまとめていくためには、僕直轄の力を派閥の連中に示す必要がある」

「そのためにりオンが必要だと？」

「この国の貴族は忠誠ではなく、力によって王国に従っていることは理解しているだろう？それは派閥内でも同じことさ。だから、りオン君をしっかりと取り込みたいんだが、それにはやはり結婚相手を世話するのが手っ取り早いし確実なんでね」

「それは……おっしゃる通りだと思います」

アンジェが視線を一瞬だけ僕から背けて、少し間を置いて答えた。

いや、これは、たまたまかもしれない。そうであってほしいという僕の願望も込みだが。

「正直に言くと、僕が昔、結婚相手を世話した辺境の誰かの家に、オリ

ヴィアさんを養子にさせようと動いている。手続きが終わったら、リオン君とくつつけて、二人とも僕のところまで保護するよ」

「あの二人を取り込めれば得られるものは大きいですが、兄上が派閥内で支持を構築してからでは遅いのですか？」

「リオン君の婚約の先延ばしにするメリットは何だい？」

「・・・性急に取り込んで、うちの派閥内で、兄上お気に入りの方にオンを排除したり、貶めようとする動きが出るおそれがあります」

なるほど、さすが我が妹。王妃教育を受けただけあって、しっかりと知恵が回る。派閥内での主導権争いのリスクはたしかにある。

だが、僕にとって大きな問題なのは、妹がリオン君の婚約を先送りしようとしたことだ。

「アンジェの言うことも正論だ。だが、アトリーとローズブレイドなんていう大物、しかもその当主クラスまで動き出したのでは、僕にも荷が重い。父上は派閥の再編成に専念している以上、連中に時間を与えたくない。品のない話だが、一服盛って既成事実を作られてゲームオーバー、なんていう事態は避けたい」

「そこまでするでしょうか・・・いや、しますね」

「同意してもらえてよかったよ。アトリーは、一度、婚約破棄を経験しているからなりふり構わず仕掛けてくるだろうし、ローズブレイドも・・・ほら、その・・・個性的な家だろう？きつとこの先、リオン君やオリヴィアさんの周りは騒がしくなる。あの二人に最も近いところにいるアンジェにフォローしてもらいたいんだ、友人なのだろう？」

「はい・・・わかりました」

「まあここまで色々と言ったが、リオン君の表彰が終わったら諸々落ち着くだろうから、そうしたら一度領地でゆっくりしよう」

「そうですね、ありがとうございます」

アンジェが退室した後、僕は嫌な予感が的中したことに頭を抱えていた。

リオン君とオリヴィアさんをくつつけようとする事に関して、アンジェの回答の歯切れが明らかに良くなかった。

表だって嫌がってはいるが、あの二人をくつつけるメリットの大きさは十分にわかつているはずだ。

普通であれば、家のためにすることには前向きなはずなのに・・・

そうだとすれば、導き出される答えは・・・

考えながら、手元のティーカップに入ったお茶を口に含むと、既に冷めてしまっている。

冷たい喉ごしを堪能しながら、このお茶を淹れてくれた腹黒メイドの言葉を思い出す。

リオン君は、姫を救った騎士のような見方をする人間もいる、というものだ。

思い返してみると、今回の公国との戦闘で、リオン君はエアバイク単機で公国の艦隊に突撃を仕掛けてアンジェを救出してくれたらしい。

それ自体は非常にありがたい。家族として、感謝してもしきれない。

しかし、リオン君が成し遂げたことが、はたから見ても格好良すぎる。

僕の妹がああ馬鹿王子と婚約を解消して間がないことや、愚かな男に簡単になびく女ではないとは思っているが、それでも決闘騒動から、続けてまたしても窮地を救われたんだ。

しかも、今度は命のかかった危機的な状況だ。公爵家の関係者達も、リオン君のことを真の騎士だともてはやしている人間が多い。

メタ的な言い方をすれば、悪役令嬢の攻略フラグが立った、などと言えなくもない。

リオン君はおそらくDLCで追加された攻略対象なのだろうから、彼はオリヴィアさんの獲物だ。

アンジェにそんなフラグが立つのは困る。

せつかく、あの馬鹿王子をめぐつて対立する宿命から解き放たれた

というのに、どうしてこうなった!?

DLC用のライバル令嬢のデザインとかシナリオを開発会社がケチって、アンジェを流用したとでもいうのか？

兎にも角にも、主人公様と男を取り合った令嬢の末路はロクなものではないだろう。

悪役令嬢の攻略フラグは、アンジェにとっての破滅フラグにもなりかねない。

せっかく王都に戻ってきたというのに、家の外ではフランプトン派閥への対策、家の中では妹に立ったフラグへの対策に動かなければならない。

あ、それよりもまずオリヴィアさんの地元を調べて、あとアロガンツ・ブ羅斯を修理に出さないと・・・

第40話 人の修羅場は蜜の味と思つたら

「マスター、報告があります」

公国との戦闘から王都の学園に戻り、何故か5人の攻略対象者から“勝つたらマリエとの間を邪魔するな”という意味不明な要求付きの再度の決闘を挑まれ、

数日後に迫つた決闘の準備をしていたリオンに対して、ルクシオンが周囲に他の人間がいないタイミングで語りかける。

「どうしたんだよ、あらたまつて」

「レッドグレイブ家に潜ませたスパイロボや試作型アログantzからのデータ等が届きました。戦闘の際の音声の中に、ギルバートがマスターやマリエと同じような転生者であることを匂わす発言がありました。マスターの睨んだ通りですね」

ルクシオンが告げると、子機に内蔵されたスピーカーから音声が流れてくる。

『ははは……まさか今世ではビームの撃ち合いをする当事者になるとは思わなかったね』

「てつきり追加の攻略対象か何かだと思つたが、転生者のほうだったか……さて、俺に悪印象は持っていないだろうけど、どうやって切り出したものかな」

「データによると、公国戦の表彰式典の際にマスターに接触を計画しているようですので、そこで話をしてはいかがでしょうか」

「それだと周りにも人が多そうだな……もつと前に接触できないか？」

「……ギルバートですが、今は王都を離れてオリヴィアの地元の浮島にいます」

「はあ!?もしかしてリビアを愛人にしようつて動いているとか?」

公爵家が平民であるリビアのために動く理由が思い浮かばないので、それならギルバート個人が動いているのではないかとリオンは推測した。

「いえ、下っ端の騎士に扮して地元の平民女性を食事に誘つたり、各所

に一緒に出掛けたりしています」

「ナンパじゃねえか!!顔も良くて、金があつて、それでいて転生者なら、金持ちの美人に手を出せばいいじゃないかよ!マリエみたいに野心を剥き出しにするとかしないのかよ!」

「マスター、嫉妬のあまり、論点がずれていませんか?」

「うるせえよ!俺達貧乏貴族がクソみたいな女と結婚するために血の涙を流しているのに、あの人は婚約者も作らずに平民の女の子を口説いて人生を謳歌してるんだ!こんなの理不尽だろ!」

王国の男性貴族は、学園卒業時までには貴族階級出身の婚約者がいないと、問題がある人物であると扱われて、周囲の貴族に舐められたり、経済的な取引で不利益を受けたりすることがある。

そのため、学園の上級クラス内の下級貴族の跡取り達は、性格、性癖その他人格に問題がある女子生徒に媚びを売って結婚してもらう必要がある。

そんな状況にあるリオンにとっては、ギルバートの行動は他人事ながら腹立たしいことこの上なかった。

「世間体を気にしていない、いえ、気にする必要がないほど実家が強いからでしょうね。学生時代の下級貴族への結婚相手斡旋や役人になってからの辺境の監査などで、一部の界限からの支持も強いようですし」

「羨ましい限りだな」

「マスターも、私という力を持っているのですから、愚かな新人類どもの目など気にせず、オリヴィアを受け入れてしまえばいいのでは?」

「そ、それとこれとは話が違うだろ・・・」

「やれやれ、告白までされたのに、あれからオリヴィアと2人きりになることから逃げ回っているヘタレなマスターを持つと苦労しますね」

「そういうえばギルバートさん、今度、最高級の娼館に連れて行ってくれるって約束、覚えてるかな」

「話題をそらしましたね。そのギルバートですが、現在は現地の女性

を口説いている最中ですが、正確に言うと、用事が終わったので、余った時間をナンパに当てているというものです」

「用事？」

「オリヴィアが公国との戦闘で見せた魔法の力を重く見たようです。公爵家で困い、他の派閥に手出しさせないように、色々と根回しをするために、自ら赴いたようですね」

「・・・遊んでいるようで、仕事はしてるんだな」

「空賊討伐の際に、オフリー家がマスターやオリヴィアを罠に嵌めようとしたことを踏まえて、対策を講じているのでしよう。公爵家がマスター達を取り込むために積極的に動き出したということですよ」

「それなら、婚約者の一人でも紹介してほしいもんだね」

「娼館云々よりも先に、それを言うべきだったのでは？」

「それは・・・別問題だろ。男の子として興味があっても悪くはないだろ。それに、前世でも、相手と距離を縮めるために夜の店に連れて行くこうとする人はいたからな」

「アンジェリカに鉄拳制裁を受けたのをお忘れですか？あと、オリヴィアに知られたら、また首を締め上げられますよ？」

「やめろよ!?!絶対にこのことをあの2人に言うなよ?あときは本当に怖かったんだからな!!」

オリヴィアから告白されたときに、思いつきり首を絞められたことを思い出して、リオンは背筋に冷たいものが通り抜けるような感覚に襲われていた。

当時は、その直後に、よりダイレクトに命の危機を感じた黒騎士との戦闘があつたので、若干印象が上書きされていたが、ルクシオン特性の耐圧性能を持つパイロットスーツの上から首を締め上げられた恐怖はまだ記憶に新しい。

「気が向いたら善処しましょう」

「いや、せめて真剣に対処しろよ」

さて、僕は今、どこにいるのでしょうか。

一人レポーターごっこを脳内でやってみたが、やはり回答者がいないというのは悲しい。

答えを言ってしまうと、我が母校であり、今は妹が在籍しているケモノー学園の校舎裏だ。

妹を人質にしようとした絶許な公国を退けただけでなく、その公国の部隊を率いていた王女の身柄を押さえた功績で、リオン君を子爵に昇進させる表彰式典が終わり、

アンジェの件でお礼を言うのと合わせて、オフリー領での戦闘で損傷したアロガンツ・ブロスの修理を依頼しようと、僕はリオン君を探していた。

ただ、そのリオン君は、こっそりと、会場の外に向おうとするので、その後を追っていたのだが、リオン君の足が思ったよりもだいぶ速かった。

僕も、追いかけていると、色々な人から声をかけられて対応に追われるはめになり、ようやく追いついたと思ったら、そこは、学園の敷地内でもほとんど人がいない校舎裏だった。

「どうしてこうなった・・・」

そして、リオン君は校舎の壁に背を預けながら体育座りをして、空を見上げながら独り言を呟いている。

色々あつて疲れているのか、たまにブツブツと何かをしゃべりながら頭を抱えている。

「子爵って何さ!? 四位下? 俺に一体どんな働きを求めるんだ!」

リオン君、めっちゃ昇進が嫌そうだね。

君に求めてる働き? そんなの単純さ。

まずは、この世界の主人公様であるオリヴィアさんの竿・・・いや、運命の相手となること。

そして、次に、強大なロストアイテムを持つ君と僕とで公爵家の派閥の武力を飛躍的に高めて、かつて以上の巨大勢力にして、ブイブイ言わせることさ。

リオン君の様子は、子爵への昇進を喜んでいるものではない。ホルファート王国でも歴史に残る異例のスピード出世を遂げているリオ

ン君であるが、情報を集めた限り、やはり、立身出世を目指しているタイプの人間ではないようだ。

オリジナルの攻略対象とは異なる、DLCの攻略対象であると思われる彼は、ロストアイテム発見のような冒険者としての活動に重きを置いていいのかもしれないね。

そんなりオン君のキャラを知りながらも、ゆくゆくは聖女になる、この世界の主人公ことオリヴィアさんと身分的に釣り合うように、子爵まで昇進させようと、色々と動いていた僕だが、

物陰に隠れながら、物思いにふけている様子のりオン君にかける言葉を考えているうちに、近付いてくる人影に気付く。

校舎裏は見晴らしが悪く、接近に近付けなかったが、りオン君の下にやってきたのは、主人公のオリヴィアさんだ。

なるほど、これは主人公と攻略対象が二人きりになるイベントなのかもしれない。

何を話しているのかはよく聞こえないが、りオン君はときおり照れ臭そうに顔をかきながら、それでもどこか楽しそうに話をしている。

そして、体育座りをしながら、顔を上げてオリヴィアさんのことを見上げている。

視線の高さや角度からすると、おそらくりオン君の視界には、オリヴィアさんの豊かで形が良さそうな2峰の胸部装甲、そして、少し赤らんだオリヴィアさんの顔が映っていきそうだ。

ちくしよう、あんなに大きいおっぱいをガン見できるなんて羨ましいぞ！

少しだけ怒りというか妬みが湧き出てくる。

思い返してみると、僕が口説けた女性って、結果論なんだけど、だいたいスレンダーな子が多いんだよね。

貴族以外、要は平民の子を口説くことが多いから、貴族のように栄養状態が良くはなく、必然的に発育が抑え気味な子が多い気がする。

というか、今、気づいたんだけど、オリヴィアさんの顔、ヤバくな

いか？めっちゃ雌の顔をしている。発情顔と言えるかもしれない。

そんなオリヴィアさんが一歩ずつリオン君に近付いていき、髪を手で流しながら、もう片方の手をリオン君に差し出した。

・・・あれ？もしかして、このままだと人の気配のない校舎裏で危ない展開になるんじゃないか!?

人の目がない場所であるとはいえ、18禁の展開が始まるのはマズいだろうから、止めに入るとするか。

「やあ、二人とも久しぶりだね。それとリオン君、いや、バルトフアルト子爵、このたびはおめでとうございます」

パチパチと拍手をしながら、祝福の言葉をかけてリオン君とオリヴィアさんに僕は近付いていく。

お前、どこから出てきたんだ!?!と云ってるかのような驚いた表情で、2人は僕を見ている。校舎裏は隠られる場所が多いからね。

僕が学生の時代にも、密会をしているカップルはいたし、僕も結婚相手が見つからない国境、辺境出身の男子の相談を聞くときに、校舎裏を使ったことも多い。

「ありがとうございます、でも、なんか今さらなんで、リオンでいいですよ」

「そうか、ではお言葉に甘えましょう。伝えるのが遅くなったけど、妹を助けてくれて本当にありがとう。あとオリヴィアさんもね。妹を裏切った取り巻き連中と乱闘になったと聞いたよ」

「あのときは夢中だったので・・・」

「それと、2人ともすつかり仲直りしたみたいで、お兄さん、安心したよ」

「はい、ギルバートさんに言われたとおり、首根っこ掴んだら仲直りできました」

両手の指を合わせて輪っかを作り、首を絞める仕草をしながら、オリヴィアさんが満面の笑みで答えてくる。

え・・・？本当に物理的に掴んだの？

一方のリオン君はというと、少し恥ずかしそうに顔を赤らめてい

る。自分がアプローチされたことをばらされて照れているのかもしれないね。

「そ、それはよかったね。リオン君もまんざらではなさそうじゃないか。ちようどいい、リオン君も子爵になって、これまで以上に注目されるようになるから、変な女が寄ってくる前に、君達、くつついちゃいなよ」

「え、え、ちよつと待つてくださいいよ。リビアは平民だから身分が：」

「実はオリヴィアさんを、とある貴族の家の養子にする話を動かしていてね」

「はいいいいいい!?養子?」

まるで細かいことが気になるのが悪い癖なパートナー系特命刑事みたいな台詞をリオン君が吐いた。

まあ、そのリアクションは想定内だ。

「リオン君の結婚相手がまだ決まってるなさそうという話を、僕が昔に結婚の面倒を見た連中にしたら、上級クラスにいるクソみたいな女に苦しめられるリオン君を助けたいと手を挙げた連中がいてね。特待生だけど平民出身のオリヴィアさんと仲が良いという話も合わせて伝えたら、形ばかりでもぜひ、養子縁組をということになったんだ」

「それって何かのロンダリングみたいに聞こえるんですけど、簡単にできるもんですか?」

「能力のある貴族ではない騎士や平民を、実力主義の貴族が養子にするって話はよくあるものだよ。それに、僕が王宮で役人をやっていたって忘れてないかい?その頃の伝手と公爵家のパワーを使って、もう根回しを進めているんだよ」

驚くりオン君をオリヴィアさんから引き離して、僕はリオン君に耳打ちをする。

「もしかしてオリヴィアさんじゃ嫌なのかな?」

「い、嫌じゃないですけど・・・」

何やら煮え切らない反応だ。

性格が良くて、オツパイが大きくて、能力が高くて、オツパイが大

きくて、可愛くて、オツパイが大きくて、身分的に問題がないなら何が問題だというのか。

そんなことを考えていると、一つの約束・・・というか提案をしていたのを思い出した。

娼館か！最高級のお店に連れて行くって話をしていたからね。アングエにバレて思いっきり殴られて、有耶無耶になってしまったけど。

だったら、この反応も仕方ないよね、男の子だもんね。きっと、婚約したら、娼館に行くのはマズいというノーマルな倫理観なのだろう。

僕は、リオン君の肩を組んで耳打ちを続ける。

「娼館の話なら僕も覚えているから、安心するといい。何ならこの後のパーティーが終わったとしてもかまわないよ」

「そ、それを要求してたわけじゃないんですけど、男同士の付き合いつて大事ですよね」

リオン君が顔を赤くしながら、仕方ないですよムーブを繰り出してきた。

「偉い人からの紹介がないと入れない店だから、楽しみにしているといいよ」

「それは楽しみですね・・・あと、一つ聞きたいんですけど、アルt・・・」

「あ、そうだ。ギルバートさん」

リオン君が何かを途中まで言いかけたところで、後ろからオリヴィアさんの声が響く。

大きな声ではないが、なぜか心によく響いてくる。空気振動だけではない、声に魔力が乗っているのか、原理は定かではないものの、不思議な感覚を味わっている。

振り向いた先にいるオリヴィアさんは俯いてた顔を上げながら口を開く。

気のせいか、お目目が真っ黒となっていることに加えて、全身から魔力か何かが放出されているのか、圧を感じる。

「もしかして、リオンさんを変なお店に誘ったりなんかしてませんか?」

オリヴィアさんは、口元こそ笑っているが目は全く笑っていない。その上、こちらに伝わってくる圧はますます強くなっている。

重い!なんだ、この全身の体感温度を一気に下げてるプレッシャーは!?

首筋から顔面にかけて、鳥肌が立つと同時に、寒気が全身を覆い、変な汗が噴き出し始めている。

「え、えつとそれは・・・」

くそ!僕は恐怖を感じているのか!?!うまく声が出ない。

そういえばオリヴィアさんは、リオン君が娼館に行くのは嫌だと言っていたな。何とかこの場は上手く誤魔化さないと別の意味で修羅場になりかねない。

自分の保身と、リオン君の修羅場を回避するべく僕は思考を巡らせる。

だが、その直後に、この場では最も聞きたくなかった声が背後から聞こえてきた。

「兄上、それにリオンにリビアまで・・・こんなところで何をしています?」

「アンジエ!?!」

後方から聞こえてきたのは、我が妹、そしてこの世界の主人公オリヴィアさんのライバルというか悪役令嬢であるアンジエの声だ。

妹よ、お前はなんてタイミングでこの場に乱入してきたんだ。

アンジエは、僕とリオン君を見て、さらにお目目が真っ黒になったオリヴィアさんを見た後に、もう一度僕を見てから険しい表情を浮かべる。

目がものすごく吊り上がっており、ことと次第によっては、絶対に許さんという顔だ。

アンジエはオリヴィアさんの脇に立ち、その肩に手を乗せながら僕とリオン君を睨んでいる。

「そんな目に吊り上げたら綺麗な顔が台無しだよ?」

「まさか・・・とは思いますが、リオンを娼館に連れて行く、なんて話をまたしているんじゃないでしょうか」

僕のコメントはスルーで、いきなり話の核心を突いてきた!?

なんとか切り返そうと、脳をフル回転させて言い訳のセリフを考えるのだが、まさかの妹登場に、思考のギアがなかなか上がらない。

そんな状態でアンジェの言葉に先に反応した人間が出てくる。

「ちよつと、それってどういうことですか!」

近くの壁の裏から飛び出してきたのは、ふんわりとしたオレンジ色の髪をなびかせた、ギャル形態を今でも続けているストーカー女であり、この王国の閣僚であるバーナード大臣の娘であるクラリス嬢だ。

かつてその重すぎる愛をジルクにぶつけて、あいつのメンタルをゴリゴリと削っていた、この世界で初めてストーカーという概念を作ったと言っても過言ではない令嬢だ。

そんなクラリス嬢が、この場に乱入してくるやいなや、僕を睨んでくる。

しかし、招かれざる珍客の来訪はまだ終わらない。

「そうですねわ! せっかくの大事な童て・・・いえ、初物をドブに捨てようだなんて」

クラリス嬢とは別のところから飛び出してきたのは、金髪縦ロールに口元を扇で隠すという、ザ・お嬢様なイメージを体現した女性であった。

王国でも割と有名な彼女は、ローズブレイド家の令嬢にして、以前、僕がお見合いをしたドロテア嬢の妹のディアドリー嬢だ。

「おやおや、ローズブレイドの妹君ではありませんか。アトリーにローズブレイド・・・王国でも由緒正しい家の御令嬢方が、こんな学園の校舎裏まで来てどのような御用ですかな?」

というか、ディアドリー嬢、今、童貞って言おうとしたよね!? 聞き逃していないからね!

「お姉様を基準にされるのも違和感がありますからディアドリーでかまいませんわ。それよりも、高度に倒錯した嗜好をお持ちなレツドグ

レイブ家の御令息から、聞き逃せない言葉が発せられましたので、いてもたってもいられず、飛び出してきただけですわ」

人の性癖をおかしいと罵りつつ、自分の盗み聞きを正当化するなんて、なかなか手の込んだことをしてくるじゃないか。

「こちらも、面倒くさいのでギルバートでいいですよ。ところで、倒錯した嗜好というのは、相手をペットにしたがると噂のローズブレイド側の自己紹介では？」

なんせ、お見合い相手、しかも陛下の前で、ペットになれ！とかいう女がいる家だからね。

「まあ、なんて品のない噂でしょう。悪質な噂を流す輩にはしっかりと落とし前を付けたほうがよろしいですわね」

「いやあ、僕もタチの悪いデマを流されることがよくありますから、気持ちはわかりますよ。はっはっは」

「それはともかくとして、貴族以外の女性を、それはそれは幅広く手籠めになさると噂のギルバート様と違って、リオン君はまだ学園在籍中の初心な1年生ですよ。学生にふさわしくない遊興は、最高学年の人間として見逃せませんわね」

「手籠めの意味を誤解しているようですね。僕は双方の合意の下、1人の男と1人の女で対等にイチャイチャしているだけです。それに男というのは、けっこう繊細なんです、ちゃんと“練習”をしておかないと、血を残せなかったら一大事ですからね」

ディアドリー嬢がずいぶんと食い下がってくる。

やはりローズブレイドもリオン君を狙っているというのは本当なのだろうか。

聞くところによると修学旅行時に公国の襲撃を受けた際に、リオン君から公衆の面前でずいふんと罵倒されたらしいけど、まさかそれで惚れちゃうだなんてドMMムーブしているわけじゃないだろうな……

しかも、発言からリオン君の下半身というかDTに興味津々のようだし……この女、練習なんてさせずに、自分でリオン君を調き……いや、貪るつもりか!?

「少なくとも職業で体を売る相手を買うことを堂々と言うのは恥ずかしいのではなくて?」

「ローズブレイド家の妹君も、艶っぽいのを話す所作は身に付けているようですが、中身はまだ“おぼこ”なようだ。男というのをわかっていない」

「な、なんですって!」

「いいですか?男というのは、恥を共有して絆を深めていく生き物なのですよ」

「う・・・噂通り、型破りなことをおっしゃるようですね」

「ディアドリー、真に受けるな。兄上も、持論を男性全員にあてはめないでください」

おっと、僕とディアドリー嬢のレスバに、まさかの妹が参戦してきましたぞ。

それにしても兄を後ろから撃つようなことを言うなんて酷いじゃないか。

「というか、詭弁ですよ。ジルクに続いて、リオン君にまで変なことを教えるのやめてほしいんですけど」

・・・クラリス嬢まで参戦してきやがった。

だが、この発言を我が妹は聞き逃せなかったようで、真っ赤に燃えるような瞳が僕の方に向くと同時に、アンジェの右手が僕の顔面を鷲掴みにした。

「兄上、ジルクと一体何をしていますか?」

「待ってくれ、アンジェ。すぐに暴力に訴えるのは良くないよ」

「では、何か弁解があたりで?」

「そりゃあるさ。ちよつとクラリス嬢、人聞きの悪いこと言わないでくださいよ。ジルクを連れて行ったのは、衣服着用の上、飲食を伴う接待までしかしてくれない店ですよ」

最低限、アトリー家に対する不貞とならないように配慮はしたんだ。そこはしっかりと感謝してほしい。

王都滞在中は週一くらいでキャ○クラみたいな店に連れて行っただけなんだから!

だが、クラリス嬢はまだ納得していないようだ。

「だからって、まだ学生のリオン君を、対価を支払ってそういうことをする店に連れて行っていい、ということにはなりませんよね?」

「おやおや、対価の支払いを受けて、そういうことをする亜人どもを囲っていた誰かさんから、そのようなことを言われるなんて心外ですね」

「ぐっ!で、でも、その・・・いぎ、という直前に乱入してきたのはギルバートさんでしょう!」

「貴女想いの家臣達に嵌められたおかげですけどね?それに、僕が乱入するより前から亜人囲ってたんだから、やることやってない証拠にはなりませんよねえ?」

つまり、クラリス嬢が囲っていた亜人どもを、僕が繁華街のラブホ近辺で全員ゴボコにした事件より以前に、ベッドインしたことあるかもしれないだろ!?!ということだ。

まあ、クラリス嬢の行動は、取り巻き達が厳しく監視、というか諫めていたから、本当に未遂なんだろうとは思いますが、面白いから黙っておこう。

「ほほほ、品のない振る舞いが仇となりましたわね」

ディアドリー嬢が高笑いをクラリス嬢に浴びせている。

だが、それで黙ったままの元祖ストーカー様ことクラリス嬢ではなかった。

「それなら品があるローズブレイド家のドロテア先輩はどうしてまだお相手が見つからないのでしょうか。品より先に大事なものが欠けてるなんて噂もありますよ?」

「・・・お姉様にふさわしい男性がいなくてすわ」

騙し討ちみたいな形でねじ込んだお見合い、というか顔合わせで、人にペットになれなんていうのは、人として大事なものが欠けている以外の何物でもないと思うんですが?

ただ、これを言ってしまうと、僕がディアドリー嬢の姉であるドロテア嬢とお見合いをしたことが明るみになってしまうので、このことは黙っているとするか。

ドロテア嬢の話が続くと、いつ僕に飛び火するかわからないから、話題をそらすか。

「ジルクから話をいくらか聞きましたが、少なくとも自分の感情をいわずらに相手にぶつけるのはいかがなものかと思えますけどね」

「ギルバートさんだって私にあんなことしておいて、そんなふうにするのは酷いんじゃないですか?」

クラリス嬢が意地悪そうな笑顔を浮かべて、とんでもない爆弾をぶん投げてきやがった。

「兄上? あんなこととは、いったい何をしたのか説明していただけますか?」

妹が僕の顔面を掴む力が一段と強まった。

待って、熱い! 熱いよ!! 家族に向かって、ゼロ距離からファイヤーボールをぶつけないで!

「違うんだ、僕は悪くないんだよ、アンジェ」

「ですから、何が悪くないのですか」

「以前、クラリス嬢が亜人を連れ回しているところに出くわしたんだけど、その亜人達に殴られたんだよ! だから、そいつら全員の顔面か股間を焼き潰したんだけど、そのとき、お酒を飲みすぎてて気持ち悪かったところに、クラリス嬢からボデイブローを喰らったんだ。そしてたら吐くよね? 人間だもの! そのときに逆流した液体の飛沫がかかったらしくて・・・テヘ」

「・・・」

僕を見る妹の目が、まるで汚物を見るかのようなものになっている。酷い話だ、僕は100%被害者だというのに。

そして、そんな哀れな僕とクラリス嬢にディアドリー嬢が追い撃ちをかけてきた。

「あらいやだ、あなたたち、そんなに臭い仲だったんですの? いっそのこと、リオン君は私に任せて、2人でくつついたらいかが? 祝いの花くらい送りますわよ」

「僕にだって選ぶ権利はあるんですけど?」

「大丈夫です、ディアドリー先輩。汚れちゃった私に、そんな汚れ気に

ならないってリオン君は言ってくれましたから、私はそれでいいです」

それは初耳だけど、リオン君、君、なんてクサイ台詞で慰めちゃってんだよ！

針の穴に糸を通す精度でこのストーカー女のハートを射抜いてるぞ。

っていうか、なんかいい話みたいに言ってるけど、洗えば落ちる汚れを大げさに言うのやめてもらっていいですか？

「え、クラリス先輩、汚れちゃったってそういう意味だったんですか？」

「そうだぞ、リオン君。こんなタチの悪い女に騙されちゃいけないよ」

「あらあら、みんなして、余裕がないですわね。でも諸々の関係を含めて金で亜人を囲って快楽を貪る品のない女達と、プロの女性に対価を支払って性欲を満たす男達って、何が違うのか教えてくださらないかしら？」

あ・・・

ディアドリー嬢が呟いた台詞を聞いて、ここまで大騒ぎしていた僕を含めた全員が言葉を失う。

今の状況は、一言で言えば、巨大なブーメランがぶつ刺さったようなものだ。

亜人の専属使用人を囲ったクソ女どもをボロクソに言っていた僕だが、リオン君を娼館に連れて行こうとする僕の行動とどれほど差があるのか。

悔しいことに、瞬間的に切り返すことができなかった。

くそ！男をペットにしようとしたり、罵られて相手に惚れるような変態女のくせに、貞操観念だけはしっかりしているから、反論ができない。

なかなかやるじゃないか、ディアドリー嬢。面白いのは、髪がドリルみたいになってることだけではないらしい。

「リオン君、今回は残念ながら僕達の負けのようだ。埋め合わせは別

にするよ」

「キニシナイデイイデスヨ」

言葉に感情が乗っていない。本人的には相当残念なのだろう。

一方で、オリヴィアさんはニコニコしているから、まあ良しとするか。勝負に負けても、試合に勝てばいいんだ。

「ところでディアドリー、お前はさつき兄上に、高度に倒錯した嗜好と言っていたが、あれはどういうことだ？」

「それは・・・」

ディアドリー嬢がニヤリと笑みを浮かべ、それをすぐに扇で隠した。

こいつ、まさか僕がドロテア嬢に裸エプロンを要求したことをバラすつもりか!?

冗談じゃないぞ、妹に性癖を知られるなんて罰ゲームにしてもハードすぎる。

とつさにアンジェの手を振り払って、ディアドリー嬢を黙らせようとしたのだが、逆にアンジェに後頭部を掴まれて、そのまま地面に押しさえつけられてしまう。

そして、僕の頭上でディアドリー嬢がアンジェにヒソヒソと、僕が隠そうとしていた、ドロテア嬢とのお見合いの一部始終が伝えられた。

話を聞いたアンジェがよろめいて、押さえつけられていた僕は自由になったのだが、アンジェの顔が、頬から耳まで、真っ赤になっている。

そんなアンジェの傍にオリヴィアさんが直ちに寄り添って、背中をさすっていた。君達、本当に仲が良いね。

クラリス嬢とリオン君も、何がヒソヒソ話の内容が気になったようで、ディアドリー嬢から、話を聞いている。

クソ！しっかりと、お見合いの席で裸エプロンを要求したことを知られてしまったようだ。

2人はアンジェと違って顔色は変わらないが、明らかにドン引きした様子だ。

「人の性癖をばらすなんてやってくれますね。相手にペットになれ、なんて言う姉を差し置いてよくそんなことができたものだ」

「それは言わないのが暗黙の合意ではなくて!？」

「裸エプロンの件を妹にばらしておいて、どの口が暗黙の合意なんて言ってるんだよ!?!君の姉の恥部をばらまいてこそ、五分五分のお互い様というものだろう!」

結果的に見れば、互いに、知られたくなかった恥部をぶちまけてしまいう形になってしまった。

「たしかにそれは男性にだって選ぶ権利はあるわね。男性を何だと思ってるのかしら」

「そうだな。相手が兄上でなくても、そんなことを言われたら文句の1つや2つ出るのも当然だ。ですが、兄上・・・クラリスの件といい、ローズブレイド家のお見合いの件といい、少々戯れが過ぎるのでは?」

あれ?今度はみんなしてディアドリ嬢をデイスる流れになったと思つたら、妹の追及の矛先が僕に戻ってきたぞ!?

アンジェの表情はドン引きのあまり無そのものになっている。

身内、特に妹という僕に近い立場にいる、ちよつと怒りっぽいけどそれ以外は比較的モラリストなアンジェからすると、僕の行動は受け入れがたいのだろう。

「どれも不幸な事故なんだ。だが、結果的には、うちも、アトリー家もローズブレイド家も、恥を共有したことで、何となく、対立路線は探らずに協調方向で付き合う雰囲気が出てるから!!結果は出してるよ、きつと!!!」

「・・・おいたわしや兄上・・・そこまでの大立ち回りでさぞお疲れでしょう」

やめて!その○殺隊で日の呼吸使う剣士が、鬼堕ちした兄を憐れみながら言い放ったようなセリフ言わないで!

「レットグレイブ家は内部でゴタゴタし始めたから、私達は行きましようか、リオン君」

「そうですね、兄妹の語らいを邪魔しちやいけませんし、パーティー

が始まるまでゆっくりとお話しましょうか」

僕が自分の成果を妹に対してプレゼン・・・というか釈明してる間に、クラリス嬢、デアドリ嬢が、それぞれ両脇からリオン君の腕を掴み、この場を立ち去ろうとする。

それを見たアンジエは、とっさにリオン君の首根っこを掴んで、強引に2人の令嬢から引きはがして、2人とリオン君の間に立ちはだかった。

「おいクラリス、デアアドリー。リオンはうちと付き合いがあると式典が始まる前にも言ったはずだぞ。面倒はこっちで見えるから、お前達は戻っていいぞ」

そう言うと、アンジエ、クラリス嬢、デアアドリー嬢の3人が無言のまま睨み合いを始めてしまった。三すくみの状態とでも言うべきだろうか。

アンジエに自覚があるのかはわからないが、兄目線からだど、完全にリオン君にフラグ立っちゃってるじゃん!!

それでもつて、なんでオリヴィアさんはアンジエの後ろに立って、タッグを組んでるみたいな感じになってるの!?

まるで、目的を達成するまでは一時的に手を組む主人公とライバルキャラみたいじゃないか。

何なの、この修羅場! リオン君というDLCの攻略対象ルートつて、オリヴィアさんに立ちはだかる人物が多すぎじゃないか!

まずいな、下手に主人公様に対立すると、また断罪フラグが発生しかねないから、少なくとも早くアンジエのフラグだけは潰しておかないと・・・

とはいえ、妹の機嫌もよくない以上、下手にこの3人の中に介入すると、攻撃の矛先がまた僕に向く可能性がある。

僕の脇にいるリオン君も、ずいぶん居心地が悪そうにしている。

さて、どうするか・・・

僕は、前世が下っ端社畜の凡人だ。チート能力なんてない。あるのは、太すぎる実家の権力と、実家の力で手に入れたチートアイテムく

らいだ。

そう、僕は特別な力を持った人間なんかじゃない。

そんな僕が、主人公様や悪役令嬢の中に入ってことを収めようなんて自惚れも甚だしいというものだろう。

ならば・・・僕は意を決して、リオン君に声をかける。

「逃げよう！残念ながら、あの女性陣は、僕らの手には負えない！」

そうやって手を差し出すと、すぐにリオン君が僕の手を取ったので、僕らは一目散にこの場を逃げ出した。

「アンジェー！リオンさんがギルバートさんと逃げました!!」

「何だと！兄上!!どこに行くのですか!!」

後ろのほうから主人公様であるオリヴィアさんと妹の声が聞こえる。

悲しいかな、なんで僕は男の手を取って、妹から逃げているのだろう。

ゲームの流れで言えば、3年間ある中の、まだ1年目の3分の2が終わっただけだというのに、この半年近くは相当濃密な時間だったように感じる。

しかも、馬鹿王子をめぐってオリヴィアさんと対立せずに済んだ妹が、追加コンテンツの攻略対象であろうリオン君をめぐってオリヴィアさんとライバル関係になりそうだ。

一難去ってまた一難とはこのことだろう。

クソ！やっぱりの乙女ゲー世界は、悪役令嬢の身内に厳しい世界だ。

第41話 味方以外の異次元の発想は脅威そのもの

オリヴィアさんだけでなく、クラリス嬢、ディアドリー嬢、そしてうちの妹アンジェから逃れるために、リオン君と一緒に学園の校舎裏から逃げだした後に、

冬季長期休暇で公爵領に泊まりに来たオリヴィアさんが、なぜかアンジェとイチヤイチャ百合百合し始めて、僕の新たな癖が芽生えるなんていう出来事もあったが、

僕は現在、飛行船でバルトファルト領のある浮島に向かっている最中だ。

オフリー討伐で損傷したアロガンツ・ブロスの修理を、リオン君が実家の浮島周辺に建設した鋳工場で実施してもらおうというのが主な目的なんだが、

せっかくなら、リオン君を取り込みたいと考えていることを彼の父であるバルトファルト男爵に話しておきたい。

他にも、アンジェから聞いたところによると、リオン君が見つけた浮島には温泉があるという話なので、それも気になる。

ついでに、バルトファルト男爵の正妻であり、王国の男子達から搾取して私腹を肥やし国の安全保障を脅かす屑女の集団「淑女の森」構成員のゾラ・バルトファルトを駆除できれば、

リオン君やバルトファルト男爵からの好感度も稼げると思っていたのだが、基本的に、王都に滞在しており、領地に来ることは少ないらしい。

そんなことを考えながら、飛行船内のブリッジで、領地から持ち込んだ決裁書類のチェックをしたのだが、そこに船長がやってくる。

「若様、間もなくバルトファルト男爵の浮島に到着します」

「了解した、クルー達にも準備をさせてくれ」

「それと、先方に、同じくバルトファルト領に向かう飛行船があるようです……」

「どこの家かわかるかい？」

「アトリー家です」

うわ・・・あのストーカー女、まさかりオン君の実家に押しかけるとは思わなかった。

いや、乗っているとは限らないのだろうが、問題はアトリー家がこのタイミングでバルトフアルト領に向かっていることだ。

十中八九、バーナード大臣か、クラリス嬢の意向を受けてリオン君の取り込みを図る目的だろう。

さて、どうしたものか。

厄介なことになったのだけは確実なので、頭が痛い。思わず額を押さえてしまう。

「若様、大丈夫ですか？」

「も、問題ない。それよりも・・・その飛行船、主砲の射程範囲内か？」

「は？」

「一発だけなら誤射かもしれない」

前世で、近隣の敵国がミサイル実験をかましたときに、そんなことを社説で堂々と書いていた新聞があつたなあと思いつつ言ってみた。

「中立派閥を敵に回しちゃダメですよー！」

「・・・分かっている、冗談だよ」

公国との戦闘参加者への表彰が終わった少し後、王宮内の一室でとある派閥の会合が臨時で実施されていた。

その派閥は、少し前まではオフリー家が属していて、レッドグレイブ公爵家とは対立しているグループである。

「聞きましたか？殿下はまたあの成り上がり者に負けたそうです」

「王位に就けなくてよかった」

「それにしても、あの成り上がり者の態度は目に余りますな。しかも王妃のお気に入りとききたものだ」

「目に余るといえばレッドグレイブのバカ息子もでしょう。成り上が

り者をつるんでオフリーを潰されるとは思いませんでしたな」

「辺境でドサ回りをしていたと思つたら、例の婚約破棄騒動後に、派手に動きまわりだして、金蔓にすぎないとはいえ、オフリーの武力はそれなりにありましたからね」

「まあ、レッドグレイブの王宮内での影響力は低下する一方ですから、必死に目立とうとしているのでは？」

決闘やオフリー家の滅亡について、どこか他人事で暢気にも聞こえる貴族達をよそに、グループのトップであるフランプトン侯爵は、貴族達の危機意識の無さに肩を震わせていた。

「あんな成り上がり者に負けるとは公国も情けない。黒騎士も老いには勝てなかった、ということでしょうかな。こうなったら我々も手を切るべきでしょう」

一人の貴族が公国のことを笑いながら、周囲に同意を求めたところで、フランプトンはテーブルに拳を叩きつける。静まり返った貴族達は驚きのあまり言葉を失い、長である侯爵に向けて静かに視線を向けた。

「なんとしてもあの成り上がり者を潰せ。手段は選ばなくていい。それがレッドグレイブの弱体化にもつながる」

「し、しかし理由がありません。それに、王妃様が何と申すか!? もはやレッドグレイブの影響力を気にする必要なんて・・・」

「お前たちの頭は飾りか!? あの成り上がり者の裏に居るのはレッドグレイブだぞ」

「だからといって、もうここから巻き返せますか? 元から王妃様とレッドグレイブのバカ息子が不仲だったのに加えて、先の婚約破棄騒動で、王家と公爵家の関係も悪化しています。そんな状態ではレッドグレイブと言えども・・・」

「お前達が自分で言っていただろう、成り上がり者が王妃のお気に入りと。レッドグレイブが裏で糸を引いていて、あの成り上がり者に王妃を籠絡させて、王家との距離を縮めさせようとしていると思わないのか!」

「ラーシエルの奴らから腹黒姫と呼ばれているという王妃様がそんな

簡単には・・・」

「レッドグレイブのバカ息子は、陛下の夜遊び仲間だぞ？夫婦が不仲であることは筒抜けだろう。それに、将来を有望視されていた5人のガキが、たった一人の小娘にまとめて籠絡された事件を忘れたか!？」

フランプトンの言葉に、配下の貴族達は思い出す。

当時王太子であったユリウスに加えて、国内で古い歴史と実力を持つ家出身の4人が学園に入学して半年足らずの間で、たった一人の女子によって全員が籠絡されたことを。

そして、それから少しして、その5人を決闘で完膚なきまでに叩きのめした成り上がり者が、いつの間にか王妃のお気に入りになったと言われるようになった。

成り上がり者との決闘で倒され、最も屈辱的な煽りをされたのは、他ならぬ王妃の腹から産まれたユリウスであったにもかかわらず、その成り上がり者が王妃のお気に入りというのはおかしくないかと、貴族達もここで気付いた。

「あの成り上がり者が、何かやらかすたびに利益を得ていたのは他ならぬレッドグレイブだと気付いたか!？」

婚約破棄騒動から連なる決闘で、成り上がり者であるリオンが勝利したことで、レッドグレイブは家としての、最低限の名誉を守ることができた。

また、空賊ウイングシャークをリオンとレッドグレイブ家が討伐したことで、レッドグレイブは敵対するオフリーを滅ぼす大義名分を得た。

そして極めつけは、リオンが公国の艦隊を破ったことで、身柄を拘束された自家の令嬢を救出してもらっただけでなく、鹵獲した飛行船や最新型の鎧を提供されている。

「ま、まさか本当に全てレッドグレイブが裏で糸を引いていたと・・・」

「結果が全てを示している。ヴィンスのやつは派閥の再編に注力しているようだから、あのバカ息子のほうだろうな」

「いくら公爵家の跡取りとはいえ、そこまで物事を上手く運べますか？」

「奴は陛下との距離が近い上に、王宮内で役人をやっていたものだから、あちこちの部署にも顔が利く。バーナードの部下をやっていたからアトリーとも近い。そんな男が公爵家の力をチラつかせて動いているのだぞ！」

「そ、そんな大げさな・・・オフリー絡みを除けば、監査の名目で辺境に乗り込んで、辺境で暴れ回ったくらいでしょう」

「それが大問題だとわからんのか!!」

フランプトンが再び大声で吼え、両拳で手元のテーブルを殴りつけた。

周囲の貴族達は驚きのあまり声を失い、室内に一時の沈黙がもたらされる。

「この国が女を過剰に優遇するせいで、搾取され、王国への不満を募らせていた辺境の領主どもが、あのバカ息子のおかげで目障りな妻を排除できたのだぞ！おかげで奴は辺境の領主の中では大層な人気らしい。これがどういふことかわかるか!」

「レッドグレイブが将来的に巻き返しを図るときの先兵になる、とかでしょうか」

「ぬるいわ！よく考えてみろ！我々が王宮内で実権を握っても、レッドグレイブは自分が助けた領主どもに防衛を放棄させて、簡単に外国の軍勢を入り込ませることが出来るだろうが！」

「つまり、我々がやったことと同じようなことを仕掛けてくると・・・ですが、成り上がり者と違って公爵家の跡取り相手となると、理由もなく潰すのはますます難しいではありませんか?」

「ならば、今の我々が抑えているポストを総動員して、レッドグレイブが裏にいる案件を全て潰せ！できなければ、案件を塩漬けにするでも、難癖付けて差し戻すでもかまわん！少しでも足を引っ張れ！それと奴の弱みを徹底的に洗い出せ！陛下と夜遊びに興じているなら、スキャンダルの1つや2つあるだろう」

「我々も調べてはいますが、関係を持っているのが平民や騎士家関係

者ばかりで、醜聞としては物足りません」

「ならば、火のないところに煙を立てろ！それと、平民相手でも隠し子くらい出てこんのか！」

「国内を探した限りでは見つかっておりません。関係を持っていた女の中には外国に出た者もいるようですよ……」

「奴が逃がしたのかもしれない！草の根分けても追跡しろ！他には何かないか？」

怒りのあまり鼻息が荒くなったフランプトンが周囲を見渡す。

派閥内の貴族達は黙って下を向いているのだが、その中の一人が恐る恐る手を挙げた。

「スキヤンダルといえるかはわかりませんが……アトリーの令嬢が困っていた亜人を真夜中の繁華街で血祭りにした上で、令嬢とともに嘔吐していた、というトラブルがあったようです。アトリーの家臣も帯同していたので色恋に絡むものではなさそうですが……」

「はああああ!? 一体どんな状況なのだ!？」

「わ、わかりません！確かに起こった出来事のようなのですが、前後の状況は不明なままですよ……」

「レットドグレイブがアトリーと手を組んだらどうする！詳細をさっさと調べろ！」

先程から怒り続けていたフランプトンも、理解が全く及ばないシチュエーションを聞かされて思考が固まってしまう。

だが、ギルバートの異常行動の報告はさらに続く。

「それとローズブレイド家との見合いがあつたそうです、結果的には婚約とはならなかったようですが……」

「武闘派どうしで結びつかなかったのは朗報だな。だが、わざわざ私に耳に入れる情報はそれで終わりか？」

「いえ、その……続きはあるのですが……」

「ならばさっさと話せ！」

「見合いの相手に、あの……は、裸エプロンでの奉仕を要求したそうです」

「……は？」

フランプトンの思考が再びフリーズし、口が大きく開いたまま激しくまばたきをしていた。

最初は聞き間違いだと思った。いや、思うようにしなければ自分の中にある物事の道理に照らして理解ができなかった。

「レッドグレイブの跡取りは変態か？」

「なんと破廉恥な……」

「公爵家の驕りが過ぎるのではないか？」

「いや、それほど突き抜けているからこそ、あのような成り上がり者を許容できるのかもしれない」

派閥内の貴族達が口々に思ったことを話しているが、いずれも予想以上に強烈な情報を聞いて動揺を隠せずに行った。

たしかに、色々な意味で倒錯している貴族は少なくない。

しかし、見合いでそのような要求をしたのでは、全面戦争に及んでもおかしくない。頭のネジが数本、いやネジが全て吹っ飛んだとしか思えない行動であった。

実際にその場ではローズブレイド家側から、ペットになれという、これまたとんでもない要求が事前にあった上での裸エプロンなのであるが、フランプトン派閥の面々はそれを知らずにいるため、もはやギルバートの行動が正気によるものではないと思いはじめていた。

「よ、よし……あの馬鹿息子が、その……異常嗜好の持ち主だと噂を流せ」

「か、かしこまりました」

「ただ、我々の品位を損なわないようにしろよ」

オフリーという金はあれども素行の悪い貴族を飼いならし、反主流派を束ねてきた剛腕の持ち主である、フランプトンも、さすがに、口にするのも憚られる性癖の内容に、舌鋒が鈍化せざるを得なかった。

ギルバートの行動が、元々、自分達にとって障害になるものばかりだという認識はあったが、フランプトンにとって、それ以上に不気味なのは、行動の異質さであった。

時に、苛烈な振る舞いを厭わないところは、公爵であるヴィンスの

昔の姿を彷彿とさせるところがあるものの、女性関係の奔放さや辺境の領主への肩入れは、フランプトンには理解ができずにいた。

人間は、理解ができないものに対しては嫌悪と恐怖が湧き上がるものであるが、フランプトンにとっては、ギルバートの行動も、決闘騒動で公爵家側に付いた上に予測できない暴れ方をするリオンの行動も、ともにおぞましいものであった。

「繰り返しになるが、まずはあの成り上がり者から潰せ！ 奴さえどうにかなれば、公爵家と王家を繋ぐものもまたなくなる」

公爵家を直接攻撃するには、さすがにまだカードが不足している。

だが、武力はあれども政治的な力の乏しいリオンであれば、潰すのは難しくないだろう、そして、それがレッドグレイブに対するダメージに繋がると考えていた。

「レッドグレイブが勢力を立て直して反転攻勢に出る前に、王宮内から排除するとともに、これ以上武力面の勢力拡大を防がねば、我らに未来はないことをゆめゆめ忘れるな！」

フランプトン侯爵家も、王家に連なる家、言い換えればスぺアだが、スぺアの中にも差はある。

レッドグレイブは言うに及ばず、ラーシエルとの国境を任せられ、王妃の娘との婚約関係があるフレーザー侯爵のような、王家との強いつながりがあるわけでもない。

何もしなければ、ずっとこの先も反主流派であり続けただろう。

だが、将来にわたって盤石になると思われた公爵家の政治的影響力は、降つて湧いたような王太子の婚約破棄騒動をきっかけに、一気に衰えた。

この機を逃せば、次のチャンスはいつ、否、チャンスがあるかどうかすらわからない。

これまではオフリーを介して公国と繋がっていたが、そのオフリーが滅んだ今、これまでよりも直接的に公国と手を組んでもレッドグレイブを王宮から排除しなければ、いずれ巻き返されてしまう。

成り上がり者を潰し、立て直しの兆しが見えるレッドグレイブを再

び弱体化、そして排除して、自分の権力を固めるためには、ここが“賭け時”なのだ。フランプトンは腹を括った。

「ヘルトルーデ殿下をお連れしろ」

指示に従い何名かの貴族が席を立つ。

残った貴族の何割かは指示に不満がありそうだ。敵国の王女と、派閥のトップが直接接触してしまつては、最悪の場合にも言い逃れはできない。退路を確保しておきたいと考えていることはすぐに想像がついた。

だが、それを見ながら、フランプトンは再び思考を巡らせる。

(ヴィンスめ・・・あの成り上がり者が危険だと、いや貴様の息子ともども、なぜ自由に泳がせている。あえて見逃しているのか？だとしたら、ロストアイテムもろともに、なおのこと忌々しい)

「我らの敵は、黒騎士付きの公国艦隊を単機で退けるロストアイテムの鎧、それが2機もいるのだ。さらに後ろには、正規の公爵家の戦力も控えている。それらを一気に相手にしたくなければ、命がけで調略に励め！」

第43話 バルトファルト家の受難

バルトファルト家の浮島の港に到着したところに待っていたのは、バルトファルト家の面々ではなく、見慣れたアトリー家の文官連中であつた。

最近ジルクからリオン君にターゲットを変更した、あのストーカー女がいなくてよかつたとも思うが、ニヤニヤしながら手を振っている元同僚達の頭をとりあえず叩きたい。

「どうしてアトリー家がここにいいのか聞かせてもらいましようかね？」

「言われなくたってわかるくせに聞かないでくださいよ！我々は男爵のところにも、大臣のお使いで来ただけです」

「男爵……リオン君ではないということか？」

「そのとおりです。だからそんなに警戒しないで、安心していいですよ」

誰が安心するか。大方、リオン君の父親のほうから先に取り込んで、外堀を埋めようとしてるだけじゃねえか！

なんでわかるかつて？そりゃ、僕だって同じ魂胆なんだ、お前らの企みなんてマルつとお見通しというやつだ。

さて、そんな金持ちボンボンと、別の金持ちの子分ご一行様が、この浮島の領主屋敷に到着すると、出迎えてくれたのはリオン君、精強な面構えの中年男性、リオン君より少し年上に見える青年の3人だつた。

中年の男性は、アンジェから聞いていた外見的特徴からして、リオン君の父であるバルトファルト男爵に間違いないだろう。

となると、もう一人の青年はリオン君の兄で、バルトファルト家の次男だというニックス君か。心なしか、リオン君よりも鍛えこんでいてガタイが良いように見える。

「レッドグレイブ家、アトリー家のみなさま。ようこそいらつしやいました」

男爵が頭を下げ、両脇の2人もそれに続く。

なんやかんやで何回も話をしているリオン君と違って、男爵やニックス君は公爵家のボンボンである僕と会うのは初めてだ。

普段、接することのない大物貴族跡継ぎのボンボンに、失礼があつてはいけないと考えて、緊張と警戒でいっぱいなのだろう。

アンジェやアトリー家のストーカー女とは、顔を合わせたことがあるらしいが、今回は形の上では公爵家と伯爵家が一挙に押しかけてきて、心労がかかりっぱなしなのかもしれない。

「お出迎えいただき、ありがとうございます、バルトフアルト男爵。ギルバート・ラファ・レッドグレイブです。御子息である子爵には、妹、いえ、我が家が助けていただきました。直接お礼を伝えるのが遅くなり申し訳ない」

そう言つて、とびつきりの顔面偏差値から公爵家の若様スマイルを男爵に向けつつ、彼の手を取り、固い握手を交わした。

「と、とんでもない！うちの愚息が失礼をしていないか、不安で仕方ないところです」

男爵は顔を引きつらせながらも、笑顔を浮かべているが、どうにも居心地が悪そうだ。

バルトフアルト家は、これまで、中央のドタバタとは縁がなかったとのことだから、リオン君が学園に入学してからの一年足らずの間に、公爵家や伯爵家と接することになって、戸惑っているんだろうとは思うけどね。

「ギルバート様、お話ししたいことはあるかと思いますが、続きは中できませんか？」

男爵とどう距離を詰めようか考えていたところで、アトリー家の文官が場所の移動を促す。

「そうですね、では男爵。お手数ですが、ご案内いただけますか？」

こいつらもバルトフアルト家に用があるから、ここまで来ている。大臣がどんな手を用意しているのかは、あとでリオン君から聞き出すとして、どうやって牽制していったものか、考えどころだな。

「それとギルバート様、お話は我々と一緒でいいですか？大臣の許可は取っていますので」

は？5秒前まで考えていたことが一瞬で無駄になった。

どうして手の内を晒すような真似をするんだ？リオン君を取るために外堀を埋めるのに、競合相手の僕を同席させるなんて、理由が不明すぎる。

バーナード大臣は一体何を企んでいるのか。

「……という訳で、お嬢様が立ち直る手助けをしていただいた子爵に、バーナード大臣は非常に感謝しております。今回のお話をお持ちした次第です」

バルトフアルト領の領主屋敷の会議室に、僕とリオン君、その父であるバルトフアルト男爵に、アトリー家の文官チームが集まっているのだが、僕を前にしながら、文官連中が男爵家への融資の話を持ち掛けている。

要は、黄色い毛虫ことマリエに誑かされたジルクが婚約破棄してやさぐれたクラリス嬢を、ずいぶんとクサイ台詞で慰めて、そのハートを意図せず射止めてしまったことを指しているのだろう。

アトリー家がリオン君の外堀を埋めるのであれば、融資の話なんて、リオン君争奪戦の競合相手である僕の前では話ではないはずだろう。

ちなみに、契約の条件ははつきり言ってバルトフアルト家側に有利すぎると断言できるくらいに低利だ。

リオン君がうちに献上した公国の鎧や飛行船の価値を考えれば、その返礼として、うちの実家である公爵家ならもつといい条件で融資するくらいできるだろうが、

さすがにパパ上の許可を得ずには転がせない、僕の一存では動かせない額だ。

額の大きさから、アトリー家の本気度がうかがえるね、とても疎ましいけど。

「もったいないくらい非常にありがたい話なのですが、息子がロストアイテムと一緒に見つけた財宝等を元手に投資をしてくれておりま

して・・・その・・・」

一方、それを聞く男爵の表情は相変わらず浮かばない。色々と調べてみたが、バルトフアルト領はまだ発展途上な部分が大きい。

通常であれば、断る理由はないように思える。それでも断るというのであれば、考えられるのは・・・

「金もある、物もあるけど、それを転がす人手が足りていない、ということですね」

「・・・お恥ずかしい話、そのとおりです。これ以上、私一人で開発の手を広げるのは厳しくて・・・」

「そうですか・・・残念です」

「おや、大臣の話を持ってきたにしては、ずいぶんと諦めがいいですね」

僕の前でわざわざ融資の話をするなんて、煽るようなことをしてきた文官連中にほんのりと意地悪を言ってみる。

「ふふふ、ありがとうございますギルバート様。実は本題はここからでして、男爵には、アトリー家からお伝えしたいことがあるんですよ」

「本題、ですか？」

「ええ。ギルバート様にも同席していただいたのは、それが理由です」

融資の話だって大きい額であり、前座でするようなネタではないはずなのに、それが断られることを見越して、本命を叩き込んでくるだなんて、まるでアク〇ズに核ミサイルを撃ち込もうとするブラ〇ト艦長じゃないか。

しかも、それが僕も同席させた理由だというが、さっぱり見当がつかない。

戸惑う僕を差し置いて、文官連中が懐から調査報告書と書かれたファイルを取り出すと、男爵やリオン君、そして僕に配っていく。

「僕にまで見せて手の内を晒すなんて、何を企んで・・・」

融資の話だけでなく、本題だという話の資料まで僕に見せるなんてあまりに突飛な行動だと思っていたが、配られたファイルを開いて僕

は言葉を失った。

その中身は、バルトファルト男爵の正妻、ゾラ・フォウ・バルトファルトについての調査結果を記すという言葉から始まる。

そして、男爵とその正妻や長女・長男の遠巻きに撮影した写真とそれを拡大し、男爵と長女・長男の外形的な類似性が認めがたい旨がテキストと画像を合わせて言及されていた。

さらに、男爵の次男であるニックス君や三男であるリオン君の写真が引用され、長男との外形的な類似戦がないことの記述が続いている。

特にサンプルとして引用されているリオン君の写真の数が、ニックス君や男爵の長男、長女と比較して、非常に膨大になっているのは気のせいだろうか。

リオン君が開いているお茶会や普段の学生生活だけでなく、王都の中を歩く姿や決闘騒動、子爵昇進時の式典の際の写真がふんだんに掲載されている。

・・・これ、絶対に隠し撮りだろ。

すごいよ、そして怖いよ、アトリー家のストーキング術。

これぞアトリー家に代々伝わりしストーキング術だなんて言われなくても、すんなり納得できてしまいそうだ。

さて、本題に戻り、調査報告は、続いて男爵の正妻の行動に記述が移り、王都で散財したり、知人の貴族どうしで懇談する等について書かれた後に、

正妻が構成員をしている淑女の森の連中とそれなりの頻度で接触していることが記されていた。調査には相当の手間暇をかけていたようで、少なくとも数の人間が今回の調査により、構成員であることが判明している。

淑女の森というのは、言うまでもなく、この国の主に中・下級貴族社会の中で、男性貴族を食い物にして私腹を肥やすクス女どもの集団だ。

僕が国境沿いの監査をやっていた際にも、監査対象の家の正妻がこの団体の構成員だった事例が少なからずあり、その都度、駆除するよ

うにはしていたのだが、

優先順位とマンパワーの都合上、十分に手が足らずに、他の構成員や全貌を掴むことはできないでいた。

ここまで調べ上げるあたり、アトリー家がリオン君を取るために本気になっていることが伝わってくる。

ちなみに、決闘騒動後に男爵の領地に滞在していたアンジェや公爵家の腹黒メイドであるコーデアリアが、男爵の正妻と接触したらしい。

その際に、正妻が所持していた淑女の森の機関紙の中では、僕のことを、赤い通り魔と呼称していたそうだ。

そして、報告書の最終章では、男爵の正妻が困っているエルフの専属使用人や、愛人について話が及んでいる。

・・・どうやら、ここからアトリー家の本命のようだ。

先ほどの記述で男爵とリオン君らの外見を比較していたのと同じように、その愛人と男爵の長女・長男を写した写真が掲載してあり、目の色、鼻や口元といった顔面のパーツ、金髪や体格等の外形的な類似性が認められるという記述が続く。

要は、不貞の証拠と疑惑を推測させる資料だ。愛人と男爵の長女・長男には外形的な類似性が認められる一方、男爵との間に親子関係が存在しないということになる。

「このクソ女、托卵を企んだわけか」

「……………」

しまった。つい、布団が吹っ飛んだレベルのクソどうでもいいダジャレを言ってしまった。

違うんだ、ダジャレを言おうとして言ったわけじゃないんだよ。しかも、誰も反応してくれないのに、みんなして僕に冷たい視線を突き刺してくる。

頼む、誰かツツコミを入れてくれ！もう、うちの腹黒陰険メイドでもいいよ！このダダ滑りしたダジャレを処理してくれえええ！

だが、そんな願いが聞き届けられることはなく、しばし沈黙が場を支配し、僕のメンタルがゴリゴリと削られていたが、やがて男爵は左

手で顔を覆って、うつむきながら息を吐いた。

隣にいるリオン君やニックス君は、男爵の姿を見て引き攣った笑いを浮かべている。

まあ、仕方ないよね。もしかしたら、と思っていた部分があるかもしれないが、客観的な物証によって、心の中の疑いが、濃厚な疑惑へと変わったわけだ。

前世のようにDNA鑑定みたいな技術がない以上、この乙女ゲー世界では、細かな物証を重ねて、疑わしきは罰するという形で処理するほかない。

だが、そんな事情とは別に、まだ解せないことが1つある。

アトリー家がなぜ、これを公爵家、いや、僕にも見せたのかということだ。

その答えをいまだに出さないアトリー家の文官チームを黙ったまま睨みつけていると、連中も観念したように口を開く。

「そんなに睨まないでください。大臣の判断です。これでアトリー家はバルトフアルト家に恩を売れる。ここからさらに、正妻の処理を含めて、自ら動くこともできるが、ギルバート様はこの件を知った以上はきつと動く、いや動かざるを得ない」

「大臣も、僕のことをずいぶんとわかったように言ってくれるね」

「アトリー家を牽制するためにも、決闘騒動以降のバルトフアルト家や子爵とギルバート様の関係を考えても、今回だけ手を出さないわけにはいきませんか？」

「つまり、アトリーは情報提供の恩を売っただけでなく、レッドグレイブを使って問題を解決させて、さらに恩を売る、というつもりか？」

「問題が解決すれば、我々とバルトフアルト家には強い友好関係が生まれるので、それで十分というご判断です。それに、ギルバート様が、事実上庇護している子爵のご実家に巢食っている悪妻を野放しにしておくほど悠長だとは思っていないそうですよ。」

このクズ女を駆除すれば男爵もハッピー、アトリー家もバルトフアルト家にお近づきになれる上に自ら手を汚さずに済んでハッピー、

僕も昔から目障りに思っていた淑女の森の構成員を消せてハッ

ピー、公爵家もクソ女を駆除してアンジェ救出その他諸々の恩を返せてハッピー、以上のことから皆が幸せになるハッピーセットだとしても言うつもりらしい。

「それに、アトリー家が全部やってしまうと、利益を総取りしたことになるって、これまで子爵の後ろ盾をしてきた公爵家のメンツを潰しかねません。そちらの顔を立てて、お貴族様社会特有の利益分配をやるうってことです」

「あくまで、僕や公爵家のためだと言い張りますか」

「我々アトリー家は中立派ですからね。表立って、他の派閥から睨まれるよりも、ズブズブの利益共有をしておきたいんですよ。それになんだかんだで、ギルバート様個人も、この手の女はお嫌いでしょう？」

やっぱり僕のことをよく知ってるな、大臣は。別の言い方をすれば、ていよく使われているとも評しうるが。

個人の感情として気に喰わないとはいえ、この提案は断りようがない。

公爵家の立場うんぬんもあるが、リオン君は、この乙女ゲー世界の主人公であり、将来の聖女であるオリヴィアさんにとっての、DLCでの攻略対象であり、彼女のつがいになる（予定の）人物だ。

将来の聖女の後ろ盾となって、地位を安泰なものにするという僕の狙いや、公爵家の先々のことを考えれば、その攻略対象であるリオン君は公爵家で取っておかなければならない。

個人的な感情としても、妹を窮地から二度も助けてもらったのだから、恩返しをしたいという気持ちはあるし、課金アイテムと思われるアロガンツやパルトナーという強大な戦力をみずみす他所の家に渡したくはない。

いや、むしろ彼が有してるロストアイテムの戦力を考えれば、アトリー家に渡すなんてもつてのほかだ。

アトリー家がリオン君を取ってしまったら、あの公国の黒騎士を単機で倒せる鎧や、公国艦隊を単艦で降した飛行船。パルトナーなどもセットになって奪われてしまうに等しい。

中立派であるがゆえに、公爵家以外にも場面によっては手を結ぶ場面もこの先、出てくることは想像に難くない。

そんなときに、リオン君の武力を背景にイニシアティブを取ろうとされてはたまったものじゃない。

くそ！仕方ない、アトリー家の思惑に乗っかるのは感情的に面白くないが、放っておくことによってアトリー家がリオン君に大手を振ってこれまで以上に接近するというマイナスのほうがはるかに大きいことは間違いない。

「大臣の狙いに思うところはありませんが、いいでしょう。たしか、あの悪妻は、リオン君をバツ6くらいのパバアの後夫にした上で、戦場送りにして殺害して遺族年金諸々を狙っていた、とリオン君から聞いたことがあります。そうだったよね？」

「は、はい。それをどうにかするために冒険者になって、ロストアイテムを発見したので・・・」

いきなり自分に話が振られてリオン君が慌てて回答する。

「ちなみに、子爵が売り飛ばされそうになった先の女の周りについては、現在調査継続中なので詳細はしばしお待ちください」

淑女の森の連中のオーソドックスな手口は、軍人にしてから、治安が悪いエリアや他国勢力との衝突の多い地域に配属して、死因も詳しく調べずに死亡判定されやすい状況を作るといふものだ。

仕留めるには本人以外に、周辺の軍人もまとめて押さえる必要がある。

「そのパバアを調べるついでに、近しい関係にある軍の連中、ついでに恩給、年金関係の部署の連中もピックアップしておいてくれ」

「了解です、では正妻のほうの逮捕状と身柄の確保はギルバート様にお願ひします」

「わかった、おそらく正妻かそのバツ6パバアが、軍に袖の下を渡してははずだ。その辺りが汚職だとして処理しよう。軍の連中のほうには、司法取引を仕掛けて、さっさとゲロさせればいい」

ゲロった後は閑職送りだけだね。パバアどもとつながりのあった軍の連中の上役も、公爵家と伯爵家に忖度して冷や飯ぐらいをさせる

ことだろう。

いやはや、仕事のことになると、話が進むのが早い。

さすがかつては監査なんて地味な仕事で、国境沿いの悪妻どもを、僕と一緒に震え上がらせたアトリー家の文官チームだ。

腹の中では別のことを考えていたとしても、同じ方向を向いているときは非常に頼りになる。むしろ、いつそのこと、公爵家に転職してくれないかな。

若干現実逃避的なことを考えていたが、方針が決まったところで僕は男爵のほうに視線を向ける。

「さて、お聞きの通り、我々はこれから具体的に動きますので、覚悟を決めておいてくださいね」

僕から男爵に投げたのは、許可の要求ではなく、通知と心の準備の推奨だ。

男爵は眉間に皺を寄せながらも苦笑いしており、色々と悩むところはあるのだろう。

一方、リオン君やニックス君のほうを見ると、目元をピクピクさせながら愛想笑いをしている。

酷いな、そんなにドン引きしなくたっていいじゃないか。

今日は1時間足らずの間で、バルトファルト家は、これから先、リオン君以外のことでも、慌ただしくなることが決まったようなものだ。

僕やアトリー家からの話が一段落したところで、家族内で話をしたいとの申し出が男爵からあったので、僕やアトリー家の文官チームも今後のことを話すついでに、

リオン君の発見した浮島の温泉に行ってみようということになり、そこに向かうために、一度、港に向かって歩いている。

ちなみに、僕は、本来ここに来るのはお忍びであり、煌びやかなお貴族様ファッションではなく、地味なジャケットにシャツとパンツという軽装だ。

「はあ、野郎連中で温泉に行くなんて、悲しくなりますね。地味でも可愛い子と行きたかった」

「よろしかったら紹介しましょうか?」

「アトリー家に頼むと、地雷女が出てきそうなので自分で探します」
「信用がなくて悲しくなりますね」

ちつとも悲しいような素振りはしていない、と喉まで出かかったが、自制した自分を褒めてあげたい。

「クラリス嬢と繁華街で一騒動起こしてしまったときのことを忘れてませんからね」

「そんなこともありましたねえ」

「僕を思いつきり巻き込んでおいて、他人事のように言ってくれますね」

「ところで、公国の件は聞きましたか? ヘルトルーデ殿下を留学生として受け入れるようですよ」

この野郎、急に話題を変えてきたな。しかも、結構シリアスなトピックじゃないか。

リオン君が公国との戦闘の際に、アンジェ救出のついでに捕虜にした公国の王女の処遇は気になっていたが、処刑するわけでも、多額の身代金を要求するでもなく、

留学させるだなんて、日和ってるか、よからぬ意図があると思えない。

「フランプトン派閥がゴリ押ししたらしいな。公爵家の派閥の再編が落ち着くまでは好き勝手させないといけなのは面白くないね」

「ずいぶんと不満そうですね」

「そりゃあ僕は、妹が拉致されかけましたからね。おめおめと留学させるなんて生ぬるい処理、気に喰わないに決まっています」

「フランプトン侯爵の派閥はレッドグレイブ家の影響力低下の際を突いて、王宮内でも主要ポストの掌握を進めています。レッドグレイブ家には、王宮内でも、そろそろ反撃に出てほしいんですけど・・・」

「それは大臣から父上に直接言ってもらってください。しかも、その割に、事実上、うちの傘下にも等しいリオン君に手を出そうとしてる

のはいただけないですねえ」

「そこは大臣とお嬢様の個人的な意向が強いので、我々下つ端役人は何とも言えませんよ。お嬢様の恋路を邪魔するボンボンの皮を被つたゴリゴリの武闘派貴族様のおかげで我々も残業続きな毎日です」

「そうか、そんな奴がいるんですね、ご愁傷様です」

アトリーの文官チームが僕のことを半目で睨んでくる。

おやおや、何が気に喰わないんだか。そんな被つたなんて奴は、ズル剥けの僕には全く心当たりがないね。

まったく、この世界は本当に乙女ゲー世界なんだろうか。

偏見かもしれないが、乙女ゲーって結局は恋愛以外の場面では、権力持ったイケメンが自分で解決するなり、周りが忖度して

うまく、なあなあで片付くご都合主義が多いものだと思っていたが、準王族みたいな公爵家だつてこんなに苦労してるし、

王様は市井での愛のバラ撒きに夢中、王子様は前世が売れっ子キヤバ嬢な転生者に夢中だ。

ちくしょう、どうなってるんだ、この世界。

一方、バルトファルト家の屋敷の一室では、正妻であるゾラによる托卵疑惑の浮上を踏まえて、男爵であるバルカスとその息子であるニックス、そしてリオンの3人による話し合いが行われていた。

やや呆けたような顔つきで天井を見ているバルカスを見て、ある意味では、今回の調査が始まるきっかけとなったリオンが口火を切る。

「おい、この先、どうするんだよ親父」

「そうだったとしても不思議じゃないとは思うけど、いざ聞かされると、その・・・色々な気持ちが巡ってきて、上手く話せなくなるもんだな」

「ギルバートさん達が話をしているのに、親父の反応が薄かったのも、それが理由か」

「二人とも何を悠長にしてるんだよ」

リオンとバルカスの話に、バルカスの次男ではなく長男である可能性が浮上してきたニックスが口を挟んでくる。

「レッドグレイブ家とアトリー家がゾラ達を消したら、俺がこの家を継ぐってことになるじゃないか!?俺は、婚約者だってまだいないんだぞ!」

「大丈夫だ、ルトアートだってそんな相手がいるって話は聞かないぞ」
「なら、ニックスもギルバートさんに頼んで相手を見つけてもらったらいいじゃん」

リオンがニックスをおちよくるように言葉を返すが、一方のニックスは数秒してリオンの言葉の違和感に気付く。

「俺』も』ってどういうことだよ!お前、まさか婚約者ができたのか!」

「本当かりオン!そんな話、俺も聞いてないぞ」

「いや、その・・・リビアをギルバートさんの知り合いの家の養女にするから、結婚したらどうだってギルバートさんが・・・いや、OKしたわけじゃないぞ!」

「すごいな、公爵家、いや、ギルバート様ってウワサどおり、本当にやりたい放題するんだな!?!ちくしょう、いいよなお前は。可愛くて性格も良い相手がいて、唯一の問題だった身分の話は超偉い人が片付けてくれるのかよ」

「人のことをご都合主義満載な登場人物みたいに言うなよ!」

「なるほど、だから式典のときにお嬢様方が押しかけてきても、反応が薄かったのか」

「え?..?どういふこと?」

話の内容をあまり理解していないリオンを見て、バルカスがニックスのところに行き、小声で話し始める。

「親父、リオンはあのお嬢様達が、式典のときに単なる付き合いで部屋まで来たと思っっているんだろうか?」

「その可能性は高いな。下手したら、今日、アトリー家が来ていたのも、本当に単なる恩返しだと思っっているかもしれない」

「弟ながら、とんでもない鈍感野郎だな。嫉妬の感情が爆発しそうだし、子爵様じゃなかったら殴つてやりたい」

リオンへの複雑な感情が噴き出すニックスだが、ここで学園生活の中であった出来事を思い出す。

「そういえば、学園祭が終わった頃から、同じ普通クラスにいる、アトリー家の取り巻きの男子からリオンの話を聞かれることが多くなつたんだよ。なんか、男女関係のトラブルをあいつが解決したらしい」

「え？それがきつかけでお嬢様のお気に入リになつたつてことか」

「リオンは全く気付いていないようだがな。式典のときと言えば、ローズブレイド家のデイアドリーさんもいたし、学園に入つてから一年足らずで、あいつの周りにすごい家の女の子が集まつてないか？」

「ということとは、今回みたいに、リオンを取り込むために、公爵家とか伯爵家がこれからもこの貧乏男爵家に接触してくるのか・・・嫌すぎるんだけど・・・」

バルカスとしては、父として息子であるリオンが他の家から高く評価されて嬉しくないわけではないのだが、

それに付随して、今回のような雲の上にいるような大物貴族がわらわらと近付いてくることに大きな不安感を覚えている。

アトリー家からの融資は断つたが、今後はリオンを中心に、様々な角度から、様々な方法で接触してくる大物が増えてくるのは頭が痛い。

「あと、一つ、嫌なことに気付いたんだけど言つていいか？」

「万が一、ゾラ達がどうにかなる前に親父に何かあつたら、跡継ぎをどうするかつて話になるだろ」

「あ・・・」

「そしたら、当然、ゾラ達はこの家は自分達のモノだつて騒ぐだろうけど、レッドグレイブもアトリーも、黙つてるわけないじゃん？」

「やめろ、それ以上は考えたくない」

ニックスから聞かされる不吉きわまりない未来予想図を聞くバル

カスは、痛い頭がさらに痛くなってくるような気がしてきている。

「跡目争いが起きるぞ、絶対」

「辺境の男爵家なんだから、そんな大層なものを継ぐわけじゃないのになあ……」

「ゾラみたいな女を躊躇なく消すと言って憚らない公爵家に加えて、明らかにリオンを狙っている伯爵家が大手を振って参戦してくるぞ。そんなことになって、もしゾラが、公爵家や伯爵家の敵対勢力に泣きついてみるよ」

「うちの領地を舞台にした代理戦争が勃発して、バルトフアルト領が焼け野原になるな」

どうしたものかと頭を悩ませるバルカスとニックスだったが、ちょうどそのとき、部屋がノックされて、バルトフアルト家に仕えて長い使用人が息を切らせながら部屋に入ってくる。

「旦那様……その……奥様がこちらに向かっているとのことですが、しかも、どういうわけか、神殿の船も一緒です」

「何い!? こつちに来るなんて話、聞いてないぞ!」

「それより、さっきの人達は今どこに?」

「ずいぶん前にリオン様の浮島の温泉に行かれたようですが……」
バルカスとニックスは二人して頭を抱えた。

なんて最悪なタイミングなのだろう。大型爆弾のような人がいるときに、大爆発を起こすような劇物が転がり込んできたようなものだ。

今日がバルトフアルト領の最後の日になるかもしれない。

そんな言葉が二人の脳裏によぎった。

第44話 R & Bと書いて、レットドグレイブ and 暴力と読む

リオン君が発見したという温泉に行く前に領内をこっそり散策していると、なんだか領内が騒がしい。

港のほうにはバルトファルト家のもではなさそうな飛行船が数隻ほど集まっている。船体に描かれているのは・・・神殿だど？

神殿は、この国の事実上の国教であり、建国の英雄達と行動を共にした聖女を信仰の象徴としている宗教団体だ。もちろん建国の聖女が生存しているわけでもなく、

一定の条件を満たした者を適宜、新たな聖女と認定するらしいが、それがこの世界の主人公であるオリヴィアさんのはずだ。

認定の条件は、現在調査中なのだが、問題は現在の神殿というのは、なかなか俗物な団体だということだ。

貴族からは高額な寄付金をもらい、自前で武装して鎧や飛行船などの武力を確保している。

前世の歴史でも古くから、世界中の宗教勢力が独自の武力を持っていたし、ドンパチもしていたが、この乙女ゲー世界でもそんな宗教像は健在らしい。

主人公である女の子が攻略対象の男子と結ばれてハイ、ハッピーエンド！という世界なのに、妙なりアリティを持って宗教が存在しているのはどうしてなのか。

その理由はわからないが、要はそれなりの規模で武力まで持ち合わせている組織であり、一大勢力だということだ。

そんな神殿の部隊が辺境のバルトファルト領に、飛行船数隻まで持ち出して乗り込んできているというのは穏やかな話ではないだろう。

案の定、僕とアトリー家の文官連中がバルトファルト家の屋敷まで急いで戻ると、付近には神殿お抱えの騎士団十数人が展開しており、屋敷のそばではリオン君と貴族らしき中年の女、丸々と太った女神官

に、専属使用人であろうエルフ数名が対峙している。

特にその中でもギヤアギヤア喚いている中年の女の顔は見覚えがある、というか、ついさつき、後ろにいるアトリー家の文官連中が持ってきた調査報告の対象、つまり、バルトファルト男爵の正妻だ。

わざわざ、ここまで出向いてきてくれたのはラツキーだ。探す手間が省けたね。

さて、どういう理屈で身柄を押しさえようか考えたところで、下品な女がギヤアギヤア騒ぐシチュエーションが最近もあつたことを思い出す。

ケモナー学園の学園祭に王妃様がお忍びで来ていたときのことだ。

あの時は、オフリー家のクソ女が、相手を王妃様だと知らずに悪態をついていた。

よし、そのときのシチュエーションを参考にするとしよう。

懐から変装用の黒いサングラスを取り出して顔を隠し、シャツのボタンの上2つを外す。

「ギルバート様、また敵ついチンピラみたいな格好の変装なんかして、今度は何を企んでるんですか？」

僕の行動を訝しんだアトリー家の文官連中の1人から、ある意味、当然の質問が飛んできた。

「なあに、正体を隠したほうが相手の尻尾を掴みやすいと思いませんか」

「うわあ・・・性格、悪う・・・」

「悪いついでに、誰か1人、うちの飛行船呼んできてもらえますか？」

「え？まさか神殿と戦争するつもりですか!？」

「いやいや、向こうが神殿という権威を使うようなら、こっちも公爵家の権威を使おうと思っただけです」

「・・・やっぱり性格悪い・・・」

失礼な。相手に尾行を悟らせないストーキングで相手を追い詰めるアトリー家に比べれば、正面から堂々と立ち向かうだけさっぱりしているじゃないか。

さて、ちよつとした寸劇を始めるとしよう。

「これはこれはバルトファルト子爵。ずいぶんと騒がしいようですねえ」

ポケットに両手をつっ込み、肩で空気を切りながら僕はリオン君達の方に近付いていく。

「あ、ギルb・・・」

「いやいやいやいや、ずいぶんと穏やじゃあなさそうですね、トラブルでもありましたか？」

大げさに手を振り、勢いでリオン君に名前を言われるのを遮りながら、神殿の騎士まで押しかけてきている状況の詳細を尋ねてみた。

リオン君は、僕のわざとらしい振る舞いに何かを察したようで、口元に笑みを浮かべた。

「実は、空賊を退治したときの財宝の中に、神殿の宝があったから寄越せ、ついでに俺の財産を寄付しろって言われて困ってたんですよ」

「ええええ！つまり、子爵の財産に目を付けたここにいる連中からタカられている、ということですか」

「し、失礼な！」

何やら金切り声を上げながら、僕とリオン君の会話にバルトファルト男爵の正妻が割り込んでくる。

ほんの少し煽っただけなのに、百点満点のリアクションだね。面白そうだから、もう少し遊んでみるとしよう。

「神殿関係者でもなさそうなのにしゃしゃり出てきた、こちらの品のないご婦人はお知り合いですか？」

「親父の正妻ですよ」

「ああ、ムダ金使うしか脳のないと評判の！」

「な、なんですってええええ!!!」

バルトファルト男爵の正妻の怒りのボルテージがさらに上がったところで、傍に控えていたエルフ3人が僕の前に出てきて、そのうち1人が僕の顔面に拳を繰り出してきた。

男爵の正妻の護衛兼愛人なのだろう。主への無礼を咎めるつもりか。

だが、実戦慣れした殴り方ではないね。これでも、この国の悪妻やクズ女どもお抱えの亜人やゴロツキどもとの乱闘の場数を踏んだ僕にとつては、腰も入っていないパンチくらいなら止めるのは簡単だ。

エルフの拳を掌で受け止めると、掴んだ拳ごとエルフを懐に引きずり込んで、勢いそのままに、エルフの顔面に膝蹴りを叩き込んだ。

僕の膝に、軟骨が折れるような感触が伝わってくると同時に、足元にボトボトと血が流れ落ちる。

「うっわ、エグう・・・」

「いつもあんな感じですよ」

「むしろ今日はまだファイヤーボールがないだけ控えめですね」

後ろから、リオン君とアトリー家の文官連中の会話が聞こえてくる。

おい、ド突き合いが始まったのに暢気におしゃべりしてるんじゃない！しかも、僕が暴れるパターンを分析してるし！というか、君達、微妙に仲良くないか？

気を取り直して、膝蹴りをもう一発、エルフの整った顔面に見舞うと、折れた歯が何本か地面に落ちたところで、突然始まった苛烈な暴力を目の当たりにして、呆気にとられていた残りのエルフ2人が僕に向かってきた。

先程、ファイヤーボールがないという声があったので、僕の心の中で、少しサービスしてやろうかという悪戯心が芽生えてくる。

顔面を潰したエルフを、残り2人に向かってぶん投げて、エルフ3人が勢いよくぶつかつたところ目がけて、ファイヤーボールを投げつけた。

エルフに命中して火球が爆発したところで追い打ちをかけるべく、もくもくと上がる煙の向こうで倒れている3人の顔面を一人ずつ踵で踏み潰すと、脳が揺れたのだろうか、体をピクピクと動かしながら、寝そべつたままとつた。

本当は全員の顔面に5、6発ずつ拳骨もくれてやろうと思つていたのだが、予想していたよりもエルフは軟弱だったね。どうやら、亜人

の中でもエルフは獣人よりも耐久性の面で劣るらしい。

男爵の正妻は、瞬く間に自分の使用人達が潰されて、怯えながらも、怒りの籠った視線を僕に向けてきている。

おいおい、リオン君がロストアイテムを見つけるまで散々好き放題やってたんだ。買った恨みは2つ、3つじゃ済まないのもわからないのかな？

エルフの顔面に足を乗せたまま、グリグリと地面に押し付けていると、ここまで動かなかった神殿所属の騎士数名がこちらにやってきて抜剣すると、剣先を僕のほうに向けてきた。

「そこまでだ！やりすぎじゃないのか」

どこまで考えた上での発言かはわからないが、1人の騎士としては、既に勝負のついた戦いをこれ以上続ける必要はないとも思っただろうか。

さて、神殿連中にどう対応したものか。

先々、神殿には、オリヴィアさんを聖女に祭り上げさせることを考えると、考えなしに揉めるは悪手だろう。

一方で、実家が他の貴族と同じように神殿に寄付をしている、という以上のコネもない。

「先に仕掛けてきたのはこいつら亜人だったのをご覧でない？」

「貴族の使用人にここまでするのは正気とは思えないぞ」

「貴族というなら、現役の子爵に敬意を払わない無礼を働いたのは、この神官殿だったようですけどねえ。子爵の財産を、いきなり押しかけて寄せせというのは、神殿とはいえ傲慢では？」

神殿は、国が認める団体でありつつも、宗教団体という立場から、僕ら俗世の階級に無条件で従う義務はない。

とはいえ、それでも国の定めた階級をむやみに蔑ろにしていけないわけではない。

権威を持つてこそいるものの、本気で貴族に喧嘩を売るなら、王宮の上層部に対する根回しは必須だ。

ただ、そんな動きがあるなら、どこかから情報が洩れて、うちの耳にも入るはずだが、そんな話は聞いたことがない。

そうだとすれば、神殿内でほどほどの権力を持つてる奴が、手柄欲しさに、バルトフアルト男爵の正妻と手を組んだ、というところだろう。

「神殿の宝を渡すのは常識です！」

まるまる太った女神官が鼻息を荒くしながら吠えた。

「そんな法律も規則も聞いたことがないんですけどねえ。そもそも、冒険者が空賊を討伐して手に入れた財宝を、尽くすべき礼を尽くさずに……いや、そんなに肥え太って信仰を失った似非聖職者には、礼儀を自覚するのも難しかったかもしれないね」

「無礼者！」

身体を震わせながら神官が僕を睨みつけてくる。どうやら、自分のことを省みるつもりはないらしい。

手柄欲しさの暴走なのだろうが、一方で神殿の艦隊を出撃させるくらいには影響力を持っているというのも事実だ。単なる下っ端というわけではないのだろう。

あれ？これって、異世界モノでよくある、中間管理職的な地位を持つ輩が、バックにいる宗教権力をチラつかせながら、横暴な振る舞いをかましてくるシーンなのではないだろうか。

主人公達が権威的な圧力に屈しかける、とかそんなやつだ。

だいたい、主人公の味方となる権力者が裏で動いて、組織的な圧力は取り除いてくれて、暴走した権力者は主人公達が倒す、というのが主なパターンだろう。

ただ、こんなイベントがどうして僕なんていう、ネームドのモブのところで開催したのか……いや、ここには、主人公であるオリヴィアさんの獲物もとい攻略対象のリオン君がいる。

ということは、主人公がいないのに、攻略対象に発生してしまったイベントなのかもしれないね。

くそ！主人公様が不在な場面でリオン君に何かあつてはマズいかもしれない。

こんなとき、主人公や攻略対象ならどう動くだろうか。

青い馬鹿王子、クス緑、ナルシスト紫、水色メガネ、そして、赤い

勇者王：・オリジナルの攻略対象5人を思い浮かべたとき、ふと、勇者王ことグレッグと同じ声で、

全く別のキャラクターの台詞が、某はぐれ純情系小隊長の台詞が脳内で再生された。

守ったら負ける、攻めろ！

こつちだって公爵家だ、俗世の基準なら大権力者といってもいい。ならば、この場面でも攻め切ってやるさ。

いつそのこと、逆に考えて、神殿とのコネがないなら作ればいい。

理想の終着点としては、今回の神殿側の無作法を足掛かりに。付け入る隙を作る、というところだろう。

できれば、血祭りにしたエルフドものように、明確に公爵家に対する落ち度がほしいところだ。よし、少しこいつらも煽ってみるか。

「子爵に対するそちらの態度も、まさに無礼そのものだと思いますが？いきなり押しかけてきて財宝を献上しろだなんて、まるで空賊そのものですねあ!!」

「く、空賊ですってええええ!!お前達、こいつらを黙らせなさい!!」

気に喰わない相手を力でねじ伏せようとするなんて、やはり聖職者とは思えないね。

だが、女神官の指示に従って、10人以上の神殿騎士が僕らを取り囲んで、こちらに迫ってくる。

先頭に立つのは、さきほど僕に剣を向けてきた神殿騎士だ。

「醜い豚に顎でこき使われる気分はいかがかな?」

「口の減らないチンピラだな」

「公国を撃退した英雄である子爵にずいぶんな態度ですねえ、色々な意味で感心しますよ」

「ふん! たまたま強力なロストアイテムを運良く見つけただけの成り上がりだろうが」

「おやおや、上司だけでなく、部下の騎士らもリオン君に対して敵意むき出しのようだ。」

「横暴な上司に振り回される可哀そうな部下かと思ったが、同情の必

要はなさそうだね」

「はあ？何を言ってる？」

「似非貴族の騎士モドキの嫉妬を見るのは、なかなか愉快だなと言ってるんですよ」

「き、貴様ああああ!!!」

僕の煽りに神殿騎士は激昂しながら剣を振り上げる。

神殿の騎士というのは、文字通り神殿に所属する実力部隊であるが、そこを構成する面々の出自は複雑だ。

神殿で生まれたり、拾われた者が成長して騎士になる者もいるが、貴族の家に生まれたものの、事情があつて自分の家や国に仕える騎士とならなかつた者が相当数いると言われている。

その事情というのが、ケモナー学園在学中に結婚できずに、卒業後の行き先がなかつたために、神殿所属の騎士となるというものだ。

しかも、王国では異常なまでの女性優位な価値観が蔓延っており、そんな状況下では、王宮が彼らを正式な騎士と認めることは少ない。

つまり、結婚もできずに俗世から逃げたという意味で似非貴族であり、国からは騎士と認められていないという意味で騎士モドキという意味である。

そんな彼らにとっては、辺境貴族の三男坊に生まれたのに、ロストアイテムを発見して冒険者としての実績を上げただけでなく、空賊や公国を討伐して子爵に任じられたリオン君は妬ましくてしかたない存在なのだろう。

どうやら、神殿内でも、リオン君を妬ましく思う神殿騎士と、リオン君の財産を巻き上げようとした神官の利害が一致していたらしい。

怒りに任せた神殿騎士の剣を、とっさに抜いた自分の剣で受け止めるが、興奮した騎士は目を血走らせて、剣に力を込めて、そのまま押し切ろうとしている。

煽った効果は期待以上だったようだ。なにせ、これで神殿の騎士が、公爵家のボンボンに斬りかかったという既成事実が生まれたんだ

からね。

じゃあそろそろ、ネタばらしでもしてやろうか。

剣を交差させて押し合いになつているところで、僕は神殿騎士に向かつて小声で囁いてやった。

「僕の剣の鏢を見てごらん？」

相手に見やすいように交差している剣の位置を上げてやると、訝しそうな顔をした騎士が、僕の剣の鏢を見ると表情が一変する。

そこに刻まれているものを見たのであれば、それも当然のことなんだけどね。なにせ、僕の家、レッドグレイブ公爵家の家紋が彫られているんだもの。

さすがに貴族の生まれであれば、公爵家の家紋くらいは知つているのだらう。そんなものが彫られた剣を持つているのは公爵家の縁者だということはずぐにわかるはずだ。

「神殿の意向はよくわかったよ？」

「え・・・？」

意識が上の方に向いている騎士の股間を力任せに蹴り上げて、その力が抜けたところで、僕は相手の剣を弾くと、もはや十八番とも言われるファイヤーボールを胴体目がけてぶつ放す。

「ちよ、ちよつとギルバート様、何しちやつてるんですかあああ！」

「神殿と戦争するつもりはないって言つてましたよね!？」

神殿騎士に放つたファイヤーボールが弾けて爆発するのを背景に、アトリー家の文官連中が喰いついてきた。

「状況の変化を踏まえて総合的に判断して臨機応変に対応した結果かな？」

「いやいやいや、今はそんな役人答弁してる場合じゃないでしょ！」

「そうですよ、しかも後半はさんざん煽り倒してましたよね!？」

「向こうが先に手を出したという既成事実は僕が体を張って作つたから、あとは残つた連中をある程度痛め付けて、僕が身分を明かしてから手打ちにするさ。それにリオン君に対する非礼を咎めておかないと、連中、またやつてくるかもしれないよ?」

「ある程度とか言ってますけど、神殿の連中、もはやこつちのタマ取り

に来る勢いですよ!!」

文官の一人が指さす方向では、神殿騎士達十数名がみんな剣を抜いてこちらに突撃してこようとしている。

「二二」あのチンピラどもをぶっ○せええええ!!」二二」

怒号をあげながら向かってきている神殿騎士の連中は、どうやらお仲間がやられたことでプライドが傷ついたらしい。

「・・・仕方ない、久しぶりにみんなで降りかかる火の粉を払おうじゃないか」

「あくあ、大臣にどう報告すればいいんだ・・・」

「こうなるってわかって首を突っ込むなんて鬼!」

「ひどいですよ、アトリー家まで巻き込んで!大臣が僕らを切り捨てたらどうすればいいんですか」

文官連中が口々にクレームや不満を口にする。

うーむ、彼らがアトリー家からリストラされたらレッドグレイブ家で雇うのもありだな。能力があつて、ケンカ慣れもしてる文官はいくらいてもいい。

とはいえ、今はこの場を乗り切るために頑張ってもらう必要がある。

「じゃありオン君を見捨てて逃げるかい?大臣としても、クラリス嬢としても、リオン君からのポイントを稼いでおきたいんじゃないのかな?」

「うわ、この金持ちのボンボン、最低だ・・・」

「神殿とトラブル起こしたって家族にどう説明すればいいんだ・・・」

「大臣がレッドグレイブ家を巻き込もうとしたら、結果的に別のトラブルに巻き込まれた件・・・」

口々に不満を述べてはいる文官連中だが、各々、剣を抜いたり、魔法を放つ準備をしているあたりは、さすが僕と一緒に辺境の監査をして、時には妨害や暗殺を実行使で返り討ちにしてきただけはある。

そういった意味でもアトリー家の文官は優秀だ。

「さあ、腹を括ろう。うちの飛行船や鎧部隊が来るまでの辛抱だ」
にこやかに話す僕も、両手それぞれにファイヤーボールを準備し終えており、火球2つを神殿騎士の一团に向かって放つ。

火球の爆発で数名が吹き飛ばされるのが見えたが、敵さんを煽りすぎたせいか、味方が数名やられたくらいでは戦意が落ちないらしい。

向って来る神殿騎士の剣を自分の剣で受け止めつつ、魔力で強化した拳で相手の顔面をぶん殴ると、肉が潰れ、骨にぶつかるような感触が伝わってきて、相手の鼻か口から数滴の血しぶきが舞う。

悪役令嬢の兄に転生したとはいえ、どうして超大物貴族の跡継ぎに生まれた僕が、辺境で、しかも宗教勢力お抱えの騎士とバトルしているのだろうか。

本当にこの世界が乙女ゲー世界なのかと、疑わしく思えたことは何度もあるが、今回もそうだ。

妹の婚約破棄が避けられなかったのだとしても、追加コンテンツの攻略対象と主人公様をくつつけようというムーブは、きつとゲームのシナリオから大きく逸れるものではないはずなのに。

本来あったのであろうシナリオをぶち壊して、オリジナルの攻略対象5人を丸ごと籠絡したあのクソ女マリエの仕業の影響の余波なのかもしれない。

おのれ、あのクソ女め。

僕の計画をぶち壊したもう一人の転生者マリエへの怒りを力に変えて、八つ当たりじみた拳を神殿騎士達にぶつけながら、僕は土煙と怒号の中で暴力を振るい続けるのだった。

「おい、ニックス。どうしてこんな辺境の浮島で、神殿騎士と公爵家・伯爵家が殴り合いを始めるんだ・・・？」

「そりゃあ、ゾラがお仲間を引き連れてきて、リオンの財宝を奪おうとしてきたからだろ」

「しかも、ゾラの使用人が、公爵家の長男を殴ろうとしたぞ・・・」

「ああ、なんで変装しているのかはわからないが、あのサングラスの人はギルバート様だな」

「俺、きつと領主を没収されるから、どこか遠くでリユースと仲良くゆつくり過ごそうと思うんだ・・・」

「おいしいいいい！現実から目を背けるな、親父！」

いくら当主との関係が悪いからといって、外から見れば。正妻の使用人は、バルトファルト男爵家の使用人に他ならない。

そして、自分の家の使用人が、素性を知らなかったとはいえ、レットグレイブ家の跡継ぎを殴ろうとした場面は、多くの人間が目になっている。

その光景を目の当たりにしたバルカスは、この先に待っているであろうお咎めのことを考えて頭を抱えていた。

しかも、自分の息子であるリオンが空賊退治で発見した財宝をめぐって、自分の正妻が連れてきた神殿の一団と、レッドグレイブ家・アトリー家の関係者が、大乱闘を始めて、あちこちで大小さまざまな爆発が起きている。

思えば、リオンの周りで色々なことが起き始めてからまだ一年ちよつとしか経っていない間に、発生した出来事が多すぎて、バルカスとしては、そろそろキャパシティが限界に近付きつつあった。

そんな苦悩する父を、横目で見ていたリオンの心境も複雑なものであったが、そこにルクシオンがリオン以外に聞こえないような形で耳打ちをする。

「マスターの話だと、あの首飾りはオリヴィアが聖女として認定されるためのアイテムとのことですが、それが原因でこんな騒動になっています。これでは、まるで呪いのアイテムですね」

「他人事みたいに言うな！見ろ、親父の目から生気が抜け落ちて、メンタルのライフがもうゼロで見てらんないよ！どうにかできないのか!?!」

「私の本体を使って丸ごと排除するという手段以外でしたら、神殿勢力の本隊に首飾りを渡してこの場を収めるしかありませんね」

「それでギルバートさんが止まると思うか?」

「こちらに接近中の神殿側増援部隊の制圧には、同じく接近中のレッドグレイブの鎧部隊が必要でしょうから、約1時間ほどあれば止まるかと」

「…それじゃあせっかく発展してきた領内が、焼け野原になると早く終わらせろ」

「それでは、プロトタイプアロガンツをこちらに呼んで一気にカタを付けさせましょう」

「転生者だとしても、神殿とドンパチやるって戦国武将かよ・・・」

リオンの的外れな呟きをよそに、聖女のアイテムを巡る暴力の応酬は次のステージに進もうとしていた・・・

第45話 潰える野望（2回目）

炎や雷の魔法がそこかしこを飛び交い、あちらこちらで爆発と煙を巻き上げる中で、僕 Withアトリー家の文官連中 vs 神殿の騎士達との乱闘が続いていたのだが、ようやく最初に襲い掛かってきた連中を叩きのめし、

自分の足で立っているのは、リオン君の父親であるバルトファルト男爵の正妻が連れてきたヒステリック女神官だけとなっていた。

さすがに多勢に無勢だったこともあり、僕も無傷ではなく、軽く四五発は殴られて変装用のグラサンはとくに吹き飛んでいるし、魔法によって起きた爆発の土煙のせいで埃まみれとなっている。

女神官は、怒りと悔しさと顔を真っ赤にしつつも、にじり寄る僕らから逃れようと少しずつ後退している。

怒りのほうが勝って、怯えて顔が青くなったりしないあたりからすると、僕らの素性を知らずに、こちらを見下しているのだろう。

さあ、そろそろ正体を明かしてタイラント系ジェネラルごっこでも始めてみようか。

余・・・いや、僕の顔、見覚えはないか？と言ったとしても、初対面ではあるのだが、淑女の森の構成員のお友達なら、僕の顔をよく見れば、誰なのかはわかるかもしれない。

ちなみに、辺りを見回したところ、バルトファルト男爵の正妻の姿が忽然と消えている。

僕にけしかけたエルフの奴隷というか専属使用人どもは、血まみれだったり、大やけど状態のまま倒れて気を失ったままなので、役に立たなかった奴隷のことは見捨てたのだろう。

お友達がけしかけた騎士達も僕らにケンカを売って返り討ちに遭ったのを見て、トンスラこいたのだろう。小悪党ほど逃げ足が速いものだね。

仕方ないので、残った神官に落とし前を付けさせるか。

「さあ、気を取り直して、売られた喧嘩の精算をしましょうか」

首を左右に回して音を鳴らし、顔の埃を拭いながら神官に近付いて

いく。

これでこの場は勝ち確定だと思ったのだが、何か大きな質量が地面を揺らしながらこちらに近付いてくる音が聞こえてくる。

音がする方向に目をやると、バルトフアルト男爵領の港のある方向から、数機の鎧が歩いてこちらに向かって来ていた。しかも、鎧と一緒に、数十人も騎士もいる。どうやら神殿の連中の援軍のようだ。「ど、どうするんですかギルバート様！」

増援を見て焦ったアトリー家の文官が僕の名前をあつさりと言っ
てしまった。女神官のほうを見ると、先ほど真つ赤だった顔が見る見
るうちに青くなっていく。

ようやく、自分達が誰に何をしたのか理解したらしい。もうちよつ
とだけ、もつたいぶつて、煽つてから正体をばらしたかったのに、あつ
さりとなタバレしたらつまらないじゃないか。

こうなったら、アトリー家の文官連中を、よりガツツリとこの乱闘
騒ぎに巻き込んでやろう。

「騎士団連中なら、乱闘をもう一ラウンド追加するだけですよ」

数百人が相手ならさすがに厳しいが、数十人程度なら、一人一人の
ノルマは十人ちよつとだ。エンドレス○ルツの最終決戦に比べれば
可愛いものさ。

「鎧まで出てきちやったらおしまいですよ！」

「乱戦に持ち込めば、チキンな神殿騎士は味方の巻き添えを恐れてま
ともに打ってこないから、撃たれる前に距離を詰めれば何とかなるで
しょう」

「そんなレッドグレイブ家のオラオラ系ストロングスタイルを基準に
しないでくださいー！」

「こちら、人の実家を過激派貴族みたいに言うんじゃない！」

アトリー家の文官達も、敵の増援でだいぶテンパっているのか、ず
いぶんと遠慮がなくなってきたね。

「そうだ！オフリー家討伐作戦のときみたいに、鎧が勝手に飛んでき
たりしないんですか!？」

「どうやら、彼らもオフリー屋敷で、僕らが魔装に追い回されていた

時に、アロガンツブロスがパイロット抜きで助けに来た光景を見ていたらしい。

だが、毎回そんな都合のいい展開になるわけじゃないじゃないか。

確かにあの時は、自動操縦というか自立行動をしていたような気もするが、屋敷のすぐ外にアロガンツブロスを置いていたから、音声入力的な何かが働いたのかもしれない。

ロストアイテムなんだから、解析しきれっていない機能がいくつかあったところで不思議ではない。

他方で、今回、アロガンツブロスは僕が乗ってきた公爵家の飛行船の中に格納されたままで、僕の声が届くはずもないから、助けに来るなんてのは願望だろうと思う。

そんな事情を知らないアトリー家の文官連中は慌てふためきながら、僕を取り囲んで懇願を始める。

「ギルバート様の鎧って、バルトファルト子爵の鎧とおんなじでロストアイテムなんですすよね!? ちょっと呼んでみてくださいよ!!!」

必死になっているせいかわけつぱち気味に僕の肩を掴んで訴えかける視線に、なんだか憐れみの感情が生まれるのと同時に、ほんの少しだけが心が痛くなる。

「……やってみるだけですよ?」

繰り返しになるが僕はそんなに都合よくアロガンツブロスが飛んでくるとは思っていない。

だが……だがしかし、だ。

神殿の部隊が少しずつこちらに接近する緊急事態間近の中ではあるものの、ふと思ってしまう。

ロボットを呼んだら飛んで来るなんて、男のロマンじゃないかと。緊張感がないというなら、そのとおりだろう。でも、思い付いてしまったんだ。ならば、やってみるしかないじゃないか!

前世の記憶を手繰り寄せながら、愛機を呼ぶ場面がある作品をいくつかピックアップしてみる。

よし、まずはこれだ。

「出ろおおーアロガアアンツ!!」

機体の名前を呼びながら、指をパッチンと鳴らしてみた。

結果？そんなの、決まってるじゃないか。僕の声が、虚しく響き渡っただけだった。どうやら、流派東方不敗じゃないとダメらしい。ならば・・・これならどうだ！

「アロガアアンツ、カアムヒアアアア!!」

再び僕の絶叫だけが虚しく響いた。どうやら、日輪は我にないらしい。

アトリー家の文官連中が、全員そろってジト目を浮かべている。

言葉は発していないものの、何を言わんとしているのかはだいたい想像がつく。

いやいやいやいや、お前らがやれって言ったんじゃないか!?頼まれたから恥ずかしいのを我慢してやったのに、その反応は酷くないか!? どうするんだよ、この空気!とんでもねえ赤っ恥じゃないか・・・ レッドグレイブだけに。

「まだ他に何かないんですか!?!」

「恥ずかしさがまだ捨てきれませんよ!」

「あ・・・諦めないで!」

ええい!どさくさに紛れて、化粧品のコムに出てくる女優みたいな台詞を吐くな!

そして、他の何かと言われて、ある演出が思い浮かんでしまった。自分の前世の記憶力が恨めしい。もうこれ以上はやらないからな!

そう心に決めて、僕は内心ほぼヤケクソな心境になりつつも、手元の剣を両手で掴み、体の正面で剣先を大空に向けて構え、大きく息を吸って愛機の名前を呼ぶ。

「アロガンツブロスウウウウ!!」

・・・ほら、やっぱりダメだったじゃないか。お前ら、よくもおちよくってくれたな!?

笑い声を出すのを必死にこらえているのか、文官連中の肩がプルプルと震えている。

すでに鉄火場ど真ん中だが、もうそんなの関係ねえ!神殿の騎士達がこつちに迫り着く前に、文官連中を一発ずつぶん殴ってやろうと、

僕が拳を握ったそのときだった。

「はーーーーーい!!」

「「え．．．?」」

若干テンションが高めで無邪気な返事が空から地上に響き、僕と文官連中の間抜けな声をハモらせると、上空で雲が裂けて、何かが一瞬だけ光る。

そして、僕らと神殿の増援部隊の中間くらいの位置に、巨大な黒い塊が降ってきた。地面に衝突する寸前に、背部のウイングが火を噴くと、大きく土煙をまき散らしながら、ゆつくりと1機の鎧が僕の前に姿を現した。

言うまでもない。リオン君から提供を受けた、試作型アログantzの改修機、そして、僕の相棒である通称アログantzプロスだ。

さすがの僕も、呼び出す方法の正解が、魔○英雄伝だとは思わなかった。実は覇○体系かもしれないと思っていたので、財布の中から、お高い夜の店の会員カードを出さなくてよかったと思ったのは内緒だ。

それにしても、何と言えはいいのだろうか。出てきてくれたことに助かったと思っっているのと同時に、戦国時代のお館様とかグラサンにスキンヘッドの隼さんのような野太い声の返事が来なくてホッとしている自分もいる。

もしあの声で“はーーーーい!”なんて聞こえた日には、システムのバグか故障を疑ってしまう。

とは言え、オフリー屋敷で魔装とかいうロストアイテムに追いかけて回されていたときもそうだったが、都合のいいタイミングで助けに来てくれるものだ。

どういう原理なのかは、本当はわからないが、すごいな、ロストアイテム。

さて、気を取り直して、相棒が“僕に乗るんだ、ギルバート!”とか言い出す前に、アログantzプロスの元に走りよると、機体が膝をつき、手を差し出しながら操縦席のハッチが静かに開く。

中に入り込んで、ハッチを閉じると、前方の鎧部隊が、慌ただしく

武器を構えようとしているところだった。こちらにも鎧が現れたのを見て、舐めてかかっている場合じゃないと理解したのだろうか。

気を取り直して、神殿連中との武力衝突の第二ラウンドと行こうか！

最も近い距離にいた鎧が剣を手に取り、アロガンツブロスに斬りかかってくるが、この前に相手をした魔装とかいう化け物に比べれば恐怖感は皆無だ。

フットペダルを踏み込んで、背部のウイングが再び火を噴くと、その巨体に似つかわしくない速度でアロガンツブロスは、向かって来る鎧に肉薄する。

そのスピードに対応しきれなかった敵の鎧が攻撃を繰り返す前に、アロガンツブロスの拳が相手の頭部を粉々に砕いて、後方に吹き飛ばした。

一撃で吹き飛ばされた僚機の惨状を見た他の鎧は、接近戦を避けようとしたのか、携行していたライフルをこちらに向ける。

このまま敵の砲撃が始まっても、アロガンツブロスに対するダメージは無いようなものだろうが、後ろにいるアトリー家の文官連中やリオン君が流れ弾の被害を受けかねないね。

この世界の主人公であるオリヴィアさんの攻略対象であろうリオン君に何かがあつてはマズい。

急いで機体を上昇させると、それを追って敵さんの武器の照準も上空のアロガンツブロスに向けられる。これで流れ弾の心配もなくなったね。

「ブロス！強引に突撃して一気に潰すぞ！」

「了解！迎撃用の武器は？」

「グレイブ一本で十分だ！」

こちらに向かつてライフルを撃ってくる敵の鎧部隊に向けて、アロガンツブロスが一気に距離を縮めていく。

放たれた弾丸は、機体に命中する直前に魔力シールドで弾かれてダメージとなるものはない。たぶん、命中してもこちらの装甲に傷すら付けられないだろうけど。

そして、相手の鎧の懐に入り込み、そのまま上空からシヨルダータツクルをぶち込むと、相手は地面に、背中から叩きつけられる格好で激突し、その衝撃で地表を抉りながら吹き飛ばされていく。

残りの鎧部隊は、改めてアロガンツブロスに銃口を向けるのだが、既にほとんどがグレイブの攻撃範囲内と言っても差し支えない範囲にいる。

あえて言うのであれば、必殺技を出すまでもなく、これでジ・エンドだ。

「グレイブをぶん回せ！」

アロガンツブロスが手にしているグレイブを力任せに何度も振り回し、周囲にいる鎧部隊は、その装甲を易々と切り裂かれて、ある鎧は腰のあたりから上半身と下半身に綺麗に分断され、別の鎧は首を跳ね飛ばされていた。

一応、空賊ではないから、コックピットのある胸元周辺はさすがに外してあげたけどね。

ひと通り残存する神殿の鎧が全て戦闘不能になったところで、港のほうから神殿の飛行船がこちらに向かってきた。

ほほう、また増援部隊が出てくるなら、飛行船ごと沈めるか・・・それとも、飛行船を浮かせている浮遊石を分捕ったほうがお得か。

・・・おっと、いかんいかん。これでは思考が空賊と大して変わらないじゃないか。

今さら飛行船の1つや2つ出てきたところで、状況を変えられるとしたら、リオン君のバルトナーのような戦闘力の高い飛行船や、

飛行船を大気圏内でバレルロールさせたり、戦略兵器をドリフトして避けるようなぶっ壊れ能力を持ったスーパーナチュラルな操舵手くらいだろう。

そんな世界のバグのような奴がいたら、ぜひとも公爵家にスカウトしたいものだ。世界のバグというなら、僕やあのマリエというクソ女もバグなのかもしれないが。

若干話は逸れたが、万が一、飛行船の大砲が領内で乱射されたりでもしたら、バルトファルト男爵領の被害がとんでもないことになって

しまうから、神殿の飛行船の無力化はしておいたほうがいいだろう。
「ブロス、敵の飛行船に仕掛けるぞ」

「・・・」

あれ？いつもだったら、無邪気な声色の返事があるのに反応がない。突然の反抗期到来というわけでもないだろうに、どうしたことだろう。

そんなこと思っていたら、コックピット内にアラート音が鳴り、機体後方の画像がコックピット内に拡大して投影される。

映っていたのは、リオン君のようだ。こちらに向かってくるようだ。しかも、手元には拡声器のようなものを持っている。

「こちらは、リオン・フォウ・バルトファルト子爵だ。神殿の飛行船に告げます。お前らが相手にしてるのは公爵家の跡継ぎ様だぞ、わかってんのか!?肩のエンブレムが目に入らないのかああああ!!!」

しまった!リオン君に、王妃様が学園祭にお忍びで来てた時の、茨城の元バイスプレジデントのようなムーブを決められてしまった!

せっかくなら、一度は大勢の目が集まる中でド派手にやってみたかったのに。

そういえば、アロガンツブロスの肩には実家の家紋が書かれていたね。戦闘時には、とんでもない機動力で動き回るから認識することのほうが難しいのだろうけど、気付かれるのは時間の問題だったか。

そして、数分後、飛行船に白旗が揚げられて、着陸した飛行船から、今回、バルトファルト男爵領に派遣された部隊の指揮官と部下と思しき騎士達が、両手を上げながら降りてきた。

ようやくお話を合わせる気になったようだね。

ならば、僕だって好きで暴力を振るっているわけじゃないんだから、話くらいは聞いてあげるとしよう。

おっと、その前に、今回の騒ぎの元凶となったヒステリック女神官も連れて行かないとね。せっかくだから、アロガンツブロスの腕で鷲掴みにしてお話合いの場に連れて行ってあげるとしよう。

お話し合いの会場となったバルトフアルト男爵の屋敷の大広間に、僕、リオン君、そのパパであるバルトフアルト男爵、アトリー家の文官連中に、

神殿騎士の一団の指揮官であるという將軍、お宝の真贋を判別する鑑定士に加えて、今回の騒動の元凶とも言える、ヒステリック丸眼鏡の女神官だ。

指揮官と女神官は真つ青な顔をして下を向いているのに対して、鑑定士は女神官に対して、これでもかというほどの憎しみを込めた視線を向けて睨みつけている。

まあ、鑑定士の立場としては、こいつらが馬鹿をやらかしてお宝が戻ってこなくなったら、専門家としては絶対に許せないだろうから、気持ちにはわかるよね。

「さて・・・まずは、今回、神殿が大部隊を連れて、辺境の浮島までわざわざ押しかけたのかを説明してもらいましょうか」

これを当事者から説明を受けないと、話が始まらない。

一同の刺すような視線が集まった女神官は、うつむきながら、何かをボソボソと話す、その内容は聞き取れない。

その状況に苛立ったのか、鑑定士が女神官の座った椅子の足に蹴りを入れ、女神官が小さく悲鳴を上げた。状況を見かねたのか、指揮官が彼を制すると、鑑定士は渋い顔をしながら大きいため息をつく。

しばしの沈黙の後、女神官もさすがに観念したのか、ポツリポツリと事情の説明を始めた。

リオン君の手によって捕縛された空賊ウイングシャークの首領に対する取調べの結果、行方不明となった神殿の宝、しかも初代聖女ゆかりの品がウイングシャークからリオン君の元に渡ったことが判明し、

神殿内で宝を取り戻すための対策を協議していたことを聞きつけた女神官が、リオン君の父であるバルトフアルト男爵の正妻であるゾラに接触したのだという。

その上で、女神官は手柄と宝を取り戻した功績を、リオン君を逆恨

みしていたゾラは神殿の力を背景に、彼の財産を奪おうとした、というなんともあさましい動機のようなのだ。

そして、神殿の上層部に、極悪非道の騎士が相手になるが、自分達なら上手く財宝を取り戻せると売り込みつつ、いざというときは武力で解決しようと、騎士団の大部隊に加えて鎧も持ち出したらしい。

なるほど、将来の聖女であるオリヴィアさんにも関係しそうなアイテムである初代聖女ゆかりの品を、リオン君が持っていた、というのはやはり運命というか、そういった関係になるべくしてなるよう定められているのか。

リオン君は、追加コンテンツの攻略対象なのだという推測が補強されたように感じるね。

ただ、そんな乙女ゲーの都合とは別に、現実の政治的な話として考えたときに、一つの疑問が残る。

現役の子爵本人、しかも、空賊討伐に加えて、黒騎士を含めて公国の艦隊を退けた実績を持つリオン君を相手に、そんな無体なことをしようとすることに異を唱える者はいなかったのだろうか。

黒騎士周りだけは、アークライト家の剣聖ジュニアの功績ということに対外的にはなっているとはいえ、ずいぶんと傲慢な意思決定に思えるね。

これが組織の体質なのか、それともリオン君をネガティブな意味で特別視していることによるのかはわからないが、もしかしたら少し背後に何らかの事情があるのかもしれない。

まあ、女神官とかゾラといった当事者の思惑は、僕らの想像の域を出るものではなかったが、改めて当事者の口から聞くと辟易するものだね。

こいつらにとって誤算だったのは、リオン君の取り込みを凶ろうとしていた公爵家と伯爵家が、男爵領に来ていたということだろう。

その結果、知らなかったとはいえ、公爵家と伯爵家の関係者を暴力で排除しようと試みただけでなく、ステゴロの大乱闘に加え、アロガンツブロスの大立ち回りの結果、

引き連れてきた神殿騎士のほとんどは重軽傷を負い、鎧も大破する

ことになっている。もはや責任問題のレベルが現場でどうこうできるものではないのが笑えるね。

「さて、騒動をどう着地させるかだが・・・まずは、子爵はどのようにお考えですか？」

公爵家とはいえ、僕はただのボンボンで個人として爵位を持っているわけではないので、形の上ではリオン君のことから優先的に処理するために、話を向ける。

リオン君は、てつきり自分が後回しになると思っていたのか、話題を振られたことに少し驚いていたが、しばし悩んだ後、相対する将軍に向けて、口を開いた。

「貴方が責任者ですか？」

「はい。この艦隊を率いています・・・ご、誤解しないでいただきたいのは、本当に我々は神殿の宝を受け取りに来ただけなのですが・・・」
おいおい、これだけあれだけの騎士やら鎧やらを準備してきて、受け取りに来ただけ、というのは理解に苦しむねえ。もしかしたら、新車の冗談なのだろうか。

「その割にはずいぶんとしっかりした戦力を連れてきたようですねえ」

「・・・申し訳ございませんでした」

僕が一言嫌味を挟むと、将軍は再び顔を青くして黙ってしまう。

そこで、リオン君が脇から、木箱を取り出して、将軍と鑑定士の前に差し出した。箱の中にはやわらかそうな布が敷き詰められ、その上には、年代物ではあるためか、どこか不思議な感じのする首飾りが置かれている。

「それで、この首飾りは本物なんですか？」

慎重に首飾りを確認した鑑定士は、激しく首を縦に振りながら、目を輝かせている。

「ま、間違いありません。伝承通りです！」

「ご、これが失われた宝！」

将軍が報告を聞いて震えている。「記録通り」ではなく、伝承云々言っているということは、所在をロストしてから少なくとも数十年は

経過しているのかもしれない。

「大事な物なら、ちゃんと神殿で保管してください。それより、その人達を連れて帰ってよ、お目当ての宝以外にも財宝を出せとか言われたから困っているんだけど」

「もちろんです！本当にこの度は申し訳ございませんでした」

え・・・それだけ？お宝、返しちゃうの？女神官といい、ゾラとかいうババアといい、関係ない財宝まで集られたというのに、これで済ますのか？

あつけないにもほどがあるじゃないか。だとしたら、リオン君の狙いは何だ？

いや待てよ？ゲームの都合を考えるなら・・・リオン君が財宝を前向きに差し出せば、神殿とリオン君の関係が改善する。

関係が改善すれば、将来的に聖女となるオリヴィアさんの肉バィ・・・いや、パートナーとしてリオン君のことを認めるときに、物が円滑に進むようになるだろう。

なるほど、これなら、ゲーム進行上の辻褄は合うということができ
るね。

ならば、僕としてもこの乙女ゲー世界のご都合主義に乗っかっておいて、解決する方向に持っていったほうがいいだろう。

「・・・子爵は非常に慈悲深いようですね。ただ、この度の非は、そのの神官、つまり神殿側にあると言わざるを得ない。相応に誠意は尽くすという理解でよろしいかな？」

「はい！このことは。上層部に伝えて必ず対応させていただきます
！」

将軍が表情を明るくして即答した。さて、次は僕の番だ。アトリー家の文官連中も一緒ではあるが、とりあえず僕の問題ということでざっくり括つても問題は大きくないだろう。

「ではまず、今回暴れた連中は、現場で離反した暴徒であって、神殿には関係ないと主張なさいますか？」

「この場でそのような言い逃れは認められないと理解しているつもりです」

「どうやら最低限・・・本当に最低限だが、きちんと部下の不始末は上司の不始末だという管理職としての認識は持っているようだ。」

「よろしい。では、次は僕の番ですが・・・將軍にはこちらの書類にサインをもらえますか？」

「そう言つて、アトリー家の文官連中から渡された紙を受け取つて、ペンと一緒に、將軍の前に書類を置く。」

書いてある内容をざっくり要約すれば、

・神殿側に属する神官が騎士をけしかけて、レッドグレイブ公爵家の長男及びアトリー伯爵家の文官に危害を加えた

・さらに、神殿側は、現場で起こっている衝突現場に、鎧数機を持ち出して応戦した

・これらの事実を、間違いがないものとして認めるとともに、責任が全面的に神殿側にあることを認める。

という事実確認する書類だ。

「こ、これだけなのでしょうか・・・」

將軍がやや困惑しながら質問してくる。

「僕や彼らアトリー家の文官個人としての賠償を求めることも可能ですが、もう今回の一件は、公爵家に加えて、現役の大臣が当主の伯爵家にも関わる大問題に至っています」

「・・・ということとは・・・」

「もはや將軍殿が負い切れる責任の範囲は超えていてお困りでしょう」

前世に比べてはるかに高い顔面偏差値で爽やかな笑顔を浮かべながら、將軍に語り掛けてやる。

だが、こちらの言っていることの意味がなかなか伝わっていないかつたのか、將軍は若干ポカンとした表情を浮かべている。

それを見かねたのか、ここまで余計なことに巻き込まれないためなのかはわからないが、沈黙を続けていたアトリー家の文官連中が助け舟を出した。

「要するに、責任の根拠となる事実だけ認めれば、あとは責任の中身をどうするかという話になるので、そちらの上と私達の家が直接話を付

ける、という趣旨ですよ」

「ギルバート様は筋さえ通せば下の者に無理を押し付けたりはしない方ですから」

「筋を通さなかったときの暴れ方が、常識で計りきれないくらい苛烈なだけです」

「将軍殿も、もう過去は変えられないんですから考えるのは止めて、お偉い方々に全部丸投げしてしまったほうが楽ですよ」

「なんだろう・・・そこはかたなくデイスられているように聞こえるのは気のせいだろうか。」

とにかく、今回の一件は公爵家から神殿に対する大きな貸しになる。そして、貸しを今すぐに取り立てる必要はない。

オリヴィアさんが聖女になった暁には、リオン君ともども、公爵家が庇護というかけツ持ち役になるつもりだが、俗世だけでなく国教に対する影響力を、公爵家の当主となった僕が持つことが可能となるだろう。

王妃の実家という立場を得ることは叶わなくなってしまったが、次善の着地点としては悪くないはずだ。

災い転じて何とやらだね。それを考えれば、腹立たしく思うことも今回は多かったが、こいつら神殿に大しても優しくしてやれるつてもなさ。

「・・・」配慮痛み入ります。この度の大乱闘のことはともかく、バルトファルト子爵も、ギルバート様も、聞いていた噂とはずいぶん違いますね」

「噂？」

「傍若無人な方々だと聞いておりましたので、聖女様が怒るのも無理はないと思うのですが、話に聞くよりも落ち着いた方々で安心いたしました」

「は？聖女様？」

「あ・・・」

安堵から出た失言なのか、しまったという顔をした将軍がとんでもないことを口にした。どうということだ？聖女はオリヴィアさんじゃ

なかったのか？あの子は今、うちの領地で妹とイチヤイチャ百合百合してるはずだぞ!？」

仲睦まじく馬上でベタベタしていた2人の様子を頭の中で思い出しながら思考を巡らせていると、先にリオン君が口を開いた。

「聖女・・・様が見つかったのか？」

「面識はおありかと思いますが、マリエ・フォウ・ラーファン様です。この首飾りと同様に、失われていた腕輪を持って神殿に現れまして」「あゝ!？」

思考とか理性とか言われるものが仕事をする前に、声が出て、拳がテーブルを叩き割っていた。

二つに割れてテーブルがバランスを崩し、その上に置かれていた紅茶のカップが転がって白色のテーブルクロスが赤みがかかった茶色に染まる光景を、思考がフリーズした状態で見ている。

数秒してから、自分がフリーズしていたことに気付くのだが、今度は怒りの感情が自分の中から猛烈な勢いで湧き上がってくるのがかかる。

・・・あの黄色い毛虫こと、マリエが聖女!？」

僕と同じく転生者で、前世で夜のお店のトップ嬢をしていて、つい最近、王都地下のダンジョンで僕と殴り合いをしたあのクソ女が聖女?？」

この乙女ゲー世界の攻略対象全員を誑かし、妹が王太子と婚約解消することになった元凶がよりにもよって聖女?!!」

「あんのクソアマがああああああつああああ!!!」

つい大声を上げてしまったが、怒りがあふれる中で、辛うじて残った冷静な思考部分が、1つの事実を認識する。

マリエが聖女になったということは、この世界の主人公であるオリヴィアさんが聖女になれないということだ。

それはつまり、僕の将来の計画が、またしても、一度ならず、二度までも、マリエによって妨げられたことを意味している。

ナニソレ・・・あいつは僕への嫌がらせ特攻スキルでも持ってるの?？」

どうしよう、なんかおかしくてもう逆に笑えてくるんだけどお!?
くつそおおお!あのとき、ぶつ〇しておけばこんなことにはなら
なかったのに!!!!

「おい、將軍!あの腐れ女が公爵家に何したかわかってんのか!」
「ひいひいひい!」

「うちだけじゃねえ!あの女の肩持つってなら、こいつらアトリー家
だって黙っちゃいねえぞ、あ!?!」

傾いたテーブルに足をかけて、手元の剣を引き抜いたのだが、そこ
で後ろから一斉に羽交い絞めにされた。振り向くと、アトリー家の文
官連中が必死に僕の両手、両足に纏わりついている。

「ギルバート様、落ち着いて!」

「さすがにこの場で殺したらマズいですって!」

「この人達を消したって神殿の連中はトカゲの尻尾切りできたくらい
にしか思いませんよ!」

・・・そうだな。貸しはすぐに回収したっていいものな。

数分前には、神殿に対して優しくしてやることもできると心の中で
呟いた気もするが、前言撤回だ。

「よし、では今から神殿に乗り込みましょう。怪我した神殿騎士達や
壊れた鎧をちやくんと送り届けてあげる必要があるでしょうから」

「「「は?」」」」

將軍、鑑定士、女神官にアトリー家の文官連中の声が綺麗にハモる。

ボコボコにされた騎士団を飛行船に括り付けて乗り込めば、先制攻
撃をしてくるだろうから、反撃でボコボコにしてやるとしよう。

仮に神殿を物理的には焼けなかったとしても、社会的に大炎上させ
てやる。

数日後、バルトフアルト男爵領には、再びアトリー家の飛行船の姿
があった。

リオンは、自分が所有する浮島の温泉につきりながら、その報告を
ルクシオンから受けていた。

「マスター。アトリー家が神殿から現金と財宝を持ってきました。マスターへの感謝料に加えて、先日の戦闘で荒れた領内の原状回復の費用も含まれているようですが、一般的な相場に比べて相当高額です」
「・・・結局、ギルバートさんはどうなったんだ？」

「アトリー家が早々に当主である大臣に連絡を付けて、神殿到着前に、ギルバートを説得させて、神殿の焼き討ちだけは何とか阻止できたようです」

「めちやくちや怒り狂ってたけど、さすがに大臣が出てきたら止まらざるを得なかったんだな」

「代わりに、神殿側に対しては、公爵家と伯爵家の両家から膨大な額の賠償を請求したようで、聖女のための予算が消し飛ぶどころか、神殿は平時の業務にも支障が始めています」

「神殿のメンツは丸潰れだな」

この先のゲームのシナリオを知るリオンにとっても、マリエが聖女となったことは許せないものであったが、

一方で、公爵家と伯爵家の怒りを再び買って、マリエが金に苦しむ様を想像すると、いくばくか気分が晴れるのも事実だ。

「神殿は王宮に泣きついたようですが、王宮も公爵家への後ろめたさがあることから、大々的に支援することは難しいようですね」

「それにしても、結局、ギルバートさんとは転生者どうしの話はできずじまいだな。マリエはともかく、どこかで擦り合わせをしないと」

「今回はアトリー家が人を派遣していたことがネックになりましたね。ところでマスターはオリヴィアを受け入れるのですか？」

「・・・今はそんなことを考えてる状況じゃないだろ」

「オリヴィアが、マスターのいうゲームのシナリオの中での重要な人物であるならば、緊急性は高いと思います。ギルバートがお二人をくつつけるべく暗躍しているのですから、そこに乗っかったらいいかがです？」

「そのところ、うまく誤魔化せたりしないかな？」

「また首を絞められますよ」

ルクシオンの言葉に、公国との戦闘時に告白され、その場を誤魔化

そうとしたらパイロットスーツ越しに首を絞められたことを思い出し、リオンは背筋に寒いものが走るのを感じる。

嫌いではないし、あの一件で、距離を置くことはやめよう、近くにしようと考えを改めたところであったが、それ以上に踏み込む選択肢はまだ生まれていない。

むしろ、マリエによつて再びこの先のシナリオがグチャグチャにされたことを踏まえて、予測のできない展開が待ち受けることを思うと、悩ましいことだらけなりオンであった。

第46話 暴力に溺れた者は権力に屈する

☆前回までのあらすじ☆

二度に渡って僕の野望を打ち砕いたマリエを聖女と認定した神殿にカチコミをかけるべく、僕はアロガンツブロスを積んだ公爵家の飛行船で、神殿に乗り込もうとした。

だが、神殿に到着する直前に、アトリー家の飛行船艦隊に取り囲まれた上で、こちらに乗り込んできたバーナード大臣に鬼気迫った顔で説得され、武力行使を断念する形となり、僕は神殿を焼き尽くすことができなかった。

今にも再び暴れ始めそうな僕を後ろに下らせながら、大臣は、神殿の上層部にハードネゴを仕掛け、多額の賠償金の即金払いさせて、僕を王都にある公爵家の屋敷に押し込んだのだった！

さて、僕が王都に戻ってきてから数日が経っていた。

時間の経過とともに怒りが鎮火した僕の現在の心境は、虚無という他ない状況だ。

ああ、こんな心境になったことが前にもあったね、決闘騒動の末にアンジェの婚約が解消となったときだ。

何か別のことを考えていないと、過ぎてしまった過去ばかり思い出されてしまつて、思い出しついでに歴代の元カノ達は元気にしてるだろうか、とか考え始めてしまつている。

え？仕事？カチコミから帰ってきたときに、僕の執務机の未決ボックスに積み上がっていた稟議書の類は全て既決ボックスに移動済みだよ。

はあ、国境沿いの貴族の監査に向けた潜入調査のために数ヶ月ほど、王都を留守にしている間に、急な事情ができたので実家に帰ります、という書き置きを残して、公爵家のメイドを退職した元カノは元気だろうか。

そうだ、王宮内でこっそり付き合ってたのに、数日間だけ領地での

公務をこなしている間に、いきなり王都からだいぶ離れた王族の直轄領内の部隊に異動になってた王宮魔術師の元カノは、新しい恋人と上手くいつているだろうか。

思い出し始めたらキリがないな。

自室の執務机で頬杖をつきながら、外を眺めると、窓から見える木の葉っぱがラスト1枚となっている。

・・・あの葉っぱがなくなったら、木は丸禿げだな。

丸禿と言って思いつくのは、公国の黒騎士だが、リオン君の手によって、公国の第一王女もろとも捕縛され、ロストアイテムだという大剣も王国の手に落ちた。

戦力はがた落ちだろうから、普通に考えれば、この先数年間は仕掛けてくることはないだろう。

目下の敵は、ヘルトルーデ第一王女を取り込もうとしていると噂の敵対派閥であるフランプトン侯爵だが、こと政治の場面になると、父が派閥の再編に重心を置いており、表立っては動いていないため、僕としてはできることがあまりない。

バルトフアルト領で、エルフの専属使用人を僕にけしかけた、バルトフアルト男爵の正妻であるゾラについては、僕に対する暴力行為の命令を理由として指名手配申請中だ。

あとやるべきことと言えば、リオン君の取り込みであるが、オリヴィアさんが聖女になるというシナリオが崩されてしまったため、ゲーム上の必然性からリオン君とくつつける必要はなくなってしまう。

もちろん、あんな強大な力を持った騎士を他の派閥に渡すことにはできないと思っているのだが、オリヴィアさんとくつつけようにも、

裏で進めていた、僕がかつて結婚の面倒を見た辺境の貴族の家とオリヴィアさんとの養子縁組の手続きが、どういうわけか止まっているようで、結局動くことができずにいる。要は、手詰まりというやつだ。そこら辺の手続きを所管する枢要ポストがフランプトン派閥で占められるようになったことが関係しているのかもしれない。

以上のことから、できること、やることがなくボーっとしているの

だが、そんなときに扉が数回ノックされ、どうぞと声をかける前にガチャリとドアノブを回す音が聞こえた。

普通に考えて、開けていいと言う前に、僕の部屋に乗り込んでくるか？父や妹は別として、いないよね。

・・・いや、待て。それが何故か許されるやつが1人だけいたな。

「失礼します。紅茶をお持ちしました、若様」

「失礼しますと言うタイミングが、ずいぶん遅いような気がするのは気のせいかな？」

ティーポットが置かれたカートを押しながら、部屋に入ってきたのは、予想どおり、我が家の腹黒眼鏡メイドのコーディネアだ。

ちよつと前にアンジェとオリヴィアさんと一緒に領地に戻り、二人が百合百合イチャイチャしてるのを幸せそうに眺めつつ、その面倒を見ていたはずだが、いつの間にか王都に戻ってきたようだ。

「おかえりなさいませ」

「君もな。未決ボックスを空にしてあるから、後で追加のものを頼む。それと、既決の書類を持って行ってくれ」

「かしこまりました」

執務机に置かれたカップを手に取り、出された紅茶を口に流し込む。

僕はお茶というものに興味はないので、ジルクが出してくる激マズなお茶以外、違いがわからないのだが、コーディネアの淹れるお茶は、熱すぎず、ぬるくなく、温度調節は完璧だ。

彼女は、レッドグレイブ公爵家の上級メイドであり、性格に難があるけど、身持ちは固く、能力は高い。

しかも、公国による修学旅行の豪華客船襲撃事件を手引きしたのが、公爵家の寄子の家の女子生徒であったことが判明したことの余波で、

屋敷内の貴族出身の使用人や上級メイドがかなり数を減らした結果、屋敷内のコーディネアの影響力は強まっているらしい。もう10年もすれば立派なお局になるだろうね。

・・・ずいぶんと彼女にとって失礼なことを脳内で呟いたが、あれ

？いつもなら、そろそろ、毒づいた一言くらい出てくる頃だと思うのに、何も言っていないだど!?

「君にしては、今日はずいぶんと静かだね」

「とおっしゃいますと?」

「嫌味か皮肉どころか、小言やお説教すらないとは思わなかった」

神殿から慰謝料をぶんどって屋敷に戻ってきたときに、血の気の多い脳筋系騎士連中からは大喝采を浴びた一方で、年齢が上めな家令達からは結構な数の小言を言われた。

神殿側の非礼を含めて、事情を説明したのだが、年寄というのは、思っていたよりも神殿という宗教団体に対する信仰を持っていたようで、そんなおじいちゃん達からしたら、もっと穏便に済ませてほしかったようだ。

そんな中、公爵家の中でのアンジェガチ勢兼僕アンチ筆頭のコーデリアが何を言っ僕僕の心を抉ろうとしてくるのか警戒していたのだが、何も言っ僕僕こないというのは、それはそれで不気味だ。

「あら、若様は私に叱って欲しかったのですね」

「悪いがそんな癖はない。ただ、君が何も言っ僕僕こないと、何を企んでいるのかが気になる」

「そんな・・・私のことが気になるだなんて・・・」

「頬を赤らめて変なことを言うんじゃない!」

わざとらしく頬に手を当てて、可愛い子ぶった仕草が微妙にムカつく。

「でしたら、思うところを申し上げてよろしいでしょうか」

「僕の心が傷付かないように頼む」

数秒ほど間を空けて、シリアスな表情を浮かべたコーデリアが、まっすぐ僕を見ると、息を深く吸い、血走った眼を大きく開いた。

「あの神殿に巢食った生臭坊主ども・・・よくもアンジェリカ様を傷付けた魔女を、よりによって聖女なんか・・・!アトリー家の大臣が余計な真似をしなければ、神殿もろとも灰に帰してやれたものではない!」

・・・しまった。我が家のアンジェガチ勢筆頭に火を点けてしまっ

た。

怒りに震えながら、伝承で聞くような魔女よりも魔女っぽいことを、真顔で言つてのけたコーデリアは僕の両肩を掴むと、力任せに僕の上半身を前後にシェイクし始めた。

「若様！これは、あなた様が売られた喧嘩でもあるのと同時に、お嬢様に売られた喧嘩でもあるのですよ!!わかつてるんですか!？」

「ゴ、コーデリア、少し落ち着くんのだ」

「これが落ち着いていられますか!」

「これでも僕のやったことは世間的には、わりと過激な部類だと思ふよ?神殿の騎士なんて何十人も病院送りにしたよ!僕、少しは頑張つたよ!」

「ぬるいです!バルトファルト子爵が、元王太子の馬鹿王子を公衆の面前で叩きのめしたように、若様が神殿を焼き払い、万象一切灰燼に帰してやるべきだったのですよ!」

ヤバイ・・・レッドグレイブ公爵家の赤い通り魔とか、爆炎の顔玉潰しとか呼ばれる僕よりも、ずっと過激な奴が身近にいたよ・・・言つてる内容が、もはや護○十三隊の総隊長レベルの過激さだよ。

もはや、アンジエガチ勢から、アンジエの厄介オタに進化し始めてるような気がするぞ!？」

なんか、自分以外の人間がここまでキレてると、逆に僕が冷静になつてくる。

怒りのあまり、普通に馬鹿王子って言っちゃてるし・・・というか、実行犯というか手を汚すのは全て僕という犯行計画って酷くない?」

「お嬢様を傷付ける連中は若様がみんな焼いてしまえばよかつたのに・・・」

少し涙声になりながら、我が家の腹黒眼鏡メイドが躊躇なく恐ろしいことを呟いた。

やっぱり彼女の中では、手を下すのは僕の役割ということになつているようだ。解せぬ・・・

ただ、怒りが収まつてきたのは間違いない。速やかにコーデリアの感情を落ち着かせなければ・・・

「少し深呼吸してみようか。コーデリアから見たら物足りなかったのかもしれないけど・・・」

「わかってますよ、若様も本気でお怒りだったってことは・・・」

「コーデリアに僕の心情を理解してもらえる日が来るとはな。明日は槍か斧でも降るのだろうか。君のアンジェに対する忠誠にはいつも感謝しているよ」

「でしたら、お嬢様のために、もっと頑張っていただけですか」

「・・・努力しよう」

「結果で示してください。そうしたら褒めて差し上げます」

「なんか、少し調子に乗って来た気がするな。いや、突っ込むな。我慢するんだ、僕。」

「ここで怒りを再燃させたら、爆発物処理が最初からやり直しになってしまう。」

「それは光栄だね。今日はいつになく気前がいいじゃないか」

「頑張った殿方にこそ褒美を与えるのも淑女のたしなみです」

眼鏡をクイッと上げながら、コーデリアがドヤ顔を浮かべている。良かった、どうやら落ち着かせることに成功したらしい。

雇い主は僕の側のはずなのに、褒めるのはコーデリアの側というのが腑に落ちないが、とりあえずこの場を乗り切ることが先決だ。

「この前、君が読んでいた恋愛小説に、そう書いてあったのか?」

「そ、そういうことは口にしないのが紳士のたしなみではないのですか!? デリカシーがありませんよ」

「あいにく、そんなものはあの学園に投げ捨ててきた」

「不法投棄です、拾ってきてください」

まったく、いつものことだが、僕がああ言えば、こう言って反論しなきゃがって。

とはいえ、ようやくいつもの表情筋が職務放棄しているコーデリアの顔と口調が戻ってきたな。

ああ、なんかとんでもない爆発物の処理をしている間に、どんよりした気持ちちが吹き飛んでしまった。

トータルとしては、コーデリアに元気付けられてしまった結果が悔

しい。

「・・・どうやら落ち着いたみたいだね。なんか僕もすつきりしたよ。礼は言っておくとしよう」

「それは何よりです。あ、それと、ヴィンス様が後ほど、部屋に来るようにとのことでした」

ずいぶんと思い出したような感じで言ってきたな。

父の用件とは何なのだろう。急ぎの用事なら、部屋に入ってきてすぐに言ってくるだろうに。

神殿の件の顛末も既に報告済みだし、このタイミングで呼ばれた理由がわからない。

コーデリアの怒りが再び爆発すると厄介なので、すぐに僕は父の部屋にやって来たのだが、僕を呼び出したはずの父は何やら不思議そうな顔をしている。

「ずいぶんと早かったな」

「え？」

「色々と気落ちしているようだったので、コーデリアを向かわせたのだが、こんなに早く来るとは思わなかった・・・」

「父上、おっしゃってる意味がよくわかりません」

「ギルバート、お前・・・まさかそんなに早撃ちだったのか」

パパ上は何を言っているのだろう。

気落ちしてるからコーデリアを？しかも、早撃ち？

もしかしてパパ上は、とんでもない誤解をしているんじゃないだろうか。

「僕の名誉にかけて言いますが、僕とコーデリアは、父上が考えているような関係ではないですからね。真顔で何をおっしゃってるんですか」

「もしかして、本当に違うのか？」

「断じて違います。というか、わかってて言ってますよね!？」

「・・・息子も娘も、次々と世を騒がすから、父としては大変なのだ。

家族相手なら、たまには息抜きがてらに、ふざけてみるのも悪くないだろう」

そうだった。パパ上は、世の中を騒がせた出来事を愉快だと楽しむことがたまにある。

リオン君が馬鹿王子と不愉快な馬鹿4人をボコボコにしたときも愉快だと言っていたのを思い出す。

「楽しそうで何よりです」

「お前の腰の軽さなら、その手の間違いは起きても不思議じゃないと思うのでな」

・・・実の父親から向けられる、僕の下半身への信頼の無さが悲しいね。

「それで、本当にそういう関係ではないのだな？」

「あの学園に入学する前に、父上からいただいた忠告を守り、貴族と寝たことはありませんよ」

「だからといって、貴族以外であれば好き放題に手を出していいと言った覚えもないがな」

「偉大なる陛下の影響ですかね」

「あのロクデナシとつるみだす前・・・学園に通っていた頃から、屋敷内ではメイドに手を出していただろう」

「人聞きの悪い言い方をしないでください。身分に関係のない純粋な恋愛を楽しんでいただけです」

「ということとは、本当にコーデリアに手を出していなかったのか・・・」
よかった、ようやく疑いは晴れたらしい。

「コーデリアからは、神殿を灰になるまで焼き尽くさないのは、手ぬるいと説教されましたよ」

「・・・先にそれを言われると、私から、やり過ぎだぞと説教しづらいんだが・・・私も立場上、お前を手放しに称賛することはできん」

「父としてではなく、ということですか。今回の一件で、派閥から抜きたい家でも出てきました？」

「規模は小さくとも古くから傘下にいた家がいくつか、神殿を敵に回したくないと言ってきた。あと、ほぼ同時に、バルトファルト子爵ほ

どでないにしても、勢いのある新興貴族が色よい反応を示している」「ならば実質的にはトントンですね。辺境で血みどろの殴り合いをして正解でした」

「お前のことを叱ろうにも、叱れないという、行き場を失った父の感情をどうしてくれる」

それ、八つ当たりというのではないだろうか。

「では、理不尽に雷を落とされる前に、領地に戻るといたしましょう」「それなんだがな。私が領地に戻るから、お前は、しばらく領地に戻らなくていい」

実に苦々しい表情を浮かべた父の話によると、どうやら公爵領内の神殿支持勢力が、神殿カチコミ事件の後、すぐに公爵家に対して抗議活動を開始したらしい。

それであれば速攻で武力鎮圧すればいいと僕は思ってしまったのだが、ことはそう簡単ではなかった。

なんと、公爵家を支持する領民達の一部が、マリエを聖女にした神殿にブチ切れて、神殿支持勢力と正面からぶつかってしまったらしい。

公爵家支持派の中でも、特に過激なグループは、公爵領内にある神殿所有の教会を襲撃したのだという。

領民達は、有り体に言えば分断状態というか一触即発状態のため、神殿とのトラブルの当事者である僕が領地に戻ると、公爵家派と神殿支持派の衝突は不可避のようだ。

「まったく…我らの領地の民は、コーデリアみたいな過激な連中ばかりですね」

「鏡を見てるといい。前代未聞となる神殿との乱闘事件の首謀者の顔がバッチリと映っているぞ」

「父上としては、神殿支持派も領民だから、どうにかして着地点を見出そうということですか」

「こんな時期だから、長い時間はかけないつもりだが、私が不在の間は、自分の手に負えない問題だけは起こすんじゃないぞ」

起こすんじゃないぞ」

・・・解決できる問題は自分で何とかしろということか。

ちよつと待てよ？問題を起こすこと前提で言われたように聞こえたのは気のせいだろうか。

「それと、もう一つ、私を悩ませる話がお前に来ている」

そう言いながら、父は引き出しから一枚の封筒を取り出して僕に渡してきた。公爵である父を悩ませるとは、いったい誰からの手紙だろう。

封筒を手に取り、裏側を見てみると、蟬による封印がされている。封印自体は別に構わない。問題なのは刻まれた紋様だ。

何せ、ホルファート王国の王族が使うものなのだから、父も困るはずだ。

うーん、このタイミングで、神殿と大激突した直後の僕と接触した王族って誰だろう。

普通であれば、しばらくは僕と距離を置くのが定石だろうから、そんな中で接触しようとしてくるなんて、事と次第によってはとても面倒くさいことになるぞ。

「廃嫡された馬鹿王子の後釜を狙っていると公言して憚らない第二王子とかじゃないですよね？」

「誰からと言うことはできないが、お前が心配している類のものではないから安心しろ」

「ならば陛下ですか？」

「あいつなら、私を通さず、私にバレないようにお前に接触する」
「確かに、おっしゃるとおりですね」

仕方ないから、封を開けて中に入っている手紙を取り出すと、差出人の名前こそ書かれていないものの、明日、指定の時間に、王宮内の一室に来るように、と丁寧に書かれている。

とてもシンプルな呼び出し状だ。問題があるとすれば、その筆跡が女性のものだということだ。誰だろう・・・全く心当たりがない。

過去の因縁とアンジェの婚約破棄騒動の結果、事実上の冷戦状態にある王妃様からの果たし状というわけでもないだろう。

「何もかもわからないことだらけなのですが・・・」

「必ず王宮に出頭するように、とのことだ。私にはそれしか言えん」

パパ上が遠い目をしている。きっと、父には根回し済みで、呼び出しの要旨は把握しているのだろう。後は僕次第ということか。ただ、こんな渋い顔をパパ上がしている理由がわからない。

考えても仕方ないか、何が出てくるかは分からないが、僕に選択肢はないのだろうか、行ってみる他ないか。最近の僕はこんな行動ばっかりだな・・・

というわけで、翌日、指示されたとおり、王宮内のとある一室の前に僕はやってきた。

何が出てきても、命を取られるものではないだろうから、後はケセラセラ、なるようになるさ。さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

扉をノックすると、声はしないものの、部屋の中から誰かが扉のほうに近付いてくる足音が聞こえてくる。

そして、扉が開いた隙間から、緑色の髪をツーサイドアップにした、見覚えのある女の子が顔を覗かせた。

「お久しぶりでーす、ギルb」

僕の名前が呼ばれ切る前に、強引に扉を閉めて、僕の視界からその子の姿を隠していた。これは思考ではない、脊髓反射による無意識の行動だったと思う。

どうして王族から呼び出しを喰らった先に、あの子がいるのだろうか。

そう、ジルクの妹で、オフリー討伐作戦の直前に、一瞬だけ、お見合いというか側室候補にねじ込まれそうになったジル子ことジュリア嬢が僕を迎えたのだ。

・・・あの子に関わるとロクなことにならない気がする。よし、帰るとするか。呼び出された部屋には行ったんだから、最低限のノルマは達成したはずだ。

「酷いですよ、ギルバート様。貴方の未来の側室候補に向かってえ」

扉の隙間から声が聞こえてくる。よく見ると、扉が閉まりきっていない。細腕ながら、なかなかの馬鹿力じゃないか。

「オフリー討伐作戦は無事に完了したし、君の大切なお兄ちゃんであるジルクが戦場でとても頑張ったから、その話はもうなくなっている。君は自由の身だ、安心するといい。だから僕はこれで失礼する！」

実際には、僕とジルクとブs・・・じゃなかった、ステファニーの3人で魔装から逃げ回つてるときに、あのクズ女と僕のほうに魔装を向かわせやがったりもしたが、まあ、それは置いておくか。

「待つてくさいよお、今日の私は顔つなぎなんですから、話だけでも聞いてもらわないと困るんです〜」

顔つなぎ？王族からの呼び出しで、ジル子ちゃんが繋ぐということか、この子と同じくらいの年齢の王族ということか。

ただ、仮にも令嬢であるジル子ちゃんが、つなぎをするなら男が出てくる可能性は低いだろうから、やはり第二王子が出てくるということにはならないはずだ。

ジル子ちゃんと同じ年くらい・・・まさか第一王女じゃないだろうな!?

あの王妃の娘と接触したなんて日には、レパルトの腹黒姫から何を言われるかわかったもんじゃないぞ！

しかも、王妃の娘なのに、陛下が溺愛してるからな！つまらないことで陛下の逆鱗に触れるような事態は避けたいんだが・・・

ついでに言えば、第一王女は、ラーシエルと国境を挟んで睨み合っているフレーザー侯爵家の跡取りの婚約者なはずだから、フレーザー家から変な恨みも買いたくない。

嫌な未来予想図ばかりが脳内を駆け巡る中、ジル子ちゃんの足をどかして扉を閉めようとしていると、中から声が聞こえてきた。

「あまり邪険になさらないでください。私、ギルバート様とお話できる機会を楽しみにしていたのですよ」

ん？この声・・・第一王女じゃないぞ？

予想外の展開に力が緩んだ結果、扉を開こうとしていたジル子ちゃんが、扉を全開にしてしまう。

ジル子ちゃんが勢い余って仰向けに転んでしまうのをよそに、僕の

視界に入ってきたのは、紺色のロングヘアーに、リボンのようなヘアバンドを付けている女子だ。

手足が長くてスレンダーなフォルムをしており、小顔で、背筋が伸びているため、実身長よりも背が高く見える気がする。

・・・今回、僕を呼び出したのはこの子だったのか・・・
直接話したことはほぼなかったはずだが、立場上、面識くらいはある。

この女子の名はユリシーズ。あの馬鹿王子と違い、王妃ではなく、陛下と側室の間に生まれた、馬鹿王子の腹違いの妹である王女様だ。

王女様は、ゆつくりと立ち上がって、目を輝かせながら僕との距離を詰めてくる。

何故かはわからないが、僕の中の何かが最大音量でアラート音を鳴らしている。

そして、スラリと伸びた手を僕の顎元に差し出して、口を開く。

「お父様がいつもお世話になっております。さっそくですが、ギルバート様。単刀直入に申しますが、私と共に串焼きの未来のために手を取ってもらえませんか？」

え？串焼き？この王女様、一体何を言っているんだ？状況がさっぱり理解できない。

いや、待て！そういうえば、噂で聞いたことがある。

このユリシーズ殿下、普段はおっとりしているのに、串焼きのこととなると、人格が豹変するとか、しないとか。

そして、そんな彼女のことを、一部界限では、こう呼んでいるらしい。

串焼きマスター、と。

悪役令嬢の兄に転生した僕が、一体全体なぜなにどうして、王女様から串焼きの未来について語り掛けられているのだろう。

予想外すぎる展開に、目の前がクラクラしてくる気がする。

これもきつと、あのマリエのせいだ。マリエのせいに違いない。

きつと、きつといつか、その化けの皮を剥いでやるからな、覚えてろおおおおお！

第47話 前世（ジャパン）ではそれをKATSU GEという

神殿との乱闘事件に一応の決着が付きつつも、僕の実家である公爵家の王宮における影響力は大きく低下したままである一方、敵対派閥であるフランプトン派の勢いは増すばかりという状況下で、

王宮に呼び出された僕を待っていたのは、オリジナルの攻略対象であるジルクの妹であるジュリア嬢、通称ジル子ちゃんと、陛下の側室が生んだ王女であるユリシーズ殿下だった。

そして、僕の顔の前に手を差し出しながら、串焼きの未来のために、その手を取るよう言われている。

この王族は一体何を言っているのだろうか。僕が、状況の理解に苦しむ一方で、王女殿下はニコニコしながら僕に微笑みを浴びせかけてきている。

僕の妹の元婚約者だった元王子が廃嫡された今、野心を隠さない第二王子と違って、この王女様が権力に意欲を持っているという話は聞いたことがない。

噂レベルでは、串焼きのこと以外には興味を示さないなどと言われて、串焼きマスターという仇名すらある。

いや、もしかしたら、串焼きというのは何かの隠語なのかもしれない。何せ相手は、側室腹とはいえ王族だ。

普通の貴族ですら、プリンを献上しろと言われて、そのまま前世のコンビニでも買えるような甘味を寄越せという意味に、素直に解釈する者はいないだろう。

王族が公爵家の跡取りを呼び出したのであれば、裏に意図があると考えてるのが自然だ。

まず、ここは、すつとぼけて出方を探りながら、確認していくのが無難だろうな。

「殿下のおっしやる串焼きというのは、もしかして市中の屋台等で売られている、主に肉類を鋭利な棒で刺し貫いて、味付けをしながら焼

き上げていく、市中の者達が好んでいる食べ物のことでしょうか」

「はい。その串焼きです」

その串焼きかよおおおお!! っっていうか、＼はい＼ じゃねえよ
おおおお!!

そもそも、なんで王族が串焼きの未来語ろうとしてるんだ!? しかも、なんで僕と語ろうとしてるんだよ!

即答しながら笑顔で首を横に傾けて可愛いアピールすんなよ、逆に不気味だよ!

「で、殿下が市中の食べ物に興味がおありという噂は本当だったようですね」

「あらゝ私のこと、少しは知っていただいているようですね」

礼を言われても、ちつとも嬉しい気分にならないよ! 最初からバツドコミニケーションがクライマックスだよ!! 笑顔の裏に何があるかわからなくて情緒が安定しねえ!!

ローズブレイド家の首輪令嬢とのお見合いとはまた違った意味で、どう会話していけばいいのかわからない。

こうなったら直接聞いてしまった方がまだダメージコントロールできるかもしれないな。

「ところで、殿下が私をお呼びになったのはどのような理由なのでしょうか」

「ギルバート様が、物事を早く進めたがるせっかちさんだという噂は本当だったようですね」

ワンフリーズ遅れで、言い方をミラーリングしてきただど!?

前世の社畜時代に受講させられたコミュニケーション研修では、胡散臭い講師が、ミラーリングには、相手を良い関係を築きたい意思を伝える効果があるとか言っていた気がする。

合理的に考えれば、公爵家と距離を縮めたいということなのだろうが、やはり目的は不明なままだ。

「ギルバート様は、嫌な予感がすると話をすぐに終わらそうとなさいます」

だが、そんな僕の内心の逡巡をよそに、ジル子ちゃんが口を挟んで

きた。ええい、逃げ道を塞ごうとするんじゃないよ！

「あらあら。私のこともお嫌いなのですか？」

おっとりした感じを出しつつも、悲しげな言い方が僕の心にかすかな罪悪感を生み出した。

年齢差を前世基準で考えれば、社会人になって何年も経つ人間が、中学生くらいの子を傷付けたようなものだ。

内心はどうあれ、何か害を加えてきたわけでもないのだから、前世由来の道徳というか倫理観が足枷になっている気がする。

というか、私のことも、つていうのは、私以外が誰を指すんだよ！レパルトの腹黒姫こと僕の宿敵ともいえるべき王妃様か、それともジル子ちゃんのことなのか。

さすが王族というべきなのか、一言一言を意味深に繰り返してきて、会話のイニシアティブを取ろうとしてきやがる。上手く流さないと、マズいことになりかねないね。

「大切な妹が深く傷付いた件のケジメがまだついていない状況下では、距離感も大切なのではないかと・・・」

「おーっとギルバート様が妹を盾にしつつ、話題を王家と実家の話にすり替えようとしているぞおー！」

・・・ジル子ちゃんが会話の実況を始めやがった。ちよつと王女様に不敬じゃないのか!?

そんな僕の内心のツツコミは届かず、ジル子ちゃんをスルーしてユリシーズ殿下の追撃が続く。

「確かにあの件はお兄様が大変ご迷惑をおかけしました。ご心痛、お察しします。ですが・・・それは王妃様の派閥がケジメを付けるべきものですので、こうしてお話することまで妨げられてしまうのでしょうか・・・」

この王女様、またしても悲しげな雰囲気醸し出して、距離を取らせまいとしてきやがる。

こういうところは、なかなか強かだな。自分は側室腹だから、アンジェの婚約解消騒動の話はスルーするつもりか。派閥の話がチラつく、今の公爵派閥の微妙な立ち位置まで考えたら、無碍にもし難く

なってくるぞ。

「おおつとユリシーズ様は、王家ではなく、話を派閥単位に落とし込んで追撃していくうう！これは、大胆な開き直りにも見えるが、さあ、ギルバート様の退路が狭まって来たぞお!!」

・・・またもジル子ちゃんの解説が入る。これではまるで、格闘技の試合の実況中継じゃないか。一体どこでこんなスキルを身に付けたんだ!?

「ちよつとジル子ちゃん、何がしたいのかわからないが、不敬になりかねないからやめなさい」

「ジュリアさんには私がお願いしたんですよ。ギルバート様とのお話しを少しでも面白いものになりたいと思ひまして」

王女様の指図かよおおお！面白いのはアンタ達だけで、僕は全然笑えないんだけど!!

「殿下がこんなにユーモアにあふれた方だったとは、存じておりませんでした」

「とてもお仕事熱心で、身分の高くない官吏の方々とも壁を作らず広くお付き合いされていたり、仕事で長く辺境に出向かれることも多かったですものね」

・・・おいおい、ちよつと待て。ずいぶんと僕の振る舞いに詳しくないか？

別に隠してたわけじゃないし、いろいろと噂されるような派手な振る舞いもしたかもしれないが、ほとんど接することもない相手のことを、そんなに知っているものだろうか。

「あの頃は、未来の王妃となって王国を動かすはずだった大切な妹を、兄として全力で支えるための基盤を作ろうと躍起になっておりましたので」

「そうだったとしても、私達王族と接していた、というお話しはほとんど聞こえてこなかったのはどうしてでしょう」

・・・言外に、王族と接するのを避けてたんじゃないかと問われているようだ。

そりゃそうだよ！いくら王族の親戚みたいな上級国民だからって、

メンタルは前世パンピーの社畜だよ！

ボロが出ないように、触らぬ何とやらに祟りなしという基本方針だった上に、辺境・国境出身の貴族連中の結婚の面倒を見てたら王妃様を怒らせちゃったんだ。

これ以上、見えない地雷を踏み抜くりスクなんて取るはずがない。おまけに、陛下と夜遊びするのは欠かさなかったから、必要な情報は入ってきていたし！

某国民的嫁姑戦争ドラマに出てくるイガグリ頭の俳優風に言うなら、王族と極力接しないようにするのは、しようがないじゃないかあ！ってやつだよ！

まあ、角が立たないように、恐れ多くて無理ですパターンで押し通すか。

「父や家が立派なだけで、私は単なるボンボン息子にすぎません。己の身の程を弁えていたとご理解いただけると助かります」

「さあ、ギルバート様、平静を装いつつも、押されているのを隠せなくなってきたあああ！自分だって王族の分家のような立ち位置なんだから、苦しい言い訳になっているぞおおお！」

ある意味すごいな、ジル子ちゃん。僕の苦しい心境を適切に解説しすぎていて、笑えてくるぞえ！

「なるほど。それでは身の程を弁えるためにも、私のお願ひも辞退なさるのでしようか」

「残念ながら、市中で普及している食べ物に深い見識がございませんので・・・それに、王族の方に進言するというのは責任が大きくてたじろいでしまいます」

一言で言えば、市中のことに詳しくないから無理です、ということだ。ここまで言えば諦めてくれるだろう。

言うべきことは言い切ったと思う僕だったが、相対するユリシーズ殿下の口角がほんのわずかであるが、上がったのが見えた。

笑った・・・？いや、見間違いだろうか・・・

「ふふ、ギルバート様。嘘はいけませんよ」

「・・・と、おっしやいますとっ？」

「父上とたびたび城を抜け出しては、良からぬ遊びを繰り返してきたギルバート様なら、市中のことはとてもよくご存じでしょう」

「おいしいiiiiiii!!!この王女様、とんつでもねえ切り返しをしてきやがったぞ!？」

未成年の王族にこんなことを吹き込んだ奴はこのどいつだ！

まさか未成年の王女様の口から、僕と陛下のY O A S O B I事情が語られるとは全く予想外だった。驚き過ぎて体に電流が走ったかのようなB i r i | B i r i感を味わった気分だよ！

「・・・で、殿下、それは一体・・・」

「とうとうギルバート様が言葉を失ったああああ！これまで好き放題に王都内外で暴れ回っていた公爵家の怪物に与えられていた祝福もとうとう失われたのか!？」

再びジル子ちゃんの実況が挟まり、僕の窮地を囁し立て続けている。

王女様の許可を得ているとはいえ、この子はマイクを持つとなんでこんなに生き生きするんだ！令嬢なんてやめてアイドルでもやった方がいいんじゃないか!？」

そして、心の中でだけツツコミが絶好調な僕だが、返しの言葉が浮かぶ前に、王女様がここから追い討ちをかけてきた。

「私も王族に生まれた身ですもの、お父様の果たすべき使命だって、頭では理解できます・・・できますけど・・・」

一気に悲劇のヒロインかのような口ぶりで、ユリシーズ殿下が父親であるこの国の国王による、市中での夜遊びを嘆き始める。

「・・・いやいや、使命とか役割とか、そんなしつかりとしたものじゃないです、あの陛下がやってることは。」

むしろ、貴女の父親は、血脈を残す役割という免罪符を片手に、好みの女性を見つけては口説いて種をまき散らしてるだけですから！股間の種マシンガンを使って、市中で乱射事件起こしまくってるだけですから！

「ですが・・・王族であると同時に、一人の子供としては寂しくもあるんですよ？誰彼かまわず愛をばらまく時間があるなら、娘としてもう

少し構っていたきたいと思うのはわがままでしょうか……」
やめてくれ！その正論は僕に効く！

……王族ならそんなもんだ、と思う人も貴族社会なら多いだろうけど、前世由来の価値観が残っている僕には、子供が親の愛情を求め姿を見ると、後ろめたくて仕方がないよ。

一緒になつて夜遊びを楽しんでいたことも事実だけど、親から十分な愛情を受けられない理由の何割かが、自分のせいだと言われると、さすがに良心が痛む。

まだ中学生くらいの年齢の女の子に、こんなことを言わせる、我が心の師である陛下の業は深いね。

「それなのに、執務は王妃様に押し付けて、空いた時間で市中を遊び回るお父様、いえ陛下の手助けをギルバート様はなさるのである……そんなギルバート様は、少しは私に罪滅ぼしをしてもいいと思いませんか？」

この王女様、最初から、この展開に持つて行くつもりだったのか。やってくれるじゃないか。

……とはいえ、王女様の中で、父の愛が得られないのは、父親の女遊びを幫助している僕のせいだ、と感じるのは、まあ無理からぬところだろう。

ホント、言われてみると罪の意識がどんどん大きくなってから困る。仕方がない、今回は僕の負けか。

「……私にできることであれば微力ながら力を尽くしましょう」

「落ちたああ！ギルバート様がとうとう落ちたぞおお！権力と親子の情を巧みに組み合わせたユリシーズ様が、歯向かうものは専属使用人だろうが、貴族の女性だろうが、伯爵だろうが躊躇なく焼き滅ぼしてきたギルバート様を屈服させた、これは歴史的瞬間だああああ！」

空耳だろうけど、ノックアウトを告げるゴングが聞こえるようだ。項垂れる僕の両手を、ガッツリと掴み、若干荒い鼻息をあげながらユリシーズ殿下が目を輝かす。

「まあ、ありがとうございます！ございます！これから串焼きの未来と一緒に切り開いてまいりますよう！」

「ただ・・・市中で遊び回っている人間としては、串焼きは既に十分なくらい国内に広がっていると思うのですが・・・」

現に、この世界では前世でもあったような、焼き鳥のようなものを提供する露店も、酒場のような店も存在している。

日本の会社が作った乙女ゲー世界だから、という理由なんだろうと深く考えないようにはしていたが、少なくとも市井で生きる多くの人達の中には当然あるものとして定着していると言っても過言ではない。

「では、どうすれば、人々が、より広く、より強く串焼きを求めるようになるでしょうか」

「素人考えですが、大衆向けであれば低価格化やバリエーションの豊富化でしょう。一方で、貴族をはじめ、金持ちは、串焼きイコール庶民の食べ物という認識ですから、それを覆すメニュー開発と言ったところですかね」

「さすが、お父様と一緒に、貴族社会も、市井の中も股にかけるギルバート様ですね」

微妙に嫌味を添えられた気もするが、僕の言ったことくらいは、相應の教育を受けて知識を持っている人間なら、少し考えれば出てくるはずだ。

さつき、僕を追い込んだように、この王女様は、ちよいちよい悪ふざけをしながらも、しつかりと落とし込むところを考えた上でシナリオどおりに話を進めているようだから、おそらくまだ続きがあるのだろう。

「それに、大衆向けに低価格化をするために流通量を増やしたり、低コストで出荷できる品種の開発が必要です。金持ち向けのメニュー開発にしたって、その費用やそれを広めるためのプロモーション・・・要はそれなりの小金が必要ですよ」

王族や公爵家レベルの経済規模だと小金というだけで、前世基準だったら当然ながら大金だ。

もちろん今の価格に至っている理由や既存の既得権もあるだろうから、そこを調整するためにも金がかかるだろう。

「・・・まあ、小金と言つても、予算化もしていない事柄ですので、公爵家から出すことは難しいのですが」

「ギルバート様なら難しくない金額だと思うのですが・・・」

「やっぱり僕に金を出させるつもりか！だが、そうはいかないぞ。」

さすがにいくら王女様の我が儘だとしても、当主ではない僕が動かせる公爵家の金なんてたかが知れている。

「領民達が汗水流して納めた金です。好き勝手に使うような真似はできかねます」

前世でも、会社のお偉いさんが、役所に陳情に行くのに同行したことがあった。内容はそのときによってさまざまだが、こっちの言い分のほうがタカリというか勝手なときもあった。

そんなときに、出てきた役人は、本心からそう思っているのかは知らないが、このように、国民が納めた税金だから、というフレーズを使つて、こちらからの要求を受け流していた。

まさか、こんな場面で、お偉いさんのカバン持ちをさせられた経験が役に立つとは思わなかったね。それなりに上手く切り返せただろう。

だが、ユリシーズ殿下の表情は、まだ笑顔のままだ。くそ！まだ、シナリオの範疇を出ていないのか。

「私は『ギルバート様』なら、と言つたのですよ」

「公爵家ではないと？」

「ふふ、聞きましたよ。最近、個人的な臨時収入があった、と」

個人的な臨時収入・・・まさか、バルトファルト男爵領での衝突を理由に、神殿から巻き上げた僕個人に対する賠償金か!?

だが、その額がどのくらいかなんて、知ってるのはパパ上やバーナード大臣くらいのはずだが・・・

王女様は笑みを浮かべたまま、懐から書状を取り出し、僕に手渡ししてくる。

なんだか最近、このパターンが多いな。はつきり言って嫌な予感しかしない。こういつた場面で、いいことが起こった試しがない。

書類に目を向けると、見覚えのある筆跡と、文末のサインが視界に

入ってきた。

『あぶく銭なら、怪しまれる前にさっさと吐き出してしまえby真面目で妥協を許さない王様』

ちいつくしよおおおおお!!!

やってくれたな！結局・！結局、ここまでの茶番、全部がああ陛下の差し金かあああああ!!!

それに、何が真面目で妥協を許さない、だよ！

真面目でもないし、妥協だらけじゃねえか、あのマダオ陛下め！

しかも、あぶく銭を吐き出せじやなくて、金があるとわかっているから金出せやっていうのは、カツアゲ以外の何物でもねえよ!!!

ちなみに、荒れ狂う僕の心中とは対照的に、ユリシーズ殿下は、相変わらずニコニコしながらこちらを見ている。

「ここまででは、陛下の書いたシナリオ通りでしたか？」

「はい♪ちょうど先日、お父様に串焼きのことをご相談したら、今回の筋書きを用意してくださいました」

「親の愛情が得られなかったというのは？」

「ギルバート様なら、こう言えば、きっと力になってくれるとお父様が」

い。・・・なんやかんやで、あ陛下は、娘には愛情を注いでいるらしい。

でも、それならあの馬鹿王子にもしつかり教育しておいてくれよ！

「あの金は、神殿への嫌がらせに使おうと思っていたんですけどねえ」
「あの子なら、ユリシーズ様への協力を、神殿のメンツを潰せるような形にするのはどうです？」

先程まで、リングアナウンサーとしての才能を發揮させて僕を煽っていたジル子ちゃんが会話に入ってきた。

「ほう、話を聞こうか」

「例えば、串焼きの材料になる肉の生産量を増やすなら、新しい設備とそれを作る工事が必要ですよ。工事には人手が必要になります」

「・・・そうか、工事の人手を、神殿が慈善事業で保護しているような貧民からも調達して、手に職と金を配って自立させてしまう、という

ことか」

「はい。工事の効率は下がるでしょうが、そこは王国かユリシーズ様と公爵家の慈善事業という名目でやれば、民の心が買えますよ」

神殿は、宗教団体という性質から、大衆に救い、救済の類を説いて信心を集めたがる。

だが、大衆は現金なもので、口先で綺麗ごとを言っているだけじゃそっぽを向かれるから、炊き出しや支援物資配付のような貧民救済活動にも手を出している。

そのような動きを見た大衆は、国家や領主ではない組織に対して、目には見えない権威を感じるようになる。

その権威の源泉となる貧民を、横から金の力で救済してしまうということか。まあ公爵家だけではなく、王家への支持も生み出してしまおうというのは、若干腑に落ちないところはあるけどね。

「くつくつく・・・面白い。神殿連中が、僕やアトリー家に対する賠償金の支払いで金欠になって、安易にバラマキができないうちに、その支持の基盤を僕にかつ攫われるわけか」

さすが、あの腹黒ジルクの妹ということはある。人が嫌がることを考えさせたら、並ぶ者は数少ないね。

「どうです？僕のこと、側室にする気になりました？」

「それはないから安心しなさい」

「チツ」

とはいえ、ジル子ちゃんが有能だということはわかったから、有望株がいたら紹介するくらいは考えてもいいかもね。

「それでは、方向性が決まったところで、串焼きの未来を語り合うといたしましょう」

「陛下には高くつきますよ、と伝えておいてください」

あぶく銭だったとはいえ、小さくない金額をカツアゲされたから、あんまり気分が乗らないんだけどなあ・・・

ん？カツアゲ・・・かつあげ・・・カツ揚げ！そうだ、前世の関西地方にあった、ソース二度漬け禁止の料理があったな！あれなら、肉以外に野菜とかも串にぶっ刺して、バリエーションが増やせるぞ。

「串を焼くのもいいのですが、バリエーションとして、串に刺した具材に衣を付けて、高温の油で揚げるってのはどうですか？」

「は……？」

あれ？ユリシーズ殿下の様子が急に変わったぞ。

辺りを見回すと、ジル子ちゃんが視線を背けながら、物音を立てずにこの場から距離を取り始めたのはなぜだ？

「この……益暗があああ!!」

「!?」

ユリシーズ殿下が急に大声を上げ、手元のテーブルを左手で殴りつけ、右手で僕の首元を掴むと、白目を？くかのような勢いで、睨みつけてきた。

「串は焼くからこそ串焼きなのです。それを、油で揚げる？衣で覆われて、舌で触れる素材の触感も大きく変わってしまいます。そんなものを串焼きマスターの私に食べさせるつもりですか？恥を知りなさい！」

「え……あ……す、すいませんでした……」

勢いに吞まれて背筋を伸ばして謝罪してしまった。

いや、そもそも串焼きマスターって何なのさ!?というか、人格が豹変したんだけど!?怖っ!!

「そこに座りなさい、ギルバート様。この私が本物の串焼きというものを教えて差し上げましょう。あと、ジュリアさん、そんなところに突っ立ってないで、私の調理道具を持ってきてくださるかしら？」

「は、はい〜!!」

ユリシーズ殿下に一喝されて、ジル子ちゃんが部屋の奥の方に走って行ってしまった。

まさか、ユリシーズ殿下が、ふんわりおっとりした雰囲気から、僕をビビらせるほどの阿修羅顔に豹変するとは思わなかった。

結局、その日はマイ調理道具を片手に、調理場を占拠して次々と作り出される串揚げを延々と食べさせられる羽目になったあげく、翌日は朝から胃もたれが酷くてほとんど固形物を食べられなくなってしまう。

くそ！やっぱりこの国の王族に関わるとロクなことがない！

第48話 フランプトン侯爵の憂鬱

その日、王宮内の会議室では、国の重臣、関係者らが集まっている。議題は、少し前に神殿が聖女と認定したマリエの親衛隊についてであった。

参加する面々が、神殿に毒づいているのだが、それには理由がある。「神殿の奴らめ。金がないと泣きついてきて運営費でもせがんでくるのかと思ったら、聖女親衛隊の予算まで王宮に出させるつもりか」「仕方ありますまい、欲をかいだ生臭神官どもが、怒らせてはならない男の逆鱗に触れたのですから」

「だからと言って、聖女にはユリウス殿下らが付いている。扱い方を間違うと、それはそれで厄介になるぞ」

王国の中枢にいる者達にとつて最も厄介な女、それが、王国の将来を担うはずだった王太子ユリウスその他有望な若者4人を短期間で誑かした魔性の女、マリエである。

そして、この度、そのマリエが、よりもよつて神殿から聖女と認定されてしまった。

さらに間の悪いことに、聖女が身に付けていた伝説の道具の所在を掴み、確保しようとした神殿勢力の一部が、

王国の中でも有数の武闘派レッドグレイブ公爵家と、中立派の大物アトリー家と衝突し、両家の猛烈な怒りを買ひ、莫大な額の賠償金を支払わされてしまった。

権威はあれども、金と力がない神殿は、王宮に泣きつき、金の無心をしてきたのであるが、その要求の中にあつたのが、聖女親衛隊の予算と人員であった。

派閥を問わず、貴族達の共通認識は、神殿の政治への介入防止だったのだが、問題は聖女親衛隊の隊長を誰にするか、という点である。そして、現状、王宮では、フランプトン侯爵の派閥が最大勢力となっている。

そのため、他の派閥の面々は、当日は、候補者リストのようなものが出てきた上で、“それっぽい”議論を経た後に、フランプトン派が

都合よく動かせて、かつ、神殿を牽制できる人物が選ばれるだろう、と考えていた。

だが、当日の会合の場で、最大派閥であるフランプトン派が聖女親衛隊の隊長候補として提示した人物は、同派閥とは関係がないものの、

直近の公国との戦闘で、その艦隊をほぼ単機で退けるといふ驚くべき功績をあげたりオン・フォウ・バルトファルト子爵であった。

フランプトン派が掲げた理由はおおむね2点で、まず、リオンが、マリエを囲うユリウス達を2度も決闘で叩きのめしたことから、両者の関係は悪いものと見込まれ、誑かされる可能性が高くないと想定される点、

次に、今回の聖女親衛隊長としての務めをもって、強力なロストアイテムを保有する資質の有無を判断する機会にしたい、という点である。

当然ながら、後者は、資質が無いと判断できれば、ロストアイテムを強制的に接収する、という見込みも含まれており、結論ありきの考えであることは明らかだった。

そこにレッドグレイブ公爵であるヴェインスが噛みつく。

「資質の有無の判断を誰がするかも、判断基準も有耶無耶のまま進めるのでは、茶番でしかないな。王国を、宝を横取りするハゲタカにするつもりか？」

「この場にいる多くの人間が、歴史に残るほどの速度で成り上がったバルトファルト子爵について不安に思っている。よからぬ野心など、ありはしないか、とな。それとも、公爵家で彼の強力なロストアイテムを独占するつもりか？お前の息子、娘とも、子爵と親しいようだが」

ヴェインスの娘、つまりアンジェリカが、婚約破棄騒動から連なる決闘騒動でリオンを代理人にしたことに加えて、公国との戦闘の際にも、捕虜になりかけたアンジェリカをリオンが救出したことから、

多くの人間が、双方の関係は近しいものだと考えるのは自然である。

また、ヴェインスの息子、つまりギルバートが、リオンからロストア

アイテムの鎧の譲渡を受けて、ともに空賊退治をしたり、ことあるごとに接触しているのであるから、こちらの関係の見え方も同様となる。

「・・・好きにしろ」

「これも王国のためだ、理解してくれて嬉しいよ、ヴィンス」

アンジェリカの婚約破棄騒動で力を落とした公爵家が、リオンとの接触を重ねるにつれて、力を回復させつつあると見えることは否定しがたく、これ以上ゴネたのでは、よからぬ野心を疑われかねないとヴィンスは判断した。

一方、ここまでの様子を眺めていた王宮の大臣であるバーナードは、フランプトン派とは元々距離を置いており、出来レースのような展開を面白くないものと感じていた。

そんな中で、ヴィンスの顔を見て、聖女親衛隊隊長の適任者として、一つの妙案が浮かぶ。

「確認しておきたいのだが、まず大事なものは神殿や聖女様に取り込まれないこと、という点でいいかな」

「神殿側に寝取られて、寝返られては元も子もないからな」

「その上で、強大な力を見せつけたバルトファルト子爵の資質を確認したい、ということでしょうか?」

「・・・何が言いたい?」

フランプトンは、ここまでの流れをわざとらしく繰り返すようなバーナードの発言に苛立ちを覚えていた。

「それなら、私としては、王国のために、ギルバート君を推したい」

「な、何!?!」

突然提示された名前に、フランプトンだけでなく、周囲の貴族達も驚き、会議室内がざわつき始める。

フランプトンがこの流れを潰させるために、派閥内の面々に目を向けるのだが、彼らも予想外の展開ゆえに、とつさに否定する理屈を紡ぎ出せずにいた。

(この役立たずどもめ!)

フランプトンは心の中で毒を吐きつつも、ここは最大派閥の長として、余裕のある振舞いをすべきであろうと判断し、面白がっているよ

うな表情を浮かべて口を開く。

「ずいぶんと大胆な意見だな、大臣。正直に言つて、驚いたよ」

バーナードも、楽しそうな口振りで、これに対応する。

「ギルバート君は、つい最近も、うちの文官達を巻き込んで神殿と一悶着を起こしたばかりだ」

「それについては、アトリー家に心から同情する」

「自分達のやらかしたことを棚に上げて、予算をねだってくる神殿を牽制するのには、うってつけの人選だろう。それに、彼も、バルトファルト子爵と同型の、強力なロストアイテムを保有して、オフリー討伐作戦を成し遂げている」

「だが、公爵家出身ということでも名門の男好きな聖女様の餌食になるんじゃないか？」

「報告によると、彼が神殿に激怒したきっかけの1つは、その聖女就任の報を聞いたことだそうだ」

「それより前に、神官どもが舐めた振舞いをしていたとも聞いているぞ」

「ついでに言えば、ギルバート君は陛下の夜遊び仲間だ。良くも悪くも、色恋の類については、場慣れしている。まだ学生の若者達とは違つてね」

（ええい！しつこく食い下がつてきおつて！そもそも、お前の娘の元婚約者だつて、そこそこ遊んでいたと聞いているぞ）

ここまでで、リオンよりも、ギルバートのほうが、神殿を牽制でき、誑かされる危険も小さいかのように論破されてしまったフランプトンだが、まだ切り返すカードは尽きていない。

「言いたいこともわからなくはないが、その意見だと、公爵家の意見を聞かざるを得ないな」

そう言つて、フランプトンは、会話のボールを自分からそらす。いきなり自分の息子の名前を挙げられたヴィンスは、腕を組みながら、バーナードを睨んでいる。

「当家にあの女の面倒を見ると言いたいのか？」

（よし！ちようどいい機会だ、ここで両派閥の関係が悪化すれば儲け

ものだ)

「侯爵が王国のため、と言うものですから。確率の問題ですよ。それに、私のところにも、彼の人となりや、好んで口説く女性のタイプ等の情報はそれなりに入ってきているのでね。バルトフアルト子爵よりも適任ではないかと」

「実の息子の女性関係を、このような場で大っぴらに話されるのは、いい気分はしないな」

「お家騒動や貴族の家どうしの問題にならないように、絶妙にうまく遊べる能力があると褒めているつもりなんですけどね。侯爵も、ギルバート君について調べているみたいだけど、面白そうな話はあったかな?」

(さすがに王宮内で嗅ぎまわると、大物の宮廷貴族の耳には入ってしまうな)

「そんなものがあつたら、とつくにどこかで使っているよ、大臣」

「その気持ち、彼に振り回された僕にはよくわかるよ。遊ぶ相手が小物ばかりで、遊び方が割と綺麗だからスキャンダラスに見えにくいんだ」

ここでバーナードは一つ嘘をついている。

非常に小さいネタだが、ギルバートがバーナードの下で役人をやっていた頃に、騎士家出身だと騙されて子爵家の令嬢に手を出しそうになったところを、アトリー家の文官達が手を回して未然に防いだことがある。

だが、クラリスが婚約破棄のショックで亜人を困い出した後、最後の一線を超える直前で、それを防ぐためにギルバートを暴れさせて、貞操の危機を救った際に、アトリー家の家臣達は、このネタを使ってしまうている。

要するに取引材料としては使用済みという状態だ。

一方、息子の夜遊び事情を会議の場で堂々と議論されて、父親としてはなんともいたたまれない気持ちになっているヴェインスであったが、この流れを断ち切ろうと、低い声でバーナードに話しかける。

「大臣は、何かあつたら当家に責任を取らせるつもりで、言っている」と

理解していいのか？」

それを聞いたバーナードは、口元をニヤリとさせる。

ヴェインスの口から言わせたかった言葉を、まんまと引き出せたからだ。心中の言葉を言うのであれば、待つてました、とでも表現することになるであろう。

「ギルバート君と公爵家なら、有事の際の始末の付け方まで含めて、うまく〃やれると思うもので」

バーナードの表情と、台詞を聞いて、ヴェインスはその狙いが何なのかについて、勘づくことができた。

要するに、ギルバートがうまくそれっぽい理屈を用意した上で聖女であるマリエを始末し、それを公爵家の権力であれば、今は弱体化しつつあるとはいえ、それなりに責任の所在を有耶無耶にしてしまえるだろうと、バーナードが言っているのだと。

最初に、自分の息子を聖女親衛隊の隊長に推すと言い出したときに、ヴェインスは怒りに震えたが、よく考えてみれば、アトリー家もマリエのせいで娘の婚約を台無しにされている。

良い機会があれば、その元凶を消したいと思うのは、自然な発想だろう。

「なるほど、ずいぶんと愚息も買い被られたものと思ったが、話は理解した。そういうことなら、この話に乗るのも吝かではないな。せつかくの機会だ、当家の跡取りが、次期公爵として色々な意味で相応しいかを確認してもらおうのも悪くない」

（こ、こいつら、この機会に、因縁のある聖女を抹殺したまま開き直すつもりか！）

レッドグレイブ、アトリー両家の思惑を察して、フランプトンは慌てた。

王宮内における政治的なパワーを最も多く有しているのがフランプトン派閥だったとしても、国王や力のある王族の権威までも持っているわけではない。

予算付けや人員配置などの面から、聖女親衛隊の話を上手く転がして、神殿に恩を売り、宗教組織の力も取り込もうとしていたフランプ

トンにとっては、今の流れは都合が悪い。

リオンであれば、忌々しいくらいの強大な力を持っているものの、政治的な影響力は小さく、王宮の最大派閥の力を持つてすれば、聖女親衛隊の隊長として、うまく利用できるだろう。

だが、それがギルバートになると、実家や国王とのつながりを駆使し、その目的を達成しようとするだろうから、うまく操るところか、神殿との関係まで決定的にご破算となりかねない。

「ヴェインスの息子だと、神殿側から難色を示されるのではないか」

「その神殿を牽制するのが役割だったはずだぞ、マルコム」

「それに、子爵の野心を疑うなら、ギルバート君だってなかなかのものだと思うよ。学園在学中から国境近辺出身の、結婚難民状態だった男子達に結婚相手をあてがったり、

監査に乗じて国境の家々に巢食っていた悪妻を駆除してきた彼を密かに慕う領主は多い。彼らを上手く使えば外国の勢力を招き入れるのだって難しくない。

侯爵の理屈で言えば、ギルバート君こそ野心がないかを確認したほうがいいんじゃないかな？」

形勢が逆転したとばかりに、ヴェインスとバーナードが畳みかける。

対するフランプトンであるが、配下の貴族達は、リオンを貶めることを見越して親衛隊の隊長に据えるための理屈を、まんまと利用されたことで、応戦できずにいるため、舌戦に参加できるのは自分だけであることに気付く。

（おのれえええ！数で勝るのはこちらとはいえ、露骨に数で押し切ったのでは、後々に響きかねん！）

ここで、何も反論せずに押し切ったとした場合、後日、リオンに難癖をつけて追い詰めきれなかった一方で、ギルバートが何か大問題を起こしたときには、

当然ながらギルバートを軽視してリオンを聖女親衛隊の隊長にゴリ推しした責任がフランプトンには発生する。

（ヴェインスの息子め、存在するだけで迷惑なやつだ。オフリーにして、神殿にしても、要所要所で邪魔な活躍をしおって……ん、活躍

?)

心の中で呪詛の言葉を連ねていたフランプトンの脳裏に、一つの可能性が浮かんだ。

現在、レットドグレイブとアトリーがギルバートを聖女親衛隊の隊長に推すのは、見る角度によつては、色々な面で将来の公爵として不適合と見られる余地があるからだ。

逆に言えば、現時点で、公爵家の跡取りとして相応しいとなれば、資質を確認する必要はなく、原案どおりリオンを選ばばいいということになる。

(私があやつを肯定せねばならんのか！よりもよつて、バルトファルト以上に目障りなヴィンスの息子を!!いや、だがしかし、バルトファルトを陥れるためには・・・クソ！)

政治的な影響力の大きさは、社会的な攻撃力の強さであり、防御力の強さでもある。

急速に成り上がったとはいえ、リオンの影響力は大きくはない。そして、そのリオンの不手際や不祥事が、彼を取り込もうとしている公爵家やギルバートにとってのダメージとなる。

フランプトンの本懐は自分の権力を確実なものとするところにある。

そのためには、レットドグレイブ家の影響力を完全に排除することが必要になる。

だが、当時王太子であったユリウスとの婚約解消を経て弱体化したとはいえ、レットドグレイブ家の政治的な影響力は目障りな程度には残っている。

そのため、いきなり馬に乗る将を射ることはできないのだ。だとしたら、地道にその力を削いでいく他ない。そのための一丁目一番地がリオンを陥れることだ、というのがフランプトンの理屈である。

(まるで踏み絵を踏まされたようで気分が悪い！だが・・・ヴィンス、今回は痛み分けに終わるだろうが、この次はそうはいかんぞ)

「ヴィンス、お前の息子が、空賊とつながっていた逆賊オフリーを、アトリー家等の他派閥とも連携して、殲滅した手腕は見事だ。これを見ても、一軍を率いる将の資質がないとは言えぬ。それに、陛下とそれ

だけ親密なら、逆にあの陛下を出し抜くこともないだろう」

「辺境出身の男子達に結婚相手をあてがって、勝手の利く駒を揃えたこともか?」

（貴様がその話題を振るのか!そのせいで、王妃の逆鱗に触れたのは、その馬鹿息子だろうが!!）

「・・・学生の頃から、寄子とは別の勢力を自分で作る手腕がある証拠だろう」

「僕ら宮廷貴族にとっては、国境の貴族達と結集されるだけでも脅威なんだけど、彼らに対する影響力があってもいいのかい?」

「影響力といっても、貧乏な子爵、男爵をいくらか集めたくらいで、王国が大きく揺らぐことにはならん。それになら大臣、ここまで色々と言ってくれたが、お前の方はバルトファルトに隊長になられては都合が悪いんじゃないのか?」

フランプトンの怒りは、徐々にギルバートやヴィンスだけでなく、自らの口でギルバートが有能かのように言わざるを得ない状況を作ったバーナードにも向き始めていた。

中立派をいたずらに刺激するつもりはなかったが、ここまで自分のプライドに関わるどころまで踏み込まれたならば話は別だ。

「どういうことかな?」

「お前の娘がバルトファルトに懸想しているという噂を聞いたぞ。まさか、ユリウス殿下の乳兄弟に続いて、バルトファルトまで聖女に寝取られて娘が傷付くのを避けようとしてるのではあるまいな」

「・・・根拠のない誹謗中傷は止めてほしいな」

「人の内心など具現化できるわけがなからう」

クラリスのことについては、バーナードにとっても突っつかれたいはなかったことのように、反論は出てこない。

ヴィンスは、フランプトンに、口にしたくもなかったであろう息子への褒め言葉を言わせた、別の言い方をすれば、相応に恥をかかせたことで、留飲を下げたようで、ニヤついたまま沈黙を保っている。

多数派の力でリオンを聖女親衛隊の隊長にすることを妨げられなかったとしても、敵対派閥のトップであるフランプトンのプライドに

傷をつけることはできたし、

そのトップの口から、これまでのギルバートの行動が王国にとって脅威ではないという言質まで取れたのだから、成果としては上々なであろう。

メンタルをごっそりと削られたフランプトンは、怒りに震える自分を抑えるかのように大きく息を吸ってから、会議室内の貴族達を見渡して、口を開く。

「議論も出尽くしたようなので、リオン・フォウ・バルトファルト子爵を、聖女親衛隊の隊長に任命することとする。以上だ」

(これ以上、この場においても気分が悪くなるだけだな。だが・・・あの小僧は必ず地獄に叩き落してやる!!)

会議の結果に、少なからぬ人間が不満を漏らしたり、感想を言い合っているところには目もくれずに、派閥の配下の貴族達が声をかけてくるのも無視して、フランプトンは部屋を後にした。

「・・・ということがあってだな」

「父上も大臣も、重臣が集まった会議で僕を肴に盛り上がるとかやめていただきたいんですが」

「そう言うな。いやあ、マルコムをやつが、あんなにお前のことを買ってくれているとは思わなかったな。化粧までして顔色の悪さを隠そうとしていたのに、最後は疲れ果てたのか真っ青な顔をしていたからな」

「本当に買っているわけではないでしょうに」

王宮から父上が帰ってくると、僕は、すぐに屋敷内の父上の執務室に呼ばれて、会議の結果を聞かされていた。

父上の口振りからして、なかなかに愉快的な会議だったのだろう。

ネタにされたことは気分が悪いし、聖女親衛隊などというものを作ることに、それを王宮の予算で結成することも面白くないのだが、神殿が王宮に金を無心したということで大きくメンツを傷付けられたということであれば、悪い気もしない。

聖女になったのが、二度も僕の野望を打ち砕いたマリエ・・・僕は別の転生者、つまり、この世界のイレギュラーでさえなければ、良かったのだが。

しかも、タチが悪いことに、その親衛隊のトップになるのが、DL Cの攻略対象とおぼしきリオン君、オリヴィアさんとくつつくはずだった、強力なロストアイテムの保有者なのだ。

「バルトファルト子爵や彼を取り込もうとしていたお前には悪いが、公爵家としてはマルコムをやつにあそこまで言わせただけで成果は上々だ」

リオン君が、この乙女ゲー世界の中においては、馬鹿王子やジルクなどの攻略対象と同じくらい的重要人物であろうことを知る由もない父上が、公爵家の利益確保を図ったことは非難のしようがない。

これまで、アンジェを2度も助けてくれたとはいえ、リオン君一人切ることで、大きな利益を得られるのであれば、公爵の立場からすれば、むしろ合理的というほかないだろう。

父はリオン君をいったんは切らざるを得ず、大臣はリオン君をマリエから遠ざけることに失敗し、フランプトンはプライドが傷付いた。

3者それぞれ痛み分けということで、当面の政治的な妥協に至ったということになる。

だとすれば、ここから先の場面で動くのは僕の役割だろう。

婚約破棄だけでなく、聖女が誰になるかまで、もはやゲームのシナリオは完全に崩壊しているか、これが僕の知らないDL C版のシナリオなのかはわからない。

しかし、神殿側に僕と同じくイレギュラーであるマリエがいるんだ、同じくイレギュラーである僕が動いたって文句を言われる筋合いはない。

「リオン君にはどう説明するのですか？」

「親衛隊の件は、これまでの付き合いもあるから当家から伝えるべきだと思うが、明日にでもアンジェを呼び出して、伝えさせようと思う」

「・・・それであれば僕が学園まで行きましょう。侯爵や他の面々が足を引つ張ろうとしているということ伝えるべきでしょうし」

次回予告

リオンに聖女親衛隊の隊長への就任が内定したことを伝えるために、あのケモナー学園にやってきた僕は、学園の生徒達が、一人の女子生徒に嫌がらせをしているのを目撃する。

そして、僕は、その場に現れた宿敵との再会に心を震わせることになる。

さあ、レッドファイトの始まりだああああああ
!!!!!!

第49話 強襲 聖女マリエ

今日の僕はまたしても、我が母校であるケモナー学園にやってきている。目的は、リオン君と接触して、聖女親衛隊の隊長に任命されたことを伝えるためだ。

そんなケモナー学園では、僕が勝手に呼び名にしているとおり、相変わらず、女子生徒とケモナーな巫人の専属使用人が我が物顔で闊歩し、居心地悪そうな顔をした男子生徒達がちらほら見え隠れする。

僕が在学中はもう少し女子生徒が居心地悪そうにしていた気がするのだが、すっかり元通りになってしまった。この景色はいつまで続くのだろうか。

ちなみに、学園までは屋敷から馬車で来ている。

一瞬だけ、非常識極まりない自覚はあるが、アロガンツブロスで乗り付けたら面白そうだと思ったりもしたのだが、現在、王都にアロガンツブロスはいない。

父上からの指示で、ブ罗斯は、バルトファルト領にリオン君が新設した工場でメンテナンス中になっている。

オフリー討伐戦の損傷を誤魔化しながら使うのではなく、来るべき戦いに向けてコンデイションを整えさせようという意味なのだろう。

それは、言い換えれば、本格的な戦いが、遠からぬうちに再び発生すると父上が考えているということだ。

そんなわけで、リオン君を探して学園内を徒歩で歩き回っていると、少し先に何やら人だかりができています。

よく見てみると、ベンチに座った女子生徒を大勢の生徒が一定の距離を置いて取り囲んでいる。

しかも、何人かの生徒が、座っている女子生徒に向かって石を投げただと!?

身分の話がなかったら、いじめを通り越して刑事事件だぞ。前世由来の価値観がプレインストールされている僕としては、そんな光景はドン引きだ。

さすがに見逃すのは気分が悪いな。ちよいとペるか釘でも刺して

おくか、と思い、その場に近付いていくのだが、嫌がらせを受けている女子生徒の顔を見た瞬間、取り囲んでいる連中を止めるのは止めることにした。

嫌がらせを受けていた青い色の髪をしている女子生徒は、オフリー家のブs・・・じゃなかったステファニーの関係者としてリストアップされていた人物の1人だったからだ。

しかも、調査の結果判明したのが、この女が、ステファニーの指示を受けて、リオン君やオリヴィアさんを空賊討伐に誘い出して、始末させようとした張本人だということだ。

名前はよく覚えていないが、たしか面倒臭そうなヒーラーみたいな名前だった気がする。

結局、ステファニーの目論見は、圧倒的な武力を持つリオン君にあっさりと阻止されたのだが、オフリー討伐後の処理でこの女の処遇は一波乱あったと聞いている。

彼女の父親は、ステファニーの企みに何ら関与しておらず、家を潰すわけにもいかなかったため、この女を学園から追放してオワオワリ、ということになるはずであった。

しかし、ここに、空賊討伐に同行していた息子を巻き込まれたことに強い不快感を示したセバーク家とフィールド家の取り巻きとか子分の家々が口を出した。

要は、両家のような大物貴族の子分の家が、親分を忖度した結果、落とし前を付けさせると口を出したらしい。

司法当局も、伯爵家や辺境伯家の関係者から突き上げられては配慮せざるを得ず、

準男爵家の小娘一人が見せしめにどうなろうが知ったことではない、ということもあり、女子生徒は学園を去ることを許されなかったとのことだ。

ちなみに、僕はその辺りが議論された当時、殲滅したオフリー領の暫定的な事後処理や、公国との戦闘の際に裏切った寄子への制裁をどうするかで忙しく、結果だけ後で知らされたに過ぎない。

さて、どうしたものかと考えるが、まず、あの女子生徒を助けるつ

もりは欠片もない。

ステファニーやその女子生徒のせいで、何も悪いことはしていないオリヴィアさんは、ただ平民だというだけで部屋を刃牙ハウスのように荒らされる等の苛烈な嫌がらせを受けて、心が折れる寸前だった。寄親の娘であるステファニーの命令だったとしても、やらかしたことは、嫌がらせだけでなく、空賊を手引きした行為は、未遂とはいえ、殺人の手助けに他ならない。

ここまででも、僕が手を差し伸べない理由としては十分だろう。

それに、オリヴィアさんが主人公様であることを差し置いても、相談に乗ったりしたこともあるので、人並に情というものが湧いていることは否定しがたい。

下心はもちろんないし、本来は聖女になるはずだったということも別にしたって、公国の艦隊の一斉砲撃を一人で防ぐほどの強大な魔力を手元に置きたい。

リオン君のつがいにして、二人とも将来的には僕の下で囲いたいという考えは、マリエが聖女になったとしても変わらない。

だから、オリヴィアさんを、リオン君を陥れようとした時点で、この女がやったことは、僕の中のボーダーを超えている。

わざわざ自らの手を汚してまで消そうとは思わないが、周りの奴らを煽って焚き付けるくらいしてやるか、というのが正直な心の内だろう。

女子生徒を囲う連中のほうに足を運んで、嫌がらせに夢中な彼らの後ろから声をかける。

「やあ、面白いことをしてるじゃないか」

振り向いた生徒達は、男女問わず慌て始めて、あたりが一斉にざわつき始めた。

「こ、公爵家の!?!」

「また学園に来たのか」

「そりゃバルトファルトの黒幕って噂だからだろ」

「赤いt・・・」

「馬鹿！それ以上言うな！オフリーみたいに消されるぞ」

「でも、もう派閥の力は弱体化したって……」

「喧嘩を売ってきた神殿の部隊を壊滅させて、神殿本部に殴り込みかけて金品を根こそぎ奪っていく家のどこが弱いんだよ！」

「亜人連れてる奴はさっさと下がらせろよ！また血の雨が降るぞ」

口々に僕に怯える生徒達の様子を見て、少しだけ悲しい気分になる。

いや、身から出た錆なのかもしれないけど、学生達から見たら僕は破壊の化身か何かなのだろうか。

舐められてるよりはずっとマシなんだろうし、アトリーとかローズブレイドとか、あとジルクとかは、僕と普通に話すけど、少し複雑な心境だ。

ひとまず気を取り直して、先ほど石を投げた男子生徒の正面で立ち止まる。

「おいおい、君は何をやっているんだい？」

「あ、あの女は空賊と繋がってた……」

僕に話しかけられた男子生徒は、震えながら、懸命に、その理由を口にする。

「気持ちわかるが、司法判断で有罪になっていない相手に石を投げたら、君が犯罪者扱いされてしまうかもしれないよ？」

「そうですね……ここ、公爵家はそれでよろしいのですか？」

どうやら、男子生徒は、僕が嫌がらせを止めようとしていると思っているようだ。これはいけない。勘違いは是正しないと。

「君も貴族なんだ、やるならうまくやらないと、ね？」

「うまく？」

僕はSR級の顔面偏差値で笑顔を浮かべご機嫌な表情を浮かべながら、右の掌の上にファイヤーボールを作り出す。

「そう、上手くやるんだ。例えば、公国との戦闘で自身の研鑽が必要だと感じた君達は、それを機に自分を鍛えようとしていた、もちろん王国を守るために、だ。そして、その一環で魔法の訓練をしているときに、高い向上心を持った君は、より強力な魔法を身に付けようとしている」

架空の話であり、真実としてでっち上げるシチュエーションを解説しながら、僕は魔力を集めて、ファイヤーボールをさらに巨大化させた。

炎は大きく燃え上がり、大量の火の粉が飛び散って、熱量の大きさを物語っている。

そして、その勢いに吞まれた男子生徒は、無言で首を縦に振っている。

「その魔法が運悪く、明後日の方向に行ってしまった。さあ大変だ。でも・・・強力な魔法が着弾したところには、燃え尽きたナニカがあるだけだ。何かはわからない。実にありがちな話じゃないかな？」

そこまでの話を聞いた男子生徒の顔面は真っ青になり、足元が震えている。

周りの生徒達も口々に恐怖を口にしてている。

「おい、聞いたか!」

「なんて恐ろしい」

「当たり前だ! 王国の歩く治外法権だぞ」

「なんで、この場ではつとそんな発想が浮かんでるのよ!」

「そりやそうだろ、あのバルトファルトの黒幕だろ?」

「ヤバさのレベルはオフリー以上じゃないのか!」

いくらなんでも、オフリーと同じような扱いをされると、傷付くじゃないか。

まあいいか。気を取り直して、視線をベンチに座っている青い髪の女子生徒に向けると、顔面や衣服が砂や泥で汚れている。

それを見た正直な感想は、自業自得だな、というものだった。報い、と言ってもいい。

そして、先ほどの男子生徒と同じように、全身を震わせ、目に涙を浮かべながら僕と、掌に浮かべて巨大な火球を見ている。

おやおや、手元にあるファイヤーボールの熱が辺りにも伝わっているだろうに、寒いのだろうか。それとも、震えを使って、チタタプ、チタタプと言いなながら料理でもするつもりなのだろうか。

少なくとも、さっきまでの話を聞いていれば、僕自身がこの火球を

ぶつけるつもりがないことはわかるだろうに。

とは言え、リオン君やオリヴィアさんは、もはや僕の周囲の人間だ。そこに手出しをしたのだから、脅しの一言を告げるくらいしてもバチは当たらない。

「気の毒とは思いますが同情はしない。リオン君達は、僕が面倒を見ている存在だ。君はそこに手を出した。後は、わかるだろうか？」

声のトーンを低くして、伝えてみたところ、口元を震わせながら女子生徒が反論してきた。

「どうすれば良かったんですか・・・しょうがなかった・・・私だってあの女に耐えてきたのに・・・」

「君が、リオン君やオリヴィアさんを傷付けた事実そのものが存在しない、ということにならない限り、僕の結論は変わらないね」

「・・・っ！」

目元に大粒の涙を浮かべ、おそらく出てきそうになった反論を、下唇を強く噛んで飲み込んだまま、女子生徒は僕を睨みつけている。

大方、伯爵家に逆らえなかったとか、どこかにチクつても報復されとかの言い訳を出したのだから、リオン君達の事実上の庇護者であるつもり僕にとって重要なのは、この女子生徒の行動で起こった結果だ。

「自分の罪と向き合おうんだね」

この場でオリヴィアさんへの罪の意識でも語ってくれば、僕の心中にわずかな変化くらいあったかもしれないが、出てきたのは、しようがない、という、○なり君のようなセリフだ。

これなら、後ろ髪を引かれることもなく周りからリンチされているのを放置できる。

手元のファイヤーボールをもっと大きくして、脅してから去るか、と思ったそのときだった。

「何・・・してんのよおおお!!」

背後から、女性の声とこちらに走って近付いてくる足音が聞こえた。

振り向くと、小柄な女子生徒が、走ってきた勢いでジャンプしながら

ら体を捻り、僕の顔面目掛けて回し蹴りを叩き込もうとしている。

しかも、接近速度が思っていたより早く、このまま手元のファイヤーボールで迎撃するのも間に合いそうにない。

仕方なく迎撃よりも回避を優先し、とつさに上半身を反らすと、女子生徒の爪先は僕の鼻の数センチ先を通り過ぎたのだが、僕自身がフランスを崩し、手元にあつたファイヤーボールのコントロールを失つてしまった。

魔力が集まって形成されていた火球は、少しずつ小さくなりながらも、地面に落ちるまでに消えることはなく、地表に接したところで爆発を起こして、周囲には爆発による煙が広がった。

周囲を覆う煙の向こう側から、何人もの悲鳴が聞こえてくるのだが、残念ながら僕の意識を向けるには至っていない。

なぜなら、僕の目の前に、背筋を伸ばして両腕を組み、足を肩幅に広げ、こちらを睨みつける一人の小柄な女子生徒がいたからだ。

まるでガンバ○ターのような仁王立ちをしている女子生徒。見覚えがある、どころじやない。ある意味で会いたくなく、別の意味ではとても会いたかった。

自分の感情が大きく揺れ動いているのがわかる。

自分でもわかっていた、いずれ再び会うことになるのだろうか。

「ふははははは！久しぶりだなあ、聖女様ああ!!」

「なんでイベントでもないのに、アンタが学園にいんのよ!」

もはや言うまでもない。

僕を、僕だとわかってフルスロットルのパワーで蹴りを入れようとしてくる小柄な女子生徒なんて、この世界には一人しかいない。

一度ならず、二度までも僕の計画を、木っ端微塵に打ち砕いた女―マリエ・フォウ・ラーファン。そして、こいつは、僕以外に、この世界に紛れ込んだもう一人の転生者だ。

「いきなり人に向かって蹴りを入れるのが、神殿の聖女の役割なのかな?」

「あの女の子を助けようとしたなら正当防衛ね」

「あのファイヤーボールは脅しだ。そこら辺にいた奴らに、貴族とし

てうまくやれ、と伝える工程の一環だね。だから、お前のやったことは、誤想防衛というやつだ」

「消すつもりはあるじゃないの!」

「元々敵対派閥の関係者だった人間が、僕の側の人間に手を出したんだ。誰かが消してくれるなら、手間が省けて、ラッキーくらいにしか思わないさ」

「じゃあ、この子に何を言ったのよ!? 震えてるじゃない!」

「ざまあ、主人公様を傷付けた自分の罪と向き合えと言ったくらいだね」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。アンタがどれだけの人を傷付けてきたと思ってるのよ」

「言ってることが、まるで本物の聖女様だなあ、5股婚約破棄誘発女。少なくとも君より質の悪い傷付け方は、していないよ」

「実家の権力を振りかざして好き放題暴れてるアンタがそれを言うって、何の冗談? 笑えないんだけど」

「おあいにく様。僕は正義名分を確保して、許される状況を確認してから権力を振るう主義でね。適正手続って言葉は知ってるかい? 権力は用法・用量を守って正しく使うものさ」

前世のお薬のCMのようなフレーズを使って煽ってみる。同じ前世持ちのこいつには意味がわかるだろう。

それにしても、お互いに相手を罵る言葉が溢れるように出てくる。自分でも不思議なくらいだ。ボタンを押すとお茶が出てくる給茶機のようなだね。

「ホント、いい性格してるわね。そうやって人を罵って楽しいかしら?」

「少なくとも君を罵る言葉は、息を吐くように湧き出てくるよ」

「ここまで言い合ったところで、お互いが口を閉じて睨み合いが始まった。」

よし、第一ラウンドは制したようだ。相手の外側は学生だが、中身は違う。

以前、こいつの言っていた話が正しいのであれば、この女の中身は、

男の金と生き血と欲望を啜る百戦錬磨の夜の蝶だ。

今世でも、若いとはいえ、それなりに実家で教育を受けてきたはずの男5人を半年足らずで誑し込んだ、ある意味で輝かしい実績の持ち主だ。

しかも、魔力により強化した膂力を駆使した戦闘力まで高いと来たものだ。

前世、今世とも境遇が不遇なようだが、この女は、少なくとも今世では、知恵と腕力を駆使して逆境を跳ねのけて今まで生き延び、とうとう聖女などという地位まで手に入れた豪傑だ。

相手にとつて一切の不足はない。

そんな女が、どうして学園内の陰湿な嫌がらせ現場に足を運んだのか。

この女は、顔面こそ利口には見えないが、腐つてもお水の世界でトップを取った女だ。ドロドロした女同士の暗闘の覇者と言っても過言ではあるまい。

そんな女であれば、自分がどうみられるのか、つまり自分の見せ方の演出くらい朝飯前だろう。

嫌がらせを受けていた女子生徒は、ステファニーの手先だった人間として見せしめとなっていた。

僕は途中から煽っていただけだが、見方によっては、リオン君の黒幕と噂される僕が、率先して嫌がらせをしていたと認識するやつもあるかもしれない。

なるほど、僕を悪役に仕立て上げて、慈悲深い正義の聖女様ムーブをかますつもりだろう。

それならば、こちらも、マリエの行動が計算の上で行われていることを示していくまでだ。

「5人や神殿に続いて、今度は一見すると弱者面した反逆者を助ける慈悲深さのアピールでもするつもりかな？」

「この子だって、やりたくてやったわけじゃないでしょー！」

「さすが5人の男を股で囲う女だけのことはある。自分の男2人も含めて畏に嵌めた奴まで助ける、みたいな懐の広さ・・・いや、股の広

さを見せれば、雨後の筍のごとく湧いてきた頭の弱い取り巻きくらいは騙せると判断した、というところか」

ニヤリと嫌味な笑みを浮かべてやったら、間髪入れずにマリエは平手打ちをしてくるが、そんな行動は読めている。

右の手刀でマリエの手首を払い、魔力を込めた左の拳をマリエの顔面めがけて打ち込もうとするが、マリエのほうも、同じく魔力を込めた拳を僕に向けていた。

二人の拳がぶつかり合い、拳に込めた魔力がぶつかり合って、稲光が周囲に拡散するとともに、衝撃波が円状に周囲に広がると、あたりを覆っていた煙が吹き飛ぶと、学園の生徒達の目に、僕とマリエが拳をぶつけ合う姿が映る。

「せ、聖女様とレッドグレイブが殴り合ってる!?!」

「どういう状況だ!?!」

「何かあったらヤバイ!早く殿下達を呼んで来い!」

驚く学生達の声が聞こえてくるが、僕の意識はマリエに釘付けだ。

拳ごしに、重い衝撃がはらわたにまで響いてくるようだ。興奮状態をクールダウンするために、顔面や脇、背中の汗腺が一斉に開いているのが感覚でわかる。

真正面から同じ向き、同じ力で衝突する拳と拳の押し込み合いが続くのだが、マリエは拳の力をわずかにずらして均衡を崩すと、その勢いで僕の懐に入り、連続して魔力を込めた拳を叩き込んでくる。

激しいインファイトを、僕は身体の正面でクロスさせた両腕でガードするが、勢いと衝撃でジリジリと押し込まれていく。

クソ!相手のフィジカルは、こんなチンチクリンのくせに、フィジカル面のスペック差が、戦力の差になっているとは思えん!

苦し紛れに右足を蹴り上げると、マリエはそれをガードしながら後ろに飛び退いて勢いを殺しながら、僕の攻撃をしのぐ。

2人の距離が開いたところで、僕は少し体をかがめると、マリエに向かってダッシュする。激突する直前に前方に向かってジャンプし、右膝をマリエの顔面めがけて繰り出すのだが、今度はマリエが腕で僕の飛び膝蹴りをガードした。

マリエが膝蹴りの衝撃でバランスを崩したところに、僕は追撃をしかけるべく、両掌を合わせて振り上げ、ハンマーのように両手をマリエの脳天めがけて振り下ろした。

さすがのマリエも、頭部のダメージはまずいと思ったのか、とっさに体をわずかに逸らし、僕の両手はマリエの右肩を強打するに終わってしまふ。

他方のマリエは、上からの強い衝撃を受けて上半身を折り曲げながらも、歯を固く食いしばり、両足を踏ん張ってこらえると、そのまま両足に魔力を集め始める。

そして、強化した足で地面を蹴ると、頭から僕の胸元めがけて一直線に突っ込んできた。

僕の方は、両手を全力で振り下ろしたところで、体が硬直してしまっていて、回避ができそうにない。

視覚に入る情報としては、黄色の巨大な毛むくじやらが、まっすぐ向かってくるという光景だ。思考は、これを何とかしてガードしろと言っているが、自分の身体がそれは無理だと告げている。

そんな心中のやり取りをしている間に、人間の質量と運動エネルギーが1つの弾丸となって、マリエの頭部が僕の右胸部に突き刺さった。

(くっそーこのクソ女ああああ!!)

さっきのインファイト以上の衝撃で、肺から一気に空気が抜けたせいか、声が出ないため、心の中で毒づく。

してやられた、と言う他ないね。先日、ダンジョン内で僕がマリエに対して、最後にぶち込んだ攻撃が、少年マンガの戦闘シーンの最後の切り札ともいふべき頭突きだ。

今のマリエの攻撃は、そのときの意趣返しとでも言いたかったのだろうか。衝撃で後方に吹き飛ばされながら考える。

だが、まだだ。僕はこいつに落とすし前を付けさせなければならぬ。い。

そうだ、心でも、怒りでも、魂でも勇気でもいい。せつかくならレツドグレイブらしく、赤く燃焼してやろうじゃないか！

マリエの身体が全力の攻撃で伸びきっている今なら、カウンターへのカウンターをぶち込める。

「焼け焦げろおおおお!!」

僕は、強く両眼を開き、後方に吹き飛ばされながらも、今、瞬間的に込められる魔力を一気に右腕に集めて、火球を生み出すと、

頭突きをかました反動によって、先ほどの僕のように動きが硬直しているマリエめがけて投げ付けた。

火球はマリエに向かってまっすぐ進み、体勢的に回避やはねのけるような迎撃は難しいだろう。マリエの表情に焦りが浮かんだのを僕は見逃していない。

そして、火球がマリエに直撃し、再び大きな爆発が起こると同時に、黒い煙が辺りを覆いつくす。

「聖女様ああああ!」

「レ、レッドグレイブがやりやがったぞ!」

「一定レベル以上の戦闘って、もう男とか女とか関係ないんだな!」

「お前、あの格闘戦見えたか!」

「どっちも、相手を潰すっていう気迫があったことくらいしかわからねえよ!」

周りで見ていた生徒達が、口々に反応を浮かべている。

そんな中で、マリエがいた周辺の煙が少しずつ晴れてきた。さすがに黒こげの死体が転がっているとは思っていなかったが、どうなっているかは未知数だ。

目を凝らして煙の向こう側を見ると、何やら白い光が漏れ出している。

こういうときのパターン、僕は詳しいんだ。誰かがやったか!?!とか言いながら煙の中からやられていない敵が出てくるってやつだろう。

「クソー! やっぱりしづといな」

煙が少しずつ晴れていくのだが、中から姿を現したのは、両腕を前に突き出し、球体状のバリアらしき白い光に包まれたマリエだ。

首元のネックレスと手首に付けた腕輪が強い光を放っている。ネックレスのほうは、リオン君が空賊から奪い、この前の神殿とのト

ラブルで最終的には多額の金と引き換えに、神殿側に引き渡したものに間違いない。

結果的に言えば、敵に塩を送ってしまったのかもしれない。

だが、マリエの方も無傷ではなく、両腕の先を火傷している。

聖女様グッズの力を引き出してバリアを展開するのが少し遅れたのだろう。

公国戦の報告書に、オリヴィアさんが飛行船艦隊の砲撃を防いだ際に発生させた防御魔法と同じようなものなのかもしれない。さしずめ、聖女バリアとでも言うべきか。

「便利な・・・ものを持つてるじゃないか」

「知らなかった？私、聖女様なのよ？アンタの花火みたいな魔法で破れるとは思わないことね」

ムカついたので、何発かファイヤーボールをぶつけてみたが、火球はバリアに直撃して爆発するも、バリアにヒビすら入らない。

「聖女様、頑張れえええ!!」

「レッドグレイブに負けないでええ!!」

「馬鹿！敵対していると認識されるぞ!!」

「それにしても、女子生徒と互角って、レッドグレイブって弱いのか？」

「そんなわけあるか！学園祭のときに、オフリーの連れてた亜人十数人が全員血の海に沈められてたのを忘れたのかよ」

「この前は、神殿の騎士団もぶちのめして鉱山送りにしたって聞いたぞ!!」

「ってことは、聖女様が強いってことか!？」

相変わらずギャラリーの連中が好き勝手言っている。

ホント、このクソ女、戦闘力が高いな。さすが熊と生身で戦ったというだけのことはある。しかも、僕にはないハングリー精神があつて、粘り強い。

さて、どうしたものか。

バリアを突破する方法を考えるのだが、さらなる火力のある魔法を学園内で使うのは、さすがに問題だろう。

あのバリアが、オリヴィアさんが張ったものと同じようなものなら、鎧なしにぶち抜くことは難しいかもしれない。

「……いや、本当にそうだろうか。オリヴィアさんも公国との戦闘終了時には疲労で倒れ込んでいたと聞いている。それなら、マリエのバリアも、いつまでも展開できるものではないのかもしれない。」

マリエの様子をよく見てみると、一見、余裕をぶっこいた顔をしているが、手元の火傷は痛々しく見えるし、少し息が上がり、額からも汗がにじんでいる。

これを見て、一つの仮説が浮かんだ。このバリア魔法、強度に比例して燃費が悪いのではないだろうか。

さつさと終わらせられるなら、それでよかったが、持久戦に持ち込めば戦いの流れを一気にこちらに手練り寄せられるかもしれないね。

マリエとの今日の殴り合いは、ここまで盛大になった以上、周りはレッドグレイブと神殿の仁義なき抗争の第二ラウンドと見る者が多いだろうから、劣勢に見られかねない状況のまま、簡単に幕引きをするわけにもいかない。

ただ、具体的にどうしたものかと思いつつ周りを見渡すと、面白いものを見つけることができた。

僕は、すぐ近くに設置されているベンチの脇のゴミ箱を両手で抱えると、マリエが展開しているバリアの近くまで歩いていく。

「アンタ……！綺麗な顔して、まさか……」

「中身はお前と同じパンピーだからな」
小声でマリエに答え、バリアの屋根というか球体の上のほうを目掛けて、ゴミ箱の中身を盛大にぶちまけた。

バリアの天井部分には、ゴミ箱に入っていた食べカスや廃棄物など、さまざまなものに乗っかっている形となっている。

「っ！ホント、アンタって最低ね！」
「身体を殺傷せず、プライドや自尊心だけをへし折るなんて、我ながらなんて優しいんだろうね」

僕は、笑顔で答えるとベンチに腰掛けて、マリエに向かって手を振る。

さあ、いつまで魔力が続くか見物だな。魔力が尽きれば全身ゴミまみれになるだろう。

バリアを解いて、走ってこちらに向かってくるなら、ありったけの魔法をプレゼントしてあげよう。

そんな計画を考えていたところに、今度は聞き慣れた声でお呼びがかかった。

「何をしているのですか？」

振り向いた僕の視線の先にいたのは、こちらも、もはやだいぶ顔なじみとなったジルクだ。

ただ、この状況―愛しのマリエちゃんが危ないというのを理解しているようで、真剣な表情を浮かべている。いつものような小ばかにしたような笑みはない。

ジルクが懐に手を伸ばしたところで、僕はジルクの手首を思いつきり掴む。

こいつ・・・馬鹿王子の護衛のために、特例で携帯を認められた拳銃に、ためらいもなく手をかけようとしやがったな。

「神殿の聖女様に、後ろから回し蹴りで襲撃されたのでね。反撃したら、そこから殴り合いが始まったというわけさ」

現時点だと、肉体的なダメージは、若干、こちらのほうが大きいかもしれないが、与えた屈辱感を含めて考えれば、まあトントンだろう。

おどけて答えると、ジルクの後方から、3人の男子生徒もこちらに走ってきて、ジルクと合流した。3人が誰かというのは遠くから見た時点ですぐにわかった。

髪が紫色の男子はフィールド家のブラッド、赤色の髪なのがセバ―グ家のグレッグ、水色の髪の男子はアークライト家のクリス。要するに、馬鹿王子以外の攻略対象が全員そろったというわけだ。

やつかいなのが、こいつら全員がマリエに誑かされている、要するに、この場では確実に僕の敵だということだ。

4人全員が僕を睨みつけている。

さすがに、こいつら全員を相手にするのは骨が折れるというか、広範囲を攻撃できる魔法をバンバン使っても厳しいかもしれないな。

ここから戦闘が続いた際の動きを考えていると、懐で拳銃を握っているであろう腕を掴まれたままのジルクが口を開いた。

「マリエさんを消すためにわざわざ学園に？」

「そのつもりだったら、鎧で襲撃をかける。今日は、リオン君が、よりにもよって聖女親衛隊の隊長に内定してしまったから、それを伝えに来ただけだ」

「それなのに、どうしてこんなことに？」

「あっちにいる、ブ・・・ステファニーの元子分を見かけたのでね。あの女子生徒が、リオン君やオリヴィアさんにちよっかい出したの思い出して、ちよっと脅してたところに、飛び蹴りを入れながら突っ込んできたのが、お優しい聖女様だよ」

「あくまでこの状況は偶然だと？」

「僕は貴族で・・・俺はお兄ちゃんだ。いずれにしても、あの女とツラを合わせたら、落とし前は付けさせないと収まるモノも収まらないだろう？」

なんだか、特級呪物から産まれた悪霊が言いそうな台詞を言ってしまったような気がするが、結局はそこに帰着する。

ジルクは考え込み始めるが、残りの3人は何かを言いたげだ。さて、この場をどう乗り切ったものか。